埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第266集

比企郡川島町

堂地遺跡

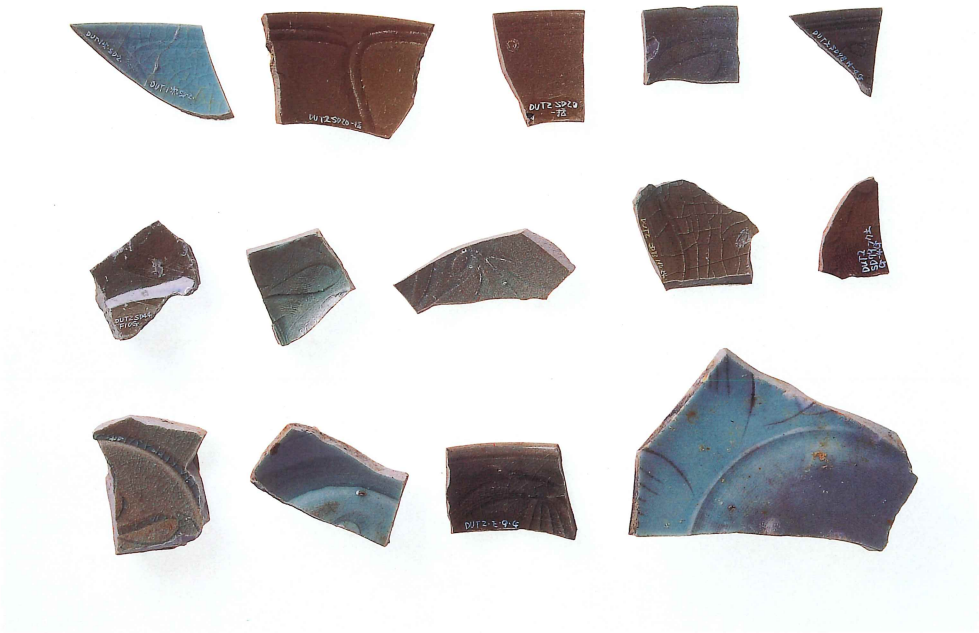
首都圏中央連絡自動車道（川島地区）関係埋蔵文化財発掘調査報告

２０００

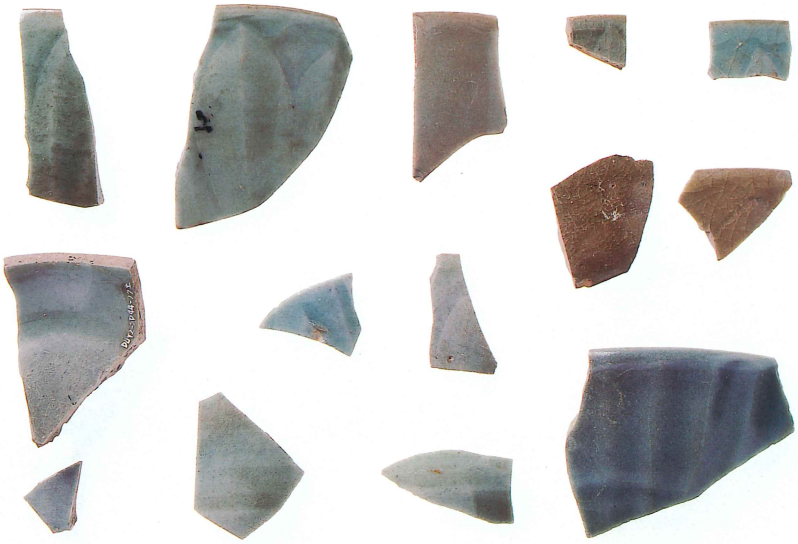
建設省関東地方建設局
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

堂地遺跡全景（空撮）

堂地遺跡全景（空撮）



中国製青磁　1



中国製青磁　2

中世施釉陶磁器等

発刊に寄せて

かつて、埼玉県は武蔵国として、元来は東京都の一体でありましたが、江戸時代以降、世界有数の大都市であった江戸を経済的、人的に支える役割を担ってきました。

そして今、東京への政府諸機関の一極集中を是正し、バランスの取れた日本を再構築するために、大宮市と与野市に埼玉新都心の建設が急ピッチで進められ、多くの人びとの期待を集めているところです。

こうした構想を具体的に実りあるものにするためには、人間や物資、情報等のスムーズな移動が必要不可欠となります。このため、建設省では、首都圏に流入する交通を分散し、流れを円滑にして交通渋滞を緩和するとともに、首都圏のさまざまな機能の再編成や産業活力の向上などを図ることを目的として、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の建設事業の促進を図っております。

圏央道は都心から半径40～60km に位置し、横浜・厚木・八王子・川越・つくば・成田・木更津などの主要都市を環状に結ぶ総延長約300km の高規格幹線道路です。圏央道は埼玉県において東西を結ぶ大動脈になるばかりでなく、関越、東北自動車道と連なり、さらに東名、中央、東北、常磐道などとも結びますので、埼玉県が提唱する「地域いきいき彩の国構想」の具体的な施策である「県内１時間道路網構想」に必ずや貢献できるものと確信しております。

圏央道は現在、Ⅱ工区の川島町において建設が進められていますが、川島町大字上伊草字堂地地内の建設用地内において、試掘の結果、奈良・平安時代から中世の集落遺跡が発見されました。路線決定にあたってどうしても避けられない遺跡については、建設省より（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託し、記録保存の措置を講ずることとなりました。その結果、鎌倉時代の武士の居館が検出され、やはり中世の交通の要衝にあたり、鎌倉街道上道と諸々の有力武士の居館群とを結ぶ街道の存在が推定されるなど、貴重な成果を得ることができました。

こうした、中世の人びとの活発な往来を引き継ぐ形で新時代の道路行政を進めていけることは誠に意義深いものと考えております。

この成果をまとめた報告書がこのたび刊行の運びとなりましたので、埼玉県民の方々をはじめ、多くの皆さまにご利用いただければ幸いです。

平成12年11月

建設省関東地方建設局長　奥　野　春　彦

序

埼玉県のほぼ中央部に位置する川島町は、東側を荒川に、西側を越辺川によって画され、北側は市野川、南側を入間川によって境されており、文字通り川の中に浮かぶ島＝川島との呼び名が、よくその地理的環境を示しているといえましょう。この川島町は古くから洪水に何度となく見舞われた一方、川が肥沃な土壌を平坦に堆積させ、広大な水田を開墾するのに絶好な環境を生み出しました。川島町尾崎遺跡の方形周溝墓群の発見から、少なくとも西暦４世紀代には、水田耕作を開始していたことがわかります。

また、川島町は自ら治水と開田に努め、開発領主と呼ばれた鎌倉武士の古里であり、重要文化財の大御所で知られる広徳寺は、美尾屋十郎広徳の居館跡、中山の金剛寺は比企氏の居館跡、小見野の法鈴寺は小見野氏の居館跡と推定されています。

さて、埼玉県では「地域いきいき彩の国構想」の実現に向けて道路網の整備を積極的に進めているところでありますが、横浜、八王子、川越、木更津を結び、東名、関越、東北などの高速道路と連絡する総延長300km の高規格幹線道路である首都圏中央連絡自動車道の建設は、首都圏の交通渋滞の解消を図るとともに、埼玉県の東西を結ぶ大動脈の新設として大いに期待されているところです。その第Ⅱ工区内にあたる川島町大字上伊草字堂地地内において試掘の結果、奈良・平安時代から中世にわたる集落遺跡が存在することが明らかとなりました。その後、建設省大宮国道工事事務所と埼玉県とでその取り扱いについて慎重に協議を重ねた結果、やむなく記録保存の措置を構ずることとなりました。

堂地遺跡は低地遺跡のため、台地上の遺跡と比較して、発掘調査にはいくつかの困難が伴いましたが、奈良から平安時代の竪穴式住居11軒、鎌倉時代の居館跡、室町時代から江戸時代初期に至る屋敷の跡などが検出されました。

とくに、鎌倉時代の居館跡と、それを囲む溝の中からは、多数のかわらけと呼ばれる素焼きの皿とともに、大鎧の小札や矢尻、短刀などが出土しており、館の主が武士であったことが確実となりました。

これらの成果をまとめた本書が、低地の開拓に努めた先人たちの功績を偲ぶ一助となり、さらに埋蔵文化財の保護や学術研究の資料として御活用いただければ望外の幸せであります。

本書の刊行にあたり、建設省大宮国道工事事務所をはじめ、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、川島町教育委員会、ならびに発掘調査のお手伝いを頂いた地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成12年11月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　中　野　健　一

例　言

1．本書は、埼玉県比企郡川島町に所在する堂地遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略称と代表地番、および発掘調査届に対する指示通知は、以下の通りである。

名称遺跡

堂地遺跡（DUT）

所在地

埼玉県比企郡川島町大字上伊草字堂地1024-1他

指示通知

平成11年2月1日付け教文第2－182号

平成11年10月1日付け教文第2－83号

3．発掘調査は、首都圏中央連絡自動車道建設工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。

5．発掘調査は、第1次調査を昼間孝志・栗島義明・中山浩彦・渡辺清志が担当し、平成11年2月1日から平成11年3月31日まで実施し、第2次調査を若松良一と田中正夫が担当し、平成11年10月1日から平成12年3月31日まで実施した。

6．遺跡の基準点測量と空中測量は、アスコエンジニアリング株式会社に委託した。

7．発掘調査における写真撮影は、昼間孝志・栗島義明・中山浩彦・渡辺清志・若松良一・田中正夫が行い、遺物写真は大屋道則が行った。

8．整理・報告書作成作業は若松良一が担当し、平成12年4月10日～平成12年9月30日まで実施した。

9．岩石の鑑定は県立埋蔵文化財センターの町田瑞男氏、動物骨の鑑定は県立自然史博物館の坂本　治氏、植物・種子の鑑定は県立川の博物館の楡井尊氏に依頼した。また、坂本氏からは観察所見をお寄せ頂いた。

10. 出土遺物のうち、鎧小札と鉄鏃については津野仁氏、かわらけについては本沢慎輔氏と田中　信氏、中世陶磁器と瓦質土器については浅野晴樹氏、近世陶磁器については島村範久氏と岡田賢治氏、青花については嶋村英之氏、蘇民将来符については加部二生氏、板碑と宝筐印塔については諸岡勝氏の御教示を得た。

11. 比企氏については永井隆明氏、中山氏については尾崎泰弘氏の御教示を得た。

12. 出土品の整理及び図版の作成は、石塚香の協力を得て若松が行った。

13. 本書の執筆はⅠ―1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、Ⅴ－2－（1）を大谷徹、Ⅴ－2－（2）を高田大輔が、それ以外を若松が行った。

14. 本書の編集は、若松が担当した。

15. 本書に掲載した資料は平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

16. 本書の作成にあたり以下の機関・諸氏から御指導を賜った。

県立自然史博物館　川島町教育委員会　金剛寺
浅野晴樹　江原昌俊　岡田賢治　尾崎泰弘
加部二生　車崎正彦　坂本　治　島村範久
嶋村英之　田中　信　津野　仁　永井隆明
中村修身　楡井　尊　浜中　勉　本沢慎輔
諸岡　勝　弓　明義

凡　例

1．本書挿図中における X・Y の座標数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位は、すべて座標北を表す。

2．遺跡におけるグリッドの設置は、国家標準直角座標に基づいて設置しており、10 m×10 m の方眼である。

3．グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向西から東へ１～、南北方向北から南へ A～、と番号を付けている。

4．遺構図及び遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図

住居跡・土壙・井戸跡……１／60

掘立柱建物跡 ……１／80

溝跡 ……１／100

遺物図

土器・ ……１／4

木製品・板碑・石製品 ……１／4・１／5

鉄製品 ……１／3

古銭 ……１／1

上記に合わないものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度示している。

5．全測図等に示す遺構標記の略号は以下のとおりである。

SJ・住居跡　SB・掘立柱建物跡　SE・井戸跡

SK・土壙　SD・溝跡　SG・門跡

SH・塀・柵列跡　SU・畝

遺構図中のドットは、遺物の出土位置を示す。

6．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示しており、単位 m である。

7．・遺構図・遺物分布図中に示したドットと接合線は遺物の出土位置と接合関係を示し、番号は遺物実測図のそれと一致する。

・竪穴住居跡で用いたドットの種類は以下のとおりである。

●　須恵器　▲　土師器　■石器　○その他

8．観察表の凡例は以下のとおりである。

・法量の（　）内の数値は推定値であり、単位は cm である。

・胎土は主に肉眼で観察された含有物を以下の番号に示した。

A：赤色粒　B：石英　C：長石　D：角閃石

E：白色粒　F：白色針状物質　G：雲母

H：砂粒　I：片岩　J：礫　K：黒色粒

L：チャート　M：金雲母

・焼成はⅠ（良好）Ⅱ（普通）Ⅲ（不良）の３ランクに分類した。

・色調・胎土色は『新版標準土色帳』（農林省水産技術会議事務局監修 1967 ）に照らし、最も近似した色相を記した。

・残存率は、実測図に現した部位を 100％として算定したものである。

9．本書に掲載した地形図は、以下のものを使用した。国土地理院　１／50000 地形図「熊谷」「鴻巣」「川越」「越生」

目 次

口絵
発刊によせて
序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3　発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概要 …… 11
Ⅳ　遺構と出土遺物 …… 15
　1　竪穴住居跡 …… 22
　2　掘立柱建物跡・柵列・門 …… 44
　3　溝 …… 52
　4　井戸跡 …… 125
　5　土壙 …… 156
　6　柱穴とその出土遺物 …… 188
　7　グリッド・調査区 …… 191
Ⅴ　まとめ …… 200
　1　堂地遺跡の変遷 …… 200
　2　堂地遺跡出土遺物の検討 …… 210
　（1）瓦塔について …… 210
　（2）滑石製石鍋について …… 216
　（3）中世土器について …… 218
　（4）板碑について …… 223
　3　中世堂地遺跡とその景観 …… 234
　4　堂地遺跡出土動物遺体の観察所見 …… 239
　5　結語 …… 240

挿 図 目 次

第1図　埼玉県の地形図 …… 4
第2図　周辺の遺跡（古墳～中世） …… 5
第3図　周辺の地形図 …… 12
第4図　グリッド配置図 …… 15
第5図　全体図　A区－1 …… 16
第6図　全体図　A区－2 …… 17
第7図　全体図　A区－3 …… 18
第8図　全体図　A区－4 …… 19
第9図　全体図　B区 …… 20
第10図　第1号住居跡・カマド …… 22
第11図　第1号住居跡出土遺物 …… 23
第12図　第2号住居跡・出土遺物 …… 24
第13図　第2号住居跡出土遺物 …… 25
第14図　第3号住居跡・カマド …… 26
第15図　第3号住居跡出土遺物 …… 27
第16図　第4号住居跡（1）・カマド …… 28
第17図　第4号住居跡（2） …… 29
第18図　第4号住居跡遺物分布図 …… 30
第19図　第4号住居跡出土遺物 …… 31
第20図　第5号住居跡 …… 33
第21図　第5号住居跡出土遺物 …… 34
第22図　第6号住居跡・カマド …… 35
第23図　第6号住居跡遺物分布図 …… 36
第24図　第6号住居跡出土遺物 …… 37
第25図　第7号住居跡・出土遺物 …… 38
第26図　第8号住居跡・カマド …… 39

第27図　第8号住居跡出土遺物 ……40
第28図　第9号住居跡・出土遺物 ……41
第29図　第10号住居跡・出土遺物……42
第30図　第11号住居跡・出土遺物……43
第31図　第1号掘立柱建物跡 ……45
第32図　第2号掘立柱建物跡 ……46
第33図　第3号掘建柱建物跡 ……47
第34図　第4号掘立柱建物跡 ……48
第35図　第5号掘立柱建物跡 ……49
第36図　第1号柵列・第1号門・第34号土壙（1）
……50
第37図　第1号柵列・第1号門・第34号土壙（2）
……51
第38図　第1号柵列・第1号門・第34号土壙（3）
……52
第39図　溝A区（1）……53
第40図　溝A区（2）……54
第41図　溝A区（3）……55
第42図　溝A区（4）……56
第43図　溝A区（5）……57
第44図　溝A区（6）……58
第45図　溝A区（7）……59
第46図　溝A区（8）……60
第47図　溝A区（9）……61
第48図　溝A区（10）……62
第49図　溝A区（11）……63
第50図　第31号溝遺物分布図……64
第51図　第41号溝遺物分布図……65
第52図　溝B区（1）……70
第53図　溝B区（2）……72
第54図　溝B区（3）……73
第55図　溝B区（4）……74
第56図　溝（古代）出土遺物 ……96
第57図　溝（中世前期）出土遺物（1）……97
第58図　溝（中世前期）出土遺物（2）……98
第59図　溝（中世前期）出土遺物（3）……99
第60図　溝（中世前期）出土遺物（4）……100
第61図　溝（中世前期）出土遺物（5）……101
第62図　溝（中世前期）出土遺物（6）……102
第63図　溝（中世前期）出土遺物（7）……103
第64図　溝（中世後期）出土遺物（1）……104
第65図　溝（中世後期）出土遺物（2）……105
第66図　溝（中世後期）出土遺物（3）……106
第67図　溝（近世）出土遺物（1）……107
第68図　溝（近世）出土遺物（2）……108
第69図　溝（近世）出土遺物（3）……109
第70図　溝（近世）出土遺物（4）……110
第71図　溝（近世）出土遺物（5）……111
第72図　溝（近世）出土遺物（6）……112
第73図　溝（近世）出土遺物（7）……113
第74図　溝（近世）出土遺物（8）……114
第75図　溝（近世）出土遺物（9）……115
第76図　溝（近世）出土遺物（10）……116
第77図　溝（近世）出土遺物（11）……117
第78図　溝（近世）出土遺物（12）……118
第79図　井戸跡（1）……126
第80図　井戸跡（2）……127
第81図　井戸跡（3）……128
第82図　井戸跡（4）……129
第83図　井戸跡（5）……130
第84図　井戸跡（6）……131
第85図　井戸跡（7）……132
第86図　井戸跡（8）……133
第87図　井戸跡（9）……134
第88図　井戸跡遺物分布図 ……135
第89図　井戸跡（古代以前）出土遺物 ……145
第90図　井戸跡（中世前期）出土遺物（1）…146
第91図　井戸跡（中世前期）出土遺物（2）…147
第92図　井戸跡（中世後期）出土遺物（1）…148
第93図　井戸跡（中世後期）出土遺物（2）…149
第94図　井戸跡（中世後期）出土遺物（3）…150
第95図　井戸跡（中世後期）出土遺物（4）…151
第96図　井戸跡（近世）出土遺物（1）……152
第97図　井戸跡（近世）出土遺物（2）……153

第98図　土壙（１）……157
第99図　土壙（２）……158
第100図　土壙（３）……159
第101図　土壙（４）……160
第102図　土壙（５）……161
第103図　土壙（６）……162
第104図　土壙（７）……163
第105図　土壙（８）……164
第106図　土壙（９）……165
第107図　第５・44・48号土壙遺物分布図　…166
第108図　第37・74号土壙遺物分布図　……167
第109図　土壙（古代）出土遺物　……178
第110図　土壙（中世前期）出土遺物（１）……179
第111図　土壙（中世前期）出土遺物（２）……180
第112図　土壙（中世前期）出土遺物（３）……181
第113図　土壙（中世前期）出土遺物（４）……182
第114図　土壙（中世後期）出土遺物　……183
第115図　土壙（近世）出土遺物（１）　……184
第116図　土壙（近世）出土遺物（２）　……185
第117図　土壙出土遺物……186
第118図　ピット……188
第119図　ピット出土遺物……190
第120図　グリッド・調査区出土遺物（１）……195
第121図　グリッド・調査区出土遺物（２）……196
第122図　グリッド・調査区出土遺物（３）……197
第123図　グリッド・調査区出土遺物（４）……198
第124図　堂地遺跡の時期別変遷図　古代　……202
第125図　堂地遺跡の時期別変遷図　中世前期…204
第126図　堂地遺跡の時期別変遷図　中世後期…207
第127図　堂地遺跡の時期別変遷図　近世　……208
第128図　北武蔵南部の瓦塔出土遺跡分布図……212
第129図　北武蔵南部の瓦塔……213
第130図　石鍋集成図……217
第131図　中世土器編年図……220
第132図　中世土器編年参考資料　……221
第133図　堂地遺跡出土板碑集成図　……224
第134図　陸軍迅速測図にみえる
堂地遺跡周辺の条里制　……235
第135図　都市計画図にみえる堂地遺跡付近の
条里制と川欠け部分　……235
第136図　堂地遺跡周辺の交通網　……237
第137図　イヌ頭骨計測模式図　……239

図版目次

図版１　米軍撮影航空写真（昭和23年）
図版２　第１号住居跡　第１号住居跡カマド　第２号住居跡
図版３　第３号住居跡　第３号住居跡カマド
図版４　第４号住居跡　第４号住居跡床下土壙　第４号住居跡遺物出土状況　第４号住居跡長頸瓶出土状況
図版５　第５号住居跡　第６号住居跡　第６号住居跡カマド
図版６　第７号住居跡　第８号住居跡　第８号住居跡カマド
図版７　第９号住居跡　第10号住居跡　第11号住居跡
図版８　Ａ区全景　Ａ区掘立柱建物群　第１号柵列
図版９　第１号掘立柱建物跡　第４号掘立柱建物跡　第５号掘立柱建物跡
図版10　Ｂ区全景（１）～（３）
図版11　第１・35・44号溝　第４号溝　第10号

溝　第12号溝　第4・7・13 a・13 b・17・19号溝　第25号溝遺物出土状況
図版12　第30・31号溝　第30号溝板碑出土状況　第31号溝　第31号溝石臼出土状況　第35号溝遺物出土状況　第35号溝篭出土状況
図版13　第40・41・42号溝　第46・54号溝　第54号溝遺物出土状況　第20・71・75号溝　第81号溝　第79・82・83号溝
図版14　第1・2号土壙　第5号土壙　第6号土壙遺物出土状況　第34号土壙　第37号土壙　第46号土壙
図版15　第48号土壙　第71号土壙　第74号土壙　第74号土壙遺物出土状況
図版16　第7号井戸跡　第9号井戸跡及び付帯施設　第11号井戸跡　第12号井戸跡　第13号井戸跡　第26号井戸跡
図版17　第28号井戸跡　第28号井戸跡遺物出土状況　第30号井戸跡　第31号井戸跡　第32号井戸跡　第32号井戸跡板碑出土状況
図版18　第33号井戸跡遺物出土状況　第35号井戸跡　第36号井戸跡　第38号井戸跡　第40・41・42号井戸跡　第43・46号井戸跡
図版19　第44号井戸跡　第45号井戸跡　第48号井戸跡　第50号井戸跡　第57・58号井戸跡　第59号井戸跡
図版20　第60号井戸跡　第61号井戸跡　第62号井戸跡　P 212甕出土状況　P 198短刀出土状況　P 466長頸瓶出土状況
図版21　第1・2・4・5・6号住居跡出土遺物
図版22　第6・7・8・9・11住居跡、第10・30・53号溝出土遺物
図版23　第54・64・71号溝、第60号井戸、グリッド、第10・14号溝出土遺物
図版24　第14・18・26・31・35号溝出土遺物
図版25　第35・41・48・52・64・78号溝出土遺物
図版26　第78・79・82号溝、第30・33号井戸跡、第113号土壙、ピット、グリッド出土遺物
図版27　第4号住居跡、第10号溝、第52号土壙出土遺物
図版28　第74号土壙、ピット出土遺物、埴輪、瓦塔、瓦
図版29　遺構出土陶磁器（1）
図版30　遺構出土陶磁器（2）
図版31　遺構出土陶磁器（3）
図版32　染付（1）
図版33　陶磁器破片
図版34　大甕破片
図版35　鉄製品X線写真
図版36　古銭・鉄滓
図版37　SD 31鉄滓（1）・（2）
図版38　鉄滓・羽口・硯・自在鍵・鉄製品
図版39　石臼・砥石・擂鉢転用砥石・石製品
図版40　石鍋・砥石・軽石
図版41　板碑
図版42　板碑
図版43　板碑・宝篋印塔
図版44　木器（1）
図版45　木器（2）
図版46　木器（3）
図版47　木器（4）
図版48　木器（5）
図版49　木器（6）・イヌ頭骨

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

埼玉県では「地域いきいき彩の国構想の実現に向けて」、多様化する県民の生活圏の拡大への対応や、高度化する産業活動の円滑化などを図るため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視した、体系的な道路交通網の整備を積極的に進めているところである。特に「県内1時間道路網構想」を目指し、県内各域及び周辺都県との連携を高めるための高速道路網の整備を促進している。建設省によって建設が進められている首都圏中央連絡自動車道は、県内を東西に結ぶ大動脈であるだけでなく、都内を迂回して全国の高速道路と結ばれるバイパス的な役割を果たすこととなり、その完成が期待されているものである。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成10年1月9日付け大国第二第2号及び平成10年10月19日付け大国第二第29号で建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所長より、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについての照会を受けた。文化財保護課では、試掘調査の結果、平成10年2月2日付け教文第1412、平成10年11月26日付け教文第1025号及び平成11年6月17日付け教文第267号で以下のとおり回答をした。

1　埋蔵文化財の所在

工事予定地内には次の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称（No）	種　別	時代	所　在　地
堂地遺跡（No.37-020）	集落跡	奈良　平安　中世	川島町大字上伊草字堂地1024-1他

2　取扱いについて

埋蔵文化財が確認された範囲については、工事計画上、やむを得ず上記の埋蔵文化財の現状を変更する場合、事前に文化財保護法第57条の3の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

埋蔵文化財が確認されなかった範囲については、工事に着手して差し支えありませんが、工事中新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止し、取扱いについて当課と協議してください。

その後、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所と文化財保護課との間で取扱いについて協議を行ったが、計画変更による現状保存が困難であることから、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査の実施機関である（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、建設省、文化財保護課の三者で工事日程や調査計画などについて協議を行い、平成11年2月1日から3月31日まで、及び平成11年10月1日から平成12年3月31日までの期間で、発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第57の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が建設省関東地方建設局長から提出され、第57条第1項の規定による発掘調査届が、㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に係る通知は以下の通りである。

平成11年2月1日付け　教文第2－182号
平成11年10月1日付け　教文2－83号
（文化財保護課）

2　発掘調査・報告書作成の経過

（１）　発掘調査

発掘調査は第１次調査を平成11年２月１日から平成11年３月31日まで、第２次調査を平成11年10月１日から平成12年３月31日まで実施した。

第１次調査

２月初旬、発掘調査の準備を進め、重機による表土掘削を開始する。表土除去は２月の中頃まで行った。

重機の表土除去が終了してから、人力で遺構確認を行ったが、地山と遺構内覆土との色調の差が少なく難航した。プラン確認後、遺構の掘り下げを開始した。

基準点測量は２月の上旬に行い、遺物包含層の掘り下げと同時に、設定したグリッドで、遺物の取り上げを行った。

遺構確認、遺構精査は３月の初旬頃まで行い、遺構の写真撮影、測量などを含めて、３月の中旬頃までに終了させた。

３月の下旬には、調査区全体を清掃し、空中写真を撮影した。

３月末には、発掘調査を全て終了し、発掘機材などを片付け、調査事務所を撤収した。

第２次調査

９月下旬、B 区（南側調査区）の立ち退き民家の基礎撤去作業を先行して着手し、同時に事務所の設置と発掘調査準備を行った。10月上旬、B 区から重機による表土掘削を開始したが、表土が厚く膨大な排土量となった。A 区も含めて表土剥ぎが一通り終了したのは11月上旬のことであった。

10月中旬、表土剥ぎの終了した B 区から、人力で遺構確認を開始した。低地のため湧水に悩まされ、雨後には、足を踏み入れることができず、大型ポンプを投入して排水に努めることがしばしばであった。

10月下旬、B 区から遺構の掘り下げ調査に入るが、大雨による湛水のため、A 区の表土剥ぎ終了部分に調査対象を移した。古代の竪穴住居跡の場合、地山と覆土の差違が小さく、平面プラン確認には手間取った。この時点で基準水準点測量を実施し、グリッド杭打ちを開始した。

11月中旬、A 区の中心部を南北方向に貫通する大溝の表土剥ぎに重機を投入した。土量が多く、かつ泥炭土なので掘削、搬出とも難航した。

12月上旬、A 区第３区の掘立柱建物群の調査を実施した。現地に縄を張りプランを復原しながらの調整であった。この頃、ようやく B 区の水が抜けてきたので、B 区の遺構掘り下げを再開した。

３月上旬、全調査区を清掃の上、航空測量及び写真撮影を実施した。

その後、各遺構の写真撮影と補足調査を実施して、３月中旬には発掘調査を全て終了し、発掘機材の撤収を行った。遺構面の土入れが全て終了し、事務所を撤去したのは３月も下旬のことであった。

（２）　整理・報告書作成

整理作業は平成12年４月10日から平成12年９月30日まで実施した。

４月上旬から遺物の水洗・注記を行い、同時に図面・写真の整理を行った。

遺物の復元は、接合などの作業と同時進行したが、陶磁器などの薄手の遺物が多く、手間取った。

復元された遺物は、順次実測を行い、トレースなどの墨入れを行った。

遺構の図面整理は、４月初旬から行ったが、航空測量図を参考にして、遺構実測図を整理した。

遺構図は５月の上旬よりトレースを行い、版組みも同時進行で行った。

８月の中旬から遺物の写真撮影を行い、９月初旬には報告書の割付けを終了させる。

原稿は、７月の中旬より執筆を開始し、９月中旬に終了させた。

報告書は、10月中旬より校正を開始し、11月上旬に終了し、印刷にかかり、11月末日をもって刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

（1）　発掘調査（平成10・11年度）

理事長　荒井　桂

副理事長　飯塚誠一郎

常務理事
兼管理部長　鈴木　進（平成10年度）
広木　卓（平成11年度）

管理部

専門調査員
兼経理課長　関野栄一（平成10年度）

副部長
兼経理課長　関野栄一（平成11年度）

庶務課長　金子　隆（平成11年度）

主査　田中裕二（平成11年度）

主任　江田和美

主任　長滝美智子

主任　福田昭美

主任　腰塚雄二

主任　菊池　久

調査部

調査部長　谷井　彪（平成10年度）

調査部長　増田逸朗（平成11年度）

調査部副部長　水村孝行

調査第一課長　井上尚明（平成10年度）

専門調査員　鈴木敏昭（平成11年度）

統括調査員　昼間孝志（平成10年度）

統括調査員　若松良一（平成11年度）

統括調査員　田中正夫（平成11年度）

主任調査員　栗島義明（平成10年度）

調査員　中山浩彦（平成10年度）

調査員　渡辺清志（平成10年度）

（2）　整理作業（平成12年度）

理事長　中野健一

副理事長　飯塚誠一郎

常務理事
兼管理部長　広木　卓

管理部

管理部副部長　関野栄一

主席（庶務担当）　阿部正浩

主席（施設担当）　野中廣幸

主任　菊池　久

主席（経理担当）　江田和美

主任　長滝美智子

主任　福田昭美

主任　腰塚雄二

調査部

調査部長　高橋一夫

資料副部長　鈴木敏昭

主席調査員
（資料整理担当）　礒崎　一

統括調査員　若松良一

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　立地

堂地遺跡は、埼玉県比企郡川島町大字上井草字堂地に所在する。堂地の由来については、低地のドーム状地形によるとする説と、ここにかつて蓮華院（廃寺）があったことによるとする説とがある。

位置は川島町役場の西方2 km の地点で、調査区の南西端は旧国道254号線に接している。また、上空には東京電力の高圧鉄塔電線が構架されている。最寄りのバス停留所は上伊草または中山郵便局前である。

本地域は、東松山市と川越市を結ぶ古くからの幹線道路に沿っており、いわゆる街村をなしているが、近年、隣接する中山地区に工業団地と八幡住宅団地ができてからは、純農村地域である他の町域とは異なった発展をとげつつある。

遺跡は都幾川の下流である越辺川の自然堤防上に立地し、標高は12 m 前後で、東側に広がる水田面との比高差は1 m 程度である。

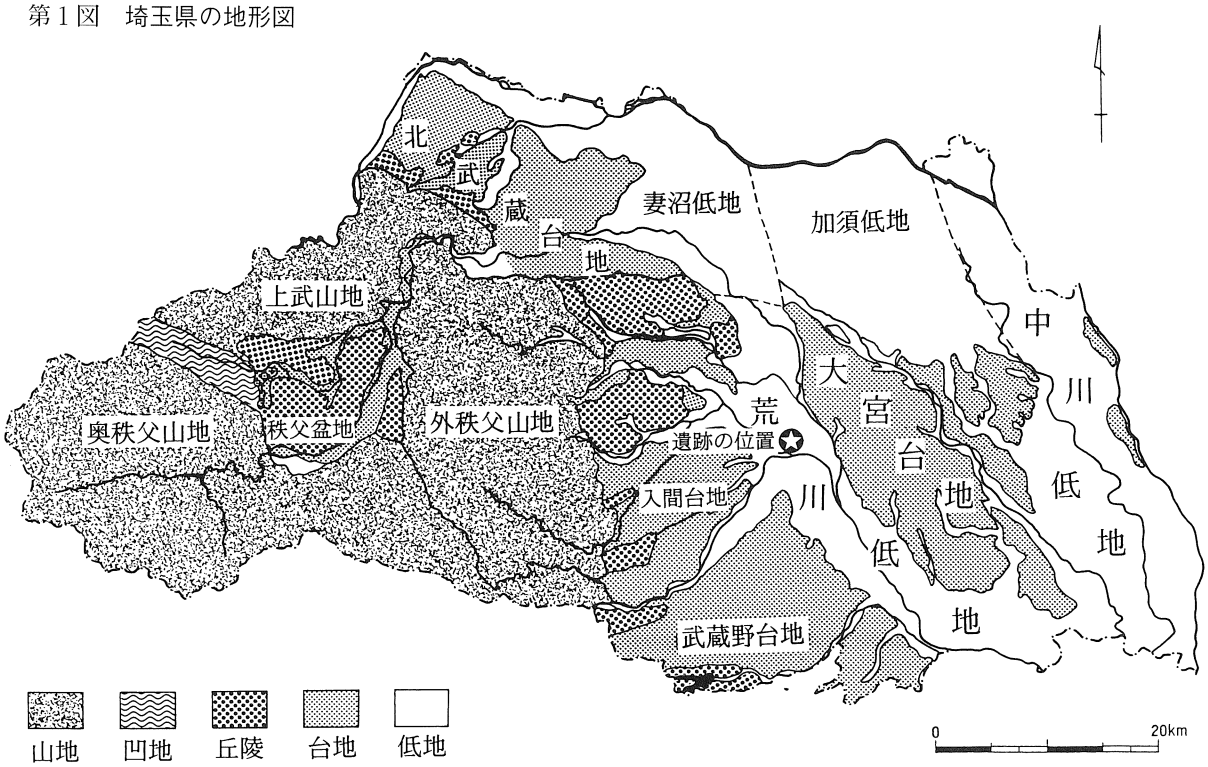
地形区分では川島町の全域が荒川低地に属するが、この荒川低地は妻沼低地と南北方向に連なって、埼玉県を東西に2分している。

川島町は、その名が示すように四方を川によって取り囲まれた独立地形をなしており、埼玉県の輪中などとも呼ばれている。すなわち、北側は市野川、東側は市野川と合流して水勢を増す荒川によって画され、西側は越辺川に、そして南側は入間川によって境されている。

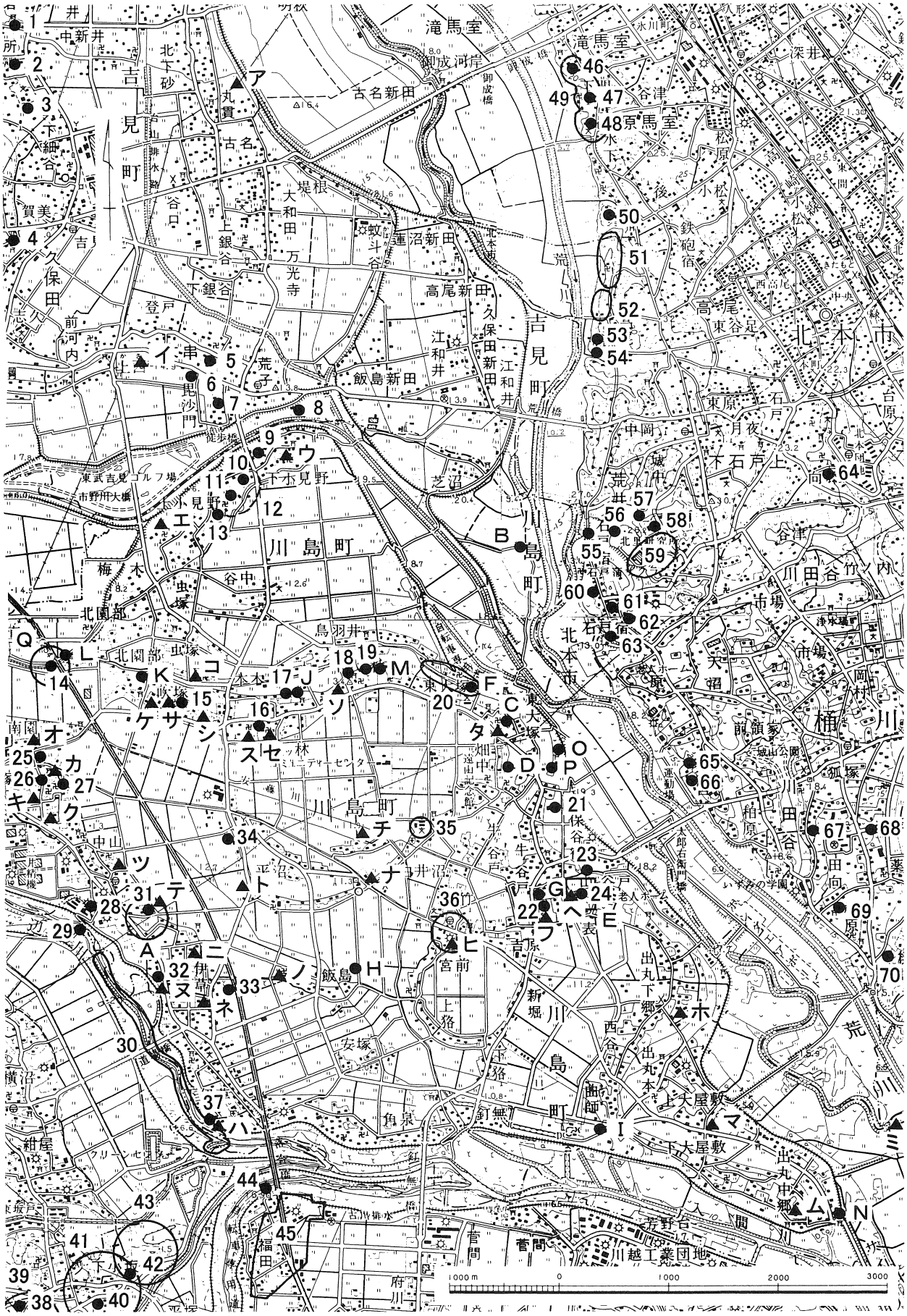
標高は町の西北端である長楽地区が最も高く16 m、東南端の出丸地区が約10 m と低いが、12 km の距離があり、ほとんど起伏は認められない状態である。この平準な地形は周囲の川が洪水を繰り返しながら、長い年月の間に土壌堆積作用を行った結果であるが、自然堤防が発達していることが川島町の地形のもう一つの特色である。この細長い自然堤防上には例外なく、道路が通り、集落が形成されている。これに対して、広大な低地は絶好の水田地帯をなし、県下有数の米所として知られるところとなっている。

現在の市野川に沿う自然堤防上には上・下小見野の集落が、古い越辺川の河道跡に沿う自然堤防上には南

第1図　埼玉県の地形図



第２図　堂地遺跡と周辺の遺跡（古墳～中世）



園部、吹塚、上・下八ッ林、東大塚、三保谷などの集落が、現在の荒川に沿う自然堤防上には出丸と上・下大屋敷の集落が、そして現在の越辺川に沿う自然堤防上には長楽、吹塚、中山、上・下伊草、角泉の各集落が立地している。また、かつて強く蛇行しながら乱流した河川址に沿って三ヶ月形をなす小規模な自然堤防が飛び飛びに残り、平沼、飯島、上・下狢、安塚などの集落がそこに立地している。このように居住地、交通路と耕作地が截然と分かれていることが、低地における土地利用の一大特色ということができる。

2　歴史的環境

堂地遺跡（A）からは、縄文時代後期、古墳時代前期、同後期、奈良時代、平安時代前期、平安時代末期から鎌倉時代、南北朝時代、室町時代から江戸時代の遺構もしくは遺物が検出され、各時代の生活の様子を窺うことができるが、川島町内の他地域と隣接市町での様相を把握しておく必要があろう。

（1）原始～古代

現在のところ、川島町内で最も古い遺跡は荒川河川敷に位置する芝沼堤外遺跡（B）で、縄文時代前期諸磯 b 式期の竪穴住居が検出されている。これに続く中・後期の遺物は、自然堤防上の廣徳寺付近と村並遺跡（C）から出土している。

水稲耕作時代の遺跡では、尾崎遺跡（D）から五領期の方形周溝墓が５基も検出されており、古墳時代前

主要遺跡

A 堂地遺跡　B 芝沼堤外遺跡　C 村並遺跡　D 尾崎遺跡　E 廣徳寺古墳　F 大塚古墳　G 養竹院内古墳　H 森谷稲荷古墳　I 浅間塚古墳　J 上八ッ林古墳群　K 吹塚古墳群　L 塚の腰古墳　M 柳町遺跡 B 区　N 白山古墳　O 富士浅間塚古墳　P 愛宕塚古墳　Q 正直玉作遺跡

1 御所古墳群　2 身障院（源範頼館跡）　3 御所遺跡第５地点　4 横見神社　5 永和二年宝篋印塔　6 金蔵院　7 応安六年宝篋印塔　8 大串次郎館跡　9 宮ノ町遺跡　10 下小見野遺跡　11 法鈴寺　12 小美野氏館跡　13 稲荷塚古墳　14 山王１号墳　15 西見寺　16 道上遺跡　17 宮ヶ谷戸遺跡　18 薬師堂　19 柳町遺跡　20 東大塚古墳群　21 元宿遺跡　22 養竹院　23 道内遺跡　24 廣徳寺（美尾谷十郎広徳館跡）　25 上廊天神遺跡　26 中廊正泉寺遺跡　27 金剛寺（比企氏館跡）　28 中川河岸　29 八幡渡跡　30 樽沼堤推定地　31 蓮華院　32 金乗院　33 上伊草備蓄銭出土遺跡　34 地蔵堂の地蔵菩薩立像　35 白井沼遺跡　36 宮前遺跡　37 東福院　38 北久保遺跡　39 登戸遺跡　40 仲遺跡　41 仲田端仲遺跡　42 前谷遺跡　43 上谷・前林遺跡　44 伊草河岸　45 福田条里　46 阿弥陀堂遺跡　47 下閼遺跡　48 馬室小学校校庭内遺跡　49 馬室古墳群　50 赤台遺跡　51 北袋古墳群　52 中井古墳群　53 阿弥陀堂遺跡　54 宮岡遺跡　55 石戸城跡　56 諏訪山北遺跡　57 八重塚古墳群　58 八重塚遺跡　59 堀の内館　60 下宿遺跡　61 庚塚遺跡　62 北本市№23 遺跡　63 東台Ⅰ遺跡　64 榎戸遺跡　65 バチ山遺跡　66 ひさご塚古墳（川田谷古墳群）　67 狐塚遺跡　68 楽上遺跡　69 八幡耕地遺跡　70 熊野神社古墳

鎌倉時代の板碑所在地

ア文永弥陀浮彫大板碑　イ観音寺板碑　ウ大安寺　エ安楽寺　オ正福寺　カ西念坊　キおしゃびき様　ク東光寺　ケ華蔵院地蔵堂墓地　コ円泉寺　サ西見寺　シ小島家地内　ス極楽寺　セ十王堂　ソ関根家地内　タ吉祥寺　チ品川家地内　ツ淵泉寺　テ蓮華院　ト地蔵祠　ナ月待庵　ニ不動院墓地　ヌ金乗院　ネ西福寺　ノ太子堂共同墓地　ハ東福院　ヒ根本共同墓地　フ養竹院　ヘ廣徳寺　ホ出丸下郷共同墓地　マ蓮華寺墓地　ミ観音地先　ム円福寺

期の段階で、すでに水稲耕作が軌道に乗っていたことを推知せしめる。しかし、村並遺跡から少量であるが、弥生時代後期後葉の土器片と中期初頭まで遡りうる条痕文系の土器片が出土しており、妻沼低地の深谷市上敷免遺跡や熊谷市横間栗遺跡、行田市池上遺跡などと同じ時期に、すでに稲作が開始されていた可能性が出てきた。

古墳時代前期の集落は、柳町遺跡B区（M）から五領期の台付甕片等が出土、堂地遺跡も加えると、既に何集落かが併存していた可能性がある。また、正直玉作遺跡（Q）は璧玉製の管玉を製作した該期の数少ない遺跡として特筆される。

古墳時代後期には高塚古墳が築かれている。廣徳寺古墳（E）は直径22mのやや大型の円墳で、3条凸帯の円筒埴輪は6世紀の第2四半期頃に比定できそうである。他の2基と共に古墳群を形成している。箱式石棺の出土で知られる大塚古墳（F）は荒川の堤防に取り込まれているが、高さが5.2mあり、かなり大きな古墳だったと見られる。出土した円筒埴輪の凸帯は高くないが、第1段と第2段の高さが均等配分の安定した器形を呈しており、6世紀第1四半期に比定できよう。他の3基と共に大塚古墳群が形成されている。調査者の津田福治氏は現在の荒川対岸に所在する桶川市川田谷古墳群（66）との関係を想定しておられた。養竹院内古墳（G）もほぼ同形同大の石材が保存されているので、箱式石棺をもった同様の古墳であったかと思われる。未発掘ではあるが、町内には、曲師地区に浅間塚古墳（H）、飯島地区に森谷稲荷古墳（I）、上八ッ林に上八ッ林古墳群（J）、吹塚に前方後円墳の可能性のある吹塚古墳（K）、正直に塚ノ腰古墳（L）、出丸地区に前方後円墳で横塚とも呼ばれる白山古墳（N）、長楽地区に経塚古墳とちょっぽり浅間古墳、というふうに各自然堤防上の分布が認められ、柳町遺跡B区（M）からは、第1段の長い円筒埴輪と共に女子頭部、靫、太刀などの形象埴輪片が出土しており、6世紀後葉の古墳が付近に存在していたものと思われる。このほか三保谷宿には富士浅間塚古墳（O）と愛宕塚古墳（P）が現存している。この時期の集落は村並遺跡（C）、尾崎遺跡（D）、正直稲荷町遺跡が知られ、共に7世紀前半の土器群を出土している。将来、和泉期と鬼高期前半の集落跡も発見されるものと思われる。

続く奈良時代の集落は尾崎遺跡（D）、正直稲荷町遺跡、村並遺跡（C）で知られ、堂地遺跡（A）も含めて平安時代初期まで継続する点で共通性を持っている。なお、長楽付近には条里遺構の存在が想定されており、越辺川対岸の高坂条里と一体をなすものと見られているので、正直稲荷町遺跡は、その耕作民の集落域であった可能性がある。この他にも、条里制遺構があったかも知れず、原島礼二氏は、吉見から川島に及ぶ広大な条里が施行されていた可能性を指摘されている。圃場整備が戦前に行われていた地域であり、航空写真の利用が望めないが、古い地籍図等による精査が今後の課題となる。

（2）中世

中世の遺跡については、堂地遺跡以外には、尾崎遺跡（D）から土鍋や土釜など15世紀代の土器が出土しているのを除けば、ほとんど調査事例がない。しかし、現存の寺院の多くが中世の創建であり、町内に650基の多くが現存する板碑や中世石造物など、手がかりとなるものは豊富である。時期を平安時代末期から鎌倉時代に限定して町内と周辺の遺跡について、概観してみたい。

町内には、この時期の武士の居館跡と推定されている場所が3箇所ある。表の廣徳寺（24）は源平合戦の勇者として知られる美尾屋四郎（平家物語では十郎とする）広徳の館跡を広徳が開基となって寺院に改めたものとされる。境内には重要文化財の大御堂があり、中世の阿弥陀堂の姿を今に伝えている。下小見野の法鈴寺（11）も、小見野氏の居館跡と推定されている。小見野氏は児玉党浅羽行業の子盛行が分出して始祖となった家であった。盛行は源頼朝が建久元（1190）年に上洛したときの随兵として名を吾妻鏡に録している。中山の金剛寺（27）は比企氏の館跡と伝えられ

る。ただし、必ずしも建仁三（1203）年の比企氏の乱以前の館ということではない。同寺の比企氏系図によれば、この乱で助命された能員の夫人が生んだ男子が北面の侍となり、後に越後寺泊に住したが、その子小太郎員長が竹之御所との縁をたよって中山村に移住し、文慶二（1261）年に卒したのである。本尊の阿弥陀如来は平安時代末から鎌倉時代にかけての造像と見られているが、旧阿弥陀堂の本尊として伝来したものという。

いっぽう、町域の北方に目を向けると、市野川の対岸で旧横見郡に属する吉見町には大串次郎館跡（8）が堤外の台山の地に比定されている。毘沙門堂と通称される金蔵院（6）もかつて、居館跡に擬されていたが、現在はその政所跡と考えられている。毘沙門堂に近接して2基の宝篋印塔（5・7）があり、それぞれ永和二（1376）年と応安六（1373）年の銘が残っている。前者は重親塔と呼ばれ、最近、13世紀前半代の白磁四耳壺を骨蔵器、12世紀第3四半期の渥美大甕を外容器とする墓であったことが正式調査によって確認された。また、大串山宝珠院を号する観音寺の境内には板碑群（イ）が保存されており、貞永二（1233）年、建長七（1255）年など初発期のものが含まれており注目に値する。

大字御所地内の息障院（2）は源範頼の居館跡と伝えられ、周囲に堀跡が残っている。その子範国以降4代にわたって吉見氏を称し、一族の築栄をみたが、永仁四（1295）年、義世は謀逆により斬首となった。

吉見町域では、板碑に見るべきものが多いが、文永十二（1275）年銘の弥陀浮彫大板碑（ア）は上部を失っていながら2.3 m を計る大型の図像板碑であり貴重である。

目を川島町の西隣り坂戸市に転ずると、越辺川の対岸横沼の地には榑沼堤跡（30）がある。『吾妻鏡』貞永元（1232）年2月26日条に堤が大破したので、武蔵国内の百姓に一人ももらさず催促するよう地頭に命じている。榑は横の誤写とされている。中世前期の治水の実態を知る上で重要である。

川島町の南方では入間川と越辺川の合流地点の南岸、川越市大字福田（45）に条里遺構の存在が推定されている。氾乱原と見られる場所にも条里制が施行されていたことになるが、近年の研究では条里制は13世紀頃まで施行が続けられた可能性が指摘されている。

川島町の東側、荒川の対岸に目を向けると、北本市石戸宿には堀の内館跡（59）、隣接する東光寺には国指定の蒲桜があり、蒲冠者（源範頼）の伝承が伝わっている。この桜の根に取り込まれていた板碑群には貞永二（1233）年、寛元四（1246）年など初発期のもの3点を含み、23点全部が鎌倉時代のものである。寛永六（1629）年の荒川の瀬替え工事以前は、洪水時を除けば和田吉野川の細流があるだけで、往来も自由であったと考えられるので、相互の関係にもっと注目してみる必要があろう。

再び川島町域にもどって、板碑の分布について見てみよう。鎌倉時代のものに限定しても、町内33箇所に66基の所在が確認できる。その所在地には地図中に▲印を付しておいたが、これらの多くは寺院境内にあり、少数のものは個人または共同墓地内にある。重要なものについて挙げると、吹塚の西見寺（15）には町内最古の仁治二（1241）年銘の阿弥陀一尊種子板碑（高さ1.44 m）がある。同寺の本尊は上品下生の来迎印を結ぶ木造阿弥陀如来坐像で、12世紀末葉の美作と評価されている。旧阿弥陀堂の本尊仏として伝来したものである。なお、西見寺は岩付太田氏へ仕えたことで知られる八ッ林道祖士家の菩提寺と伝えられ、『新編武蔵風土記稿』（以下『新記』と略す）には開山住栄和尚は天文廿四（1555）年に寂す、と見える。

下伊草の東福院（37）には弘安四（1281）年銘の阿弥陀一尊種子板碑を最古として、合計23基の鎌倉時代に属する板碑が保存されている。町内で5基以上の鎌倉時代板碑が集中する場所は、ここをおいて外にはない。東福院は『新記』によれば、瑠璃山と号し、新義真言宗、本尊は大日如来という。下伊草には旧家者比企藤四郎（寛永十五年九月歿）の所領があり、六

貫文の給田と立野一箇所に対して安堵を認めた天正十七（1589）年の岩付太田氏房の発給文書がある。

上井草字堂地の旧蓮華院（31）墓地には永仁六（1298）年銘の阿弥陀一尊種子板碑と永仁年間の同三尊種子板碑が保存されている。蓮華院は中山村と上伊草村にまたがる両久保の地に所在していた。享保八（1723）年設定の比企西国三十三ヶ所札所の十二番であったが、いつの頃か廃寺となり、その本尊であった観世音菩薩像は金乗院に預けられている。『新記』によれば蓮花院は新義真言宗で慶長年中の水帳には蓮花坊と記していること、その後程なく今の名主小三次の先祖大膳という者を檀越として一寺とし、梅吟山長久寺と号したこと、本尊が正観音であったことが見える。

金乗院（32）には鎌倉時代では弘安七（1284）年と永仁五（1297）年の板碑が保存されている。金乗院は土袋山普門寺と号し、草創は永和五（1379）年という古刹である。鎌倉幕府は元久二（1205）年二月二一日、比企郡土袋郷の年貢を鎌倉永福寺の僧侶の供料に宛てているが、その土袋郷の中心地が金乗院付近にあったことが推定できよう。

前述した廣徳寺（24）には文永十一（1274）年銘の阿弥陀一尊種子板碑と弘安三（1280）年銘の同三尊種子板碑が立っている。また、大御堂の本尊として伝来した阿弥陀仏は平安末から鎌倉時代の造像とみられるという。養竹院（22）には延慶二（1309）年銘の阿弥陀一尊種子板碑が保存されている。この寺は『新記』によれば禅宗臨済派で、寺伝に境内地が太田道灌の陣屋跡であり、その子資家が明慶の頃、父道灌追福のため、伯父の叔悦禅師を開山として建立したという。

鎌倉時代の板碑を境内に持つ寺院のいくつかについてふれてきたが、これらの寺院は宗派寺院として正式に創建、開山した時期は中世でも後期と見られるものが多い。しかし、板碑の所在から、中世前期には既に墓地として利用されていたことは疑いない。前身宗教施設として墓寺もしくは墓守堂の性格をもった阿弥陀堂が伴っていた可能性が考えられ、それが現存する稀有な例が廣徳寺であり、もと阿弥陀堂にあった本尊を本堂に安置した例も西見寺と金剛寺とに認められたところである。両阿弥陀像が平安末から鎌倉時代の造像とされることからも、川島における阿弥陀堂の成立期は古代末ないし中世初頭まで遡りうるものと考えてよいだろう。

最後に、中世後期の遺跡については上井草備蓄銭出土遺跡（33）の報告がある。土採りの際に出土したもので、合計425枚の銭貨は宋銭を含みながらも永楽銭が最も多く、最古は開元通宝、最新銭は朝鮮通宝であった。後者の初鋳年は1423年であるから、15世紀中葉から16世紀の幅で、その埋納年代を推定しておくのがよいだろう。井草宿は川越松山往環の宿として中世末には形を整えていた。太田氏房印判状によれば、天正五（1577）年には、井草宿の市の日を三斎市から六斎市に改めることが、当地代官の伊達与兵衛に達せられている。岩付太田氏の商業保護政策もあって、古道に沿った街村に市が立ち、貨幣経済が浸透しつつあったことが察せられる。

（3）近世

近世に至ると、川島の大半は川越藩領となり、酒井忠勝、松平信綱、松平輝綱が支配してきたが、秋元氏の場合、山形へ転封後も川島領4千石を与えられ続けたので中山に作小屋（陣屋）を置いて在地支配の拠点とした。

このほか、将軍徳川家光が鷹狩のついでに訪ねた寺院として養竹院と大聖寺とがある。養竹院ではしだれ桜を愛でて短歌を詠んでいる。また、大聖寺の中興後圓は高徳の聞えがあり、将軍家光の帰依をうけ、遊猟の際、しばしばの御渡りがあり、御茶屋（茶室）を営んだほどであるという。

なお、『新記』によれば、大聖寺には比企能員の守本尊という千手観音があり、能員の裔孫で中山村の道作という者が比企系図を添えて寺に納めたという。

引用・参考文献

蘆田伊人　1963　『新編武蔵風土記稿第九巻』大日本地誌大系（九）雄山閣

天ヶ嶋岳　1999　『天王・山王久保遺跡（第２次調査）　龍光・新田屋敷遺跡（第５次調査）』川越市遺跡調査会調査報告書第22集　川越市教育委員会　川越市遺跡調査会

磯野治司　1999　『庚塚遺跡』北本市埋蔵文化財調査報告書第８集　北本市教育委員会

今井正文　1999　『愛宕耕地遺跡』第１・２次発掘調査報告書　愛宕耕地遺跡発掘調査会

太田賢一　2000　「宝篋印塔修理工事と出土遺物」『情報20』埼玉考古学会

加藤　功　1987　「中世の治水と開発」『荒川　人文Ⅰ』荒川総合調査報告書２　埼玉県

栗原文蔵　1994　『上井草出土の備蓄古銭』川島町の文化財資料集２　川島町教育委員会

小峰啓太郎　1998　『村並遺跡』川島町史調査資料第４集　川島町

小峰啓太郎　2000　『正直稲荷町遺跡』川島町史調査資料第７集　川島町

埼玉県教育委員会　1988　『埼玉の中世城館跡』

埼玉県教育委員会　1992　『埼玉の中世寺院跡』

高田大輔・山崎武　2000　『宮前本田遺跡（第３次調査）』鴻巣市遺跡調査会報告書第10集　埼玉県鴻巣市遺跡調査会

津田福治　1992　『大塚古墳緊急発掘調査報告』川島町の文化財11　川島町教育委員会

津田福治　1994　『川島町の埋蔵文化財』川島町の文化財資料集１　川島町教育委員会

津田福治　1999　『川島町の板碑』川島町史調査資料第六集　川島町

津田福治・小峰啓太郎　1998　『柳町遺跡』川島町

林　宏一　1984　『埼玉県古代仏教遺品調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室

松平新八郎　1971　『河越館址遺跡発掘調査概報』川越市教育委員会

吉見町教育委員会　1998　『古墳のふるさと　吉見町の文化財』吉見町教育委員会

Ⅲ　遺跡の概要

1　地形と土壌

遺跡は越辺川の形成した自然堤防上に立地している。調査前の標高は12.8 m 前後で、遺跡の北側の後背湿地に広がる水田面との比高差はわずかに1 m 程度であった。遺跡の表土は思いのほか厚く、平均で0.8 m あった。

遺構確認面の標高は12.0 m 前後の場所が大半でほぼ平坦な状況であったが、北側調査区（A 区）南西部に最高所があり、12.5 m コンターが巡る小さな台地形が認められ、ここには中世前期の掘立柱建物が集中していた。逆に最低所は南調査区（B 区）の南部にあり、旧国道254号線際に沿って浅い谷が走っていて、標高11.3 m の単点が存在した。夏期はこのレベルにおいてほとんど水没を常としていた。この位置から越辺川の流路までの距離は220 m である。現在の越辺川は両岸を堤防で挟まれているため、土砂の直接堆積が進み、川河敷の標高は遺跡から八幡橋付近で12 ～ 15 m を測り、天井川化が看取される。

遺構の確認面となる地山層は調査区全域において灰白色のシルト質土であったが、奈良から平安時代の竪穴住居の覆土が地山と共通する土壌で、まったく腐食土化していなかったことは、洪水による埋没の可能性を示唆するものであった。この時期の遺構のプラン確認はカマドを目印とし、次にこれに取り付く竪穴部を、微かな炭化物粒子や焼土粒子の拡がりから推定するしか方法がなく、集中力と時間を要する結果となった。

これに対して、中世から近世の遺構は高所にある柱穴や土壙の場合でも覆土の腐食土化が進んでおり、洪水の痕跡は少なかった。このことは治水環境の向上を示すものと見られた。

なお、井戸調査の深掘りによる所見では、地山層の厚さは0.5 m 前後で、その下面には青灰色粘土層が1.0 メートルほどの厚さをもって広がっていると判断された。さらに下面には砂層または礫層があり、湧水点となっていた。また、A 区東南部の第42号井戸底では泥炭層が認められ、A 区中央部を貫通する第1号溝の底面にも泥炭層が広がっていた。このことからすれば、集落の営まれるようになった奈良時代より前の段階では、越辺川の形成した砂丘の上に還元粘土層が乗り、アシなどの繁る沼沢地が散在していたのではないかと思われる。

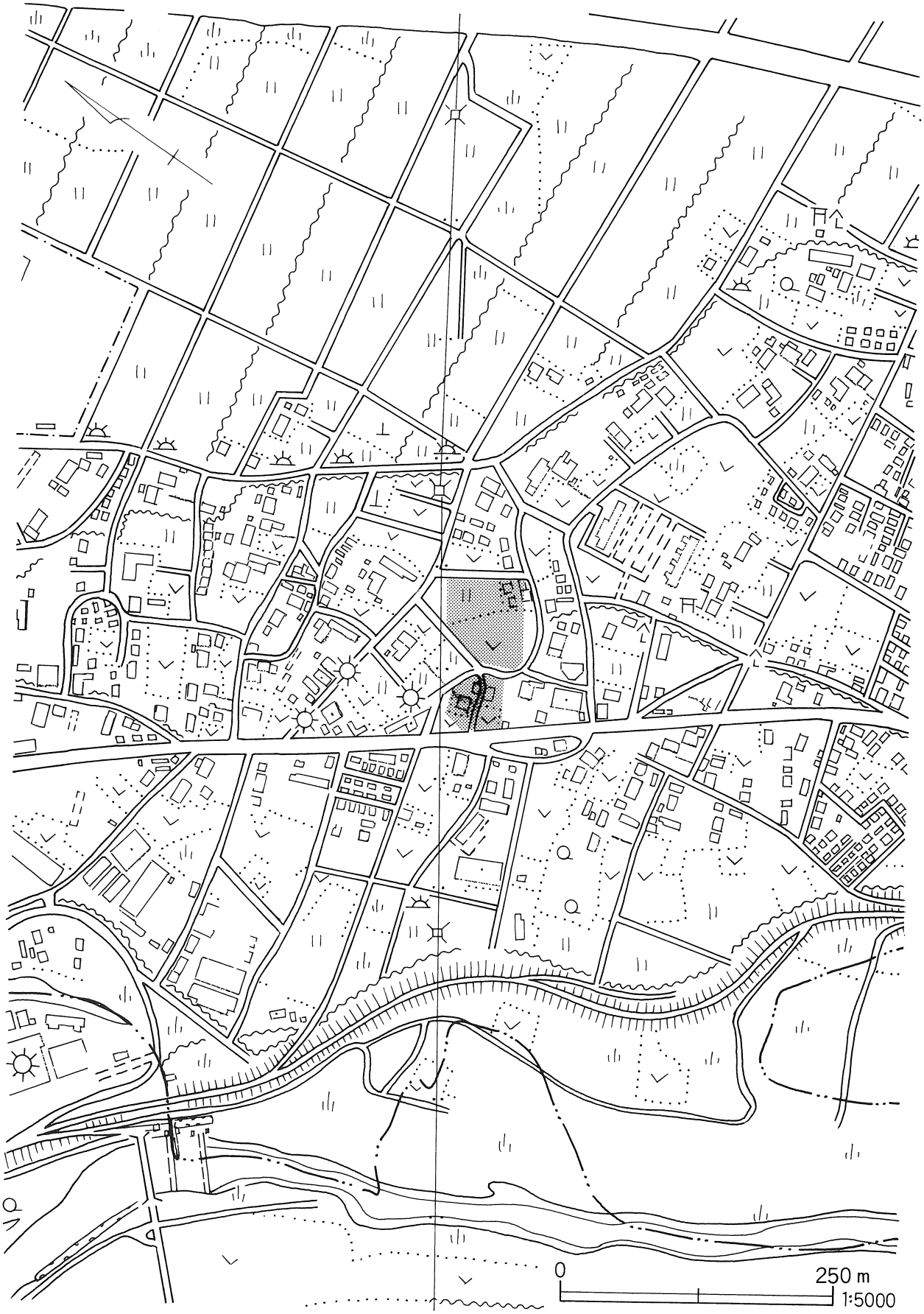
2　遺跡の概要

発掘調査は北側調査区（A 区）の北半部を第1次調査区として実施し、その南半部及び、南側調査区（B 区）を第2次調査区として実施した。合計面積は約7,100 ㎡である。北側調査区は中央部を大規模な溝である1号溝が南北方向に貫通し、さらに、一連の大溝である第30・31号溝が東西方向に走る。この2つの溝の十文字によって分割される4つの調査区を便宜的に北東部を1区、南東部を2区、南西部を3区、北西部を4区と呼び分けることが、説明に便利である。

さて、前途の第1号溝は12世紀後半頃に掘削した人工の大溝であるが、両岸が溝に向かって緩傾斜をなす地形から判断して、古くから自然地形の谷として存在していたと思われる。このことは、次に述べる奈良・平安時代の竪穴住居が谷推定部分を避けるような分布を示すことと整合している。この時期の住居跡はA 区で9軒、B 区（南側調査区）で2軒が検出された。分布は標高12.0 m 以上の平坦面にあり、A 1区の第2・6号住居跡、A 3区の第4・5号住居跡、B 区の第8・9号住居跡のように2軒づつグループをなしているものが多い。これらには時期差が認められ、建てかえを示すものである。カマドの方位はA 1・2区とB 区の5軒が北向きであるのに対して、A 2・3区の3軒は北東または東向きで差異が認められた。これらの住居跡には溝、土壙、井戸などの付帯施設の存在が認められた。

いっぽう、A 1区で検出された第11・12号住居

第３図　周辺の地形図



跡は小型の竪穴であり、第11号住居のカマドは南向きという特異なものであった。

奈良・平安時代の住居跡からは南比企窯跡群産を中心とする須恵器、土師器、灰釉陶器が出土しているが、住居外も含めれば、緑釉、陶硯なども出土している。また、第35号溝に流れ込んだ瓦塔も集落存続期の所産と見てよい。続く10～11世紀の生活痕跡は稀薄であったが、12世紀後半代になると、A3区の高台を中心に居館が営まれる。1辺15mほどの小規模な塀囲いの中に4棟の掘立柱建物が重複して存在し、塀の内外の土壙からは、渥美焼、常滑焼、青磁、かわらけ、短刀、北宋銭、温石、木器類などが出土している。

13世紀前葉には、A2区に第68号溝が掘削されるが、これは居館を区画する溝となる可能性が高い。B区の第71・79号溝とは規模と遺物に共通性があり、一連のものとしてよければ、東西54.7m、南北109mほどの長方形の区画溝となる可能性がある。両溝からは、かわらけのほかに、同安窯産の青磁、雁又鏃、短刀の柄など注目される遺物が出土しており、これと連絡する第78号溝からは、多量のかわらけと共に大鎧の小札が出土している。前述の区画溝内のA3区にある第22・23・26・62の4基の井戸からは青磁片などと共に、箸、折敷、堅杵などの木器類も出土している。13世紀後半から14世紀にかけての遺構は稀薄であるが、B区に溝と柱穴群、A2区に溝と井戸があり、居館廃絶後に分散して住居が営まれたことを想定しうる。

15世紀に入ると、A4区に方形区画溝である第8・14号溝が掘削される。この内側に所在する火葬墓（第5号土壙）と土葬墓と推定される第1・2号土壙は溝と方位が合っており、同時期のものと推定できる。したがって15世紀代には区画された墓域が出現したと見てよいであろう。16世紀前半には方形区画溝の南側に鍵形の溝（第53号溝）が付加される。ここからは古瀬戸花瓶が出土しており、やはり墓地または、寺院との関連を想定しうる。この内側にある第5号掘立柱建物は第30号井戸、第52号溝と同時期の15世紀末から16世紀初頭に属するものであろう。

16世紀に入ると、A1区とA2区にまたがって区画溝が設けられ、大型の第12号井戸が掘削される。溝の東側に2棟の掘立柱建物が重複存在しており、該期に相次いで建てられたものであろう。

同時期の井戸は他に2基（第43・44号井戸）あり、前述の掘立柱建物からは離れているので、もう1～2軒の世帯の存在を付近に想定してよいであろう。これらの遺構からは在地産の瓦質擂鉢、古手の焙烙、北宋銭、漆器椀などが出土している。

A1区の3期の井戸も中世後期のものと見られ、復原はできなかったものの、付近に掘建柱建物の柱穴群も点在している。このうち第7号井戸からは擂鉢、志野皿と共に2点の蘇民将来符が出土している。

17世紀になると、東西方向の大溝である第30・31号溝が掘削される。ここからは初期伊万里、唐津などと共に、漆器、背負梯子、下駄、生板などの大量の木器、石臼、茶臼などが出土し、活発な生産活動と富裕な暮らしぶりが窺えた。屋敷地にはA2区の第43号溝を東の限りとする場所が候補地となるが、礎石建ちの該期の民家の跡は確認されていない。付近には唐津と初期伊万里をまとまって出土した第66号土壙があり、該期の第18号井戸も所在するので、屋敷跡とみなしえよう。

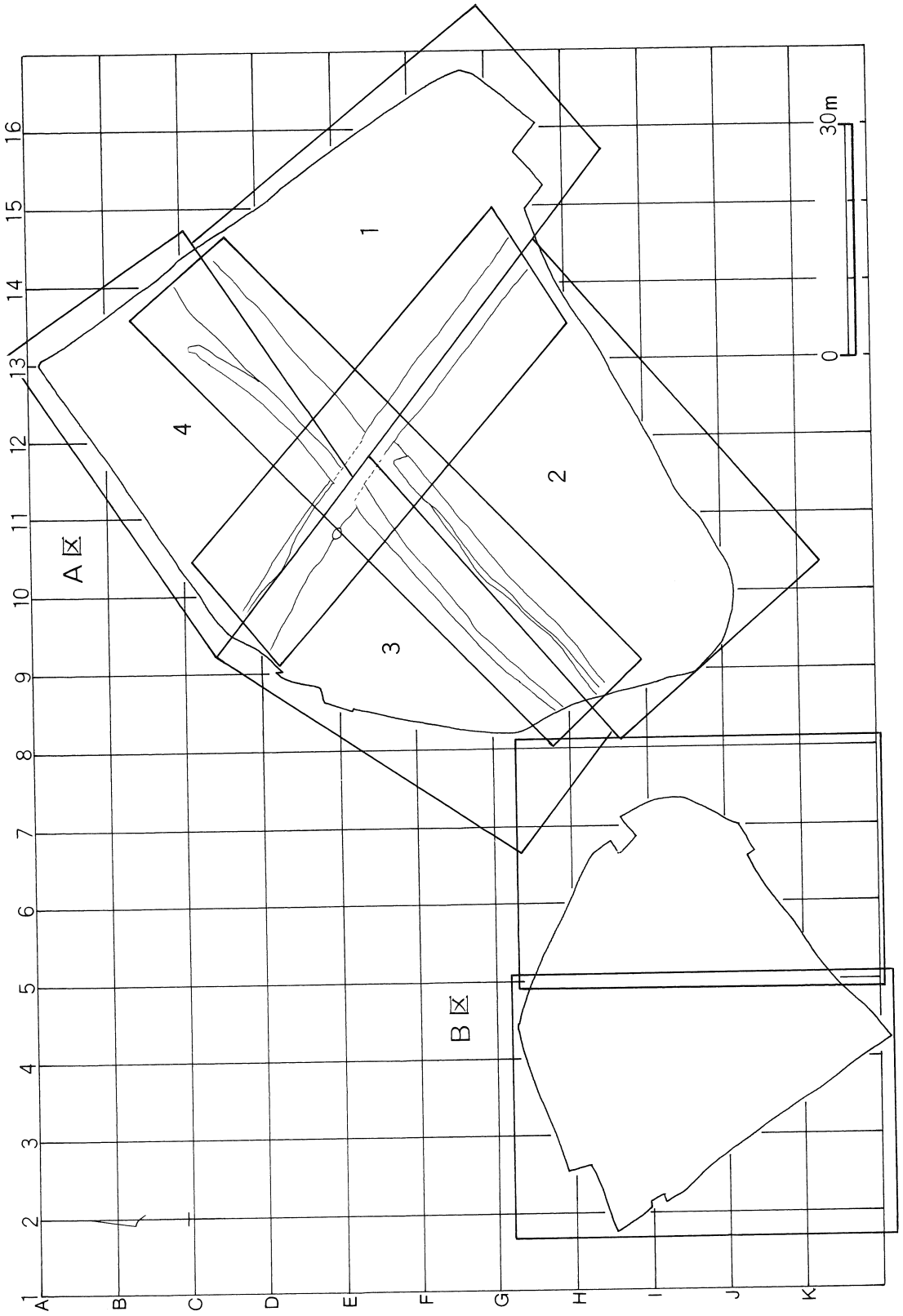
最後に、遺構の総数について纏めると、主なものは古代の竪穴住居跡11軒、中世前期の塀2連、掘建柱建物4棟、中世後期の掘立柱建物1棟となる。溝は合計98条、井戸は59基、土壙は113基を調査したが、このうち年代の判明したものに限れば、溝は古代のもの7条、中世前期18条、中世後期19条、近世15条、井戸は、古墳時代前期のもの1基、古代のもの4基、中世前期12基、中世後期20基、近世10基、土壙は古代のもの9基、中世前期16基、中世後期9基、近世7基である。

低地の微高地上に立地するという環境から、井戸と排水の機能を担う溝が台地上の遺構と比較にならないほど多く掘削されていることが著しい特徴と言えよう。

遺構に伴わない遺物も含めて、遺跡の存続時期を概観すれば、縄文時代後期初頭の称名寺式の後、長いブランクを経て、古墳時代前期（古式土師器と井戸1基）、古墳時代後期（円筒埴輪）と僅かな痕跡を窺うことができる。奈良から平安時代前期には集落の形成をみるが、洪水によっていったん廃墟となった可能性が大きい。平安時代末には居館が出現し、鎌倉時代（13世紀前葉）にその整備拡大が行われた。武器・武具に加えて輸入高級陶磁器が出土したことから、鎌倉幕府御家人階級の居館と目された。15世紀には区画溝に囲まれた墓地に隣接して掘立柱建物が同時存在し、16世紀に継続していく。近世初期の多量の各種遺物が示す旺盛な生産活動と富裕な暮らしぶりは、前代の延長線上にあったのか、どうか、重要な課題の一つとなろう。

Ⅳ　遺構と出土遺物

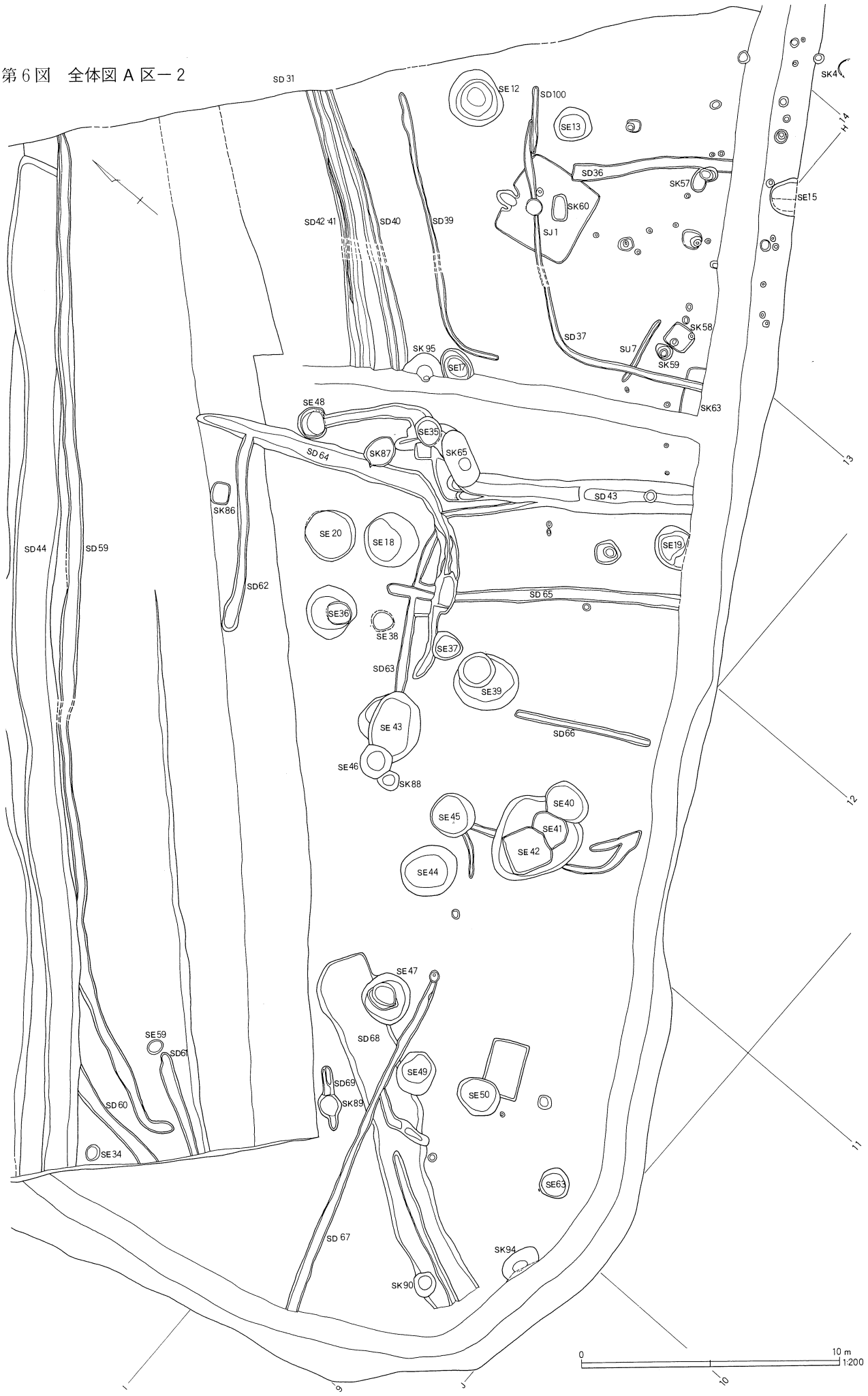
第４図　グリッド配置図



第５図全体図Ａ区－１

SD 9
SD17
SD19
SD 4
SD13a
SD13b
SD12
SD38
SD10
SD101
SD34
SU 6
SU5
SU4
SU3
SU1
SU 2
15
D
E
16
F
G
14
0
10 m
1:200

第６図　全体図Ａ区－２


SD31
SE12
SD100
SE13
SD36
SK57
SK60
SJ1
SE15
SK4
H14
SD42·41
SD40
SD39
SD37
SU7
SK58
SK59
SK95
SE17
SK63
SE48
SE35
SK87
SK65
SD64
SD43
SK86
SE20
SE18
SE19
SD44
SD59
SD62
SD65
SE36
SE38
SE37
SD63
SE39
SE43
SD66
SE46
SK88
SE40
SE45
SE41
SE42
SE44
SE47
SD68
SE59
SD61
SD69
SK89
SE49
SE50
SD60
SE34
SE63
SD67
SK94
SK90
13
12
11
10
9
0
10 m
1:200

第７図　全体図Ａ区－３

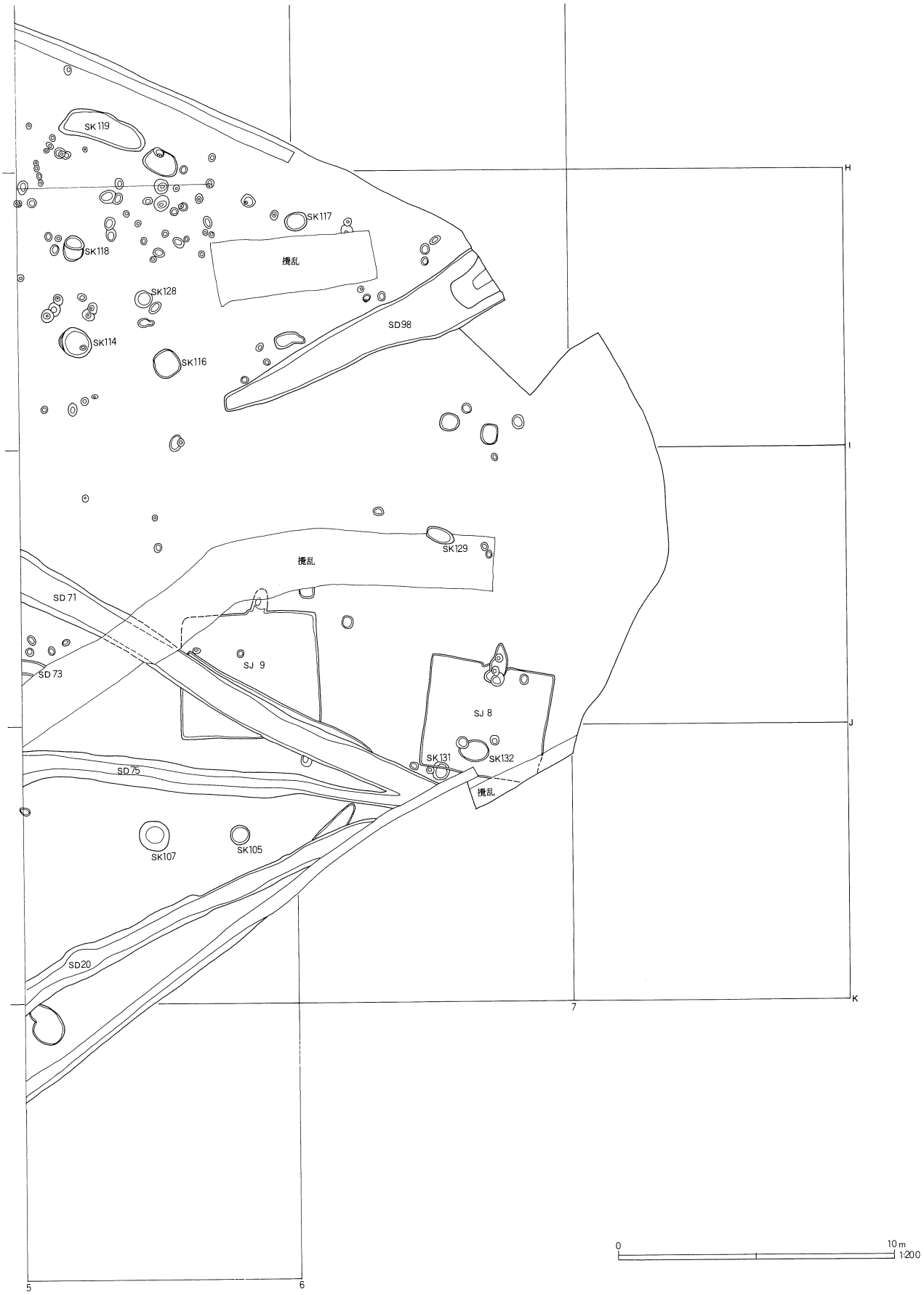
SD30
SK74
SK75
SD32
SK44
SK42
SK43
SD28
SK70
SK76
SD56
SK69
SK36
SB4
SD24
SE60
SJ4
SK37
SK71
SD26
SD23
SK85
P274
SK81
SK83
SH1
SE61
SK134
P203
SE26
SJ5
P155
SD29
SD55
P259
P198
SK34
SK40
P142
P330
SB2
SD35
SD1
SK35
SK39
SB1
SB3
SK38
SK68
SK67
P197
SD45
SD46
P345
SE62
SD51
P111
SG1
SD46
SE24
SD54
SE28
SD47
SK73
SK72
SK79
SK78
SE27
SE25
SD48
SK80
SD50
SE23
SD49
SE31
SE22
SE21
SD25
TG4
P5
TG5
SE58
SE57
0
10 m
1:200

第８図　全体図Ａ区－４

A
B
C
D
10
11
12
13
14
SK5
SD5
SK1
SK2
SD14
SK3
SD70
SD16
SK27
SD6
SD7
SE33
SD15
SK7
SK14
SK25
SE29
SK16
SK20
SK22
SK21
SP34
SK19
SK8
SK17
SK18
SK15
SE2
SK9
SK6
SD3
SD35
SD8
SK13
SD58
SD11
SK91
SD53
P393
SB5
SE30
SD57
SE32
P466
SD53
SJ7
SJ3
SD52
SD33
SK82
0
10m
1:200

第９図　全体図Ｂ区

SK104
SK127
SE52
SD82
SD79
SD83
SD85
SD74
H
P24
SH2
SE53
SK101
SK130
SD90
SK126
SK115
SD85
SK102
SD84
I
SK112
SD86
SK125
SK113
SD93
SD91
SD89
SD96
SK124
SK103
SK133
SD72
SD73
SK123
SD88
SD78
J
SK120
SD75
攪乱
SD77
SK122
SD92
SK106
SD87
SK121
SD99
SD94
SD76
SD95
SD97
SD81
SD23
SK32
K
SD76
SE6
SK110
SE66
SD20
SK30
SD21
SE64
SK111
SD80
SK29
SK28
2
3
4


SK119
SK117
SK118
撹乱
SK128
SD98
SK114
SK116
SK129
撹乱
SD71
SD73
SJ 9
SJ 8
SK131
SK132
SD75
撹乱
SK107
SK105
SD20
H
I
J
K
5
6
7
0
10m
1:200

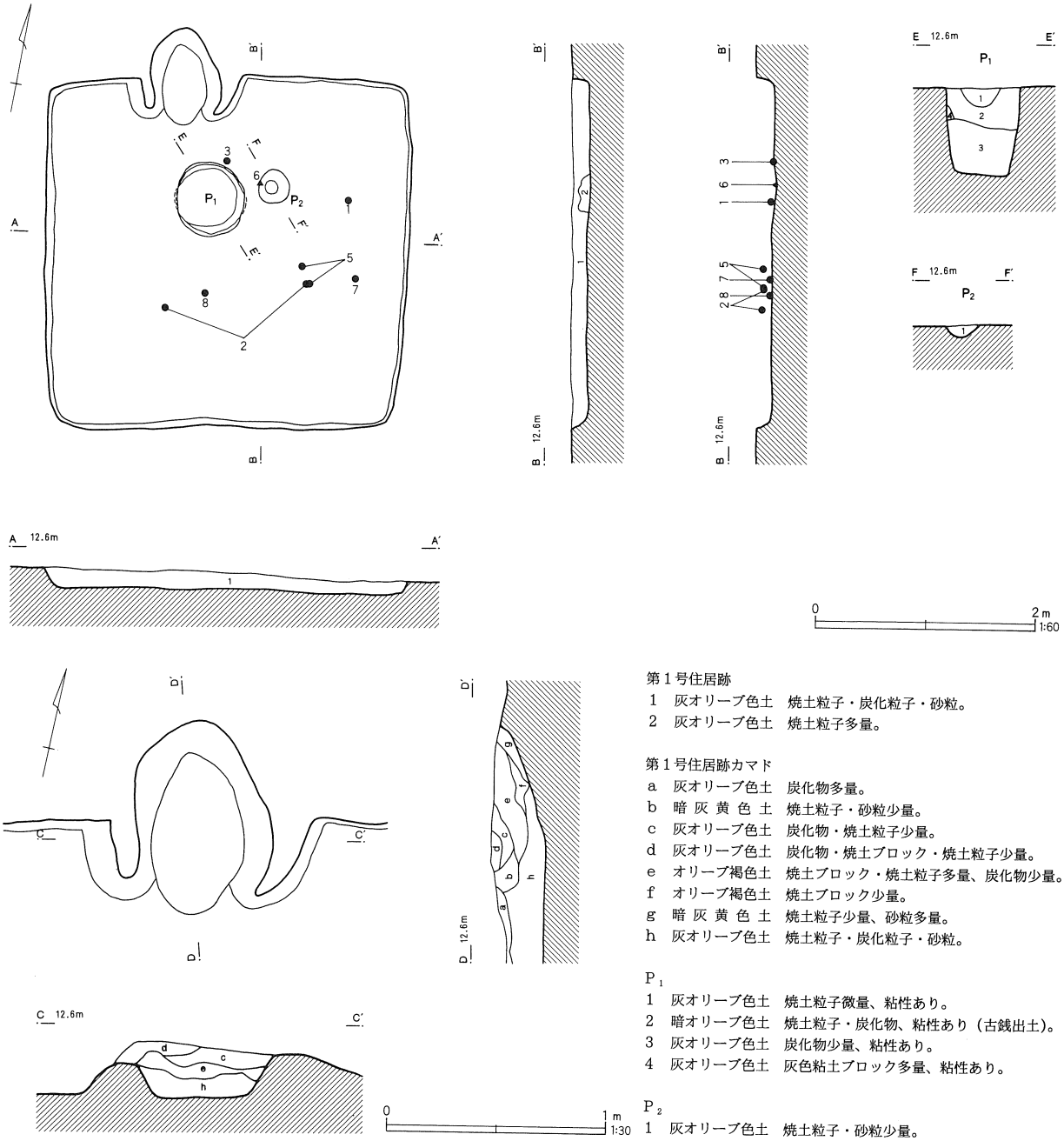
1　竪穴住居跡

第1号住居跡（第10図）

本住居跡はG－12・13グリッド（A2区東部）に位置する。第37号溝と第60号土壙に切られている。平面形は方形を呈する。規模は3.3m×3.1mで、深さ0.16mである。主軸方向はN－11°－Wを示す。壁はほぼ直立する。覆土は灰オリーブ色のシルト質土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

カマドは北壁のやや西よりに設置される。燃焼部は比較的よく焼けている。カマド土層断面の第e層が天井崩壊土で、第g・h層が灰層である。煙道部は壁を掘り込んで構築される。袖は地山掘り残しである。

第10図　第1号住居跡・カマド



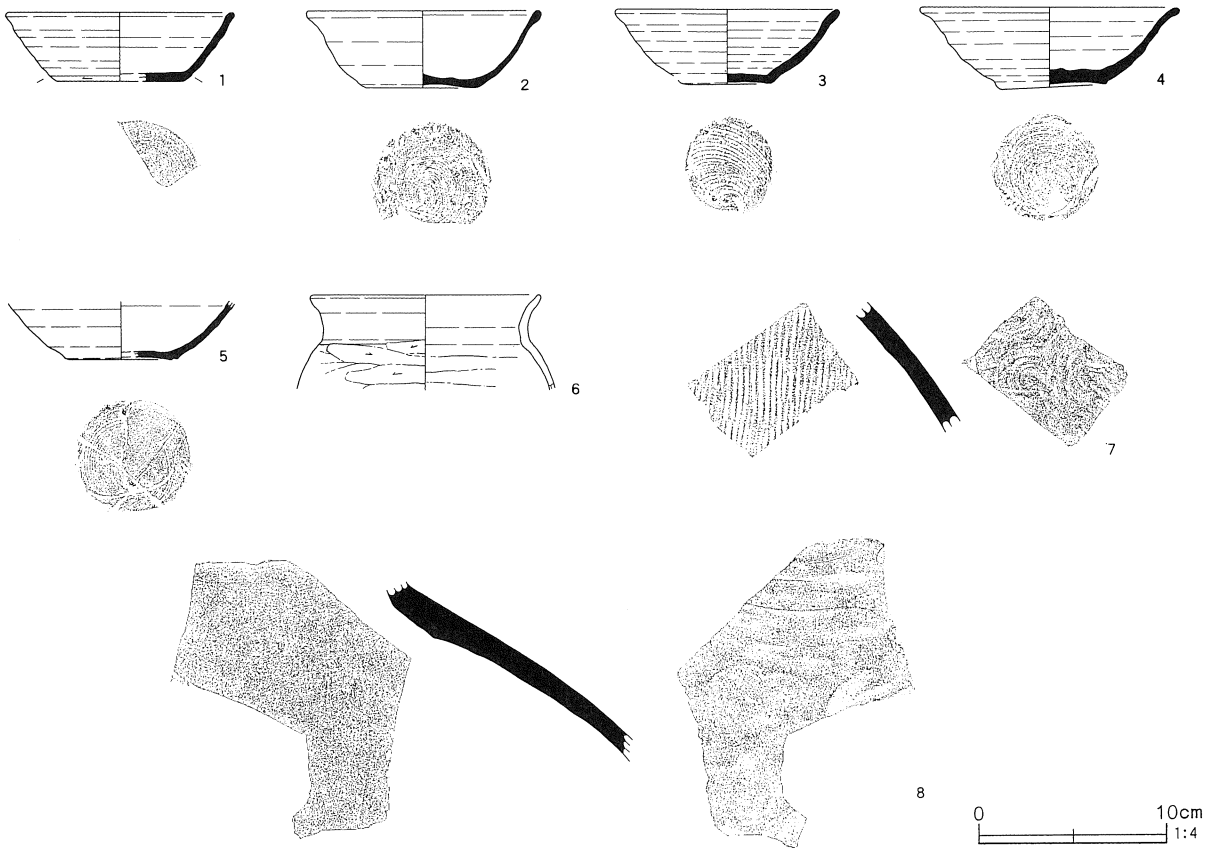
第1号住居跡
1　灰オリーブ色土　焼土粒子・炭化粒子・砂粒。
2　灰オリーブ色土　焼土粒子多量。

第1号住居跡カマド
a　灰オリーブ色土　炭化物多量。
b　暗灰黄色土　焼土粒子・砂粒少量。
c　灰オリーブ色土　炭化物・焼土粒子少量。
d　灰オリーブ色土　炭化物・焼土ブロック・焼土粒子少量。
e　オリーブ褐色土　焼土ブロック・焼土粒子多量、炭化物少量。
f　オリーブ褐色土　焼土ブロック少量。
g　暗灰黄色土　焼土粒子少量、砂粒多量。
h　灰オリーブ色土　焼土粒子・炭化粒子・砂粒。

P_1
1　灰オリーブ色土　焼土粒子微量、粘性あり。
2　暗オリーブ色土　焼土粒子・炭化物、粘性あり（古銭出土）。
3　灰オリーブ色土　炭化物少量、粘性あり。
4　灰オリーブ色土　灰色粘土ブロック多量、粘性あり。

P_2
1　灰オリーブ色土　焼土粒子・砂粒少量。

第11図　第１号住居跡出土遺物



第１号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏	(12.0)	(3.6)	6.7	ＥＦＨ	Ⅰ	5GY4/1	20	南比企産、No.7
2	須恵器坏	(12.2)	4.0	6.0	ＥＦ	Ⅲ	2.5Y7/2	40	南比企産、No.24・25
3	須恵器坏	11.6	4.0	4.8	ＢＦ	Ⅰ	N4/0	65	南比企産、カマド・No.15
4	須恵器坏	13.5	4.3	5.6	ＢＥＦＪ	Ⅲ	2.5Y7/2	75	南比企産、口縁部内面油煙付着
5	須恵器坏		(3.0)	6.0	ＥＦ	Ⅲ	10YR7/2	50	南比企産、No.33・35
6	土師器甕	(12.0)	(5.0)		ＡＢＥ	Ⅰ	5YR5/8	30	No.9
7	須恵器甕				ＥＦＨＫ	Ⅰ	7.5Y6/1	－	南比企産、No.39
8	須恵器甕				ＣＥＦ	Ⅰ	10Y6/1	－	南比企産、外面２次的に磨き、No.29

第１号ピットはカマドの南側に位置し、円形を呈する。規模は0.66 m×0.63 m、深さ0.78 m を測る。覆土第２層から古銭が出土し、住居跡より新しいことが明らかになった。第２号ピットは第１号ピットの東側にあり、円形を呈する。規模は0.30 m×0.27 m、深さ0.10 m を測る。

床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴と壁溝は検出されなかった。

遺物は、床面中央部に比較的集中して出土している。

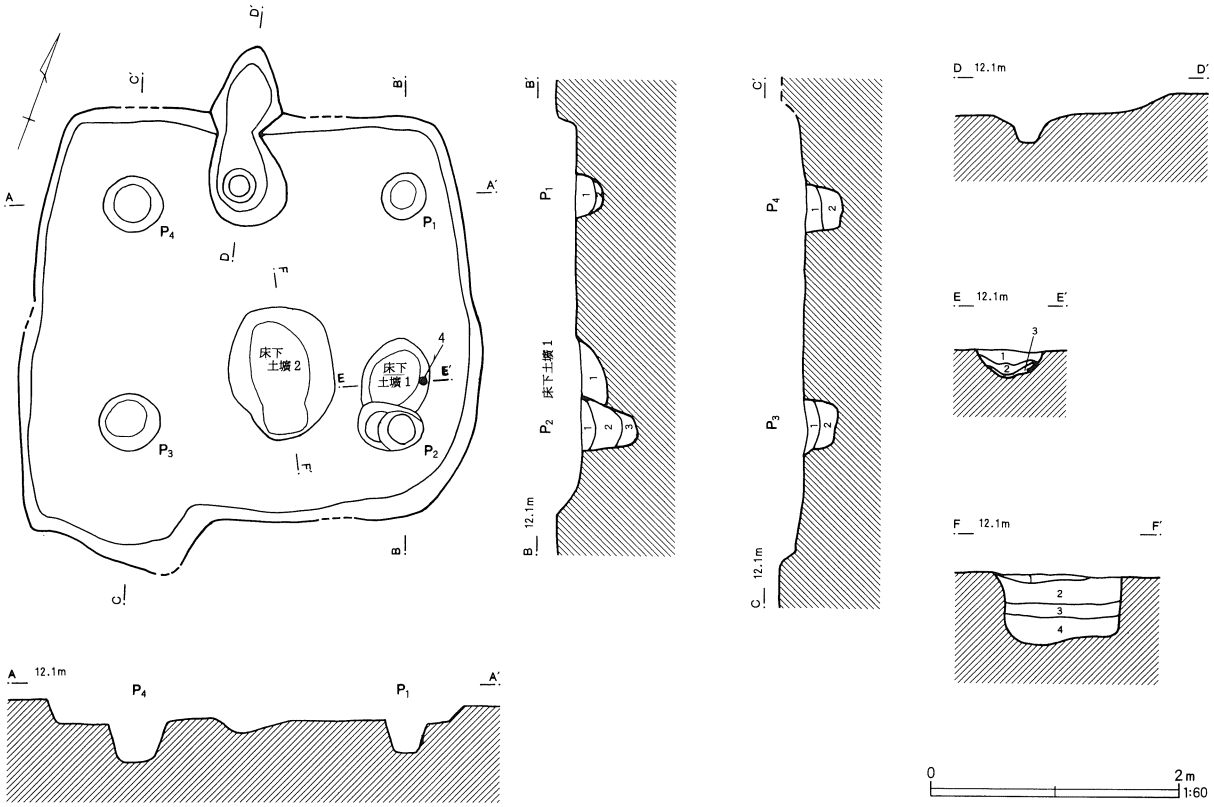
１は底部を回転糸切り離し後、全面回転ヘラケズリする須恵器坏で、南比企産の８世紀後半代のもの。残存率も低く、周辺からの流れ込み品と判断される。２から５はすべて底部を回転糸切り離しする須恵器坏で、南比企産である。器形と法量にバラエティーがあるが、一括して住居に伴うものと見られる。６は小型の土師器甕で、口縁部はコ字形を呈する。７は須恵器甕の体部で、外面平行叩き、内面同心円文当て具。８は７より大型の須恵器甕の体部で、外面平行叩き、内面無文当て具。外面を２次的に砥石として使用している。

遺構の時期は９世紀中葉と考えられる。

第２号住居跡（第12図）

本住居跡はＦ－14グリッド（Ａ１区南部）に位置する。平面形は南西角の突出した隅丸方形を呈する。規模は3.7 m×3.2 m で、深さ0.18 m である。主

第12図　第２号住居跡・出土遺物



第２号住居跡Ｐ$_1$
1　灰色粘土　炭化物少量、粘性強、しまり中。
2　灰色粘土　粘性強、しまり弱。

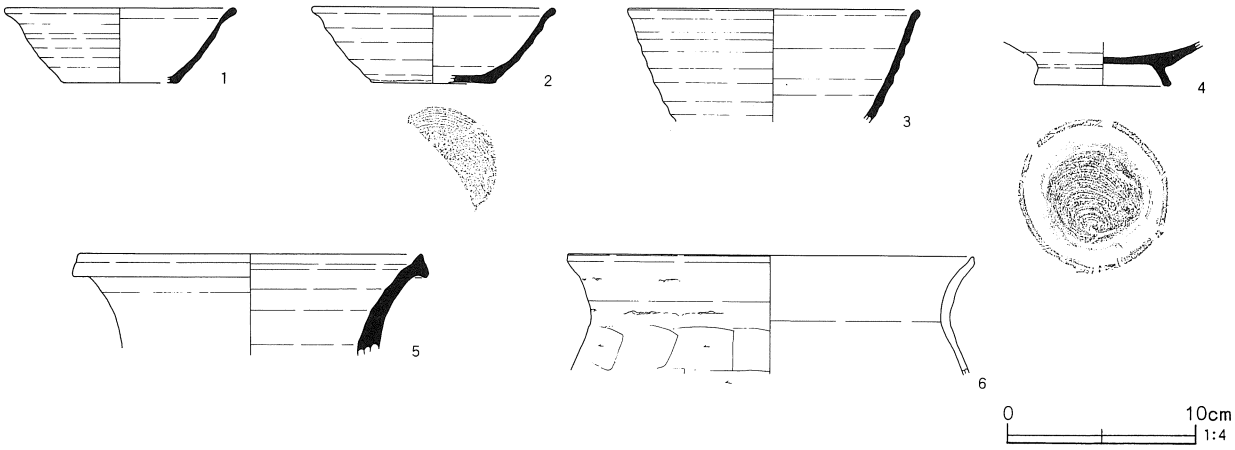
Ｐ$_2$
1　灰色粘土　炭化物少量、粘性強、しまりやや強。
2　灰色粘土　粘性強、しまり弱。
3　オリーブ黒色粘土　シルトブロック多量、粘性強、しまり弱。

Ｐ$_3$
1　灰色粘土　炭化物少量、粘性強、しまりやや強。
2　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり弱。

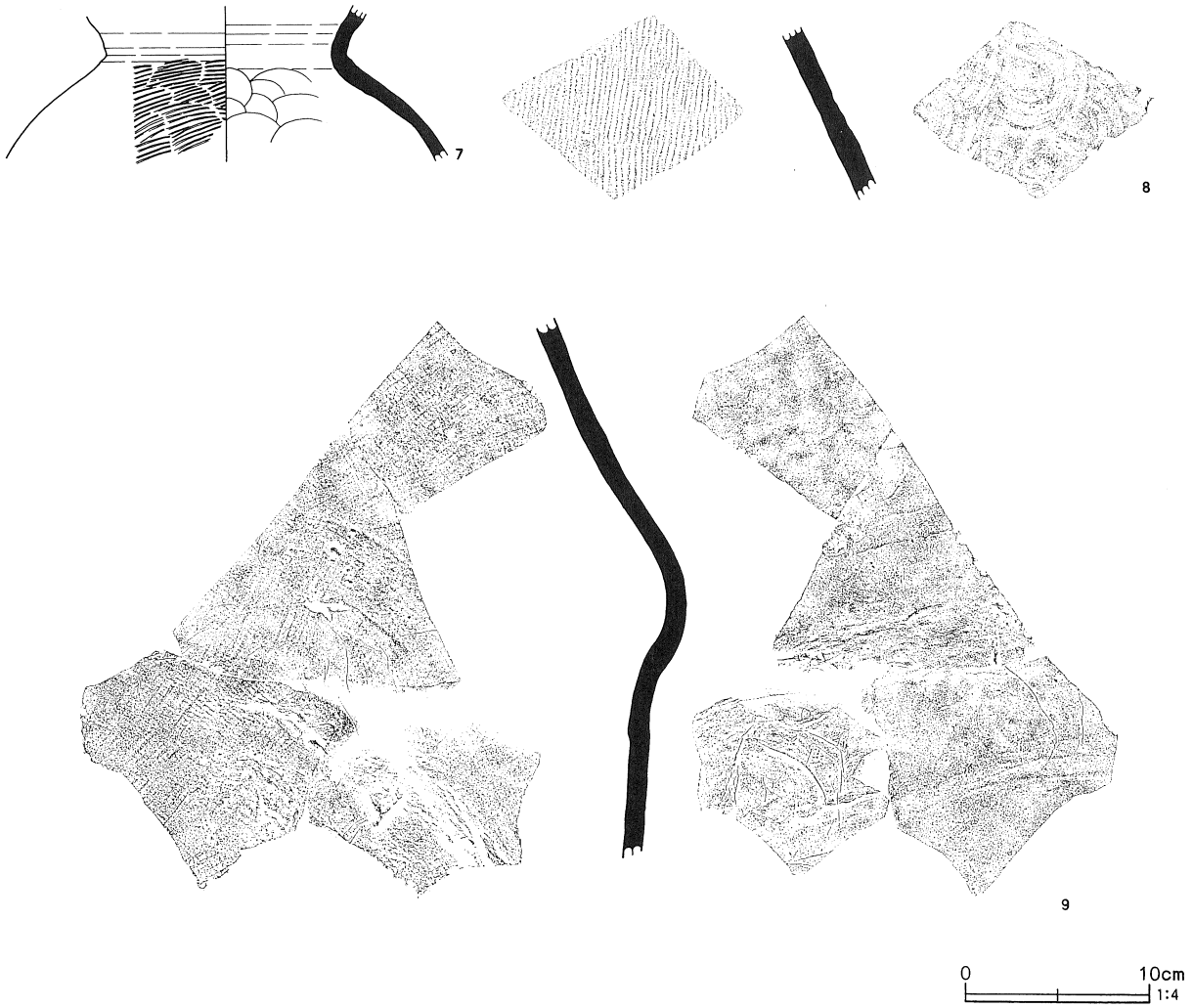
Ｐ$_4$
1　灰オリーブ粘土　木炭灰・焼土ブロック大量、粘性強、しまりやや強。
2　灰色シルト　木炭灰・焼土ブロック多量、粘性欠、しまり弱。

床下土壙１
1　明オリーブ灰色粘土　焼土ブロック・炭化物少量、粘性強、しまり中。
2　木炭灰層　粘土縞状、粘性弱、しまり欠。
3　灰オリーブ色粘性土　焼土ブロック少量、粘性やや強、しまり弱。

床下土壙２
1　灰色粘性土　焼土小ブロック少量、粘性やや強、しまり中。
2　オリーブ灰色粘土　焼土ブロック少量、粘性強、しまりやや強。
3　オリーブ灰色粘土　シルト多量、粘性強、しまり中(洪水による埋没土)。
4　暗オリーブ灰色粘土　シルト多量、粘性強、しまり中(洪水による埋没土)。



第13図　第２号住居跡出土遺物



第２号住居跡出土遺物観察表（第12～13図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成		残存率	備考
1	須恵器坏	(12.0)	3.9	(6.0)	ＡＥＦ	Ⅲ	5YR6/6	30	南比企産、覆土
2	須恵器坏	12.7	4.0	6.3	ＣＥＦＪ	Ⅰ	10Y6/1	50	南比企産、床直・覆土
3	須恵器埦	(15.4)	(5.9)		ＢＥＪ	Ⅰ	N5/0	20	南比企産、覆土
4	須恵器高台皿		(2.3)	7.2	ＢＣＥＦ	Ⅲ	10YR7/2	80	南比企産、床下土壙№１
5	須恵器甕	(18.0)	(5.3)		ＢＥＦＨ	Ⅱ	10Y6/1	20	南比企産
6	土師器甕	(21.4)	(6.2)		ＡＢＥ	Ⅱ	5YR5/4	25	Ｐ５
7	須恵器甕		(8.4)		Ｅ	Ⅰ	N5/0	25	東金子産、外面全体に自然釉、床直・SD10・12
8	須恵器甕				ＣＥＦＨ	Ⅰ	10Y6/1	－	南比企産、P15
9	須恵器甕				ＢＥＦ	Ⅱ	10YR7/2	－	南比企産　平行叩き、無文のあて具

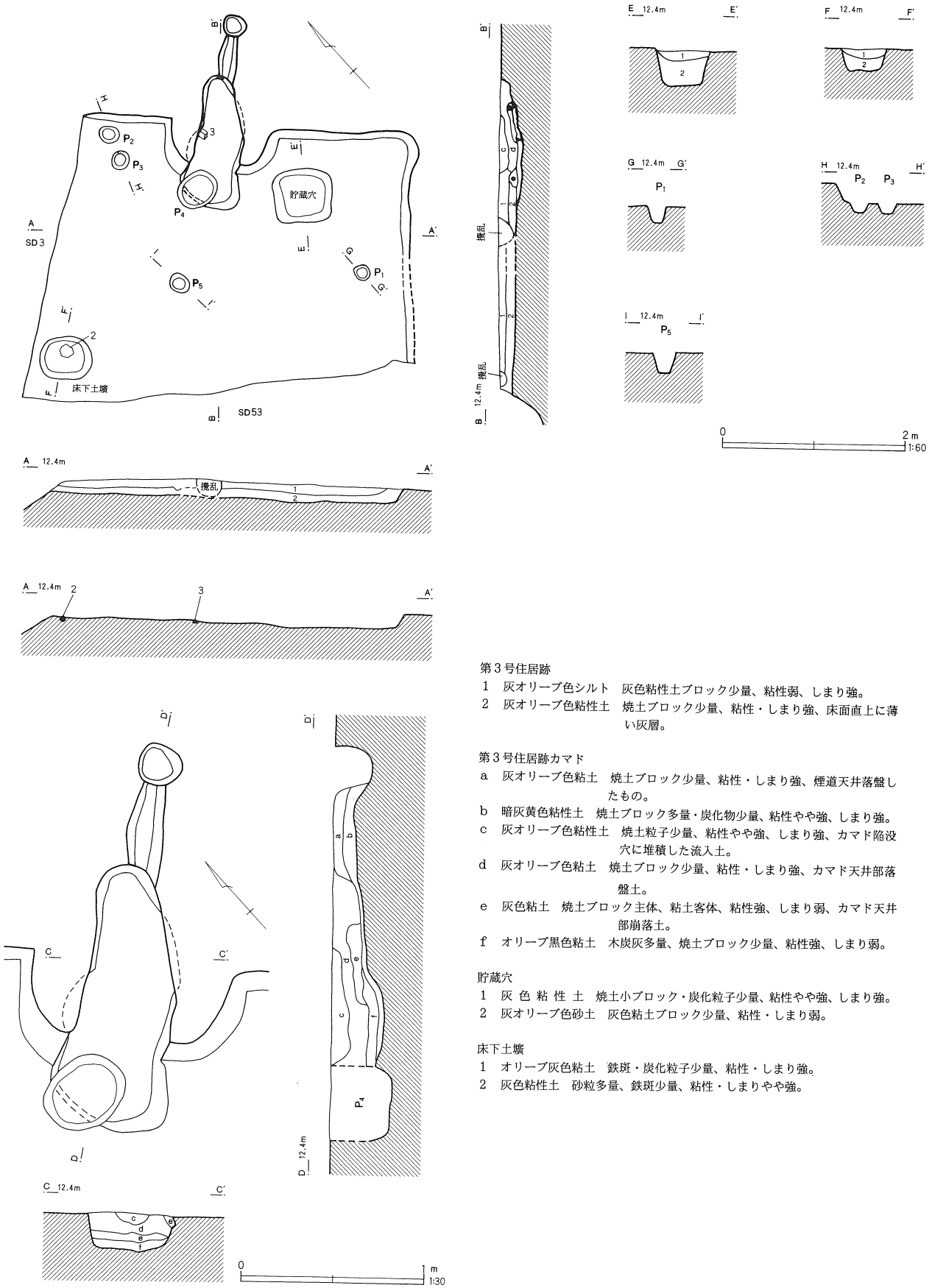
軸方向はＮ－22°－Ｗを示す。壁は傾斜を持って立ち上がっている。覆土は灰オリーブ色のシルト質土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

カマドは北壁の中央部に設置される。燃焼部は比較的よく焼けている。煙道部は壁を掘り込んで構築される。袖は地山掘り残しである。

床下土壙２はカマドの南側に位置し、楕円形を呈する。規模は0.99ｍ×0.84ｍ、深さ0.55㎝を測る。その東側には床下土壙１があり、楕円形を呈する。規模は（0.60）ｍ×0.54ｍ、深さ0.24㎝を測る。２号柱穴に切られている。

床面はほぼ水平で、中央部分が堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴は４本検出され、径0.36～0.42ｍ、深さ0.25～0.45ｍを測る。壁溝は検出されなかった。

第14図　第３号住居跡・カマド



第３号住居跡

1　灰オリーブ色シルト　灰色粘性土ブロック少量、粘性弱、しまり強。

2　灰オリーブ色粘性土　焼土ブロック少量、粘性・しまり強、床面直上に薄い灰層。

第３号住居跡カマド

a　灰オリーブ色粘土　焼土ブロック少量、粘性・しまり強、煙道天井落盤したもの。

b　暗灰黄色粘性土　焼土ブロック多量・炭化物少量、粘性やや強、しまり強。

c　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強、カマド陥没穴に堆積した流入土。

d　灰オリーブ色粘土　焼土ブロック少量、粘性・しまり強、カマド天井部落盤土。

e　灰色粘土　焼土ブロック主体、粘土客体、粘性強、しまり弱、カマド天井部崩落土。

f　オリーブ黒色粘土　木炭灰多量、焼土ブロック少量、粘性強、しまり弱。

貯蔵穴

1　灰色粘性土　焼土小ブロック・炭化粒子少量、粘性やや強、しまり強。

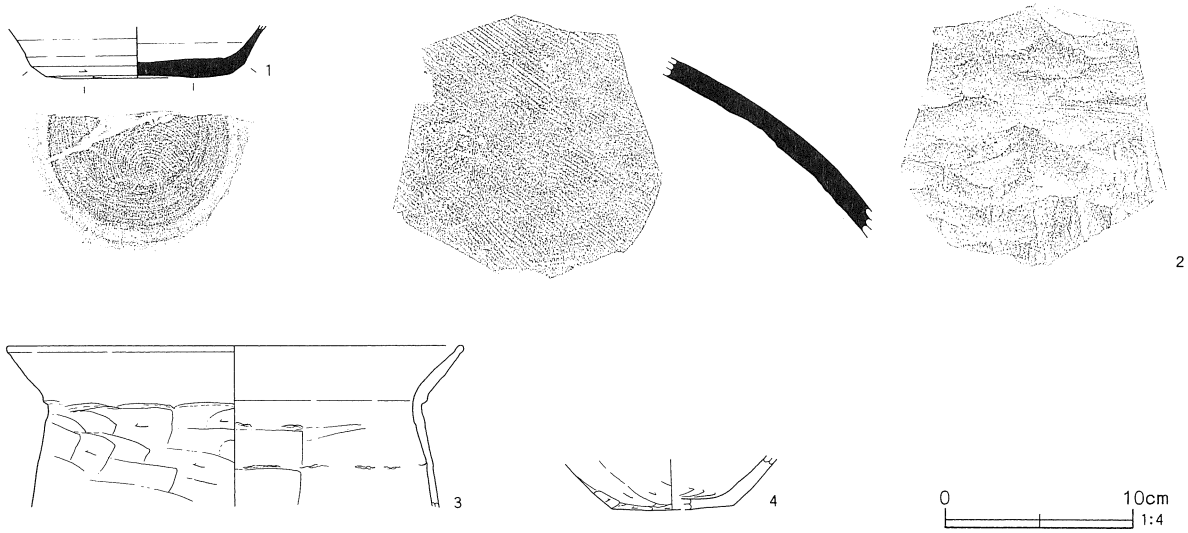
2　灰オリーブ色砂土　灰色粘土ブロック少量、粘性・しまり弱。

床下土壙

1　オリーブ灰色粘土　鉄斑・炭化粒子少量、粘性・しまり強。

2　灰色粘性土　砂粒多量、鉄斑少量、粘性・しまりやや強。

第15図　第３号住居跡出土遺物



第３号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏		(2.7)	9.8	ＥＦ	Ｉ	N5/0	60	南比企産、周辺＋体部下端ヘラ削り、Ｐ1
2	須恵器甕				ＢＣＦ	Ｉ	10Y6/1	－	南比企産、№10
3	土師器甕	(24.0)	(8.4)		ＡＥＧ	Ｉ	2.5YR5/6	20	№1
4	土師器甕		(2.7)	(6.4)	ＡＢＤＥ	Ｉ	2.5YR5/6	35	貼床内

遺物は覆土中と床面頂上から出土しており、４は床下土壙１内からの出土である。

１と２は須恵器坏で、底部の残る２では回転糸切り離しが行われている。床面直上出土である。３は須恵器埦で、胎土には大きめの礫が含まれている。４は高台付皿で、ハ字状に開く高い高台を持っている。５は須恵器小型甕口縁部で、端部は上下に拡張されている。６は土師器甕で、口縁部は弱いコ字形を呈し、定型化する前段階のものである。７は須恵器小型甕上半部で、体部外面は平行叩き、内面は無文当て具痕が残る。床面直上からの出土。東金子窯跡群産である。８は須恵器甕体部片で、外面平行叩き、内面同心円文当て具痕を残す。９は大甕の体部で、著しい膨れが生じている。７を除く須恵器はすべて南比企産である。

遺構の時期は９世紀初頭と考えられる。

第３号住居跡（第14図）

本住居跡はＣ－10グリッド（Ａ４区西端）に位置する。新旧関係は第７号住居跡と第53号溝に切られている。平面形は方形を呈する。規模は3.8ｍ（現存長）×3.1ｍ（現存長）で、深さ0.18ｍである。主軸方向はＮ－42°－Ｅを示す。壁はほぼ直立する。覆土は灰オリーブ色のシルト質土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

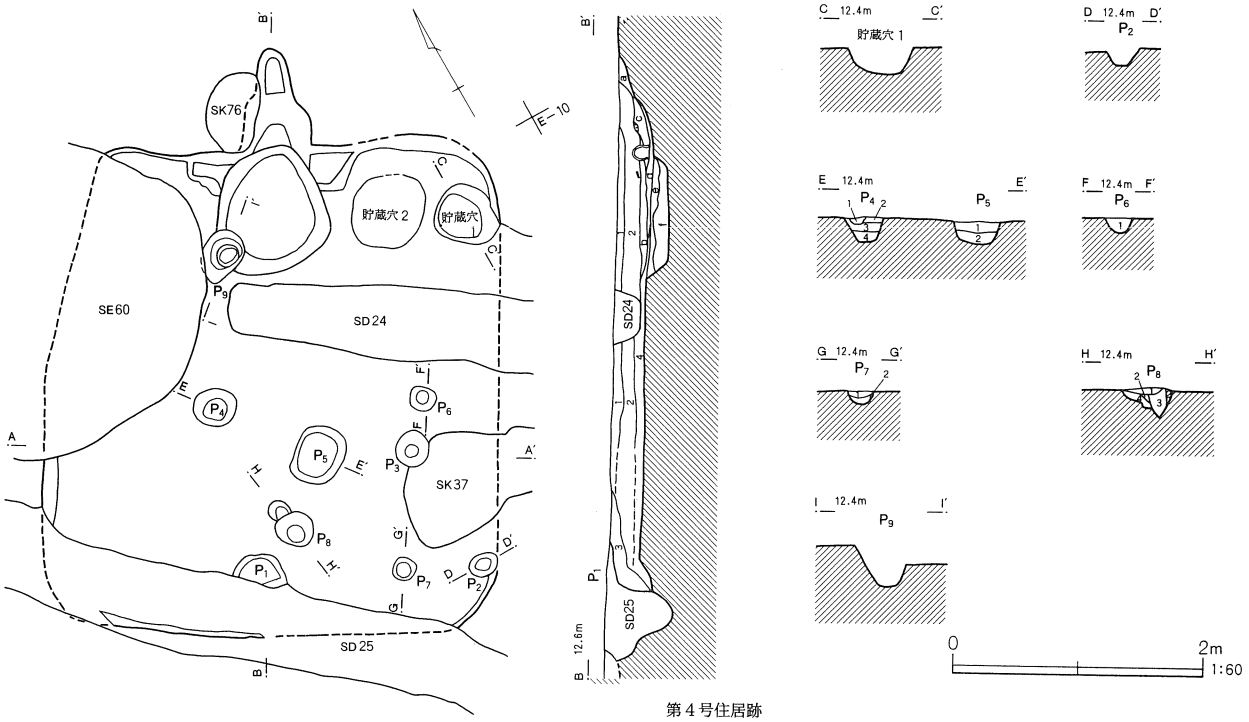
カマドは北壁の中央部に設置されていると推定される。燃焼部はよく焼けている。カマド土層断面の第ａ・ｄ層が天井崩壊土で、第ｂ・ｆ層が灰層である。煙道部は壁を掘り込んで構築され、煙出しの穴も残存していた。袖は地山掘り残しである。

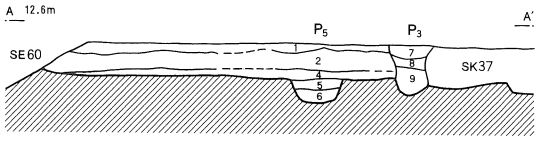
貯蔵穴はカマドの東側に位置し、隅円方形を呈する。規模は0.65ｍ×0.58ｍ、深さ0.42ｍを測る。

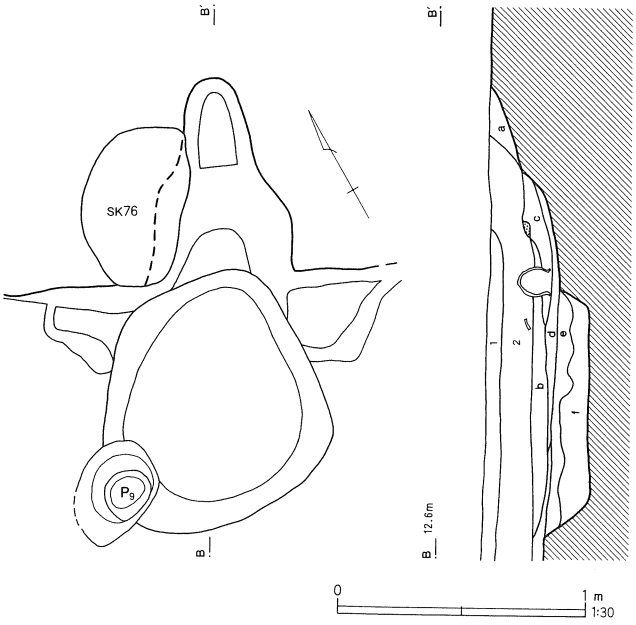
床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴と壁溝は検出されなかった。プランの西側に床下土壙が掘り込まれ、楕円形を呈する。規模は0.42ｍ×0.57ｍ、深さ0.24ｍを測る。他に深さ0.2ｍ前後の浅い小ピットが５個所あったが、４号ピットが新しいという事実を除くと住居への帰属は明らかにできなかった。

遺物は埋土中からほとんど出土していないが、カマ

第16図　第４号住居跡(1)・カマド







第４号住居跡

1　灰色シルト　灰オリーブシルトブロック・炭化物少量、粘性中、しまりやや強。
2　灰オリーブ色シルト　鉄斑全体・遺物・焼土・炭化物少量、粘性・しまり中。
3　灰色粘土　灰オリーブ色粘土粒子・小ブロック斑点状に多量、炭化物・焼土粒子少量。
4　灰オリーブ色粘性土　２層より炭化物多量、粘性・しまりやや強、床面直上覆土。
5　灰オリーブ粘性土　焼土ブロック少量、粘性・しまりやや強。
6　暗灰黄色粘性土　粘性・しまりやや強。
7　黄灰色粘性土　焼土粒子少量、粘性やや強、しまり中。
8　暗灰黄色粘性土　淡黄色粘土ブロック多量、粘性・しまりやや強。
9　黄灰色粘性土　粘性・しまりやや強。

第４号住居跡カマド

a　灰色粘性土　焼土ブロック多量、粘性やや強、しまり強、カマド覆土。
b　灰黄褐色土　炭化粒子・焼土小ブロック粒子少量、褐色粒子、暗灰黄色土粒子混入、粘性やや強、しまりあり。
c　暗褐色土　焼土ブロック・炭化粒子多量、灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまりあり。
d　灰黄褐色土　炭化粒子多量、褐色粒子・焼土粒子、粘性やや強、しまりあり。
e　灰色粘性土　焼土ブロックやや多量、土器片包含、粘性やや強、しまり強。
f　灰オリーブ色シルト　焼土粒子少量、粘性弱、しまりやや強。

P_4
1　灰オリーブシルト　粘性中、しまり強、外縁部に木炭、柱痕。
2　浅黄色シルト　炭化物・焼土粒子やや多量、粘性中、しまり強。
3　灰色粘性土　焼土ブロック少量、粘性やや強、しまり中。
4　灰オリーブ粘性土　粘性やや強、しまり弱。

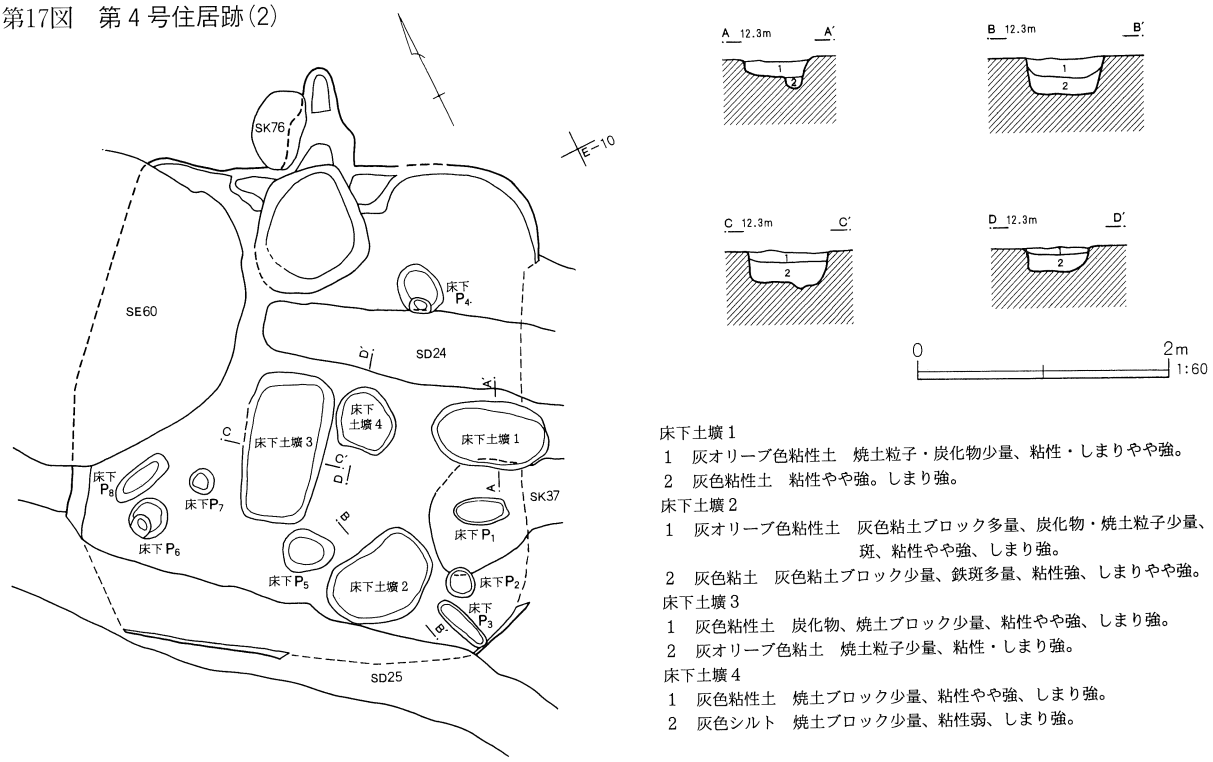
P_5
1　灰オリーブ粘性土　焼土ブロック少量、粘性・しまりやや強。
2　暗灰黄色粘性土　粘性・しまりやや強。

P_6
1　灰黄色粘性土　炭化粒子微量、粘性・しまりやや強。

P_7
1　灰黄色粘性土　炭化物・焼土粒子やや多量、粘性やや強、しまり中。
2　暗灰黄色粘性土　粘性・しまりやや強。

P_8
1　灰色粘性土　灰オリーブ粘土小ブロック多量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　灰オリーブ粘土小ブロック少量、粘性・しまりやや強。
3　オリーブ黒色粘性土　灰オリーブ粘土小ブロック・焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
4　灰オリーブシルト　焼土・炭化粒子少量、粘性・しまり中。

第17図　第４号住居跡(2)



床下土壙１
１　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子・炭化物少量、粘性・しまりやや強。
２　灰色粘性土　粘性やや強。しまり強。
床下土壙２
１　灰オリーブ色粘性土　灰色粘土ブロック多量、炭化物・焼土粒子少量、鉄斑、粘性やや強、しまり強。
２　灰色粘土　灰色粘土ブロック少量、鉄斑多量、粘性強、しまりやや強。
床下土壙３
１　灰色粘性土　炭化物、焼土ブロック少量、粘性やや強、しまり強。
２　灰オリーブ色粘土　焼土粒子少量、粘性・しまり強。
床下土壙４
１　灰色粘性土　焼土ブロック少量、粘性やや強、しまり強。
２　灰色シルト　焼土ブロック少量、粘性弱、しまり強。

ド燃焼部及び前面に比較的集中し、ピット１内から１が出土している。

１は底部を回転糸切り離し後、周辺部の回転ヘラケズリを施す須恵器坏で、底径が大きい。２は須恵器大甕体部片で、外面細かな平行叩き、内面は無文当て具痕が残る。３はカマド内から出土した土師器甕で、胴部の張りは弱く、口縁部は「く」字形に開く。４は土師器甕の底部で、貼床内からの出土であった。

遺構の時期は８世紀中葉と考えられる。

第４号住居跡（第16図）

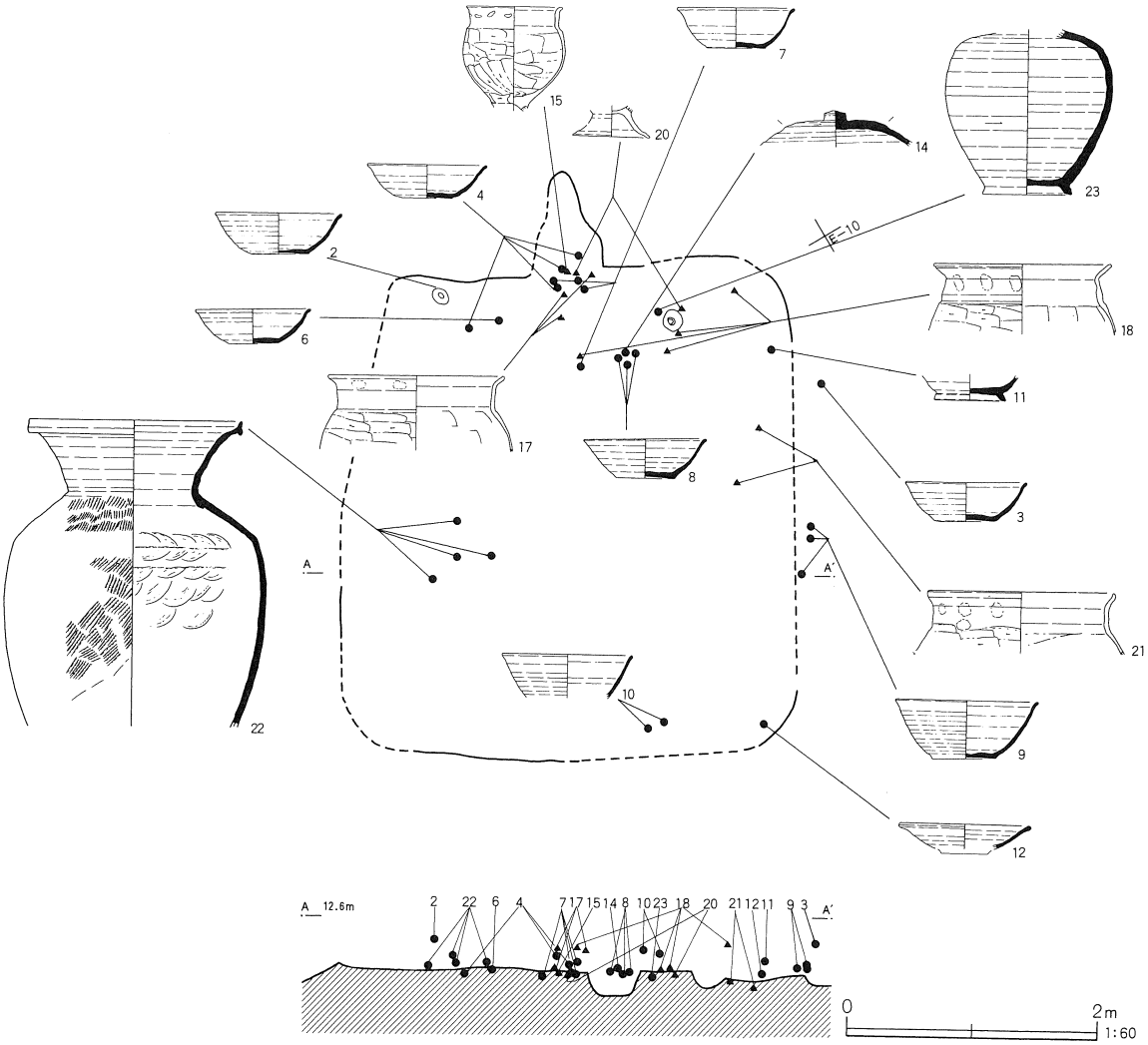
本住居跡はＤ・Ｅ－９グリッド（Ａ３区北部）に位置する。新旧関係は第24・25号溝、第60号井戸、第37号土壙に切られている。平面形は隅丸方形を呈する。規模は3.8 m×3.6 m（推定）で、深さ0.26 m である。主軸方向はＮ－30°－Ｅを示す。残存する壁はほぼ直立する。覆土は灰オリーブ色のシルト質土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

カマドは北壁の中央部に設置される。燃焼部は比較的よく焼けている。カマド土層断面の第ｃ層が天井崩壊土で、第ｄ層が灰層である。煙道部は壁を掘り込んで構築される。袖は地山掘り残しである。焚口部は１段下がる土壙状に作られているが、後に埋め立てられたことが分かる。その段階での土製支脚として15の台付甕（台部を取ったもの）が倒立して用いられていた。

貯蔵穴は２基あり、ともにカマドの東側に位置し、楕円形を呈する。規模は第１号貯蔵穴が0.42 m×0.54 m、第２号貯蔵穴が0.58 m×0.60 m を測る。床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴と壁溝は検出されなかった。床面には９個のピットがあるが、第５号ピットのように住居に伴うものと、第３号ピットのように後世のものとがあり、すべての新旧を明らかにすることはできなかった。掘り方は全体を掘り窪め、床面を貼る型である。床下からは４基の土壙と８個のピットが検出された。このうち最も大きい床下土壙３は隅円長方形を呈し、1.20 m×0.66 m、深さ0.30 m を測る。覆土には炭化物と焼土を含んでいた。

遺物は覆土中からも少数が出土しているが、カマド燃焼部及び前面の床面に集中し、貯蔵穴２からも23の長頸瓶が直立して出土している。

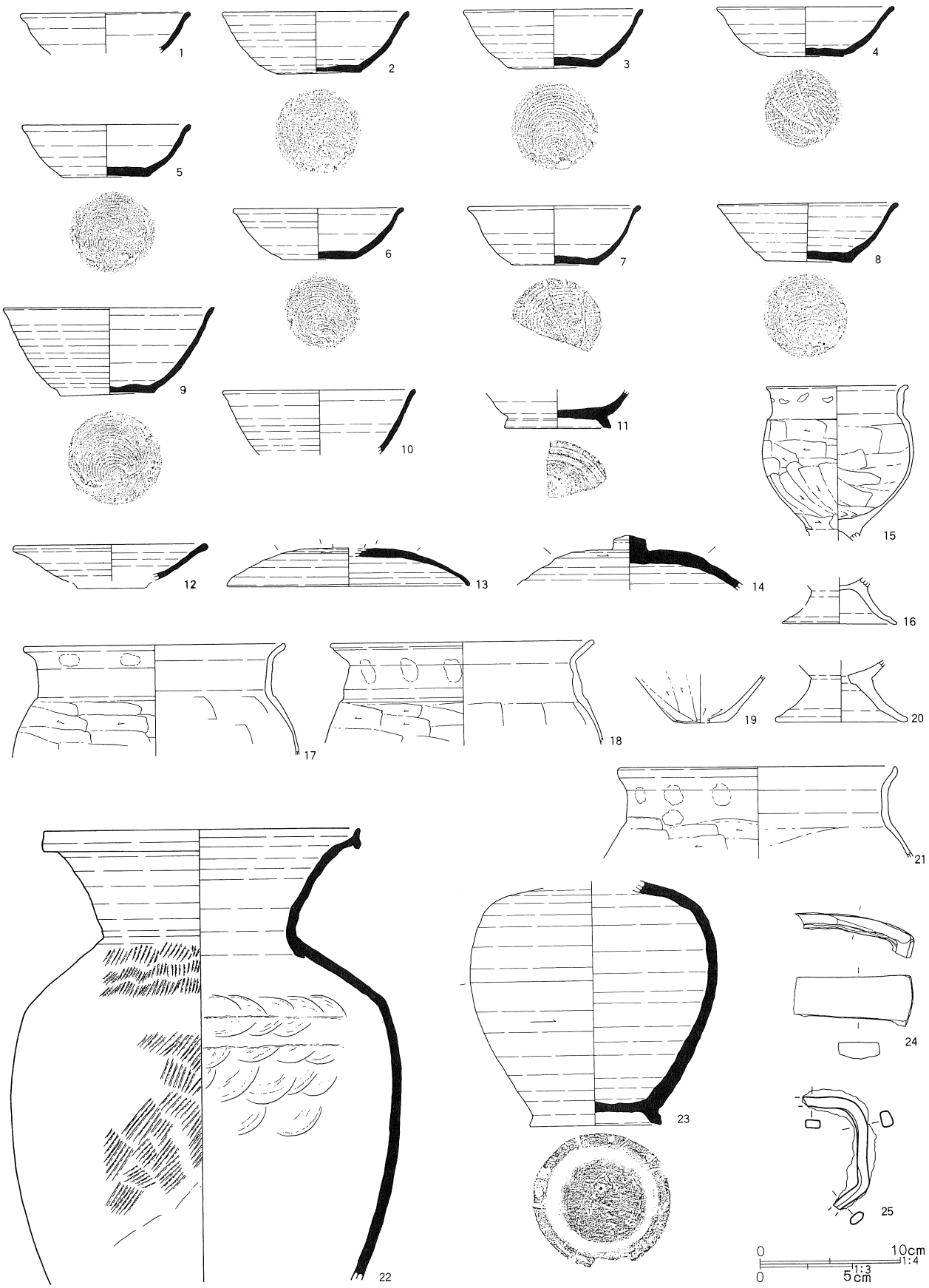
第18図　第４号住居跡遺物分布図



１から８は須恵器坏で、底部の残存する物はすべて回転糸切り離しである。多少法量の大小があるが、器形的には共通性が認められる。４の外底面にはＶ字状の窯印がある。９と10は須恵器埦で、灰白色と淡褐色という色調の差があるが、ともに胎土が資料で、製作も丁寧である。11は須恵器高台埦で、底部糸切り離し後に高台を貼り付けている。12は須恵器皿である。13と14は須恵器蓋で、共に天井部を回転ヘラケズリしている。13は床下土壙３からの出土である。15から21は土師器甕である。15は土製支脚に転用された小型の台付甕、17・18・21は通常の大きさの甕で、底部は台付の物（16・20）と台の付かない物（19）とがある。20の台部内側は真っ黒に炭素を吸着しており、カマド内からの出土という点からも、五徳として用いられた可能性が考えられる。甕の口縁部は４点ともコ字形を呈することで共通している。22は長胴の須恵器甕で、口縁端部は上下に拡張されている。体部は外面が平行叩き、内面は無文当て具痕が残る。黒色を呈し、硬緻な焼成で、肩部には灰がかかる。23は須恵器長頸瓶で、口縁部を欠き取った状態で貯蔵穴に成立していた。色調は茶褐色である。東金子産であろうか。須恵器類の産地は23を除けば、すべて南比企産である。24は灰釉平瓶の把手部分である。胎土は精良で、ヘラケズリで端正に成形されている。オリーブ色の灰釉を施釉し、光沢を帯びる。

遺構の時期は９世紀第２四半期と考えられる。

第19図　第４号住居跡出土遺物



第４号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏	12.0	(2.9)		ＦＨ	Ⅰ	N6/0	40	南比企産、貼床土壙３一括、Ｐ４
2	須恵器坏	13.2	3.4	6.0	ＥＦＪ	Ⅱ	5Y8/1	90	南比企産、№211
3	須恵器坏	12.7	4.2	6.3	ＥＦ	Ⅲ	2.5Y8/1	75	南比企産、№83
4	須恵器坏	12.5	3.5	5.5	ＦＨＪ	Ⅱ	5Y6/1	60	南比企産、№５直下、№141・167・98
5	須恵器坏	11.8	3.8	6.0	ＥＦＨ	Ⅰ	5Y6/1	60	南比企産、貼床土壙３一括、Ｐ４
6	須恵器坏	12.0	3.7	5.3	ＥＦ	Ⅰ	10Y6/1	95	南比企産、№100
7	須恵器坏	(12.2)	4.3	6.3	ＥＦ	Ⅱ	5Y8/1	35	南比企産、№144・145・154・165
8	須恵器坏	12.7	4.3	6.2	ＡＢＥＦ	Ⅲ	10YR6/4	85	№170～172、１区床直
9	須恵器埦	15.0	6.3	6.6	Ｆ	Ⅲ	5Y8/1	70	南比企産、№82・125・SK37№25
10	須恵器埦	(13.6)	(4.6)		ＥＦ	Ⅲ	10YR7/4	30	南比企産、№60・61、SD24
11	須恵器高台埦		(2.8)	(7.4)	ＢＦＨＪ	Ⅰ	N6/0	25	南比企産、№34
12	須恵器皿	(13.4)	(2.6)		ＣＦＨ	Ⅱ	5Y6/1	10	南比企産、№200
13	須恵器蓋	(17.2)	(2.7)		ＢＦＨ	Ⅲ	2.5Y8/1	20	南比企産、貼床土壙３一括
14	須恵器蓋		(3.9)		ＣＦＨ	Ⅱ	7.5Y6/1	35	南比企産、つまみ径2.3、№169
15	土師器台付甕	9.8	(10.9)		ＡＢＥＨ	Ⅰ	2.5YR5/8	100	№105
16	土師器台付甕		(3.3)	8.0	ＡＥ	Ⅰ	5YR6/6	50	Ｐ４
17	土師器甕	18.6	(7.9)		ＡＣＤＥ	Ⅱ	2.5YR5/8	45	№３・13・19
18	土師器甕	(18.6)	(7.4)		ＡＢＤＥ	Ⅰ	2.5YR5/8	25	№21・31・108・159、貯蔵穴
19	土師器甕		(3.4)	(3.8)	ＢＥＨ	Ⅱ	7.5YR6/4	30	Ｐ５
20	土師器台付甕		(4.4)	9.0	ＡＥ	Ⅱ	2.5YR5/8	45	甑として再利用した可能性、№143・156
21	土師器甕	(19.6)	(7.5)		ＡＢＥＧ	Ⅰ	5YR6/6	25	№180・182
22	須恵器甕	22.4	(32.0)		ＣＥＦ	Ⅰ	2.5Y5/1	55	南比企産、平行叩き無文あて具、№３・38・39・43・185
23	須恵器長頸瓶		17.3	9.2	Ｅ	Ⅱ	10YR4/2	100	東金子産か、肩部に降灰をうける、№30
24	灰釉平瓶				ＨＫ	Ⅰ	5Y7/1	－	猿投産、取手部分、床下№１
25	鉄製品	長6.0	幅3.6	厚0.6				－	用途不明鉄製品

第５号住居跡（第20図）

本住居跡はＤ・Ｅ－８・９グリッド（Ａ３区西端）に位置する。新旧関係は第26・61号井戸に切られている。平面形は方形を呈する。規模は3.8ｍ×3.7ｍで、深さ0.2ｍである。主軸方向はＮ－83°－Ｅを示す。住居跡の掘り込みは浅いが、壁はほぼ直立する。覆土は灰黄褐色の粘性土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

カマドは東壁のやや南よりに設置される。燃焼部は比較的よく焼けている。カマド土層断面の第ａ層が天井崩壊土で、第ｂ層が灰層である。煙道部は壁を掘り込んで構築される。袖は地山掘り残しである。

床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴は検出されなかった。壁溝はカマドのある東壁以外はほぼ全周する。床面には17個のピットがあるが、配列に規則性はなく、第１・３号ピットのように後世の掘り込みであることが明らかなものを含んでいる。

遺物は覆土中からほとんど出土していないが、床面中央部付近に比較的集中して出土している。

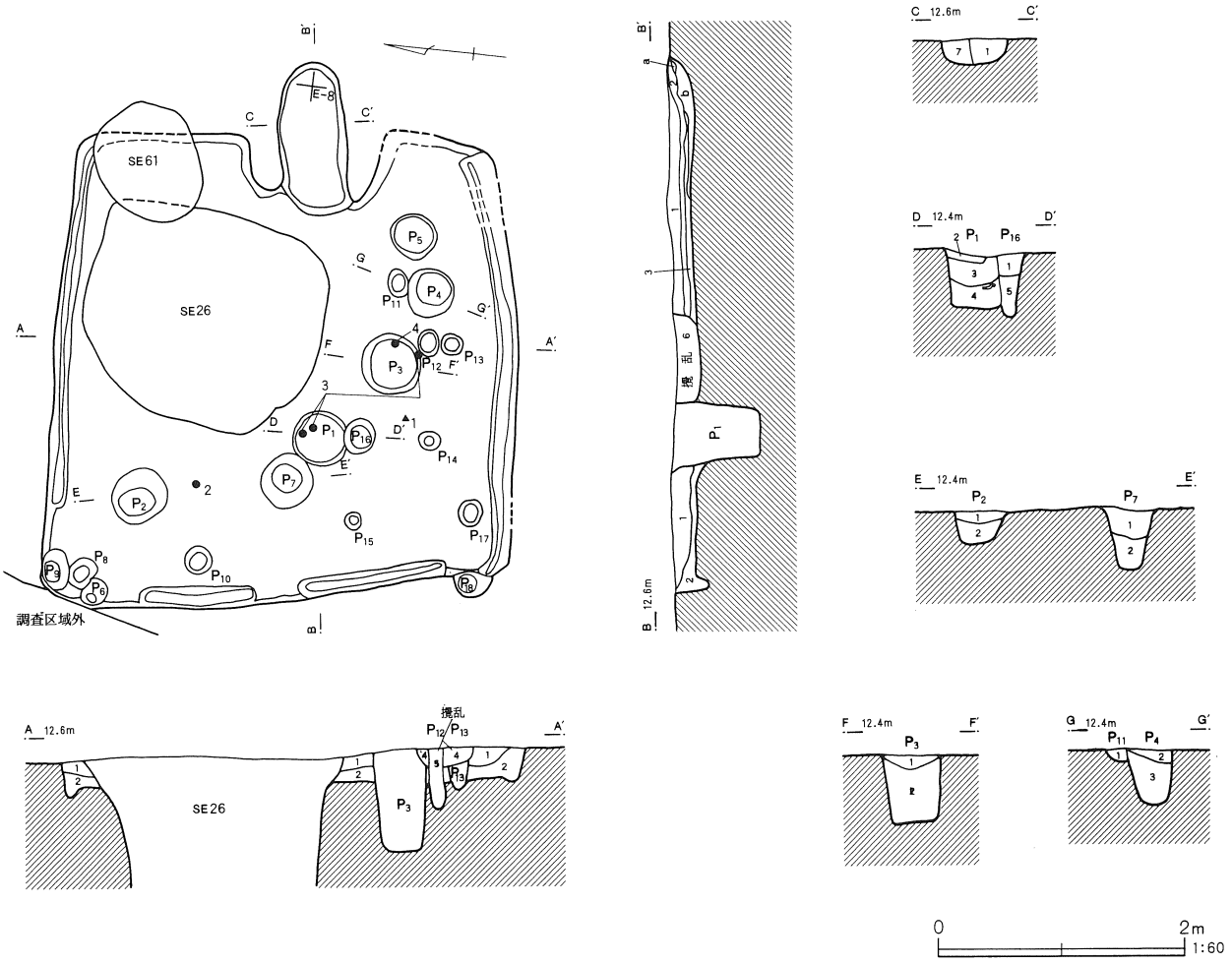
１は土師器坏で、底部を中心にヘラケズリ調整する技法と胎土が土師器甕と共通している。２は底部を糸切り離しする須恵器坏である。３は須恵器埦で、底部は回転糸切り離し後、周辺部の回転ヘラケズリを加える。４は須恵器蓋で、３の椀とセットをなすものであろう。これらの須恵器類はすべて南比企産である。５は土師器甕で、口縁部は弱いコ字形を呈し、口径が大きい。６と７は鉄器である。６は偏平な長方形の鉄製品で、刃は付けられていない。７は上下両端が尖る鉄製品であるが、全体の形状が明らかでない。ともに用途は不明である。他にチャートの自然礫で、碁石状のものが２点出土しているが、図の掲載を割愛した。

遺構の時期は８世紀末から９世紀初頭と考えられる。

第６号住居跡（第22図）

本住居跡はＦ・Ｇ－15グリッド（Ａ１区東南部）に位置する。新旧関係は第10号溝に切られている。平面形は方形を呈する。規模は4.2ｍ×3.8ｍで、深さ0.2ｍである。主軸方向はＮ－24°－Ｗを示す。住居跡の掘り込みは浅いが、壁はほぼ直立する。覆土は灰オリーブ色の粘性土で、地山との差異は僅か

第20図　第５号住居跡



第５号住居跡

1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化粒子・褐色粒子、粘性やや強、しまりあり。
2　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、炭化粒子少量、粘性やや強、しまりあり。
3　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、焼土粒子・炭化物粒子少量、粘性やや強、しまりあり。
4　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、灰黄色土・黒褐色ブロック混入、粘性ややあり、しまりあり。
5　黒褐色粘性土　褐色粒子、灰黄褐色土粒子少量混入、粘性やや強、しまりややあり。
6　灰黄褐色粘性土　褐色粒子・炭化粒子、灰黄色土粒子少量混入、粘性やや強、しまりあり。
7　オリーブ黄色粘性土　焼土ブロック多量、粘性・しまりやや強。カマド天井崩落土。

第５号住居跡カマド

a　灰黄褐色粘性土　灰黄褐色土ブロック。
b　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、炭化粒子・焼土粒子多量、粘性やや強、しまりあり。

P_1・P_{16}

1　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘土　焼土ブロック・炭化物多量、粘性強、しまり弱。
3　オリーブ黄色粘性土　焼土粒子少量、鉄斑、粘性・しまりやや強。
4　灰色粘土　焼土粒子少量、粘性強、しまり中。
5　オリーブ黒色粘土　粘性強、しまり中。

P_2

1　灰オリーブシルト　焼土粒子少量、粘性弱、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強。

P_3

1　灰オリーブ色シルト　焼土ブロック、粘性弱、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強。

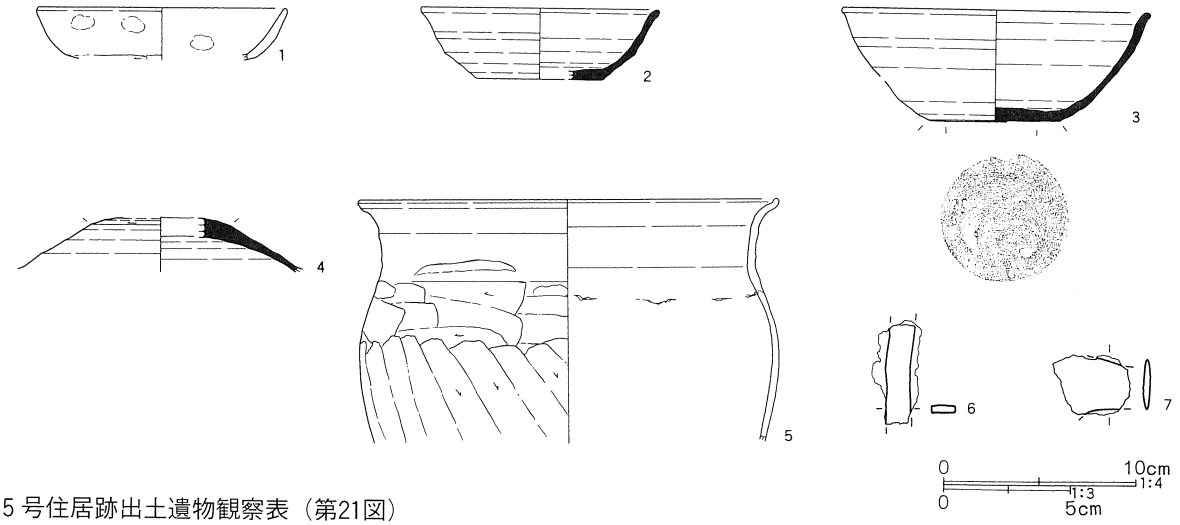
P_4・$_{11}$

1　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　オリーブ黄色シルト　粘性弱、しまり強。
3　灰色粘性土　オリーブ黄色シルトブロック、焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。

P_7

1　オリーブ黒色粘性土　浅黄色シルトブロック多量、焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　オリーブ黒色粘性土　粘性・しまりやや強。

第21図　第５号住居跡出土遺物



第５号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(13.0)	(2.7)		ＤＥＨ	Ⅰ	7.5YR7/6	15	№８
2	須恵器坏	12.5	3.7	6.6	ＣＦ	Ⅰ	7.5Y6/1	25	南比企産、№19
3	須恵器埦	16.0	5.8	6.9	ＢＦＨＪ	Ⅱ	2.5Y8/1	50	南比企産、周辺ヘラ削り、№６・16・17
4	須恵器蓋		推2.9		ＥＦ	Ⅰ	7.5Y6/1	25	南比企産、№５
5	土師器甕	(20.8)	(12.7)		ＡＢＥＨ	Ⅰ	5YR6/6	20	№35
6	鉄製品	長3.9	幅1.0	厚0.3				－	用途不明鉄製品
7	鉄製品	長3.0	幅2.3	厚0.3				－	用途不明鉄製品

であり、洪水による埋没と考えられる。

カマドは北壁の中央部に設置される。燃焼部は比較的よく焼けている。カマド土層断面の第ａ層が天井崩壊土で、第ｂ層が灰層である。煙道部は壁を掘り込んで構築される。袖は地山掘り残しである。

床下土壙がカマドの前方東側に位置し、楕円形を呈する。規模は0.78ｍ×0.70ｍ、深さ0.54ｍを測る。床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴は４本検出され、径0.18～0.36ｍ、深さ0.24～0.33ｍを測る。壁溝は検出されなかった。掘り方は中央部分を掘り残し、四周を掘り窪める型である。

遺物は覆土中からほとんど出土していないが、カマド燃焼部及び前面に集中し、東側の床面からも出土している。

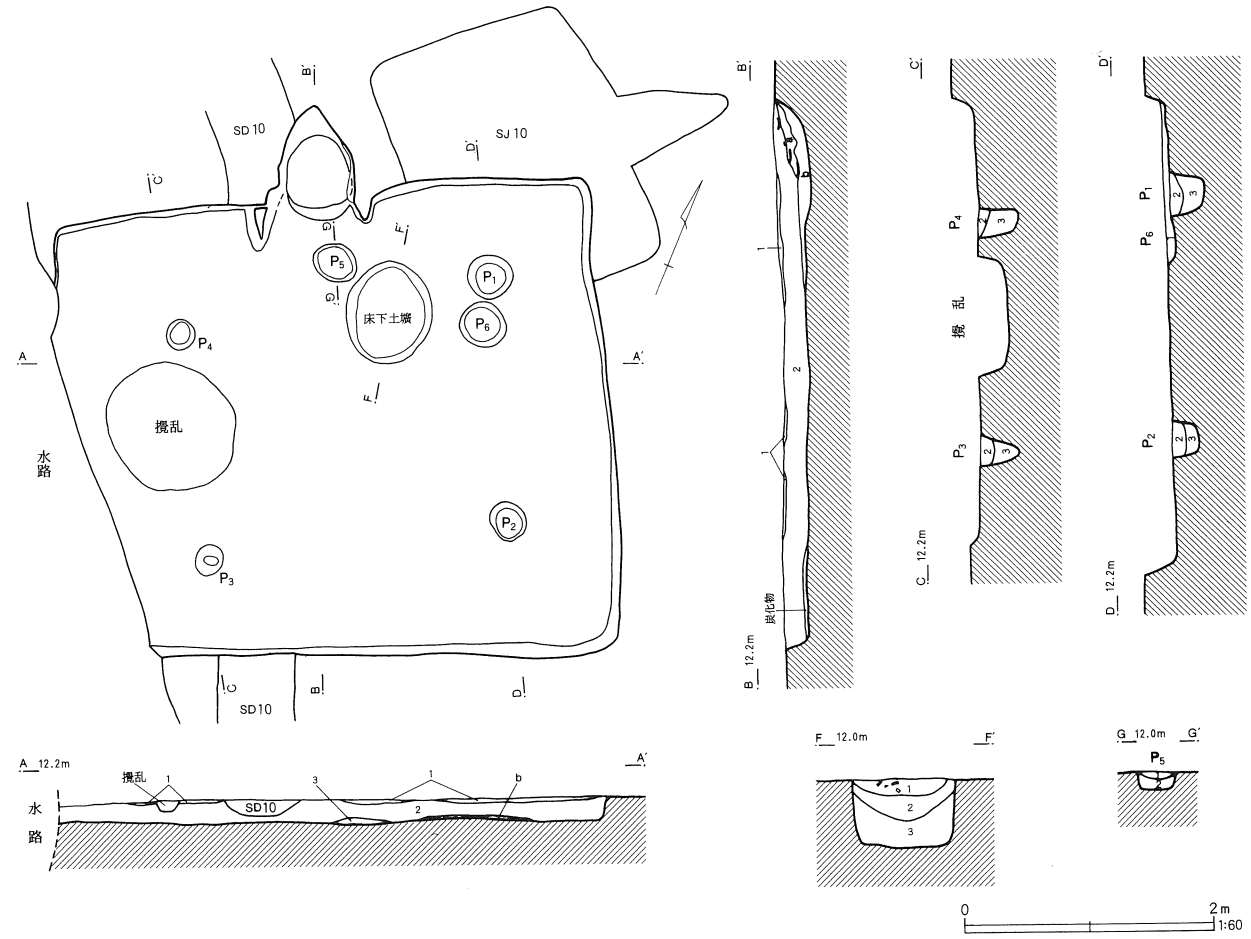
１から５は須恵器坏で、底部の残存する物では、糸切り離しが行われている。器形は１のみ口縁部が内湾気味で、法量が大きく古相を示す。６から９は須恵器皿で、器形と法量がほぼ統一されている。底部は糸切り離しである。10は須恵器高台埦で、底部糸切り離し後に高台を貼り付けている。11は須恵器長頸瓶の頸部である。12は須恵器甕片で、外面は平行叩き、内面は同心円状当て具痕が残る。これらの須恵器類はすべて南比企産である。13は北武蔵型の土師器皿である。14から20は土師器甕で、台付（14）と台の付かないもの（20）とがある。口縁部はいずれもコ字形を呈する。甕の内外面には炭化物がこびり付くものが多かった。21は土錘で直径２mmの穴が貫通している。灰白色を呈し、須恵器窯で焼かれた可能性がある。

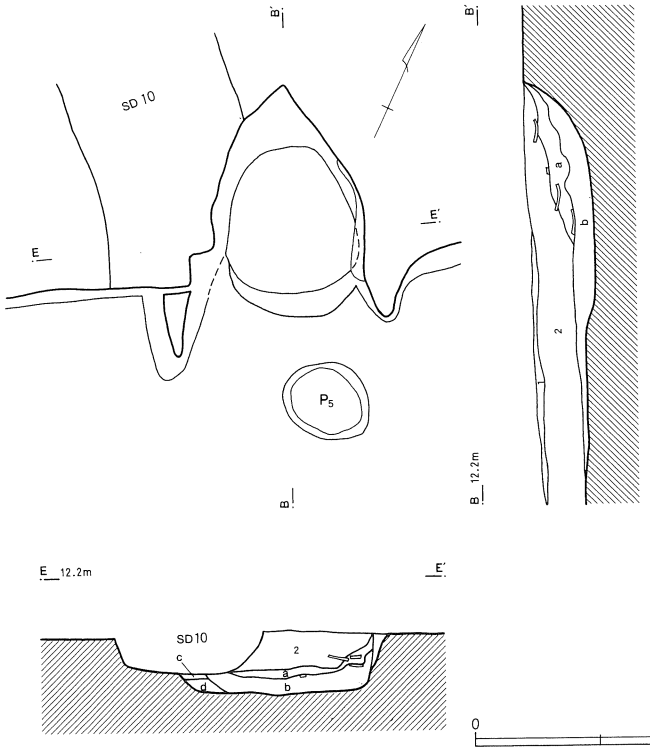
遺構の時期は９世紀第２四半期と考えられる。

第７号住居跡（第25図）

本住居跡はＣ－10グリッド（Ａ４区西端）に位置する。新旧関係は第３号住居跡と第53・52号溝に切られている。平面形は方形を呈する。規模は3.2ｍ×2.8ｍ（現存長）で、深さ0.08ｍである。主軸方向はＮ－58°－Ｗ（推定）を示す。住居跡の掘り込みは浅いが、壁はほぼ直立する。覆土は灰オリーブ色の粘土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

第22図　第６号住居跡・カマド





第６号住居跡

1　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。

2　灰オリーブ色粘性土　鉄分粒子多量、焼土小ブロック少量、粘性やや強、しまり強。

3　緑灰色粘土　焼土粒子少量、粘性・しまり強。

第６号住居跡カマド

a　落盤した天井部。

b　青黒色粘土　焼土小ブロック・灰オリーブ色粘性土多量、粘性強、しまり欠、床面直上灰層。

c　オリーブ黒色粘性土　焼土粒子少量、粘性・しまりやや強、カマド掘方内壁体構築粘土層。

d　灰オリーブ色粘土　焼土粒子少量、粘性強、しまり中、カマド掘方内壁体構築粘土層。

$P_{1\sim4}$

1　木炭灰層　粘性・しまり欠、床面直上堆積。

2　灰オリーブ色粘土　焼土粒子少量、粘性強、しまりやや強。

3　灰色粘土　粘性強、しまり中。

P_5

1　木炭灰層　焼土ブロック多量、土器片含有、粘性・しまり欠。

2　灰色粘土　炭化物少量、粘性強、しまり中。

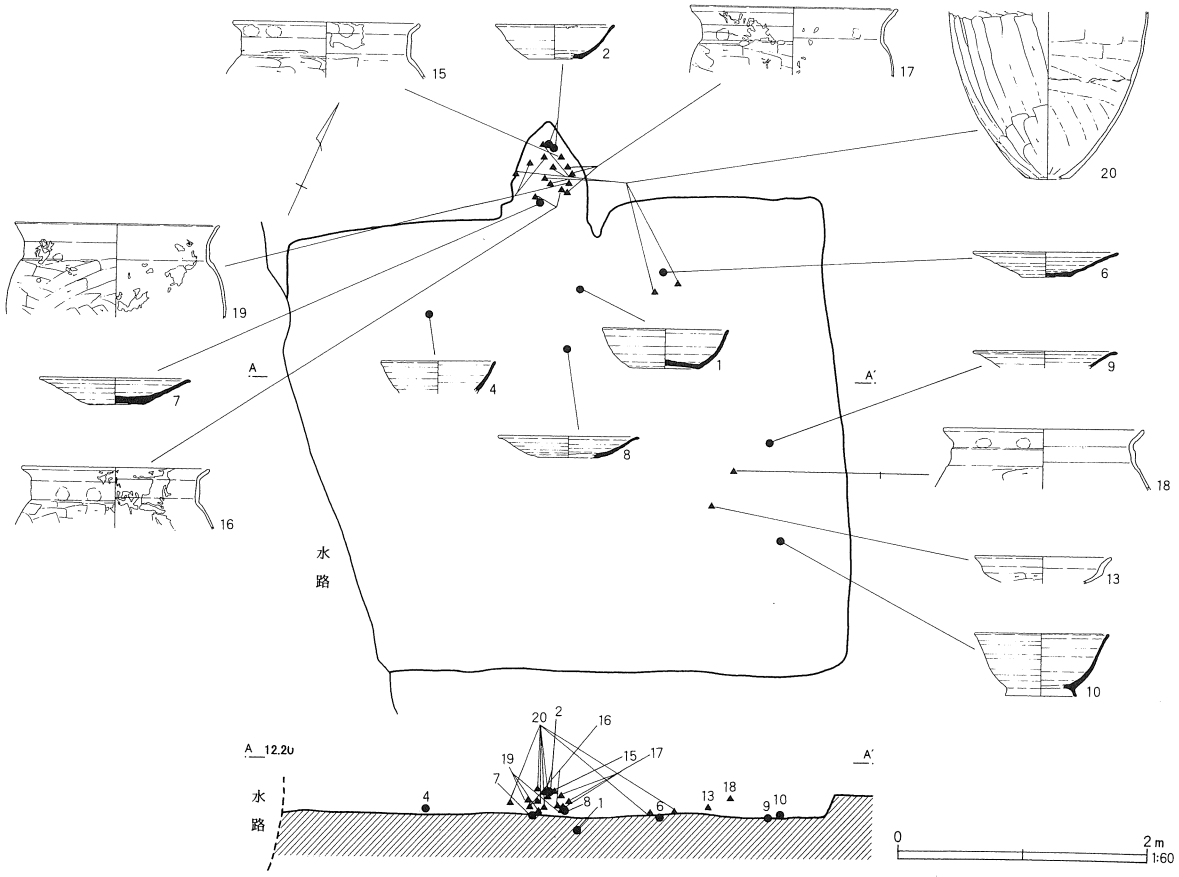
第６号住居跡床下土壙

1灰色粘性土　焼土ブロック・灰大量、土器包含、粘性やや強、しまり強。

2灰色粘土　茶褐色斑点（マンガン粒？）、粘性強、しまりやや強。

3オリーブ黒色粘土　焼土ブロック多量、粘性強、しまり中。

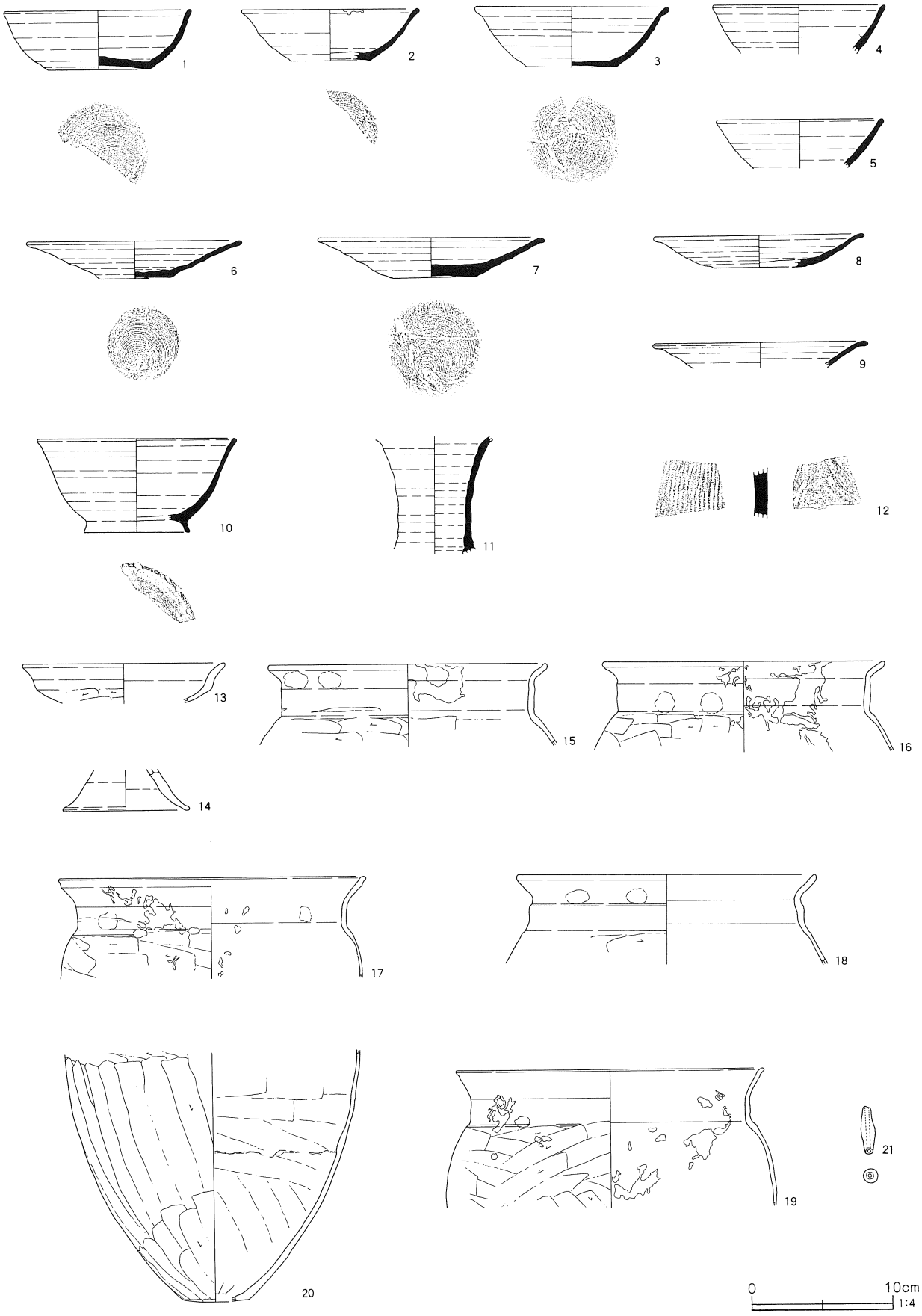
第23図　第６号住居跡遺物分布図



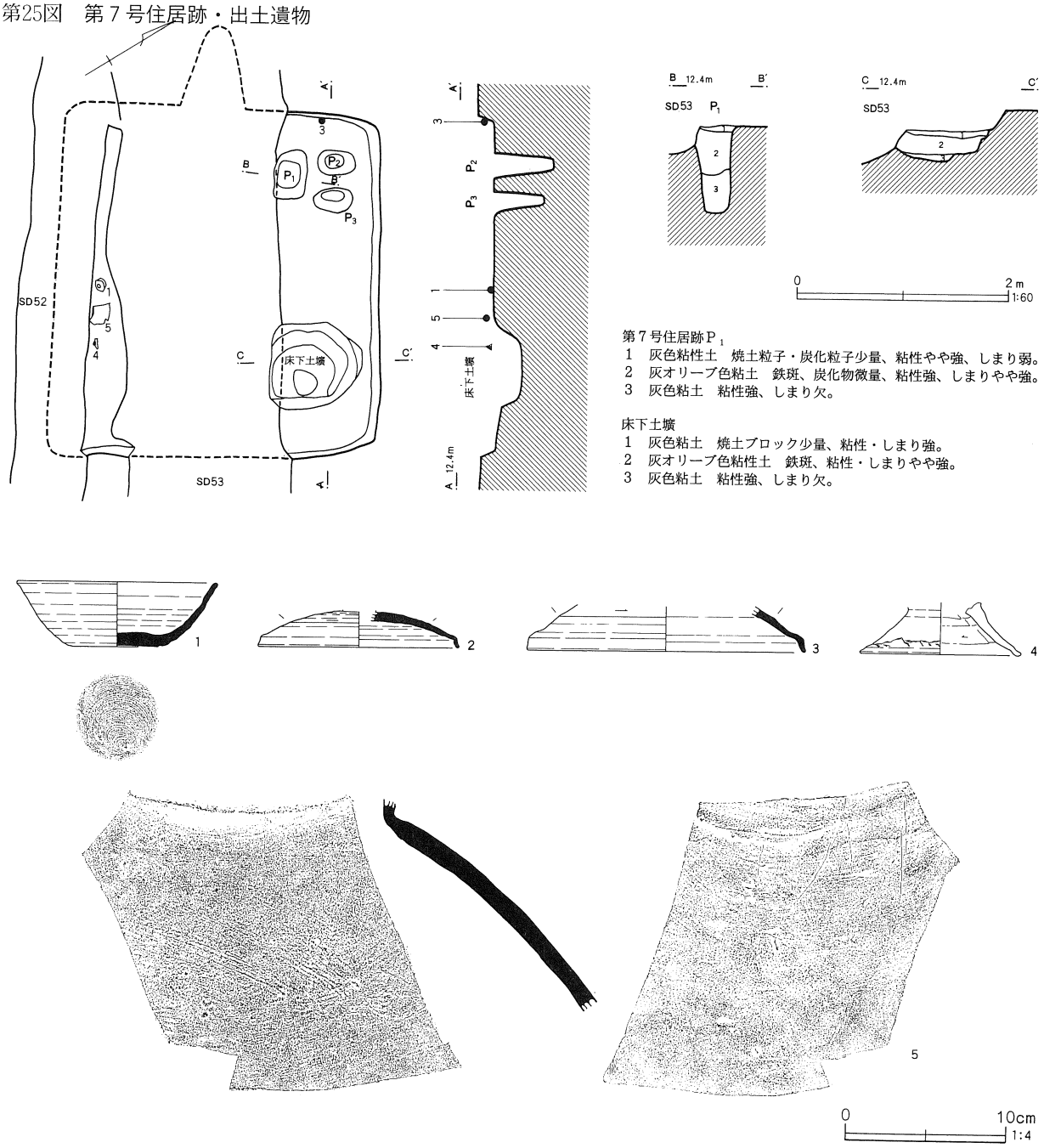
第６号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏	13.0	4.1	7.2	ＢＦＨ	Ⅲ	10YR7/3	45	南比企産、№145
2	須恵器坏	12.4	3.6	(5.6)	ＥＦＨ	Ⅱ	10Y6/1	35	南比企産、№55・87
3	須恵器坏	13.4	4.2	6.3	ＡＥＦ	Ⅲ	10YR7/3	65	南比企産、カマド内・床下土壙
4	須恵器坏	(12.0)	(3.4)		ＥＦ	Ⅰ	N6/0	10	南比企産、№23
5	須恵器坏	(11.6)	(3.4)		ＢＣＦ	Ⅰ	N5/0	20	南比企産、Ｐ１
6	須恵器皿	(15.0)	2.7	5.1	ＥＦＨ	Ⅲ	2.5Y6/1	60	南比企産、№128
7	須恵器皿	15.7	2.9	6.3	ＣＥＦ	Ⅲ	2.5Y7/1	75	南比企産、Ｐ５、№117
8	須恵器皿	14.6	2.3		ＥＦ	Ⅱ	10YR6/2	10	南比企産、№26
9	須恵器皿	15.0	1.8		ＢＣＦ	Ⅱ	10YR6/2	20	南比企産、№34
10	須恵器高台埦	(14.0)	6.6	(7.4)	ＦＨＫ	Ⅱ	N5/0	35	南比企産、№13、カマド内覆土
11	須恵器長頸瓶		(8.2)		Ｆ	Ⅱ	N5/0	45	南比企産、３区覆土
12	須恵器甕				ＢＦ	Ⅰ	10Y6/1	－	南比企産、平行叩き、青海波紋、覆土
13	土師器皿	(14.3)	(2.8)		ＢＤＥ	Ⅰ	5YR6/6	10	№10
14	土師器台付甕		(2.9)	(8.8)	ＡＢＥ	Ⅱ	2.5Y6/8	25	４区
15	土師器甕	(19.6)	(6.8)		ＡＢＤＥ	Ⅰ	5YR6/6	10	内面口縁部漆付着、№16と同一か、№56
16	土師器甕	(18.6)	(6.3)		ＡＢＥ	Ⅰ	5YR6/6	25	内外面に漆付着、№６・64・116
17	土師器甕	(21.6)	(7.1)		ＡＢＥ	Ⅰ	2.5Y5/6	25	内外面に漆付着、№19と同一か、№58・61・68
18	土師器甕	(21.0)	(6.3)		ＡＢＥＧ	Ⅰ	5YR6/6	10	№６
19	土師器甕	(21.6)	(10.9)		ＡＢＥ	Ⅰ	2.5Y5/6	15	内外面に漆付着、№17と同一か、№91・95・106
20	土師器甕		(22.5)	4.6	ＡＤＥＨ	Ⅱ	5YR6/6	30	内外面漆付着、№31・32・53・57・67・83・92
21	土錘	長3.4×径1.0			ＡＥ	Ⅱ	10YR8/1	100	床下土壙、穴径2.0mm

第24図　第６号住居跡出土遺物



第25図　第７号住居跡・出土遺物



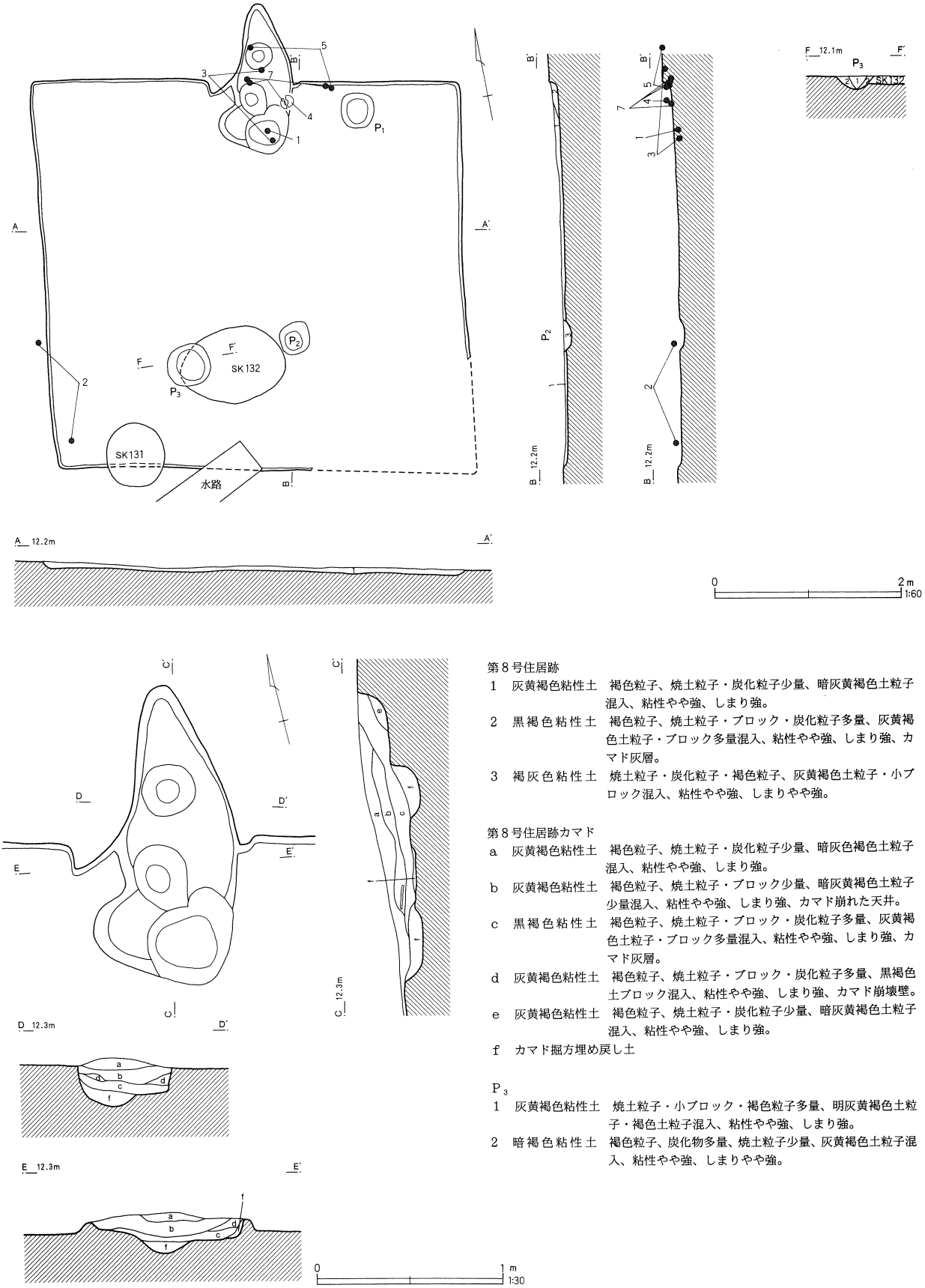
第７号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏	12.4	4.0	5.3	ＣＥＦ	Ⅱ	N6/0	80	南比企産、№７
2	須恵器蓋	12.4	2.2		ＢＥＦ	Ⅰ	N5/0	45	南比企産、床下土壙
3	須恵器蓋	(17.0)	(2.8)		ＥＦ	Ⅲ	10YR7/3	10	南比企産、№１
4	土師器台付甕		(2.2)	9.7	ＢＤＥＧ	Ⅰ	5YR6/6	80	外面粘土シワ明瞭、№９
5	須恵器甕				ＣＦ	Ⅰ	5G5/1	－	南比企産、№８

カマドは東壁の中央に設置されていたものが第53号溝によって完全に破壊されたと考えられる。

貯蔵穴は検出されなかったが、床下土壙が東側の隅付近にあり、楕円形を呈する。規模は0.84 m×0.90 m を測る。床面はほぼ水平で、比較的堅緻であった。柱穴と壁溝は検出されなかった。北側の隅付近に３個

第26図　第８号住居跡・カマド



第８号住居跡

1　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、焼土粒子・炭化粒子少量、暗灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。

2　黒褐色粘性土　褐色粒子、焼土粒子・ブロック・炭化粒子多量、灰黄褐色土粒子・ブロック多量混入、粘性やや強、しまり強、カマド灰層。

3　褐灰色粘性土　焼土粒子・炭化粒子・褐色粒子、灰黄褐色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまりやや強。

第８号住居跡カマド

a　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、焼土粒子・炭化粒子少量、暗灰色褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。

b　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、焼土粒子・ブロック少量、暗灰黄褐色土粒子少量混入、粘性やや強、しまり強、カマド崩れた天井。

c　黒褐色粘性土　褐色粒子、焼土粒子・ブロック・炭化粒子多量、灰黄褐色土粒子・ブロック多量混入、粘性やや強、しまり強、カマド灰層。

d　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、焼土粒子・ブロック・炭化粒子多量、黒褐色土ブロック混入、粘性やや強、しまり強、カマド崩壊壁。

e　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、焼土粒子・炭化粒子少量、暗灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。

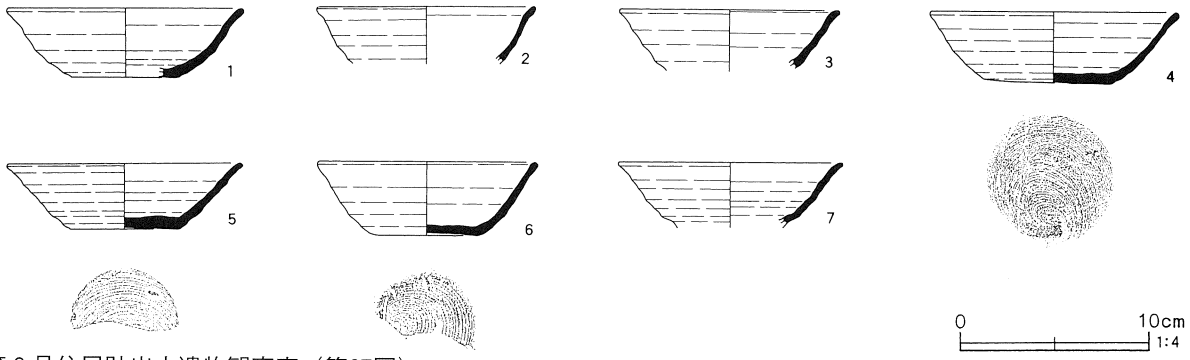
f　カマド掘方埋め戻し土

P_3

1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・小ブロック・褐色粒子多量、明灰黄褐色土粒子・褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。

2　暗褐色粘性土　褐色粒子、炭化物多量、焼土粒子少量、灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまりやや強。

第27図　第８号住居跡出土遺物



第８号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏	12.4	3.6	(5.7)	ＡＥＦＪ	Ⅲ	7.5YR7/6	45	南比企産、№14
2	須恵器坏	(11.4)	(3.0)		ＥＦ	Ⅰ	N5/0	25	南比企産、№27・37
3	須恵器坏	(11.5)	(3.2)		ＥＦ	Ⅱ	5Y6/1	25	南比企産、№11・36、カマド覆土
4	須恵器坏	13.0	3.8	6.4	ＥＦＨ	Ⅲ	10YR8/1	95	南比企産、№13
5	須恵器坏	(12.2)	3.4	5.7	ＦＨ	Ⅲ	2.5Y8/1	30	南比企産、№３・18
6	須恵器坏	(11.4)	3.9	5.2	ＥＦ	Ⅰ	N5/0	30	南比企産、№３・４・６
7	須恵器坏	(11.8)	(3.4)		ＦＨ	Ⅱ	N6/0	30	南比企産№６・７・32・34

のピットが集中しており、直径0.24～0.48ｍ、深さ0.48～0.84ｍを測るが、ピット１同様に後世の掘り込みの可能性が高い。

遺物は南側の床面直上と北側の壁付近から出土している。

１は須恵器坏で、底部は回転糸切り離しされている。２と３は須恵器蓋で、法量の大小がある。４は土師器台付甕の台部である。５は須恵器大甕の体部上半から頚部に至る破片である。外面は平行叩きの後、ナデを加える。内面には無文当て具痕が残る。

遺構の時期は９世紀前半代と考えられる。

第８号住居跡（第26図）

本住居跡はＩ・Ｊ－６グリッド（Ｂ区東端）に位置する。第131号土壙に切られている。平面形は方形を呈する。規模は4.5ｍ×4.1ｍで、深さ0.14ｍである。主軸方向はＮ－21°－Ｅを示す。住居跡の掘り込みは極めて浅いが、壁はほぼ直立する。覆土は灰黄褐色粘性土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

カマドは北壁のやや東よりに設置される。燃焼部は比較的よく焼けている。カマド土層断面の第ｂ層が天井崩壊土で、第ｃ層が灰層である。煙道部は壁を掘り込んで構築される。小さな袖は地山掘り残しである。

貯蔵穴はなかったが、南側に床下土壙（第132号土壙として発番）があり、楕円形を呈し、0.84ｍ×1.08ｍ、深さは0.10ｍを測る。床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴と壁溝は検出されなかった。３個のピットがあり、直径0.36～0.45ｍ、深さ0.09～0.12ｍを測るが、このうち第２・３号ピットは後世の掘り込みであることが明らかになっている。

遺物はカマド燃焼部に比較的集中し、南西側の壁内外からも出土している。

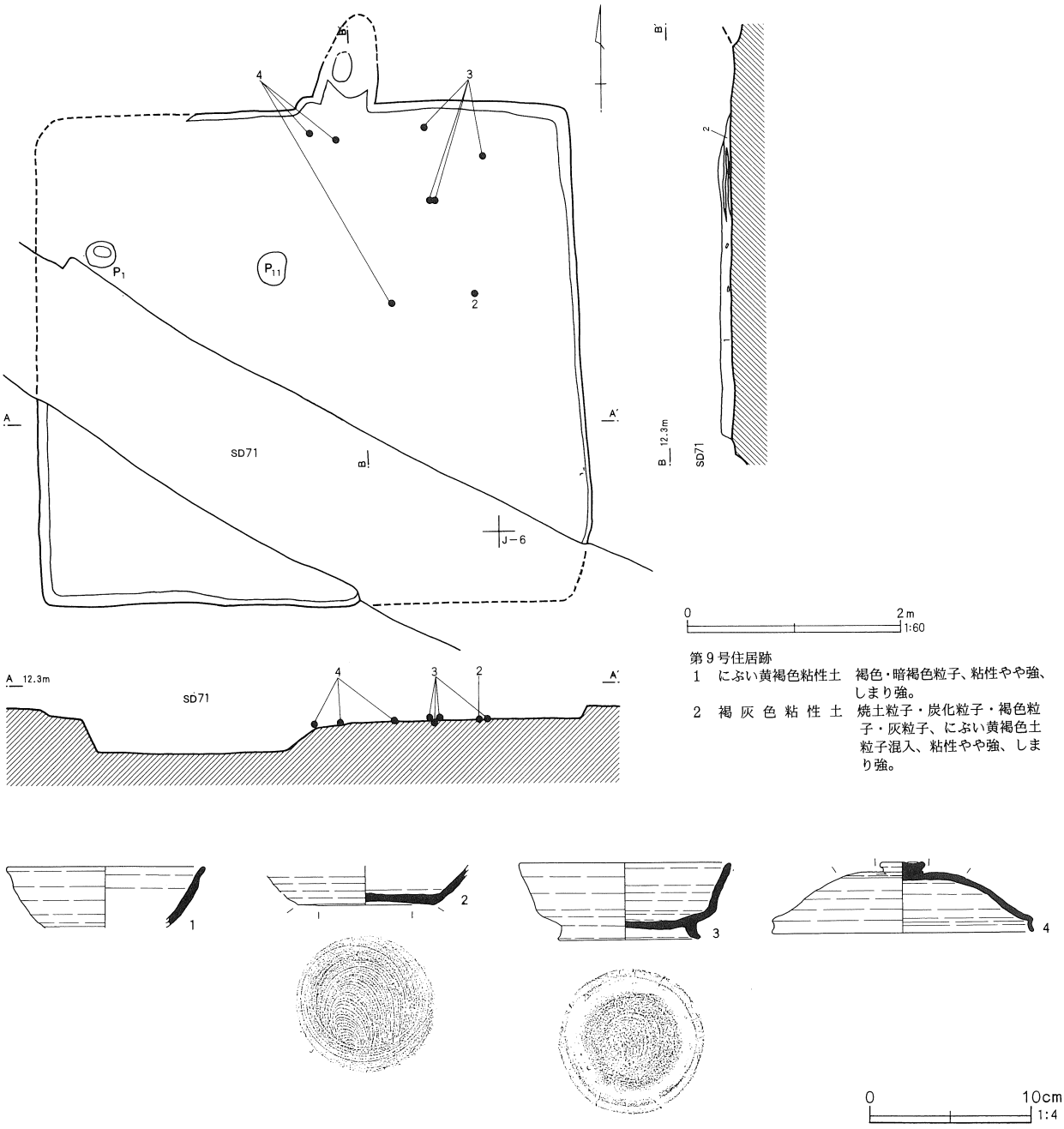
１から７はすべて須恵器坏で、南比企産であるが、器形的には体部が直線的に開くもの（5・6）と口縁部が外反するもの（1～４・7）とがある。底部の残存するものはみな回転糸切り離しが行われている。後者のうち４を除く４個体は底部の小型化が看取される。

遺構の時期は９世紀前半から中葉にかかる時期と考えられる。

第９号住居跡（第28図）

本住居跡はＩ・Ｊ－５・６グリッド（Ｂ区東部）に位置する。新旧関係は第71号溝に切られている。平面形は方形を呈する。規模は5.1ｍ×4.5ｍで、深さ0.12ｍである。主軸方向はＮ－０°－Ｗを示

第28図　第９号住居跡・出土遺物



第９号住居跡出土遺物観察表（第28図）

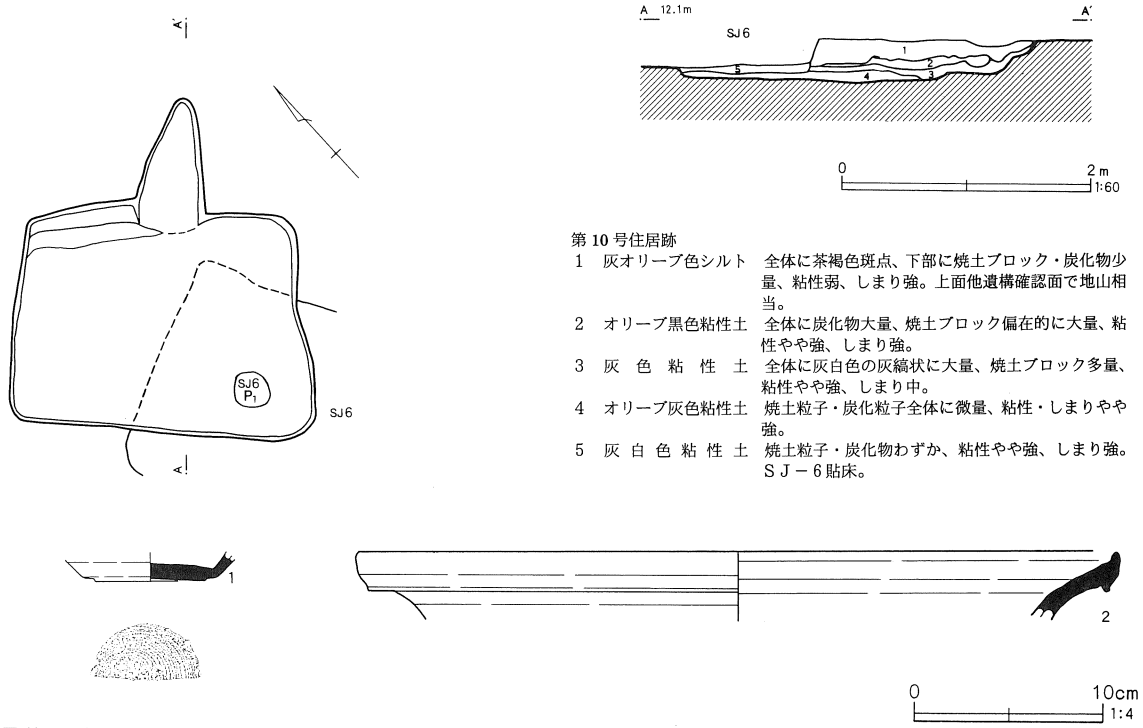
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏	(12.0)	(3.7)		ＢＦＫ	Ⅰ	N6/0	10	南比企産、№5
2	須恵器坏		(2.4)	8.4	ＣＥＦ	Ⅰ	N5/0	70	南比企産、周辺ヘラ削り、№4
3	須恵器高台坏	12.9	4.8	8.5	ＢＥＦ	Ⅰ	N5/0	95	南比企産、№1・2・3・4
4	須恵器蓋	(15.8)	4.3		ＥＦ	Ⅱ	N4/0	40	南比企産、№6・8・9

す。住居跡の掘り込みは浅いが、壁はほぼ直立する。覆土はにぶい黄褐色粘性土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

カマドは北壁のやや東よりに設置される。焚口のみが残存し、燃焼部から先は削平されていた。袖は地山掘り残しである。

貯蔵穴はなかった。床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴と壁溝は検出されなかった。

第29図　第10号住居跡・出土遺物



第 10 号住居跡

1　灰オリーブ色シルト　全体に茶褐色斑点、下部に焼土ブロック・炭化物少量、粘性弱、しまり強。上面他遺構確認面で地山相当。

2　オリーブ黒色粘性土　全体に炭化物大量、焼土ブロック偏在的に大量、粘性やや強、しまり強。

3　灰色粘性土　全体に灰白色の灰縞状に大量、焼土ブロック多量、粘性やや強、しまり中。

4　オリーブ灰色粘性土　焼土粒子・炭化粒子全体に微量、粘性・しまりやや強。

5　灰白色粘性土　焼土粒子・炭化物わずか、粘性やや強、しまり強。ＳＪ－６貼床。

第10号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏		(1.5)	5.8	ＢＦ	Ⅰ	10Y6/1	35	南比企産、竪穴部
2	須恵器甕	(40.0)	(3.5)		ＢＥＦ	Ⅱ	10YR4/1	10	南比企産

遺物はカマド前面の床面に比較的集中して出土している。

１は須恵器坏で、口縁部外側が窪む特徴を持っている。２は底径の大きな須恵器坏で、回転糸切り離し後、周辺部の回転ヘラケズリを施している。３は須恵器高台付坏で、腰が張ってから体部が直線的に立ち上がる。底部を回転糸切り離し後、周辺部のヘラケズリを行って、高台を貼り付けている。４は須恵器蓋で、シャープな作りである。

遺構の時期は８世紀第３四半期と考えられる。

第 10 号住居跡（第 29 図）

本住居跡は Ｈ－15 グリッド（Ａ区東部）に位置する。確認面でプランが把握できないため、第１号テストグリッドを設定し、0.3 m 掘り下げてから調査を行った。新旧関係は重複する第６号住居跡より古い。平面形は隅丸方形を呈する。規模は2.4 m×1.8 m で、深さ0.34 m である。主軸方向は Ｎ－42°－Ｅを示す。住居跡の掘り込みはやや深く、壁はほぼ直立する。覆土は灰オリーブ色のシルト質土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

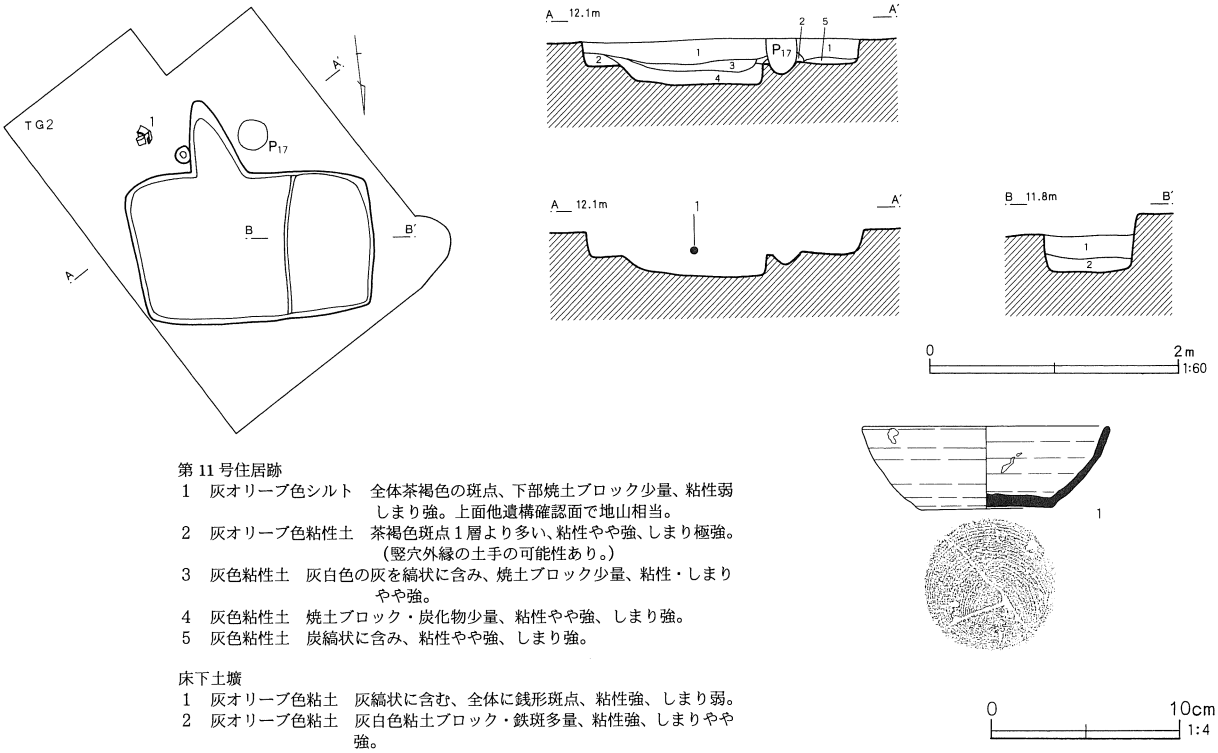
カマドは北壁のやや東よりに設置される。燃焼部は比較的よく焼けている。カマド土層断面の第２層が天井崩壊土で、第３層が灰層である。煙道部は壁を掘り込んで構築される。小さな袖は地山掘り残しである。

床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴、壁溝及び貯蔵穴は検出されなかった。当初小規模な釜屋かとも考えたが、カマド廻りを一段低い土間とする通常の大きさの竪穴住居となる可能性も考えられる。残念ながら、全体の構造は明らかにしえなかった。

遺物は覆土中から甕片が、竪穴床面付近から坏片が出土している。

１は須恵器坏片で、底部は回転糸切り離しである。体部の立上り方が直線的で、内底部外周が窪む特徴を持っている。２は須恵器大甕の口縁部で、復元口径は40.4 cmである。口縁端部は上下に拡張されている。

第30図　第11号住居跡・出土遺物



第 11 号住居跡
1　灰オリーブ色シルト　全体茶褐色の斑点、下部焼土ブロック少量、粘性弱しまり強。上面他遺構確認面で地山相当。
2　灰オリーブ色粘性土　茶褐色斑点１層より多い、粘性やや強、しまり極強。（竪穴外縁の土手の可能性あり。）
3　灰色粘性土　灰白色の灰を縞状に含み、焼土ブロック少量、粘性・しまりやや強。
4　灰色粘性土　焼土ブロック・炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
5　灰色粘性土　炭縞状に含み、粘性やや強、しまり強。

床下土壙
1　灰オリーブ色粘土　灰縞状に含む、全体に銭形斑点、粘性強、しまり弱。
2　灰オリーブ色粘土　灰白色粘土ブロック・鉄斑多量、粘性強、しまりやや強。

第11号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏	13.0	4.4	6.9	ＥＦＨ	Ⅲ	10Y6/3	100	南比企産、№1

１と２はともに南比企産である。

遺構の時期は９世紀初頭と考えられる。

第 11 号住居跡（第 30 図）

本住居跡は G－15 グリッド（A１区東部）に位置する。確認面でプランが把握できないため、第２号テストグリッドを設定し、0.24 m 掘り下げてから調査を行った。新旧関係は第 50 号土壙に切られている。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は 1.9 m× 1.2 m で、深さ 0.34 m である。主軸方向は N－178°－E を示す。住居跡の掘り込みはやや深く、壁はほぼ直立する。また、土層断面では、立上り部上端に接する外側に周堤帯らしきものが確認されている。覆土は灰オリーブ色のシルト質土で、地山との差異は僅かであり、洪水による埋没と考えられる。

カマドは南壁のやや東よりに設置される。燃焼部は比較的よく焼けている。煙道部は壁を掘り込んで構築される。

住居に付帯する土壙がカマドの西側に位置し、長方形を呈する。規模は 1.14 m× 0.69 m、深さ 0.3 m を測る。覆土には灰が縞状に含まれ、カマドの灰捨て穴と考えられる。床面はほぼ水平で、比較的堅緻である。柱穴と壁溝は検出されなかった。規模が小さい点では第 10 号住居と同じ事が考えられようが、カマドの方位も特異であり着目される。

遺物は完形の須恵器坏が竪穴外部のカマド付近から出土しており、上屋の範囲が竪穴より大きかったことを示唆している。

１は淡褐色を呈する須恵器坏で、完形品である。やや大型で、体部は内湾する。底部は回転糸切り離しである。内外面に炭化物が付着している。南比企産である。第６号住居出土品の内、古相の認められた１と近似する。

遺構の時期は９世紀第１四半期と考えられる。

2　掘立柱建物跡・柵列・門

（1）掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第31図）

Ｅ－８・９グリッド（Ａ３区中央部）に位置する。三間三間の側柱建物で、北・東・南の三面に廂が付く。桁行方位はＮ－23°－Ｅである。母屋は桁行4.64ｍ、梁行4.80ｍを測る。柱間は西側では北から、1.18ｍ、1.68ｍ、1.92ｍで均等でない。同様に北側でも西から2.00ｍ、1.44ｍ、1.44ｍと不揃いである。東側の間柱の穴は１個失われている。廂柱は北と東では0.8ｍ外側に配され、東辺では、柱間は北から1.60ｍ、1.92ｍ、1.92ｍである。南側の廂柱は部分的にしか残存しておらず、図に加えなかったが、ピット139・387・197・196が該当し、母屋の0.96ｍ外側に配されている。下屋を加えた規模は桁行5.52ｍ、梁行5.60ｍとなる。全体のプランはほぼ正方形をなし、隅はすべて直角が保たれている。

第2号掘立柱建物跡（第32図）

Ｅ－９グリッド（Ａ３区中央部）に位置する。二間三間の総柱建物で、桁行方位はＮ－27°－Ｅである。桁行5.52ｍ、梁行5.60ｍを測る。柱間は西側では北から、0.96ｍ、2.48ｍ、2.16ｍで均等でない。北側、東側、南側では間柱の穴が失われている。南北中心軸を通る束柱であるＰ１とＰ２が棟持柱を兼ねている可能性があり、その場合、南北梁行の建物となり、東側が表となる。束柱と側柱が連携せず別系統となる点から、床貼りはＰ１からＰ４の４本の柱で囲まれる東西2.8ｍ、南北3.0ｍの範囲に限定され、他は土間であった可能性が考えられる。全体のプランは、ほぼ正方形をなし、南側では隅が直角を保つが、北西と北東の隅では僅かにぶれが生じている。

第3号掘立柱建物跡（第33図）

Ｄ・Ｅ－８・９、Ｆ－９グリッド（Ａ３区中央部）に位置する。桁行9.12ｍ、梁行9.68ｍを測る。五間五間の中抜け総柱建物で、桁行方位はＮ－24°－Ｅである。柱間はＰ６とＰ５間で1.92ｍ、Ｐ10とＰ11間で1.84ｍと長さ一間前後で若干の幅があるとみられる。間柱は北側では１個所を除いて残っているが、他では撹乱と削平によって多くが失われている。Ｐ２とＰ３が棟持柱を兼ねた束柱と推測され、床貼りの範囲も東側の二間五間の範囲に限定され、西側三間五間は土間であった可能性が考えられる。第34号土壙はこの土間に伴うと見られ、作業場か台所であったと思われる。残存状態が悪く、カマドまたは囲炉裏の痕跡は明らかではなかった。全体のプランは、ほぼ正方形をなし、隅はすべて直角が保たれている。

第4号掘立柱建物跡（第34図）

Ｄ－９、Ｅ－８・９グリッド（Ａ３区中央やや北）に位置する。一間三間の細長い建物で、桁行2.48ｍ、梁行を8.00ｍ測る。梁行方位はＮ－28°－Ｅである。柱間はＰ５とＰ４間で2.48ｍ、Ｐ５とＰ６の間そしてＰ６とＰ７間でも2.48ｍで、長さ８尺を基本としているようであるが、北側の梁間のみ3.04ｍあり、長さ一丈に合致する。

第5号掘立柱建物跡（第35図）

Ｃ－10・11グリッド（Ａ４区南部）に位置する。二間三間の側柱建物で、梁行5.44ｍ、桁行3.56ｍを測る。梁行方位はＮ－57°－Ｅを測る。柱間は妻側となる西側でＰ13とＰ９間およびＰ９とＰ７間で均しく1.78ｍ、平側の表である東側ではＰ１とＰ３間で2.0ｍ、Ｐ３とＰ６間で1.78ｍ、Ｐ６とＰ７間で1.60ｍである。西側には間柱が１本しかなく、２柱間は均しく2.56ｍと少し長くなる。他の小ピットは壁構造と関係するものであろう。南妻側には布掘りの区間を伴っている。

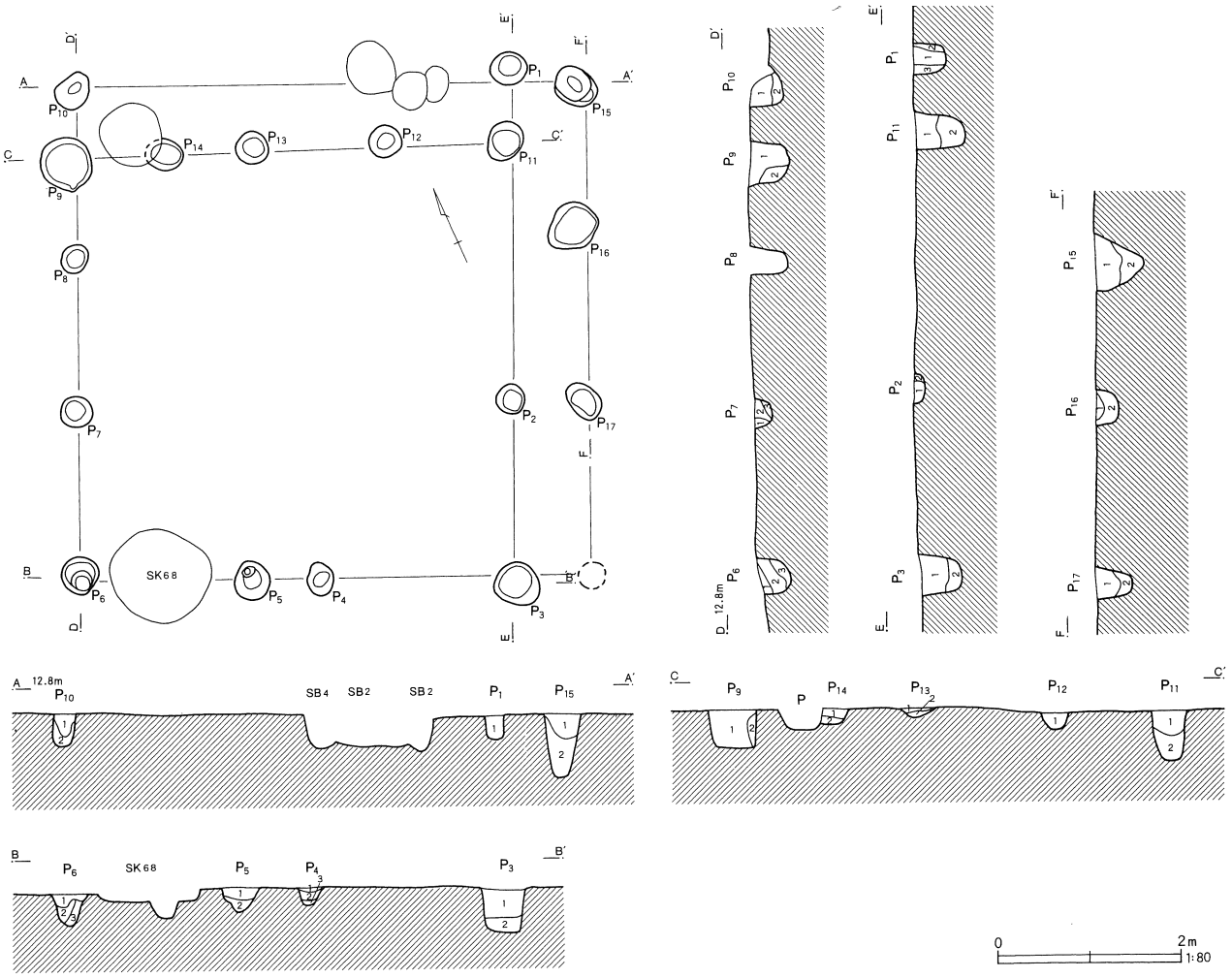
全体のプランは少しひしゃげた長方形を呈する。

（2）塀・柵列

第1号塀・柵列（第36図）

Ｃ－10・11グリッド（Ａ３区中央部）に位置する。掘立柱建物群の占地する小高い丘を取り囲んで北、

第31図　第１号掘立柱建物跡



第１号掘立柱建物跡　Ａ－Ａ´

P_1
1　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。

P_{10}
1　灰色粘性土　粘土ブロック斑点状、炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　１より暗く、焼土・炭化物含まず、粘性やや強、しまり中。

P_{15}
1　灰色粘性土　粘土ブロック斑点状、炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　１より暗く、焼土・炭化物含まず、粘性やや強、しまり中。

第１号掘立柱建物跡　Ｂ－Ｂ´

P_3
1　灰色シルト　焼土粒子、粘性中、しまり強。
2　灰色粘性土　焼土粒子、粘性やや強、しまり強。

P_4
1　灰色シルト　焼土粒子、粘性中、しまり強。
2　灰色シルト　黒色粘土ブロック多量。
3　灰色粘性土　焼土粒子、粘性やや強、しまり強。

P_5
1　灰色シルト　焼土粒子、粘性中、しまり強。
2　灰色粘性土　焼土粒子、粘性やや強、しまり強。

P_6
1　オリーブ黄色土　粘性中、しまり強。
2　オリーブ黒色粘性土　焼土粒子、粘性・しまりやや強。
3　灰色粘性土　粘土ブロック、粘性やや強、しまり強。

第１号掘立柱建物跡　Ｃ－Ｃ´

P_9
1　灰色粘性土　粘土ブロック斑点状、炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　焼土粒子、粘性やや強、しまり強。

P_{11}
1　オリーブ黒色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強。

P_{12}
1　オリーブ黒色粘性土　灰白色シルトブロック、粘性やや強、しまり強。

P_{13}
1　灰色シルト　焼土粒子、粘性弱、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。

P_{14}
1　灰色シルト　焼土粒子、粘性弱、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。

第１号掘立柱建物跡　Ｄ－Ｄ´

P_6
1　オリーブ黄色土　粘性中、しまり強。
2　オリーブ黒色粘性土　焼土粒子、粘性・しまりやや強。
3　灰色粘性土　粘土ブロック、粘性やや強、しまり強。

P_7
1　オリーブ黒色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰色シルト　鉄斑全体、焼土粒子少量、粘性中、しまり強。
3　灰色シルト　鉄斑全体、粘性中、しまり強。

P_9
1　灰色粘性土　粘土ブロック斑点状、炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　焼土粒子、粘性やや強、しまり強。

P_{10}
1　灰色粘性土　粘土ブロック斑点状、炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　１より暗く、焼土・炭化物含まず、粘性やや強、しまり中。

第１号掘立柱建物跡　Ｅ－Ｅ´

P_1
1　灰色粘性土　粘土ブロック斑点状、炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　焼土粒子、粘性やや強、しまり強。
3　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。

P_2
1　灰オリーブ色シルト　粘性中、しまり強。
2　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり極強。

P_3
1　灰色シルト　焼土粒子、粘性中、しまり強。
2　灰色粘性土　焼土粒子、粘性やや強、しまり強。

P_{11}
1　オリーブ黒色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強。

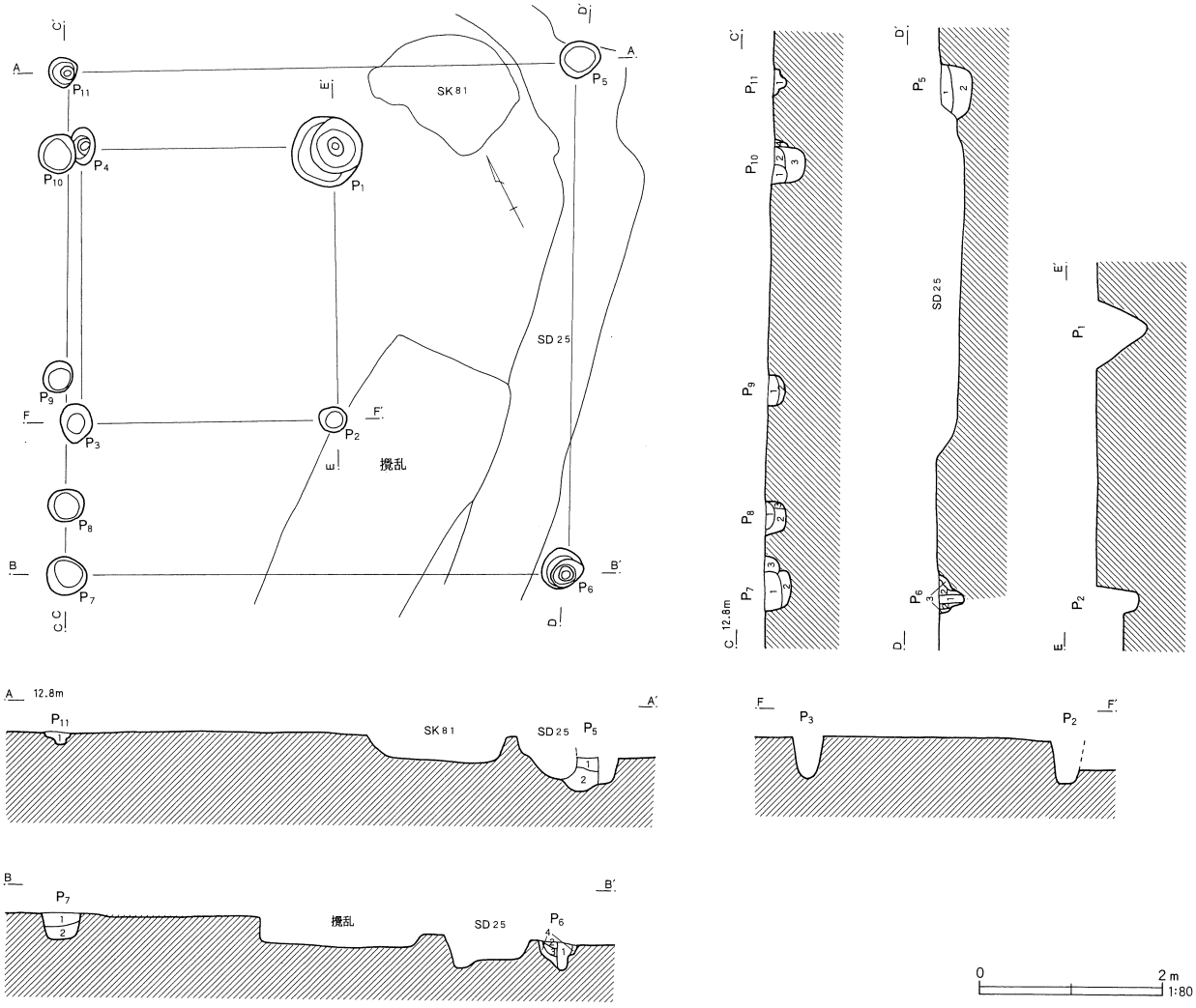
第１号掘立柱建物跡　Ｆ－Ｆ´

P_{15}
1　灰色粘性土　粘土ブロック斑点状、炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　１より暗く、焼土・炭化物含まず、粘性やや強、しまり中。

P_{16}
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強。

P_{17}
1　灰オリーブ色シルト　オリーブ黒色粘性土ブロック、粘性弱、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性やや強、しまり強。

第32図　第２号掘立柱建物跡



第２号掘立柱建物跡　Ａ－Ａ´
P_5
1　灰色粘性土　粘土ブロック多量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。
P_{11}
1　灰オリーブ色土　粘土ブロック、焼土粒子、粘性中、しまり強。

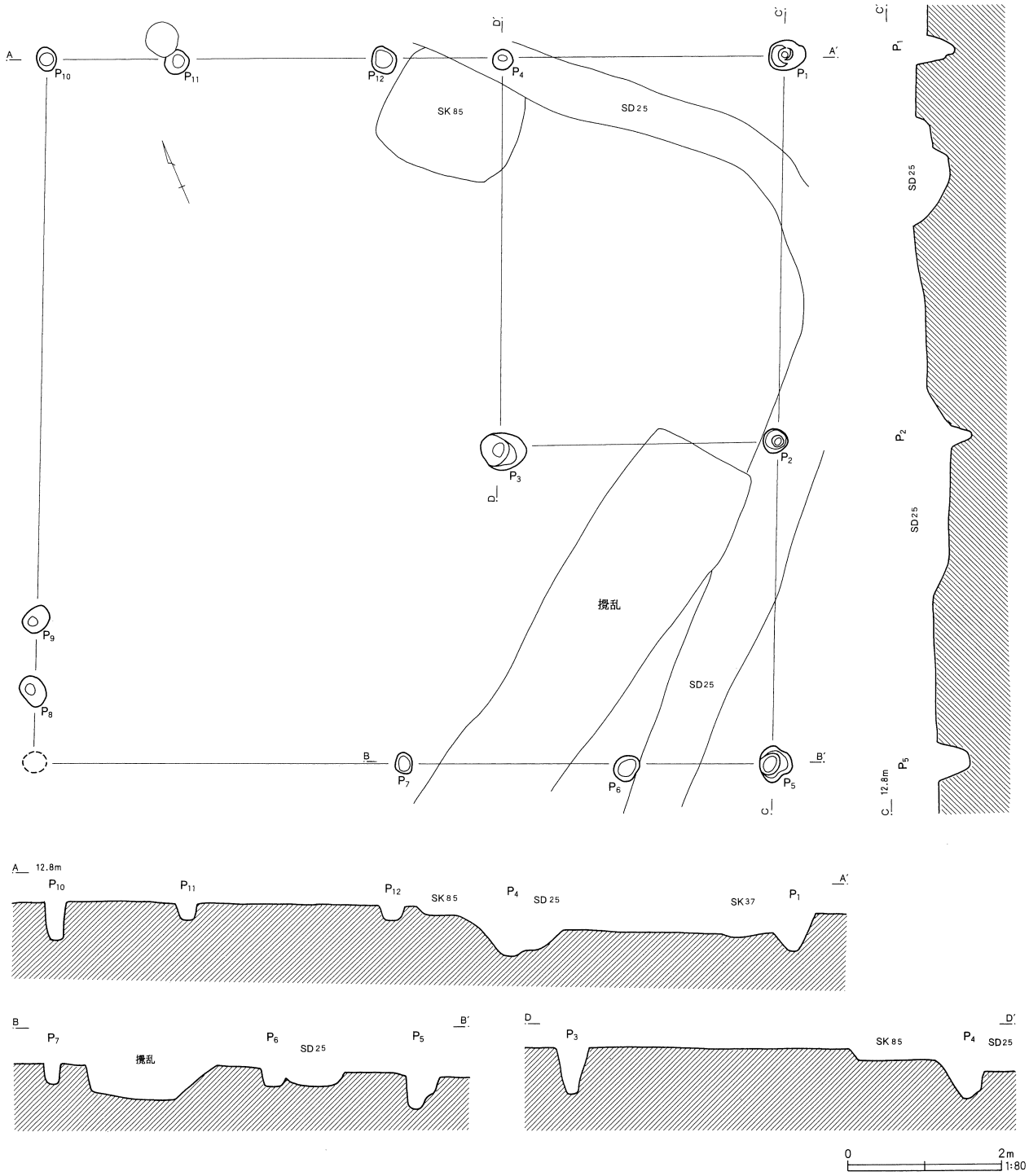
第２号掘立柱建物跡　Ｂ－Ｂ´
P_6
1　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。
2　オリーブ黄色シルト　灰色粘土ブロック・焼土粒子、粘性弱、しまり強。
3　オリーブ黄色シルト　粘土ブロック・焼土粒子少量、粘性弱、しまりやや強。
4　浅黄色粘性土　粘性やや強、しまりやや強。
P_7
1　灰オリーブ色土　粘土ブロック、焼土粒子、粘性中、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。

第２号掘立柱建物跡　Ｄ－Ｄ´
P_7
1　灰オリーブ色土　粘土ブロック、焼土粒子、粘性中、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。
3　オリーブ黒色粘性土　粘土ブロック、焼土粒子、粘性やや強、しまり強。

第２号掘立柱建物跡　Ｄ－Ｄ´
P_8
1　灰オリーブ色土　粘土ブロック、焼土粒子、粘性中、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。
3　灰オリーブ色土　粘性中、しまり極強、掘方埋戻し土。
P_9
1　オリーブ黒色粘性土　粘土ブロック、焼土粒子、粘性やや強、しまり強。
2　オリーブ黒色粘性土　粘性やや強、しまり中。
P_{10}
1　灰オリーブ色土　粘土ブロック多量、粘性中、しまり強。
2　灰オリーブ色土　粘土ブロック、焼土粒子、粘性中、しまり強。
3　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。
4　灰オリーブ色土　粘性中、しまり極強、掘方埋戻し土。
P_{11}
1　灰オリーブ色土　粘土ブロック、焼土粒子、粘性中、しまり強。

第２号掘立柱建物跡　Ｅ－Ｅ´
P_5
1　灰色粘性土　粘土ブロック多量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。
P_6
1　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。
2　オリーブ黄色シルト　灰色粘土ブロック・焼土粒子、粘性弱、しまり強。
3　オリーブ黄色シルト　粘土ブロック・焼土粒子少量、粘性弱、しまりやや強。

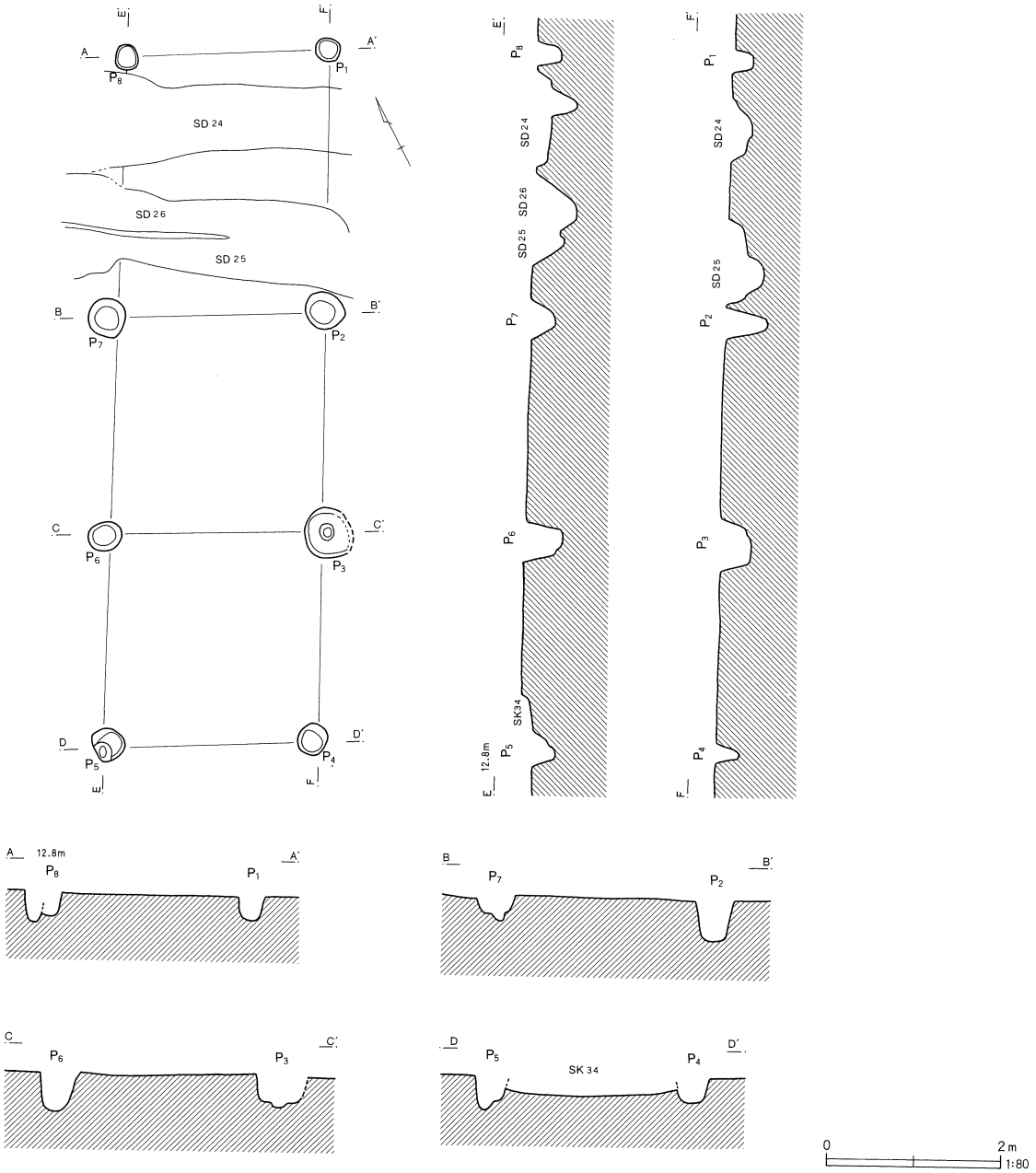
第33図　第３号掘建柱建物跡



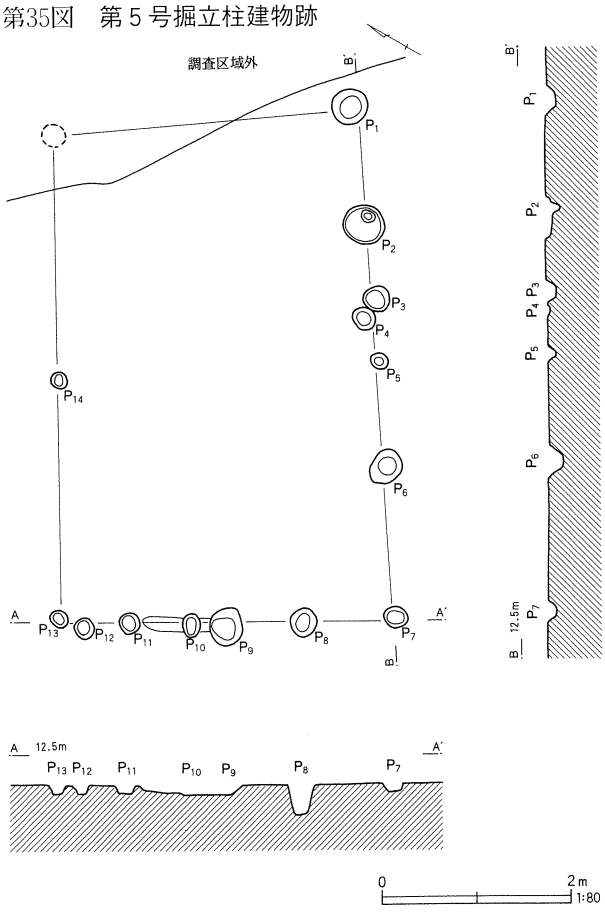
東、南の３面が検出された。西側は調査区外に延びていて、不明である。塀は南側の隅角を基点として造られており、芯柱、外柱、内柱の３本がセットになり、平行して直線上に並ぶ。塀の厚さは東側では0.80 m、南側では0.72 m ある。

塀の並びは東側では５柱間分合計18個の柱穴が検出され、外柱列の総延長で11.68m を測る。走向はN－27°－E である。柱間は外柱列のＰ32からＰ37までがすべて2.40m、内柱列のＰ３・Ｐ４・Ｐ５間でも2.40 mを測り、８尺が基準となっている。柱穴の直径は0.24 cmから0.40 cmほどで大きい差はないが、深さは0.16 cmから0.64 cmと差が大きい。し

第34図　第４号掘立柱建物跡



第35図　第５号掘立柱建物跡



かし、これは掘り込み面からの計測であり、底面の標高はほぼ一定している。このため、現状では北側のＰ27付近で標高12.7ｍ、南側のＰ37付近で標高11.9ｍという北高南低の傾斜は後世の侵食が作り出した可能性が高いと判断される。

南端の隅角はほぼ90°あり、西側へ２柱間分検出された。柱間は外柱であるＰ37・Ｐ38間で1.76ｍ、内柱であるＰ６・Ｐ７間で2.00ｍと不統一であり、少し離れてＰ８とＰ18が存在する。これは恐らく、塀の作り直しを示すものであり、6.4ｍ西側にある門跡と関係しよう。門が新設または作り直しされた際に、その門への塀の取り付きを図るために塀が作り直された可能性が考えられる。門より西側では遺構覆土内へ柱穴が掘り込まれていたため、確認が困難で、塀の柱の並びを確認することができなかった。しかし、門の存在からすれば、塀が西側に延びていたことは間違いないと思われる。

北側は単列の柵列であり、Ｐ31に東側の塀が取り付くと考えられる。塀と柵のなす角度は正確に直角が保たれている。柵列はここから西側に5.68ｍ直進するが、柱間はＰ29・Ｐ30間が1.76ｍなので、３柱間分となろう。Ｐ29では北側に向きを転じ、２柱間分が1.20ｍ間隔で設置されている。Ｐ27では再び向きを西側に転じて、４柱間分延長7.60ｍが確認できた。柱間は不統一であるが、２ｍを超えるのはＰ25・Ｐ26間のみで、この柱間2.56ｍは南側の門の柱間と一致する。また、位置的にも門の真裏に当たっているので、簡単な開閉装置のある裏門であった可能性を考えても誤りないだろう。柱穴の規模は直径0.50㎝、深さ0.50ｍから0.60ｍのものが多く、塀の柱穴よりも一回り大きかった。なお、柵列の折れ部分は北東角にあっているので、鬼門除けの意図があったと推定している。

第２号柵列

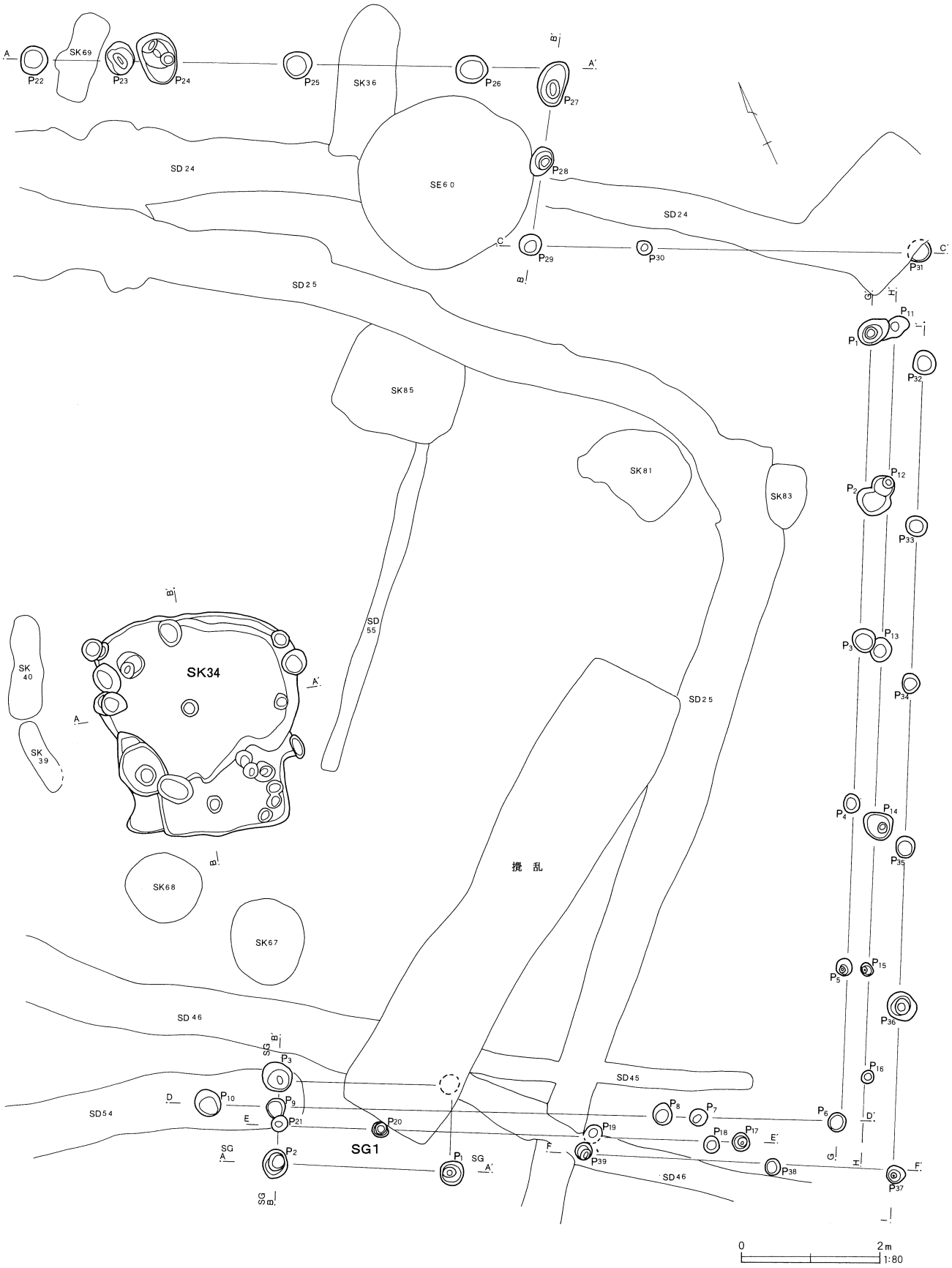
Ｈ－４・５グリッド（Ｂ区北部）に位置する。５本４柱間分が一直線上に乗り、延長距離14.00ｍを図る。走向はＮ－89°－Ｅである。柱間は西側から、3.5ｍ、3.5ｍ、3.6ｍ、3.4ｍである。柱穴の規模は直径0.40ｍ、深さ0.50ｍ前後である。

（３）門

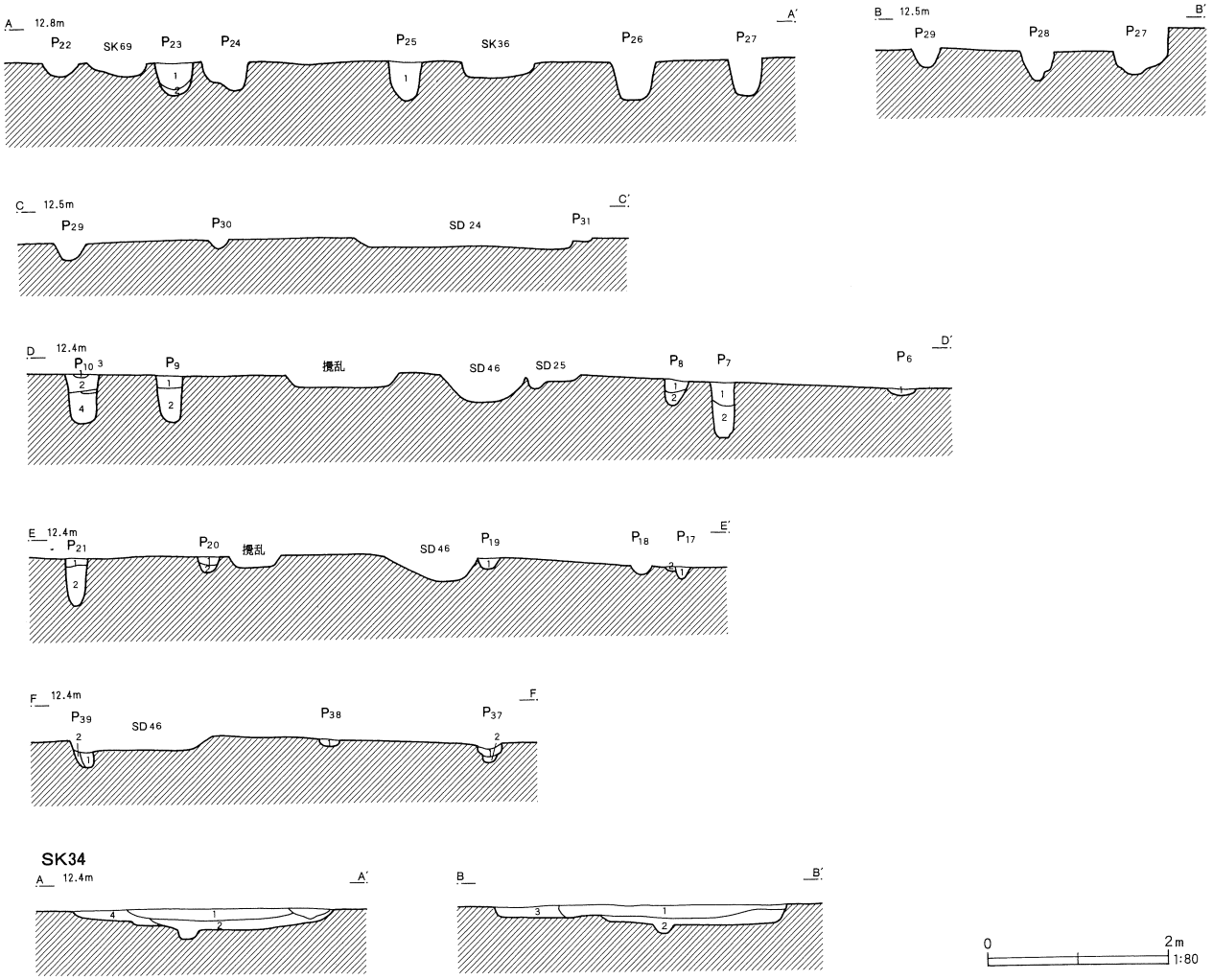
第１号門（第36図）

Ｃ－10・11グリッド（Ａ３区中央やや南）に位置する。第１号塀・柵列の南側の塀に取り付く四脚門である。梁行柱間2.56ｍ、桁行柱間1.20ｍを測る。西側の妻上には塀の内柱と芯柱の柱穴であるＰ９とＰ21がある。西側の外柱と東側の３個の柱穴は失われたものと見られる。門のプラン内に塀の芯柱Ｐ20があることは、門が当初からの設置ではなく、後で付加されたことを示す可能性がある。門の柱穴の規模は直径0.40ｍから0.50ｍ、深さは確認面からの計測で、0.24ｍから0.36ｍであるが、表土が侵食されて浅くなっている可能性が高い。幅４尺の扉が観音開きとなる櫓門であった可能性が考えられよう。

第36図　第１号柵列・第１号門・第34号土壙(1)



第37図　第１号柵列・第１号門・第34号土壙(2)



第１号柵列　Ａ－Ａ´

P_{23}
1　灰オリーブ色粘性土　灰白色粘土ブロック斑点状、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘土　粘性強、しまりやや強。

P_{25}
1　オリーブ黒色粘性土　浅黄色シルトブロック斑点状、粘性やや強、しまり強。

Ｄ－Ｄ´

P_{6}
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり中。

P_{7}
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり強。
2　灰オリーブ色砂質土　粘性弱、しまり中。

P_{8}
1　灰オリーブ色粘性土　シルト、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。

P_{9}
1　灰オリーブ色シルト　炭化物、粘性弱、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。

P_{10}
1　灰色粘性土　焼土ブロック、粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子、粘性やや強、しまり強。
3　焼土ブロック。
4　灰色粘性土　炭化物、粘性・しまりやや強。

Ｅ－Ｅ´

P_{17}
1　オリーブ黒色粘性土　シルト粒子・焼土粒子、粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色シルト　炭化物、粘性弱、しまり強。

Ｄ－Ｄ´

P_{19}
1　灰オリーブ色シルト　焼土粒子・炭化物、粘性弱、しまり強。

P_{20}
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。

P_{21}
1　オリーブ黒色粘性土　焼土ブロック、粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強。

Ｆ－Ｆ´

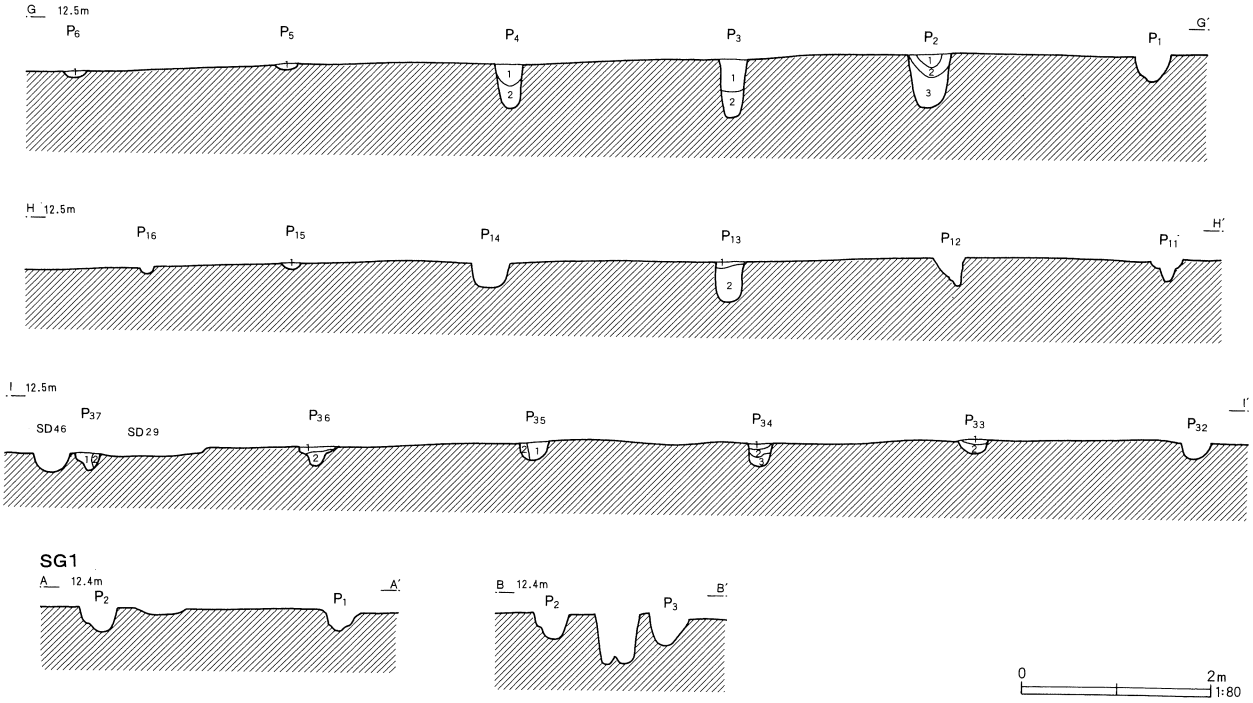
P_{37}
1　オリーブ黒色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰色砂質土　粘性弱、しまり中。

P_{38}
1　灰色シルト　焼土ブロック、粘性弱、しまり強。

P_{39}
1　オリーブ黒色粘土　粘性強、しまり中。
2　灰オリーブ色粘土　粘性強、しまりやや強。

第34号土壙
1　にぶい黄色土シルト　鉄斑あり、焼土粒子、黄色粒子ブロック少量、粘性中、しまりやや強。
2　暗灰黄色粘土　鉄斑あり、焼土粒子、黄色粒子ブロック少量、粘性・しまりやや強。
3　オリーブ黄色粘土　鉄斑あり、焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
4　灰オリーブシルト　鉄斑あり、淡黄色粒子ブロック多量、炭化物少量、粘性中、しまりやや強。

第38図　第１号柵列・第１号門・第34号土壙(3)



G－G´
P_2
1　オリーブ黒色粘性土　灰白色シルトブロック斑点状、焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強。
3　灰色粘性土　粘性やや強、しまり中。
P_3
1　灰色粘性土　灰白色シルトブロック多量、炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色シルト　粘性・しまり中。
P_4
1　灰色シルト　灰白色シルトブロック斑点状、粘性中、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。
P_5
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまりやや強。
P_6
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり中。

H－H´
P_{13}
1　灰色粘性土　灰白シルトブロック斑点状、粘性やや強、しまり中。
2　灰色シルト　粘性中、しまりやや強。
P_{15}
1　灰オリーブ色シルト　炭化物、粘性弱、しまり強。

I－I´
P_{33}
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり強。
2　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまりやや強。
P_{34}
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり強。
2　灰色粘性土　シルト質・炭化物、粘性・しまりやや強。
3　灰オリーブ色砂質土　粘性弱、しまり中。
P_{35}
1　灰色粘性土　浅黄色粘土ブロック斑点状、焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり強。
P_{36}
1　灰色シルト　鉄斑・焼土粒子、粘性弱、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。
P_{37}
1　オリーブ黒色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰色砂質土　粘性弱、しまり中。

3　溝

（1）古代の溝

第11号溝（第42図）

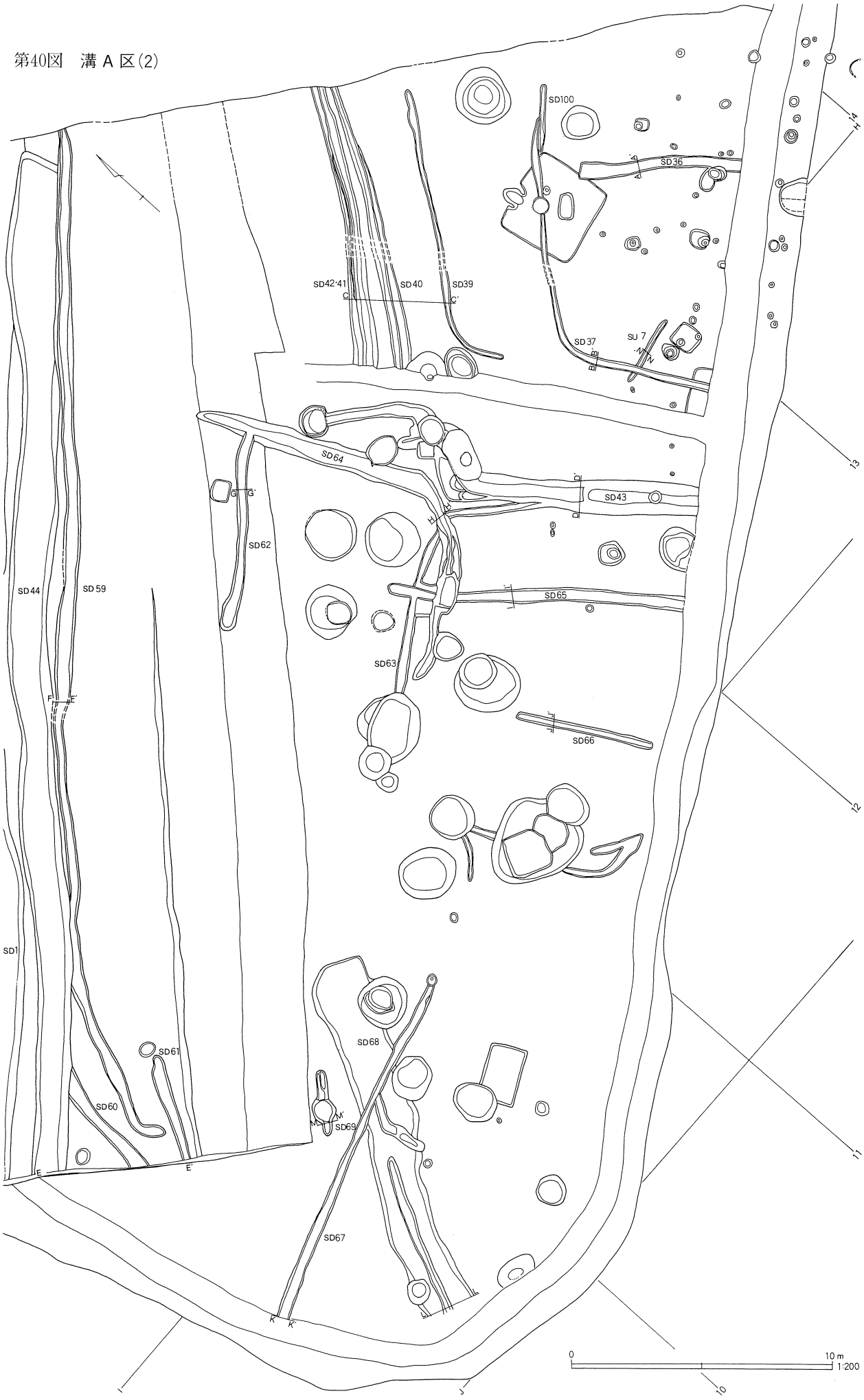
B－10、C－10・11グリッド（A４区中央部）に位置する。全長17.8 m、幅1.74 m、深さ0.54 mを測る。断面形はU字形である。第５号掘立柱建物と第13号土壙に切られている。覆土上層は褐灰色シルト質粘土、下層はオリーブ褐色シルト質粘土で、しまりが強かった。遺物は古代の物を多く含み、後世の撹乱混入品は僅かであった。

１は南比企産の須恵器坏である。２も同じく南比企産の須恵器坏であるが、底部は回転糸切り離しが行われている。３は南比企産の須恵器高台付埦である。回転糸切り離し後、高台を付けている。４は南比企産の須恵器長頸瓶である。図示できなかった他の遺物に、須恵器甕片1055 g、土師器甕片643 gなどがある。遺構の年代は９世紀前半代と考えられる。

第39図　溝 A 区(1)

SD 1
SD9
SD17
SD19
SD 4
SD13a
SE 5
P49
SD 13b
SK23
SE1
SJ 2
SK53
P45
SK11
P47
SD12
SK10
SD10
SD101
SE 3
SE14
SK54
SK55
SK61
P53
SJ 6
SE16
SJ 10
SJ11
SU5
SD 38
SU 4
SU 6
SK49
SE7
SK48
SE 8
SK45
SK47
SK 50
SU 3
SU 1
SU 2
SE11
SK46
SK 51
SD34
SE 9
SK52
0
10 m
1:200

第40図　溝Ａ区(2)


SD100
SD36
SD42·41
SD40
SD39
SD37
SU 7
SD64
SD43
SD62
SD44
SD59
SD65
SD63
SD66
SD1
SD68
SD61
SD60
SD69
SD67
14
13
12
11
10
0
10 m
1:200

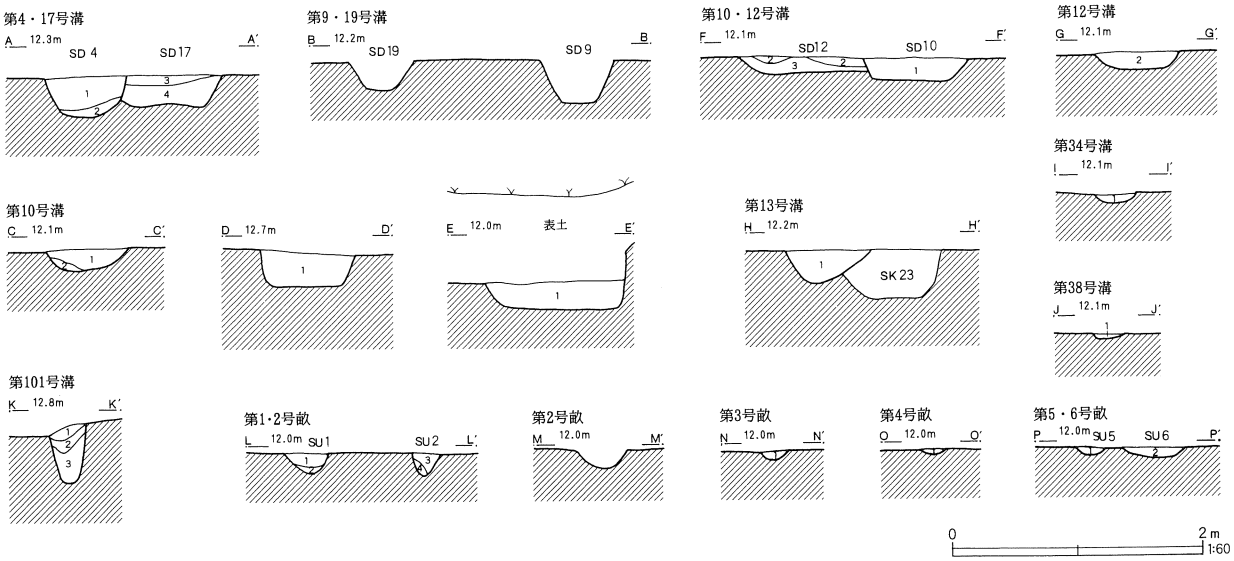
第41図　溝 A 区(3)

SD30
SD32
SD28
SD3
SD56
SD24
SD29
SD55
SD25
SD35
SD1
SD45
SD46
SD54
SD47
SD48
SD50
SD49
SD25
0
10m
1:200

第42図　溝 A 区(4)

13
14
12
11
10
A
B
C
D
SD 5
SD14
SD70
SD16
SD 6
SD 7
SD15
SD 3
SD35
SD 8
SD 11
SD58
SD53
SD57
SD 53
SD52
SD33
0
10 m
1:200

第43図　溝A区(5)



第4・17号溝　A－A′
1　黄灰色シルト　粘性中、しまり中。
2　黄灰色シルト　粘性中、しまりやや強。
3　灰色シルト　粘性中、しまり中。
4　灰色砂質シルト　粘性中、しまり中。

第10号溝　C－C′　D－D′　E－E′
1　灰色粘性土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ粘性　灰色粘性土多量、焼土粒子少量。粘性やや強、しまり

第10・12号溝F－F′・第12号溝　G－G′
1　黒褐色シルト質粘土　ロームブロック微量、焼土ブロック極少量。粘性・しまり強。
2　黒褐色シルト質粘土　ロームブロック極多量、粘性・しまり強。

第13号溝　H－H′
1　暗灰黄色シルト質粘土　粘性強、しまり強

第34号溝　I－I′
1　灰色粘性土　焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。

号溝　J－J′
ぇ色粘性土　焼土粒子少量。粘性やや強、しまり中。

第101号溝　K－K′
1　灰オリーブ色粘性土　炭化物・焼土ブロック多量。粘性やや強、しまり中。
2　炭化物層　形のある炭大量。粘性やや強、しまり強。
3　淡灰色粘土　粘性強、しまり中。

第1・2号畝　L－L′
1　灰オリーブ粘性土　焼土粒子微量。粘性やや強、しまり中。
2　灰色粘土　粘性強、しまりやや強。
3　灰色粘性土　炭化粒子少量。粘性・しまりやや強。
4　灰色粘土　粘性強、しまりやや強。

第3号畝　N－N′
1　灰色粘性土　焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。

第4号畝　O－O′
1　灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。

第5・6号畝　P－P′
1　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性やや強、しまり強。

第12号溝（第39図）

E・F－14グリッド（A1区中央部）に位置する。全長12.0m、幅0.66m、深さ0.13mを測る。断面形は逆台形である。第10号溝に切られている。図示できなかったが、出土遺物に須恵器坏片234.9g、須恵器甕片690g、土師器甕片280g、須恵器高台椀片6.5gがある。遺構の時期は9世紀代と考えられる。

第21号溝（第52図）

K－2・3グリッド（B区南端）に位置する。直角に屈曲する溝であるが、第23号溝とつながっていた可能性が高い。全長9.4m、幅0.8、1.4m、深さ0.22、0.4mを測る。断面形はU字形である。第20号溝に切られている。

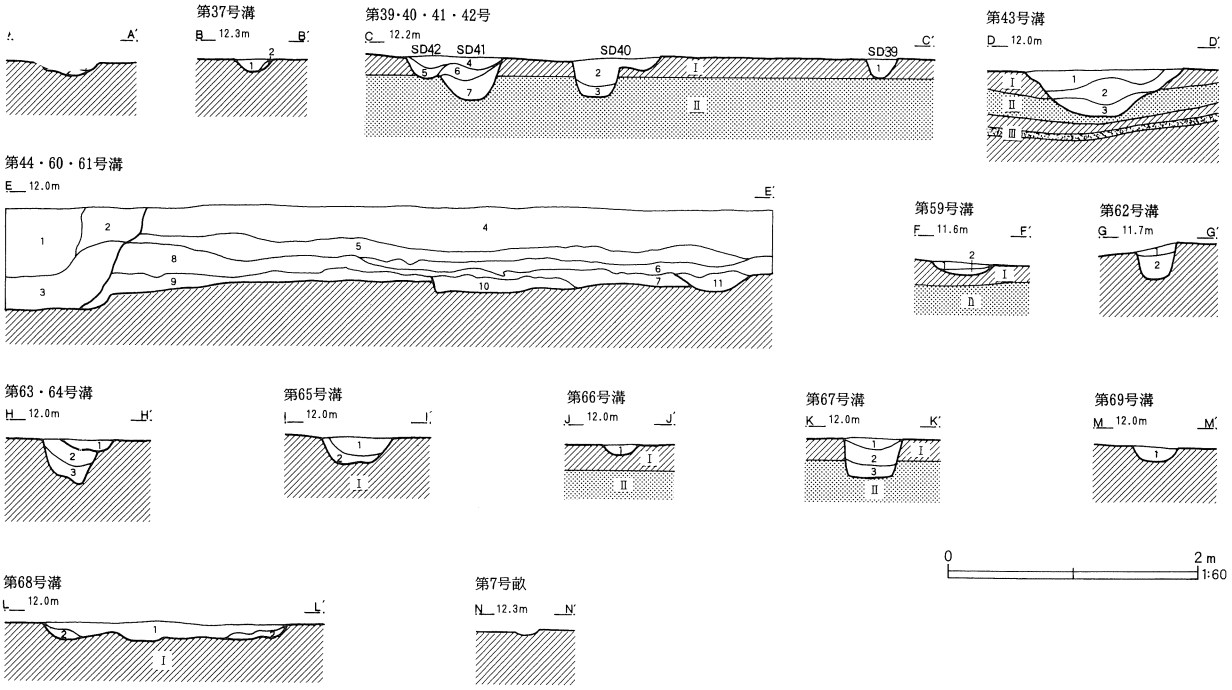
遺物は須恵器片69.9g、土師器甕片0.9g、木炭片7.1gで律令時代以外のものを含まない。

第23号溝（第52図）

G・H－3、I・J・K－3・4グリッド（B区中央やや西）に位置する。全長37.0m、幅2.9m、深さ0.4mを測る。断面形は逆台形である。第20・77・81号溝と第53号井戸に切られている。覆土は締まりが強く、上層には焼土粒子と褐色土粒子が多量に含まれていた。遺物は少なく、図示した2点のみであった。

1は須恵器甕の口縁部で、端部は上下へ拡張している。南比企産である。2は灰釉長頸瓶の底部である。

第44図　溝 A 区(6)



第 36 号溝　A－A′
1　灰オリーブ色シルト　粘性なし、しまりやや強。
2　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり強。

第 37 号溝　B－B′
1　灰　色　粘　性　土　粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色シルト　粘性なし、しまりやや強。

第 39・40・41・42 号溝　C－C′
1　オリーブ灰色粘性土　炭化物少量。粘性強しまりやや強。(SD－39 覆土)
2　オリーブ灰色粘性土　鉄斑多量。粘性・しまりやや強。(SD－40 覆土)
3　灰　色　粘　土　粘性強、しまりなし。(SD－40 覆土)
4　砂　礫　層　しまり強。(表土剥ぎ取りの際板碑片出土。砂礫はこの部分にしかなく廃棄されたもの)
5　灰　色　粘　土　粘性強、しまりなし。(SD－42 覆土)
6　暗オリーブ灰色粘性土　粘性やや強、しまり弱。
7　暗 緑 灰 色 粘 土　炭化粒子少量。粘性強、しまりなし。
Ⅰ　オリーブ灰色シルト　地山
Ⅱ　緑 灰 色 粘 土　地山

第 43 号溝　D－D′
1　暗 灰 黄 色 粘 土　鉄斑多量。粘性・しまり強。
2　黄 灰 色 粘 土　炭化粒子少量。粘性強、しまり弱。
3　灰　色　粘　土　炭化物・焼土粒子少量。粘性強、しまりなし。
Ⅰ　褐　色　砂　層　地山
Ⅱ　青灰　色　砂　層　地山
Ⅲ　褐　色　砂　層　地山　青灰色粘土を含む。

第 59 号溝　F－F′
1　緑 黒 色 泥 炭 層　粘性・しまりなし。
2　暗 緑 色 粘 土　赤銹色の砂を少量。粘性強、しまり弱。
Ⅰ　暗オリーブ灰色粘性土　地山　泥炭
Ⅱ　灰　色　粘　土　地山　しまりなし。

第 62 号溝　G－G′
1　灰　色　粘　土　粘性強、しまり中。
2　灰 色 シ ル ト　銭形の鉄斑、粘性なし、しまり弱。

第 63・64 号溝　H－H′
1　灰 色 粘 性 土　鉄斑、粘性やや強、しまり中。
2　灰　色　粘　土　粘性強、しまり中。
3　暗 緑 灰 色 粘 土　有機物少量。粘性強、しまりやや強。

第 44・60・61 号溝　E－E′
1　オリーブ灰色粘土　青灰色粘土ブロックを斑点状に、有機物を多量。粘性強、しまりやや強。(撹乱)
2　灰　色　粘　土　鉄斑、粘性強、しまりやや強。
3　暗 緑 灰 色 粘 土　有機物少量、粘性強、しまりやや強。(SD－44 覆土)
4　灰 色 粘 性 土　全体に鉄斑。粘性・しまりやや強。
5　灰オリーブ色粘土　全体に鉄斑。粘性強、しまり中。
6　暗 青 灰 色 粘 土　灰オリーブ色粘土ブロック多量、粘性強、しまりやや強。
7　暗 青 灰 色 粘 土　粘性極強、しまり弱。
8　暗 緑 灰 色 粘 土　灰オリーブ色粘土ブロック多量。粘性強、しまりやや強。
9　暗 緑 灰 色 粘 土　粘性強、しまりやや強。
10　暗 青 灰 色 粘 土　有機物を編み状に多量、粘性極強、しまり弱。(SD－60 覆土)
11　暗 青 灰 色 粘 土　粘性極強、しまりなし。(SD－61 覆土)

第 65 号溝　I－I′
1　灰　色　粘　土　鉄斑。粘性強、しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘土　鉄斑。粘性強、しまりやや強。
Ⅰ　青 灰 色 粘 土
※この溝は中世陶器のほか古墳時代の須恵器も包含している。

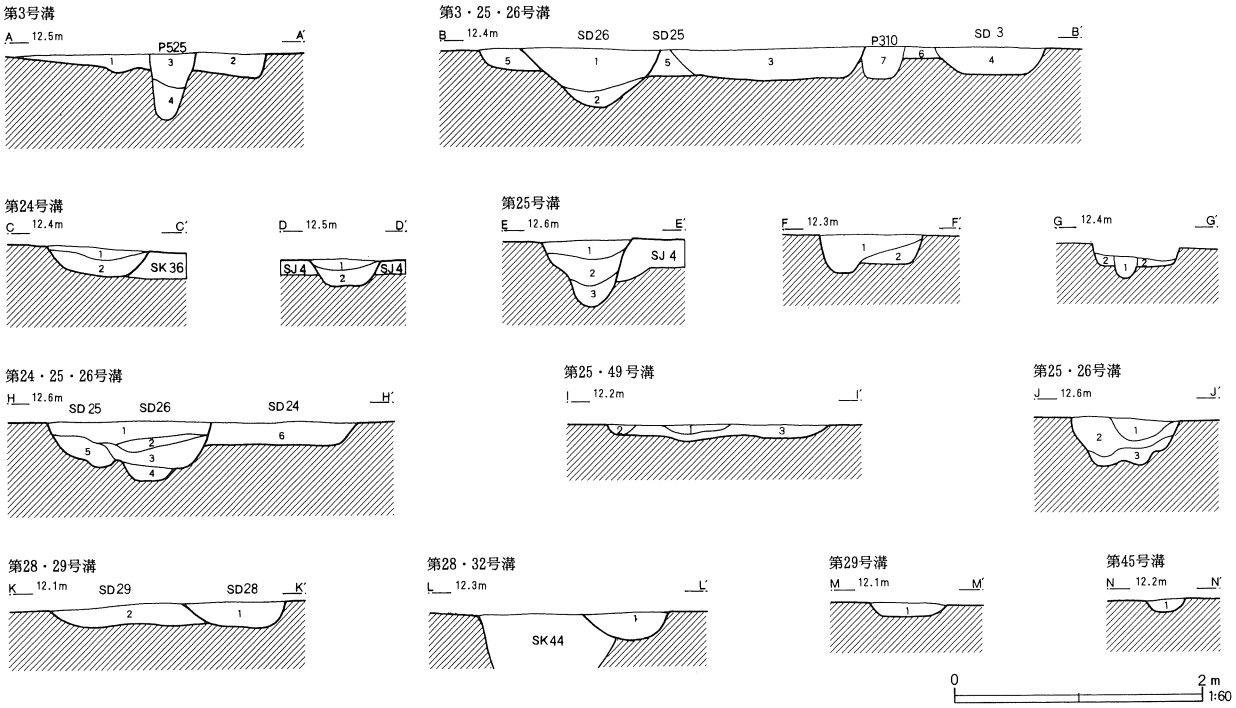
第 66 号溝　J－J′
1　灰オリーブ色粘土　鉄斑。粘性強、しまりやや強。
Ⅰ　灰　色　粘　土　基盤 1
Ⅱ　灰 色 粘 性 土　基盤 2

第 67 号溝　K－K′
1　灰 色 シ ル ト　鉄斑多量。粘性弱、しまりやや強。
2　灰　色　粘　土　全体に鉄斑、炭化物。粘性強、しまりやや強。
3　灰色シルト質粘土　粘性強、しまり弱。
Ⅰ　灰オリーブ色粘性土　地山
Ⅱ　灰オリーブ色シルト　地山

第 68 号溝　L－L′
1　灰 色 粘 性 土　全体に鉄斑、焼土粒子・炭化物粒子を少量。粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色砂質土　壁崩壊のシルト中に多量の砂。粘性なし、しまり弱。
Ⅰ　オリーブ灰色砂質土　地山

第 69 号溝　M－M′
1　灰　色　粘　土　鉄斑多量、炭化粒子少量。粘性・しまり強。

第45図　溝Ａ区(7)



第３号溝　Ａ－Ａ′
1　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　黄灰色粘性土　灰色粘土ブロック多量。粘性・しまりやや強。
3　黄灰色粘土　黄灰色粘土ブロック・焼土粒子少量。粘性・しまり強。
4　黒褐色粘性土　粘性やや強、しまり中。

第３・25・26号溝　Ｂ－Ｂ′
1　灰褐色粘性土　炭化物少量。粘性やや強、しまり中。
2　黄灰色粘性土　粘性・しまりやや強。
3　灰黄褐色粘土　炭化粒子、焼土粒子、褐色粒子。粘性強、しまり強。
4　灰黄褐色粘土　炭化粒子、焼土粒子、褐色粒子。粘性強、しまり強。
5　灰黄褐色粘土　炭化粒子少量、褐色粒子。粘性強、しまり強。
6　灰色粘性粘土　炭化粒子、焼土粒子、褐色粒子。粘性強、しまり強。
7　灰黄褐色粘土　焼土粒子多量、炭化粒子少量、褐色粒子、黄灰色粘性土粒子。粘性強、しまり強。

第24号溝　Ｃ－Ｃ′
1　灰黄褐色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。

第24号溝　Ｄ－Ｄ′
1　灰オリーブ色粘土　焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘土　焼土粒子少量。粘性やや強、しまり弱。

第25号溝　Ｅ－Ｅ′
1　暗灰色粘性土　焼土ブロック、炭化物やや多量。粘性やや強、しまり中。
2　灰黄色粘性土　炭化物少量。粘性やや強、しまり中。
3　黄灰色粘性土　粘性・しまりやや強。

第25号溝　Ｆ－Ｆ′
1　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子、炭化粒子。粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子。褐灰色土粒子・ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

第25号溝　Ｇ－Ｇ′
1　オリーブ黄色粘性土　粘性やや強、しまり中。
2　灰オリーブ色粘性土　浅黄色シルトを上部に縞状に含む。粘性やや強、しまり中。

第24・25・26号溝　Ｈ－Ｈ′
1　灰色シルト質粘土　粘性・しまり強。
2　灰色シルト質粘土　１層より暗い。粘性・しまり強。
3　灰色粘性土　鉄斑、炭化物少量。粘性やや強、しまり弱。
4　灰オリーブ色粘性土　鉄斑多量。粘性・しまりやや強。
5　灰オリーブ色粘性土　粘性やや強、しまり強。
6　黄灰色粘性土　灰黄色粘土ブロック多量。粘性・しまりやや強。

第25・49号溝　Ｉ－Ｉ′
1　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰色粘性土　粘性やや強、しまり中。（ＳＤ-49覆土）
3　灰色粘土　炭化粒子少量。粘性強、しまり中。
※ＳＤ49はＳＤ25より新しい。

第25・26号溝　Ｊ－Ｊ′
1　オリーブ灰色砂層　鉄斑多量。粘性なし、しまり弱。（SD－26覆土）
2　灰黄色粘性土　炭化物少量。粘性やや強、しまり中。（SD－25覆土）
3　黄灰色粘性土　粘性・しまりともやや強。（SD－25覆土）

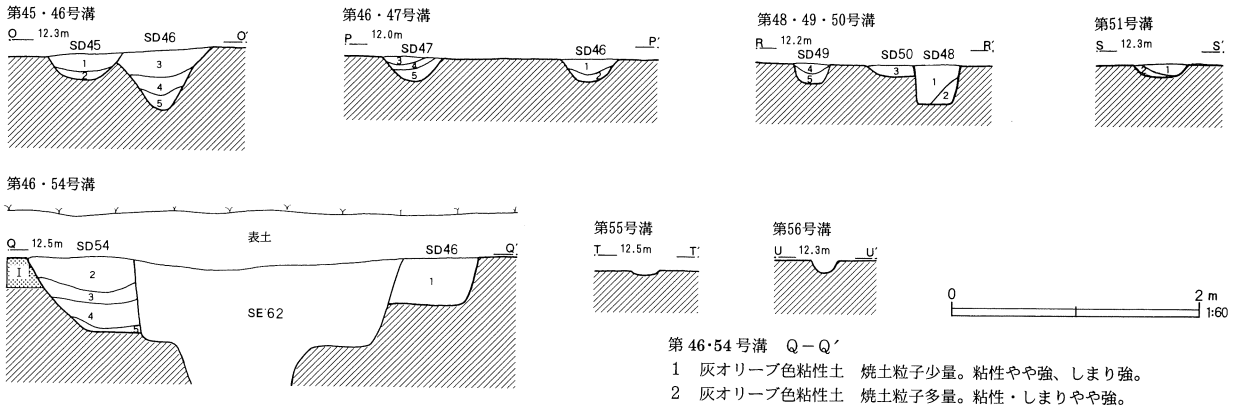
第28・29号溝　Ｋ－Ｋ′
1　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子、炭化粒子。灰色土粒子混入。粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子。褐灰色土粒子混入。粘性やや強、しまり強。

第28・32号溝　Ｌ－Ｌ′
1　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子。褐灰色土粒子混入。粘性やや強、しまり強。

第29号溝　Ｍ－Ｍ′
1　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子。褐灰色土粒子混入。粘性やや強、しまり強。

第45号溝　Ｎ－Ｎ′
1　灰色粘性土　浅黄色シルトブロック少量。粘性・しまりやや強。

第46図　溝Ａ区(8)



第45・46号溝　O－O′

1　灰色粘性土　焼土粒子、浅黄色シルトブロック少量。粘性・しまりやや強。
2　オリーブ黒色粘性土　粘性やや強、しまり中。
3　黄灰色粘性土　焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。
4　暗灰黄色粘性土　焼土粒子少量。粘性やや強、しまり中。
5　オリーブ黒色粘土　浅黄色粘土ブロック少量。粘性強、しまりやや弱。

第46・47号溝　P－P′

1　灰色粘性土　炭化物・焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。
2　灰色粘土　浅黄色粘土ブロック多量。粘性強、しまり中。
3　灰オリーブ色粘性土　鉄斑、焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。
4　灰色粘性土　鉄斑、焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。
5　灰色粘土　鉄斑、焼土粒子少量。粘性強、しまりやや強。
※SD－46・47はSD－29より新しい。

第46・54号溝　Q－Q′

1　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子少量。粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子多量。粘性・しまりやや強。
3　灰色粘性土　焼土ブロック・炭化物多量。粘性・しまりやや強。
4　灰オリーブ色粘土　焼土ブロック少量。粘性強、しまりやや強。
5　灰色粘土　鉄斑少量。粘性強、しまりやや強。
Ⅰ　灰オリーブ色粘性土　地山

第48・49・50号溝　R－R′

1　灰色粘性土　鉄斑を斑点状、焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘土　粘性強、しまりやや強。
3　灰オリーブ粘性土　焼土粒子少量。粘性やや強、しまり強。
4　灰色粘土　鉄分粒子・浅黄色シルト粒子・焼土粒子。粘性強、しまりやや強。
5　灰オリーブ色粘土　浅黄色シルトブロック多量。粘性強、しまり中。

第51号溝　S－S′

1　黄灰色粘性土　浅黄色シルトブロック少量。粘性やや強、しまり中。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。

白っぽい胎土で、内底部には灰がかかる。遺構の時期は9世紀代と考えられる。

第29号溝（第41図）

E－9・10、F－9グリッド（A3区東端）に位置する。全長19.2m、幅0.6m、深さ0.16mを測る。断面形は逆台形である。第28号溝に切られている。覆土は灰黄褐色粘性土でしまりは強かった。残存率の高い須恵器類を包含し、後世の撹乱混入品は僅かであった。

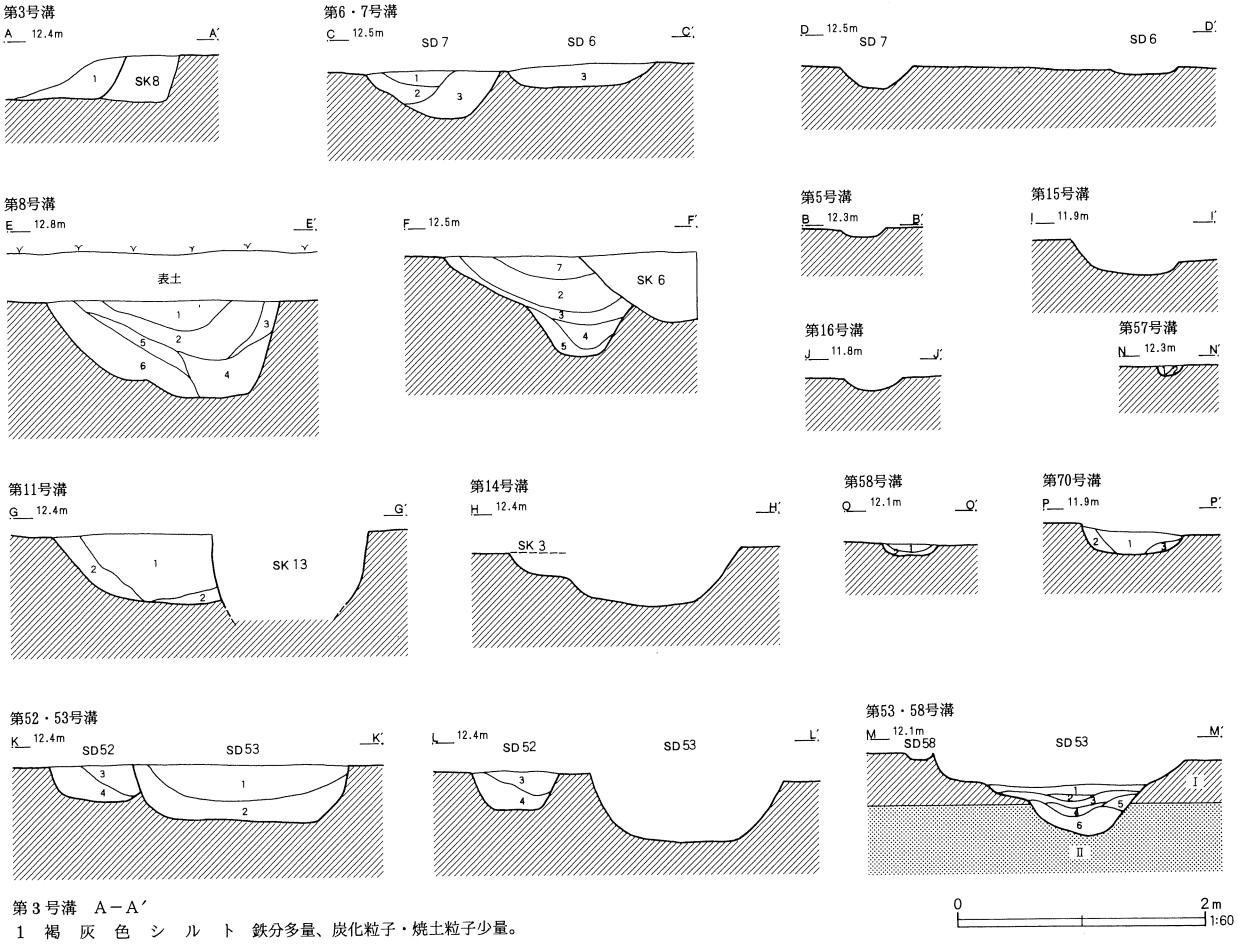
1は底部を回転糸切り離し後、周辺部回転ヘラケズリする須恵器坏で、南比企産である。2は淡褐色を呈する須恵器椀で、南比企産である。底部は回転糸切り離しである。3は小型の手捏ねかわらけで、胎土に石英などの粗砂を含む。撹乱混入品である。遺構の時期は8世紀末から9世紀前半と考えられる。

第54号溝（第41図）

E・F－8グリッド（A3区西側）に位置する。全長4.9m、幅0.7m、深さ0.58mを測る。断面形はU字形である。第51号溝と第62号井戸に切られている。覆土には完存率の高い古代の遺物を多量に含み、後世の撹乱混入品は僅かであった。

1は体部の丸い土師器坏で、口縁端部が内屈する。内面のナデ調整は丁寧であるが、外面は無調整部分が多く、底面のみヘラケズリを加える。土師器甕の工人が製作した物であろう。2は底部を回転糸切り離しする須恵器坏で、南比企産である。3は須恵器高台付椀で、底部回転糸切り離し後、回転ヘラケズリを加えてから高台を付けている。2次的に、口縁部をうち欠き、研磨してから、内面及び高台内を硯として使用している。南比企産である。4は須恵器蓋で、天井部は回転糸切離し後、周辺部回転ヘラケズリを加えている。5と6は土師器台付甕の底部と台部で、同一個体と見られる。7は土師器甕口縁部で、口縁部はコ字形が定型化しておらず、第2号住居跡出土品と似る。8は須恵器甕の体部片で、外面平行叩き、内面無紋当て具を使用し、ナデを加えている。南比企産である。遺構の時期は9世紀初頭と考えられる。

第47図　溝A区(9)



第3号溝　A－A′

1　褐灰色シルト　鉄分多量、炭化粒子・焼土粒子少量。

第6・7号溝　C－C′

1　黄灰色シルト質粘土　焼土ブロック少量、炭化物極少量。粘性・しまり強。
2　黄灰色シルト質粘土　焼土ブロック極少量、ロームブロックやや多量。粘性・しまり強。
3　黄灰色シルト　焼土ブロック極少量。

第8号溝　E－E′　F－F′

1　暗灰黄色シルト質粘土　ロームブロック多量、炭化物微量。粘性・しまり強。
2　暗灰黄色シルト質粘土　焼土ブロック微量、炭化物多量。粘性・しまり強。
3　黒褐色シルト質粘土　炭化材多量。粘性・しまり強。
4　暗灰黄色シルト質粘土　黒褐色シルトをブロック状に含む。粘性・しまり強。
5　暗灰黄色シルト質粘土　炭化材極多量。粘性・しまり強。
6　暗灰黄色シルト質粘土　黒褐色シルト・炭化物微量、砂多量。粘性・しまり強。
7　暗灰黄色シルト質粘土　焼土ブロック極少量。粘性・しまり強。

第11号溝　G－G′

1　褐灰色シルト質粘土　ロームブロック極多量、焼土ブロック・炭化物やや多量。粘性・しまり強。
2　オリーブ褐色シルト質粘土　褐灰色シルト微量。粘性・しまり強。

第52・53号溝　K－K′　L－L′

1　灰色粘性土　鉄分粒多量、焼土粒子少量。粘性・しまりやや強。
2　オリーブ黒色粘性土　鉄分粒多量、焼土粒子少量。粘性やや強、しまり中。
3　オリーブ黒色粘性土　焼土粒子やや多量。粘性やや強、しまり強。
4　灰色粘性土　鉄分粒多量、焼土粒子少量。粘性やや強、しまり極めて強。

第53・58号溝　M－M′

1　灰色シルト　鉄斑大量。粘性弱、しまり強。
2　灰オリーブ色シルト　鉄分凝集層。粘性弱、しまり極めて強。
3　灰色粘土　粘性強、しまり弱。
4　オリーブ黄色粘土　鉄斑大量。粘性強、しまりやや強。
5　暗緑灰色粘土　粘性強、しまりなし。
6　暗緑灰色砂層　暗緑灰色粘土少量。粘性・しまりなし。
I　灰色砂層
II　オリーブ黄色砂層　地山

※堀の深堀部分であり砂層を掘りぬいているので湧水していたようだ。したがって空堀を水掘化するための機能があったと推測する。

第57号溝　N－N′

1　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり強。

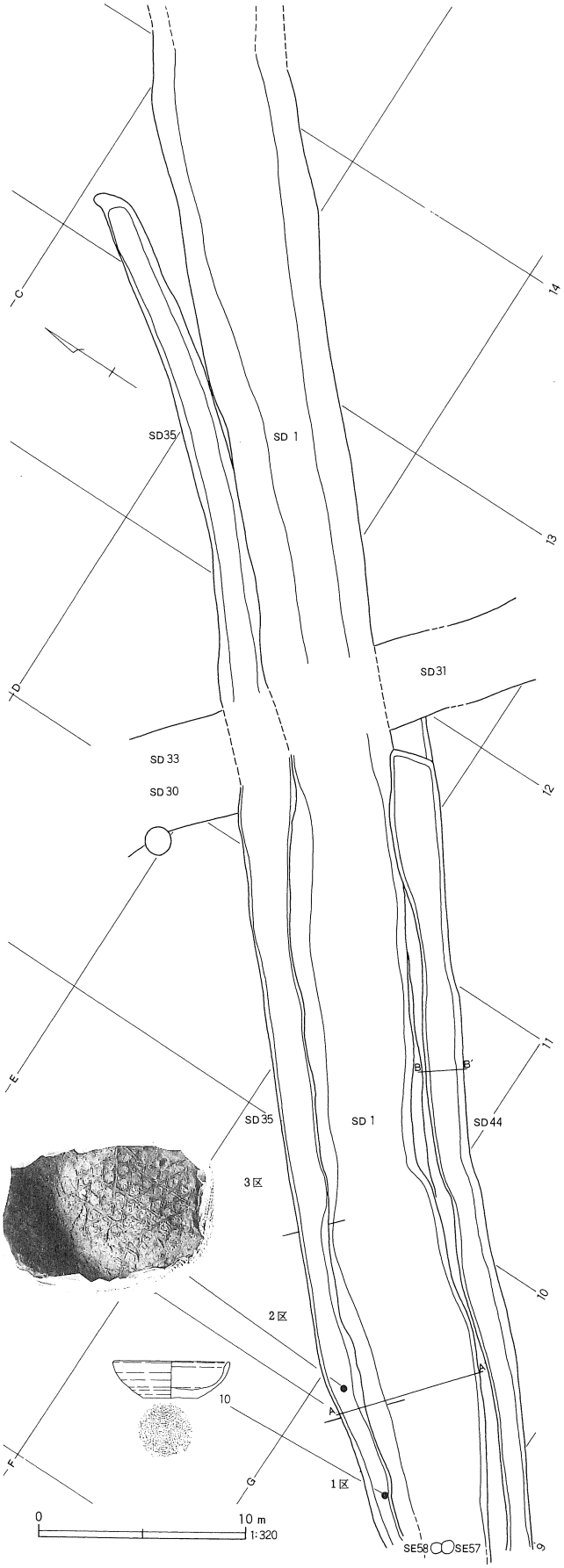
第58号溝　O－O′

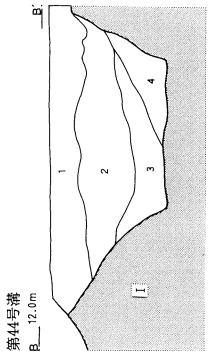
1　灰オリーブ色シルト　粘性弱、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強。

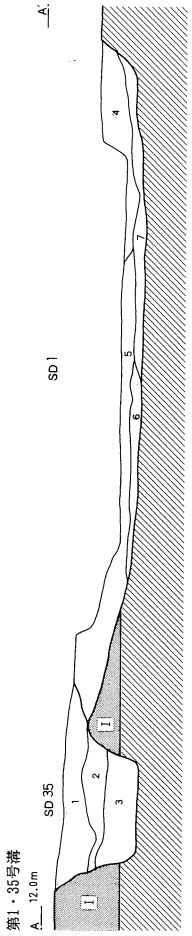
第70号溝　P－P′

1　灰色粘性土　緑灰色粘土ブロック・鉄斑大量。粘性・しまりやや強。
2　オリーブ灰色砂　鉄銹。粘性なし、しまり弱。
3　灰色粘性土　鉄斑少量。粘性やや強、しまり中。

第48図　溝 A 区(10)







第1・35号溝　A－A′

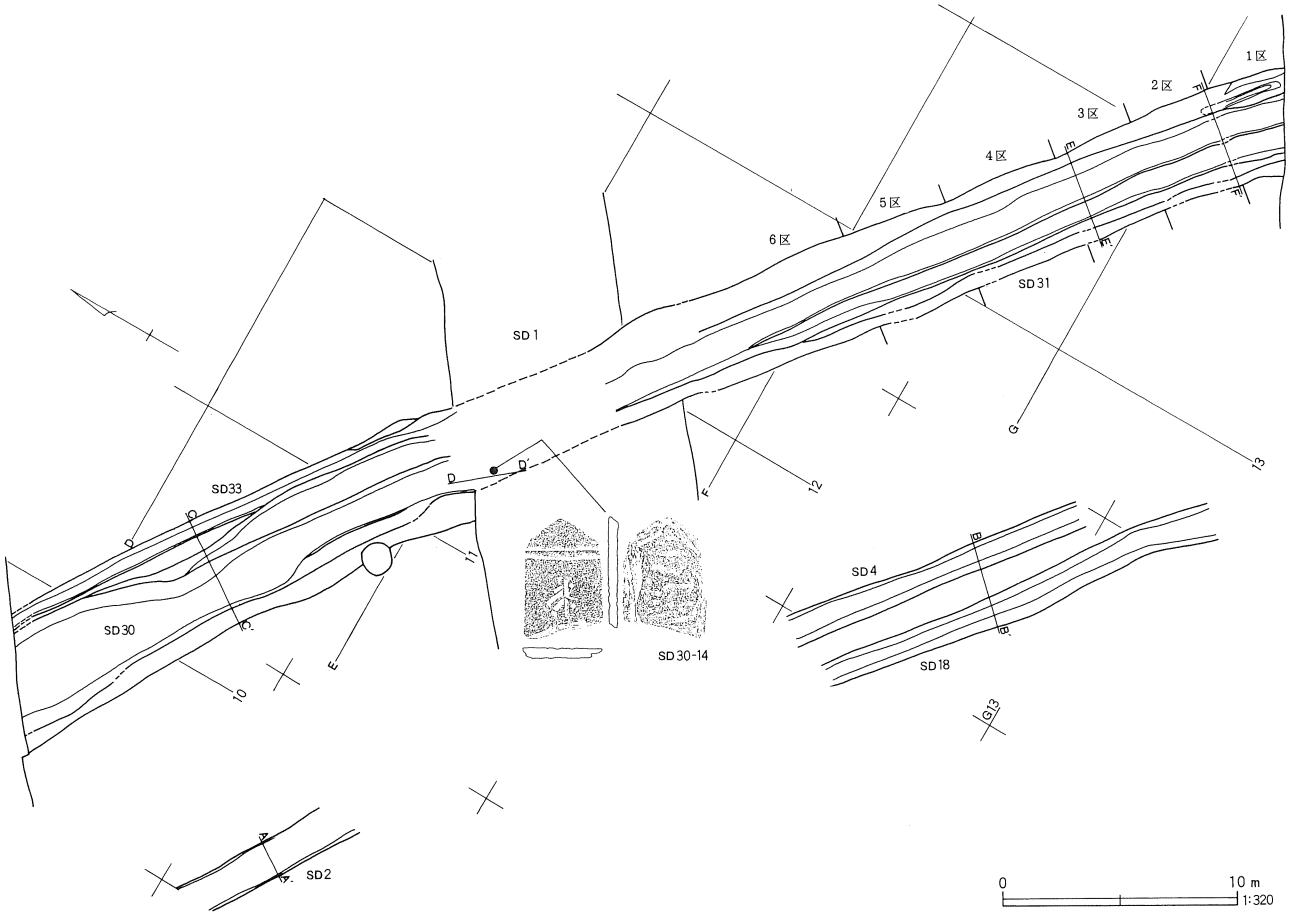
1	オリーブ灰色シルト	明オリーブ灰色粘土ブロック斑点状に多量。粘性なし、しまり中。
2	暗オリーブ灰色シルト	同色粘土ブロック多量。粘性中、しまり弱。
3	黒色泥炭層	鉄銹を帯びたシルトを縞状に少量。有機物を大量。粘性強、しまりなし。
4	オリーブ黒色粘土	オリーブ灰色粘土ブロック少量。銹化した植物痕と有機物多量。粘性強、しまりなし。
5	暗オリーブ灰色粘土	灰オリーブ色粘土ブロックを斑点状に多量。粘性強、しまり弱。
6	オリーブ黒色粘土	炭化物少量、焼土粒子微量。粘性強、しまり弱。
7	暗灰色粘土	炭化物、灰色土ブロック多量。粘性強、しまりやや強。植物性繊維・遺体を多量。
I	灰白色粘土	地山

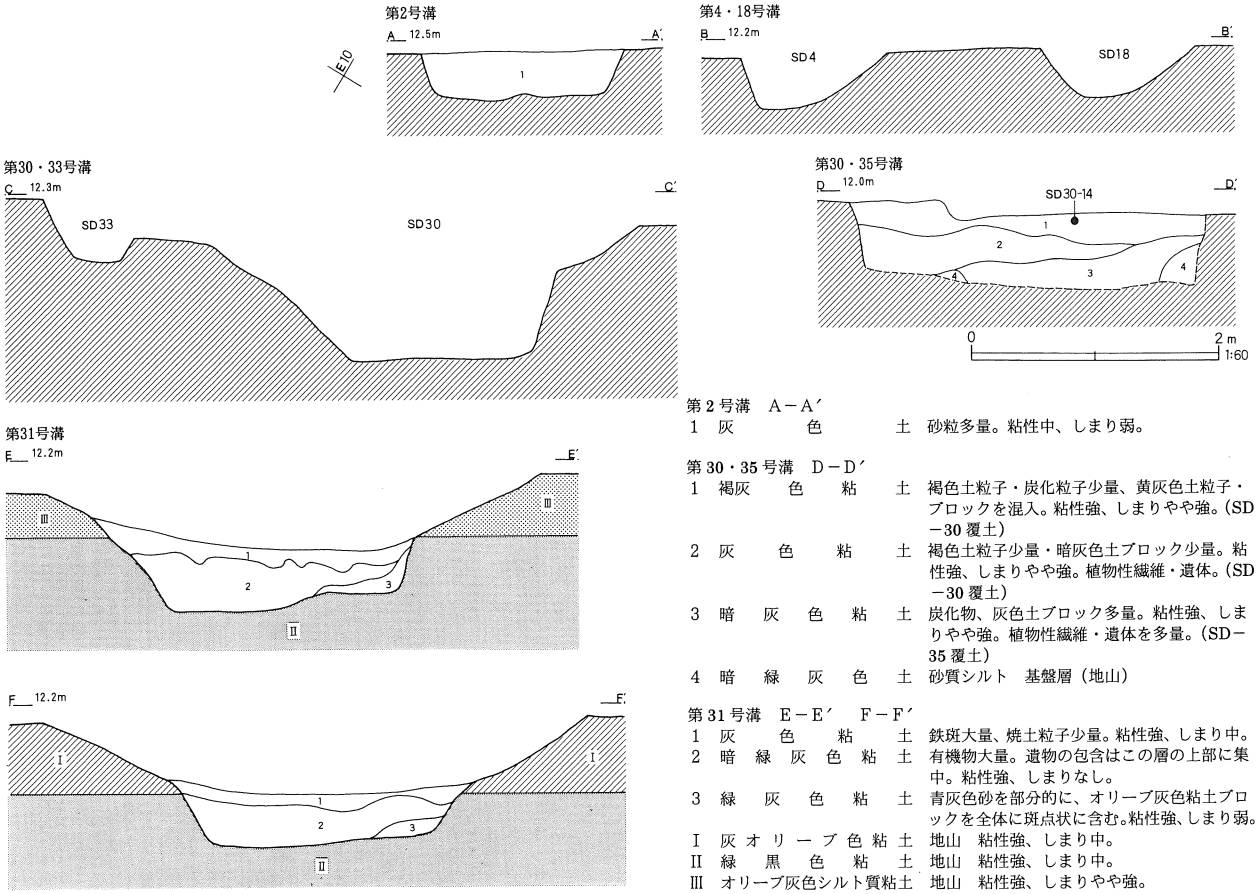
第44号溝　B－B′

1	灰黄褐色粘土	褐色土粒子多量、炭化物少量、灰色土混入。粘性強、しまりやや強。
2	灰色粘土	炭化粒子、褐色土粒子少量。粘性強、しまりやや強。
3	暗オリーブ灰色粘土	炭化粒子・褐色土粒子少量。2層よりやや明るい。粘性強、しまりやや強。
4	灰色粘土	植物性繊維、炭化粒子・褐色土粒子少量。2層とほぼ同じ。粘性強、しまりやや強。
I	灰色粘土	地山　植物性繊維多量。粘性強、しまりやや強。

縮小(　)%

第49図　溝Ａ区(11)





第２号溝　Ａ－Ａ′

１	灰色土	砂粒多量。粘性中、しまり弱。

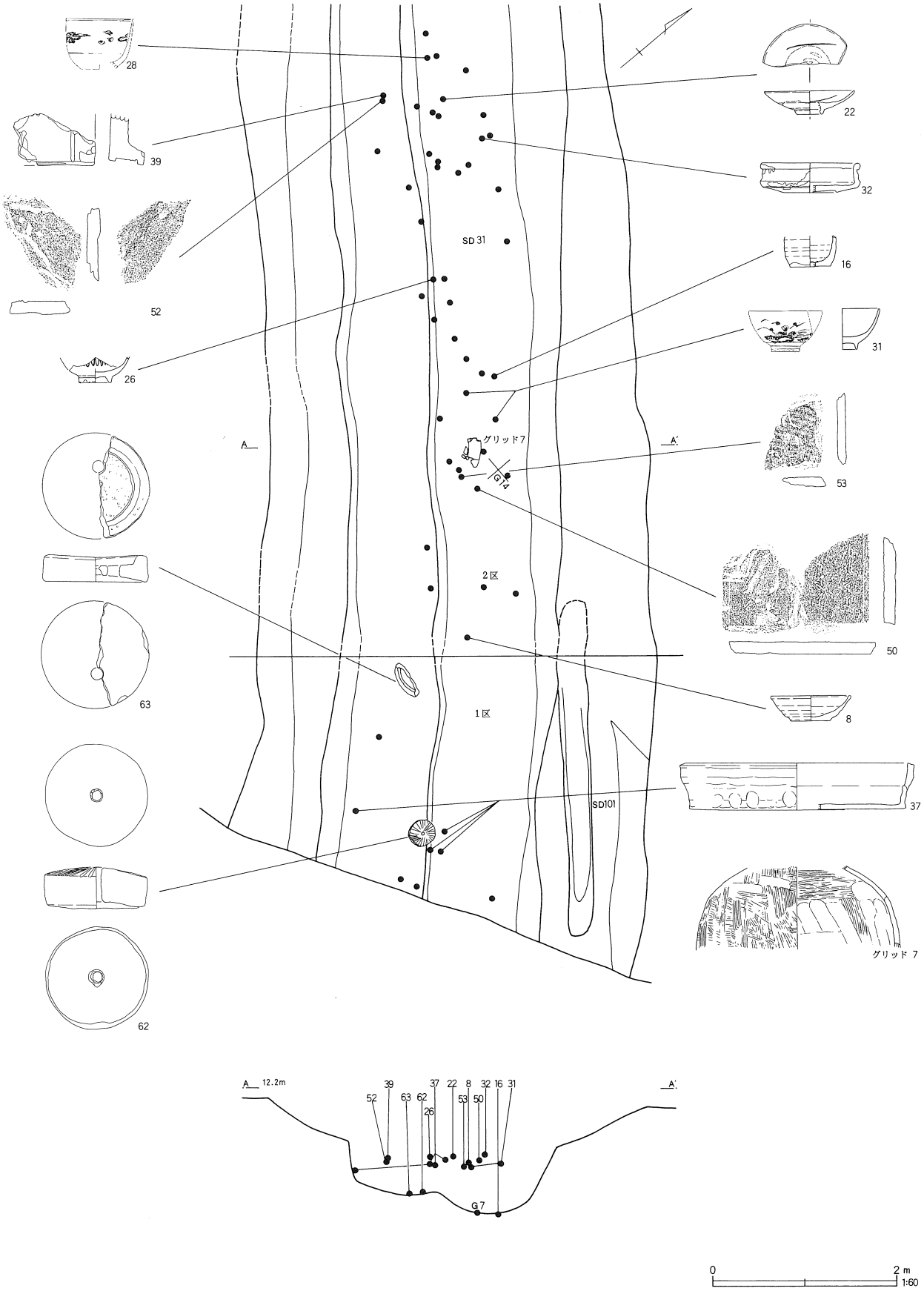
第30・35号溝　Ｄ－Ｄ′

１	褐灰色粘土	褐色土粒子・炭化粒子少量、黄灰色土粒子・ブロックを混入。粘性強、しまりやや強。(SD－30覆土)
２	灰色粘土	褐色土粒子少量・暗灰色土ブロック少量。粘性強、しまりやや強。植物性繊維・遺体。(SD－30覆土)
３	暗灰色粘土	炭化物、灰色土ブロック多量。粘性強、しまりやや強。植物性繊維・遺体を多量。(SD－35覆土)
４	暗緑灰色土	砂質シルト　基盤層（地山）

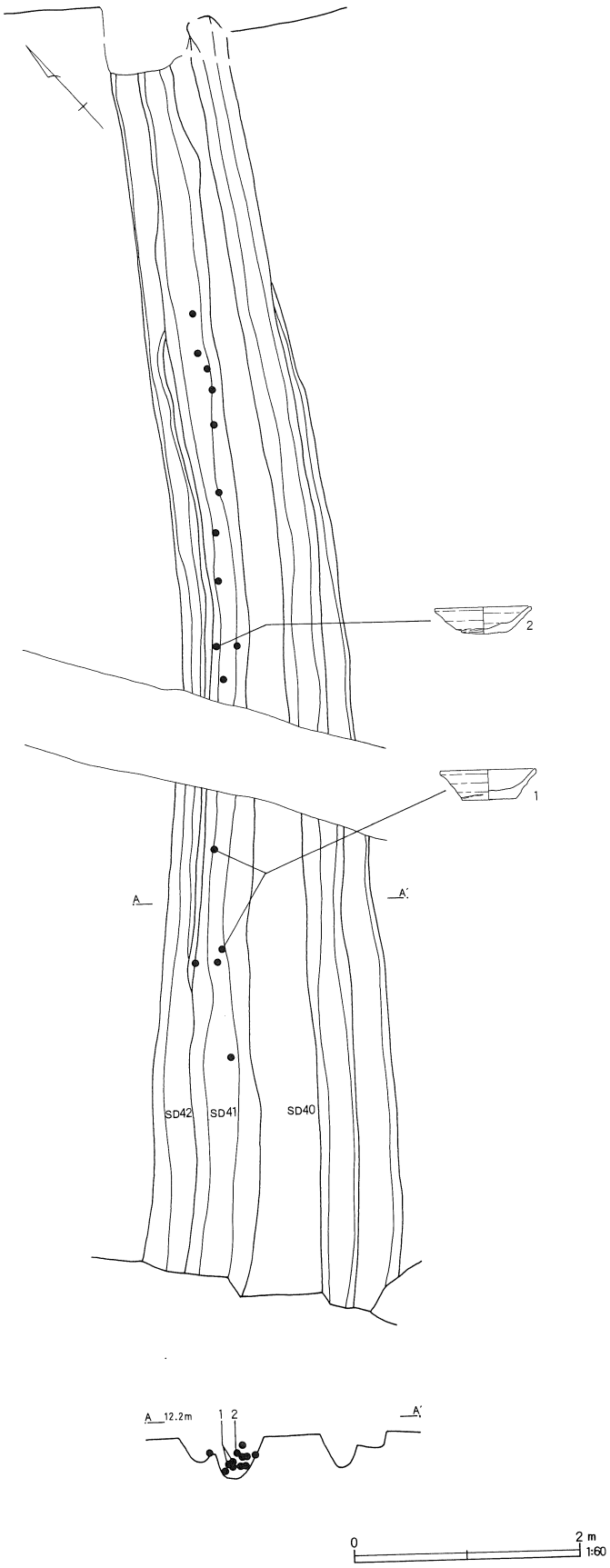
第31号溝　Ｅ－Ｅ′　Ｆ－Ｆ′

１	灰色粘土	鉄斑大量、焼土粒子少量。粘性強、しまり中。
２	暗緑灰色粘土	有機物大量。遺物の包含はこの層の上部に集中。粘性強、しまりなし。
３	緑灰色粘土	青灰色砂を部分的に、オリーブ灰色粘土ブロックを全体に斑点状に含む。粘性強、しまり弱。
Ⅰ	灰オリーブ色粘土	地山　粘性強、しまり中。
Ⅱ	緑黒色粘土	地山　粘性強、しまり中。
Ⅲ	オリーブ灰色シルト質粘土	地山　粘性強、しまりやや強。

第50図　第31号溝遺物分布図



第51図　第41号溝遺物分布図



第84号溝（第　図）

H－3・4、I－3グリッド（B区中央西側）に位置する。全長7.5m、幅1.68m、深さ0.58mを測る。断面形はU字形である。1は須恵器鉢である。南比企産であり、8世紀後半から9世紀初頭の間に比定できる。

図化はできなかったが、他の遺物として、土師器甕片110g、山茶碗片9.5g、渥美甕片43gがある。第84号溝の年代は他の溝との切り合い関係が不明であり、苦慮するところであるが、少量の中世遺物は撹乱混入と見て、古代の遺物を根拠に9世紀初頭頃とみておきたい。

（2）中世前期の溝

第1号溝（第48図）

C－12・13・14、D－11・12・13、E－10・11・12、F－9・10・11、G－8・9・10、H－8・9グリッドに位置する。

A区の中央部を北東から南西に向け直線的に貫通し、両端とも調査区外に延びている。確認全長75.0m、幅6.7m、深さ0.7mを測る。主軸方向はN－53°－Eを示す。幅の割に浅いが、断面形は逆台形で、右岸（北方から見て）の傾斜は約15度、左岸の傾斜は約50度である。覆土下層は炭化物を含むオリーブ黒色粘土または炭化物と分解されていない植物を多量に含む暗灰色粘土層で、地下水の恒常的湛水状況が観察された。底部付近の地山は泥炭層であり、古くからの谷地形を人工的に掘り下げた溝と考えられた。少なくとも1回の掘り直しが行われており、土層断面からは左岸に沿って幅1.8m、深さ0.6mの規模であったことが分かる。また、第1号溝が完全に埋まりきった後も谷状の地形が残存したため、自然流路化し、そこには左右両岸からと上流（北側）からの遺物の流入が継続しつづけた。昭和23年撮影の米軍航空写真には旧国道254号線までの溝として写っているので、近世又は近代に入って掘り直され、最近まで排水溝として機能していたものと思われる。

右岸の立ち上がり部を第35号溝、左岸の立ち上が

り部を第44号溝に切られ、さらに、全長の中程の位置を、直行する第30・31号溝によって壊されている。

遺物は、覆土上層の調査に重機を用いざるをえなかったので、少な目であるが、古代から近世に至る幅広い年代のものが出土している。

1～3はかわらけである。1は外底面に指押え痕を顕著に残し、口縁部が直線的に開く杯形の手捏ねかわらけ。胎土に海面骨針を含み在地産である。13世紀以降のものである。2は足高高台付のかわらけで、杯部との接合面で剥離している。12世紀中葉から後葉に属する。3は小型皿形のかわらけで、口唇部のつまみあげによって、外面に凹線が巡る。外底面には掌文と指頭押え痕が残る。

4～10は中世陶器である。4は渥美焼の小型壷。5は山茶碗系の片口鉢。6は常滑焼の広口壷体部。いずれも12世紀後半から13世紀前半の幅に収まる遺物である。7は1号溝の南端に掘り込まれた井戸跡から出土した常滑焼の片口鉢で、中野編年8型式（14世紀後半代）に類例がある。8は常滑焼の大甕口縁部で、中野編年4型式から5型式への過渡期にあたり、13世紀前葉の年代を与えることができる。9は渥美焼の壷口縁部で12世紀後半代に属する。10は縁帯の発達した常滑焼の甕口縁部で中野編年10型式（15世紀後半代）に相当する。

11は須恵器甑で5孔タイプのものである。平安時代の住居跡からの流れ込み品である。

12～17は中世末期から近世の陶磁器類である。12は瀬戸美濃系の灰釉皿で、17世紀代。13は瀬戸美濃系の天目釉を施した壷。14は瀬戸美濃系の筒形香炉で、暗褐色の鉄釉が厚く施釉されている。15は鬼板と俗称される紫灰色の錆釉を塗布した瀬戸の擂鉢で、16世紀代。16は在地産の焙烙。17は肥前系の染付けで、見込に牡丹と蔓草文を描く。蛇の目凹形高台を持ち、18世紀第2四半期以降の所産である。

18～36は板碑である。溝の底部から出土したものは1点もなく、みな上層からの出土である。個々の説明はⅤ章でおこなうので、省略するが、18は長禄三（1459）年、20は明徳元（1390）年、27は康正元（1455）年、36は永正六（1509）年銘を持っている。最新の物を重視すると、16世紀以降になってから無縁の板碑が廃棄された可能性が考えられる。これらの中には、油煙の付着や線状痕の認められるものもあり、二次的に利用されたものも含まれていた。

37～40は石製品である。37は板碑の基部付近を再加工して作られた分銅形石製品である。重量は490gで130匁に当たる。38は淡緑色の泥岩製の4面砥石である。39は自然礫の平坦面を使用面とする大型の砥石。右側面は擦って調整しているが、左側面には新しい割れ口がある。40は茶臼の上臼である。チャート礫の入る砂岩製である。側面の対向する位置に引手口があり、子持ち角形の浮彫りがある。上面のくぼみの深さ2.3㎝、下面のふくみ0.5㎝。筋目は摩耗しているが、周縁部まで達しており、中世のものであろう。8分角13溝と推測される。なお、ちょうど半分に割れているのは魂抜きと称して故意に割ったためかもしれない。

41～47は木器である。41は炭粉下地の後、内外両面を朱塗りとする漆器椀。薄手で、体部の開きが大きく、底部との境に稜の巡る特徴がある。漆は光沢があり色も鮮やかである。42は見込に朱漆描きの鶴丸文様のある漆器椀。厚手で、腰の張る器形。内外面とも黒漆塗り。高台内側を丁寧に削っている。43は内外面黒漆塗りの後、見込に漆絵（朱）を描く漆器椀。二重円圏内に千鳥かと思われる文様がある。高台は低くかつ径が大きい。全体として底広形の丸みのある器形を示す。44は小型の曲物。桧柾目ヘギ板を丸めて二重にし、端部を桜皮で縫い留めている。底板は目の詰んだ柾目材を使用。ケガキ線が認められる。1号溝内に掘り込まれた第58号井戸内から出土した。45は断面長方形の細長い材で、建具と考えたが、折敷の縁か脚部の可能性もある。46は丸太の建築材で、上端は斧による切断、下端は鋸による切断がなされ、引きさしの鋸痕も残る。47は箱物の部材で、現存する一方の端部に組継ぎ加工が施されており、木釘2本が残っている。長側小口

（実測図の左側面）にも4ヶ所の木釘孔があるので、底板を留めていたと考えられる。角盆のようなものか、製作の丁寧な折敷の縁である可能性が考えられよう。

このほか、図示していないが、土師器甕片253.3 g、須恵器杯片150 g、須恵器甕片455 g、瓦片70.4 g、鞴の羽口片100 g、中国製青磁片28.3 g などが出土している。

遺構の年代はかわらけと中世陶器のうち古いグループによって、12世紀後半から13世紀前葉の存続期間が考えられる。また、南端に2基の井戸が掘られたのは13世紀後半、溝の掘り直しが行われたのは15世紀後半頃のことと推定できる。

第35号溝（第48図）

C－12・13、D－11・12、E－10・11、F－9・10、G－8・9グリッドに位置する。

A区の中央部を貫通する第1号溝の右岸（北から見て）に沿って掘削され、その立ち上がり部を切っている。確認全長66.0 m、幅1.64 m、深さ0.66 mを測る。主軸方向はN－50°－Eを示すが、北東側で西側に主軸方向を変えており、緩やかに屈曲する可能性がある。その先の部分については残念ながら排水用のウェルポイントを設置するために深掘りをしたので明らかにすることができない。

断面形は逆台形であり、立ち上がり部の傾斜は両岸とも60度前後の急傾斜面となっている。覆土下層は黒色泥炭層で、有機物を多量に包含していたが、鉄錆を帯びたシルトを縞状に水平堆積することから、水流のあったことが分かる。

遺物はわずかな撹乱混入品をのぞけば、単一時期の一括遺物と見られた。とくに、平面図に図示した南西部のポイントでは、溝底付近より完形のかわらけが3点まとまって出土し、うち2点が入れ子状になっていた（図版12左下）ことから、何らかの祭祀行為が行われた可能性が考えられた。

1は3点の一括土器のうち単体で出土した個体、2と3は入れ子になって出土した個体である。いずれも回転台を用いて製作されたもので、外底面には回転糸切り離し痕が残されている。胎土には粗砂と金雲母を含み、焼成が良く、淡褐色に近い色調も似通っている。また、器壁が分厚い点と口径10㎝弱という法量も共通している。しかし、1が最も形が整っており、2はこれに準じるが、底部が厚く、3はかなり著しい歪みが生じ、かつ、調整不足のために細かいひびが多数認められる点にそれぞれの差異が認められた。恐らく同一工房における製品と推測されるが、変異幅の実例として興味深いものがある。これらの内底面には共通して浅い窪みがある。

4も前述のものに近い特徴を持ったかわらけであるが、内底部の窪みがほとんど認められない。5は一回り小さな皿形のかわらけで、胎土や焼成、回転糸切り放し痕などは一括出土品と共通するが、内外面とも黒色に仕上げられている。6は手捏ねのかわらけで、極めて薄手に作られ、外底面には掌紋、内底面には刷毛目が認められる。胎土は精選され、砂を含まない代り、細かな雲母粒子を多数含んでおり、他のかわらけより白っぽく、かつ硬質に焼きあがっている。熟練した工人の製品とみて誤りない物である。

既述の6点が皿形の小型かわらけであったのに対して、7～11はいずれも椀形の大型かわらけである。法量や器形は近似するものの、胎土と製作法から3分類できる。7は胎土に砂粒をほとんど含まず、水簸している可能性がある。正確には灰白色だが、かなり白っぽく、酸化鉄粒の赤い斑点が目立つ。器面は平滑でつるつるした感じである。外底面はヘラ削りというかわらけとしては異例の技法を用いており、手捏ね製作であることが分かる。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。8～10は共通性の強い一群で、胎土に粗砂と金雲母を含み、淡褐色の焼き上がりで、器肉が分厚い。外底面にはいずれも右回転の糸切離し痕が明瞭に残る。体部は丸みがあるが、肥厚気味の口縁部を強くヨコナデすることによって、内側に稜を生じている点に特徴がある。法量は14～15㎝で若干のばらつきがある。また、内底面には静止ナデが加えられているが、外底面に板状圧痕は認められな

い。この3点は1～3の小型皿とセットをなすものと思われる。11は胎土が8～10と共通し、口縁部内側に稜が巡る点も近似している。しかし、口縁部をのぞく内面にまんべんなくカキ目が巡ることに際立った特徴がある。当然回転台もしくはロクロを使用したものだが、外底面はなでられており、糸切り痕がなで消されているようである。

12は中国華南産と推定される緑釉陶器の盤である。直線的に開くやや深めの盤で、口縁部は断面T字状の肥厚口縁をなしている。内外面に厚く釉薬をかけているのにもかかわらず、内面に摺り目を持つことから、調理具と考えられる。山本信夫氏の編年によれば、盤Ⅱ類に相当し、13世紀に出現する。施釉鉢Ⅱ類と連絡するものであろう。

13は瓦塔である。G－9グリッド覆土下層からの出土である。隅棟を中心とする破片で、焼成は酸化焔焼成、淡橙色の土師質である。屋蓋部の大きさは一辺27㎝に復原され、美里町東山遺跡瓦塔の初層規模と一致する。遺物の詳細な検討は考察編にゆずる。

なお、瓦塔の時期は集落存続期に属するので、集落内の宗教施設に設置された可能性が考えられるが、調査区内からは瓦塔の残りの破片が1点も発見されておらず、寺院跡も存在しなかったので、調査区外、おそらく、第35号溝の上手である北側の隣接地が元の所在地で、そこから溝に流入しさらに水流によって運ばれた可能性が高いものと考える。

14は享徳三(1454)年銘の板碑破片であり、撹乱混入品である。

15～21は木器類である。15は小型の漆器皿である。高台径が大きく、立上がりが短い特徴的な器形を示し、内面にはロクロ目を顕著に残す。高台内にはロクロ爪痕3個を残し、抉り込みをほとんど行っていない。漆膜は剥離しているが、木地表面は黒味を帯びている。16は漆器椀である。体部は丸みを帯び、内湾気味に立ち上がる。漆膜はほとんど剥落しており、炭粉渋下地上に刷毛で塗った生漆が残る。このような浅い椀の類例として12～13世紀の総黒色漆器がある。17は握り槌である。手斧による粗削りな製品であるが、両端部には使用痕があり、握り部も摩耗している。藁打ち用であろう。18は建築材の木端である。断面形は蒲鉾形である。上端に鉈調整痕があり、下端は折損している。19も建築材の木端であろう。断面は7分角の正方形で、上端が面取りされている。下端は鋸引きのまま調整がされていないので、寸法合わせの際に切り落とされたものであろう。20は瓢箪製の容器である。瓢箪の頭の部分を刀子で水平に切り取っただけのもので、内側には手を加えていない。21は板材である。桧と推定される柾目板で下端は鋸で切断されている。左右両側は割れ、上端も切断されている。図版49左下は竹製の笊である。長径23.0 cm、短径16.0 cm、深さは6.0 cmある。幅0.4 cmの竹を1.1 cm間幅に組んで六角形の篭目を作り出している。縁の部分は腐食して残っていない。

第35号溝の年代は、ひとまず中国製緑釉盤から13世紀頃と推定するが、ロクロかわらけが主体となっていながら、一部に手捏ねかわらけが残存することから、13世紀前半でも遅い時期、言い換えれば13世紀中葉を充てるべきであろう。

第46号溝（第41図）

E・F－8・9グリッドに位置する。A3区の中央部にあり、上手の端部は第62号井戸の北側に隣接し、これに立上がり部の一部を切られている。また、中程の位置から下手で一段深く掘り込まれているが、その付近で第45号溝に切られている。下手の端部は第35号溝との接点である。全長15.1 m、幅0.48～0.78 m、深さ0.18～0.51 mを測る。主軸方向はN－50°－Wを示す。断面形はV字形である。若干蛇行しているが、ほぼ直線をなし、底部のレベルは標高11.7 m平均である。中世居館の排水を目的とする溝であった可能性が高い。

遺物の量は少なかったが、遺構の年代を示す資料を図示した。1と2は中国製青磁碗である。ともに外面を片切り彫りの蓮弁文とし、内面は無文である。山本信夫氏編年の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5a類に相当し、

E期（13世紀初頭～前半）の時期を与えられている。1はオリーブ灰色、2は明青緑色を呈する。

3は山茶碗系の片口鉢で、須恵器質の焼き上がりである。断面逆台形の高台がしっかり取り付けられ、体部に丸みを有するのは中野晴久氏編年の1b型式の特徴で、西暦1131年～1150年の年代が付与されている。

4は緑泥片岩製の円盤状の石製品である。周縁部は擦り切り調整を施している。用途ははっきりしないが、毛呂山町堂山下遺跡と同町崇徳寺から類品が出土しており、火葬蔵骨器の蓋とされている。

このほか、図示できなかったが、手捏ねを含むかわらけ片78.3g、流れ込みと見られる律令時代の須恵器杯片73.3g、土師器甕片52.4gなどが出土している。

第46号溝の年代は青磁碗の廃棄された13世紀前半の遅い時期を想定しておきたい。

第48号溝（第41図）

F－8・9グリッドに位置する。A3区の中央部やや南にある。全長7.1m、幅0.42m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形である。第27号井戸と第25号溝に切られ、第23号井戸と第50号溝を切っている。

遺物は少ないが、残存率の高いかわらけ(1)が溝底に貼り付いて出土しており、遺構の年代を示すとみてよいだろう。器形は底広で、口縁部が外反する特徴的なものである。内底部に静止指ナデを加え、外底面には回転糸切離し痕とスノコ状圧痕が明瞭に残る。田中信氏編年のB2類№52として示したものと極めて良く似ている。Ⅳa期（14世紀前葉～15世紀初頭の間の第1三半期）に位置づけられている。ほぼ14世紀前葉に比定してよいだろう。

2は鋳型の内型である。土製の素焼き品である。水簸した粘土で砂粒は含まないが、雲母を含む。焼成は甘く、軟質である。大型品の鋳型であり、緩やかな曲面が残るが、容器ではないようである。鋳込み面が残り表面は黒変している。第20号溝（B区）一括出土の破片が接合している。

第50号溝（第41図）

F－8・9グリッドに位置する。A3区にあり、第25号井戸の排水溝と推定される。全長5.5m、幅0.42m、深さ0.09mを測る。断面形はU字形である。第48号溝と第25号溝に切られている。

遺物は細片が多く、図示できなかったが、土師器甕片2.1g、かわらけ（ロクロ使用のもの）21.7g、中国製白磁片1点1.9g、渥美焼甕片1点67.3g、常滑焼長頸壷片1点29.2g、被熱礫1点350gがある。中世前期の遺物が揃っており、渥美焼の甕を重視すれば、13世紀前半以前の年代を比定することが可能である。

第64号溝（第40図）

F・G・H－11グリッドに位置する。A2区の中央部にあり、鍵の手形を呈する。上手は西側に向き、下手は北に向かう。第63号溝に切られている。全長16.8m、幅0.86m、深さ0.34mを測る。断面形は逆台形である。

遺物は多くないが、下層の粘土層内から木器類も出土している。1は須恵器坏である。胎土に海面骨針を含む。底部は回転糸切り離しである。流れ込みの混入品である。

2は残存率の高いかわらけで、溝の年代の指標となろう。水簸した粘土を使用し、砂粒をほとんど含まないが、雲母粒子を多量含む。内底面に静止指ナデ調整があり、外底面には回転糸切り痕と作業台の板目が残る。身の深い坏形で、立上がり部に2段のロクロ目が巡り、口縁端部は面取りが施されている。田中信氏編年のB3類に相当し、Ⅲc期（13世紀末から14世紀初頭）に比定されよう。

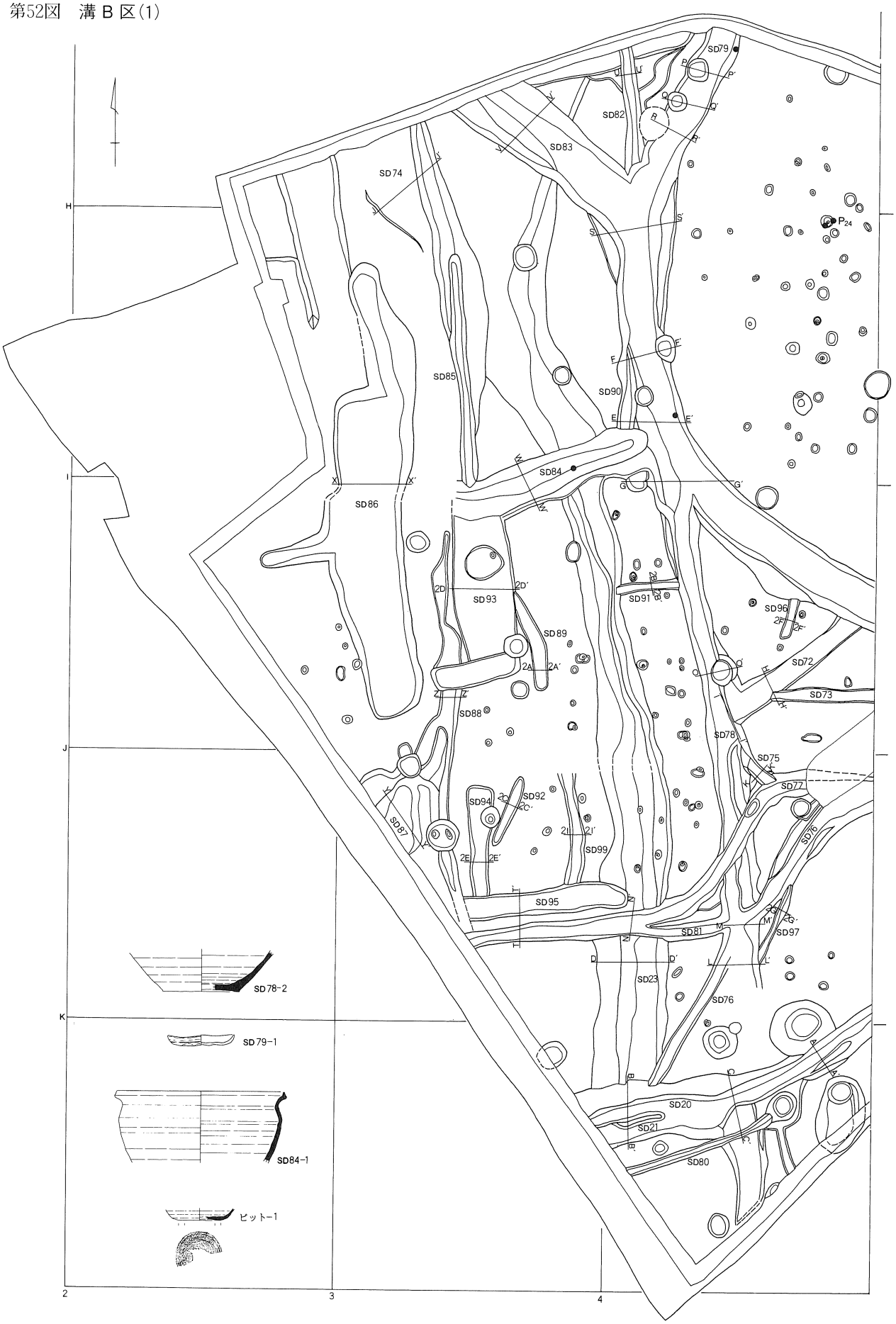
3は火打石である。硬質半透明の石英塊で使用の際にできた敲打痕がある。

4は桶板である。曲率から直径44cmの浅い桶（半切）と推定できる。水が張られた状態で火を受けたらしく、内外面とも底板の高さから上だけが焦げている。飼馬桶の可能性がある。

5は丸太材である。樹齢は15年前後。上端は斧による切断、下端は鋸引きである。建築材の端材であろう。

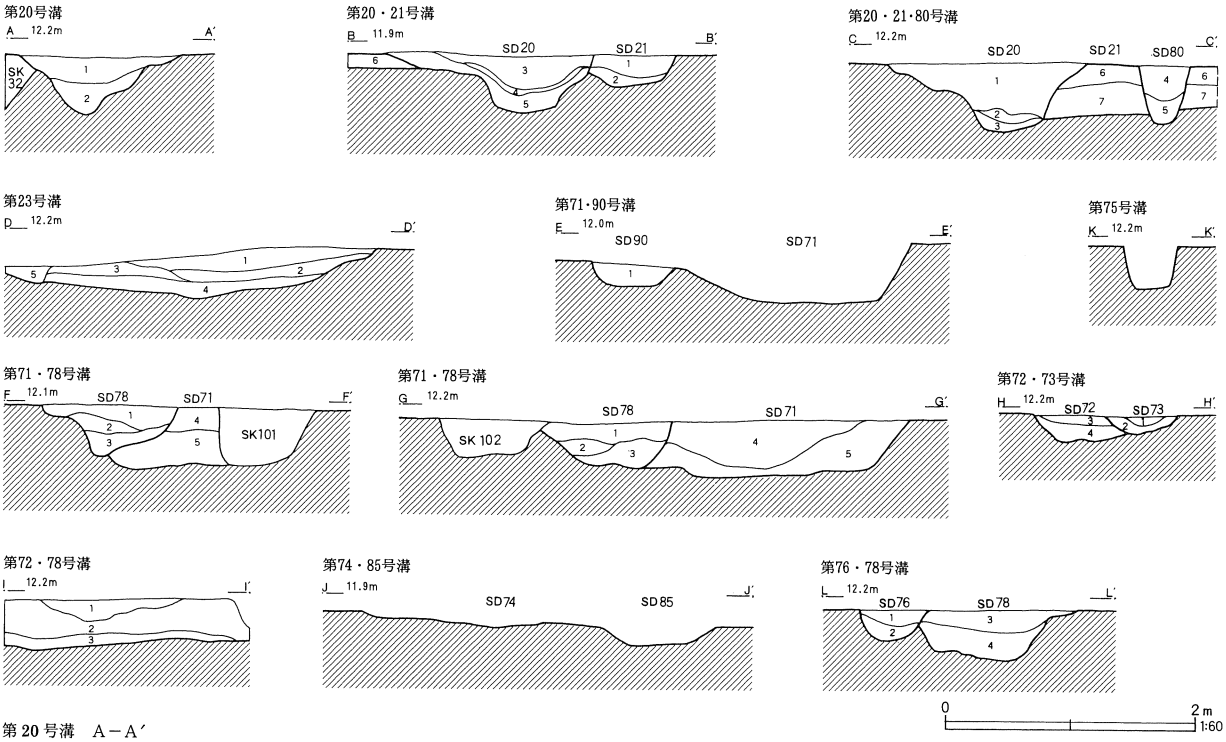
6は折敷である。二次的に俎板として使用されたらしく、包丁疵がある。

第52図　溝Ｂ区(1)


SD79
SD82
SD83
SD74
SD85
SD90
SD84
SD86
SD93
SD91
SD96
SD72
SD73
SD89
SD88
SD78
SD75
SD77
SD76
SD87
SD94
SD92
SD99
SD95
SD81
SD97
SD23
SD20
SD21
SD80
P24
SD78-2
SD79-1
SD84-1
ピット-1
H
I
J
K
2
3
4

H
I
J
K
5
6
7
撹乱
撹乱
撹乱
SD 98
SD 71
SD 73
SD20
2-H
2-H'
0
10 m
1:200

第53図　溝Ｂ区(2)



第20号溝　A－A′

1　灰褐色粘土　褐色土粒子、少量の炭化粒子・焼土粒子。灰黄褐色土粒子・ブロックを少量混入。粘性強、しまり強。

2　褐灰色粘土　褐色土粒子。灰黄褐色土粒子極少量混入。粘性強、しまりやや強。

第20・21号溝　B－B′

1　褐灰色粘性土　炭化物・灰黄褐色土粒子少量、褐色土粒子多量。粘性やや強、しまり強。

2　褐灰色粘土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子、明褐色土粒子・小ブロック。粘性強、しまり強。

3　褐灰色粘土　焼土粒子、炭化粒子、灰黄褐色土粒子、多量の褐色土粒子。粘性・しまり強。

4　灰黄褐色粘土　褐色土粒子。粘性・しまり強。

5　褐灰色粘土　焼土粒子、褐色土粒子、少量の炭化粒子。粘性・しまり強。

6　褐灰色粘土　褐色土粒子、灰黄褐色土粒子ブロック。粘性・しまり強。

第20・21・80号溝　C－C′

1　褐灰色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子・小ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

2　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子多量、褐灰色土粒子。粘性やや強、しまり強。

3　灰黄褐色粘土　褐色土粒子、褐灰色土粒子少量。粘性・しまり強。

4　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色粒子多量。明灰黄褐粒子・ブロックを混入。粘性・しまりやや強。

5　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子少量。粘性・しまりやや強。

6　褐灰色粘性土　焼土粒子、炭化粒子。褐色土粒子多量。灰黄褐色土粒子少量混入。粘性やや強、しまり強。

7　褐灰色粘性土　焼土粒子、炭化粒子少量。明灰黄褐色土、灰黄褐色土粒子を層状に混入。粘性やや強、しまり強。

第23号溝　D－D′

1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、褐色土粒子多量。明灰黄褐色土粒子を少量混入。粘性やや強、しまり強。

2　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、多量の褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子・小ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

3　褐灰色粘性土　白色微粒子、焼土粒子、多量の褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子を混入。粘性やや強、しまり強。

4　褐灰色粘土　褐色土粒子多量。明灰黄褐色土粒子を混入。粘性・しまり強。

5　灰黄褐色粘土　褐色土粒子多量。明灰黄褐色土粒子・小ブロックを混入。粘性・しまり強。

第71・90溝　E－E′

1　褐灰色土　炭化粒子少量、褐色粒子多量。灰黄褐色度粒子を少量混入。粘性やや強、しまり強。

第71・78号溝　F－F′　G－G′

1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子。にぶい黄褐色土粒子、ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

2　にぶい黄褐色粘性土　焼土粒子少量、褐色土粒子多量。灰黄褐色土粒子、ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

3　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、褐色土粒子多量。明灰黄褐色土ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

4　灰黄褐色粘性土　1層よりやや明るい。焼土粒子少量、褐色土粒子。黄灰色土ブロック少量混入。粘性やや強、しまり強。

5　灰黄褐色粘性土　3層より暗い。焼土粒子少量、炭化粒子、褐色土粒子・暗褐色土粒子多量。にぶい黄褐色土、黄灰色土粒子、小ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

第72・73号溝　H－H′

1　灰黄褐色土　攪乱

2　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子、明灰黄褐色土粒子・ブロック多量。粘性やや強、しまり強。

3　褐色粘性土　褐色土粒子多量、灰黄褐色土粒子を混入。粘性やや強、しまり強。

4　にぶい黄褐色粘性土　褐色土粒子多量、灰黄褐色土粒子、明灰黄褐色土ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

第72・78号溝　I－I′

1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子多量。明灰黄褐色土粒子を混入。粘性やや強、しまり強。(SD－72覆土)

2　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子・ブロックを少量混入。粘性強、しまり強。

3　灰黄褐色粘性土　極少量の焼土粒子、炭化粒子。灰黄褐色土粒子・ブロックを多量混入。粘性やや強、しまり強。

第76・78号溝　L－L′

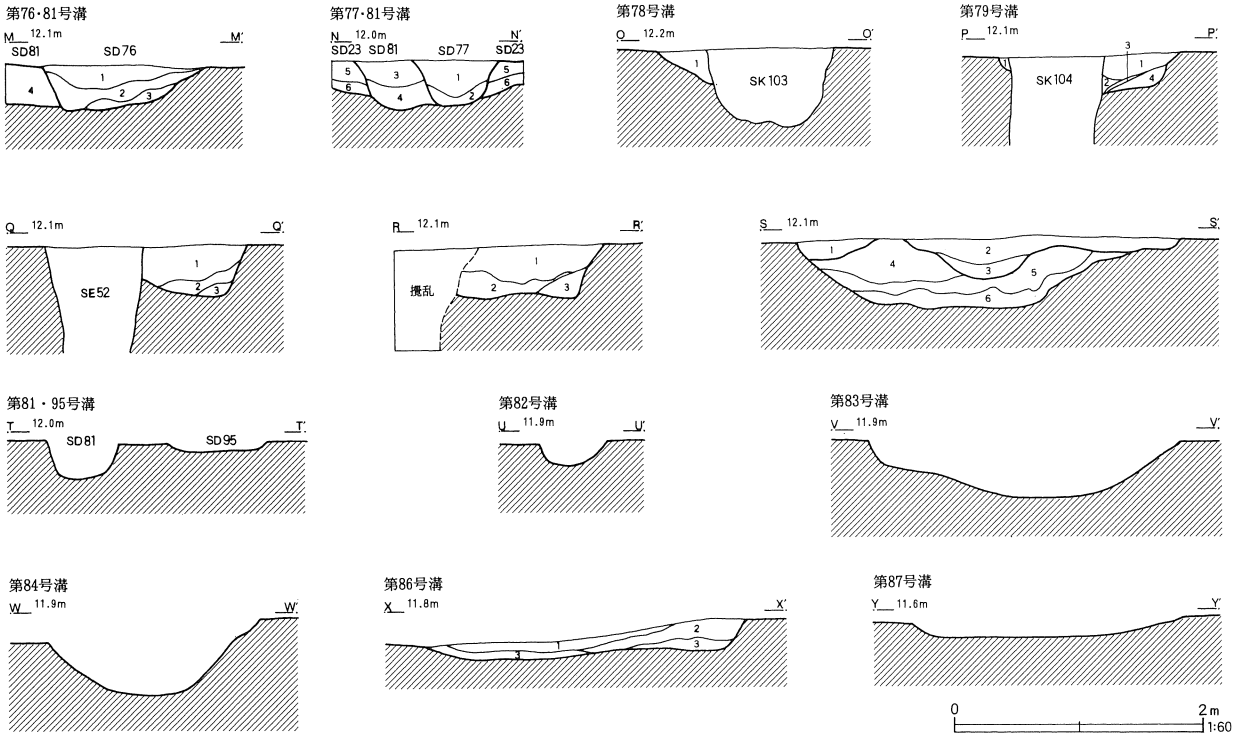
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子・小ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

2　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子・小ブロックを多く混入。粘性やや強、しまり強。

3　褐灰色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子多量。明灰黄褐色土粒子・小ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

4　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子多量。明灰黄褐色土粒子・ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

第54図　溝 B 区(3)



第 76・81 号溝　M－M′

1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子・小ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

2　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子・小ブロックを多く混入。粘性やや強、しまり強。

3　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子多量。明灰黄褐色土粒子・ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

4　灰黄褐色粘性土　1・2層よりやや暗い。焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子、明灰黄褐色土粒子・小ブロック混入。粘性やや強、しまり強。

第 77・81 号溝　N－N′

1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子多量。明灰黄褐色土粒子、褐灰色土粒子、小ブロックを多く混入。粘性やや強、しまり強。

2　褐灰色粘性土　焼土粒子少量、炭化粒子、褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子、明褐灰色土粒子少量混入。粘性やや強、しまり強。

3　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、炭化粒子、褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子・ブロック、褐灰色土粒子を混入。粘性やや強、しまり強。

4　褐灰色粘性土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子。明灰黄褐色土粒子少量。粘性やや強、しまり強。

5　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、炭化粒子、褐色土粒子多量。明褐灰色土粒子混入。粘性やや強、しまり強。

6　灰黄褐色粘性土　5層より暗い。焼土粒子少量、炭化粒子、褐色土粒子、暗褐色土粒子多量。明褐灰色土粒子を混入。粘性やや強、しまり強。

第 78 号溝　O－O′

1　にぶい黄褐色粘性土　褐色粒子。黒色土ブロックを少量混入。粘性・しまりやや強。

第 79 号溝　P－P′

1　灰黄褐色粘性土　炭化粒子少量、褐色土粒子多量。にぶい黄褐色土、暗緑灰色土小ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

2　暗緑灰色粘土　褐色土粒子少量。粘性強、しまりやや強。

3　黒褐色シルト　炭化粒子多量。

4　灰黄褐色粘性土　炭化物少量、褐色土粒子多量。明灰黄褐色土ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

第 79 号溝　Q－Q′　R－R′

1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、褐色土粒子多量。褐灰色土粒子・ブロックを多く混入。粘性やや強、しまり強。

2　褐灰色粘性土　褐色土粒子多量。明灰黄褐色土粒子を少量混入。粘性やや強、しまり強。

3　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子多量。褐灰色土粒子を少量混入。粘性やや強、しまり強。

第 79 号溝　S－S′

1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子多量、褐色土粒子。粘性やや強、しまり強。(SD－90 覆土)

2　褐色粘性土　白色微粒子・焼土粒子少量、褐色土粒子多量。粘性やや強、しまり強。(SD－78 覆土)

3　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、・炭化粒子、褐色土粒子多量。粘性やや強、しまり強。(SD－78 覆土)

4　褐灰色粘性土　2層より暗い。白色微粒子、褐色土粒子・暗褐色土粒子多量。明灰黄褐色土、暗灰色土粒子、小ブロックを多く混入。粘性やや強、しまり強。

5　褐灰色粘性土　4層より暗い。白色微粒子、褐色土粒子・暗褐色土多量。明灰黄褐色土、暗灰色土粒子、大ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

6　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子多量。明灰黄褐色土、明灰色土粒子、ブロック多く混入。粘性やや強、しまり強。

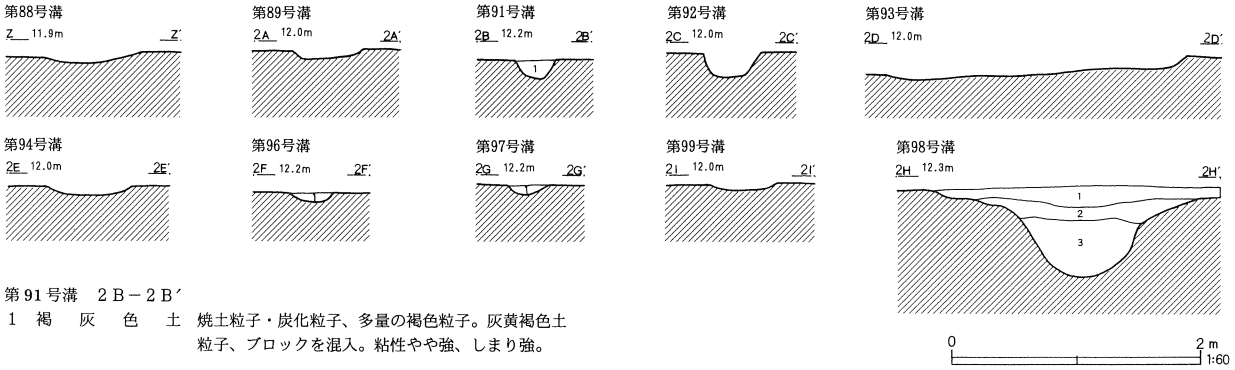
第 86 号溝　X－X′

1　黒褐色粘性土　炭化物多量、褐色土粒子。灰黄褐色土粒子・小ブロック、褐灰色土粒子・小ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

2　褐灰色粘性土　炭化粒子、褐色土粒子。緑灰色土粒子、灰黄褐色土粒子を混入。粘性やや強、しまり強。

3　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、褐色土粒子。褐灰色土粒子少量混入。粘性やや強、しまり強。

第55図　溝Ｂ区(4)



第91号溝　2Ｂ－2Ｂ′
1　褐　灰　色　土　焼土粒子・炭化粒子、多量の褐色粒子。灰黄褐色土粒子、ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。

第96号溝　2Ｆ－2Ｆ′
1　灰　黄　褐　色　土　焼土粒子少量、褐色粒子多量。灰黄褐色土粒子を混入。粘性やや強、しまり強。

第97号溝　2Ｇ－2Ｇ′
1　にぶい黄褐色土　炭化粒子、褐色粒子少量。灰黄褐色土粒子混入。粘性やや強、しまり強。

第98号溝　2Ｈ－2Ｈ′
1　褐　色　粘　性　土　表土　焼土粒子、炭化粒子、褐色土粒子多量。
2　灰黄褐色粘性土　褐色土粒子多量。暗緑灰色土粒子・小ブロックを混入。粘性やや強、しまり強。
3　暗　緑　灰　粘　土　炭化粒子・褐色土粒子少量。灰黄褐色土小ブロック少量混入。粘性強、しまりやや強。

第64号溝の年代は、かわらけから13世紀末から14世紀初頭と考えて良いだろう。伝世を考える必要が無いためである。

第68号溝（第40図）

Ｈ・Ｉ－9・10グリッドに位置する。Ａ2区の南端部にあり、上手は調査区外に延びている。確認全長13.94 m、幅1.93 m、深さ0.15 m を測る。断面形は逆台形である。主軸の方向はＮ－30°－Ｅである。第67号溝に切られている。

1は瀬戸美濃系の灰釉皿である。大窯第4段階後半に類例があり、17世紀初頭に比定できる。2は石製品である。絹雲母片岩の自然石の端部を擦って調整している。用途不明であるが、容器の蓋の可能性もある。3は白木の刀剣の柄部である。二枚合わせになっており、内側は茎の収まるように彫り窪めてあり、目釘孔を伴う。柄頭は面取りし、鞘と接触する側は丸く収めてあるので、呑口式のものであることがわかる。

図示できなかったが、このほかの遺物として、渥美甕片53.5 g、常滑甕片49.4 g、手捏ねかわらけ片32.5 g などがある。

第68号溝の年代は渥美甕と手捏ねかわらけから13世紀後半までは降らず、13世紀前半と見ておきたい。刀剣の鞘も同時期のものと見て差支えない。

第71号溝（第52図）

Ｈ・Ｉ－4グリッドに位置する。Ｂ区中央部にあり、第79号溝とはひとつながりのものである。調査の便宜上、第83号溝の分岐点までを第71号溝と呼称することにした。確認全長35.0 m、幅1.75 m、深さ0.48 m を測る。東よりの部分はＮ－61°－Ｗの主軸方向で直進するが、その後、緩やかに屈曲して第78号溝へ接続する。断面形は逆台形である。第9号住居跡を切り、第78号溝に切られている。

1は須恵器坏、2は須恵器埦である。1は底部回転糸切離し、2は回転糸切離し後周辺部にヘラケズリを加えている。遺構より古い遺物であり、第9号住居跡を破壊した際に流れ込んだ可能性が考えられる。

3は中国製青磁碗である。見込に劃花文があり、細かい線彫りのほか櫛目文もある。釉色はライトグリーンである。山本信夫氏編年の龍泉窯系青磁碗Ｉ2ｂ類に相当し、Ｄ期（12世紀中頃から後半）の時期を与えられている。

4は雁又鏃である。復元全長10㎝前後の大型品である。関が台状である点が特徴的で、11世紀に出現するが、戦国期まで残るという。

図示できなかったが、他の遺物には渥美甕片57.3 g がある。

第71号溝の年代は12世紀中頃以降13世紀前半までの広い幅しか与えることができないが、第79号溝とした部分の遺物で限定することが可能であろう。

第72号溝（第52図）

I－4グリッドに位置する。B区の中央部にあり、第71号溝と第78号溝に挟まれている。

全長5.8m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。断面形は逆台形である。

遺物の量は少なかった。1は灰釉印花文瓶子である。上部に唐草文の一部がみえる。外面には明黄褐色の奇麗な釉薬が施釉されている。古瀬戸中期の製品で、13世紀末から14世紀に比定できる。

2は用途不明の鉄製品である。鉄鏃に外形が似るが刃はつけられていない。

第72号溝の年代は古瀬戸を根拠に13世紀末から14世紀代とみておきたい。

第75号溝（第52図）

J－4グリッドに位置する。B区中央部やや南側にある。第77溝と第78溝に挟まれている。

全長2.0m、幅0.42m、深さ0.34mを測る。断面形はU字形である。

遺物の量は少なかった。1は錆化が著しいが、X線写真によって開元通寶と確認された。初鋳は西暦671年であるが、唐代を通じて鋳造されたといわれる。2は元豊通寶の篆書銭である。初鋳は北宗の元豊元(1078)年である。

他の遺物に渥美焼甕片1点74.7gがある。

第75号溝の年代は、13世紀前半を前後する時期と見ておきたい。

第76号溝（第52図）

J・K－4グリッドに位置する。B区南部にあり、北半部は第75号溝を切る形で重複している。第81号溝と交差し、これを切っている。また、南端は第20号溝に切られている。全長12.4m、幅0.54m、深さ0.24mを測る。断面形はU字形である。

遺物は渥美焼の壷1点のみであった。丸みのある肩部から「く」の字状の頸部に移行する。外面には白色の自然降灰が厚くかかる。中野編年のⅡ期（12世紀第3四半期）の常滑焼に併行するものであろう。

第76号溝の年代は、第75号溝より新しいので、13世紀後半頃を充てておきたい。

第77号溝（第52図）

J－4グリッドに位置する。B区南部にあり、第75号溝との交点から第81号溝の交点までとしたが、土層断面の観察から、第81号溝の西半部とした部分も本溝と判明した。したがって、クランク個所を持つ東西方向の溝となる。東側に3m離れ平行する第75・81号溝（ひとつながりの溝）が先行することから、本溝はその掘り直し溝であり、クランク部分はすこし西側にずらして掘削されたものとの推測が可能である。確認全長16.8m、幅0.68m、深さ0.46mを測る。断面形はU字形である。第23号溝と第81号溝を切り、西端は調査区外に延びている。

遺物は少量であった。1は須恵器高台付椀、2は須恵器坏である。2の底部は回転糸切り放しである。遺構より古いので、流れ込みの遺物である。

3は短刀の刃部破片である。第74号土壙および198号柱穴から出土した完形品と比較すると、鎬のない直刃である点が共通しており、ほぼ同形、同大の短刀の切先に近い部分と推察できる。

4と5は石製品である。4は灰白色の角閃石安山岩浮石製の浮子である。多孔質で軽量。中心孔は両面から穿孔されている。5は石英閃緑岩製の磨石である。自然礫を利用し、中央部がわずかにくぼみ、線条痕が多数認められる。裏面も使用しているが、頻度は低い。ともに縄文時代後期に所属するものであろう。

第77号溝の年代は、中国製青磁を出土した第81号溝より新しいものの、3の短刀からみて中世前期として良いものと思われる。

第78号溝（第52図）

I・J－4グリッドに位置する。B区中央部にあり、南北方向に走るほぼ直線状の溝である。上手の部分で延長13mが第71号溝と重複しており、土層断面から第71号溝を切っていることが確かである。逆に第72号溝、

第76号溝、第102号土壙、第103号土壙の各遺構には切られている関係にある。全長30.0m、幅1.08～1.3m、深さ0.4mを測る。断面形はU字形である。

遺物は豊富で、多量のかわらけ、中世陶器、中国製青磁、鉄器などが出土している。

1は須恵器長頸瓶で、南比企産である。2は小型の須恵器甕でやはり南比企産である。ともに流れ込み遺物である。

3は伊勢型土鍋である。緩やかに屈曲してから水平に開く口縁部の内側に折返し凸帯が貼られている。外面には煤が付着している。尾野善裕氏の編年によれば、中世Ⅱ期（1151～1270年）に伊勢型鍋の偏球形化が始まり、Ⅲ期以降もそれが進行していくという。ここでは12世紀後半から13世紀中葉の幅の中で捉えて置こうと思う。

4～9は中国製青磁碗である。4は口縁部内面に2重圏線が巡り、その下に浅い劃花文を施す。山本編年の龍泉窯系Ⅰ2b類に相当し、D期（12世紀中頃～後半）に比定されている。5は口縁部内面に3重圏線が巡り、その下に猫描きの唐草文が彫刻されている。山本編年の龍泉窯系Ⅰ4a類に相当し、D期（12世紀中頃～後半）に比定されている。6は口縁部内面に圏線はなく、片切彫の劃花文の特徴から山本氏資料のうち龍泉窯系№11に類似する。E期（13世紀前半）まで下降するという。7は内面の劃花文は龍泉窯系Ⅰ2a類の草花文に類似するが、外面に型打ちと推定される連弁文が伴い異例である。釉色が灰色で白濁する点などから地方窯産かもしれない。8は外面に鎬連弁文があり、内面は無文である。山本編年の龍泉窯系Ⅰ5b類に相当し、E期（1200年前後～13世紀前半）に比定されている。9は内外面とも無文であり山本編年の龍泉窯系Ⅰ1類に相当し、D期（12世紀中頃～後半）に比定されている。器肉が厚く、高台径が大きい。

10～40はかわらけである。接合を限界まで試みた結果、実測個体31点、他に、個体識別のできる破片が23個体分あった。合計54個体のかわらけが確認された訳である。1～34は手捏ねのかわらけである。そのうち10～24と27は小型皿である。10は小型品の中で最も小さく、復元口径5.9cm、器高0.8cmである。他のものは口径が8～9cmに収まるグループ（11・12・13・15・16・17・21・27）と口径が9.1～10cmに収まるグループ（14・19・20・23）に分かれる。18は小型皿の中では最も口径が大きく、10.2cmである。これらの小皿群を形態分類すると、4類に分かれる。第Ⅰ類は体部が丸く、底部との境界が不明瞭で、口縁部が内湾して立ち上がるものである。これらは胎土に砂粒が入り、焼成が良く、総じて薄手のものa類（10・13～15）と水簸した粘土を使用し、軟質でやや厚手のものb類（16・18・19）とに分かつことができる。第Ⅱ類は底部がほぼ平坦で、口縁部が直線的に開くもの（17・20・21）である。焼成が良く、調整も丁寧なものa類（17・20）と水簸した粘土を使用し、軟質でやや厚手のものb類（21）とに分かつことができる。第Ⅲ類は第Ⅰ類と同じく体部は丸いが、口縁部が強いヨコナデによって直立するもの（11・22・23・27）である。焼成が良いものa類（22・23・27）と水簸した粘土を使用し、軟質なものb類（11）に分かつことができる。12については底部が平坦な点は第Ⅱ類に近いが、口縁部が直立気味な点で第Ⅲ類とも共通点を持っている。いちおう第Ⅱ類の亜種としておきたい。第Ⅳ類は器高が高く、坏形のもので、体部が直線的に開いた後、口縁部が内傾するもの（24）である。

25・26・28～31・40は手捏ねの大皿である。口径は14cmから15.8cmの間に収まるが、15cm前後のものが多い。形態分類を試みると2類に分かれる。第Ⅰ類は底部と立上がり部の境界に鋭い稜の巡るものである。底部が丸底のもの1類（30・33）と底広で上げ底気味のもの2類（26・31・34）とに分かつことができる。これらのうち、30・31は水簸した粘土を用いており、軟質である。第Ⅱ類は口縁部が直線的に開き、底部と体部の境界が不明瞭なもの（25・28・29）である。これらのうち29は水簸した粘土を用いており、軟質である。なお、31の外底面にはスノコ状圧痕、29の内面には炭化物が付着している。後者からは食

器を洗わないで処分していることが窺われる。

35～39はロクロを利用したかわらけ小皿である口径は9から10㎝の間に収まる。底部が分厚く、回転糸切り離しである点は共通するが、形態から2類に分かれる。第Ⅰ類は口縁部が直線的に開き浅いもの(35)である。第Ⅱ類は体部が丸く、内湾して立上がり、口唇部で尖るもの(37・38)である。

41は鉄釉貼花文瓶子である。巴文の貼花文の一部が残る。釉色は極暗赤褐色である。藤沢良祐氏の古瀬戸編年では中Ⅰ期から中Ⅲ期に例がある。13世紀末から14世紀後葉の幅で把握することができる。

42は土塊状の調整度の低い手捏ね土製品で、かわらけと共通する粉っぽい粘土を用いている。分銅形に復元して良いなら、箸置きの可能性が考えられようか。

43は鎧の小札である。3列19個の威孔が開けられている。三目札は平安時代後期から南北朝時代まで使用されたが、小札の寸法からみると、平安時代のものはもっと大きく、鎌倉時代という明眼院のものと南北朝時代の金剛院蔵洗革威の小札に近似する。

44は角釘である。頭の部分は叩き伸ばして拵えたものである。先端を欠き、現存長は5.4㎝。すこし捩じれている。

第78号溝の年代を想定する際、最新の遺物は鉄釉瓶子で13世紀末まで降るが、多数出土しているかわらけの多数が手捏ねで、12世紀末から13世紀前半代と考えられていることを重視すれば、小破片でもあり、混入品と考えるのが自然であろう。中国製青磁の中で最も新しいものが13世紀前半に比定されていること、手捏ねかわらけに初期の口縁部2段ナデのものを含まない点を考え合わせると、遺構の年代を13世紀中葉でも前半に入る時期を充てるべきと思われる。

第79号溝（第52図）

G・H－4グリッドに位置する。B区北端にあり、第71号溝と一体のものである。この部分の全長は5.6mであるから、第71号溝の確認総延長は40.6mとなる。幅1.44m、深さ0.36mを測る。断面形は逆台形である。

遺物は少量であった。1は手捏ねのかわらけ小皿で口径は10.0㎝である。底部は指頭押えよって波打っている。

2は中国製青磁碗である。外面には間隔の疎い鎬文、内面には猫描きの劃花文とハケ目文がある。山本信夫氏編年によれば、初期龍泉窯系もしくは同安窯系青磁碗O類に相当し、C期（11世紀後半～12世紀前半）に比定されている。このO類の出土例は少数かつ局地的であるとされる。

実測できなかったが、他の遺物として、土壁を含む焼土塊58.9ｇ、常滑焼片、伊勢型土鍋体部破片かと思われるものなどがある。

第79号溝は第71号溝と併せて年代を想定する必要があるが、遺構の切り合いから第78号溝より古く、手捏ねのかわらけと古手の青磁碗を出土することから、13世紀前葉を充てておきたい。

第81号溝（第52図）

J－3グリッドに位置する。B区中央南よりにあり、第76号溝と第77号溝に切られている。また、第78号溝を切っている。全長4.6ｍ、幅0.54ｍ、深さ0.3ｍを測る。断面形はU字形である。

出土遺物は少量であった。1は中国製青磁碗である。内底面に片切り彫りの劃花文があり、その意匠から山本信夫氏が掲げた龍泉窯系青磁№4と確認できる。Ⅰ2ｂ類に相当し、D期（12世紀中頃～後半）に比定されている。

図示できなかったが、他の遺物として、かわらけ片44.3ｇ、片岩30ｇ、鋳型破片76.7ｇなどがある。かわらけは粉っぽい質のもので、やや年代が下るものと思われる。

第81号溝の年代は第78号溝を切っていることから、13世紀後半以降であり、14世紀に入る可能性もありうる。

第82号溝（第52図）

G－4グリッドに位置する。B区北端にある小溝である。確認全長4.3ｍ、幅0.52ｍ、深さ0.17ｍを測る。断面形はU字形である。その走行方向からみて第90号溝と一体のものであった可能性がある。

土層断面で見る限り、第71号溝より古い。

出土遺物はかわらけが1点であったが、残存率が良く、遺構の年代決定に使用できるものと考える。

1は、ロクロを利用したかわらけである。底部に低い柱状高台を持ち、口縁部は直線的に開く。口唇部は肥厚する。全体に歪みが著しい。胎土は精良で、砂の含有は少ない。焼成は良好で、茶褐色を呈する。内底面に静止ユビナデ痕、外底面に回転糸切り痕とスノコ状圧痕とが明瞭に残る。第78号溝に同タイプのものがあるが、本例の方が先行する特徴を備えており、ロクロかわらけとしては古手のものとなろう。

第82号溝の年代は12世紀末ころを充てておきたい。

第83号溝（第52図）

G・H－3・4グリッドに位置する。B区北端にあり、第71・79溝と同時存在の可能性が高い。全長8.0m、幅2.46m、深さ0.45mを測る。断面形はU字形である。

遺物は手捏ねのかわらけ小皿である。口径は8.2㎝。胎土に砂礫を多く含む。外底面と立上がり下端をヘラケズリしている。内面には煤らしきものが付着している。田中信氏編年ではC1類として類似例が図示されており、Ⅱa期（12世紀末～13世紀前半内の早い時期）に比定されている。

第83号溝の年代は13世紀前葉に充てておきたい。

第86号溝（第52図）

H・I－2・3グリッドに位置する。B区西端にある。全長16.8m、幅2.5m、深さ0.26mを測る。断面形は逆台形である。平面形は長さ幅2.5m、12.3mの溝の北側と西側にそれぞれ小溝が取り付く形態である。

遺物の量は少量であった。1は小片からの復元実測であるが、浅い小皿形の手捏ねかわらけである。口径は8.3㎝。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口唇部は肥厚する。口縁部のヨコナデ後に、内面をささら状工具によって「の」字状にナデ上げている。胎土には砂粒の含有は少なく、橙褐色を呈するが、器肉の部分が黒色である。

2はロクロ成形のかわらけ大皿である。底部付近の器肉は分厚い。外底面には回転糸切離し痕にナデを加えており、その後に板状圧痕も付着している。内底面にはヨコナデ終了後に三本指で行う静止ナデが明瞭に認められる。胎土は水簸されているようで、砂粒は少ないが、酸化鉄粒子が目立ち、粉っぽい。なお、内底面に墨書きの小さな円（長径1.6㎝）が残っている。

3は中国製青磁碗である。底部の器肉の厚さは1.5㎝と分厚い。焼成のやや不具合の製品で、オリーブ色の釉に白色の斑が生じている。また、高台内は無施釉であり、灰赤褐色を呈している。山本信夫氏編年の龍泉窯系青磁碗Ⅰ1類（無文）に該当し、D期（12世紀中頃～後半）の年代を与えられている。

4は鋳型である。土製、素焼きで、水簸した粘土を使用し、雲母を含んでいる。全体に還元して褐灰色を呈する。外径30㎝に復元でき、鉄鍋の内型と推定される。鋳込み面とその剥離した部分が残存し、黒変している。鋳型は製品を取り出す際に、叩き割ったような割れ方を示している。

これらの遺物から、86号溝の年代は13世紀前葉を充てておきたい。

（3）中世後期の溝

第3号溝（第42図）

A－12・13、B－10・11・13、C－9・10、D－8・9グリッドに位置する。A3・4区の西端にある。走行方向はN－54°－Eである。全長53.0m、幅2.0m、深さ0.16mを測る。断面形は逆台形である。第8号土壙を切り、第25号・26号に切られている。

遺物は遺構の規模の割に少量であった。1はロクロ成形のかわらけである。外底面には回転糸切離し痕とスノコ状圧痕とが認められる。内面には強いロクロ目があり、油煙が付着しているので、灯明皿として用いられたものである。胎土には細かい砂粒、雲母、白色針状物質、酸化鉄粒子などが含まれている。口縁部の形態が分からないが、おそらく田中信氏編年のA2類に相当し、ⅢC期（13世紀後半～14世紀初頭の

間の最も遅い時期）に比定されるものであろう。

図化はできなかったが、このほかの遺物として、須恵器片、土師器甕片、焙烙片200 g、染付蓋10.2 g、天目碗片3.6 g、瀬戸焼灰釉皿片5 g、砥石1点50 g、鉄釉壷片、銅緑釉唐津碗片などが出土した。近世初頭の溝である第25号溝に切られていることと、東西方向の溝である第6・7・8・11・52・53溝を切っている可能性が高いことから、中世後期、より限定すれば、16世紀後半を充てておきたい。

第5号溝（第42図）

A－13、B－12・13グリッドに位置する。A4区の北側にある。全長12.1 m、幅0.38 m、深さ0.05 m を測る。断面形はU字形である。

遺物は少量で、細片のため図示しなかったが、古瀬戸後Ⅱ期（14世紀末～15世紀初頭）の香炉口縁部破片1点13.1 g、土鍋片60 g、かわらけ片がある。

第5号溝の年代は15世紀初頭を充てておきたい。

第6号溝（第42図）

B－12グリッドに位置する。A4区の中央やや北よりにある。全長8.5 m、幅1.08 m、深さ0.04、0.18 m を測る。断面形はU字形である。第14号溝と直角に交わるが、突き抜けていないので、同時存在を考えて良いだろう。

遺物は僅かで、図示したものはないが、須恵器坏片3.2 g、同甕片50.0 g、土師器甕片2.5 g、かわらけ片5.6 g、鉄塊4.4 g が出土している。

第7号溝（第42図）

B－11・12、C－12グリッドに位置する。A4区にあり、第6号溝の南側に平行している。全長13.0m、幅1.04m、深さ0.18、0.36mを測る。断面形はU字形である。第6号溝同様に、第14号溝と直角に交わるが、突き抜けていないので、同時存在を考えて良いだろう。

遺物は僅かで、図示したものはないが、須恵器甕片26.0 g、土師器甕片12.8 g、同坏片14.0 g、かわらけ片12.3 g、山茶碗系片土口鉢片33.5 g、土鍋片12.5 g などが出土している。

第8号溝（第42図）

B・C－11・12グリッドに位置する。A4区の中央部やや南よりにある。全長17.5 m、幅1.94 m、深さ0.77 m を測る。断面形は逆台形である。第14号溝とは一体をなすものと考えられる。

遺物は図示した漆器椀1点のみであった。腐食が進み、高台の芯の部分のみが残存している。やや高い高台で、畳付内にロクロ爪固定痕がある。

第13号溝（第39図）

E－14・15、F－13・14グリッドに位置する。A1区にあり、ほぼ平行する2本の溝の内、北側のものを a 溝、南側のものを b 溝として扱った。全長 a 21.8、b 21.6 m、幅 a 0.8、b 0.7 m、深さ0.26 m を測る。断面形はV字形である。両者とも第31号溝に切られている。また、第13 b 溝は走行方向から見て、A2区の第37号溝と連続していたものと見られる。第13 a 溝については、南側の延長に第12号井戸があって、その手前で途切れていることから、第12号井戸の排水路であった可能性が高い。

第13 a 溝から中世後期を中心とする遺物が少量出土している。1はロクロ成形のかわらけである。胎土に砂粒をほとんど含まず、水簸と思われるが、酸化鉄粒子が目立つ。橙褐色を呈し、軟質の焼き上がりで、粉っぽい。外底面には静止糸切離し痕が残る。体部のヨコナデが強いため、断面形がくびれ、肥厚気味の口縁部外側に面を持つ特徴的な器形は、田中信氏編年のA4タイプに似ており、Ⅵ期（15世紀末～16世紀後葉）に比定されよう。2は焙烙である。瓦質の焼成で、外面には煤が付着している。耳の位置は不明である。

図示していない他の遺物として、須恵器坏片175 g、須恵器高台坏片50g、須恵器甕片98g、土師器甕片175 g、土鍋片60g、擂鉢片36g、板碑片75gなどがある。

第13 a 溝の年代はかわらけから16世紀後半代を充てておきたい。

第14号溝（第42図）

B・C－12・13グリッドに位置する。A4区中央部にあり、走行方向はN－45°－Eである。第8号溝とはお互いの端部がつながっており、直角を成し

ているので、一体のものと見て誤りないだろう。したがって、方格を意識した区画溝の一部と見なすことができる。全長17.0 m、幅0.96 m、深さ0.43 m を測る。断面形は逆台形である。

遺物は中世遺物を中心として豊富であった。1は回転糸切離しの須恵器坏であるが、遺構より古く、流れ込み品である。2～6はロクロ成形のかわらけである。このうち、2～5は坏形の中皿で、いずれも完形かそれに準じるものである。胎土は共通して砂粒が多く、4と5には白色針状物質が含まれている。色調は4が褐色、それ以外はにぶい黄橙色で近似している。形態的には平底から、体部が直線的に開き、体側が強いヨコナデによって2段にくぼむものである。外底面は回転糸切離しのままのもの（2・3）と出っ張りを削り取っているもの（7）及び全面的にナデを加えるもの（4）とがある。内面には「の」字状の撫で上げが認められる。2・3・5は右回転ロクロであるのに対して、4は左回転ロクロである。したがって、前者と後者は工人が異なる製品と見られる。口径は11.3㎝～12.6㎝で若干のバラツキがある。6は大皿である。外底面には左回転ロクロの回転糸切離し痕が明瞭に残る。内底面には4本の指による静止ナデ技法が認められる。中皿と大皿ともに内面にナデ調整が認められることから、田中信氏編年のⅤ期（15世紀前葉～後葉）に相当し、山茶碗模倣型に属するものといえよう。

7～9は板碑である。7と8は阿弥陀一尊種子で、小型ながら、製作の丁寧なものである。9は阿弥陀三尊種子で永正五（1508）年の紀年銘が刻まれている。

10は砥石である。緑灰色の凝灰岩製の仕上四面砥で、突き鑿を研いだ痕が残る。大工用と思われる。

図化しなかったほかの遺物には、土鍋片340 g、擂鉢片65 g、こね鉢片130 g、常滑焼甕片177 g、中国製青磁碗片2.4 g、鉄滓480 g、中世陶器碗片150 g などがある。

第14号溝の年代は、かわらけを根拠に、15世紀後葉を充て、一定期間管理された後、16世紀中葉ないし後半に至って廃絶され、板碑類が投棄されたものと推測しておきたい。

第15号溝（第42図）

B・C－12グリッドに位置する。A4区中央部にあり、第7号溝・第25号土壙と重複している。全長4.3 m、幅0.88 m、深さ0.26 m を測る。断面形はU字形である。

1はロクロ成形のかわらけである。平底から体部が内湾気味に立ち上がる器形を示す。底部は回転糸切り離しである。砂粒を多量に含み、焼成は良く、橙色を呈する。白色針状物質を含み在地産の可能性がある。小底径で椀形の器形は田中信氏編年のD2類に相当し、Ⅳc期（14世紀前葉～15世紀初頭の間の最も新しい時期）に比定されている。

2は瓦質の土鍋である。推定口径は30.2㎝である。口縁部に段を持ち、内側にループ状の小さな耳が付けられている。外面には煤が付着している。全体の器形が不明なので、15～16世紀の幅の中で把握しておくしかなかろう。3は焙烙である。土師質の焼成で、外面のヨコナデ調整が丁寧に施されている。近世のものと比較して、厚手で、武蔵型のものとしては外反度が強く、身が深い。また、総じて製作が丹念である。外面には煤が付着している。16世紀代と推測される。

図化できなかった他の遺物として、鉄滓176.7 g、板碑片620 g、志野焼片22.2 g などがある。

第15号溝の年代は、最新の遺物である焙烙と志野から16世紀末を充てておきたい。

第17号溝（第39図）

D－14、E－13・14、F－13グリッドに位置する。A1区中央部やや西側にある。確認全長19.3m、幅0.6m、深さ0.24mを測る。断面形は逆台形である。第31号溝に切られているが、A3区の第39号溝と組み合わされて屋敷の構え溝となる可能性が考えられる。なお、溝は北側にさらに延びるが、調査が及ばなかった。

1は古瀬戸折縁深皿である。胎土は灰白色で精良である。内外面ともオリーブ色の灰釉を施釉している。藤沢良祐氏の編年では古瀬戸後Ⅱ期（14世紀末から15世紀初頭）に相当しよう。2は板碑片で、阿弥陀

種子が残る。紀年銘はないが、キリークの正体種子は薬研彫りで大字である点が古い特徴であり、南北朝以前ものものと推測される。3は凝灰岩製の仕上げ砥である。上部で折損しているが、4面を使用し、上面では錐を研いでいる。工具用の砥石と推定される。

図化できなかった他の遺物に、かわらけ片18.5 g、土鍋片380g、常滑焼甕片40g、擂鉢片285gがある。

第17号溝の年代は、15世紀初頭を充てておきたい。

第28号溝（第41図）

D－9・10、E－10グリッドに位置する。A3区北側にある。第32号溝の南側に平行して走っているが、西側で途切れる。しかし、第32号溝の西端部に重複する溝が第28号溝と組む溝となる可能性が高く、その場合、延長7.8mの溝が切れる部分は区画溝の入り口部分となる。東溝は全長12.6m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。西溝は全長1.6m、幅0.5m、深さ0.3mである。断面形は逆台形である。第29号溝を切っている。

遺物は僅かであった。1はロクロ成形のかわらけである。胎土には砂粒をやや多く含む。器形は底部脇のヨコナデが強く、くびれるが、体部はほぼ直線的に開く。外底面は回転糸切離し後にナデを加えている。田中信氏の編年ではA3類の№70と№73の例示土器の過渡期にあるものと推測される。したがって、Ⅴ期とⅥ期の境する15世紀後葉から末の時期を充てておきたい。図示できなかった他の遺物は板碑片1点13.7 gのみである。

第28号溝の時期は、かわらけを根拠に15世紀後葉から末を充てておきたい。

第34号溝（第39図）

F－15・16グリッドに位置する。A1区東端にある。第9号井戸の排水溝である。

全長5.8 m、幅0.3 m、深さ0.06 mを測る。断面形はU字形である。

遺物は僅かで、図示したものはないが、須恵器坏片11.0 g、土師器甕片21.8 g、焙烙片がある。

第34号溝の年代は第9号井戸と同時期であり、年代決定は井戸の既述に譲る。

第39号溝（第40図）

F・G－12、グリッドに位置する。A2区北端にある。全長11.5 m、幅0.28 m、深さ0.15 mを測る。断面形はU字形である。

遺物は皆無であった。しかし、第39号溝が第17号溝と組み合う屋敷の区画溝であれば、15世紀初頭の溝ということになる。

第40号溝（第40図）

F・G－12グリッドに位置する。A2区北端にある。全長11.2 m、幅0.7 m、深さ0.29 mを測る。断面形はU字形で東側に段を持つ肩持ち溝である。溝の西側の延長は確認面を30㎝ほど下げたために失われた可能性が高い。

遺物はごく僅かで、図示しなかったが、須恵器甕片3.7 g、かわらけ（軟質厚手のもの）8.0 g、板碑片1点18.0 gのみであった。

第41号溝（第40図）

F・G－12グリッドに位置する。A2区北端にある。全長10.7 m、幅0.5 m、深さ0.33 mを測る。断面形はU字形である。溝の西側の延長は確認面を30㎝ほど下げたために失われた可能性が高い。土層断面では、隣接する第42号溝は、第41号溝が埋まりきる直前に掘られた溝であり、最終的には両溝に跨る浅い溝を砂礫と板碑片を用いて埋め戻している。

遺物は比較的豊富である。1と2はロクロ成形のかわらけである。残存率はともに80％である。胎土は共通してチャートなどの砂礫を含み、色調もにぶい橙色で近似している。器形は平底から体部が外反気味に立ち上がる点で共通しており、体側に2段のロクロ目が巡って窪みを生じる点と口唇の丸い収め方も良く似ている。底部は回転糸切離し後、ヘラで調整を行っており、最終的に乾燥台のスノコ状圧痕が付着している。両者の顕著な違いは内底面の仕上げ技法である。1は薄い木口状工具の先端が当たった痕が多数残るほかは通常と異ならないが、2は内底面が陥没したように半球形に窪められている。2の口縁部内側に一ヶ所だけ油煙が付着する部分があり、灯芯が置かれていた可能

性が考えられる。田中信氏の編年ではＡ２類の№72土器に近いが胎土は異なっているようである。Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定されている。

３～９は板碑片である。４は元亨三（1323）年、９は嘉暦元（1326）年、５は至徳元（1390）年の紀年銘がある。３点とも14世紀代の板碑という点で共通していることは注目しておいて良いだろう。

第41号溝の年代は、かわらけから15世紀末から16世紀前葉を充てておきたい。したがって、板碑の投棄は、最新のものを見た場合でも一世紀以上が経過してからのことということになる。

第42号溝（第40図）

Ｆ・Ｇ－12グリッドに位置する。Ａ２区北端にあり、第41号溝の埋没直前に掘られた機能保証のための溝である。全長10.8ｍ、幅0.28ｍ、深さ0.16ｍを測る。断面形はＵ字形である。

遺物は僅かであり、図示しなかったが、かわらけ片27.4g、土鍋片21.0g、中世陶器片54.0gが出土した。

第42号溝の年代は、第41号溝が埋没する直前であり、16世紀前葉を充てておきたい。

第52号溝（第42図）

Ｃ－９・10、Ｄ－10・11グリッドに位置する。Ａ４区南端にある。全長19.1ｍ、幅0.88ｍ、深さ0.32、0.28ｍを測る。断面形は逆台形である。第53号溝に切られている。

遺物は比較的豊富であった。１から６は須恵器であり、本溝の切っている第３・７号住居跡からの流れ込み品と推定される。１は底部回転糸切離しの坏である。２はやや大振りな椀である。３は焼成不良の坏で黄灰白色を呈する。底部は回転糸切離しである。４～６は蓋である。これらのうち４と５は椀蓋、６は坏蓋である。前者には偏平気味の宝珠つまみが残存している。以上の須恵器群の胎土には白色針状物質が例外なく含まれており、南比企窯跡群の製品と見られる。

７は古瀬戸の縁釉小皿である。口縁部付近に灰釉をドブ付けし、その直下に鉄錆を施す。重ね焼の溶着防止のためであろう。器形的には口縁部が肥厚し丸みを帯びるのが特徴であり、藤沢良祐氏の編年では古瀬戸後Ⅳ期に相当し、15世紀中葉から後葉の年代観が示されている。

８はロクロ使用のかわらけである。胎土に砂礫と白色針状物質を含み、にぶい黄橙色を呈する。器形は平底から体部が直線的に開くもので、体側にはロクロ目が２条巡っている。内底面にはユビナデ技法を伴っている。外底面は回転糸切離し後、木目圧痕が付着している。なお、鋳物用の取瓶として使用されており、内面の全面と外面の大半が黒変し、器表の発泡とガラス質の付着が認められる。田中信氏の編年に照らせば、山茶碗模倣型のうち、低器高化が進んだもので、Ⅴ期またはⅥ期に属すものといえようが、内底面のナデ技法が残存する点を重視して、Ⅴ期（15世紀前葉～後葉）と見ておきたい。

９は中国製染付碗（青花碗）である。胎土が純白でなく灰色味が強いために暗い色調を呈する。器形は浅い丸碗形で、低い高台が付く。外面の下半には芭蕉葉文、口縁部には綾杉文と雲文を描き、見込には蓮花文が描かれている。呉須の発色は黒っぽい。また、高台内には硅砂が付着している。小野正敏氏の編年によれば、碗Ｃ群Ⅰ類に属し、蓮子碗（レンツー碗）の系統に属すという。また、年代的には15世紀後半に多数出土し、16世紀中頃には新手のものが加わるが、16世紀後半まで確認できるという。後に改定された編年表においてはＣ群はⅡ期とされ、15世紀後葉から16世紀前葉の年代が付与されている。

第52号溝の年代は、７から９の資料によって15世紀後葉に比定できよう。

第53号溝（第42図）

Ｃ－９・10、Ｄ－10・11・12グリッドに位置する。Ａ４区の南端にあり、鍵形をなし、一方の端が第８・14号溝のコーナー部と連接している。全長26.1ｍ、幅1.45ｍ、深さ0.53、0.42ｍを測る。断面形は逆台形である。第52号溝と第30号井戸を切っている。また、溝内の西端には第82号土壙が、東端には深掘りした窪みがある。

遺物は比較的豊富である。1から4は須恵器である。1は底部回転糸切離しの後に周辺部体部下端をヘラケズリ調整する坏である。2は底部回転糸切離しの坏である。3は偏平なつまみの付く蓋である。4は甕の胴部であり、外面は平行叩き目、内面には青海波文が認められる。これらの須恵器は本溝が破壊した第3号及び第7号住居跡からの流れ込み品と推定できる。

5から7はかわらけである。6は手捏ねのかわらけで、復元口径が8.6㎝となる小皿である。水簸した粘土を使用しているため、砂粒は少ないが、粉っぽい。器形は体部が内湾しながら立ち上がるもので、口唇部はやや尖っている。13世紀前半以前の遺物であり、流れ込み品と判断される。5と7はロクロ成形のかわらけであるが、器形や胎土が共通している。第一に水簸した粘土を使用しているため、砂粒は少ないが、粉っぽい。第二に器形は平底から体部が外反して開き、口唇部は肥厚して丸く収める。第三に内底面が丸く窪む。5は口径10.7㎝、7は11.0㎝で法量も近似している。色調は5が浅黄橙色でかなり白っぽく、7は灰白色で、より京都系白かわらけに近い。田中信氏の編年ではB3類（白かわらけ模倣型）に該当し、Ⅲc期（13世紀後半～14世紀初頭の間の最も遅い時期）に例示されたNo.43土器にそのモデルがあると推察されるが、口径の縮小化と器肉の肥厚化が看取され、実年代は少し降るものと考える。かりに14世紀前葉に比定した場合、流れ込み遺物ということになろう。

8は古瀬戸の尊形花瓶である。藤沢良祐氏の編年では花瓶Ⅲ類として古瀬戸後Ⅱ期（14世紀末～15世紀初頭）に位置づけられている。

9は肥前系染付碗である。外面には鷺と水辺の植物が描かれている。大橋康二氏によれば、鷺は肥前陶器の文様としては1630年代頃から盛んに用いられたという。器形は浅い丸碗であり、17世紀後半から18世紀前半にかけて盛んに製作されるが、細かい時期的な限定ができない。いずれにしても、本品は後世の撹乱混入品である。

10は瓦質の捏鉢である。胎土には粗い砂を多量に含む。内外面とも黒色処理がなされている。外面は斜位のナデ調整、内面はヨコナデ調整が施されている。内面の器面は摩滅し、剥離が生じている。なお、内面には炭化物がこびりついている部分がある。埼玉県神川町皀樹原遺跡出土品に類似し、浅野晴樹・服部実喜両氏の編年では第7期（14世紀後葉～15世紀中葉）に比定している。

11は山茶碗である。無釉で黄色味を帯びた灰白色を呈する特徴から、東濃型と推定される。高台がなく、平底化しているので、山下峰司氏の編年の第11形式に相当し、15世紀中葉の年代が付与される。

15と16は瓦質の土鍋である。短い口縁部が直線的に開く器形は共通しており、内外面は黒色処理されている。15は胎土に砂粒の含有が少なく、表面が平滑である。口縁部内側にループ状の内耳が付けられている。口縁端部は平坦である。16は胎土に砂粒の含有が多く、肌が少しザラつく。端部は内側に肥厚し縁帯が巡る特徴がある。現存部に内耳はない。両者とも外面には煤が付着している。埼玉県児玉町古井戸遺跡出土品に類似し、浅野晴樹・服部実喜両氏の編年では第7期（14世紀後葉～15世紀中葉）に比定している。

12は瓦質の火舎である。内外面とも黒色処理されている。底面に脚部の剥離痕あるので、三足器として復元した。体部は屈曲して立ち上がり、段を持つ。奈良火鉢類のなかには上部が釜形に膨らむ風炉があり、その可能性も捨て切れない。もし、風炉であるとすれば、立石堅志氏の編年で風炉Ⅱとして第Ⅱ期（14世紀後半～15世紀後半）に位置づけられているものがその遠いモデルということになろう。しかし、土鍋などと共通する作りから在地産であることは間違いなく、浅野晴樹氏が説くように中世前半に鎌倉に多量の奈良火鉢類がもたらされていても、東国全域にその消費が拡大し、生産を本格的に開始したのは15世紀前半以降の瓦質土器の増産が進んだ時期とするべきであろう。したがって、ここでは15世紀前半から中葉の時期を考えておきたい。

13と14は焙烙である。13はほぼ完形品で、口径

34.4㎝を測る。薄手の作りで、内耳は立上がり部内面上部に取り付けられている。内耳の部分は器壁に深い窪みを付け、外面も少し突出する。内耳は1個しか現存していないが、2個が対向する位置に付けられていたとして誤りない。外底面砂目。体部外面下半部は指頭押え、上半部は横方向のケズリを加えている。14は復元口径36.0㎝の大型品である。やはり、薄手の作りで、内耳は立上がり部内面上部に取り付けられている。内耳の部分は器壁に深い窪みを付け、外面も少し突出する。立上がり部外面の全面にケズリが及び、粘土接合痕はほとんど分からない。中村倉司氏の編年でⅣ期とした埼玉県美里町白石城出土資料に器形や内耳の位置が類似しており、16世紀代の年代が与えられている。両角まり氏の編年では群馬県太田市浜町屋敷C地点出土資料が類似資料であり、やはり16世紀代に比定されている。ここでは、耳の位置はもちろんのこととして、調整手法に着目したい。近世初頭頃の縮目を立上がり部外面下半に残し、粘土紐接合痕を明瞭に残す焙烙と比較した場合、外面の調整が格段に丁寧であることから、やはり16世紀代まで溯るものと考えて誤りないものと思われる。

17から19は砥石である。17は泥岩製の大型砥石であるが、著しく破損している。二次的に火を受けている。使用面は平坦だが、裏面が山形を呈するので、持ち砥であった可能性がある。18は板碑を転用したものである。表面を使用しているが、摩耗が少ないため枠線が残存している。19は泥岩製の小型四面砥であり、中程で折れたものと推測される。

20は滑石製垂飾である。中軸線で半分に割れ、さらに裏面が剥離している。孔は片面穿孔である。縄文時代後期と推測される流れ込み品である。

21は馬の臼歯である。長さ6.8㎝を測る。東端部の深掘り部からの出土である。水の祭祀に関わる可能性がある。

このほか、図示しなかった遺物として、石臼片1点330 g、板碑片4720 g、桃核2点1.6 g などがある。

第53溝の年代は10・11・15・16の資料から15世紀中葉に比定できる。13・14の焙烙はかなり浮いた状態で出土しているので、溝が廃絶された時期を16世紀中葉と考えておきたい。なお、花瓶は一定期間伝世された後に廃棄されたと考えて良いであろう。

第63号溝（第40図）

G－11・12、H－11グリッドに位置する。A2区中央にあり、両端がそれぞれ第43号溝と第43号井戸と連接している。長10.5 m、幅0.38 m、深さ0.08 m を測る。

断面形はU字形である。平面形は鍵形を呈する。第6号溝を切っている。第63号井戸の排水溝と考えられる。

遺物は少量出土している。1はロクロ成形のかわらけである。胎土には砂粒を少量含み焼成は良い。大きい平底から体部がやや内弯気味に立ち上がる。強いロクロ目によって腰部と口縁部の外面とに稜が巡る。外底面には回転糸切離し痕がある。田中信氏の編年には類似資料は示されていないが、在地土着型ロクロ師器B1類に相当し、低器高の進んだⅤ期（15世紀前葉～後葉）に比定されるものであろう。このほか図示できなかったが、須恵器鉢片とかわらけ片（ロクロ使用で丁寧な作りのもの）1点34.6 g、常滑甕片1点27.3 g がある。

第63号溝の年代は、かわらけを根拠に15世紀後葉を充てておきたい。

第65号溝（第40図）

G－11、H－11・12グリッドに位置する。A2区中央部にある。全長11.36 m、幅0.54 m、深さ0.2 m を測る。断面形は逆台形である。

遺物は多種少量であった。1は須恵器甕片である。口縁下半部で、二条の凹線を境にして箆先刺突文を矢羽状に施文している。古墳時代後期のものと推定される流れ込み品である。このほか図示しなかった遺物に、土師器甕片1.7 g、須恵器坏片4.8 g、常滑焼甕片3点305 g、土鍋片155.0 g、渥美焼甕片1点31.7 g、瀬戸・美濃系陶器片、板碑片などがある。

第65号溝の年代は、遺物の大勢が中世のものであ

り、土鍋を含むことから、中世後期の15世紀から16世紀頃を充てておきたい。

（4）近世の溝

第2号溝（第42図）

D－10グリッドに位置する。A3区とA4区の境界にある。第30号溝の覆土上層を掘り込んだ溝で、方向が第30号溝と一致しているので、掘り直し溝と考えられる。確認全長7.0m、幅1.6m、深さ0.38mを測る。断面形は逆台形である。

遺物は多種類少量である。1は中国製青磁碗である。内面に劃花文があり、山本信夫氏の編年では龍泉窯系Ⅰ4a類に相当し、D期（12世紀中葉～後半）の年代を与えられている。周辺部からの流れ込み遺物とみられる。2は陶器碗である。外面に厚い土灰釉を施釉しており青緑色を呈する。器形は弱い端反りである。いわゆる青唐津とみられる。九州近世陶磁学会の編年（以下九州編年と略す）ではⅡ期（1610～1650年代）に類例がある。3は内耳土鍋である。外面には煤が付着している。浅野・服部編年で掲げる群馬県清里陣場遺跡出土例に類似し、第7期（14世紀後葉～15世紀中葉）に比定されている。これも周辺部からの流れ込み遺物であろう。4は小型の擂鉢である。胎土に長石の粗粒をやや多く含み、器肉は黒っぽい。内面には黒褐色の施釉があり、18世紀後半頃の備前焼と推定される。5は軒平瓦である。唐草文様の浮彫りがある。近世の瓦であろう。図を掲げなかった遺物として他に鉄滓1点140g、板碑片1900g、飯能焼破片1点20gなどがある。

遺構の年代は、備前焼擂鉢を根拠に18世紀後半頃掘削されて、幕末まで存続したと推定できる。

第4号溝（第39図）

F－12・13グリッドに位置する。A1区とA2区の境界にある。第31号溝の覆土上層に掘り込まれ、第31号溝と走向が一致するので掘り直し溝とみられる。確認全長13.1m、幅1.02m、深さ0.32mを測る。断面形は逆台形である。第2号溝と連続していた可能性が高い。

1から3は板碑である。1と2には種字のキリークが残る。板碑類の総重量は2735gあった。図を掲げなかった他の遺物に、青唐津の茶碗片44.4g、焙烙片135gなどがある。遺構の年代は第2号溝と同じであろう。

第9号溝（第39図）

E－12・13、F－13・14、G－14グリッドに位置する。A1区南西部にあり、直線的な溝である。全長28.1m、幅0.6m、深さ0.32cmを測る。断面形は逆台形である。

1はロクロ使用のかわらけである。焼成は良いが、軟質な感じを受ける。底部は平坦で径が大きい。田中信氏編年のA2類に近似し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。2は唐津焼の茶碗である。鶯色の釉薬の上に空色の景色を垂らし掛けしている。九州編年Ⅱ期（1594年～1610年代）に類例がある。3はアン（普賢菩薩）の下に「申」字のある板碑で、申待板碑と見られる。図示しなかった他の遺物に、耳が上端に付く焙烙片と瓦質の土鍋片、鉄滓1点15gなどがある。

遺構の年代は17世紀初頭と推定される。

第10号溝（第39図）

F－14・15、G－14グリッドに位置する。A1区南端にあり、平面形はコ字形である。全長18.0m、幅0.95m、深さ0.17～0.3mを測る。断面形はU字形である。第31号溝を切っている。

1から4は須恵器である。1は回転糸切離し後周辺部回転ヘラケズリを施す坏である。2は高台付の皿である。3は小型甕の口縁部、4は鉢である。5から7は灰釉陶器である。5は埦、6は長頸瓶、7は壷である。これらの遺物は本溝が壊している第6号住居跡または第12号溝から流れ込んだ可能性が高い。8はロクロ使用のかわらけである。腰が強くくびれ、口縁部直下に稜が巡る。底部は糸切離し。内面は漆塗りされ、Y字状の線刻文がある。田中信氏編年のA2類に類似し、Ⅵb期（15世紀末～16世紀後葉の間の後半）に比定できよう。9は常滑焼の大甕片で押型文がある。10は肥前系の染付皿である。丸形小皿で高台径は大

きい。口縁部内面に裏菊文散らしを描き、見込にコンニャク判五弁花文を施文する。裏面には線描きの唐草文を描く。高台内には変形字の銘款がある。九州編年Ⅳ期（1690年～1780年代）の内、18世紀前半に類例がある。11は鉄製品である。棒の端部にはめ込む帽子金具と推定される。固定用の目釘はない。12は軽石である。角閃石安山岩製で、使い込まれ球形に近くなっている。表面に刃傷と漆様炭化物の付着が認められ、工具として用いられた可能性がある。

遺構の年代は肥前系磁器皿から18世紀前半と推定される。

第18号溝（第40図）

F－12・13、G－13・14グリッドに位置する。A1区とA2区の境界にある。第31号溝の覆土上層を掘り込んだ溝で、走向が第31号溝と一致する。第4号溝とは平行しており、芯々で1.28mの距離がある。確認全長17.6m、幅1.22m、深さ0.38mを測る。断面形はU字形である。

1と2はロクロ成形のかわらけである。雲母粒子を多量含む胎土、にぶい橙色の色調、直線的に体部が開く器形とも共通している。底部脇のヨコナデが強いため、凹線が巡るのが特徴である。外底部には糸切離し後、ナデ調整を加えている。田中信氏編年のA3類に類似し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。ただし、中央部の出べそは認められない。3は唐津焼の刷毛目鉢である。九州編年Ⅳ期（1690～1750年代）に比定できる。4は宝篋印塔の塔身部である。暗灰色の安山岩製で、4側面に胎蔵界四仏の種字を刻み、それぞれ月輪を伴う。図の左から、南（アー）開敷華王如来、東（ア）宝幢如来、北（アク）天鼓雷音如来、西（アン）無量寿如来の順である。また、各面の月輪内と四辺の幅1.5㎝の範囲を墨塗りしている。なお、上下両面は組み合わせのため僅かな凹面をなしている。諸岡勝氏の御教示では14世紀の後半代の物であるという。

遺構年代は、唐津焼刷毛目鉢から18世紀後半と推定できる。

第20号溝（第52図）

J－3・4・5、K－2・3・4グリッドに位置する。B区南端にある直線的な溝である。確認全長25.0m、幅1.3～1.6m、深さ0.44～0.54mを測る。断面形は逆台形である。

1と2は須恵器である。1は深めの坏で、底部は糸切離し後、周辺部を回転ヘラケズリしている。2は長頸瓶である。3は灰釉陶器の三足盤である。内面にはオリーブ色の灰釉が施釉されている。猿投窯跡群の黒笹90号窯式の古段階に相当し、9世紀第2四半期に比定されよう。これらは本溝が破壊している古代の溝である第21号溝から流れ込んだ可能性が高い。4から6は中世陶磁器である。このうち4と5は中国製青磁碗である。4は内面無文で三条の沈線が巡る。5は内面が沈線で区画されており、劃花文の存在が推定できる。山本信夫氏編年では前者は龍泉窯系Ⅰ－1類、後者は同Ⅰ－4a類に相当し、ともにD期（12世紀中葉～後半）の年代を与えられている。6は常滑焼大甕の体部下半破片である。細かい格子目文と文様化した押型文の2種を施文する。ⅠからⅡ型式の初期常滑焼に例を見る。4から6の中世陶磁器は本溝が破壊する中世前期の居館跡から流れ込んだ遺物である。7は茶臼の下臼で、受皿の復元径は38.2㎝ある。硬質の安山岩製で裏面も含めて良く研磨されている。8は板碑である。交名の供養板碑で、複数の人の法名が刻まれている。

遺構の年代は茶臼から近世としたが、図示しなかった最新の遺物が瀬戸灰釉皿片1点8.8gであり、染付磁器を含んでいないので、中世後期末まで溯る可能性もある。

第24号溝（第41図）

D－8・9、E－9・10グリッドに位置する。A3区中央よりやや北側にある。第3号溝と第60号井戸を切り、第26号溝に切られている。確認全長12.5m、幅0.6～1.1m、深さ0.18～0.28mを測る。断面形は逆台形である。

1は須恵器埦で、口縁端部に面を作る特徴がある。

南比企産である。2と3は鉄器である。2は用途不明の鉄製品であるが、細い部分を柄に装着して用いた道具の可能性がある。ただし、現存部には刃が付けられていないようである。3は断面形が三角形で、両端に刃が付けられており、先端で尖る気配があるので槍鉋の可能性が高い。4は北宋銭である。熙寧元(1068)年に鋳造された熙寧元寶で、真書である。外径2.31㎝、内径2.05㎝、厚さ0.11㎝、重量は2.3ｇである。図示しなかった他の遺物には、須恵器坏、わん、蓋、瓶、土師器甕などの破片があり、本溝が第4号住居跡を破壊した際の流れ込みの可能性が高い。そのいっぽう、焙烙片1点49.6ｇ、国産青磁・志野焼などの陶磁器片3点7.1ｇなどの近世遺物が含まれており、切り合い関係から見ても、これらが溝に本来的に伴う資料と考えられる。

遺構の年代は18世紀と推定される。

第25号溝（第41図）

Ｄ・Ｆ－８・９、Ｅ－９、Ｇ－８グリッドに位置する。Ａ３区中央部にあり、うずたかい地形を囲むようにL字形に検出されているので、屋敷の区画溝とみられる。確認全長36.8m、幅0.54m、深さ0.52mを測る。断面形は逆台形・Ｕ字形である。第4号住居跡、第3・48・50溝を切り、第26号溝に切られている。

1は須恵器坏である。底部は回転糸切り離しである。本溝が破壊した第4号住居跡などからの流れ込みである。2から4はロクロ成形のかわらけである。2は胎土に粗砂と酸化鉄粒子を含み、やや厚手である。体部は直線的に開くが、ロクロ目が強く、体側が窪む。3と4は細砂と酸化鉄粒子および角閃石を含み、薄手である。体部は浅く、直線的に開く。3の内面には部分的に油煙が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。これらは田中信氏編年のＥ１類に相当し、Ⅵa期(15世紀末～16世紀後葉の間の前半期)に比定できよう。周辺の中世遺構からの流れ込み品である。5は京焼の茶碗である。胎土は赤味を帯び、内外全面ににぶい橙色の釉薬と透明釉を施釉し、貫入がある。口縁部は長石釉を用いて白く引き締めている。6は肥前系の染付碗である。体部が立ち気味の丸碗で、高台は尻すぼまりである。外面に丸みを持った3段の網目文を描く。九州編年Ⅲ期(1650～1690年代)に比定される。7は瀬戸美濃系の袴腰香炉である。内外立上がり部には明るい茶褐色の飴釉がかかる。8は瀬戸美濃系の菊皿である。型打物で、内面と口縁部外面に明るい黄褐色の灰釉が施釉されている。東大本郷キャンパス内の天和2年の火災で焼失した長屋に伴う同工品があり、1660から1682年に比定されている。9は焙烙である。立上がり部は屈曲して開き、底部の縮目が体部下半にまで及んでいる。内耳は現存部には残っていなかった。10は擂鉢の底部である。良く使い込まれて卸目が消えかかっている。無釉であり堺の産か。11と12は瀬戸美濃系の鉄釉茶入れである。11は口径4.1㎝の小口径タイプ。12は体部が丸みを持つ器形で、底部付近は露胎である。大窯第3段階の月山窯に類例があり16世紀後葉に比定できよう。13は鞴の羽口である。土製、素焼きで、胎土には雲母や砂粒を含み、焼成は甘い。かなり太い羽口となるが、中心孔の復元直径は3.2㎝である。14は用途不明の鉄製品で、鋳造品の可能性もある。15と16は板碑である。15は山形付近の破片。16は阿弥陀三尊種字形式で脇侍のサクと月輪が残る。

遺構の年代は肥前系磁器碗と瀬戸美濃系菊皿から17世紀後葉と推定できる。

第26号溝（第41図）

Ｄ－８・９グリッドに位置する。Ａ３区北側にあり、第24・25号溝を切っている。
確認全長6.6ｍ、幅0.86ｍ、深さ0.47ｍを測る。断面形は逆台形である。

図示できた遺物は1点のみである。1はロクロ使用のかわらけである。胎土には粗砂と酸化鉄粒子を含む。平底から体部が直線的に開く。身は第25号溝の資料よりやや深いが、田中信氏編年のＥ１類に相当し、Ⅵａ期(15世紀末～16世紀後葉の間の前半期)に比定できよう。図示しなかった他の資料では青唐津碗片、焙烙片、白磁小坏片、天目茶碗片、板碑片がある。

遺構の年代は切り合い関係から17世紀末以降とな

るが、特定は困難である。

第30号溝（第41図）

C・D－9・10、D－11、E－10・11グリッドに位置する。A3区とA4区の境界にある。第1号溝と交差する部分から西側を第30号溝、東側を第31号溝と便宜的に呼び分けたが、両者は1本の溝である。全長21.0m、幅3.4m、深さ1.0mを測る。断面形は逆台形であるが、北側の立上がりは45度前後、南側の立上がりは約70度である。

遺物は多種多量で、木器類も含んでいる。1は須恵器坏である。口径が大きく、底部は回転糸切離し後、全字回転ヘラケズリを施している。南比企窯跡群産で8世紀第2四半期に比定できる。2は陶製の硯である。風字硯に復元できよう。南比企窯跡群産である。3は瓦質の壷である。部厚い作りだが、調整や焼きは良い。体部外面は横位ヘラケズリ、内面はナデ調整である。北関東で蔵骨器として出土することの多いものである。浅野・服部編年ではこの種の物は第6期（13世紀後葉～14世紀中葉）に限定できるという。4は手捏ねのかわらけである。体部は丸みを持ち、口縁部には2段ナデを施す。口唇部は面取りを施す。内底面は一定方向に撫でられている。京都系かわらけ1次模倣品の初期のものであり、平泉などの出土品と類似するので、12世紀後半代に比定できよう。5は瀬戸美濃系の灰釉皿である。内底面には重ね焼の目がある。17世紀後半に比定できよう。6から10はロクロかわらけである。6は胎土中に白色針状物質を含む。極めて厚手で、体部は丸みを帯びるが、口縁部は外反気味である。内底部の中心が出べそ状に膨らんでいる。田中信氏編年には類似器形はないが、A2類のⅥb期（15世紀末～16世紀後葉の間の後半期）の資料に準じる物であろう。7は薄手の作りで、直線的に開く器形であるが、ロクロ目が強いために高台脇と体部上位が窪む。胎土には白色針状物質を含んでいる。田中信氏編年のA2類に相当し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。8は小型品で、内面全体に煤が附着している。灯明皿として用いられた物である。田中信氏編年のⅥa期に類例がある。9と10は胎土に角閃石などの粗砂を多量に含み、黒斑があり、厚手の製作という点で一意している。底部の糸切り痕から左回転ロクロを使用したと分かる。共に、内面に油煙の附着があり、灯明皿として使用された可能性がある。16世紀末あるいは近世初頭まで下降するものであろう。11は焙烙である。推定口径38cmの大型品である。内耳は堅牢な作りで、上端から底面にわたる取り付け方をしている。外面に煤、内底面に炭化物の吸着が認められる。12は瀬戸美濃系の灰釉皿で、見込に摺絵の梅枝文がある。17世紀に比定されよう。13から18は板碑である。14と15はキリークのある上半部破片。13は二条線脇の羽根刻みがあり、古い形式である。16から18には偈や年紀などの一部が残る。19から25は木器である。19は楔である。側面部は鉈で削って形作っている。建築材の組物用と推定される。20は工具の柄である。両端部を面取りしていることと、中心に孔が貫通していることから、茎の薄くて長い工具、鋸の柄の可能性が高い。21から24は漆器椀である。21は器肉の部厚い中椀で、底広、体部は腰が張らずに小さく開く。高台は低く、内部の抉り込みも浅い。両面黒漆塗りの後、外面の対向する2個所に波頭文の漆絵（朱）を描く。また、内面には朱塗りを重ねる。朱塗りの色は暗背赤褐色である。22は極めて薄手の大椀である。内外面とも黒漆塗りの後、内面に簡単な漆絵を描く。23は口縁部と高台端部を欠損している。体部は腰が張らずに緩やかに立ち上がる。総黒色仕上げ。見込に朱漆の圏線が巡る。24は椀の高台部。やや高いが、内部の抉り込みは浅い。総黒色仕上げ。高台内に朱漆牡描きの文様か記号の一部が残る。四柳嘉章氏の編年では16世紀になると三ッ椀の内、一の椀の高台が次第に高くなるとされており、二の椀の高台は低いままである。したがって21のような浅くて高台の低い物と24のような高台の高い物はセット関係と考えられる。25は桶板である。曲率から底径20cmほどの小型の桶となろう。上下2個所に箍の巡っていた痕跡がある。

遺構の年代は、瀬戸美濃系の灰釉皿と焙烙から17

世紀後半と推定できる。多数の古代・中世遺物は周辺から流れ込んだ物である。漆器椀は溝の年代と一致すると考えておきたい。

第31号溝（第39図）

E－11・12、F－12・13・14、G－13・14グリッドに位置する。A1区とA2区の境界にある。第1号溝と交差する部分から西側を第30号溝、東側を第31号溝と便宜的に呼び分けたが、両者は1本の溝である。全長35.0m、幅4.28、3.9m、深さ0.94、1.0mを測る。断面形は逆台形であるが、北側の立上がりは50度前後、南側の立上がりは約70度である。また、南側には小段が設けられている。覆土は上層が灰色粘土、下層が暗緑灰色粘土で、南側の三角堆積が緑灰色粘土である。地下水位が高いため、下層には有機物が大量に含まれていた。

遺物は多種多量で、様々な材質のものがあり、時期的にも古墳時代から近世にわたっている。1から3は須恵器坏である。この内、底部の残る2と3は回転糸切離しである。4は緑釉陶器碗である。胎土は赤味を帯びた灰色で、全面に緑釉がハケ塗りされている。高台は輪高台である。猿投窯跡群の製品で、9世紀後半代と推定される。

5から13はロクロかわらけである。5は粗い胎土で角閃石などの砂粒を含む。器肉は厚手である。糸切り離し痕から左回転ロクロと分かる。第30号溝の9・10に類似し、近世まで下降するものと推定される。6は胎土に白色針状物質と雲母粒子を含み、焼成が良く、茶褐色に近い。浅い皿型で、底広である。体部は丸みを帯び、内湾気味に立ち上がる。内底中心部から渦巻き状の強いロクロ目が付く。馬渕和夫氏の編年で中世Ⅱ期（12世紀前半～13世紀前半）とする鎌倉市F地点溝7出土品に類似している。左回転ロクロを使用している。田中信氏編年の赤かわらけ模倣型のD1類とみれば、Ⅲb期（13世紀後半～14世紀初頭を三分した中期）まで下降する。7は体部が直線的に開く浅皿である。胎土には雲母と酸化鉄粒子を含み赤みが強い。田中信氏編年のE1類に相当し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。8は胎土が精良で砂を含まないが、雲母を含み、器肌が平滑である。ミルクコーヒー色を呈する。内面は全面に布目条線がある。外底面には木目圧痕が認められる。10と12も胎土と内面調整法に共通点が認められるが、8よりも器肉が厚く、見込が大きく窪む点、赤味を帯びる点は異なっている。10と12は白色針状物質を含まない点を除けば、田中信氏の編年のA2類に相当し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。8は田中氏が資料の少ないことを理由に空欄としたⅤ期（15世紀前葉～後葉）の穴を埋める資料と推察される。9は胎土に雲母と酸化鉄粒子を含み、やや軟質な焼き上がりである。器肉は部厚い印象を与える。内面には渦巻き状のロクロ目が付く。左回転ロクロを使用している。体部が丸みを帯びるのは古い要素であり、A3類に相当し、Ⅴ期に比定されようか。11は胎土に砂礫を含み、還元がかった焼成である。器形の歪みが著しい粗雑な品である。他とは異なった工人集団の製作と考えられる。やはりⅥ期に属するものであろう。13は疑似高台を持つ特殊品で、口縁端部が広く面取りされている。胎土と調整法が8・10・12と類似しているので、Ⅵa期のもので、E1類の小型品を模倣したものであろう。器形は行田市忍城橋第22層出土品に酷似している。14は中国製白磁碗である。薄手で製作が良い。口縁部外面に装飾的な沈線が巡る。山本信夫氏編年の白磁Ⅱ－3類に相当し、C期（11世紀後半～12世紀前半）の年代を与えられている。15は中国製青磁碗である。山本信夫氏編年の龍泉窯系Ⅰ－1類（無文）に相当し、D期（12世紀中頃～後半）の年代を与えられている。17は在地産の瓦質擂鉢である。卸目は木口状工具によるもの。底部は使い込まれて薄くなっている。18は常滑焼の甕である。口縁部の形態から中野晴久氏編年の5型式期（1221～1250年）に比定できる。16は瀬戸美濃系の鉄釉茶入れである。大窯第1段階の小金山窯に類例があり、15世紀末から16世紀初頭に比定できよう。

19から31は近世の陶磁器である。19と20は瀬戸美

濃系の灰釉皿である。見込には重ね焼の目が残る。17世紀後半に比定できよう。21は志野焼の皿である。鉄釉で見込に圏線と笹を描く。22は皿で、高台が小さい。重ね焼のために蛇の目釉剥ぎが行われている。九州編年Ⅱ－１期（1610～1630年代）に比定できる。23は瀬戸美濃系の京焼風陶器で、淡い黄色の灰釉地に緑色の草花文を描く。黄瀬戸の伝統を引くものかもしれない。17世紀の製品であろう。24は唐津焼の碗で、銅緑釉の表面が黒変する特異なもの。見込には赤絵の一部が残る。九州編年Ⅱ期またはⅢ期で17世紀に比定できよう。25は唐津焼の刷毛目文碗である。九州編年Ⅲ期（1650～1690年代）に比定できる。26から31は肥前系染付碗である。26は丸碗で鋸歯状の網目文を描く。火を受けている。九州編年Ⅱ－２期（1630～1650年代）に比定できる。27も丸碗で、Ⅱ－１期（1610～1630年代）に比定できる。最古期の伊万里焼である。火を受けている。28は腰折形の碗で、外面に雲気文を描く。透明釉は青みを帯び、呉須は暗青色を呈する。九州編年Ⅱ－１期（1610～1630年代）の初期伊万里である。29は半球形の丸碗で、３段の網目文を描く。九州編年Ⅲ期（1650～1690年代）の早い時期に類例がある。30は高台内に変形字４字の銘款がある。31はくらわんか手の丸碗で、九州編年Ⅳ期の1700から1740年代に類例がある。32と33は瀬戸美濃系の香炉または火入れである。赤茶褐色の鉄釉を立上がり外面にのみに施釉し、32には黒い景色を加えている。高台は削り込み高台である。大窯第４段階に類例があり、16世紀末から17世紀初頭に位置づけられよう。34は六器である。密教系仏具の一つで、小坏形を呈する。銅板叩き出しで、高台は蝋付けと推定される。38は瀬戸美濃系の擂鉢である。全面に鬼板と通称される錆釉が流し掛けされている。大窯期の16世紀代のものであろう。35から37は焙烙である。35は口径38.4cmの大型品。内耳は堅牢な物が２個一対で付けられており、釣り紐で摩耗した様子が良く分かる。36は口径33.4cmの中型品。外面に輪積み痕を残す。内耳は立上がり部内側の上端から底面にわたる形で取り付けられている。37は身の深いタイプ。立上がり部内側に段があり、粘土の接合部と一致している。現存部に内耳はなかった。36は近世、35と37は中世末まで溯る可能性がある。39は甍瓦の軒平瓦である。瓦当には雲形の額縁内に花文の浮彫りがある。また上面の丸瓦が載る位置には溝が切ってある。

40は鞴の羽口である。鍛冶炉に挿し込まれた側の端部で、黒色の溶滓が附着している。礫を含む部分は炉壁との接合部であろう。41から43は椀形滓である。いずれも大型品であり、精錬滓とみられる。竪形炉の底部で凝固した鉄滓であり、指ナデ痕のある炉底面表層が附着している。発泡が認められ、礫が附着するものもある。他に図示しなかった鉄滓17点が第２区から出土しており、重量は30.1gから204gである。内訳は碗形滓10点、流動滓３点、ノロ１点、鉄滓３点である。

44から53は板碑である。いずれも破片であり、年紀の分かるものは含まれていない。詳細は巻末の観察表を参照されたい。54から60は砥石である。このうち54・57・60は緑灰色の凝灰岩製で、鉄錆が附着し、類似性が高い。55は灰色のシルト岩製、58は泥岩製だが、全面に煤が附着している。56は緑色片岩の自然礫の片面を割って、底部をほぼ平坦にしたものである。55と60を使用頻度のやや低い四面砥、54と57は湾曲した鉄製品を砥ぐ手持ち砥で鍋釜などに用いた鍛冶砥と推測している。59は硬砂岩自然礫の割石を用いたもので、全面に火を受けている。鋳物用の支脚が２次的に砥石に転用された可能性がある。61は搗臼である。精米用の足踏み式唐臼と推定される。上部にはビシャン、下部には鎚による調整痕がある。宮崎安貞の『百姓伝記』では慶長・元和年間の輸入とし、片田舎では用いなかったとしている。62から65は石臼である。62は粉挽き臼の下臼で、含礫砂岩製である。一個所を除き互の目の溝はなく、放射状に摺り目が切ってあるので、麦の挽き割りなどの荒砕き用の臼と見られる。周縁部まで溝が及んでいる点と、ふくみが大きい点から中世まで溯るものであろう。目立ては素人によるものである。63は粉挽き臼の上臼で、含礫砂岩製である。くぼみが深く、縁の断面が蒲鉾形をなすこと、目が周縁部まで

及ぶことなどから中世まで溯るものであろう。目が放射状にきってあるのは62と共通しており、両者は組み合っている可能性がある。64は粉挽き臼の上臼で、砂岩製である。ふくみが大きい点と縁の断面形態から中世の物であろう。下面の目は摩耗している。
65は茶臼の上臼で、含礫砂岩製である。通常の茶臼が円筒形であるのに対して本資料は胴張り形を呈す。挽き木の打込み孔が1個所現存するが、装飾は伴っていない。下面は摩耗が進んでいる。

66から82は木器である。66は漆器椀で、外黒内赤。高台は高いが、畳付内の抉り込みが浅い。外面の対向する2個所に漆絵があり、一方は植物文の丸文、もう一方は笹文である。67は漆器椀で、総黒色。高台は高いが、畳付内の抉り込みが浅い。外面の1個所に漆絵があり、丸に小松（または麦）と八の字が描かれている。文様とも家紋ともつかない。68は漆器椀で、総黒色。高台は低く径が大きい。外面に漆絵の一部が残存する。漆の剥落が進み、炭粉渋下地が露出しているところもある。69はロクロを使用せず、厚手の材を手斧で削って成形した皿。総黒色で無高台。70は漆器椀で、総黒色。腰張り形で高台は低い。71は漆器椀で、総黒色。高台は低く径が大きい。外面に波形単線漆絵、見込には折れ枝繋ぎの三角文の内側に二重丸に一引両かと思われる漆絵が描かれている。家紋の可能性がある。これらのうち、67・68・71は石川県七尾城シッケ地区遺跡出土の16世紀の資料と類似している。70は輪島漆器資料館蔵の寛文九（1669）年在銘品と似る。四柳嘉章氏によれば総赤色漆器が農村部に広まるのは16世紀後半という。69は四柳嘉章氏の編年ではⅥ1期（13世紀前半）に類例がある。72は木製の鉢である。ロクロを使用しない刳り物である。73は供饗である。本体は隅切りの長方形で、厚板の脚部（78）を樹皮で固定していたとみられる。また、各辺に2孔づつ小孔があり、縁が留められていたと推定できる。脚部外面に透き漆が認められるので、折敷とは一線を画し、三方または供饗とすべきである。脚部透かしの有無が不明なので、供饗としておく。なお、俎板として再利用された形跡がある。74も供饗の本体の一部であろう。下端に縁を留める小孔がある。二次的に俎板として利用されている。75は連歯下駄である。柾目板の一木造りである。鼻緒孔は中心軸上に開けられている。足の痕跡から右足用と分かる。後の歯は欠けている。形式から近世のものであろう。76は曲物または桶の底板である。77は刀子鞘の未製品で、製作中に割れたため廃棄したものである。79は桶板である。曲率から直径は1尺程度になる。上下2個所に箍の巡った痕がある。井戸桶の可能性がある。80は曲物側板である。端部の縫い合わせ部に当たり、桜樹皮の紐が残っている。現状での内径は28㎝である。81は板材で、台鉋の調整痕がある。82は丸太材で、両面とも鋸で切断されている。いわゆる木端である。83と84は背負い梯子である。運搬具であり、埼玉県での地方名はショイコである。ともに左右の枠木であり、上部には横木を組むための臍穴が開けられている。また、84は少し反りがあり、中間にも臍穴があるので、83とは別の個体である。82は下端が鉈で切断されており、別の物に転用された可能性もある。85は丸太杭である。杉の皮むき丸太で、先端を鉈で鋭く尖らせている。上部は地上に出ていた部分と推定され、痛みが激しい。溝の護岸用杭の可能性がある。86は農工具の柄と推定する。端部は面取りが施され、側面は丁寧に削られていて、ササクレは全くない。下端は折損。87は建築材である。鋸引きの丸太材で、手斧による抉り込みがある。88は丸太杭の未製品である。8年木の一方の端を鋸引きし、他の端を鉈で尖らせるのに失敗し、縦割れが生じて廃棄したものである。89は用途不明品である。端部が輪になった鉄棒が組み合わされ、一方に大きな輪が付く。また、中心部に穴の開いた木製品が通されている。木製品の形状から囲炉裏の自在鍵の可能性もある。

遺構の年代は九州産の陶磁器から、17世紀前葉に掘削され、17世紀中頃以降に様々な物が廃棄されたが、耐用年数の長い漆器や石臼には中世後期おそらく16世紀代の物が含まれていると考えられよう。最新の遺物は18世紀前半代であり、このころ溝が完全に

埋没したものと推定される。

第33号溝（第41図）

C－9・10、D－10・11グリッドに位置する。A3区とA4区を境する第30号溝の北側の肩部に掘り込まれた溝である。、確認全長20.4m、幅0.72m、深さ0.52mを測る。断面形は逆台形である。

遺物は僅かで、図示したのは1点だけである。1は須恵器坏である。底部周辺部には回転ヘラケズリが加えられている。図示しなかった他の遺物に須恵器甕片97.2g、土師器甕片14.2g、土鍋片1点66gがある。

遺構の年代は、その東側の延長部が第4号溝とすれば、第4号溝は第31号溝（第30号溝と一体の溝）の廃絶後にその覆土を掘り込んだものであり、18世紀後半となる。

第37号溝（第40図）

G－12・13、H－12グリッドに位置する。A2区東側にあり、中程でほぼ直角に屈曲する。一旦途切れるが、第13号b溝と組み合わされて、屋敷の区画溝を構成していた可能性が高い。全長10.4m、幅0.34m、深さ0.09mを測る。幅と深さは確認面を深くしたため、かなり減じていることを付言しておく。断面形はU字形である。

遺物は僅かであり、図示できなかったが、須恵器坏片（周辺部ヘラケズリのある個体）35.1g、土師器甕片29.4g、焙烙片50.3g、かわらけ片4.7gがある。

遺構の年代は、直接的な方法ではないけれども、第13号井戸と同時存在の可能性が高く、そう見て良いなら17世紀後半代となろう。

第43号溝（第40図）

G・H－12グリッドに位置する。A2区中央部付近にあり、中程で屈曲し、再び同一方向に走行するクランク溝である。北側の端部には第48号井戸がある。確認全長15.5m、幅1.22m、深さは平均で0.35m、最深部では0.55mを測る。断面形は逆台形である。第65号土壙に切られている。

1は須恵器甑で古代の遺構から流れ込んだものである。2は瀬戸美濃系の擂鉢で、鬼板と通称される錆釉を流しかけている。口縁部の形態から、大窯第5期中葉（17世紀前半の遅い時期）に比定できる。3は志野焼の皿で、17世紀前半に類例がある。4は焙烙である。立上がり部下半にひび割れが目立つ。内耳は立上がり部の上端部から下端部にわたる形で取り付けられている。5と6は板碑片である。7は凝灰岩製の砥石である。形態から持ち砥と考えられる。8は木炭である。大型品で下端には斧による伐採痕がある。

遺構の年代は、擂鉢と志野皿から17世紀第2四半期頃であろう。

第44号溝（第40図）

E－11、G－10・11、G－9、H－8グリッドに位置する。A2区とA3区の境界にあり、第1号溝の南東側に平行して走る。全長39.0m、幅2.44m、深さ0.8mを測る。断面形は逆台形である。

1と2は中国製青磁碗である。1は内面に劃花文があり、山本信夫氏編年の龍泉窯系Ⅰ－2b類に相当し、2は無文であり、同Ⅰ－1類に相当する。ともにD期（12世紀中頃～後半）に位置づけられている。3は常滑焼甕片で赤味を帯びた灰色を呈す。粘土の接合単位に押型文を付す。5はロクロかわらけである。胎土には粗砂と白色針状物質を含む。内底面が窪む特徴から、田中信氏編年のA2類に相当し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定される。4は擂鉢である。明るい赤褐色を呈するが、焼締め土器であり、江戸系擂鉢と見られ、18世紀後半以降に位置づけられよう。6は波佐見焼の染付皿である。見込全体に海浜風景文を描く。呉須は紺青色。口縁に錆塗りあり。九州編年Ⅴ－4期（1820～1860年代）に比定できる。7は肥前系の染付碗である。高台が高く、見込に五弁花の崩れた物があるので、18世紀代であろう。8は瀬戸美濃系の鉄釉小皿である。9は瀬戸美濃系の銅緑釉鉢で織部風のものである。見込には渦巻きと帆立船のスタンプ文が連続的に使用されている。10は唐津焼の灰釉碗で、青唐津と呼ばれる物である。九州編年Ⅱ期（1594年～1610年代）に類例がある。11は中国製染付け（青花）皿である。高台は内傾し、畳付きは釉剥

ぎである。見込には波涛文と八宝文らしきものを描く。漳洲窯の製品と推測される。小野正敏氏編年の染付皿B１群に相当し、15世紀後半に大量の出土があり、16世紀後半まで確認できるという。12と13は板碑片である。12は名号板碑、13は阿弥陀一尊種字の板碑であり、正和四(1315)年の紀年がある。14は茶臼の上臼である。角閃石安山岩製で、下面のふくみは５mm。目のパターンは８分角８溝と粗い。引き手穴の周囲に正方形の浮彫りがある。粉挽き臼と同じく中世の物であろう。15は粉挽き臼の上臼である。角閃石安山岩製で、上縁の断面形が蒲鉾形を呈し、高い。また、ふくみが大きく、摺り目が周辺部に達している点などからも中世後期の物であろう。類品に東京都八王子城出土品がある。16は箱膳である。両端部は切組継の技法を伴っており、木釘が１本ずつ残っている。木質の依存状態は極めて良く、年代の新しいことを示している。

遺構の年代は擂鉢と波佐見焼の染付皿から、18世紀後半に掘られ、19世紀中葉まで存続したものと推定される。中世遺物は主に溝の東側の生活域から流れ込んだものであろう。

（５）時期不明の溝

第16号溝（第42図）

Ｂ・Ｃ－12グリッドに位置する。Ａ４区中央部やや北側にあり、第６号溝と重複している。全長3.6ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.1ｍを測る。断面形はＵ字形である。遺物は皆無であった。

第19号溝（第39図）

Ｆ－13グリッドに位置する。Ａ１区の南端にある。全長6.5m、幅0.54m、深さ0.22mを測る。断面形は逆台形である。図化できなかったが、須恵器甕片10.2g、須恵器高台坏片23.1g、土師器甕片5.4gが出土している。他の時代の遺物は含まれていないが、遺物量が少なすぎて、年代決定の材料とすることは躊躇される。

第32号溝（第41図）

Ｄ－９・10、Ｅ－10グリッドに位置する。Ａ３区北側にある。全長22.0ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.22ｍを測る。断面形はＵ字形である。第44号土壙を切っている。遺物は僅かであり、須恵器片２点20.6ｇ、土師器甕片9.6ｇ、礫１点のみである。これをもって時期決定の根拠とするには不十分である。

第36号溝（第40図）

Ｇ－13グリッドに位置する。Ａ２区東端にある。全長6.1ｍ、幅0.46ｍ、深さ0.1ｍを測る。断面形は逆台形である。遺物は皆無であった。

第38号溝（第39図）

Ｅ－15グリッドに位置する。Ａ１区中央やや東側にある。全長3.8ｍ、幅0.24ｍ、深さ0.05ｍを測る。断面形はＵ字形である。　遺物はごく僅かで、須恵器片6.1ｇ、土師器片1.6ｇのみであった。時期決定の根拠とするには不十分である。

第45号溝（第41図）

Ｅ・Ｆ－８・９グリッドに位置する。Ａ３区中央部にあり、第46号溝を切っている。全長6.5ｍ、幅0.34ｍ、深さ0.22ｍを測る。断面形はＵ字形である。遺物はごく僅かで、図示できなかったが、土師器片12.3ｇ、かわらけ片10.3ｇ、板碑片1050ｇがある。板碑が投棄されていることから中世以降であることは分かるとしても、時期決定は不能である。

第47号溝（第41図）

Ｆ－８・９グリッドに位置する。Ａ３区中央やや南側にある。全長6.6ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。断面形はＵ字形である。　遺物は皆無であった。

第49号溝（第41図）

Ｆ－８・９グリッドに位置する。Ａ３区中央部やや南よりにある。全長8.8ｍ、幅0.28ｍ、深さ0.16ｍを測る。断面形はＵ字形である。第23号井戸と第25号井戸を切っている。遺物はごく僅かで、図示しなかったが、須恵器片１点3.5ｇ、かわらけ片１点2.7ｇがすべてである。

第51号溝（第41図）

Ｅ－８グリッドに位置する。Ａ３区中央部やや南にある。全長4.5ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。断面形はＵ字形である。第54号溝を切る形で重複している。遺物は細片であり図示しなかったが、土師

器甕片61.5 g、土鍋片1点15.0 gがすべてであり、時期決定には不十分である。

第55号溝（第41図）

E－9グリッドに位置する。A3区中央にある。全長4.86 m、幅0.22 m、深さ0.04 mを測る。断面形はU字形である。遺物は皆無であった。

第56号溝（第41図）

D－9グリッドに位置する。A3区北側にある。全長2.5 m、幅0.2 m、深さ0.08 mを測る。断面形はU字形である。遺物はごく僅かであり、須恵器坏片1点1.8 g。土師器甕片16.6 gがすべてである。時期決定には不十分と判断した。

第57号溝（第42図）

C・D－11グリッドに位置する。A4区南側にある。全長4.94 m、幅0.2 m、深さ0.06 mを測る。断面形は逆台形である。遺物は須恵器細片1点のみであり、時期決定は不可能である。

第58号溝（第42図）

C－11・12、D－11グリッドに位置する。A4区南側にある。全長8.0 m、幅0.44 m、深さ0.08、0.05 mを測る。断面形はU字形である。遺物は僅かで、須恵器片5.1 g、土師器甕片7.3 gがすべてである。時期決定は不可能である。

第59号溝（第40図）

E－11、F－10・11、G・H－9・10グリッドに位置する。A2区西北端にあり、第44号溝に沿っている。全長39.3 m、幅0.46 m、深さ0.1 mを測る。断面形はU字形である。第44号溝に切られている。遺物はごく僅かで、土師器甕片1点28.3 gのみであった。年代決定は不可能である。

第60号溝（第40図）

H－9グリッドに位置する。A2区西端にあり、第44号溝に切られている。全長4.4 m、幅0.8 m、深さ0.68 mを測る。断面形は逆台形である。遺物は皆無であった。

第61号溝（第40図）

H－9グリッドに位置する。A2区西側にある。全長4.1 m、幅0.4 m、深さ0.62 mを測る。断面形はU字形である。遺物は皆無であった。

第62号溝（第40図）

G－10・11グリッドに位置する。A2区中央よりやや北側にある。全長7.6m、幅0.34m、深さ0.25mを測る。断面形はU字形である。第64号溝と連接するが前後関係は不明である。遺物は皆無であった。

第66号溝（第40図）

H－11グリッドに位置する。A2区南端にある。全長5.34 m、幅0.26 m、深さ0.07 mを測る。断面形はU字形である。遺物は皆無であった。

第67号溝（第40図）

H・I－9・10グリッドに位置する。A2区南西端にあり、第68号溝を切っている。全長14.06m、幅0.48 m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形である。遺物は図示できなかったが、須恵器甕片1点58.5 g、板碑片がある。時期決定の材料とするには不十分である。

第69号溝（第40図）

H－9グリッドに位置する。A2区南西部にあり、第89号土壙と重複している。全長2.48 m、幅0.42 m、深さ0.12 mを測る。断面形はU字形である。遺物は常滑焼甕片1点が出土している。年代決定は不可能である。

第70号溝（第42図）

C－12・13グリッドに位置する。A4区東側にあり、第14号溝に沿っている。全長3.08 m、幅0.8 m、深さ0.22 mを測る。断面形はU字形である。調査部位は溝の端部のみであり、北東方向に延びるものと推定される。遺物はごく僅かで須恵器坏片3.4 g、土師器甕片9.7 gがすべてである。年代決定は困難である。

第73号溝（第52図）

I－4・5グリッドに位置する。B区中央部にあり、東西方向の溝である。全長5.0 m、幅0.55 m、深さ0.14 mを測る。断面形はU字形である。第72号溝を切っている。遺物は皆無であった。

第74号溝（第52図）

G・H－3グリッドに位置する。B区北部にあり、極めて浅い。全長3.0m、幅1.4m、深さ0.04mを測る。断面形は逆台形である。遺物は皆無であった。

第80号溝（第52図）

K－4グリッドに位置する。B区南端にあり、東西方向の小溝である。全長5.7m、幅0.4m、深さ0.45mを測る。断面形はU字形である。第21号溝を切っている。遺物は皆無であった。

第85号溝（第52図）

G・H－3グリッドに位置する。B区西北部にある。ほぼ南北方向の溝である。全長13.6m、幅0.9m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形である。遺物は僅かであり、須恵器片2点17.9g、土師器甕片1点6.1g、片岩1点100gのみであった。

第87号溝（第52図）

J－3グリッドに位置する。B区の南西端にある。全長3.0m、幅2.14m、深さ0.1mを測る。断面形は逆台形である。遺物は図示できなかったが、少量で、手捏ねのかわらけ片1点17.4g、須恵器壷片87.3gのみであった。年代決定には不十分である。

第88号溝（第52図）

I・J－3グリッドに位置する。B区中央より西側にあり、ほぼ南北方向の走向であるが、平面形は不定形である。全長14.8m、幅0.74m、深さ0.06mを測る。断面形はU字形である。遺物は皆無であった。

第89号溝（第52図）

I－3グリッドに位置する。B区中央より西側にあり、第93号溝と重複している。全長3.5m、幅0.54m、深さ0.06mを測る。断面形は逆台形である。遺物は皆無であった。

第90号溝（第52図）

G・H－3、H－4グリッドに位置する。B区北側にあり、第78号溝の覆土上層部を切っている。全長2.8m、幅0.63m、深さ0.18mを測る。断面形はU字形である。遺物は渥美焼甕片1点54.8gのみであった。

第91号溝（第52図）

I－4グリッドに位置する。B区のほぼ中央部にあり、東端は第71号溝と、西端は第23号溝と連接し、走向は東西方向である。全長2.3m、幅0.32m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形である。遺物はごく少量で、手捏ねのかわらけ片1点17.4gと土師器甕片1点2.4gがすべてである。年代決定は困難である。

第92号溝（第52図）

J－3グリッドに位置する。B区南西部にある。全長2.7m、幅0.45m、深さ0.18mを測る。断面形は逆台形である。遺物は渥美焼小型壷片1点10.2gのみである。

第93号溝（第52図）

I－3グリッドに位置する。B区西部にある。全長5.1m、幅2.38m、深さ0.16mを測る。断面形は逆台形である。横断面に傾斜があり、しかも短いので、溝というより土壙とした方が良いかもしれない。遺物は皆無であった。

第94号溝（第52図）

J－3グリッドに位置する。B区南西端にあり、第95号溝と直交して連接している。全長4.1m、幅0.66m、深さ0.06mを測る。断面形はU字形である。遺物は皆無であった。

第95号溝（第52図）

J－3・4グリッドに位置する。B区南西端にあり、走向は東西方向である。全長6.0m、幅0.78m、深さ0.07mを測る。断面形は逆台形である。遺物は皆無であった。

第96号溝（第52図）

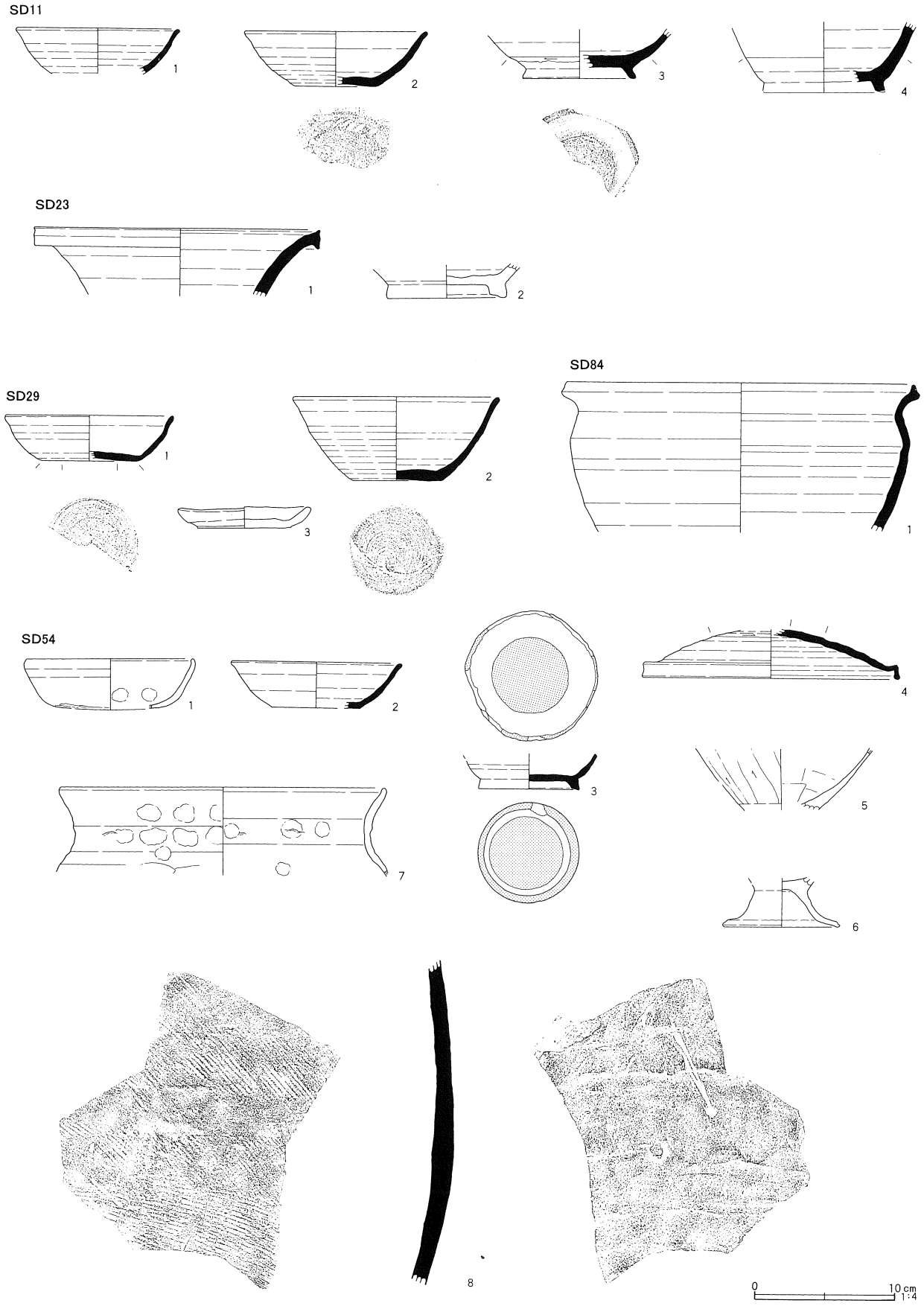
I－4グリッドに位置する。B区中央にあり、第71号溝と重複する。全長1.6m、幅0.32m、深さ0.06mを測る。断面形はU字形である。遺物は皆無であった。

第97号溝（第52図）

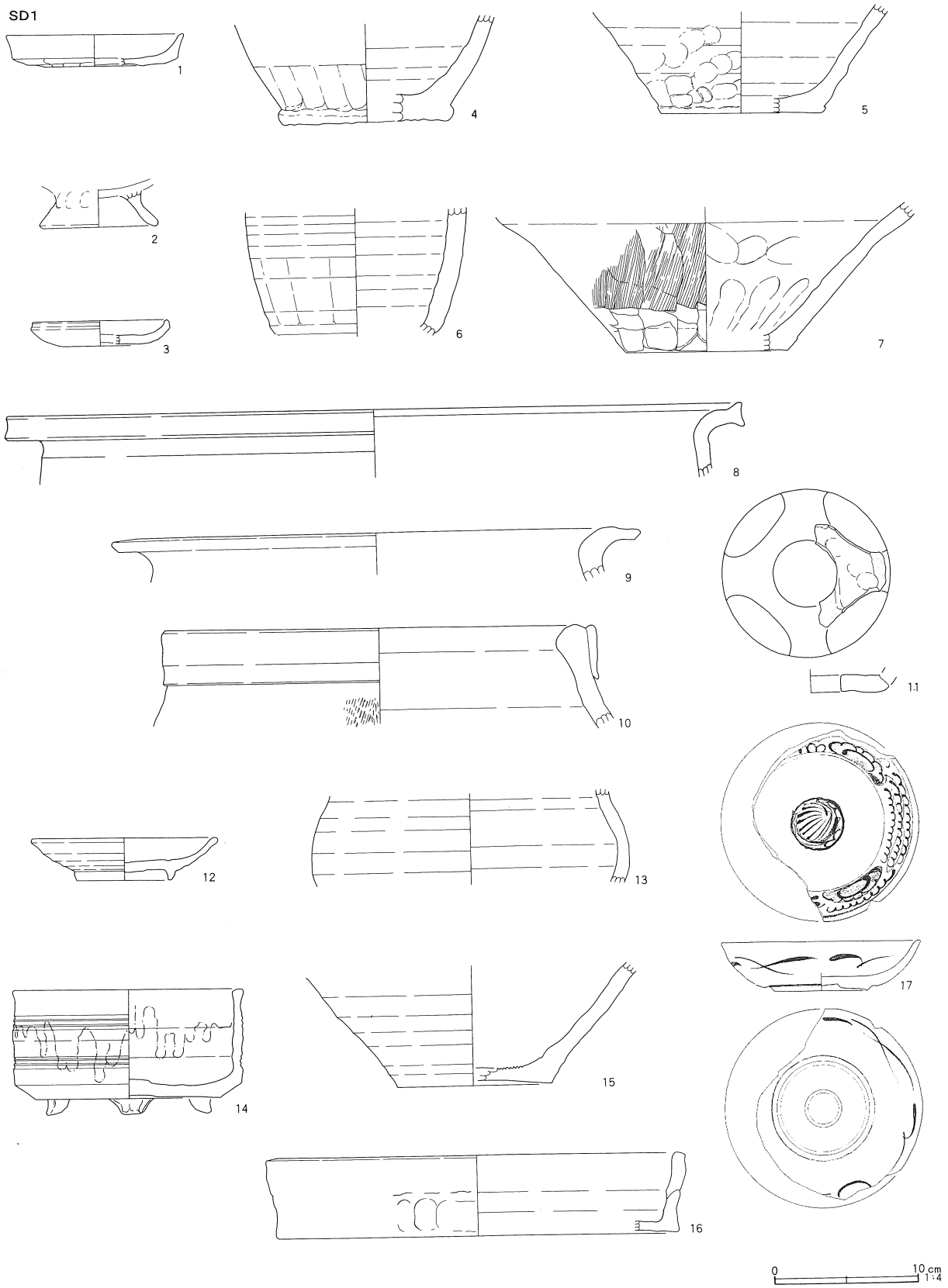
J－4グリッドに位置する。B区南側にあり、第76・78溝と重複する。全長3.1m、幅0.3m、深さ0.07mを測る。断面形はU字形である。遺物はごく僅かで、須恵器坏片1点12.2gとかわらけ片1点2.9gのみであった。

第98号溝（第52図）

第56図　溝（古代）出土遺物



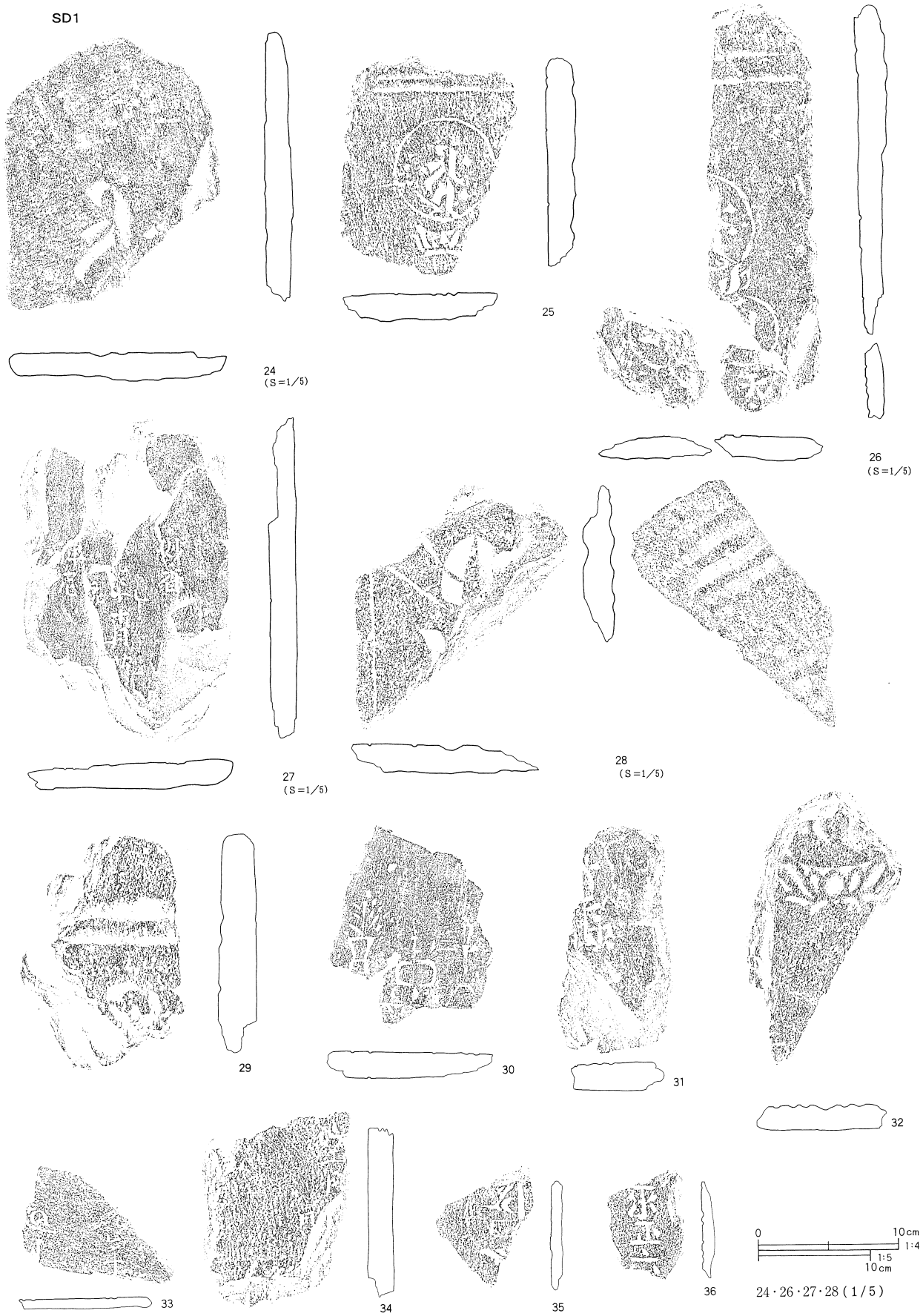
第57図　溝（中世前期）出土遺物(1)



第58図　溝（中世前期）出土遺物(2)

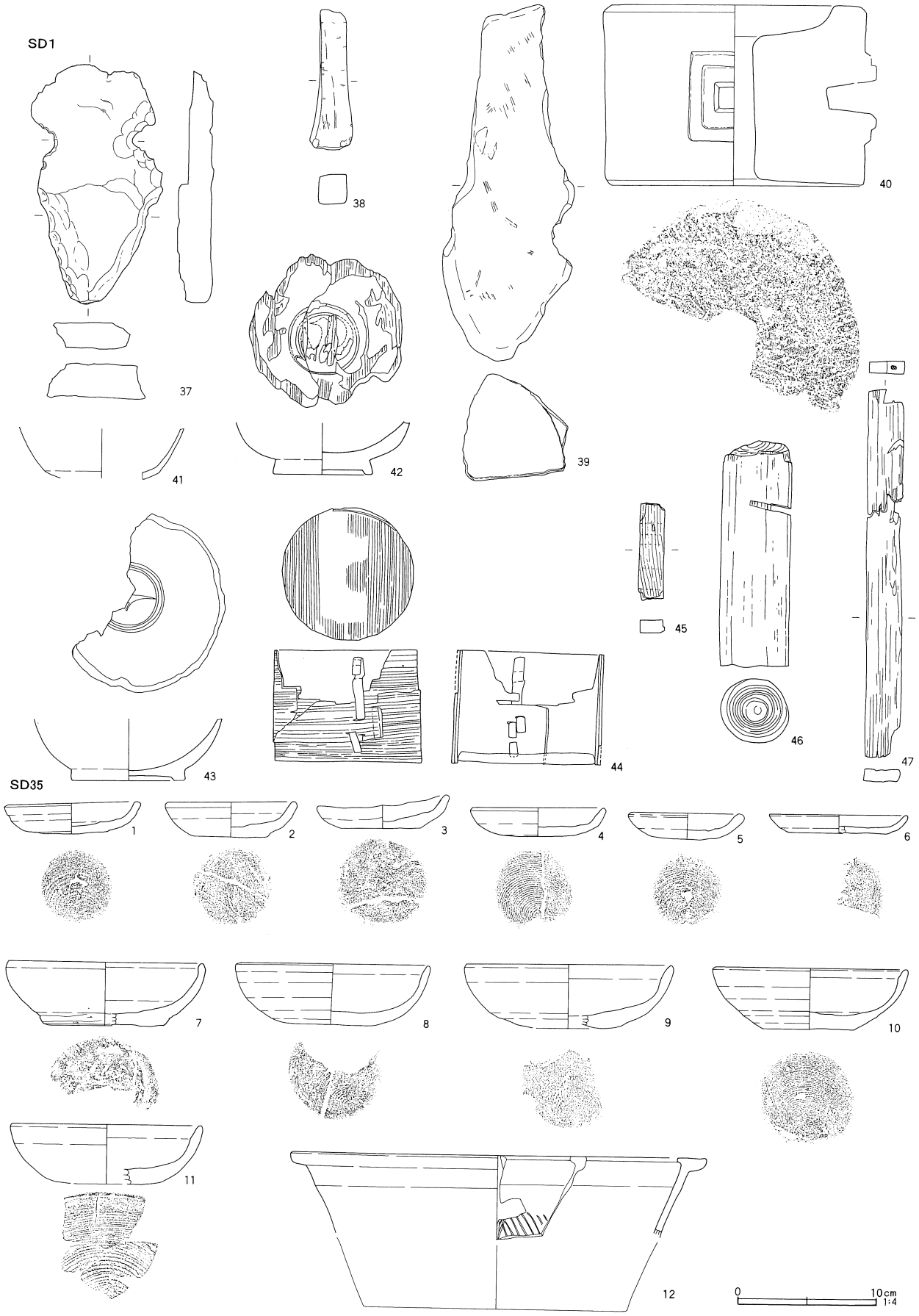
第59図　溝（中世前期）出土遺物(3)

SD1



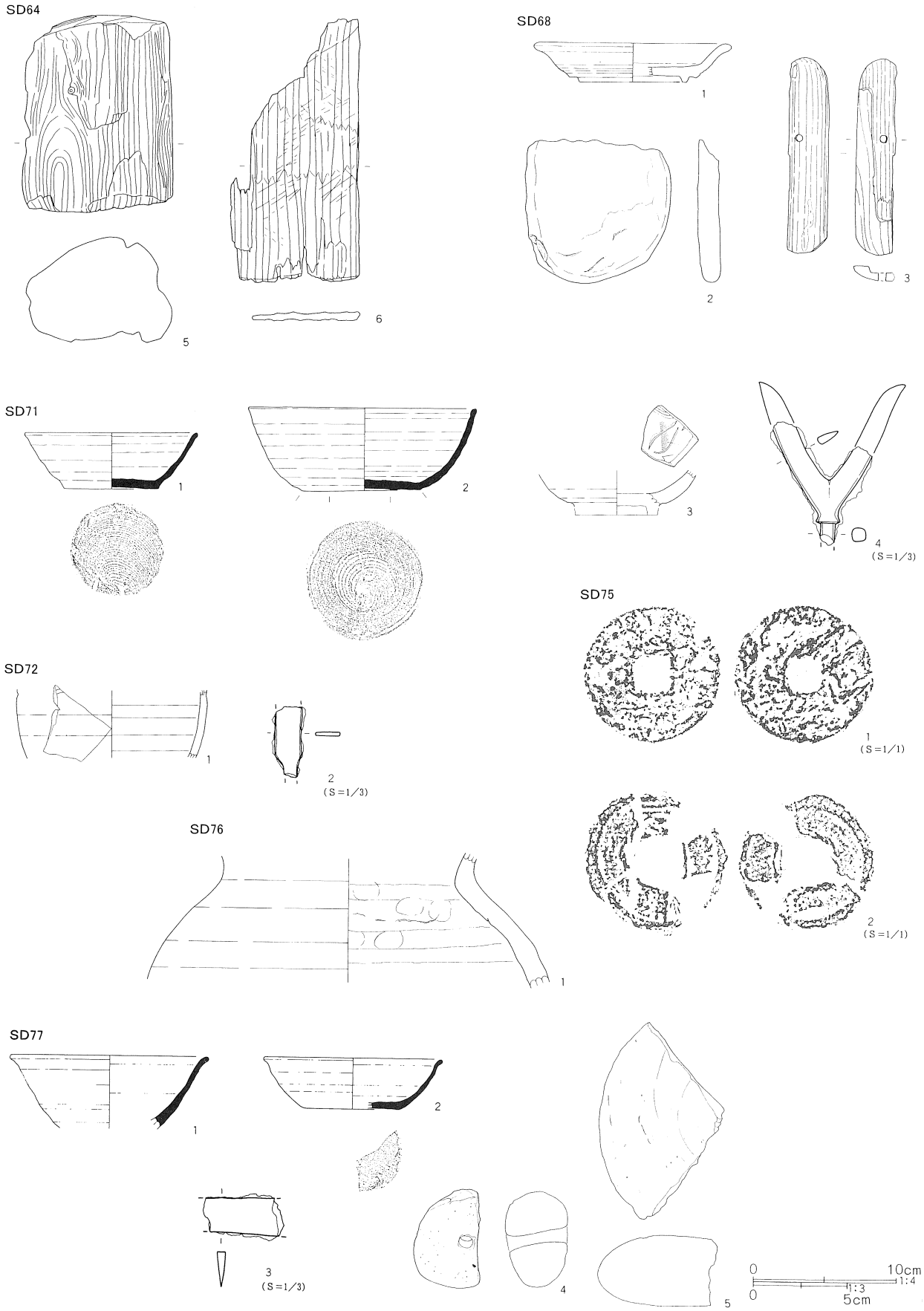
24・26・27・28（1/5）

第60図　溝（中世前期）出土遺物(4)

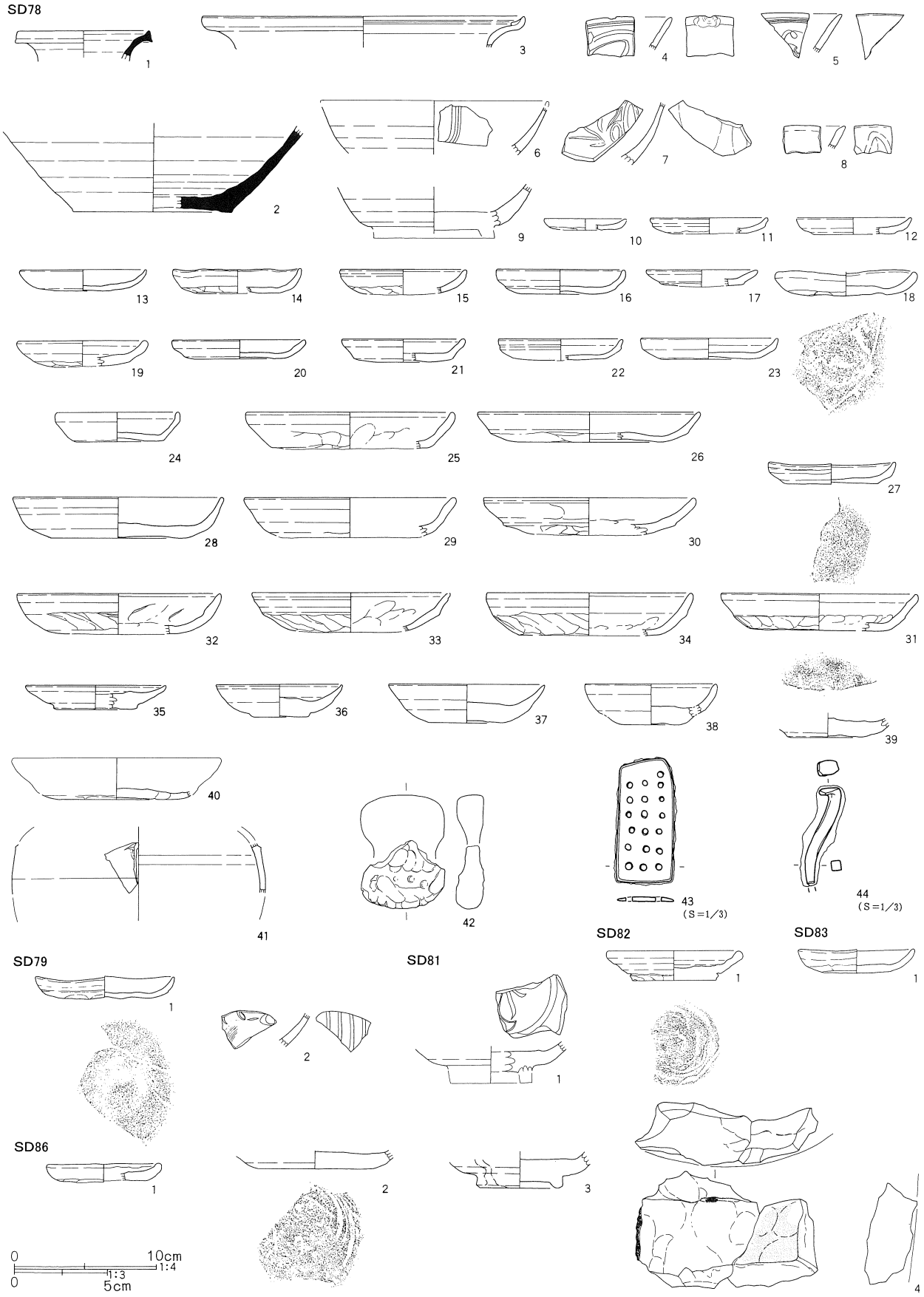


第61図　溝（中世前期）出土遺物(5)

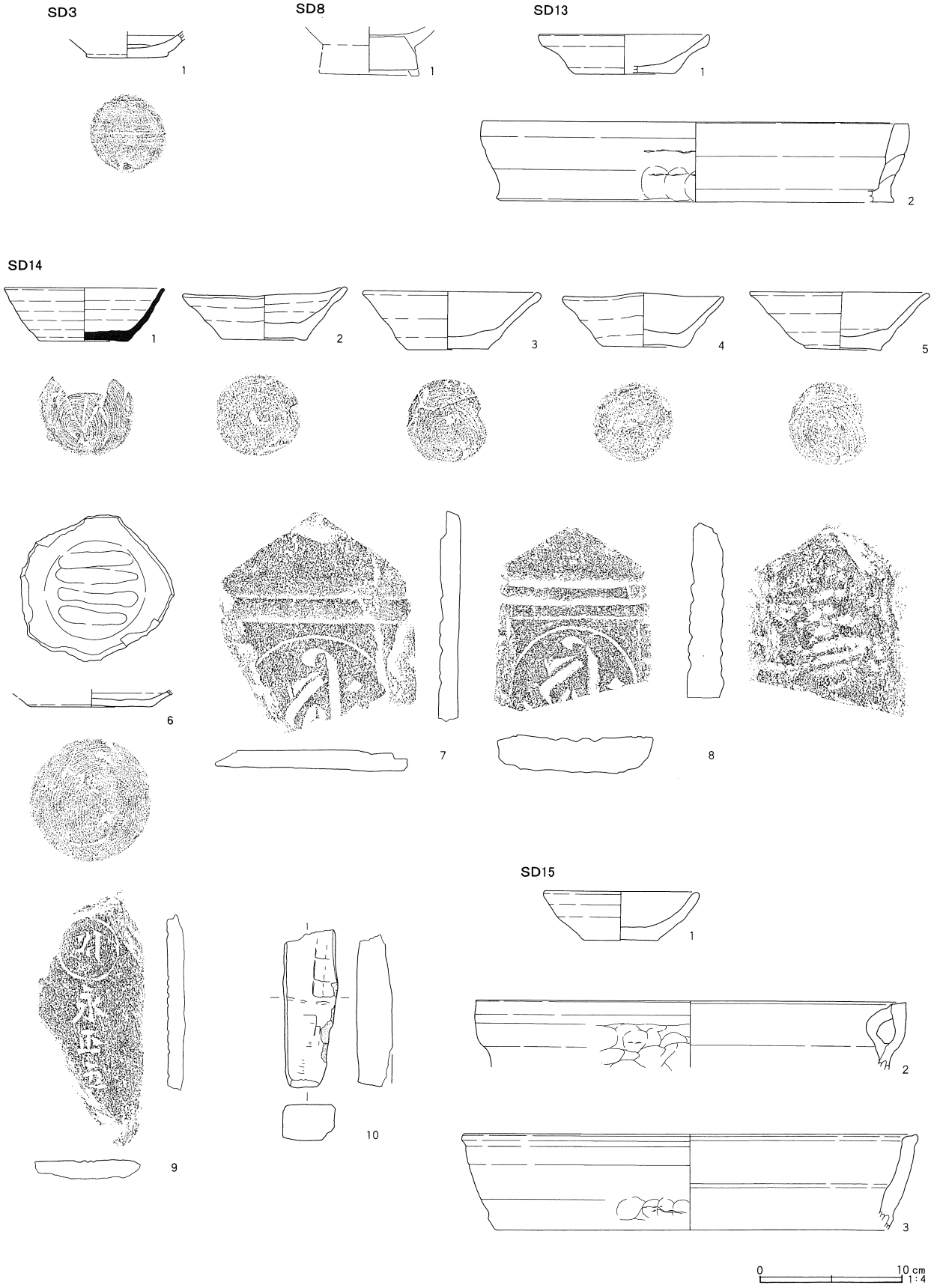
第62図　溝（中世前期）出土遺物(6)



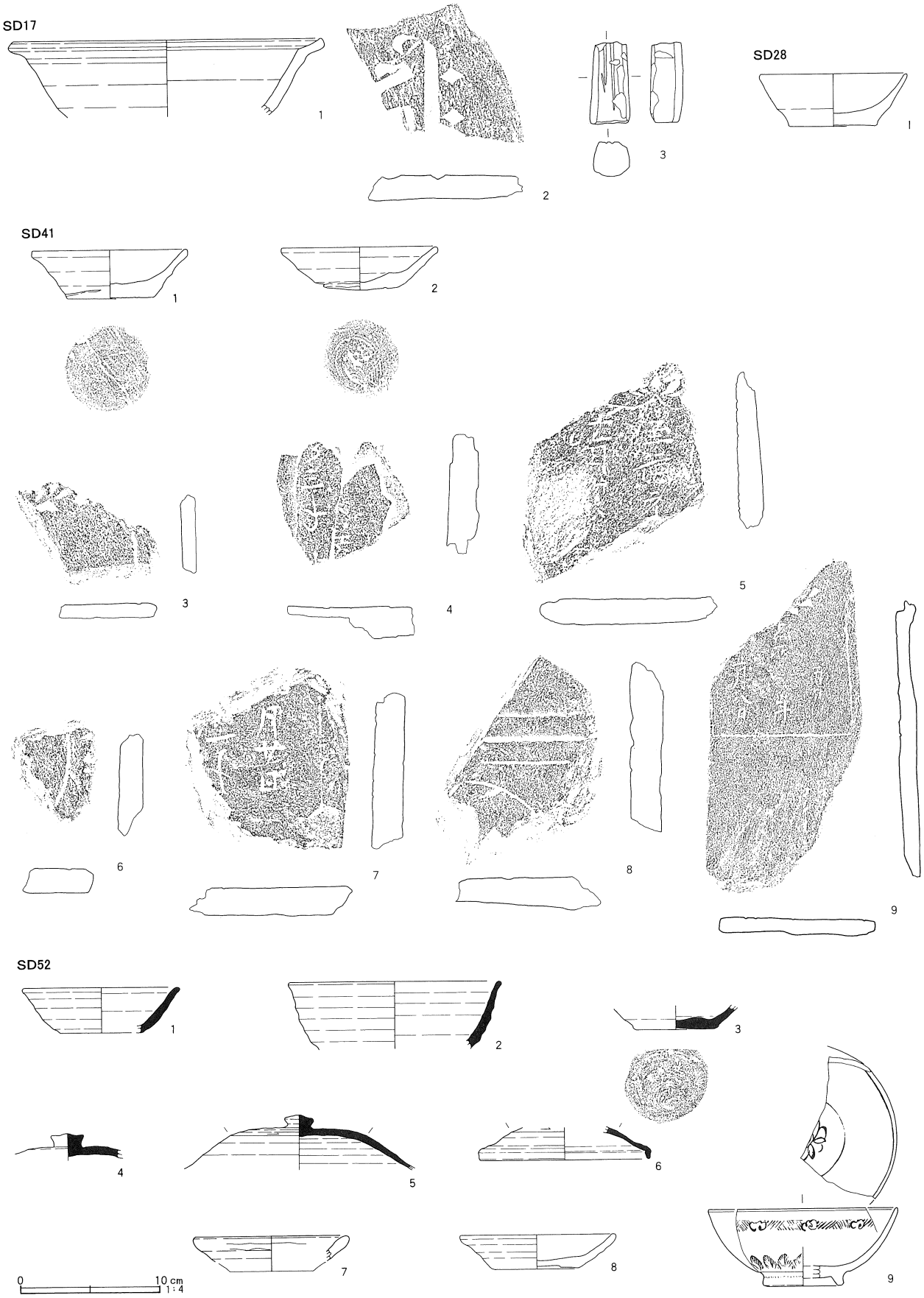
第63図　溝（中世前期）出土遺物(7)



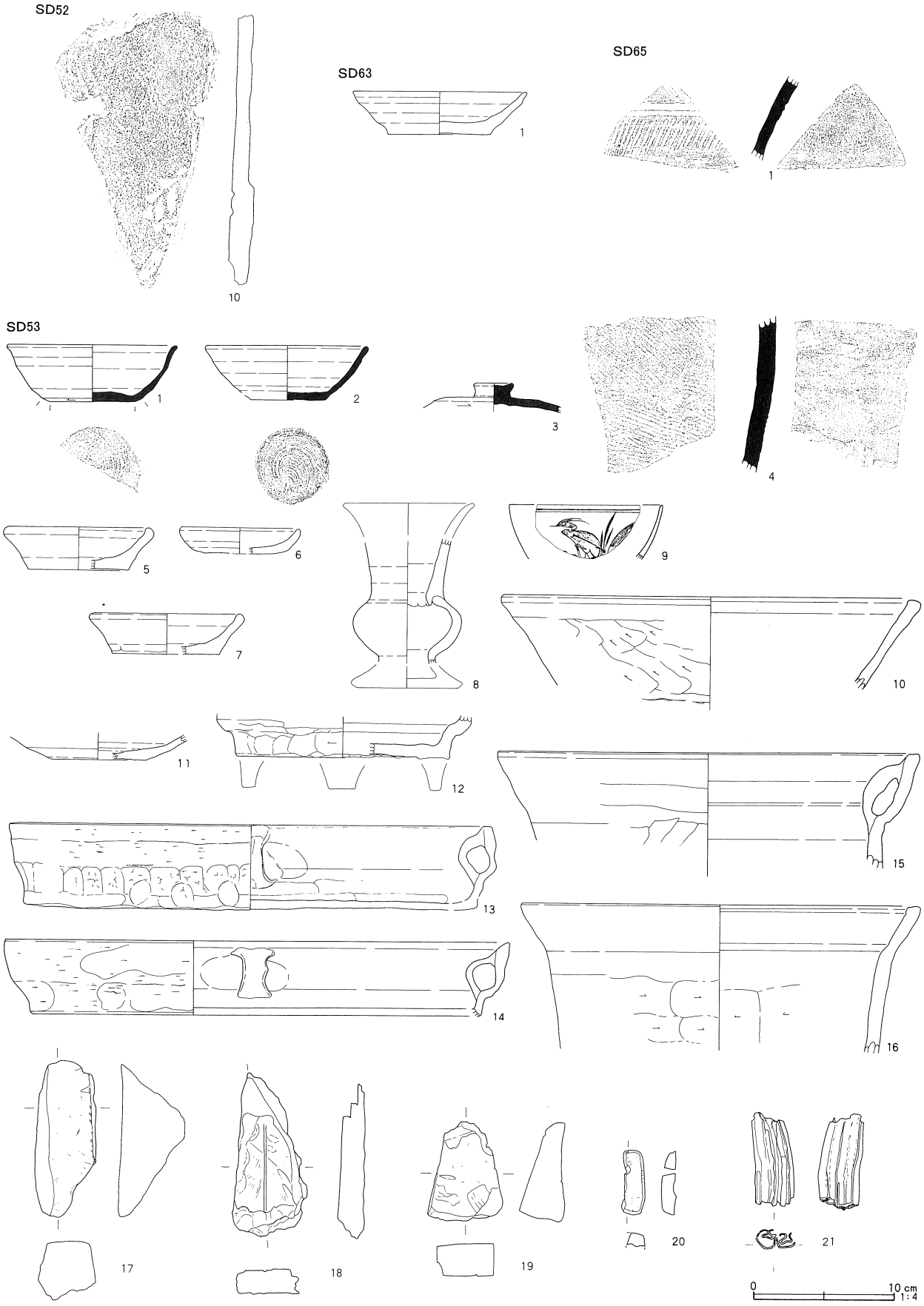
第64図　溝（中世後期）出土遺物(1)



第65図　溝（中世後期）出土遺物(2)

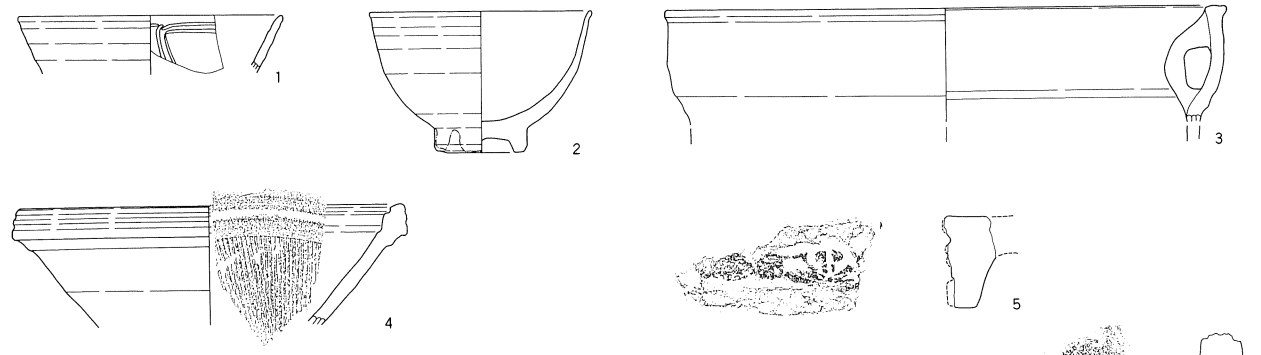


第66図　溝（中世後期）出土遺物(3)

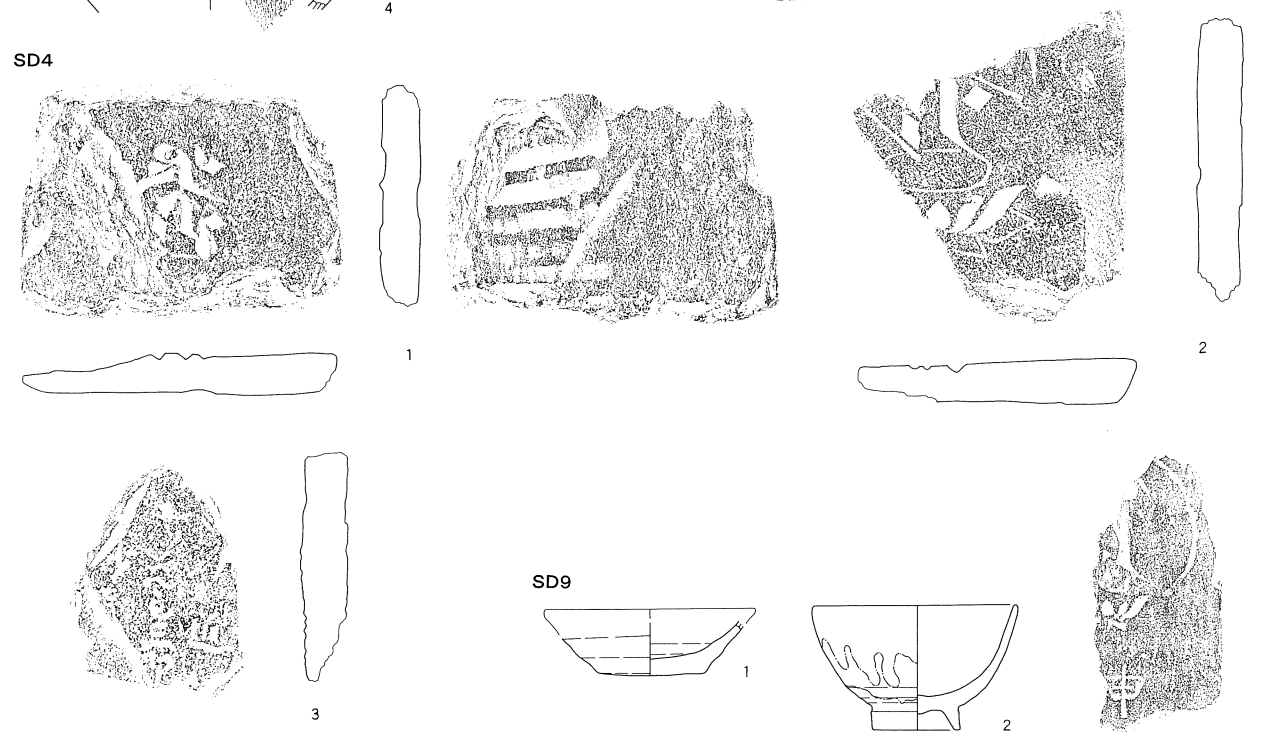


第67図　溝（近世）出土遺物(1)

SD2

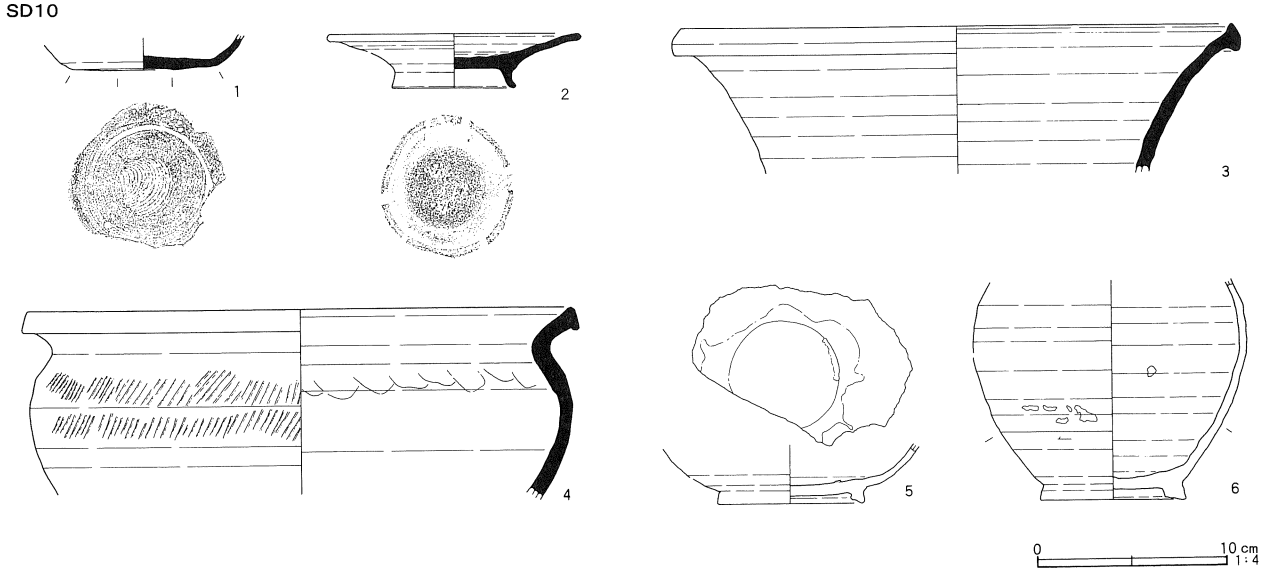


SD4

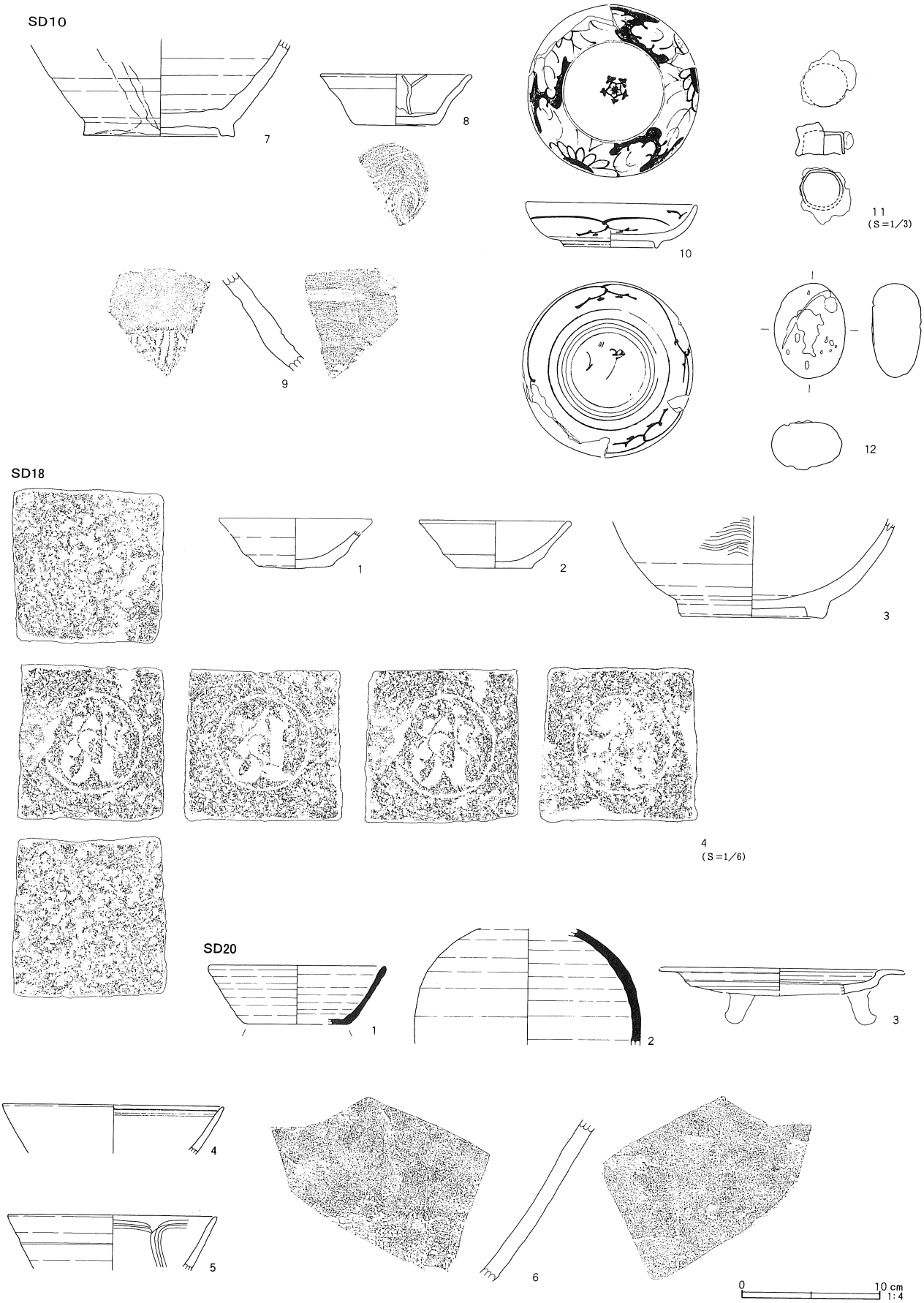


SD9

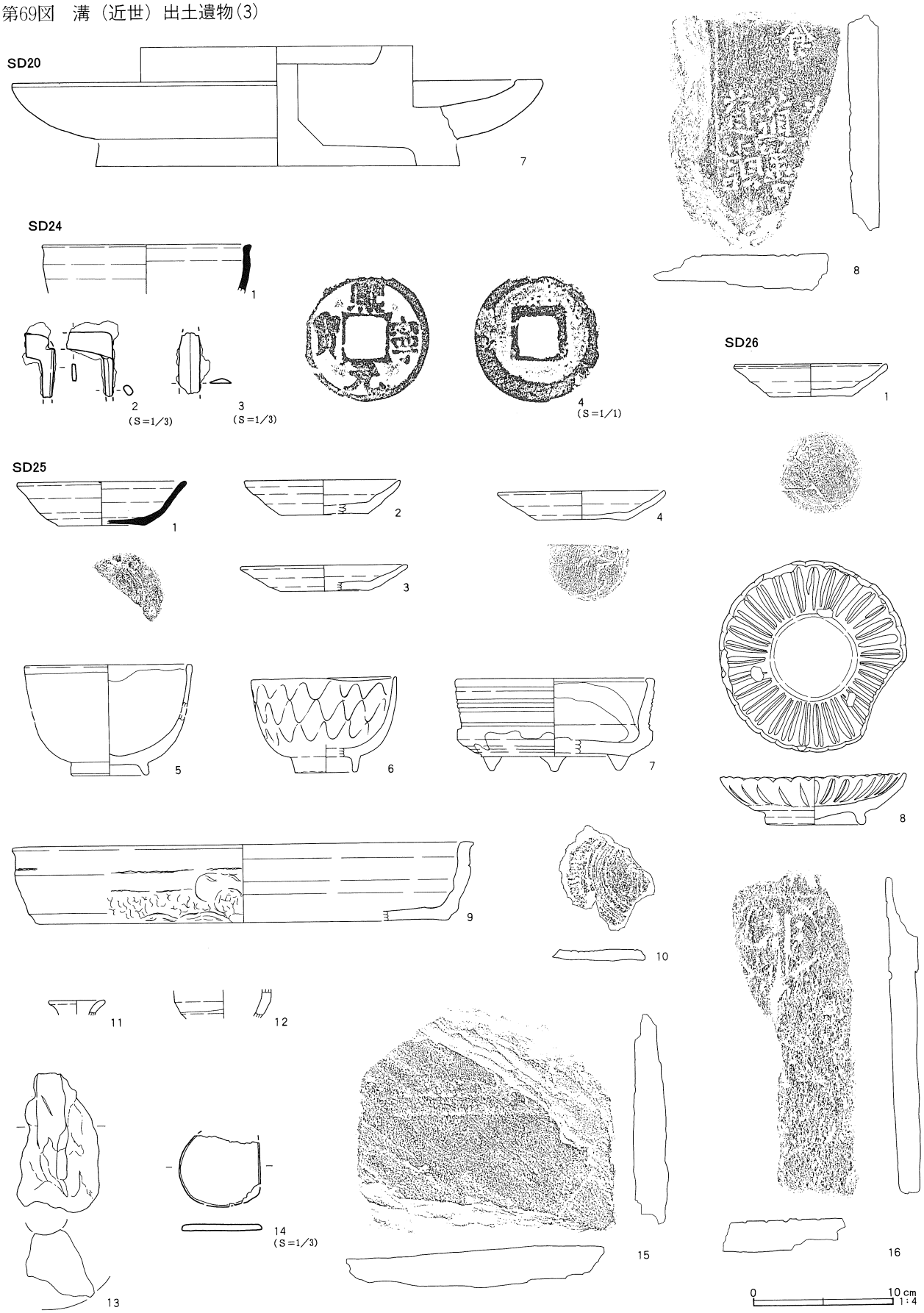
SD10



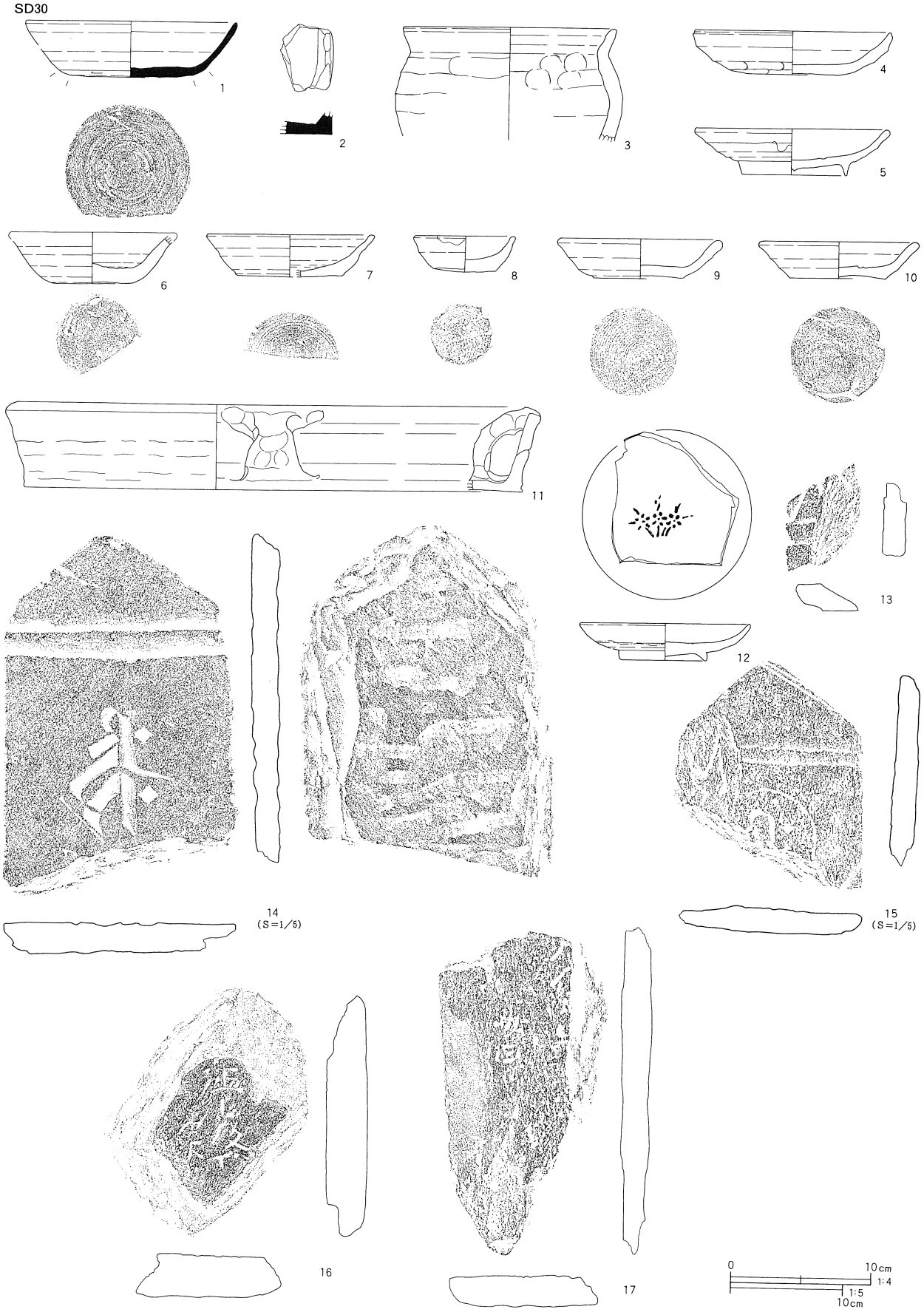
第68図　溝（近世）出土遺物(2)



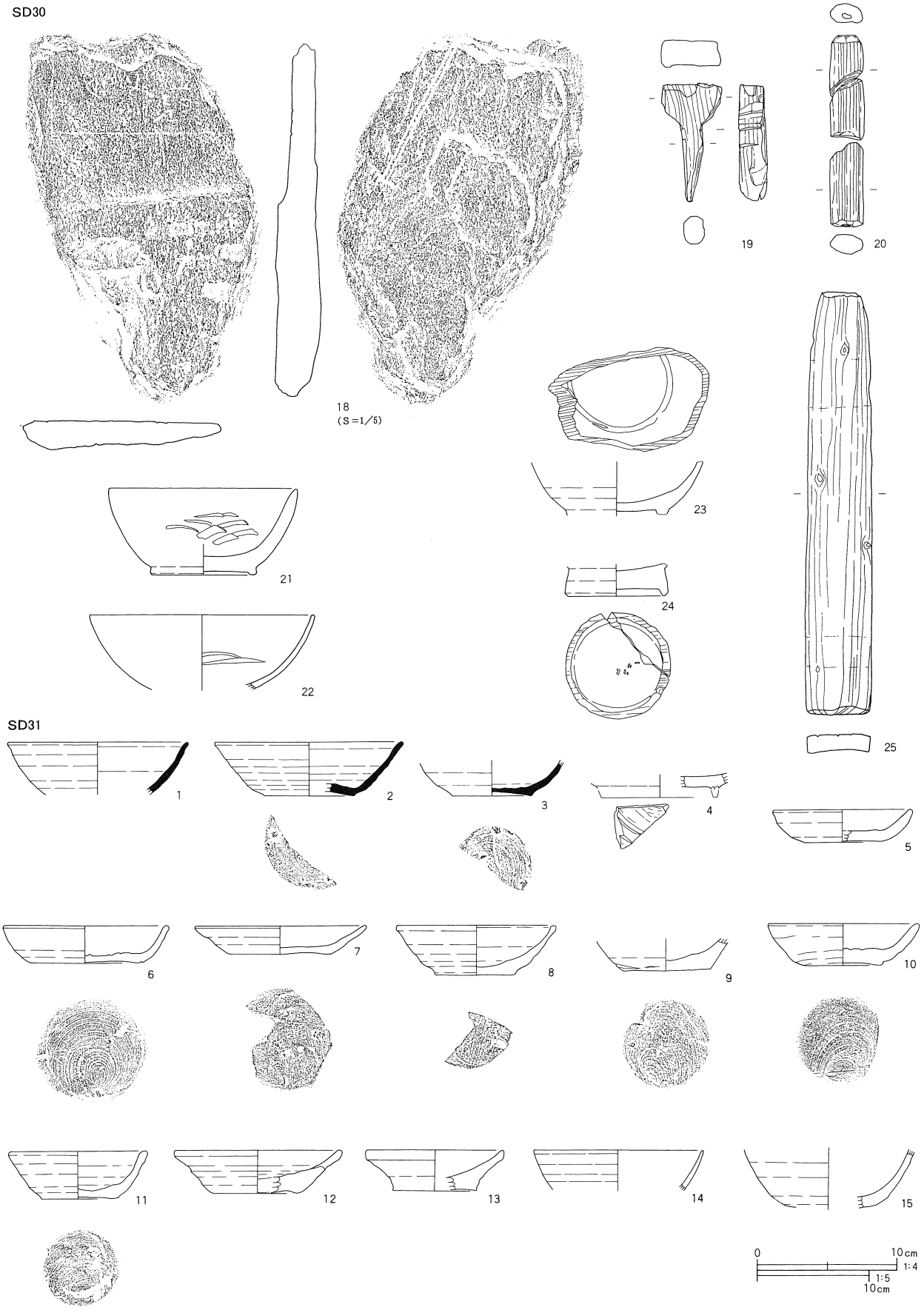
第69図　溝（近世）出土遺物(3)



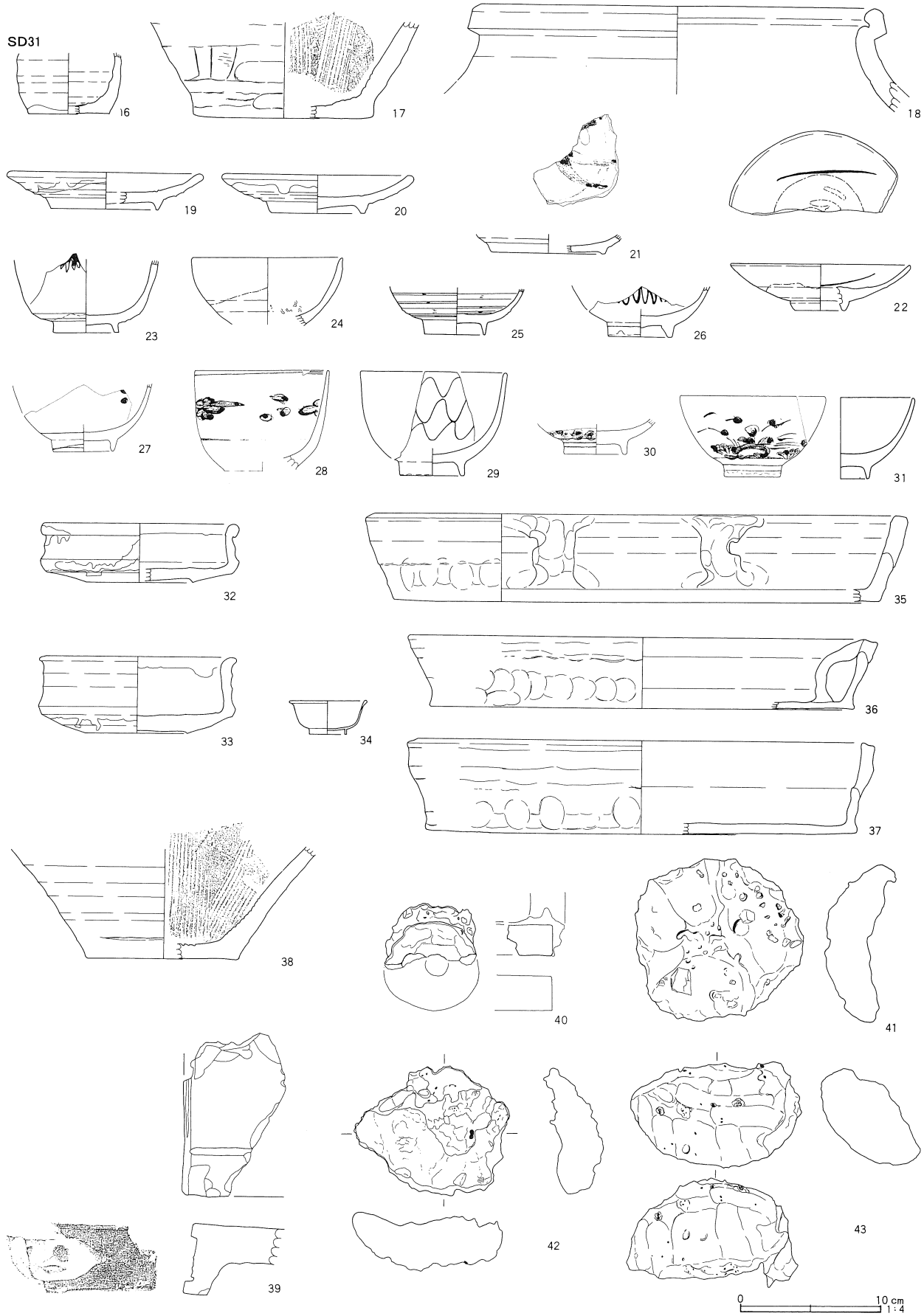
第70図　溝（近世）出土遺物(4)



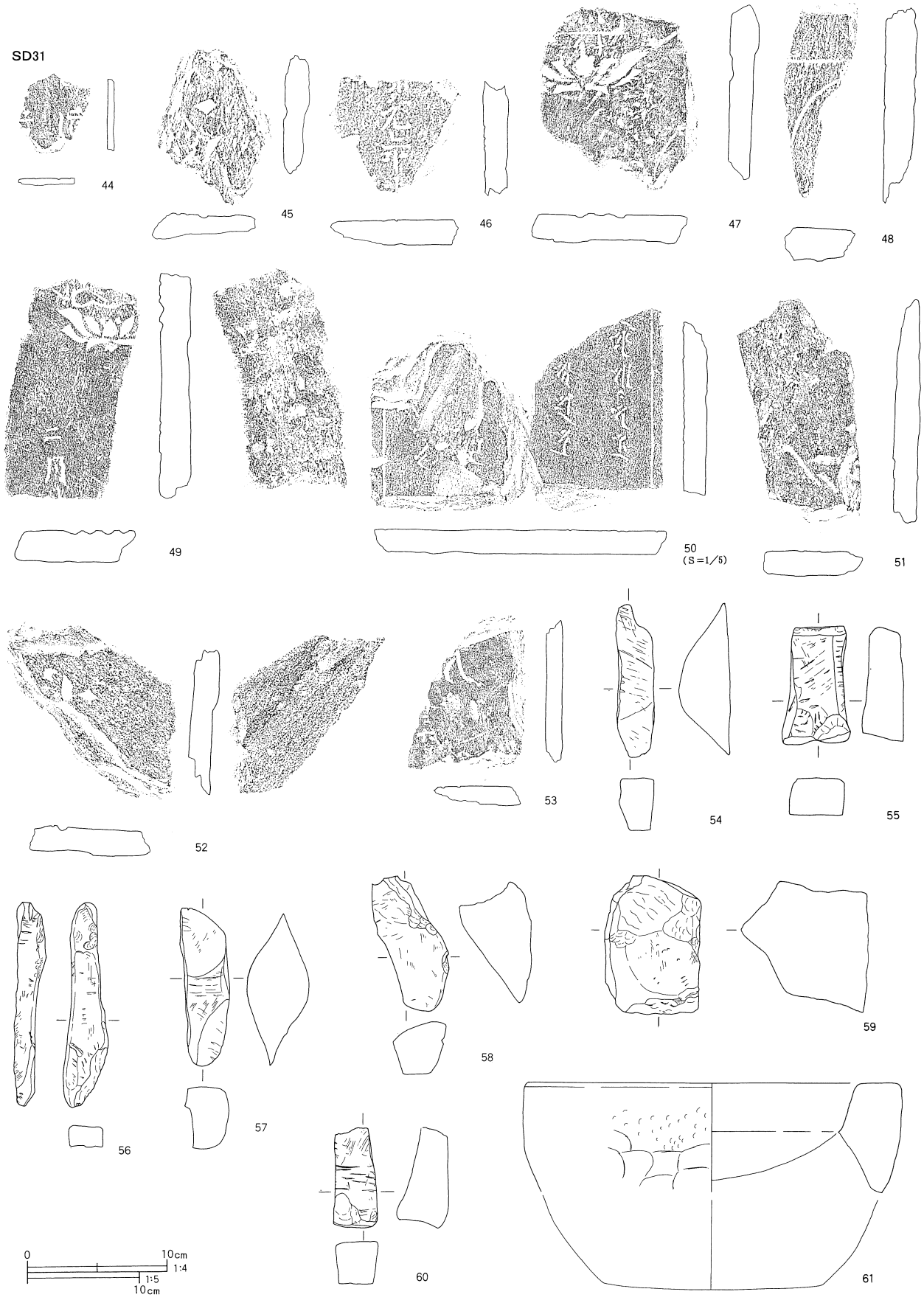
第71図　溝（近世）出土遺物(5)



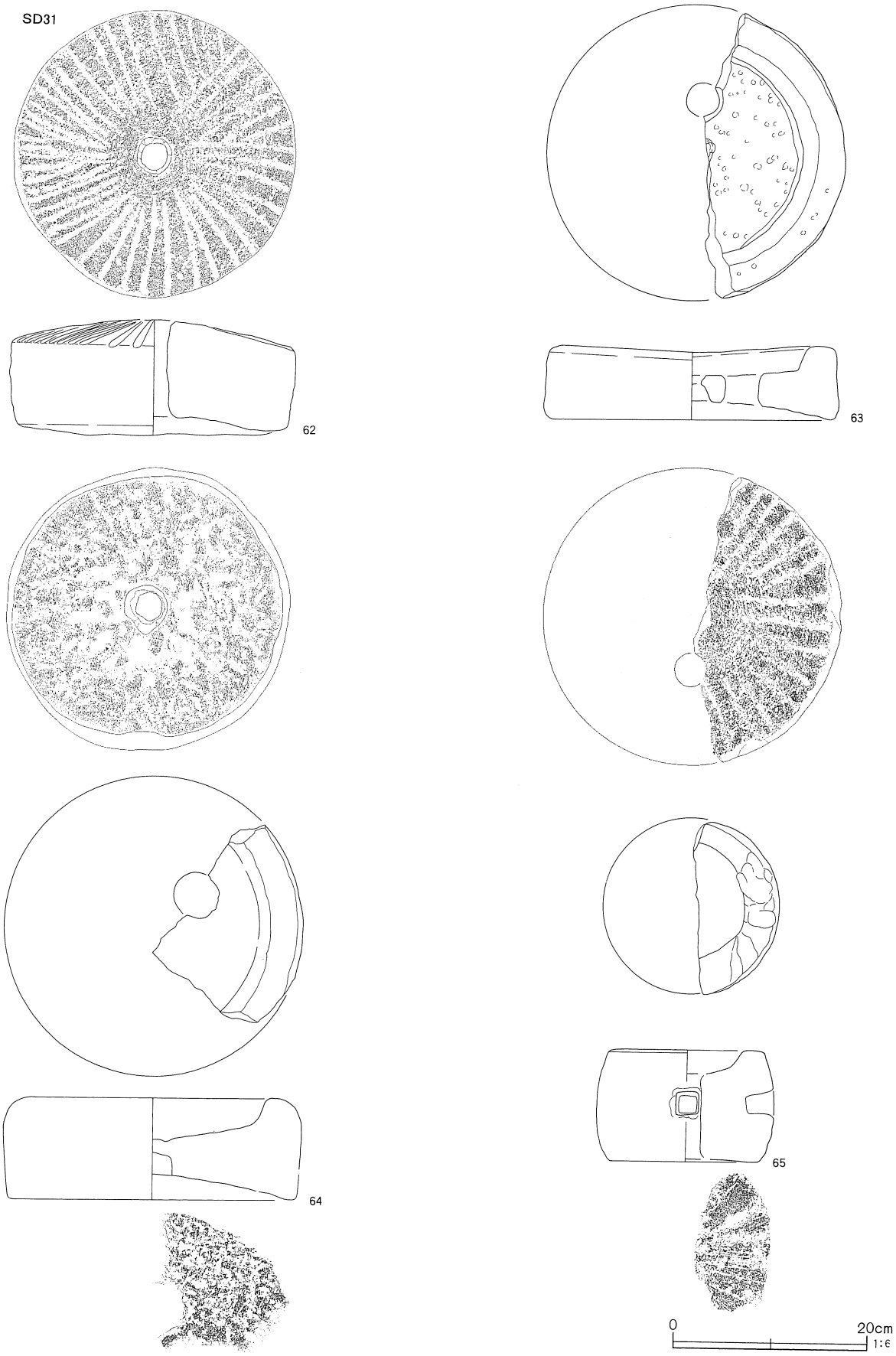
第72図　溝（近世）出土遺物(6)



第73図　溝（近世）出土遺物(7)

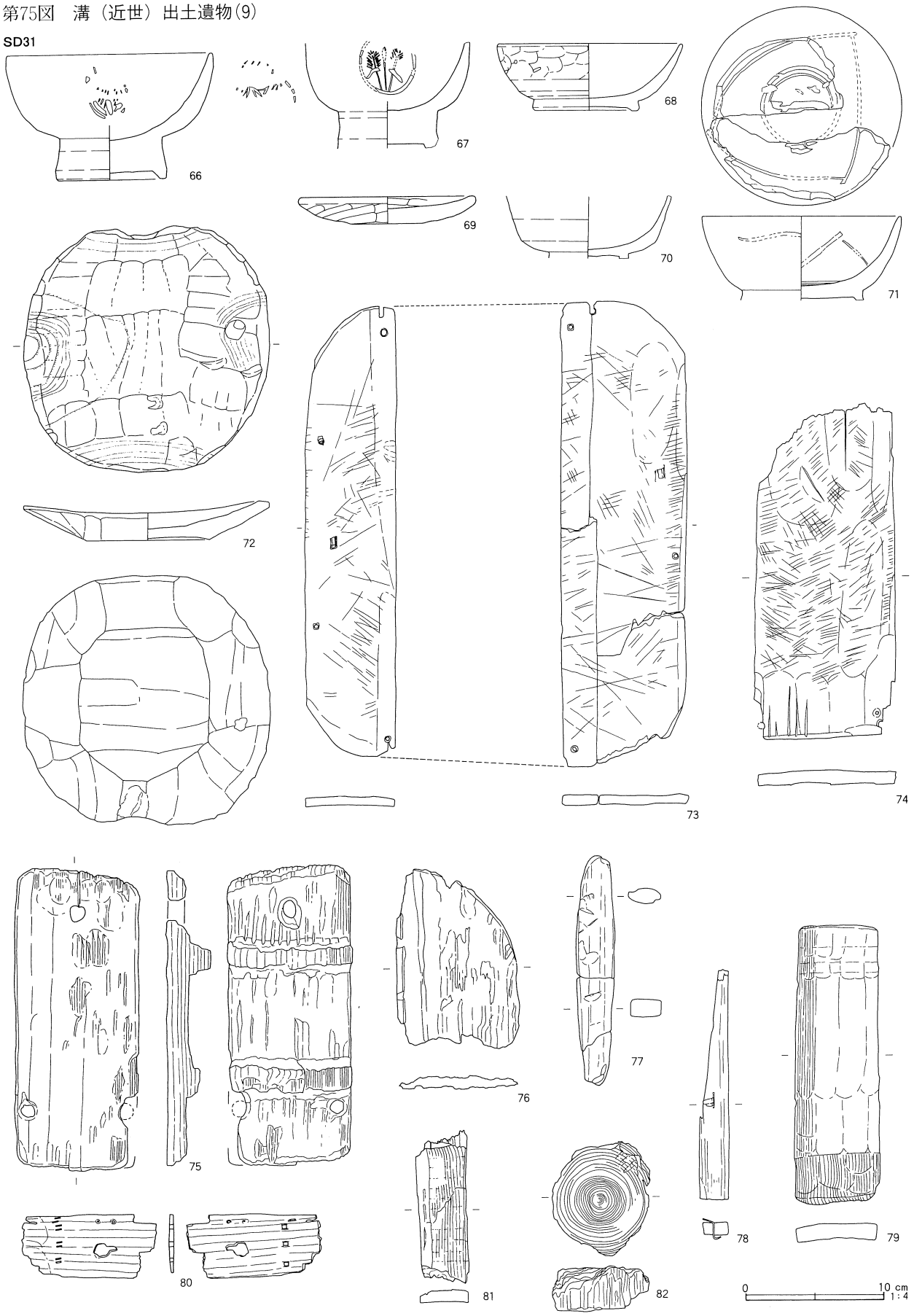


第74図　溝（近世）出土遺物(8)

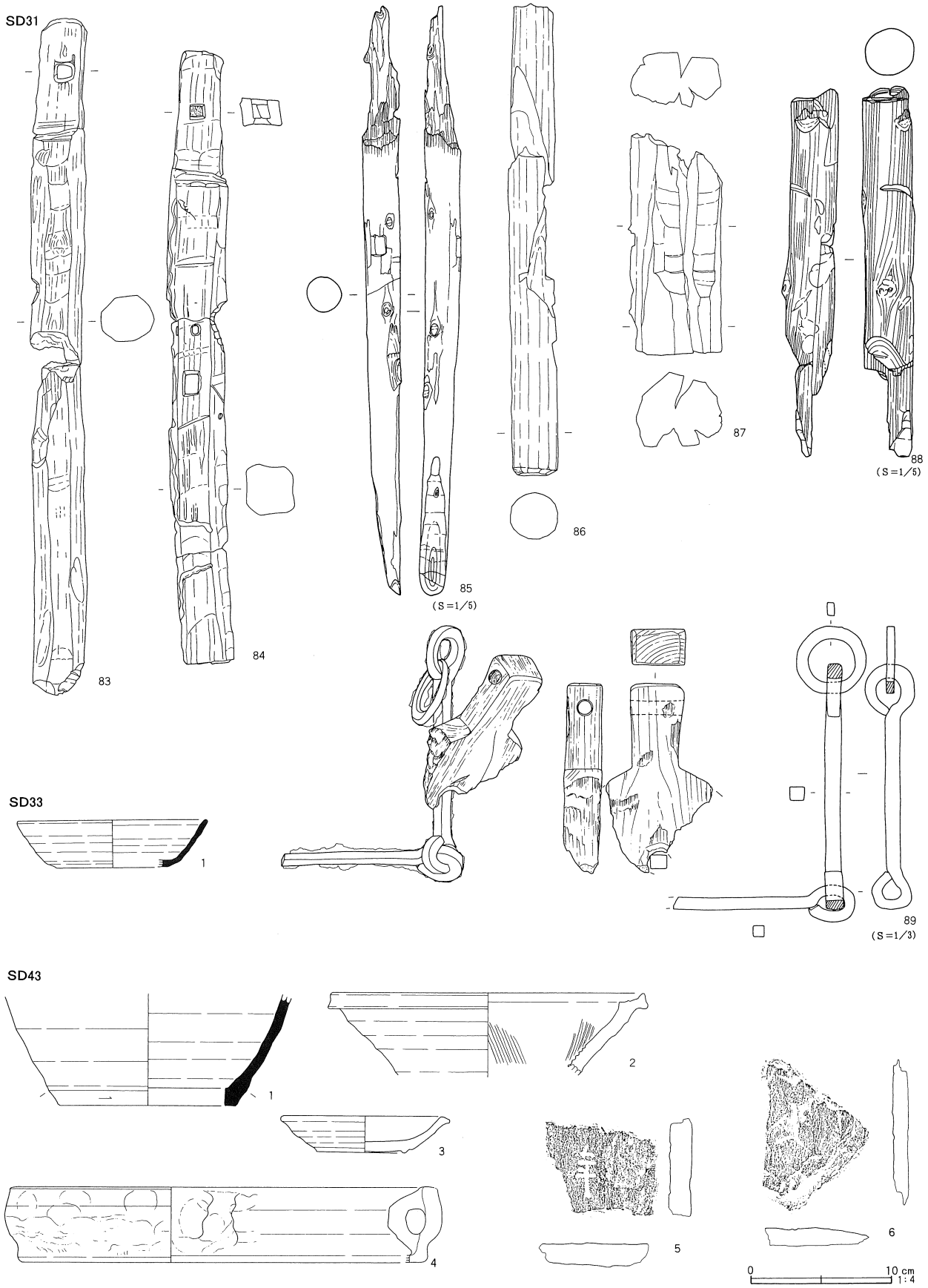


第75図　溝（近世）出土遺物(9)

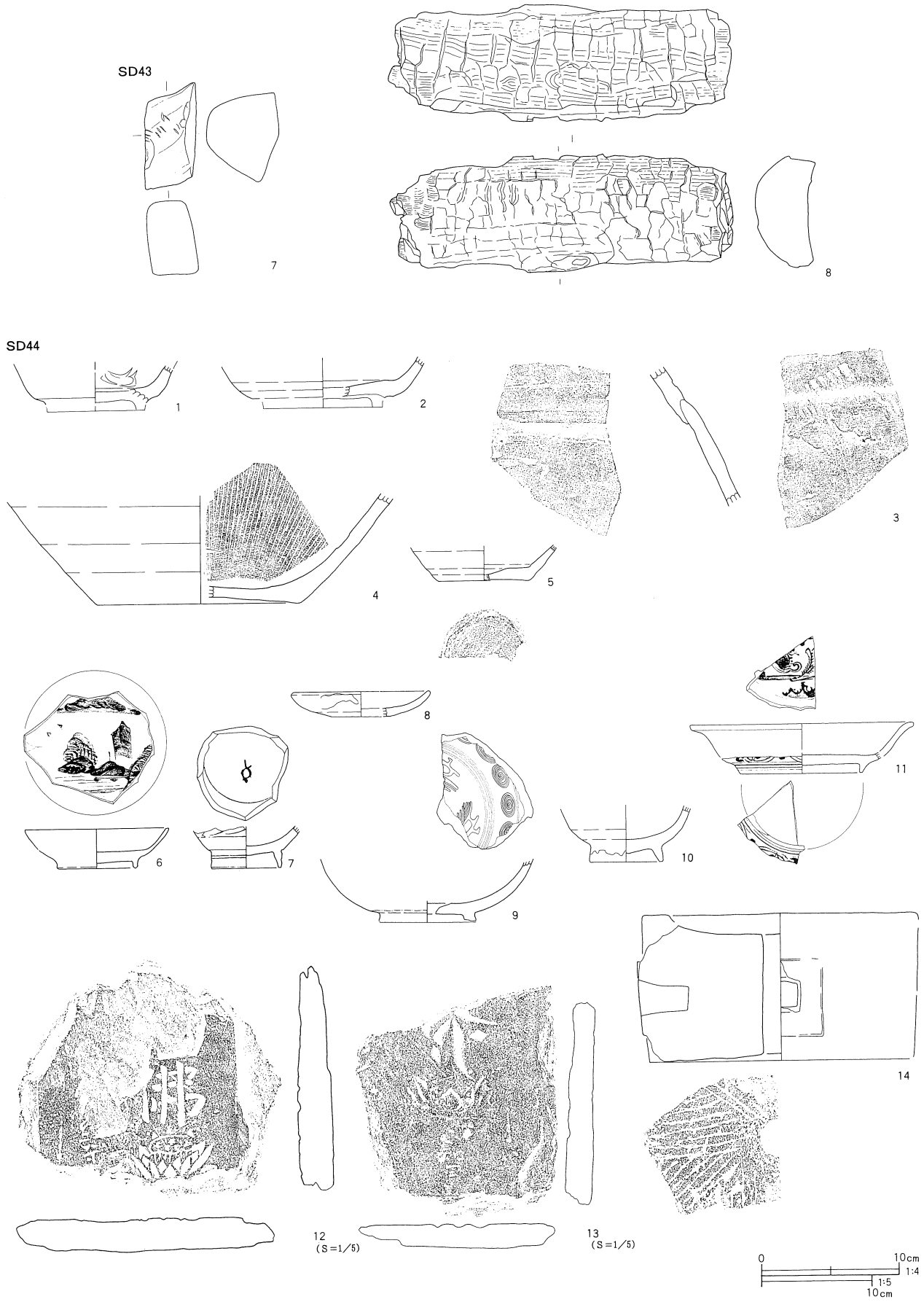
SD31



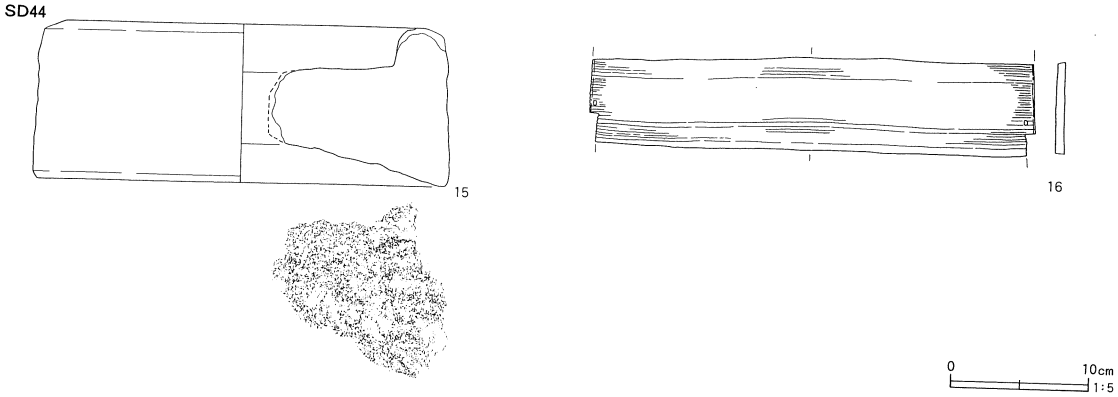
第76図　溝（近世）出土遺物(10)



第77図　溝（近世）出土遺物(11)



第78図　溝（近世）出土遺物(12)



H－5・6グリッドに位置する。B区東端にあり、調査区外に延びている。全長10.6 m、幅2.25 m、深さ0.72 m を測る。断面形はU字形である。遺物は皆無であった。

第99号溝（第52図）

J－3グリッドに位置する。B区南西部にあり、第95号溝と直交に連接する。全長4.1 m、幅0.52 m、深さ0.04 m を測る。断面形は逆台形である。遺物は皆無であった。

第100号溝（第40図）

G－14グリッドに位置する。A2区の東端にあり、第37号溝と重複する。全長3.5 m、幅0.32 m、深さ0.45 m を測る。断面形はU字形である。遺物は皆無であった。

溝出土遺物観察表（第56～78図）

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD11	1	須恵器坏	(11.6)	(3.2)	－	CEF	Ⅰ	N5/0	30	南比企産
	2	須恵器坏	(13.0)	3.9	(5.5)	EFH	Ⅱ	2.5Y6/	25	南比企産
	3	須恵器高台埦	－	(3.5)	(7.8)	CEF	Ⅱ	5Y5/1	40	南比企産
	4	須恵器長頸瓶	－	(5.0)	(8.5)	EF	Ⅰ	N5/0	35	南比企産
SD23	1	須恵器甕	(20.5)	(4.8)	－	BEF	Ⅱ	N4/0	15	南比企産
	2	灰釉長頸瓶	－	(2.4)	8.4	EK	Ⅱ	5Y7/1	45	
SD29	1	須恵器坏	12.0	3.2	6.7	BEFJ	Ⅰ	2.5GY5/1	35	南比企産、周辺ヘラ削り
	2	須恵器埦	(14.6)	6.0	6.3	BF	Ⅲ	10YR8/4	35	南比企産
	3	かわらけ	9.5	1.4	6.6	ABGHJL	Ⅱ	10YR7/2	40	手捏ね
SD54	1	土師器坏	11.8	3.5		ABDE	Ⅰ	5YR5/6	35	口縁端部外面漆付着
	2	須恵器坏	12.0	3.2	(6.3)	BCF	Ⅱ	N6/0	30	南比企産、№6
	3	須恵器高台埦	－	(2.5)	7.0	BEFH	Ⅰ	N5/0	95	南比企産、砥石として再利用、№7
	4	須恵器蓋	18.1	(3.5)	－	EF	Ⅲ	10YR8/1	95	南比企産、№2・3・5・10
	5	土師器台付甕	－	4.3	－	ABE	Ⅰ	5YR5/8	60	№4
	6	土師器台付甕	－	(3.5)	8.0	ABEH	Ⅰ	2.5YR5/8	95	
	7	土師器甕	(23.0)	(6.2)	－	BEH	Ⅰ	5YR6/8	15	
	8	須恵器甕	－	(23.0)	－	CEF	Ⅰ	N4/1	－	南比企産、平行叩き、無文のあて具
SD84	1	須恵器鉢	(24.6)	(10.5)	－	BEF	Ⅰ	7.5GY5/1	10	南比企産№1
SD1	1	かわらけ	12.4	(2.2)	(6.9)	BFL	Ⅰ	7.5YR6/4	20	手捏ね
	2	かわらけ	－	(2.4)	8.0	ABEIJL	Ⅰ	7.5YR5/4	70	足高高台付
	3	かわらけ	(9.5)	(1.8)	(5.0)	AH	Ⅰ	7.5YR6/4	40	手捏ね
	4	壺	－	(7.3)	(12.0)	CG	Ⅰ	N6/	25	渥美焼
	5	片口鉢	－	(7.5)	(11.0)	BG	Ⅰ	N5/	25	山茶碗系
	6	広口壺	－	(8.8)	－	BGH	Ⅰ	10Y5/1	20	常滑焼、外面7.5Y6／2の灰釉
	7	片口鉢	29.0	(10.2)	11.2	B	Ⅰ	7.5YR4/1	25	常滑焼、SD1内井戸出土
	8	大甕	(31.2)	(5.0)	－	ACE	Ⅰ	5YR5/4	7	常滑焼、上面灰白色自然釉
	9	大甕	(36.8)	(3.7)	－	CH	Ⅰ	7.5Y2/1	15	渥美焼、内外面7.5Y6／2自然釉
	10	大甕	(30.0)	(7.4)	－	EC	Ⅰ	2.5YR4/2	10	常滑焼、外面オリーブ黒色自然釉
	11	須恵器甑	－	－	－	BEGL	Ⅰ	5Y7/1	30	
	12	小皿	13.0	2.9	6.5	GH	Ⅰ	10Y7/1	50	瀬戸美濃系、内外面7.5Y6／2灰釉
	13	天目釉壺	－	(6.5)	－	BGHJ	Ⅰ	5Y8/2		瀬戸美濃系、外面天目釉
	14	香炉	16.2	8.6	(11.6)	BC	Ⅰ	2.5Y8/1	70	瀬戸美濃系、10YR3／3の鉄釉

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD 1	15	擂鉢	—	(8.3)	(10.7)	C	Ⅰ	5RP3/1	50	瀬戸美濃系、内外面無光沢釉
	16	焙烙	(29.0)	(5.5)	(28.0)	AEH	Ⅰ	2.5Y8/1	10	瓦質
	17	染付皿	13.6	3.4	6.4	H	Ⅰ	5Y8/1	80	肥前系
	18	板碑	長62.5	幅17.0	厚2.5					緑泥片岩、重量2.3kg
	19	板碑	長48.6	幅18.0	厚15.0					緑泥片岩、重量2.7kg
	20	板碑	長32.2	幅18.0	厚3.3					緑泥片岩
	21	板碑	長26.5	幅16.0	厚2.5					点斑緑泥片岩
	22	板碑	長34.9	幅25.6	厚2.6					緑泥片岩
	23	板碑	長34.2	幅15.0	厚2.8					緑泥片岩、重量2.61kg
	24	板碑	長25.0	幅20.0	厚2.5					輝緑凝灰岩、重量1.96kg
	25	板碑	長18.4	幅13.7	厚2.7					緑泥片岩
	26	板碑	長36.8	幅19.2	厚2.5					点紋緑泥片岩
	27	板碑	長28.4	幅18.8	厚2.3					点紋緑泥片岩、重量2.08kg
	28	板碑	長14.8	幅15.4	厚2.5					緑泥片岩
	29	板碑	長16.5	幅10.2	厚2.8					緑泥片岩
	30	板碑	長13.3	幅12.1	厚1.8					点斑緑泥片岩
	31	板碑	長15.9	幅7.9	厚2.0					絹雲母片岩
	32	板碑	長19.5	幅9.5	厚1.8					緑泥片岩
	33	板碑	長7.6	幅9.5	厚0.7					緑泥片岩
	34	板碑	長13.0	幅10.5	厚1.8					緑色片岩、重量0.52kg
	35	板碑	長7.7	幅5.9	厚0.7					緑泥片岩
	36	板碑	長6.9	幅5.2	厚0.8					緑泥片岩
	37	分銅形石製品	長17.1	幅9.1	厚 1.7					銀緑青色、緑泥片岩製、重量490g
	38	砥石	長10.1	幅3.0	～2.3			5GY7/1	100	緑色凝灰岩製
	39	砥石	長25.6	厚7.6						自然礫
	40	茶臼	19.0	12.9	18.6				50	硬砂岩製、上臼
	41	漆器椀	12.0	3.6	—				25	
	42	漆器椀	12.6	3.8	7.2				80	内面見こみ漆絵あり
	43	漆器椀	13.6	4.3	8.2				60	内面見こみ漆絵あり
	44	曲物	10.4	8.0	10.7				90	1号溝内第58号井戸出土
	45	建具	長6.9	幅1.9	厚0.9					
	46	建築材	長16.3	径4.8						
	47	箱物	長26.5	幅2.5	厚0.9					
SD35	1	かわらけ	9.9	2.2	5.0	GHKL	Ⅰ	10YR6/3	100	ロクロ成形、No.1
	2	かわらけ	9.6	4.5	5.4	ACEM	Ⅱ	10YR7/2	100	ロクロ成形
	3	かわらけ	9.6	2.0	5.9	AEML	Ⅲ	10YR7/2	90	ロクロ成形
	4	かわらけ	9.8	2.1	5.2	AEKLM	Ⅱ	2.5Y7/2	90	ロクロ成形
	5	かわらけ	4.4	1.9	4.7	ACELM	Ⅱ	7.5YR5/3	90	ロクロ成形
	6	かわらけ	10.0	1.3	7.3	G	Ⅰ	10YR7/3	25	手捏ね成形
	7	かわらけ	14.5	4.5	8.7	AG	Ⅱ	10YR8/2	40	ロクロ成形、埦形
	8	かわらけ	17.0	4.4	6.7	BHLM	Ⅱ	10YR6/3	90	ロクロ成形、埦形
	9	かわらけ	15.0	5.0	6.8	BHLM	Ⅱ	7.5YR7/2	40	ロクロ成形、埦形
	10	かわらけ	14.0	—	—	AGH	Ⅰ	7.5YR6/4	80	ロクロ成形、椀形、No.2
	11	かわらけ	14.0	4.2	5.4	GL	Ⅱ	10YR6/3	20	ロクロ成形、埦形
	12	緑釉陶器盤	(30.0)	(5.8)	—	—	Ⅰ	N6/	8	中国製、内外面緑釉
	13	瓦塔	—	—	—	ABDFL	Ⅰ	7.5YR6/4	—	P210～215参照
	14	板碑	長18.9	幅12.5	厚2.0					緑泥片岩、重量800g
	15	漆器皿	10.2	1.7	7.0				80	
	16	漆器椀	11.6	2.7	—				15	
	17	握り鎚	長17.1	径5.1	2.5					
	18	建築材	長8.7	幅2.6	厚2.5					
	19	建築材	長3.5	幅2.1	厚2.1					
	20	瓢箪製容器	7.8	5.1	2.8					
	21	板材	長24.8	幅1.7	厚0.8					
SD46	1	青磁碗	—	—	—	G	Ⅰ	2.5YR5/1	5	中国製、蓮弁文、釉色2.5GY 6／1
	2	青磁碗	—	—	—	G	Ⅰ	10Y7/1	5	中国製、蓮弁文、釉色明青緑色
	3	片口鉢	—	(3.9)	16.0	G	Ⅰ	N5/	15	須恵器質、山茶碗系
	4	石製品	径9.0	厚1.4					100	銀緑青色の緑泥片岩製、No.2
SD48	1	かわらけ	10.0	3.5	6.0	AEGL	Ⅱ	10YR6/4	80	ロクロ成形、No.2
	2	鋳型	幅9.5	高10.5	厚3.3	G	Ⅲ	7.5YR8/4	—	

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD64	1	須恵器坏	12.0	3.7	(5.8)	ＥＦ	Ⅰ	10Y4/1	50	南比企産
	2	かわらけ	11.0	3.5	5.6	ＡＣＧ	Ⅱ	10YR7/3	70	ロクロ成形
	3	火打石	長4.9	幅4.6	厚3.0				100	硬質半透明の石英塊、重量85.1g
	4	桶	長19.1	幅11.5	厚1.3					
	5	丸太材	長14.0	幅10.7	厚7.4					
	6	折敷	長(18.5)	幅(9.0)	厚0.5					
SD68	1	灰釉皿	14.0	2.8	7.7	ＣＧ	Ⅰ	5P5/1	25	瀬戸美濃系
	2	石製品	長10.0	幅10.2	厚1.5				100	青銀色の絹雲母片岩製、重量290g
	3	短刀の柄	長13.9	幅2.7	厚1.1					
SD71	1	須恵器坏	(12.2)	4.0	6.7	ＢＥＦ	Ⅱ	N5/0	40	南比企産
	2	須恵器埦	16.1	5.9	8.3	ＣＥＦ	Ⅰ	N7/0	60	南比企産、周辺ヘラ削り、№3
	3	青磁碗	－	(2.8)	－	Ｇ	Ⅰ	N6/	15	釉色ライトグリーン
	4	雁股鏃	長8.6	幅7.8	厚0.7					№1
SD72	1	瓶子		(4.8)	－	ＧＪ	Ⅰ	7.5Y5/1	10	古瀬戸、胴径(13.4)、灰釉
	2	鉄製品	長3.7	幅1.3	厚0.2					用途不明
SD75	1	古銭	外径2.5	内径1.96	厚0.14					開元通寶(671年)、重量2.0g
	2	古銭	外径2.3	内径2.05	厚0.14					元豊通寶(1078年)、重量1.1g
SD76	1	壺	－	(9.4)	－	ＢＨＪ	Ⅰ	7.5Y6/1	10	常滑焼、頸部径(18.2)、№2
SD77	1	須恵器高台埦	(14.0)	(5.2)	－	ＢＣ	Ⅱ	N7/0	20	南比企産、№1
	2	須恵器坏	(12.6)	3.6	(6.4)	ＢＦ	Ⅰ	7.5Y7/1	20	南比企産
	3	短刀	長4.4	幅2.0	厚0.4					
	4	浮子	径7.0	厚4.4					70	灰白色の角閃石安山岩浮石製、重量79.2g
	5	磨石	径(19.2)	幅13.9	厚5.0				30	灰白色の石英閃緑岩製、№1
SD78	1	須恵器長頸瓶	(9.4)	(2.2)	－	ＥＦ	Ⅱ	2.5Y5/1	25	南比企産
	2	須恵器甕	－	(6.2)	(11.2)	ＢＥＦＫ	Ⅰ	N5/0	35	南比企産、№25
	3	土鍋	23.0	(2.2)	－	ＢＦＧＨ	Ⅰ	7.5Y7/3	15	伊勢型、№22
	4	青磁碗	－	(2.3)	－	Ｇ	Ⅰ	N7/	－	釉色2.5Y５／２GY６／１
	5	青磁碗	－	(2.8)	－	Ｇ	Ⅰ	N7/	－	釉色５GY５／１
	6	青磁碗	(16.3)	(3.8)	－	Ｇ	Ⅰ	7.5Y7/1	10	釉色10Y５／２、№24
	7	青磁碗	－	(4.3)	－	Ｇ	Ⅰ	5Y7/1	－	釉色10Y６／１
	8	青磁碗	－	(1.6)	－	Ｇ	Ⅰ	N7/	－	釉色ライトグリーン
	9	青磁碗	－	(3.0)	(8.6)	Ｇ	Ⅰ	5Y7/1	10	釉色7.5Y４／２
	10	かわらけ	5.9	(0.8)	(4.2)	ＡＢＧＨ	Ⅰ	5YR6/4	20	手捏ね
	11	かわらけ	8.4	(1.1)	(5.5)	ＡＧ	Ⅲ	10YR7/4	20	手捏ね
	12	かわらけ	8.2	(1.2)	(5.9)	ＥＧＨ	Ⅰ	5YR6/4	20	手捏ね、№16
	13	かわらけ	9.0	1.5	4.0	ＡＧＨ	Ⅰ	7.5YR7/4	40	手捏ね、№16
	14	かわらけ	9.2	(1.8)	(6.2)	ＡＢＨＬ	Ⅰ	10YR7/4	45	手捏ね、№16
	15	かわらけ	9.0	(1.8)	(5.0)	ＢＧＨ	Ⅰ	10YR7/3	25	手捏ね
	16	かわらけ	9.2	1.8	6.0	Ａ	Ⅱ	7.5YR7/4	60	手捏ね、№５・11
	17	かわらけ	8.0	(1.2)	(5.0)	ＢＥＨ	Ⅰ	7.5YR6/4	15	手捏ね、№16
	18	かわらけ	10.2	1.7	5.6	ＡＥ	Ⅱ	7.5YR7/3	60	手捏ね
	19	かわらけ	9.4	(1.9)	(5.2)	ＡＧ	Ⅲ	7.5YR7/4	25	手捏ね、№16
	20	かわらけ	9.6	1.4	6.3	ＥＨＬ	Ⅰ	5YR6/6	40	手捏ね、№16
	21	かわらけ	8.8	1.7	5.1	Ａ	Ⅲ	7.5YR7/6	20	手捏ね
	22	かわらけ	8.8	(1.5)	(6.4)	ＥＧＨＫ	Ⅰ	7.5YR6/4	40	手捏ね、№16
	23	かわらけ	9.8	1.5	7.1	ＡＢＧＨＬ	Ⅰ	10YR7/4	30	手捏ね、№16
	24	かわらけ	8.9	2.1	6.5	ＡＢＧＨ	Ⅱ	2.5YR5/6	15	手捏ね、№16
	25	かわらけ	15.0	(2.6)	(11.1)	ＡＦＧＨＬ	Ⅱ	10YR6/4	10	手捏ね
	26	かわらけ	15.8	(2.2)	(10.6)	ＡＢＥＧＨＬ	Ⅱ	7.5YR6/4	20	手捏ね、№16
	27	かわらけ	9.0	1.4	6.5	ＥＧＨＬ	Ⅰ	7.5YR7/4	40	手捏ね、№18
	28	かわらけ	15.0	2.9	9.7	ＡＥＧＨＫ	Ⅱ	2.5Y6/3	40	手捏ね、№16
	29	かわらけ	15.1	(2.8)	(10.5)	ＦＧＨ	Ⅱ	7.5YR7/4	20	手捏ね、№７
	30	かわらけ	15.1	(2.7)	8.0	ＡＥＧＨ	Ⅱ	10YR7/3	10	手捏ね、№２
	31	かわらけ	14.0	(2.6)	(9.9)	－	Ⅱ	10YR7/4	25	手捏ね、№20
	32	かわらけ	14.6	(2.8)	(8.5)	ＡＢＧＨＬ	Ⅰ	10YR7/4	20	手捏ね、№16
	33	かわらけ	14.0	(2.8)	(8.3)	ＥＧＨＫＬ	Ⅱ	10YR6/4	20	手捏ね、№16
	34	かわらけ	14.7	(3.0)	(10.0)	ＡＤＥＧＨＬ	Ⅰ	10YR7/3	25	手捏ね、№16
	35	かわらけ	10.0	(1.7)	(6.0)	ＡＧＨＬ	Ⅱ	10YR6/4	60	ロクロ成形№16
	36	かわらけ	9.0	2.3	4.2	ＡＧＨＬ	Ⅱ	10YR6/4	60	ロクロ成形、№16
	37	かわらけ	11.1	2.8	5.4	ＢＧＨ	Ⅱ	10YR7/2	40	ロクロ成形、№16
	38	かわらけ	9.4	2.9	4.3	ＡＧＨ	Ⅱ	10YR6/4	60	ロクロ成形、№16

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD78	39	かわらけ	－	(1.4)	5.6	ＧＨ	Ⅱ	10YR7/4	80	ロクロ成形
	40	かわらけ	(14.0)	0.8	9.0	ＢＧＨ	Ⅰ	10YR6/4	50	手捏ね
	41	瓶子	－	(3.5)	－	Ｇ	Ⅰ	2.5Y6/1	－	鉄釉貼花文、釉色2.5YR２／２
	42	土製箸置	長8.0	幅5.9	厚1.9	ＡＦＧＨ	Ⅱ	10YR7/3	60	№６
	43	鎧小札	長6.5	幅3.0	厚0.2					№23
	44	釘	長5.3	幅0.7	厚0.5					
SD79	1	かわらけ	9.8	1.6	9.0	ＧＨＬ	Ⅱ	10YR7/3	50	手捏ね、№１
	2	青磁碗	－	(2.3)	－	Ｇ	Ⅰ	7.5Y7/1	－	釉色５Ｙ５／２
SD81	1	青磁碗	－	(2.0)	－	Ｂ	Ⅰ	N6/	20	釉色鶯色
SD82	1	かわらけ	9.6	2.1	6.0	ＥＧ	Ⅰ	2.5Y6/2	50	ロクロ成形
SD83	1	かわらけ	8.2	1.7	4.9	ＡＢＧＫ	Ⅱ	10YR7/3	60	手捏ね
SD86	1	かわらけ	8.3	(1.3)	(6.0)	ＡＧＨ	Ⅱ	5YR7/8	10	手捏ね
	2	かわらけ	－	(1.3)	8.4	ＡＧ	Ⅱ	7.5YR7/4	80	ロクロ成形
	3	青磁碗	－	(2.6)	(5.7)	Ｇ	Ⅰ	N5/	25	中国製
	4	鋳型	幅12.7	高8.1	厚3.1	Ｇ	Ⅲ	10YR6/1	－	
SD３	1	かわらけ	－	1.9	5.8	ABEFGM	Ⅰ	10YR6/4	70	ロクロ成形
SD８	1	漆器椀	－	(2.1)	(7.2)				90	
SD13	1	かわらけ	12.0	2.8	7.0	ＡＥ	Ⅲ	7.5YR6/4	20	ロクロ成形
	2	焙烙	(30.0)	5.5	(28.0)	ＡＢＥＧ	Ⅰ	2.5Y3/2	10	瓦質
SD14	1	須恵器坏	(11.2)	3.7	6.2	ＥＦ	Ⅰ	7.5Y6/1	35	南比企産
	2	かわらけ	11.6	3.8	6.0	ＢＥＧ	Ⅰ	10YR7/3	80	ロクロ成形
	3	かわらけ	12.5	4.1	5.6	ＡＢＥＧ	Ⅱ	10YR6/3	80	ロクロ成形
	4	かわらけ	11.3	3.8	5.8	ＢＥＦＧ	Ⅱ	2.5Y6/3	95	ロクロ成形、南比企丘陵産
	5	かわらけ	12.6	4.2	5.4	ＡＥＦＧ	Ⅰ	10YR7/3	80	ロクロ成形、南比企丘陵産
	6	かわらけ	－	1.2	8.7	ＡＢＥＧＨ	Ⅰ	10YR7/3	90	ロクロ成形
	7	板碑	長15.8	幅13.7	厚1.3					緑泥片岩
	8	板碑	長13.5	幅11.0	厚2.2					緑泥片岩
	9	板碑	長17.2	幅7.5	厚1.2					絹雲母片岩、重量630g
	10	砥石	長11.0	幅3.8	厚2.5				90	緑灰の色凝灰岩製
SD15	1	かわらけ	(11.0)	3.4	5.4	ＡＤＥＦＪＬ	Ⅰ	5YR6/8	20	ロクロ成形、南比企丘陵産
	2	土鍋	(30.2)	4.7	－	ＡＢＥＧＪ	Ⅰ	2.5Y7/2	10	瓦質
	3	焙烙	(32.0)	6.6	－	ＢＥＪＬＭ	Ⅰ	5YR5/4	15	土師質
SD17	1	折縁皿	(22.6)	5.4	－	ＧＪ	Ⅰ	5Y7/2	10	古瀬戸、内外面オリーブ色灰釉
	2	板碑	長11.3	幅11.0	厚1.6					絹雲母片岩、重量485g
	3	砥石	長5.8	幅2.9	厚2.4				100	凝灰岩製
SD28	1	かわらけ	10.6	3.7	6.1	ＡＤＥＨ	Ⅱ	7.5YR6/4	40	ロクロ成形
SD41	1	かわらけ	11.2	3.5	6.2	ＡＬ	Ⅱ	7.5YR7/4	80	ロクロ成形、№４・５
	2	かわらけ	11.2	3.1	5.2	ＡＬ	Ⅱ	7.5YR7/4	80	ロクロ成形、木目圧痕、№７
	3	板碑	長7.0	幅7.0	厚1.0					点紋緑泥片岩、重量90g
	4	板碑	長9.8	幅9.7	厚2.3					絹雲母片岩、重量230g
	5	板碑	長10.9	幅12.8	厚17.0					点紋緑泥片岩、重量515g
	6	板碑	長7.1	幅5.0	厚1.7					黒色片岩、重量100g
	7	板碑	長12.4	幅11.5	厚2.2					緑泥片岩
	8	板碑	長12.0	幅10.3	厚2.3					絹雲母片岩、重量470g
	9	板碑	長24.5	幅14.1	厚2.0					絹雲母片岩、重量1.16kg
SD52	1	須恵器坏	(11.0)	3.2	(6.0)	ＢＥＦ	Ⅰ	N5/0	25	南比企産
	2	須恵器埦	(15.0)	(4.8)	－	ＣＥＦ	Ⅲ	5Y7/1	20	南比企産
	3	須恵器坏	－	(1.7)	6.0	ＢＥＦ	Ⅲ	5Y8/1	80	南比企産
	4	須恵器蓋	－	(1.9)	－	ＦＨ	Ⅰ	N5/0	20	南比企産、つまみ径2.4
	5	須恵器蓋	－	(3.9)	－	ＡＥＦ	Ⅲ	5Y8/1	25	南比企産、つまみ径2.1
	6	須恵器蓋	(12.0)	(2.3)	－	ＥＦＪ	Ⅰ	10Y5/1	15	南比企産
	7	縁釉小皿	11.2	(1.8)	－	Ｂ	Ⅰ	7.5Y8/2	10	古瀬戸、灰釉＋鉄銹
	8	かわらけ	11.0	2.4	6.0	ＡＢＦＧＬ	Ⅱ	10YR6/3	60	ロクロ成形、取瓶として使用
	9	青花碗	13.8	5.5	5.8	Ｇ	Ⅰ	7.5Y8/1	40	
	10	板碑	長19.2	幅11.4	厚1.0					緑泥片岩、重量348g
SD53	1	須恵器坏	12.0	4.0	6.0	ＥＦＨ	Ⅰ	N6/0	45	南比企産、周辺＋体部下端ヘラ削
	2	須恵器坏	(11.5)	3.8	5.4	ＥＦ	Ⅰ	10Y5/1	65	南比企産、№４
	3	須恵器蓋	－	(2.0)	－	ＡＦＨ	Ⅲ	5Y8/1	45	南比企産、つまみ径2.8、№１
	4	須恵器甕	－	11.0	－	ＢＥＦＪ	Ⅰ	N5/0	－	南比企産、平行叩き、青海波文
	5	かわらけ	10.7	3.0	(7.2)	ＡＧ	Ⅱ	10YR8/3	30	ロクロ成形
	6	かわらけ	8.6	1.9	5.0	ＡＧ	Ⅱ	7.5YR7/4	25	手捏ね

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD53	7	かわらけ	11.0	2.9	7.6	A	Ⅱ	10YR8/2	40	ロクロ成形
	8	灰釉花瓶	(9.4)	(13.0)	(7.8)	BH	Ⅰ	5Y7/1	90	古瀬戸、外面7.5Y５／３の灰釉
	9	染付碗	11.0	(3.8)	－	G	Ⅰ	7.5Y8/1	30	肥前系
	10	捏鉢	30.0	(6.3)	－	BGI	Ⅱ	5Y7/1	20	瓦質、内外面黒色処理
	11	山茶碗	－	(1.9)	7.0	ABGJL	Ⅰ	2.5Y8/2	20	東濃型
	12	火舎	－	(3.0)	－	DEG	Ⅰ	10YR7/2	20	瓦質、内外面黒色処理
	13	焙烙	34.4	6.1	32.3	ADHL	Ⅰ	7.5YR6/4	90	
	14	焙烙	36.0	5.2	32.0	AEGH	Ⅰ	7.5YR6/2	25	
	15	土鍋	30.0	(8.1)	－	AEG	Ⅰ	2.5Y7/1	20	内面黒色処理、外面煤付着
	16	土鍋	28.4	(10.4)	－	BCDHL	Ⅰ	5Y4/1	20	瓦質
	17	砥石	長11.0	幅4.3	厚4.5				100	泥岩製
	18	砥石	長11.5	幅5.1	厚1.8				100	板碑利用、青緑色の絹雲母片岩製
	19	砥石	長7.0	幅5.2	厚3.2				100	淡緑色の凝灰岩製
	20	垂飾	長4.6	幅(1.5)	厚(1.1)			10Y3/1	100	滑石製、№4
	21	馬歯	長6.8	幅2.9	厚1.4				100	
SD63	1	かわらけ	12.4	3.0	7.2	AEGJ	Ⅰ	10YR7/2	60	ロクロ成形
SD65	1	須恵器甕	－	6.1	－	BCG	Ⅰ	10Y4/1	－	
SD２	1	青磁碗	14.0	3.0	－	G	Ⅰ	10Y8/1	10	中国製、10GY７／１釉色、透明釉
	2	陶器碗	11.8	7.4	4.7	K	Ⅰ	5Y8/1	70	青唐津、外面青緑色釉
	3	内耳土鍋	29.6	(6.1)	－	CEL	Ⅱ	10Y5/1	8	
	4	擂鉢	20.5	(6.2)	－	C	Ⅰ	10YR4/1	20	備前焼
	5	軒平瓦	－	4.8	－	AEJ	Ⅰ	10Y6/1	－	外面唐草文風の浮彫文様
SD４	1	板碑	長1.6	幅16.9	厚2.0					緑泥片岩
	2	板碑	長14.8	幅14.7	厚2.3					緑泥片岩
	3	板碑	長12.3	幅8.8	厚2.9					緑泥片岩
SD９	1	かわらけ		2.8	5.6	AFG	Ⅰ	7.5YR6/4	80	ロクロ成形
	2	陶器碗	10.8	6.5	4.7	G	Ⅰ	5Y8/1	80	唐津焼、内外面鶯色灰釉、空色釉
	3	板碑	長13.9	幅7.1	厚9.0					緑泥片岩
SD10	1	須恵器坏	－	(1.8)	7.6	EF	Ⅲ	10YR7/4	70	南比企産、周辺へら削り
	2	須恵器皿	13.0	2.8	6.4	BEFJ	Ⅰ	N4/0	80	南比企産
	3	須恵器甕	(29.0)	(7.7)	－	BCF	Ⅲ	N4/0	15	南比企産
	4	須恵器鉢	(28.6)	(9.6)	－	BEFJ	Ⅱ	10Y5/1	25	南比企産、平行叩き
	5	灰釉埦	－	(3.1)	7.4	H	Ⅱ	2.5Y8/2	65	猿投産
	6	灰釉長頸瓶	－	(11.5)	7.5	EK	Ⅰ	5Y7/1	60	東濃産、内外面に漆付着
	7	灰釉壺	－	7.0	10.9	CBJ	Ⅰ	10YR6/1	80	
	8	かわらけ	10.9	3.6	5.8	ACEG	Ⅰ	10YR6/3	40	ロクロ成形、内面漆塗り、「Y」字状線刻
	9	大甕	－	7.0	－	C	Ⅰ	10YR6/1	－	常滑焼
	10	染付皿	12.2	3.2	6.6	－	Ⅰ	7.5Y8/1	90	肥前系
	11	帽子金具	高1.8	厚0.2					100	鉄製
	12	軽石	長6.8	幅5.1	厚3.5				－	角閃石安山岩製
SD18	1	かわらけ	－	2.7	5.6	AG	Ⅲ	7.5YR7/4	80	ロクロ成形
	2	かわらけ	11.0	3.4	5.4	EG	Ⅱ	7.5YR7/4	70	ロクロ成形
	3	陶器鉢	－	(7.0)	10.2	G	Ⅰ	10R4/4	30	唐津焼
	4	宝篋印塔	長16.8	幅16.8	厚16.5			N3/	100	安山岩製、塔身部
SD20	1	須恵器坏	(12.6)	4.2	(7.2)	EF	Ⅱ	10Y5/1	15	南比企産
	2	須恵器長頸瓶	－	(8.2)	－	BF	Ⅱ	7.5Y5/1	15	南比企産
	3	灰釉三足盤	(18.0)	(2.3)	－	G	Ⅰ	5Y7/1	15	オリーブ灰色灰釉
	4	青磁碗	(16.0)	(3.5)	－	G	Ⅰ	2.5Y6/1	10	釉色2.5Y５／２
	5	青磁碗	(15.0)	(3.9)	－	G	Ⅰ	5Y7/1	15	釉色５Y５／３
	6	大甕	－	10.8	－	－	Ⅰ	N6/1	－	常滑焼、№3
	7	茶臼	(38.2)	4.3	－				20	安山岩製、下臼受皿部
	8	板碑	長16.8	幅12.3	厚2.2					緑泥片岩
SD24	1	須恵器埦	(15.0)	(3.5)		BCF	Ⅱ	2.5Y6/1	10	南比企産
SD24	2	鉄製品	長3.5	幅1.5	厚0.5					用途不明
	3	鉄製品	長3.2	幅1.1	厚0.3					槍鉋か
	4	古銭	外径2.31	内径2.05	厚0.11					熙寧元寶(1068年)、重量2.3g
SD25	1	須恵器坏	12.0	3.1	6.2	FJ	Ⅲ	2.5Y8/1	55	南比企産、№3
	2	かわらけ	11.2	2.5	(6.2)	ABCEGH	Ⅱ	5YR6/6	20	ロクロ成形
	3	かわらけ	12.0	1.8	(6.4)	AGH	Ⅱ	5YR6/4	30	ロクロ成形、内面漆付着
	4	かわらけ	12.0	2.0	6.5	AGH	Ⅱ	7.5YR6/4	50	ロクロ成形
	5	陶器碗	12.0	7.9	5.3	G	Ⅰ	2.5Y8/3	40	京焼

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD25	6	染付碗	(10.5)	6.7	4.5	G	Ⅰ	2.5GY8/1	45	肥前系
	7	香炉	14.4	6.6	(9.5)	C	Ⅰ	2.5Y8/1	25	瀬戸美濃系、明茶褐色の鉄釉
	8	陶器皿	13.0	3.8	7.0	A G	Ⅰ	2.5Y8/2	90	瀬戸美濃系、№1
	9	焙烙	33.0	5.5	(29.2)	A D E G H	Ⅰ	10YR8/1	10	
	10	擂鉢	横7.0	縦(7.9)		B C	Ⅰ	2.5YR5/4	－	堺産か
	11	茶入	4.1	1.1	－	－	Ⅰ	2.5Y7/2	20	瀬戸美濃系、内外面7.5YR３／３鉄釉
	12	茶入	－	2.0	－	－	Ⅰ	7.5YR7/4	8	瀬戸美濃系、外釉10YR３／２
	13	鞴羽口	長9.9	幅5.5	厚4.8	A G H	Ⅲ	10YR6/4	10	
	14	鉄製品	長4.3	幅3.6	厚0.3					用途不明、鋳造品か
	15	板碑	長15.2	幅18.7	厚2.2					絹雲母片岩
	16	板碑	長23.5	幅9.0	厚2.0					点紋緑泥片岩
SD26	1	かわらけ	11.0	2.3	6.0	A E G H	Ⅱ	10YR7/3	70	ロクロ成形
SD30	1	須恵器坏	15.0	4.0	8.6	E F	Ⅱ	10YR8/1	75	南比企産、下端＋全面へら削り
	2	須恵器硯	－	(1.6)	－	E F	Ⅰ	2.5GY4/1	－	南比企産、風字硯
	3	壷	15.0	(8.0)	－	B E G	Ⅰ	2.5YR5/4	20	瓦質
	4	かわらけ	14.1	3.1	6.6	A E G	Ⅱ	7.5YR7/8	30	手捏ね
	5	灰釉皿	13.8	3.3	7.4	C	Ⅰ	5Y7/1	60	内面・外面口縁部7.5Y７／１灰釉
	6	かわらけ	－	(3.4)	5.8	A	Ⅰ	10YR6/3	50	ロクロ成形
	7	かわらけ	12.0	3.0	(7.8)	F G H L	Ⅰ	7.5YR6/3	40	ロクロ成形
	8	かわらけ	7.2	2.6	4.5	C E	Ⅰ	2.5Y5/2	100	ロクロ成形、灯明皿
	9	かわらけ	11.8	2.8	6.4	A D E	Ⅰ	7.5YR6/6	80	ロクロ成形、油煙付着
	10	かわらけ	11.4	2.6	6.7	A E G	Ⅰ	7.5YR6/4	90	ロクロ成形、油煙付着
	11	焙烙	(38.0)	6.0	(35.6)	E G	Ⅰ	7.5Y7/1	20	
	12	灰釉皿	10.0	2.6	6.0	－	Ⅰ	N6/	70	瀬戸美濃系、梅枝文摺絵
	13	板碑	長5.3	幅4.8	厚1.8					点紋緑泥片岩、重量75g
	14	板碑	長29.0	幅20.3	厚2.7					緑泥片岩、重量3.06kg
	15	板碑	長17.0	幅16.8	厚2.0					絹雲母片岩、重量1.09kg
	16	板碑	長17.1	幅10.7	厚3.1					緑泥片岩、重量790g
	17	板碑	長24.0	幅11.3	厚2.1					緑泥片岩、重量885g
	18	板碑	長30.9	幅19.0	厚3.9					点紋緑泥片岩
	19	楔	長8.4	幅1.5･4.2	厚2.0					
	20	工具の柄	長13.3	幅2.5	厚1.4					
	21	漆器椀	13.6	6.1	7.6				100	絵あり
	22	漆器椀	(16.0)	(5.2)	－				15	
	23	漆器椀	(12.2)	(3.7)	7.2				60	
	24	漆器椀		(1.9)	7.4				100	高台内絵あり
	25	桶	長29.8	幅4.7	厚1.0					
SD31	1	須恵器坏	(12.8)	(3.7)		E F H	Ⅲ	5YR6/4	15	南比企産
	2	須恵器坏	(13.3)	3.8	(6.4)	A E F J	Ⅲ	5YR7/6	30	南比企産
	3	須恵器坏		(2.5)	5.6	F H J	Ⅲ	2.5Y8/1	45	南比企産　№2
	4	緑釉碗	－	(1.7)	－	G	Ⅰ	7.5YR6/2	10	猿投産
	5	かわらけ	10.0	2.3	5.7	A D G H L	Ⅱ	10YR7/2	30	ロクロ成形
	6	かわらけ	11.8	2.6	8.0	E F G	Ⅰ	7.5YR6/4	70	ロクロ成形、南比企丘陵産
	7	かわらけ	12.2	2.0	7.1	A E G	Ⅰ	7.5YR5/3	60	ロクロ成形
	8	かわらけ	11.2	3.6	5.6	A G	Ⅰ	10YR6/4	40	ロクロ成形
	9	かわらけ	－	2.3	6.2	A E G	Ⅱ	7.5YR6/4	90	ロクロ成形
	10	かわらけ	10.7	3.0	5.5	A E G	Ⅱ	7.5YR6/6	80	ロクロ成形
	11	かわらけ	10.0	3.4	5.5	B G L	Ⅲ	7.5YR6/3	90	ロクロ成形
	12	かわらけ	12.0	3.0	6.2	F G	Ⅰ	7.5YR6/4	25	ロクロ成形・南比企丘陵産
	13	かわらけ	9.8	(2.9)	(6.0)	A E G	Ⅱ	7.5YR6/4	25	ロクロ成形
	14	白磁碗	12.0	(2.9)	－	－	Ⅰ	雪白色	7	中国製、釉色僅かに青味がかる白
	15	青磁碗	－	4.3	(4.4)	K	Ⅰ	雪白色	10	中国製、釉色５GY６／１
	16	茶入れ	－	(4.3)	(5.8)	B J	Ⅰ	5Y8/1	30	瀬戸美濃系、№50
	17	擂鉢	－	(6.9)	12.8	A E	Ⅱ	10YR4/1	30	在地系瓦質
	18	大甕	29.2	7.2	－	B G	Ⅰ	2.5Y6/1	10	常滑焼
	19	灰釉皿	14.0	2.6	(7.6)	C	Ⅰ	N3/	40	瀬戸美濃系
	20	灰釉皿	13.6	2.7	6.8	C	Ⅰ	5Y7/2	40	瀬戸美濃系
	21	皿	－	(1.4)	8.2	A	Ⅰ	7.5Y8/1	40	志野焼
	22	染付皿	12.9	3.3	(3.7)	E	Ⅰ	白色	40	伊万里焼、№44
	23	陶器碗	－	(5.2)	4.6	H	Ⅰ	5Y8/1	60	瀬戸美濃系
	24	陶器碗	10.8	(4.8)	－	B	Ⅰ	10YR7/1	50	唐津焼

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD31	25	刷毛目文碗	－	3.3	4.4	B	I	10YR6/2	40	唐津焼
	26	染付碗	－	(3.6)	4.5	E H	I	5Y8/	40	肥前系、No28
	27	染付碗	－	(4.8)	4.2	A B	I	N8/	40	肥前系
	28	染付碗	9.8	(7.1)	－	B	I	N8/	40	肥前系　No56
	29	染付碗	10.4	7.4	4.5	B	I	N8/	30	肥前系
	30	染付碗	－	(2.6)	4.5	B	I	白色	80	肥前系
	31	染付碗	10.7	5.8	4.0	B	I	白色	80	肥前系、No19・21
	32	香炉	14.0	4.2	(7.6)	－	I	5Y8/1	50	瀬戸美濃系、No39
	33	香炉	14.0	5.4	7.3	－	I	5Y8/1	50	瀬戸美濃系
	34	六器	5.5	2.4	2.7	－	－	－	100	銅製、重量21.6g
	35	焙烙	38.4	6.1	34.8	F G	I	7.5Y8/1	25	
	36	焙烙	33.4	5.0	30.2	E G	I	10Y7/1	20	
	37	焙烙	33.3	6.5	30.8	A G	I	7.5YR6/4	20	No３・４・５・６
	38	擂鉢	－	(8.0)	(10.7)	A C	I	2.5Y8/2	30	瀬戸鬼板
	39	軒平瓦	幅(11.7)	5.3	厚4.8		I	10Y5/1	10	No43
	40	鞴羽口	長3.2	径(6.1)	重量82.7g			7.5YR6/4	50	
	41	椀形滓	径11.8	厚2.6	重量522g					炉壁、色調５Ｐ３／１
	42	椀形滓	長11.1	幅9.1	厚4.0					重量364g
	43	椀形滓	径12.2	厚7.0	重量571g					炉壁色調2.5Y６／３
	44	板碑	長5.2	幅4.9	厚5.0					緑泥片岩、重量20g
	45	板碑	長8.3	幅7.3	厚1.9					絹雲母片岩、重量175g
	46	板碑	長8.3	幅8.9	厚1.9					点紋緑泥片岩、重量210g
	47	板碑	長12.5	幅12.0	厚2.2					点紋緑泥片岩、重量540g
	48	板碑	長13.8	幅5.0	厚2.2					絹雲母片岩、重量200g
	49	板碑	長15.7	幅8.0	厚2.1					点紋緑泥片岩、重量650g
	50	板碑	長14.7	幅24.5	厚2.1					点紋緑泥片岩、重量825・800g
	51	板碑	長15.5	幅7.7	厚1.7					絹雲母片岩、重量400g
	52	板碑	長10.1	幅8.7	厚1.7					緑泥片岩、重量310g
	53	板碑	長10.0	幅8.3	厚1.1					緑泥片岩、重量140g
	54	砥石	長9.8	幅2.7	厚3.6					緑灰色凝灰岩製、重量118.3g
	55	砥石	長7.3	幅4.9	厚2.7					緑灰色凝灰岩製、重量167.8g
	56	砥石	長14.5	幅2.5	厚1.5					暗緑色片麻岩製、重量106.4g
	57	砥石	長10.2	幅3.2	厚4.4					緑灰色凝灰岩製、重量164.1g
	58	砥石	長9.5	幅4.6	厚5.0					緑灰色凝灰岩製？
	59	砥石	長9.7	幅6.6	高9.1					灰褐色硬砂岩製
	60	砥石	長7.1	幅3.1	厚3.0					緑灰色凝灰岩製、重量99.2g
	61	唐臼	外径26.8	内径20.6	底径15.7				10	灰褐色硬質砂岩製
	62	石臼	直径29.2	高11.7	孔径2.9	含み2.5		N3/		含礫砂岩製、下臼、No53
	63	石臼	直径30.2	高7.5	孔径3.5			7.5GY4/1	40	砂岩製、上臼、No52
	64	石臼	直径30.6	高(10.4)	孔径4.6			2.5Y6/1	25	砂岩製、上臼
	65	石臼	直径18.2	高11.4	孔径3.0			7.5YR6/1	45	含礫砂岩製、上臼
	66	漆器椀	15.0	9.0	8.0				60	高脚、笹文
	67	漆器椀	12.0	7.5	7.2				40	高台たかい、松文
	68	漆器椀	13.5	4.8	7.8					漆絵一部残る
	69	漆器皿	12.9	2.0	5.4				20	無高台、非ロクロ
	70	漆器椀	11.8	4.4	－				80	絵なし
	71	漆器椀	14.4	6.0	9.0					絵あり40％
	72	木製鉢	17.9	2.7	9.0					非ロクロ
	73	供饗	長33.2	幅(27.7)	厚0.7					
	74	俎板	長24.1	幅10.0	厚0.8					供饗転用
	75	下駄	長21.8	幅9.0	厚3.3				95	連歯
	76	曲物(底板)	径(20.4)	厚0.9					30	桶の可能性もある
	77	刀子鞘未製品	長16.4	幅2.7	厚1.3				100	
	78	供饗脚部	長16.4	幅2.2	厚1.0					
	79	桶材	長20.0	幅5.0	厚1.0					(側板)
	80	曲物	長9.8	幅4.6	厚0.3					
	81	板材	長11.0	幅3.6	厚0.7					
	82	建築材(丸太)	径7.5	厚3.2						
	83	背負い梯子	長47.8	幅3.8	厚3.1				70	未製品
	84	背負い梯子	長43.5	幅3.5	厚3.3					
	85	丸太杭	長64.9	径3.9						

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD31	86	農工具の柄	長33.3	径3.3						
	87	建築材	長15.7	幅6.4	厚5.3					
	88	丸太杭未製品	長40.8	径5.5						
	89	自在鍵	長10.0	幅5.9	厚2.0					木部
	89	自在鍵	長15.4	幅9.8	厚0.4					金属部
SD33	1	須恵器坏	(13.4)	3.3	(7.9)	ＥＦ	Ⅰ	N6/0	15	南比企産
SD43	1	須恵器甑		(7.9)	(12.5)	ＥＦ	Ⅱ	N6/0	15	南比企産
	2	擂鉢	22.0	(5.8)	－	Ｇ	Ⅰ	10YR8/3	20	瀬戸鬼板、内外面５RP３／１
	3	陶器皿	12.0	2.6	6.4	Ｃ	Ⅰ	2.5Y8/2	80	志野焼、長石釉施釉
	4	焙烙	30.3	5.3	(28.4)	ＡＥＧ	Ⅰ	7.5YR7/4	20	
	5	板碑	長7.0	幅7.6	厚1.6					緑泥片岩、重量150g
	6	板碑	長10.5	幅7.3	厚1.1					絹雲母片岩、重量120g
SD43	7	砥石	長6.5	幅3.6	厚5.3				100	灰白色の凝灰岩製鉄斑有り、重量191.7g
	8	木炭	長24.8	幅8.2	厚4.1					重量559g
SD44	1	青磁碗	－	(2.7)	－	Ｂ	Ⅰ	N7/	10	中国製、釉色7.5Y５／２
	2	青磁碗	－	(2.9)	－	Ｋ	Ⅰ	N7/	10	中国製、釉色５GY６／１
	3	大甕	－	－	－	ＢＧ	Ⅰ	7.5YR5/2	－	常滑焼
	4	擂鉢	－	(7.8)	－	ＣＤＧ	Ⅰ	2.5YR5/6	30	江戸系
	5	かわらけ	－	(2.5)	5.6	ＦＧ	Ⅰ	7.5YR6/4	30	南比企丘陵産、ロクロ成形
	6	染付皿	10.4	2.9	5.5	Ｈ	Ⅰ	5Y8/1	70	波佐見焼
	7	染付碗	－	(3.0)	5.1	Ｅ	Ⅰ	N8/	100	肥前系
	8	陶器皿	10.0	1.8	4.3	ＥＫ	Ⅰ	N7/	10	瀬戸美濃系、鉄釉
	9	陶器鉢	－	(5.2)	7.0	Ｅ	Ⅰ	7.5Y8/1	30	織部焼風、内外面銅緑色施釉
	10	陶器碗	－	(4.0)	(5.3)	Ｇ	Ⅰ	5YR5/4	70	青唐津
	11	青花皿	－	(1.4)	9.0	－	Ⅰ	5Y8/1	20	
	12	板碑	長22.0	幅24.0	厚2.5					緑泥片岩
	13	板碑	長19.0	幅17.7	厚2.3					緑泥片岩、重量1.5kg
	14	茶臼	20.0	(9.7)	－					上臼、暗灰色の安山岩
	15	石臼	29.0	11.3	29.5					紫灰色の角閃石安山岩
	16	箱膳側板	長32.0	幅6.7	厚0.7					

4　井戸跡

（１）古代の井戸

第16号井戸跡（第80図）

本井戸はG－14・15グリッドに位置する。A１区の南端にある。平面形は円形を呈する。規模は0.85 m×0.85 m で、深さ1.26 m である。覆土には埋め戻しの痕跡があり、中間に木炭灰層を挟んでいた。

出土遺物は五領期の土師器高坏坏部片１点のみであった。薄手の作りで内湾しながら開き、細かいハケ調整後、外面にはヘラミガキと赤彩を施す。時期は古墳時代前期である。

第40号井戸跡（第84図）

本井戸はＨ－11グリッドに位置する。Ａ２区の中央やや南にある。新旧関係は第42・41号井戸より古い。平面形は円形を呈する。規模は1.75 m×1.3 m で、深さ0.73 m である。　覆土には自然崩壊の痕跡があった。

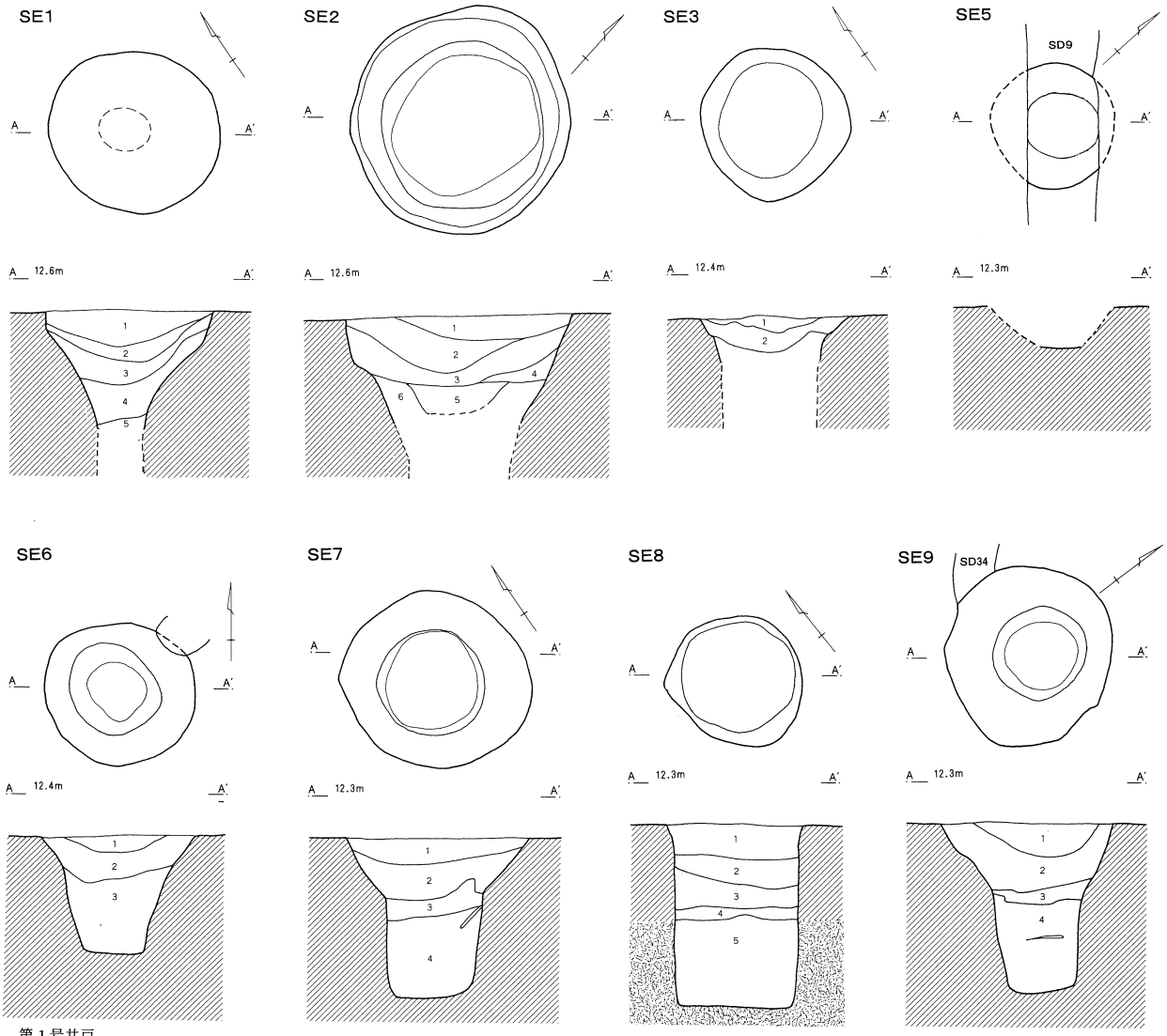
出土遺物に須恵器甕口縁部片がある。外面は黒色を呈し、２段の波状文が施されている。南比企窯跡群産である。内面は摩耗しており、砧として転用された可能性がある。遺構の時期は８世紀でも中葉以前である。

第41号井戸跡（第84図）

本井戸はＨ－11グリッドに位置する。Ａ２区の中央やや南にある。新旧関係は第40号井戸より新しく、第42号井戸より古い。平面形は円形を呈する。規模は1.5 m×0.95 m で、深さ0.82 m である。覆土には粘土ブロックが入り、埋め戻されている。

出土遺物には須恵器片３点と木器２点がある。１は埦で口唇部は内側に肥厚する。２は坏で低部糸切離し後、周辺と体部下端を回転ヘラケズリしている。３は甕の口縁部で、端部は上下へ拡張され尖る。いずれも南比企窯跡群

第79図　井戸跡(1)



第1号井戸

1　暗オリーブ褐色土　黄褐色ブロック多量。
2　黒　褐　色　土　焼土ブロック・炭化物少量。
3　黄　灰　色　粘　土　黄褐色粒子少量。
4　暗　灰　黄　色　粘　土　黄褐色粒子少量、粘性強。
5　オリーブ褐粘色土　黄褐色粒子多量、粘性強。

第2号井戸

1　暗　灰　黄　色　粘　土　シルト、焼土ブロック少量・炭化物微量、粘性強、しまり強。
2　暗　灰　黄　色　粘　土　シルト、ロームブロック若干、粘性強、しまり強。
3　灰　色　粘　土　シルト、焼土ブロック・炭化物少量、粘性強、しまり強。
4　灰　色　粘　土　シルト、焼土ブロック・炭化物若干、粘性強、しまり強。
5　黄灰色シルト質粘土　炭化物少量、粘性極強、しまり強。
6　混砂シルト質粘土　粘性極強、しまり強。

第3号井戸

1　暗灰黄色土　灰色ブロック・焼土粒子少量。
2　黒褐色土　オリーブ褐色ブロック・粒子多量。

第6号井戸

1　灰褐色粘土　褐色粒子、灰黄褐色土粒子、小ブロック少量混入、粘性強、しまり強。
2　灰褐色粘土　褐色粒子、炭化物粒子、焼土粒子微量、灰黄褐色土粒子・ブロック混入、粘性強、しまり強。
3　暗緑灰色土　炭化物粒子、植物質混入、粘性弱、しまりなし。

第7号井戸

1　オリーブ黄色粘性土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性強、しまりやや強。
3　灰　色　粘　土　有機物少量、粘性強、しまり欠。
4　暗　青　灰　色　粘　土　有機物少量、板碑包含、粘性強、しまり欠。

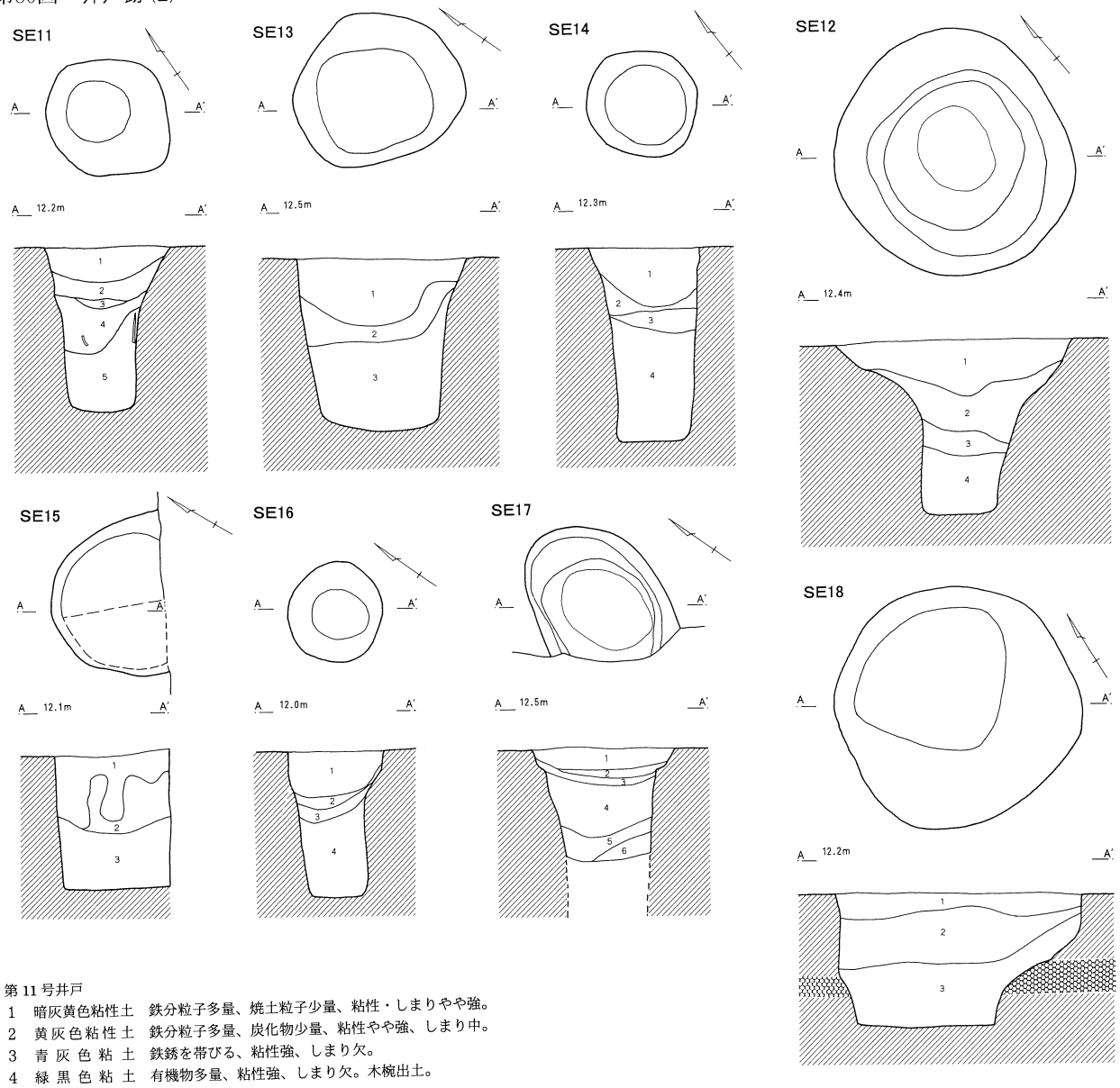
第8号井戸

1　灰オリーブ色粘性土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰　色　粘　性　土　鉄分粒子多量、粘性やや強、しまり強。
3　灰　色　粘　性　土　鉄分粒子多量、粘性やや強、しまり中。
4　灰オリーブ色粘土　鉄銹に汚染されている、粘性強、しまり欠。
5　暗　青　灰　色　粘　土　粘性強、しまり欠。(地山)

第9号井戸

1　灰オリーブ色粘性土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰　色　粘　性　土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性やや強、しまり中。
3　暗オリーブ灰色粘土　鉄銹に汚染されている、粘性強、しまり欠。
4　暗　青　灰　色　粘　土　有機物少量、粘性強、しまり欠。

第80図　井戸跡(2)



第 11 号井戸
1　暗灰黄色粘性土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
2　黄灰色粘性土　鉄分粒子多量、炭化物少量、粘性やや強、しまり中。
3　青灰色粘土　鉄銹を帯びる、粘性強、しまり欠。
4　緑黒色粘土　有機物多量、粘性強、しまり欠。木椀出土。
5　暗青灰色粘土　粘性強、しまり欠。

第 12 号井戸
1　暗灰黄色粘性土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
2　緑灰色粘土　鉄斑多量、粘性強、しまり中。
3　暗緑灰色粘土　鉄斑多量。
4　暗緑灰色粘土　有機物少量。

第 13 号井戸
1　灰オリーブ色粘性土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
2　灰色粘性土　鉄斑多量、粘性やや強、しまり弱。
3　暗緑灰色粘土　鉄斑多量、粘性強、しまり欠。

第 14 号井戸
1　オリーブ黄色粘性土　炭化物少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色粘土　炭化物少量、粘性強、しまり欠。低部に鉄分凝集あり。
3　灰色粘土　粘性強、しまり欠。
4　暗緑灰色粘土　下半部に有機物少量、粘性強、しまり欠。

第 15 号井戸
1　オリーブ黄色粘土　鉄斑多量、粘性強、しまり中。
2　暗青灰色粘土　オリーブ黄色粘土ブロック少量、粘性強、しまり弱。
3　暗青灰色粘土　粘性強、しまり弱。

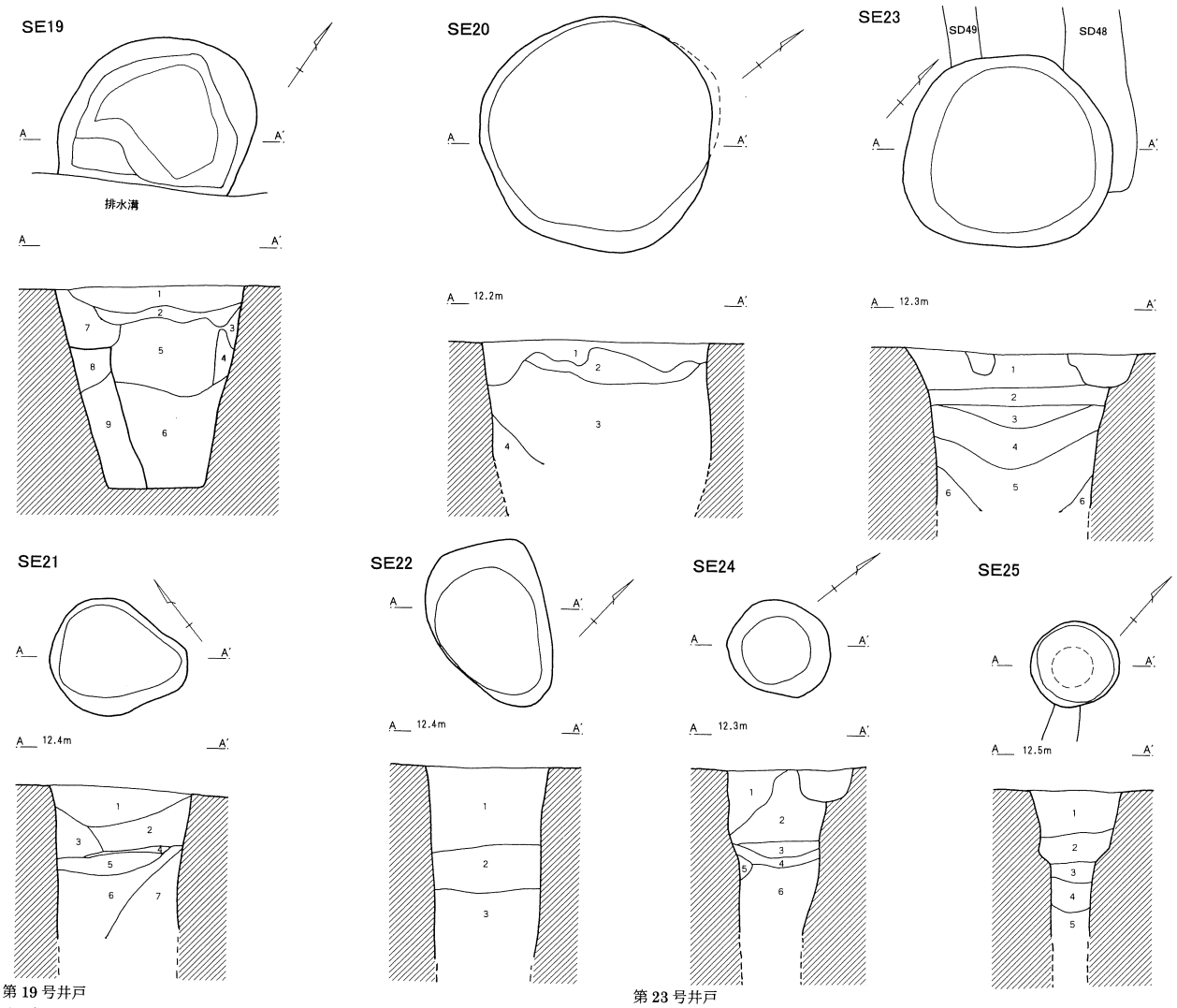
第 16 号井戸
1　暗灰黄色粘性土　黄褐色粘土ブロック多量、焼土小ブロック少量、粘性・しまりやや強。
2　木炭灰　粘性・しまり欠。
3　灰オリーブ粘土　鉄分粒子多量、粘性強、しまり弱。
4　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり欠。

第 17 号井戸
1　灰色粘性土　シルトを部分的に含み、焼土小ブロック少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。
3　オリーブ黒色粘性土　粘性やや強、しまり中。
4　暗オリーブ灰色粘土　鉄斑多量、粘性強、しまり欠。
5　暗青灰色粘土　粘性強、しまり弱。
6　暗青灰色粘土　シルトから砂粒を大量含む、粘性強、しまり弱。

第 18 号井戸
1　黄灰色粘土　鉄斑多量、粘性強、しまりやや強。
2　暗緑灰色シルト　粘性中、しまり弱。
3　暗緑灰色粘土　木の板などの有機物多量、粘性強、しまりやや強。

0　2m　1:60

第81図　井戸跡(3)



第19号井戸
1　褐色粘性土　やや砂質、褐色粒子、粘性やや強、しまりやや強。
2　オリーブ褐色粘性土　褐色粒子、粘性やや強、しまりやや強。
3　オリーブ褐色粘性土　褐色粒子、粘性やや強、しまりやや強。
4　暗緑灰色粘土　粘性強、しまりやや強。
5　暗緑灰色粘土　植物繊維を含む、粘性強、しまりやや強。
6　暗緑灰色粘性土　やや砂質、粘性やや強、しまりやや強。
7　オリーブ褐色土　砂質、褐色粒子、粘性なし、しまりやや強。
8　灰オリーブ色粘土　粘性強、しまりやや強。
9　暗緑灰色粘性土　炭化物粒子微量、粘性やや強、しまりやや強。

第20号井戸
1　灰オリーブ色粘性土　褐色粒子、粘性やや強、しまりやや強。
2　暗オリーブ灰色粘性土　褐色粒子少量、粘性やや強、しまり強。
3　暗緑灰色粘性土　粘性やや強、しまり強。
4　暗緑灰色砂礫　砂礫

第21号井戸
1　灰オリーブ色粘性土　浅黄色シルトブロック・焼土粒子・炭化物少量、粘性・しまりやや強。
2　灰色粘性土　炭化物粒子・焼土粒子少量、粘性やや強、しまり中。
3　灰オリーブ色粘性土　浅黄色小ブロック斑点状に多量、焼土ブロック少量、粘性やや強、しまり中。
4　明黄褐色粘土　鉄分の凝集層、粘性強、しまりやや弱。
5　暗緑灰色粘土　有機質の黒色粘土ブロック少量、粘性強、しまり欠。
6　暗オリーブ灰色粘土　葉や籾殻などの有機物多量、粘性強、しまり欠。
7　青黒色粘土　粘性強、しまり欠。

第22号井戸
1　黄灰色粘性土　オリーブ黄色シルトブロック（地山と共通）を斑点状に大量、埋め戻し土、粘性・しまりやや強。
2　暗緑灰色粘土　有機質の粘土を縞状に含む、粘性強、しまり欠。
3　黒色粘土　有機物多量、粘性強、しまり欠。

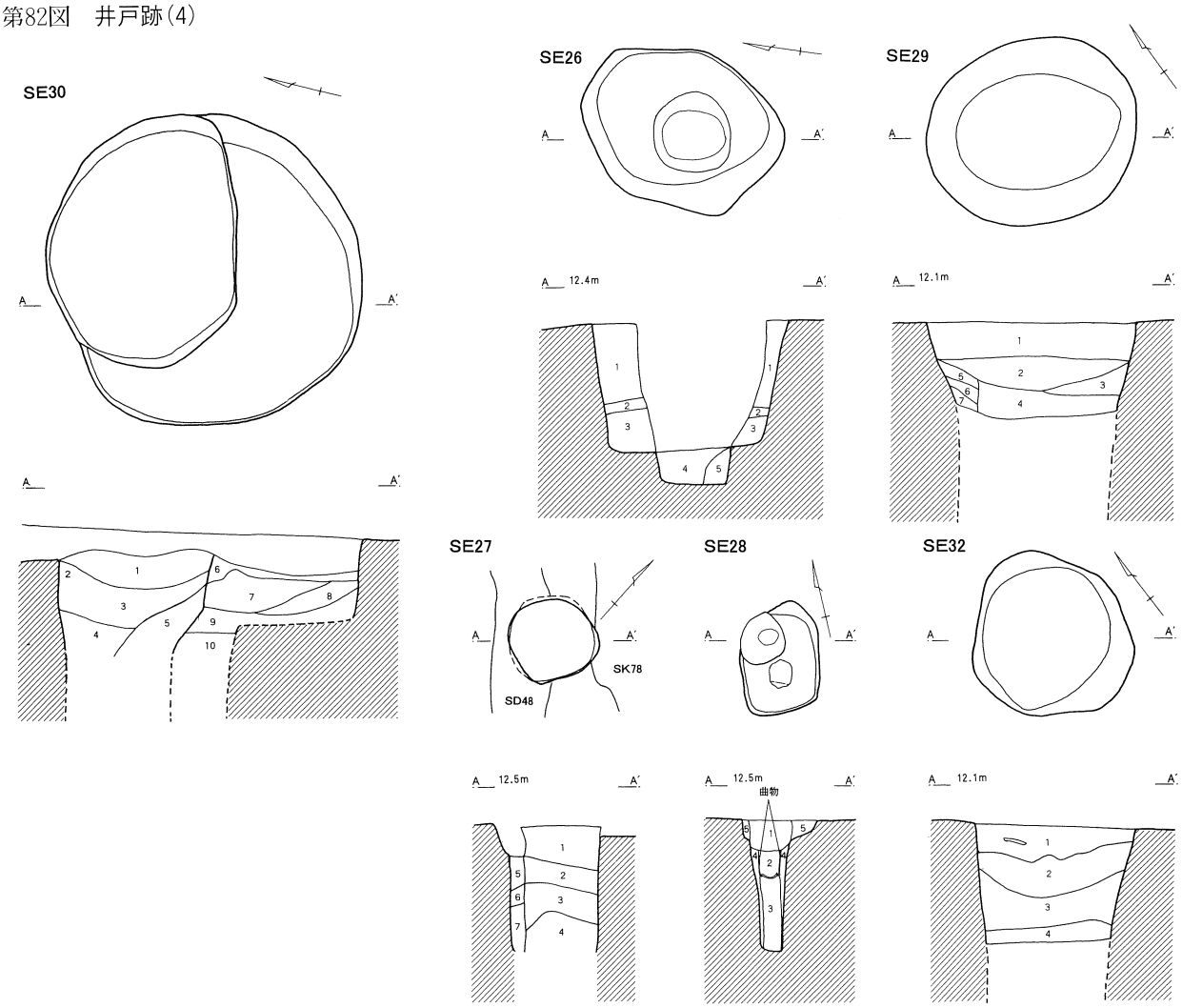
第23号井戸
1　灰色粘性土　焼土粒子・炭化物少量、浅黄色シルトブロック斑点状に多量、粘性・しまりやや強。
2　灰色粘性土　焼土粒子・炭化物少量、浅黄色シルトブロック斑点状に大量、粘性やや強、しまり中。
3　暗青灰色粘土　シルト質土、粘性強、しまり欠。
4　黒色粘土　有機物、粘性強、しまり欠。
5　灰オリーブ色粘土　粘性強、しまり欠。
6　緑黒色粘土　粘性強、しまり欠。

第24号井戸
1　オリーブ黄色粘性土　炭化物・焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　にぶい黄色粘土　炭化物・焼土粒子少量、粘性強、しまりやや強。
3　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり欠。
4　暗青灰色粘土　有機物を少量、粘性強、しまり欠。
5　暗緑灰色粘土　オリーブ灰色粘土ブロック斑点状に含む、葦などの有機物少量、粘性強、しまり欠。
6　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり欠。

第25号井戸
1　黄褐色粘性土　焼土粒子微量、粘性やや強、しまり強。
2　黄灰色粘性土　鉄分粒多量、粘性やや強、しまり弱。
3　黄灰色粘土　粘性強、しまり欠。
4　暗緑灰色粘土　木の実炭化物などの有機物少量、粘性強、しまり欠。
5　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり欠。

0　2m
1:60

第82図　井戸跡(4)



第26号井戸
1　オリーブ褐色粘土　焼土粒子微量、粘性・しまり強。
2　黄褐色粘土　鉄分の付着した粘土層、粘性強、しまり欠。
3　暗青灰色粘土　粘性強、しまり欠。
4　緑黒色粘土　有機物少量、粘性強、しまり欠。
5　暗青灰色粘土　粘性強、しまり欠。

第27号井戸
1　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強。
2　灰色粘性土　鉄分、暗オリーブ褐色土ブロック斑点状に含む、粘性やや強、しまり強。
3　オリーブ黒色粘土　粘性強、しまり欠。
4　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり欠。
5　灰色粘土　鉄斑、粘性強、しまりやや強。掘り方覆土
6　灰色粘土　粘性強、しまり弱。掘り方覆土
7　暗青灰色粘土　粘性強、しまり欠。掘り方覆土

第28号井戸
1　灰色粘土　粘性強、しまり弱。
2　灰色粘土　鉄分粒少量、粘性強、しまりやや強。
3　暗灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり欠。
4　灰色粘土　粘性強、しまりやや強。
5　褐灰色粘土
※この井戸は江戸期以降の上総掘りの井戸である。

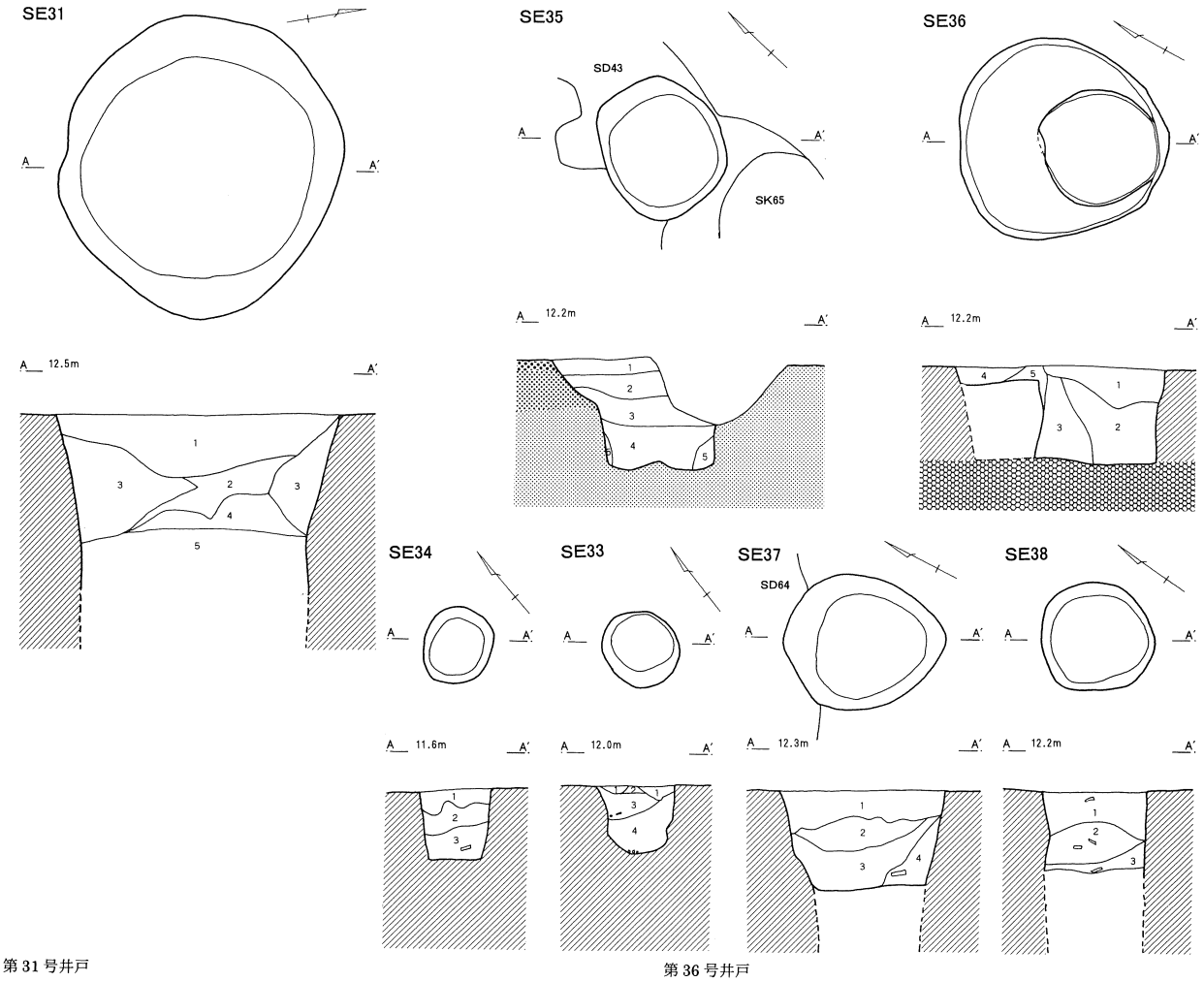
第29号井戸
1　灰色シルト　全体に鉄斑を含む、粘性中、しまり弱。
2　暗青灰色粘土　粘性強、しまり弱。砂を部分的に含む。
3　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり欠。
4　暗緑灰色粘土　有機物、粘性強、しまり欠。
5　オリーブ褐色砂　粘性・しまり欠。壁面の崩壊土
6　青灰色粘土　粘性強、しまり弱。壁面の崩壊土
7　暗オリーブ色粘土　砂粒、粘性強、しまり欠。壁面の崩壊土

第30号井戸
1　灰オリーブ色粘土　灰を縞状に含む、粘性強、しまり弱。
2　オリーブ黄色粘土　鉄分の凝結粒を大量、粘性強、しまりやや強。
3　暗オリーブ灰色粘土　灰オリーブ色粘土を縞状に含む、粘性強、しまり弱。
4　暗オリーブ灰色粘土　有機物、分解されない植物遺体を含む、粘性強、しまり欠。
5　暗オリーブ灰色粘土　砂粒多量、粘性強、しまり欠。
6　黄褐色粘土　鉄分の凝結粒含む、粘性強、しまり中。
7　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり弱。
8　暗オリーブ灰色粘土　灰を縞状に含む、粘性強、しまり弱。
9　暗オリーブ灰色粘土　粘性強、しまり弱。
10　暗オリーブ灰色粘土　粘性強、しまり弱。
1～5は井戸本体
6～8は掘り方埋め戻し土
9～10は地山層

第32号井戸
1　黄褐色粘性土　鉄斑大量、焼土ブロック少量、粘性・しまりやや強。
2　暗オリーブ灰色粘土　粘性強、しまり欠。
3　暗緑灰色粘土　粘性・しまり欠。
4　緑黒色砂　粘性・しまり欠。

0　2 m
1:60

第83図　井戸跡(5)



第31号井戸
1　灰オリーブ色粘性土　浅黄色シルトブロック多量、焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰　色　粘　土　鉄斑、粘性強、しまりやや強。
3　暗灰黄色粘土　鉄斑、粘性強、しまり弱。壁面の崩壊土。
4　緑灰色粘土　粘性強、しまり欠。
5　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり欠。

第33号井戸
1　灰色粘土　粘性強、しまり弱。
2　灰オリーブ色砂　粘性欠、しまり弱。
3　オリーブ褐色砂　灰色粘土を縞状に少量含む、粘性欠、しまり弱。
4　暗緑灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり欠。
※底面には小礫が敷いてある。

第34号井戸
1　暗緑灰色粘土　灰オリーブ粘土ブロック・鉄斑、粘性強、しまりやや強。
2　暗緑灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり中。
3　オリーブ黒色粘土　砂・有機物多量、瓦片等の遺物を含む、粘性強、しまり弱。

第35号井戸
1　灰　色　粘　土　下部は鉄分の凝集層、粘性強、しまりやや強。
2　暗オリーブ灰色粘土　鉄斑多量、粘性強、しまり中。
3　暗青灰色粘土　暗オリーブ灰色粘土ブロック多量、粘性強、しまり中。
4　暗オリーブ灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり欠。
5　暗オリーブ灰色混砂粘土　壁面崩壊砂多量、粘性強、しまり欠。

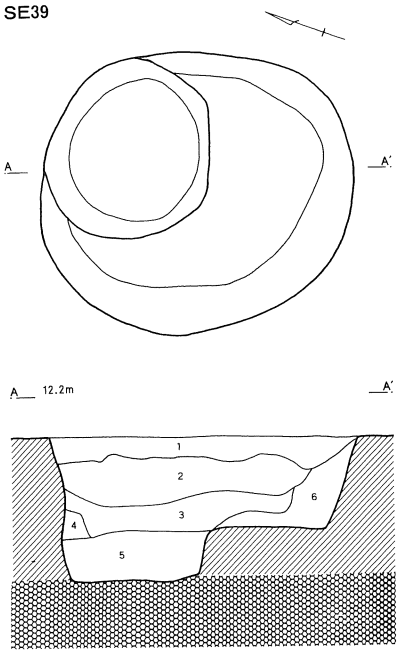
第36号井戸
1　灰オリーブ色粘土　部分的に青灰色粘土を含む、鉄斑多量、粘性強、しまりやや強。
2　暗緑灰色粘土　シュロ葉などの有機物少量、粘性強、しまり弱。
3　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり弱。
4　灰オリーブ色粘土　灰色粘土を縞状に含む、粘性強、しまり強。
5　灰　色　粘　土　鉄斑多量、粘性強、しまりやや強。

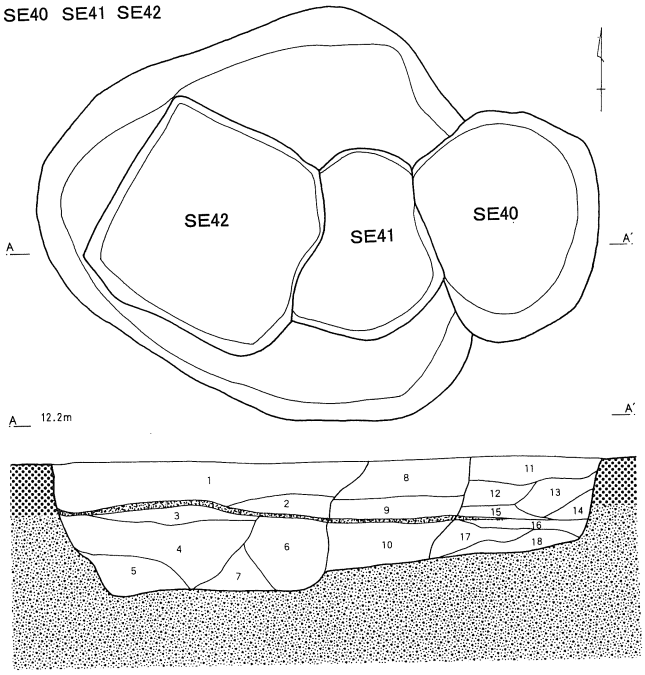
第37号井戸
1　灰色粘土　全体に鉄斑を含む、粘性強、しまり中。
2　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり弱。
3　暗緑灰色粘土　有機物微量、粘性強、しまり欠。
4　暗緑灰色粘土　壁面崩壊砂多量、粘性強、しまり欠。

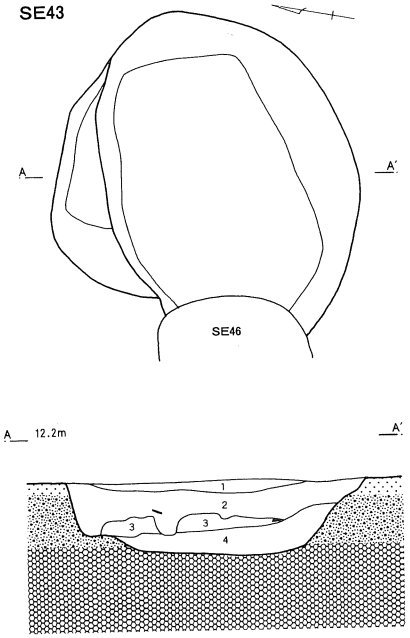
第38号井戸
1　灰色粘性土　鉄斑を全体に含む、粘性やや強、しまり弱。
2　灰　色　粘　土　青砂を部分的に含む、瓦を包含、有機物少量、粘性強、しまり欠。
3　オリーブ黒色粘土　瓦・木器を包含、有機物少量、粘性強、しまり弱。

0　2m
1:60

第84図　井戸跡(6)







第39号井戸

1　灰オリーブ色粘性土　鉄斑を全体に含む、粘性・しまりやや強。
2　暗緑灰色粘土　全体に青砂多量、粘性強、しまり弱。
3　暗オリーブ灰色粘土　オリーブ灰色砂多量、粘性強、しまり欠。
4　青灰色砂　壁面崩壊砂、粘性欠、しまり弱。
5　暗緑灰色粘土　砂粒子大量、粘性強、しまり欠。
6　灰色粘土　オリーブ灰色砂大量、粘性強、しまり弱。

※この井戸は、マイマイ井戸のように有段構造である。土層からみて上段は掘り方とは異なる。

第40・41・42号井戸

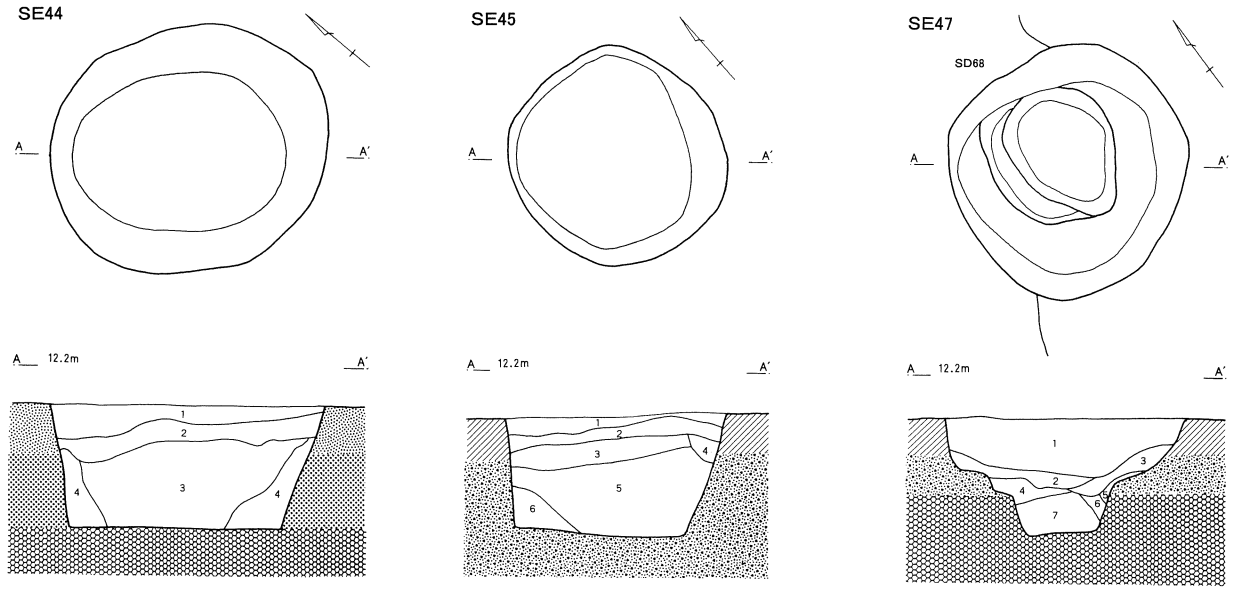
1　灰オリーブ色シルト　炭化物少量、淡い灰オリーブ粘土ブロック全体に大量、粘性弱、しまりやや強。
2　オリーブ黒色シルト　炭化物少量、淡い灰オリーブ粘土ブロック全体に大量、粘性弱、しまりやや強。
3　暗緑灰色粘土　炭化物少量、淡い灰オリーブ粘土ブロック全体に大量、粘性強、しまり欠。
4　暗緑灰色粘土　緑灰色粘土ブロック全体に少量、粘性強、しまり欠。
5　オリーブ灰色粘土　粘性強、しまり中。
6　暗緑灰色粘土　緑灰色粘土ブロック全体に多量、粘性強、しまり弱。
7　黒色ピート　粘性弱、しまり欠。
8　黄灰色粘性土　灰オリーブ色粘土ブロック少量、粘性やや強、しまり中。
9　灰色粘性土　灰オリーブ色粘土ブロック大量、粘性・しまりやや強。
10　暗緑灰色粘土　緑灰色粘土ブロック多量、粘性強、しまり中。
11　灰オリーブ色粘性土　茶色の小斑点を全体に含む、粘性・しまりやや強。
12　灰色粘性土　鉄斑多量、粘性・しまりやや強。
13　灰オリーブ色粘土　鉄斑多量、粘性極強、しまりやや強。壁面崩壊土
14　灰色粘土　鉄斑少量、粘性強、しまり欠。壁面崩壊土
15　灰オリーブ色粘土　黒色粘土粒子を縞状に少量、粘性強、しまり弱。
16　灰オリーブ色粘土　黒色粘土粒子を縞状に多量、粘性強、しまり弱。
17　オリーブ灰色粘土　粘性強、しまり弱。
18　暗オリーブ灰色粘土　黒色粘土粒子を縞状に少量、粘性強、しまり欠。

第43号井戸

1　黄灰色粘性土　焼土ブロック少量、粘性・しまりやや強。
2　灰色粘土　上部の厚さ4センチの凝集層、部分的に砂を含む、粘性強、しまり弱。
3　暗緑灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり欠。
4　暗オリーブ灰色粘土　炭灰を縞状に含む、粘性強、しまり欠。

0　2m　1:60

第85図　井戸跡(7)



第44号井戸

1　灰色シルト　鉄斑を全体に含む、炭を部分的に含む、粘性中、しまり弱。
2　灰色粘土　上部の厚さ4センチは鉄分凝集層、粘性強、しまり弱。
3　暗緑灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり欠。
4　灰オリーブ色砂　壁面崩壊砂、部分的に有機物に汚染され青灰色に変色、粘性・しまり欠。

第45号井戸

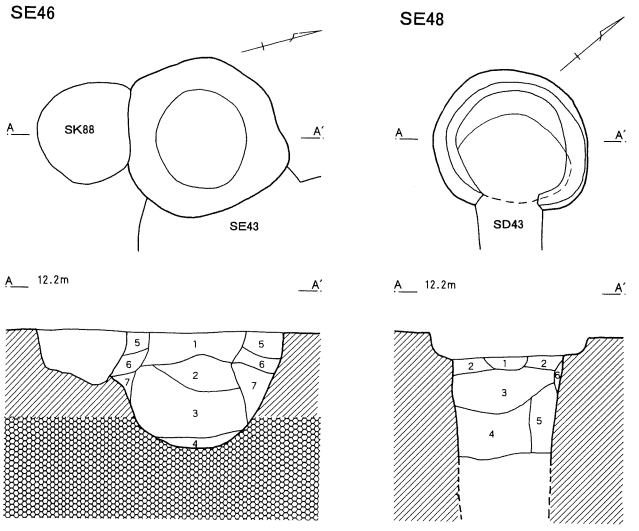
1　暗灰黄色粘性土　茶色の斑点（マンガン粒か）全体に含む。
2　灰色粘土　上部は厚さ4センチの鉄分凝集層、粘性強、しまりやや強。
3　暗青灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり弱。
4　暗青灰色粘土　鉄斑（地下茎が鉄分に置換したもの根断面）多量、粘性強、しまり弱。
5　暗青灰色粘土　有機物やや多量、粘性強、しまり欠。
6　暗青灰色砂　壁面崩壊砂、粘性・しまり欠。

第46号井戸

1　灰オリーブ色粘性土　灰色粘土を縞状に含む、粘性・しまりやや強。
2　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり弱。
3　暗緑灰色粘土　部分的に砂粒、有機物、粘性強、しまり欠。
4　暗青灰色粘土　粘性強、しまり欠。
5　灰オリーブ色粘性土　全体に茶色の斑点（マンガン粒か）含む、粘性やや強、しまり強。
6　灰オリーブ色粘土　シルト質の粘土で鉄斑（銭形を呈す、地下茎が鉄分に置換したもの）含む、粘性強、しまりやや強。
7　暗青灰色粘土　有機物を含まず純色を呈す。粘性強、しまり弱。
※1～4井戸跡が腐朽し崩壊した部分、水の侵食で巾着状を呈す。
5～7掘り方埋め戻し土

第47号井戸

1　灰色粘性土　全体に茶褐色の斑点（マンガン粒か）粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘土　鉄斑少量、粘性強、しまり弱。
3　灰色粘土　粘性強、しまり弱。
4　暗青灰色粘土　砂粒、粘性強、しまり欠。
5　暗青灰色粘土　粘性強、しまり欠。
6　暗オリーブ灰色粘土　鉄斑・有機物少量、粘性強、しまり中。
7　暗緑灰色粘土　鉄斑少量、粘性強、しまり欠。

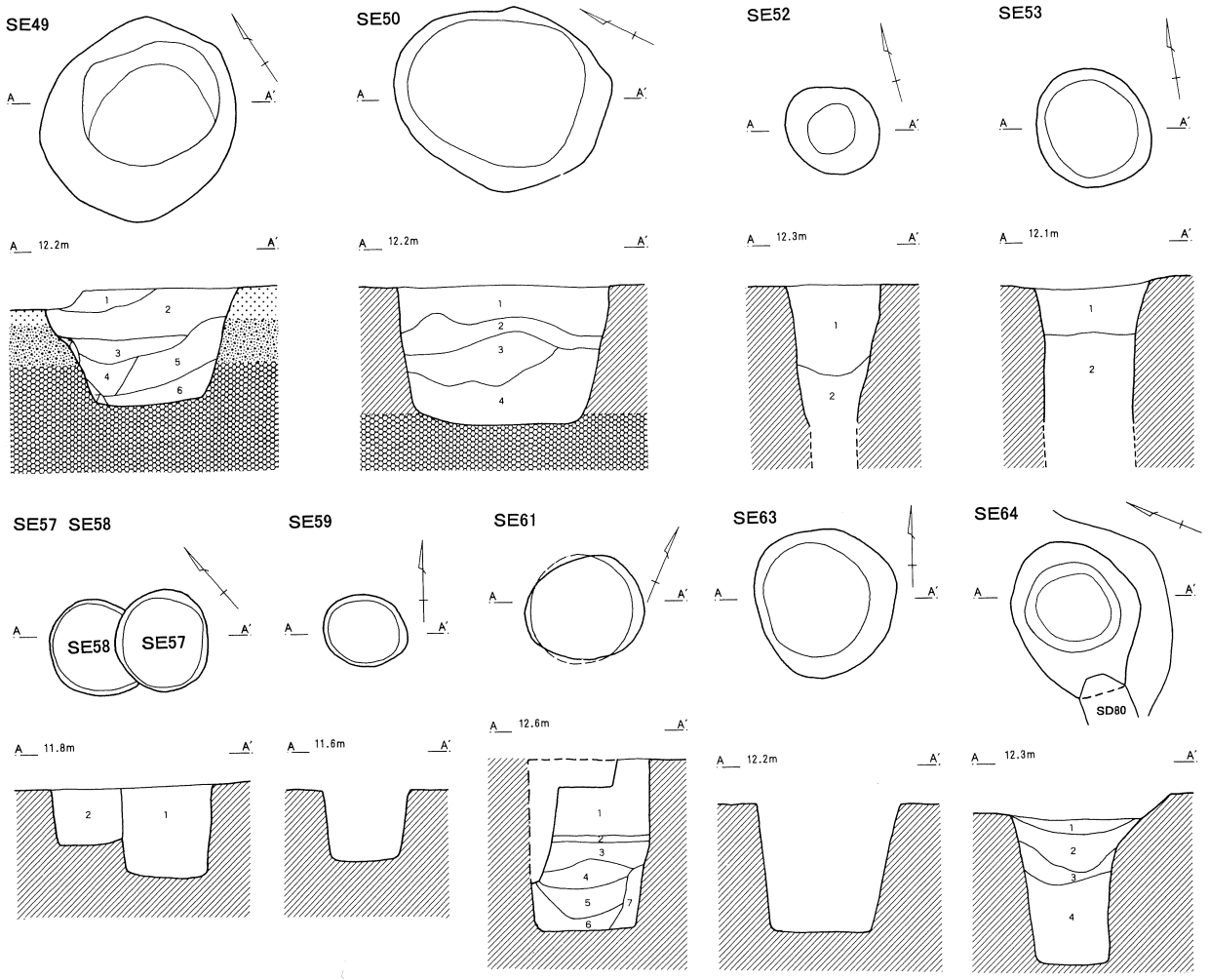


第48号井戸

1　灰色粘土　上部厚さ2センチの鉄分凝集層、粘性強、しまり弱。43号溝覆土
2　灰色粘土　上部厚さ2センチの鉄分凝集層、粘性強、しまりやや強。
3　暗緑灰色粘土　部分的に鉄斑を含む、粘性強、しまり弱。
4　暗緑灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり欠。(井筒内覆土)
5　暗青灰色粘土　砂を縞状に含む、有機物は含まず汚れていない。(掘り方埋め戻し土)
6　灰オリーブ色粘性土　粘性やや強、しまり中。

0　2m　1:60

第86図　井戸跡(8)



第49号井戸
1　灰色粘性土　オリーブ灰色シルトブロック少量、鉄斑、粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色　暗青灰色粘土ブロックを部分的に含む、粘性やや強、しまり中。
3　青黒色粘土　粘性強、しまり弱。
4　青黒色粘土　有機物少量、粘性強、しまり欠。
5　灰オリーブ色粘土　シルト質の粘土、4層に接する部分は汚染されて青味を帯びている。粘性強、しまり中。
6　オリーブ黒色粘土　粘性強、しまり弱。
7　灰オリーブ色砂　壁面崩壊砂、粘性欠、しまり弱。

第50号井戸
1　黒色粘性土　灰色シルトブロック少量、炭化物・焼土粒子微量、粘性やや強、しまり強。
2　黄褐色粘性土　1層と同質の粘性土に鉄分が凝集した層、粘性・しまりやや強。
3　暗青灰色粘土　部分的に砂粒を含む、有機物少量、粘性強、しまり中。
4　暗緑灰色粘土　粘性強、しまり欠。

第52号井戸
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、褐色粒子多量、褐灰色土粒子ブロック多量、粘性やや強、しまり強。
2　褐灰色粘性土　褐色粒子多量、明るい灰黄褐色土粒子少量、粘性やや強、しまり強。

第53号井戸
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、褐色粒子多量、明るい灰黄褐色土、褐灰色土粒子、小ブロックを混入、粘性やや強、しまり強。
2　暗緑灰色粘土　炭化物粒子少量、褐色粒子、粘性強、しまり欠。

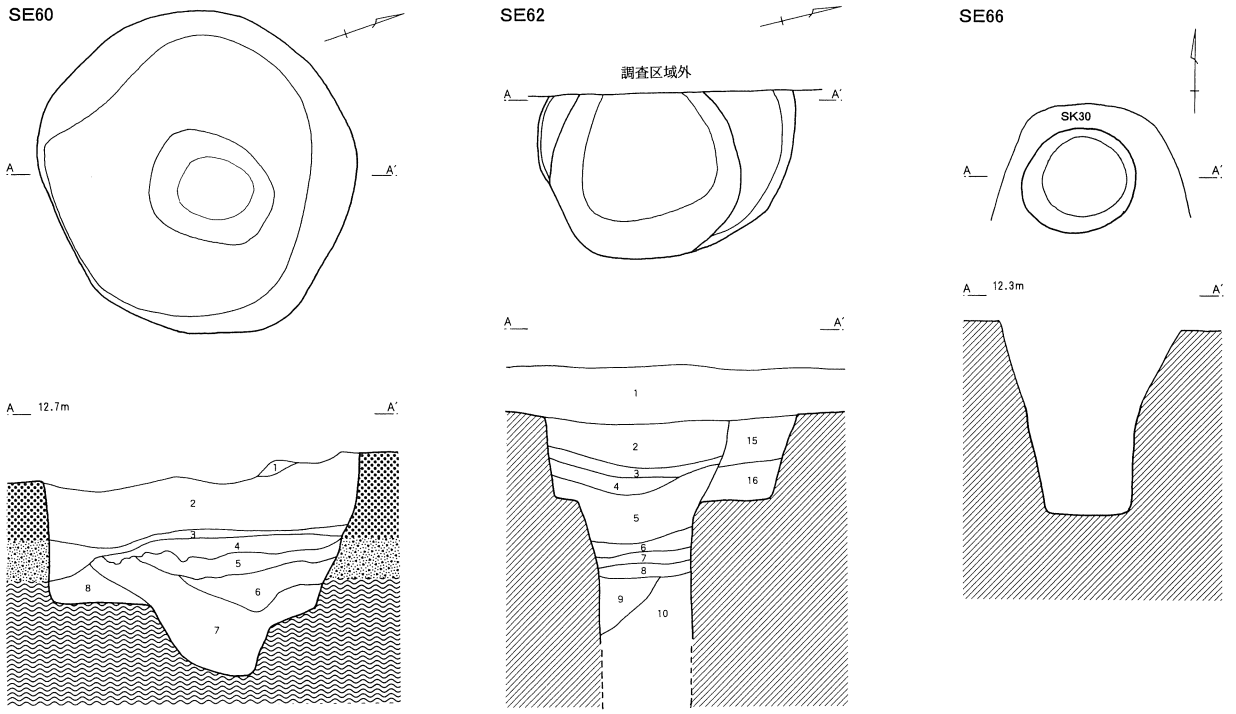
第57・58号井戸
1　青黒色粘土　粘性強、しまり欠。
2　暗緑灰色粘土　有機物・昆虫遺体を多量に含む、粘性強、しまり欠。
上面から曲げ物出土

第61号井戸
1　灰オリーブ色シルト　焼土粒子・炭化物粒子少量、粘性弱、しまり強。
2　灰色粘土　粘性強、しまり弱。ただし鉄分の凝集層となっており、この部分は硬くしまる。
3　灰オリーブ色粘土　分解しない有機物少量、粘性強、しまり弱。
4　暗オリーブ灰色粘土　分解しない有機物・炭少量、粘性強、しまり弱。
5　暗オリーブ灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり欠。
6　黒色粘土　炭化物やや多量、粘性強、しまり欠。
7　暗緑灰色粘土　やや砂質、粘性強、しまり欠。

第64号井戸
1　にぶい黄褐色粘性土　焼土粒子微量、褐色粒子多量、灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまりやや強。
2　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、明るい灰黄褐色土粒子・ブロック多量混入、粘性やや強、しまりやや強。
3　褐灰色粘性土　炭化物粒子少量、褐色粒子、灰黄褐色土粒子少量混入、粘性やや強、しまりやや強。
4　暗緑灰色土　炭化物粒子少量。

0　2m
1:60

第87図　井戸跡(9)



第62号井戸

1　灰オリーブ色シルト　表土、粘性弱、しまり中。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土・炭化物粒子少量、礫微量、粘性・しまりやや強。
3　灰オリーブ色粘性土　焼土・炭化物粒子少量、オリーブ黄色土ブロック斑点状に多量、粘性やや強、しまり強。
4　オリーブ黒色粘土　炭化物粒子多量、粘性強、しまりやや強。
5　オリーブ黒色粘性土　炭化物粒子少量、鉄斑多量、粘性・しまりやや強。
6　灰色粘土　鉄斑少量、粘性強、しまりやや強。
7　灰色粘土　鉄分凝集層となっており、その部分は硬くしまる。
8　暗緑灰色粘土　砂粒多量、粘性強、しまり弱。
9　暗緑灰色粘土　有機物少量、粘性強、しまり弱。この層より杵が出土。
10　暗青灰色粘土　有機物やや多量、粘性強、しまり欠。

第62号井戸掘り方

15　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子・灰色粘土ブロック少量、粘性やや強、しまり強。
16　灰オリーブ色粘土　鉄斑・焼土粒子少量、粘性強、しまりやや強。

第60号井戸

1　暗灰黄色粘性土　焼土粒子微量、粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘土　焼土粒子少量、粘性やや強、しまり中。
3　灰色粘土　厚さ4センチ程の鉄分凝縮層を挟みこんでいる、炭化物少量、粘性強、しまり中。
4　灰色粘土　鉄斑・分解されない植物の根を含む、粘性強、しまり中。
5　暗オリーブ灰色粘土　分解されない植物の根、炭化物粒子、コバルトブルーの粒子少量、粘性強、しまり弱。
6　黒色粘土　分解されてない植物の根を含む、粘性強、しまり弱。
7　暗緑灰色粘土　部分的に砂粒を含む、粘性強、しまり弱。
8　暗緑灰色　粘粘性強、しまり弱。

0　2m　1:60

産である。4は長方形の板で、下端と左側は折損している。上面は平滑で墨が付着する。5は長方形の割板で、断面形は三角形である。遺構の時期は8世紀中葉である。

第42号井戸跡（第84図）

本井戸はH－11グリッドに位置する。A2区の中央やや南にある。新旧関係は第41・40号井戸より新しい。平面形は正方形を呈する。規模は1.85m×1.65mで、深さ1.0mである。主軸方向はN－65°－Eを示す。覆土には粘土ブロックが入り、埋め戻されている。また、井戸底は泥炭層に達している。標高11.5m付近に埋没後の地下水位を示す鉄分凝結層が認められた。

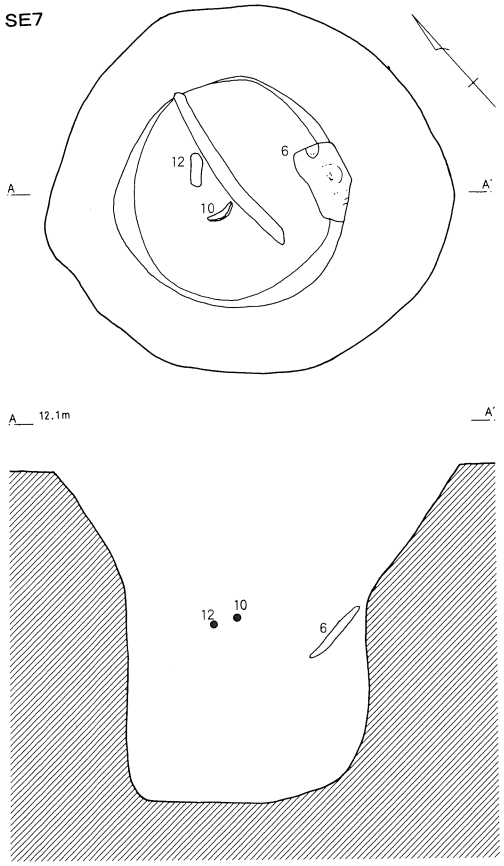
出土遺物には須恵器片2点と木器類2点がある。1は坏で、底部現存部には回転ヘラケズリが認められる。2は甕の体部片で、外面平行叩き、内面青海波文。両者とも南比企窯跡群産である。3は両端が折損する長方形の細板である。手斧調整痕がある。4は四つ割りした竹製品で、角を面取りしている。遺構の時期は8世紀後葉である。

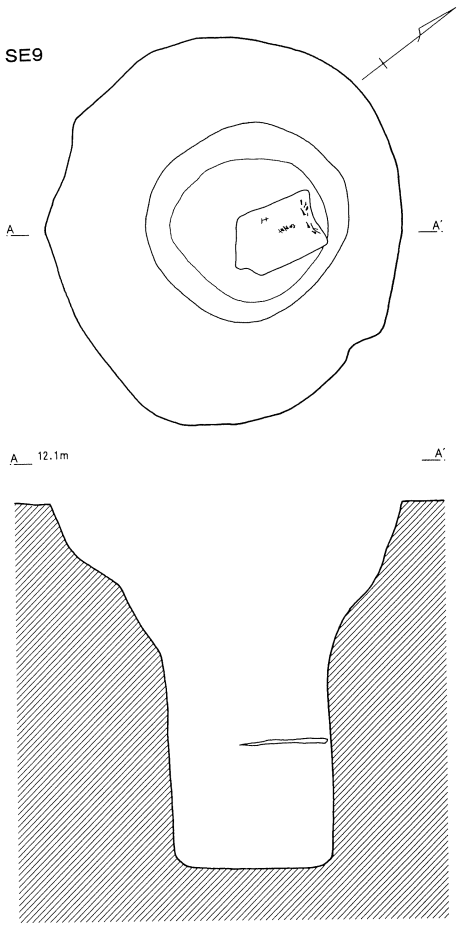
（2）中世前期の井戸

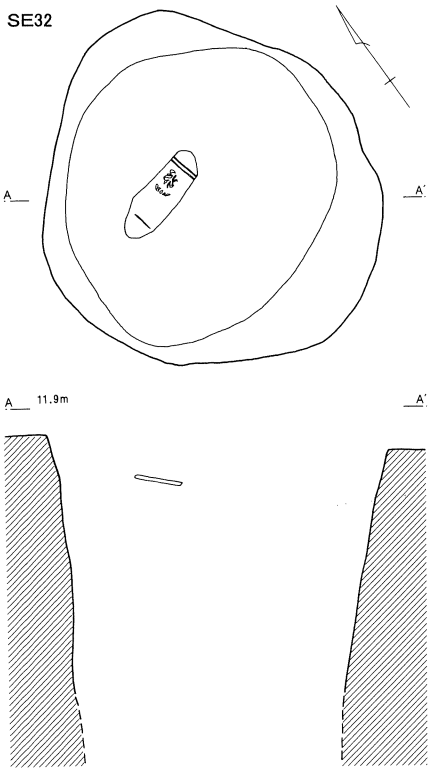
第1号井戸跡（第79図）

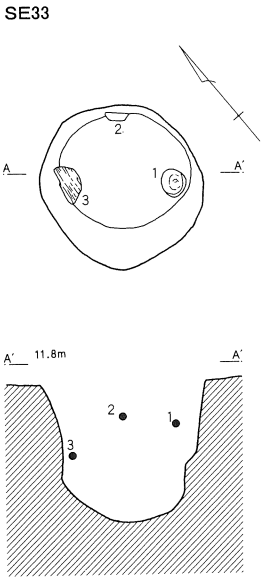
本井戸はF－13・14グリッドに位置する。A1区南端にある。新旧関係は第31号溝より古い。平面形は円形を呈する。規模は1.45m×1.35mで、深さは1.0mまで調査した。

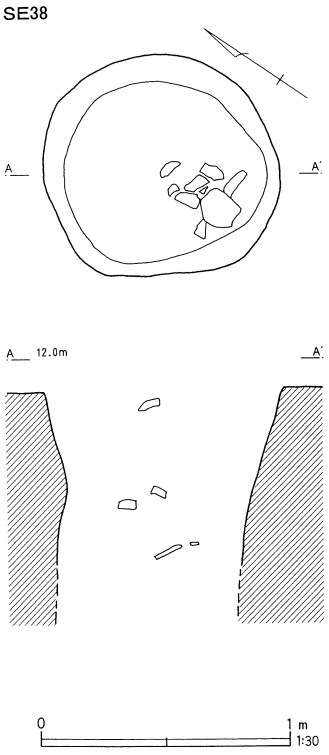
第88図　井戸跡遺物分布図











覆土には焼土ブロックと粘土ブロックが入り、埋め戻されている。

出土遺物は図示できなかったが、蓮弁文のある青磁碗片、常滑焼甕片、鉄片、礫などがある。遺構の時期は13世紀前半と考えられる。

第6号井戸跡（第79図）

本井戸はK－3グリッドに位置する。B区南部にある。平面形は円形を呈する。規模は1.3 m×1.3 mで、深さ1.02 mである。覆土は粘土ブロックが入り、埋め戻されている。

出土遺物は手捏ねかわらけとロクロかわらけが各1点で、後者を図示した。胎土に砂粒を含み、焼成は良く、にぶい黄橙色を呈す。体部は丸みがあり、内湾気味に立ち上がる。やや厚手で、内外面にはロクロ目がある。遺構の時期は、手捏ねかわらけの存在から、13世紀前半代と考えられる。

第22号井戸跡（第81図）

本井戸はF－8グリッドに位置する。A3区南部にある。新旧関係は第25号溝より古い。平面形は一方の尖る楕円形を呈する。尖った部分は井戸桶の引上げ口の可能性が高い。規模は1.4 m×1.05 mで、深さ1.62 mまで調査した。主軸方向はN－105°－Eを示す。覆土は下層に有機物を多量含み、上層は埋め戻されていた。

出土遺物は木器が2点であった。1は竹製の両頭箸である。外側は皮を残し、他の3面を刃物で削いで製作している。1膳分が揃っている。2は折敷の破片である。薄手のへぎ板を材としている。遺構の時期は細かい限定はできないが、13世紀の可能性が高い。

第23号井戸跡（第81図）

本井戸はF－9グリッドに位置する。A3区南端にある。新旧関係は第48・49号溝より古い。平面形は円形を呈する。規模は1.75 m×1.6 mで、深さは1.3 mまで調査した。覆土は中間に有機物層があり、上層にブロックが入ることから、半ばまで自然埋没し、水溜まりとなっていた時期があったが、最終的に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は古代の須恵器坏片、図示した中世の磁器と土器、他に1点のロクロかわらけ片、白磁片、常滑焼捏鉢片、鉄滓、礫、犬属の頭骨がある。1は外面に蓮弁文のある青磁碗で、山本信夫氏編年の龍泉窯系Ⅰ－5b類に相当し、E期（13世紀前半）の年代を与えられている。2はロクロかわらけで、胎土に砂粒をほとんど含まず、軟質の焼き上がりで、かなり白っぽい。内底面にユビナデ調整技法を伴い、外底面には板目圧痕が付く。田中信氏編年の白かわらけ模倣B3類に相当し、Ⅲa期（13世紀後半～14世紀初頭を3分した前期）に比定できよう。遺構の時期は13世紀後半の早い段階と考えられる。

第24号井戸跡（第81図）

本井戸はF－9グリッドに位置する。A3区南端にある。新旧関係は13世紀前半の溝である第46号溝より古い。平面形は円形を呈する。規模は0.85 m×0.8 mで、深さは1.4 mまで調査した。覆土は下層に有機物を含み、上層には炭化物と焼土粒子を含むので、半ばまで自然埋没し、その後、埋め戻されたとみられる。

出土遺物は図示できなかったが、須恵器坏片、同甕片、ロクロかわらけ片、渥美焼甕片、砥石、炭化材、礫がある。遺構の時期は12世紀後半から13世紀初頭の間と考えられる。

第25号井戸跡（第81図）

本井戸はF－8グリッドに位置する。A3区中央やや南にある。13世紀前半以前の排水溝である第50号溝を伴う。平面形は円形を呈する。規模は0.75 m×0.75 mで、深さは1.25 mまで調査した。覆土は下層から木の実炭化物などを出土し、自然埋没であるが、上層は埋められた可能性がある。

出土遺物は後世の撹乱混入品が若干あるが、井戸に伴う遺物はなかった。遺構の時期は13世紀前半以前である。

第26号井戸跡（第82図）

本井戸はD－8グリッドに位置する。A3区中央やや北にある。新旧関係は第5号住居跡より新しく、

第61号井戸より古い。平面形は不整円形を呈する。規模は1.65 m×1.35 m で、深さ1.35 m である。覆土は下層に有機物を少量含む。

1は南比企窯跡群産の須恵器甕口縁部片である。外面に波条文がある。古代の遺構から混入した物である。2は常滑焼甕の口縁部である。表面の色調は須恵器に近く黒っぽい。中野晴久氏編年の5形式と6 a 型式の過渡期的形態を示すことから、1250年前後に比定できよう。割れ口が摩耗しており、砧の代用品として用いられた可能性がある。3は常滑焼の片口鉢である。内湾気味の口縁部の形状から5形式の1類に相当し、1221年から1250年の間に比定できよう。4はチャートの自然礫を利用した砧石である。使用痕が認められる。5は曲物の底板である。直径18.2㎝、厚さは1.7㎝である。2枚矧ぎであり、接合面に竹釘孔が2個所開けられている。表面には手斧調整痕がある。図示できなかった他の遺物に、かわらけ片50.5 g、鉄滓41 g、煤の付着した片岩1700 g がある。遺構の年代は1250年前後である。

第50号井戸跡（第86図）

本井戸はI－10グリッド（A2区南部）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.95 m×1.75 m で、深さ1.1 m である。井戸底は砂礫層に達している。覆土に砂粒を含む。

1は第4層から出土した在地産瓦質の片口鉢である。浅野晴樹・服部実喜両氏によれば、北関東地域では第6期の13世紀後葉に瓦質の擂鉢生産が開始されるという。製品の成立には東播系の影響を考える向きもある。2は常滑焼の片口鉢I類である。体部が厚く、直線的に開く形状から、6 a 形式（1251年～1275年）に比定できよう。内面は摩耗して平滑である。3は胴回り2尺程度の甕の体部片である。外面に細かな平行叩きを施し、内面には明瞭な当て具痕はない。中世須恵器の可能性があろうか。4は中空の土製品で、胎土には粗砂と雲母粒子を含み、かわらけと共通している。土錘に似るが、火を受けて還元しているので、鞴の羽口と見た方が良いだろう。遺構の年代は13世紀後葉と考えられる。

第57号井戸跡（第86図）

本井戸はG・H－8グリッドに位置する。第1号溝内の南端部にあり、第58号井戸を切っている。平面形は円形を呈する。規模は0.82 m×0.75 m で、深さ0.73 m である。

1は山茶碗系の片口鉢で須恵器質の焼成である。体部に丸みのある形状から中野晴久氏編年の片口鉢I類に相当し、第5形式（1221年～1250年）に比定できよう。内面は使用によって摩耗している。2は常滑焼の片口鉢II類で、口縁部は暗赤褐色を呈し、光沢を帯びる。6 b 期（1276年～1300年）のものに類似する。3は素焼きの鋳型を2次的に砥石に転用した物で、線条痕が認められる。耐火白土に類し、多孔質軽量である。遺構の年代は13世紀後葉と考えられる。

第58号井戸跡（第86図）

本井戸はG・H－8グリッドに位置し、A2区とA3区の境界である第1号溝の南端にある。第57号井戸に切られている。平面形は円形を呈する。規模は0.8 m×（0.7）m で、深さは0.45 m である。覆土は暗緑灰色粘土である。

出土遺物は曲げ物が1点あり、第1号溝のところで記述しておいた。井戸は第1号溝が完全に埋没した段階になってから掘削されたものであるが、切り合い関係を有する第57号井戸が13世紀後半代の掘削であり、本井戸はそれに先行するが、時間差は小さく、同じ13世紀後半代の中に収まるのではないかと推定される。

第62号井戸跡（第87図）

本井戸はE－8グリッド（A3区中央やや北）に位置する。第46号溝を切っている。平面形は円形を呈し、上部に掘方を持つ。規模は1.5 m×（1.3）m で、深さは2.15 m まで調査した。覆土は下層に有機物を含むが、上層は埋め戻し土である。

1は回転糸切離し痕を底部に持つ須恵器坏底部片である。恐らく第54号溝からの流れ込みである。2は外面に蓮弁文を持つ青磁碗片で、山本信夫氏編年の龍泉窯系I－5 b 類に相当し、E 期（13世紀前半）の

年代を与えられている。3は土師質の鉢で表面は黒色処理されている。胎土には粗砂と雲母粒子を多量含む。北関東で13世紀後葉に出現するとされる瓦質擂鉢とセットをなすものであろうか。厚手であり、捏鉢かと思われる。4は完形の竪杵である。握り部で3個に割れていた。表面には手斧の調整痕と地面に置いた時付いたと思われる線条痕が多数認められる。両端部に雲母を多量に含む灰色粘土がべったり付着していることから、土壁の左官用またはかわらけの粘土捏ね用であった可能性が考えられる。5は折敷の未製品で、足か縁と推定する。角の折り目を付けようとして失敗し、廃棄されたものである。6は桧の薄板を用いた倍木折敷であり、両端部には幅0.6㎝の縁を付けていた痕跡があり、木釘孔も1個所残っている。両端付近には透漆が認められ、縁を付けた後に薄く塗られたものとみられる。遺構の年代は13世紀後半代である。

第66号井戸（第87図）

本井戸はK－4グリッド（B区南端）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.9m×0.8mで、深さ1.5mである。第30号土壙に切られている。遺物は皆無であったが、切り合い関係から12世紀後半以前である。

（3）中世後期の井戸

第7号井戸跡（第79図）

本井戸はF－15グリッド（A1区中央やや南）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.5m×1.5mで、深さ1.33mである。覆土は最下層が有機物を含む暗青灰色粘土で、その上部から6の板碑、10の漆器椀、12の矧板が投げ込まれたような状態で出土した（第88図）。薄い間層を挟んで上部の第1・2層は焼土粒子を含むので、埋め戻し土と見られる。

1は底部回転糸切離し後周辺部に回転ヘラケズリを施す南比企古窯跡群産の須恵器坏であり、流れ込み品である。2は山茶碗系の小型片口鉢で、6a期（1251年～1275年）に比定されている常滑市鎗場御林B1号窯に類例がある。3は志野丸皿で、大窯編年の第4段階後半（17世紀初頭）に比定できよう。4は瀬戸美濃系の擂鉢で、錆釉が流されている。大窯第2段階後半（16世紀中葉）前後に比定できようか。5は在地産の土師質の擂鉢で、半截竹管による卸目がある。胎土には石英などの細礫と雲母粒子を多量に含む。浅野晴樹氏は群馬県御布呂遺跡出土の類似品を15世紀後葉に位置づけている。6は阿弥陀三尊種字の板碑で、光明真言をもって天蓋をつくる。同形式の物は川島町内では天文九年と永禄四年の物があり、本資料は16世紀中葉前後の製作の可能性が考えられよう。7は阿弥陀種字板碑の破片である。

8から12は木器類である。8と9は蘇民将来符である。8は体部が八角柱状で、頭部は兜巾状をなす。刀子線刻によって4段に区切られ、最上段と最下段は鋸歯状に墨の塗り分けが行われている。第2・3段には墨書文字があるが、薄れていて、部分的にしか読めない。赤外線映像装置を使用して調査した結果、1・2行目は全く読めないが、3行目以降は「之・下」「家・□（悴）」「両・末」「家・之」「家・木」と一応読めた。ただし未確定である。中心に孔が貫通しており、紐で下げて護符とした可能性がある。9は体部が六角柱状で、頭部は兜巾状をなす。刀子線刻によって4段に区切られ、最上段と最下段は鋸歯状に墨の塗り分けが行われている。第2・3段には墨書文字があり、草書体を中心とし、楷書体と梵字を交える。正面図側では「生・民」「将・来」「之・子」と左へ進み、裏面図側では「前・進」「バン・万」「ア・佛」と右へ進む。神仏混淆型式の呪符であり、中心に孔が貫通しており、紐で下げて護符とした可能性がある。10は漆器椀で、高い高台が付く。畳付内の抉り込みは浅い。外黒内赤仕上げで、漆絵はないようである。11も10と似た特徴を持つ漆器椀高台部である。外黒内赤仕上げで、畳付内に植物文らしき漆絵がある。12は矧板で、上端の内側を面取りしている。横断面が偏平なので、桶ではない。両面とも手斧調整痕がある。

遺構の時期は使用期間が16世紀中葉頃で、自然埋没が中程まで進んで板碑が投棄されたのが16世紀末

ころ、埋め戻されたのは若干遅れて17世紀初頭ころのことと考えられる。

第8号井戸跡（第79図）

本井戸はF－15グリッド（A1区中央やや南）に位置し、北西0.5mには第7号井戸がある。平面形は円形を呈する。規模は1.15m×1.05mで、深さ1.54mである。

出土遺物は図示できなかったが、須恵器坏片29.8g、須恵器甕片27.3g、土師器甕片86.1g、かわらけ片2点8.8gが出土している。かわらけは厚手で軟質の物であった。時期は細かい限定が不能であるが、中世後期と考えられる。

第9号井戸跡（第79図）

本井戸はF－15・16グリッド（A1区東端）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.4m×1.5mで、深さ1.4mである。覆土は最下層の第4層に有機物を含み、その中程から4の板碑が出土している。上層は埋め戻されている。

なお、第52号土壙は井戸に伴う洗い場、第34号溝は排水路と考えられる。

1と2はロクロかわらけである。内底面が半球形に窪む特徴があり、形態的には田中信氏編年のA2類に相当し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。3と4は板碑である。3は阿弥陀三尊種字のサクの部分破片である。4は応安五（1372）年の紀年があり、偈を伴っている。遺構の時期は15世紀末から16世紀前半と考えられる。

第11号井戸跡（第80図）

本井戸はF－15グリッド（A1区東部）に位置する。平面形は不整円形を呈する。規模は1.05m×1.05mで、深さ1.43mである。暗青灰色粘土からなる第5層、緑黒色粘土からなる第4層のレベルで井戸枠の錆化したものが、第4層より、3の漆器椀が出土した。

1は外反する口縁部を持つかわらけで、田中信氏編年のE1類に相当し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。2は素焼きの土錘である。3は漆器椀で、腰が丸く、口縁部は直立する。外黒中赤仕上げで、外面に漆絵がある。四柳嘉章氏編年のⅨ2期（16世紀後半）に掲げる福井県朝倉氏館出土品に類似する。4は漆器椀高台部で、内面は火を受けて炭化している。5は板碑の頭部破片である。遺構の時期は16世紀前半代が使用期で、後半代に廃棄、埋め立てられたと考えられる。

第12号井戸跡（第80図）

本井戸はF－13グリッド（A2区東端）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は2.15m×2.1mで、深さ1.53mである。覆土最下層には有機物を含む。

1は瀬戸美濃系の鉄釉香炉である。このように器形が偏平な物は大窯Ⅲ期、第3段階後半に位置づけられている静岡県上志戸呂窯に類例がある。2は中国製青磁皿で、体上り部内面に蓮花文が線刻されている。高台の形態から龍泉窯系の大皿でG期（14世紀初頭～15世紀前半頃）に属す物かと思われるが、はっきりしない。3と4は瀬戸美濃系の天目釉を施釉した茶碗である。4は天目形、3は端反りの丸碗形を呈し、高台付近は露胎である。大窯Ⅲ期、第3段階後半（16世紀後半の中頃）に編年されている土岐市定林寺東洞1号窯に類例がある。図示できなかった他の遺物に、精錬炉壁片1点29.5g、ロクロかわらけ片20.0g、板碑片50.0g、焙烙片116.6g、瓦片44.8g、砥石1点121.7gがある。時期は16世紀後葉と考えられる。

第19号井戸跡（第81図）

本井戸はH－12グリッド（A2区南端）に位置する。平面形は不整円形を呈する。規模は1.65m×（1.35）mで、深さ1.7mである。掘方を持ち、覆土中層には植物繊維を含んでいた。

出土遺物は僅かに図示した板碑の頭部破片（2）と須恵器蓋のつまみ片（1）のみであった。遺構の時期は細かく限定できないが、板碑を出土することから、中世後期、おそらく16世紀後半代と考えられる。

第27号井戸跡（第82図）

本井戸はF－8グリッド（A3区中央やや南）に位置する。第48号溝を切っている。平面形は円形を

呈する。規模は0.75 m×0.65 m で、深さは1.03 m まで調査した。

1は瀬戸美濃系の鉄釉丸碗である。薄手で、口縁部が弱い端反り形態である。大窯第1段階後半（16世紀初頭）に類例がある。他に土鍋と片岩の細片および礫の出土があったのみである。遺構の時期は16世紀初頭と考えられる。

第29号井戸跡（第82図）

本井戸はC－12グリッド（A4区東端）に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.75 m×1.55 m で、深さは1.0 m まで調査した。覆土は第4層に有機物を含み、カラタチの枝が出土した。

1はロクロかわらけで、内底面は窪み、強いカキメが付く。形態的には田中信氏編年のA2類に相当し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。図示できなかった他の出土遺物に瓦質捏鉢片1点42.5 g、常滑焼小型壺片3点94.5 g、礫がある。遺構の時期は16世紀前半と考えられる。

第30号井戸跡（第82図）

本井戸はB－11グリッド（A4区南端）に位置する。第53号溝に切られている。平面形は円形を呈する。規模は2.65 m×2.55 m で、深さは1.2 m まで調査した。覆土第4層には分解されていない植物遺体を含んでいた。

1はロクロかわらけで、内底面中央が窪み、ユビナデ調整技法を施し、外底面には板目圧痕を伴う。2は小型のロクロかわらけで、口唇部は極めて薄手である。ともに田中信氏編年のA3類に相当し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。3は瓦質釜で、釣手と蔽いが付く、体部外面はケズリ調整で、作りが良い。15世紀末から16世紀初頭に位置づけられている川越市天王遺跡出土品に類似している。4は漆器椀で、やや高い高台を伴っている。外黒内赤仕上げで、外面に植物文と菱繋ぎ文の漆絵がある。高台内には「入一」の記号がある。5は片麻岩製の石棒であり、縄文時代の遺物である。6と7は丸杭である。6から両端が尖らせていることが分かり、敵に踏ませるための逆茂木であろう。遺構の時期は15世紀末から16世紀初頭と考えられる。

第31号井戸跡（第83図）

本井戸はF－8グリッド（A3区南部）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は2.45 m×2.3 m で、深さは1.7 m まで調査した。覆土土層断面から、崩壊して埋まり、最後に窪みを埋めていることが分かる。

1は延徳（1489～1492）年間の紀年のある阿弥陀一尊種字の板碑、2は板碑の種字部分破片である。3は板碑を転用した砥石で使用頻度は低い。4は緑灰色の凝灰岩製砥石で、上下2面を使用している。鎌砥の可能性がある。土器は図示しなかったが、常滑焼大甕片1点240 g があったのみである。遺構の時期は板碑廃棄との関係から、早くて16世紀前半、遅くとも16世紀後半代と推定される。

第32号井戸跡（第82図）

本井戸はB－11グリッド（A4区南端）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.85 m×1.85 m で、深さは1.3 m まで調査した。覆土最上層から焼土ブロックを伴う土と共に完形品の板碑が出土した。永徳二（1382）年六月廿五日の紀年を持つ阿弥陀一尊種字の板碑である。他には山茶碗片1点33.3 g と礫1点があったのみである。遺構の時期は第53号溝より古く、第30号井戸に近接するとの推定から、16世紀前葉と見ておきたい。

第33号井戸跡（第83図）

本井戸はC－12　グリッド（A4区東端）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.65 m×0.65 m で、深さ0.56 m である。井戸底面には小礫が敷いてあった。覆土下層には有機物を含んでいた。遺物は埋め戻し直前に投棄されている（第88図参照）。

1はロクロかわらけで、内底面が渦巻き状に盛り上っている。白色針状物質を含まないが、田中信氏編年のA3類に類似し、Ⅵa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）に比定できよう。2は小型品で、内底面のユビナデ技法を伴っている。底部の糸切離しは静止状態に近い。内外面に漆が付着しており、漆のパレ

ットとして使用された物である。3は曲物の底板で、2枚矧のものである。接合面には2個1対の竹釘孔がある。二次的に俎板として利用され、その際に、4個の足を付けた痕跡がある。遺構の時期は16世紀前半代と考えられる。

第35号井戸跡（第83図）

本井戸はG－12グリッド（A2区中央部）に位置する。第43号溝に切られている。平面形は円形を呈する。規模は(1.2)m×1.0mで、深さ0.8mである。覆土は最下層に有機物と板碑などの遺物を含んでいた。

出土遺物は板碑片（1・2）と砥石（3）、礫であった。1は□（延）慶二（1309）年四月の年紀を持ち、今回出土板碑中最古の物である。2はキリークの部分破片、3は硯を転用した砥石で、墨の付着が認められる。遺構の時期は板碑の廃棄行為から16世紀後半代と見ておきたい。

第36号井戸跡（第83図）

本井戸はG－11グリッド（A2区中央部）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.7m×1.55mで、深さ0.8mである。井戸底は砂礫層に達しており、掘方を持っている。覆土下層には棕櫚の葉などを含む。

1は板碑の小片枠線、月輪、キリークの一部が残存している。2は竹筒である。節が付かず、筒抜けになっている。また、上端は水平に切れていない。息抜き竹としては短すぎようか。3は曲物の底板である。2ないし3枚矧であり、小口には竹釘が2本残存している。節の部分には手斧調整痕がある。遺構の時期は板碑の廃棄行為と曲物の特徴から中世後期と考えられる。

第43号井戸跡（第84図）

本井戸はH－11グリッド（A2区中央部）に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は2.4m×(2.25)mで、深さ0.58mである。主軸方向はN－33°－Eを示す。井戸底は砂礫層に到達しており、覆土下層には木炭灰を縞状に含んでいた。なお、本井戸に取り付く第63号溝は排水路と見られる。

1と2は錆釉が施釉された瀬戸美濃系の擂鉢片で、口唇部が摩耗しており、砥石か洗濯用砧として使用されたとみられる。口唇部の形状から擂鉢Ⅱ類に相当し、大窯第2段階後半（16世紀中葉）に比定できよう。3は2個1対の内耳を持つ焙烙である。内耳は立上り部に取り付いている。また、立上り外面下部はケズリが加えられている。服部敬史氏がⅤ期に編年した騎西城出土品に類似し、16世紀中葉に比定できよう。4は外黒内赤仕上げの漆器皿である。薄手で低い高台の付く形態は一条谷朝倉氏遺跡出土品と共通している。遺構の時期は16世紀中葉と考えられる。

第44号井戸跡（第85図）

本井戸はH－10グリッド（A2区中央部やや南）に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は2.2m×1.9mで、深さ0.95mである。井戸底は砂礫層に達している。覆土下層には有機物を含み、壁の崩壊が認められる。

1は内耳を持つ焙烙である。内耳は欠損しているが、立上り部に取り付くと見られる。第43号井戸の出土資料とほぼ同時期に比定できよう。2は第3層から出土した天禧通寶である。北宋の天禧元（1017）年の鋳造である。外径2.51㎝、内径2.08㎝、厚さ0.11㎝、重量3.8gである。3は硬砂岩の自然礫に線条痕の認められ、刃傷はないので、砥石ではなく、砧石と考えられる。重量は1310gある。遺構の年代は16世紀中葉と考えられる。

第46号井戸跡（第85図）

本井戸はH－10・11グリッド（A2区中央部）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.25m×(1.25)mで、深さ0.9mである。井戸底は砂礫層に達している。掘方を持ち、覆土は自然埋没である。

1は須恵器長頸瓶で南比企窯跡群産である。2は粘板岩の自然礫を利用した砧石である。手ずれと使用によってツルツルになっており、細かい線条痕が全体に付く。3は曲物または桶の底板で、三枚矧である。小口で5本の竹釘を用いて繋ぎ合わせている。図化できなかった他の出土遺物に、内耳鍋片1点99.9g、瀬戸美濃系鉄釉茶入れ2点17.1g、板碑片、立上り部の外反するかわらけ片1点5.8gがある。遺構の時期はかわ

らけも参考に加えて16世紀前半代と考えておきたい。

第48号井戸跡（第85図）

本井戸はG－11グリッド（A2区中央やや北）に位置する。覆土上層を第43号溝に切られている。平面形は円形を呈する。規模は1.2m×（1.05）mで、深さは1.0mまで調査した。井筒を入れてから掘方を砂で埋めたことが覆土からわかる。

1は錆化が著しいが、明治初期の龍一銭銅貨で、撹乱混入品である。2は応永廿一（1414）年正月三十日の、3は応安二（1369）年のそれぞれ年紀のある阿弥陀一尊種字板碑である。図化できなかった他の遺物にかわらけ片15.6g、須恵器片13.4gがある。遺構の年代は16世紀代と考えておきたい。

第49号井戸跡（第86図）

本井戸はI－10グリッド（A2区西部）に位置する。平面形は不整円形を呈する。規模は1.65m×1.55mで、深さ0.95mである。井戸底は砂礫層に達している。掘方を伴っている。覆土下層には有機物を含む。

出土遺物は図示できなかったかわらけ片1点5.6gのみであったが、内底面が窪む特徴から、田中信氏編年のⅥa期（15世紀末～16世紀後葉の間の前半期）と推定できる。

第61号井戸跡（第86図）

本井戸はD－8グリッド（A3区北西部）に位置する。第26号井戸を切っている。平面形は楕円形を呈する。規模は1.0m×0.8mで、深さは1.35mまで調査した。覆土の下半部には有機物を含んでいた。

出土遺物は板碑を再利用した砥石1点のみであった。種字の痕跡が僅かに残っている。砥面は右側縁部で、表裏面には刃先調整痕が目立つ。作業台的に用いられた物であろう。このような、板碑の2次利用は中世後期の著しい特徴であり、橋板などを除けば、近世には少ない。ここでは中世後半期の可能性を考えておきたい。

（4）近世の井戸

第3号井戸跡（第79図）

本井戸はG－14・15グリッド（A1区南端）に位置する。第31号溝に切られている。平面形は円形を呈する。規模は1.8m×1.3mで、深さは0.3mまで調査した。覆土は埋め戻し土である。

出土遺物は図示できなかったが、染付の細片1点6.2gを含んでおり、遺構の時期は近世と考えられる。

第13号井戸跡（第80図）

本井戸はG－13グリッド（A2区東端）に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.5m×1.2mで、深さ1.5mである。覆土には鉄斑を多量に含む。

1は瀬戸美濃系の鉄釉筒形香炉で、外面にはカキメ文がある。底部は露胎で三足が付く。藤沢編年の古瀬戸後Ⅳ期古段階（15世紀中葉）に類例がある。2は肥前系の染付丸碗で、万年青を濃絵で描く。九州編年Ⅲ期（1650～1690年代）に類品がある。3は瀬戸美濃系の鉄釉擂鉢で、口唇部が折り返されて断面円形の縁帯となっている。島村範久氏の御教示によれば、17世紀後半代である。4は渥美焼の大鉢である。胎土は赤褐色で、鉄釉どぶ付けと灰釉の流し掛けが施されている。17世紀後半から18世紀前半のものである。5は丸瓦で、内面布目、外面はミガキ仕上げで、一部にケズリ痕がある。昼間孝司氏の御教示によれば、中世瓦とみられるという。6は板碑片で、キリークの一部が残る。7は淡緑灰色の凝灰岩製砥石である。四面砥の良く使い込まれた物で、山形に変形している。直交する線条痕と平行する刃先調整痕が残る。遺構の時期は17世紀後半代と考えられ、香炉と瓦は前代に属する流れ込み品となろう。

第18号井戸跡（第80図）

本井戸はG－11グリッド（A2区中央）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は2.15m×2.0mで、深さは1.2mまで調査した。砂礫層より深く掘り込まれており、これに接する覆土第3層には木の板などの有機物を多量に含んでいた。

1は腰折形の志野茶碗である。土岐市隠居西窯に類例があり、大窯第4段階（16世紀末～17世紀初頭）に比定されている。2は木製の矢筈で、竹の箆に継いで

用いた継筈である。端部に弓の弦をつがえるための切り込み、その前方に筈巻を緊縛するための直径2.5mmの貫通孔がある。図示できなかった他の遺物に焙烙片200g、板碑片210g、瀬戸美濃系擂鉢64g、礫がある。遺構の時期は17世紀初頭から前葉と考えられる。

第20号井戸跡（第81図）

本井戸はG－11グリッド（A2区中央）に位置する。南東側に隣接して第18号井戸がある。平面形は円形を呈する。規模は2.0m×1.9mで、深さは1.2mまで調査した。

1は肥前系の青磁染付半筒形茶碗である。口縁部内側に型紙摺りの四方襷文を巡らす。九州編年Ⅳ期（1740～1780年代）に類例がある。2は赤褐色の鉄釉を施釉する擂鉢で、江戸系と呼ばれるものであろう。3と4は欅の皮付き板で、湾曲しており、刳り抜き式の井戸筒の残片と考えられる。5は皮むき丸太を蜜柑割りした杭である。遺構の時期は18世紀後半と考えられる。

第28号井戸跡（第82図）

本井戸はF－8グリッド（A3区中央やや南）に位置する。第72号土壙を切っている。平面形は円形を呈する。規模は0.9m×0.65mで、深さ1.06mである。上総掘り工法の井戸である。覆土上部に曲物を利用した井戸筒があり、その内部から漆器椀（第116図）が出土した。僅かに口縁部が欠けているだけで、ほぼ完形品である。底広で、開きの小さな体部を持ち、三つ碗の小椀に当たる物であろう。外面は赤黒色、内面は朱塗りで、外面の1個所に金泥で1対の柏文を描く。器形的には文化14（1817）年在銘の輪島漆器資料館蔵の総赤色椀に近似している。図化できなかった他の遺物に、瀬戸美濃系灰釉碗片1点、同徳利片2点合計32gがある。遺構の時期は19世紀前半代と考えられる。

第34号井戸跡（第83図）

本井戸はH－9グリッド（A2区西端）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.65m×0.55mで、深さ0.56mである。覆土下層には有機物と瓦片が多量に包含されていた。

1は軒桟瓦である。垂れは無文、万十小巴は剥離している。重量は1750gある。江戸中期に考案されたとされる桟瓦の中では新しい型式に属す物である。2は小型の鎌である。茎の先端を欠く。さきたま資料館所蔵の行田市斎条採集資料（重民）に形態と寸法が共通しており、桑刈り鎌と見られる。遺構の年代は江戸後期19世紀前半代と考えておきたい。

第37号井戸跡（第83図）

本井戸はH－11グリッド（A2区中央）に位置する。新旧関係は第64号溝より新しい。
平面形は不整円形を呈する。規模は1.35m×1.1mで、深さは1.1mまで調査した。覆土下層の壁崩壊砂層中に板碑が包含されていた。

1は瀬戸美濃系の灰釉小坏で、呉器形の物は土岐市高根窯沢窯に類例があり、大窯第4段階（16世紀末～17世紀初頭）に比定できよう。2は平瓦で、外面はミガキ、内面はケズリ調整が行われている。3は無釉の焼締め擂鉢で、堺の製品であろう。4は内耳が立上り上端から底面に跨る形で取り付く焙烙である。服部敬史氏は行田市九右衛門4号溝出土の類似品を近世Ⅰ期（16世紀末～17世紀前半）に位置づけている。5は板碑頭部破片で、キリークの一部が残る。6は囲炉裏の自在鍵の一部である。扇形の木部の孔に竹筒を通し、上端の釘には紐を付けて、鍋や鉄瓶を下げる鉤の位置を調節した物である。遺構の時期は17世紀前半と考えられる。

第38号井戸跡（第83図）

本井戸はG－11グリッド（A2区中央）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.95m×0.85mで、深さは1.0mまで調査した。瓦と木器は第3層から出土したが、磁器類は第1・2層からも出土した。

1は肥前系の染付半筒形碗である。外面は網目地に菊花散らし文を描く。九州編年Ⅳ期の広瀬向2号窯物原（1770～1780年代）に類例がある。2は肥前系の染付端反碗である。外面には瑠璃釉で流水に紅葉文を描き、口縁部内側には松葉文帯を巡らす。この種の端反碗は1810年代頃に現われ、幕末まで碗の主流にな

るという。3は肥前系の染付徳利で、牡丹に鶯を型紙摺りする。口縁には雷文を手描きする。4は桶か曲物の底板で、3枚矧の2枚分である。2本の木釘で継いでいる。遺構の時期は18世紀後半に使用され、19世紀前半に埋め戻されたと考えられる。

第45号井戸跡（第85図）

本井戸はH－10・11グリッド（A2区中央やや南）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.75m×1.7mで、深さ0.92mである。覆土下層には有機物を含んでいた。

出土遺物は瀬戸美濃系の擂鉢であり、全面に鉄釉を施釉し、口唇部を内側に折り返して丸く収める形態的特徴も第13号井戸の3と共通している。17世紀後半代の物である。遺構の時期は17世紀後半代として良いだろう。

第60号井戸跡（第87図）

本井戸はD－9グリッド（A3区北部）に位置する。新旧関係は第4号住居跡より新しく第24号溝より古い。平面形は円形を呈する。規模は2.5m×2.5mで、深さ1.5mである。井戸底は砂層を貫いている。覆土下層には有機物と砂、上層には焼土粒子と遺物を含んでいた。

出土遺物は第4号住居跡から流れ込んだもの（1～4）とそれ以外の物とがある。1は須恵器坏、2は須恵器皿、3は土師器台付甕、4は土師器甕である。須恵器の底部は共に回転糸切離しである。土師器甕の口縁部はコ字状を呈する。5は渥美焼の甕体部片で13世紀前半代のもの。6と7は第1・2層から出土した瀬戸美濃系の灰釉端反皿で、重ね焼の目がある。17世紀後半代。8は大型の椀形滓で、精錬炉の底面が貼り付いている。発泡して、多数の孔がある。重量は923gある。9は暗緑灰色の凝灰岩製砥石である。10は暗紫灰色の溶結凝灰岩製石臼で、上臼である。縁の断面形が蒲鉾形を呈し、下面のふくみが大きい点などから、中世の物であろう。摺目は剥離して残っていない。遺構の時期は17世紀前半に使用され、同後半に埋め立てられたと考えられる。

（5）時期不明の井戸

第2号井戸跡（第79図）

本井戸はC－12グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.9m×1.9mで、深さは1.2mまで調査した。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第5号井戸跡（第79図）

本井戸はF－13グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は(1.05)m×1.05mで、深さは0.35mまで調査した。出土遺物は皆無であった。

第14号井戸跡（第80図）

本井戸はF－14グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.95m×0.9mで、深さ1.69mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第15号井戸跡（第80図）

本井戸はG・H－13グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.4m×(1.0)mで、深さ1.2mである。出土遺物は皆無であった。

第17号井戸跡（第80図）

本井戸はG－12グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.25m×(1.15)mで、深さは1.2mまで調査した。出土遺物は皆無であった。

第21号井戸跡（第81図）

本井戸はG－8グリッドに位置する。平面形は卵形を呈する。規模は1.2m×1.0mで、深さは1.25mまで調査した。出土遺物は土師器台付甕の台部破片1点8.3gのみであった。時期決定は困難である。

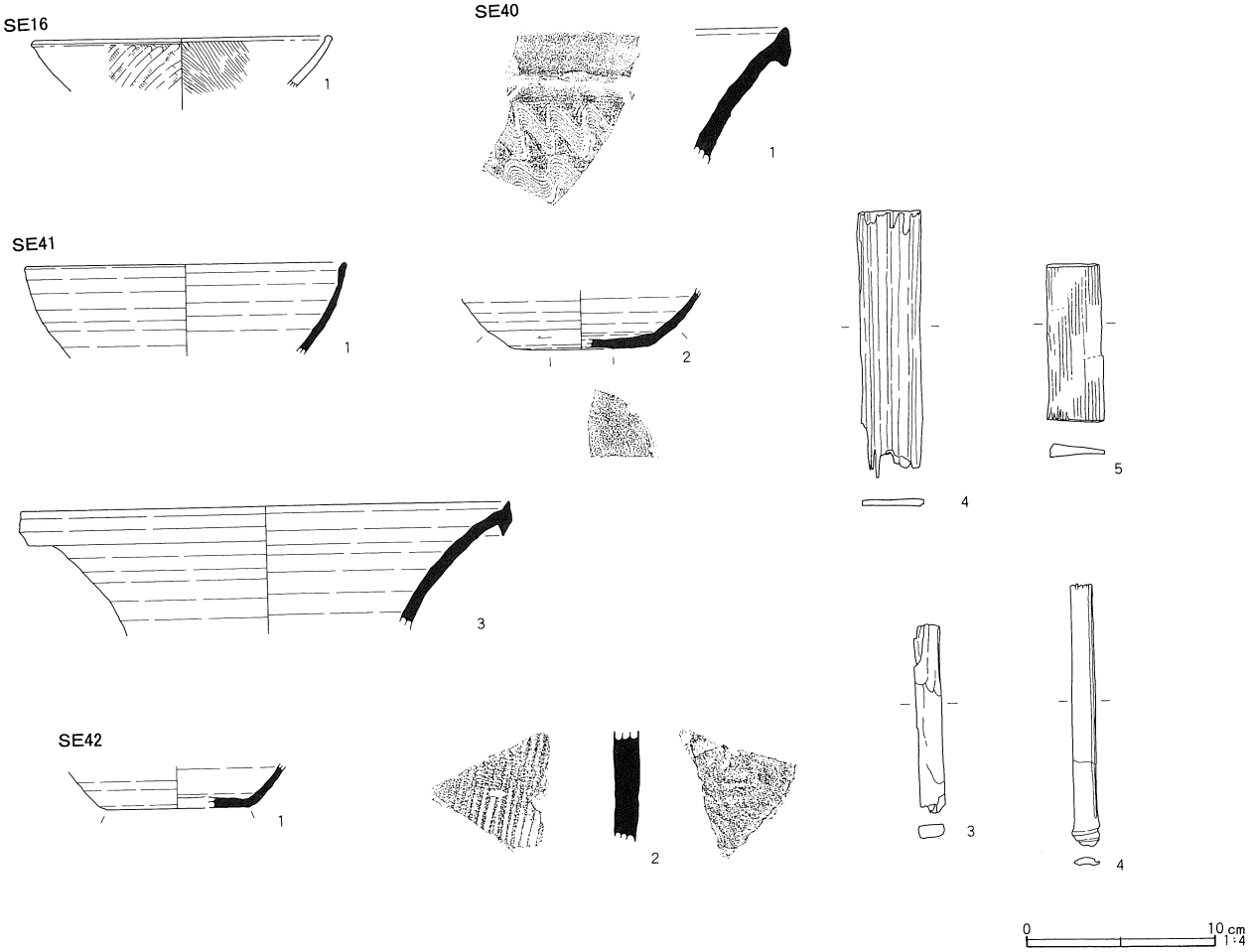
第39号井戸跡（第84図）

本井戸はH－11グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は2.5m×2.2mで、深さ1.13mである。出土遺物は厚手の土師器甕片1点24.5gのみであり、時期決定は困難である。

第47号井戸跡（第85図）

本井戸はH－10グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は2.0m×1.9mで、深さ0.9mである。出土遺物は薄手のかわらけ片1点4.9g、鉄滓1点、礫1点のみであった。時期決定は困難である。

第89図　井戸跡（古代以前）出土遺物



第52号井戸跡（第86図）

本井戸はG－3グリッドに位置する。第79号溝を切っている。平面形は円形を呈する。規模は0.8 m×0.7 mで、深さは1.15 mまで調査した。出土遺物は皆無であった。

第53号井戸跡（第86図）

本井戸はH－2グリッドに位置する。第23号溝を切っている。平面形は円形を呈する。規模は0.95 m×0.9 mで、深さは1.3 mまで調査した。出土遺物はかわらけ片1点2.6 g、片岩、礫のみであり、時期決定は困難である。

第59号井戸跡（第86図）

本井戸はH－9グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.7 m×0.55 mで、深さ0.56 mである。出土遺物には竹製の籠とゴムまりがあった。ゴムまりは撹乱混入の可能性も考えられたが、もし伴うとすれば、時期は近代以降ということになる。

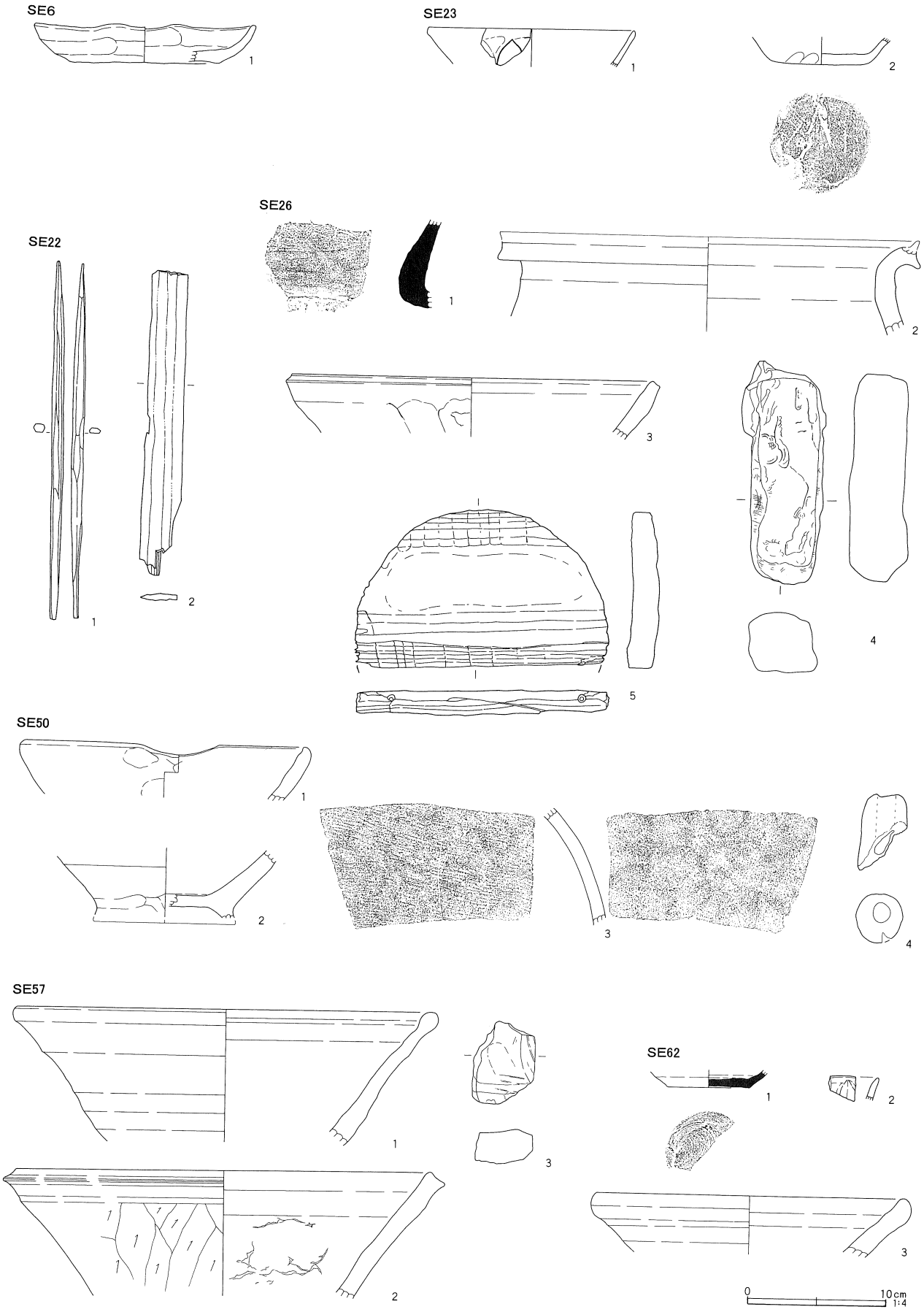
63号井戸跡（第86図）

本井戸はI－10グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.2 m×1.15 mで、深さ1.04 mである。出土遺物は皆無であった。

第64号井戸跡（第86図）

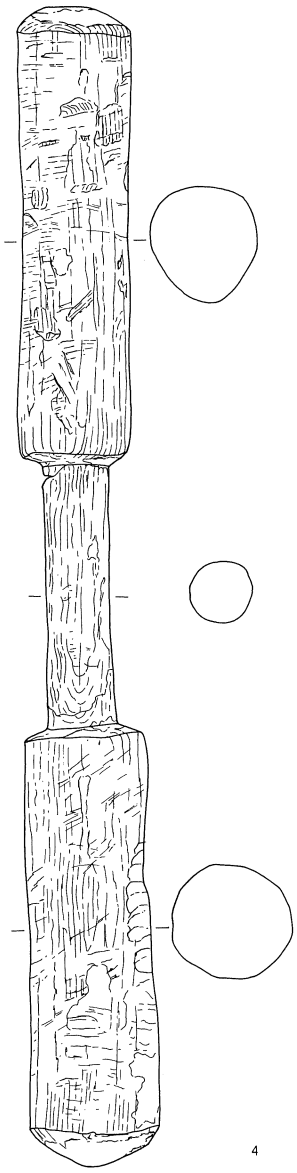
本井戸はK－4グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.15 m×1.0 mで、深さ1.15 mである。出土遺物は皆無であった。

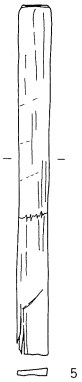
第90図　井戸跡（中世前期）出土遺物(1)

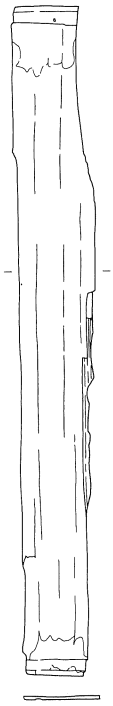


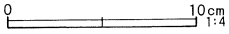
第91図　井戸跡（中世前期）出土遺物(2)

SE62

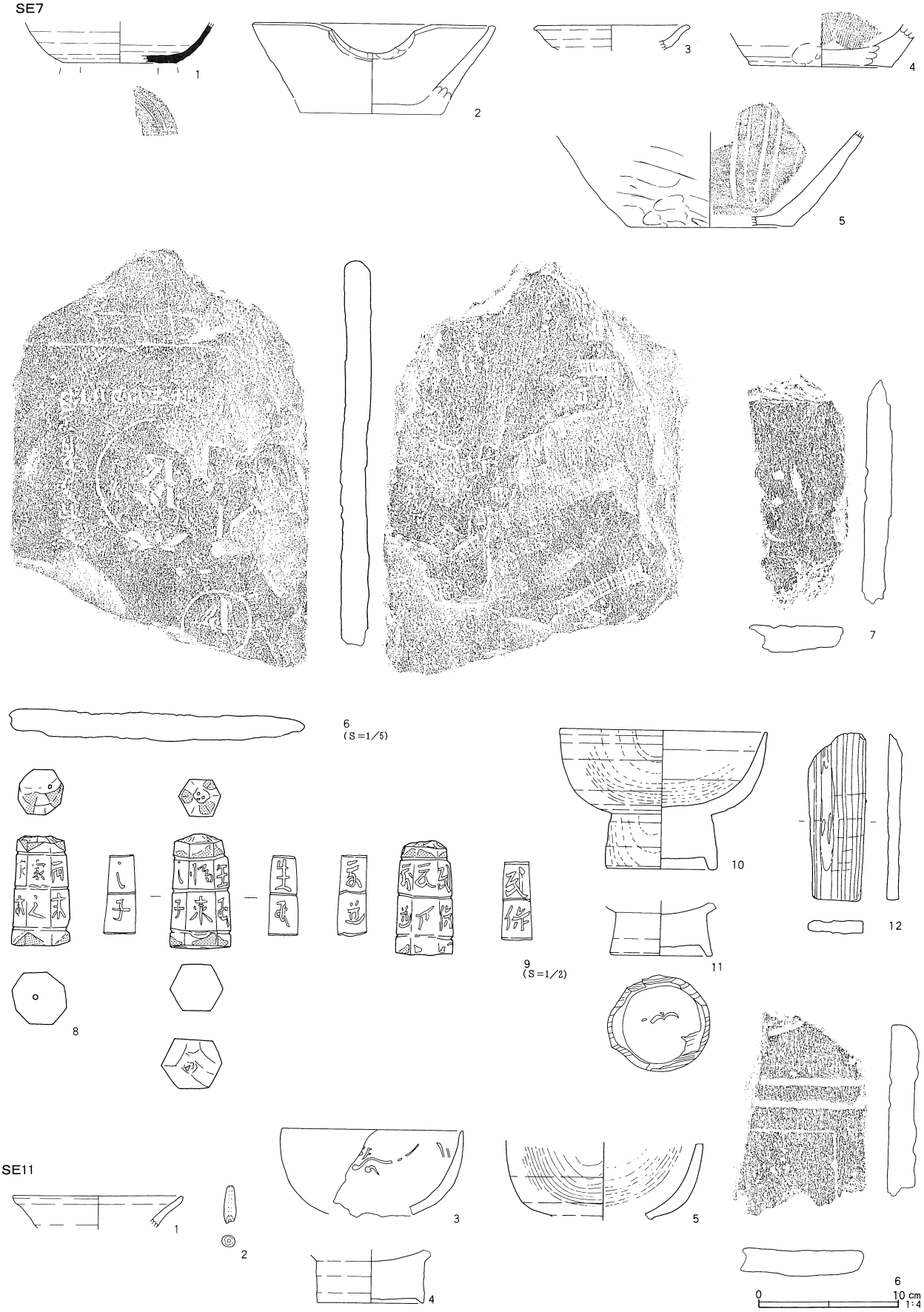




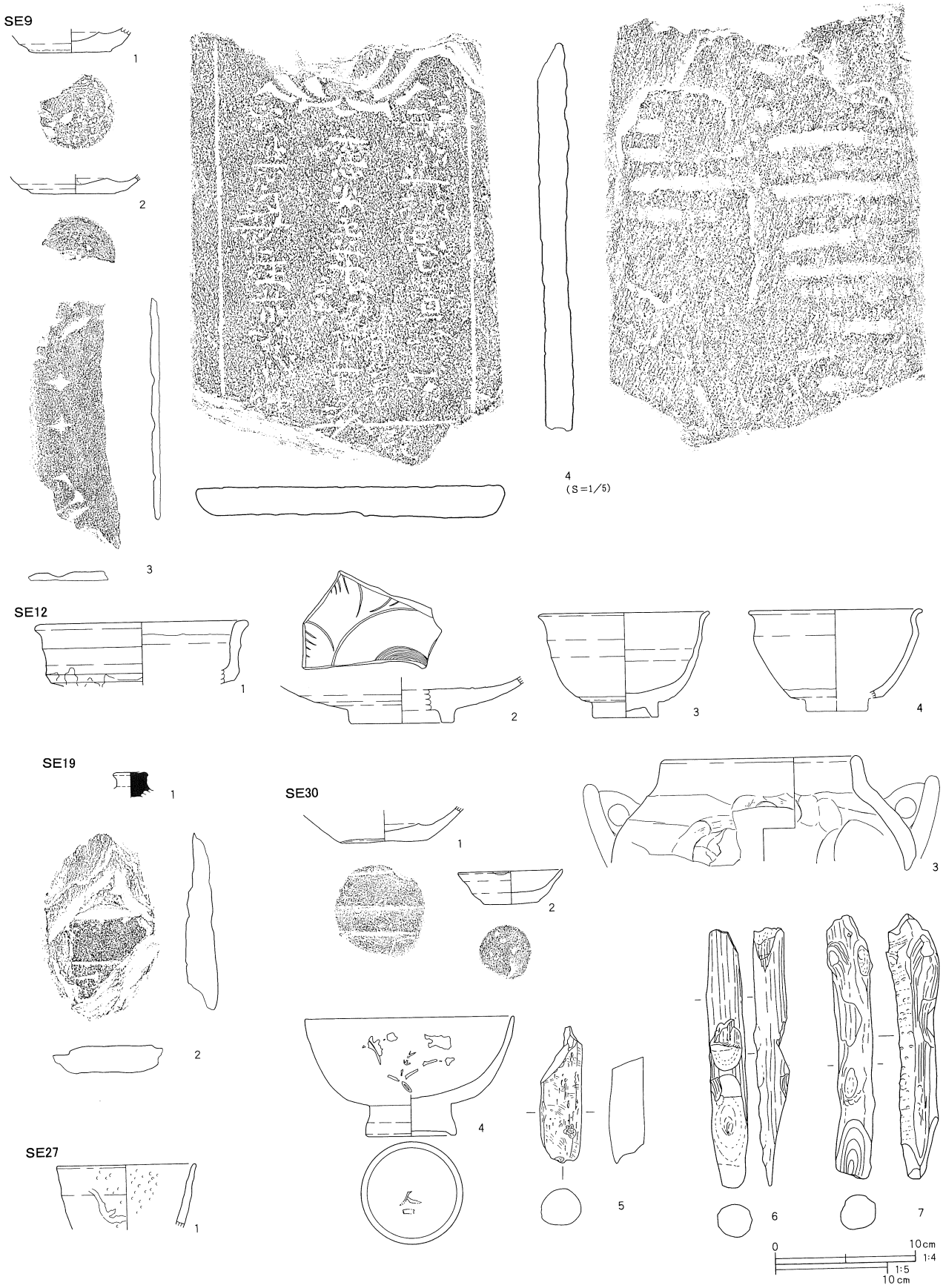




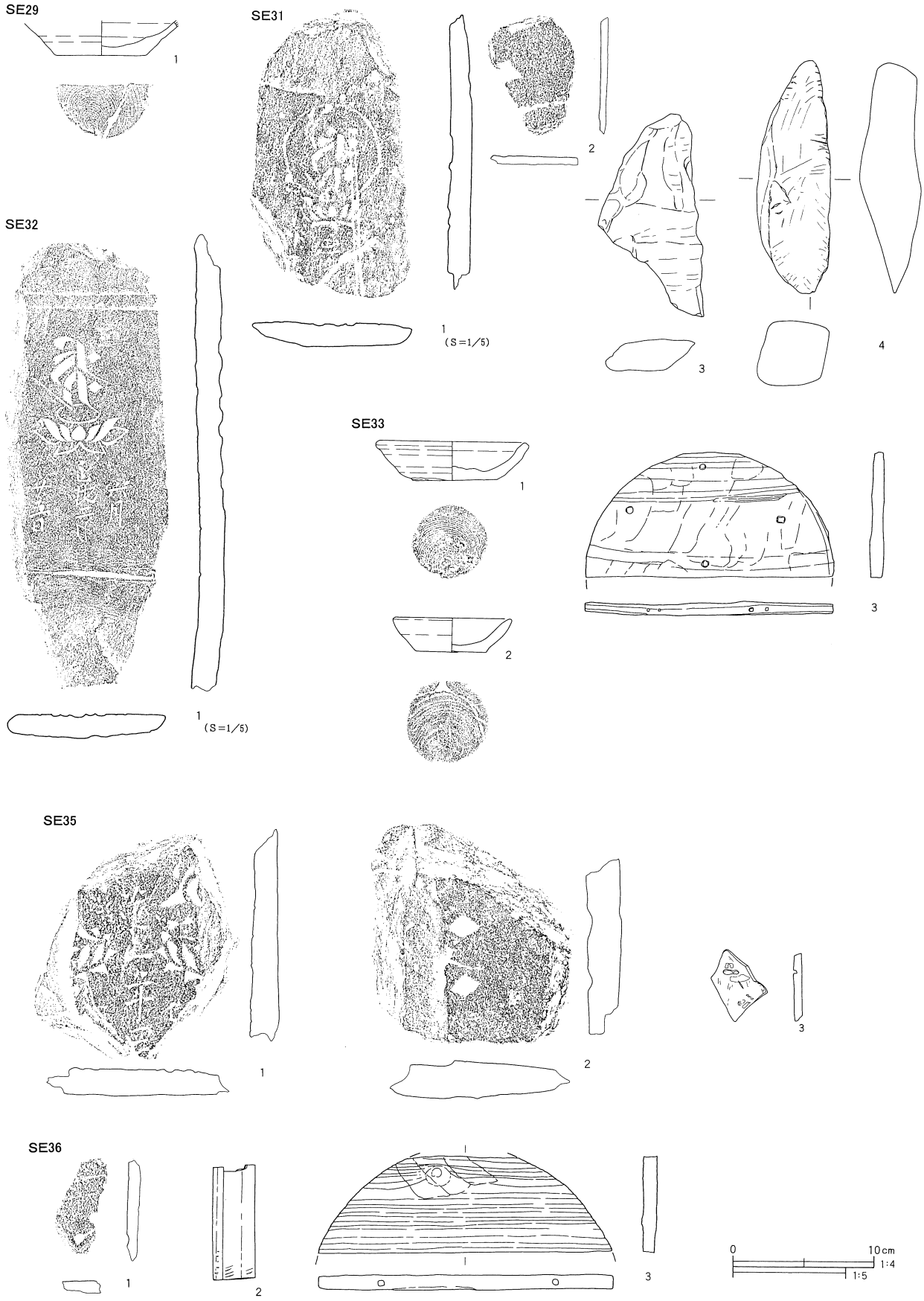
第92図　井戸跡（中世後期）出土遺物(1)



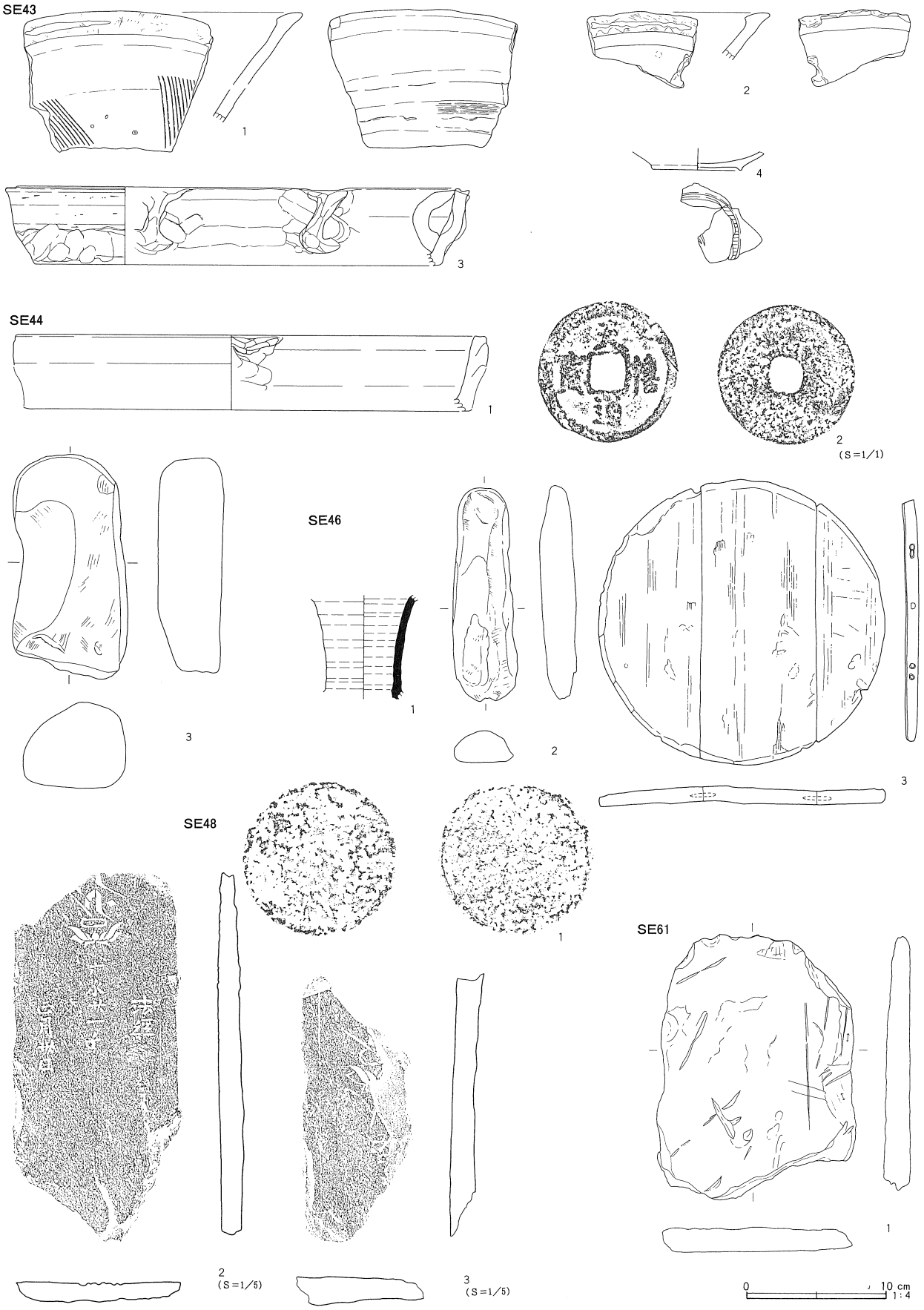
第93図　井戸跡（中世後期）出土遺物(2)



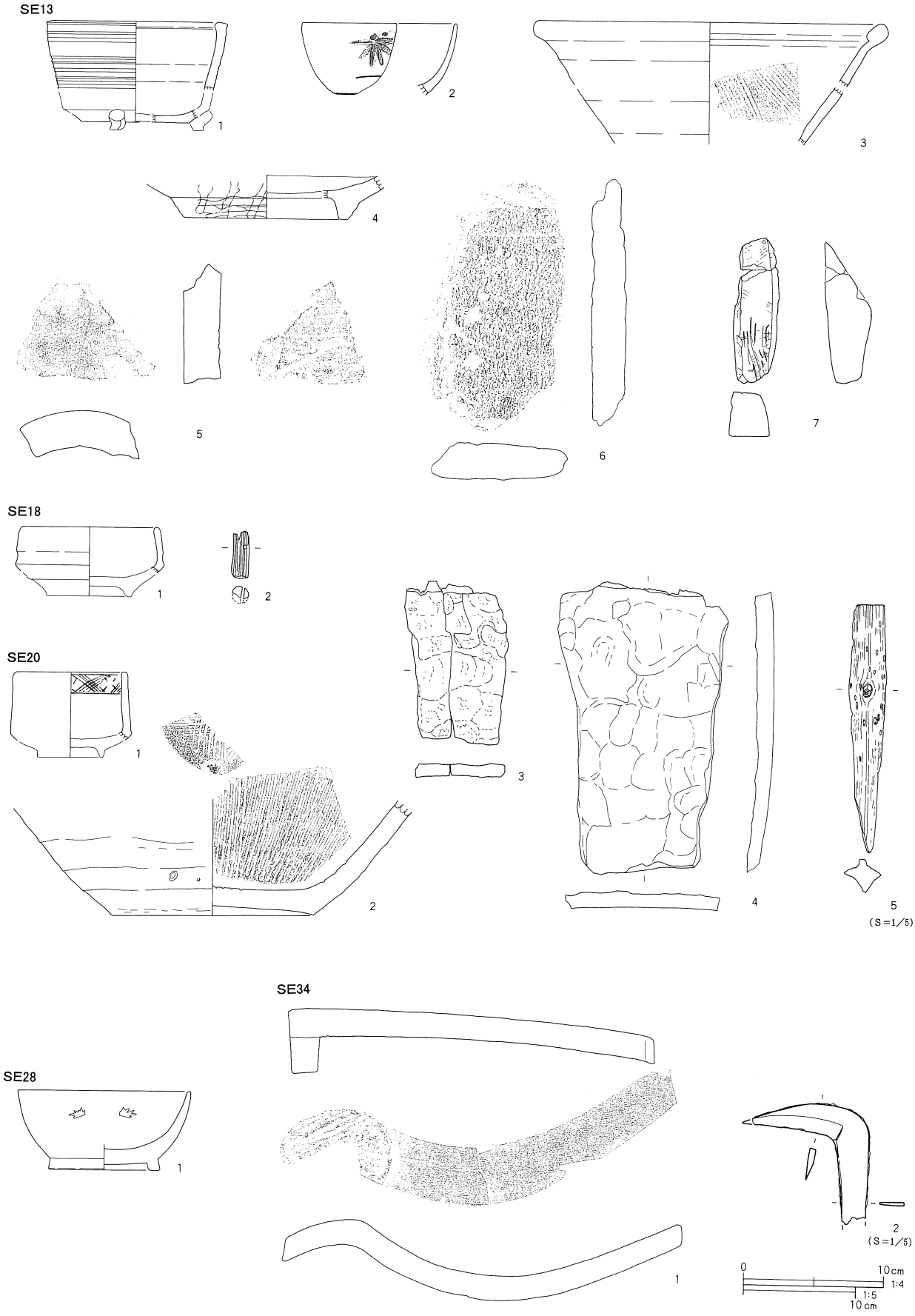
第94図　井戸跡（中世後期）出土遺物(3)



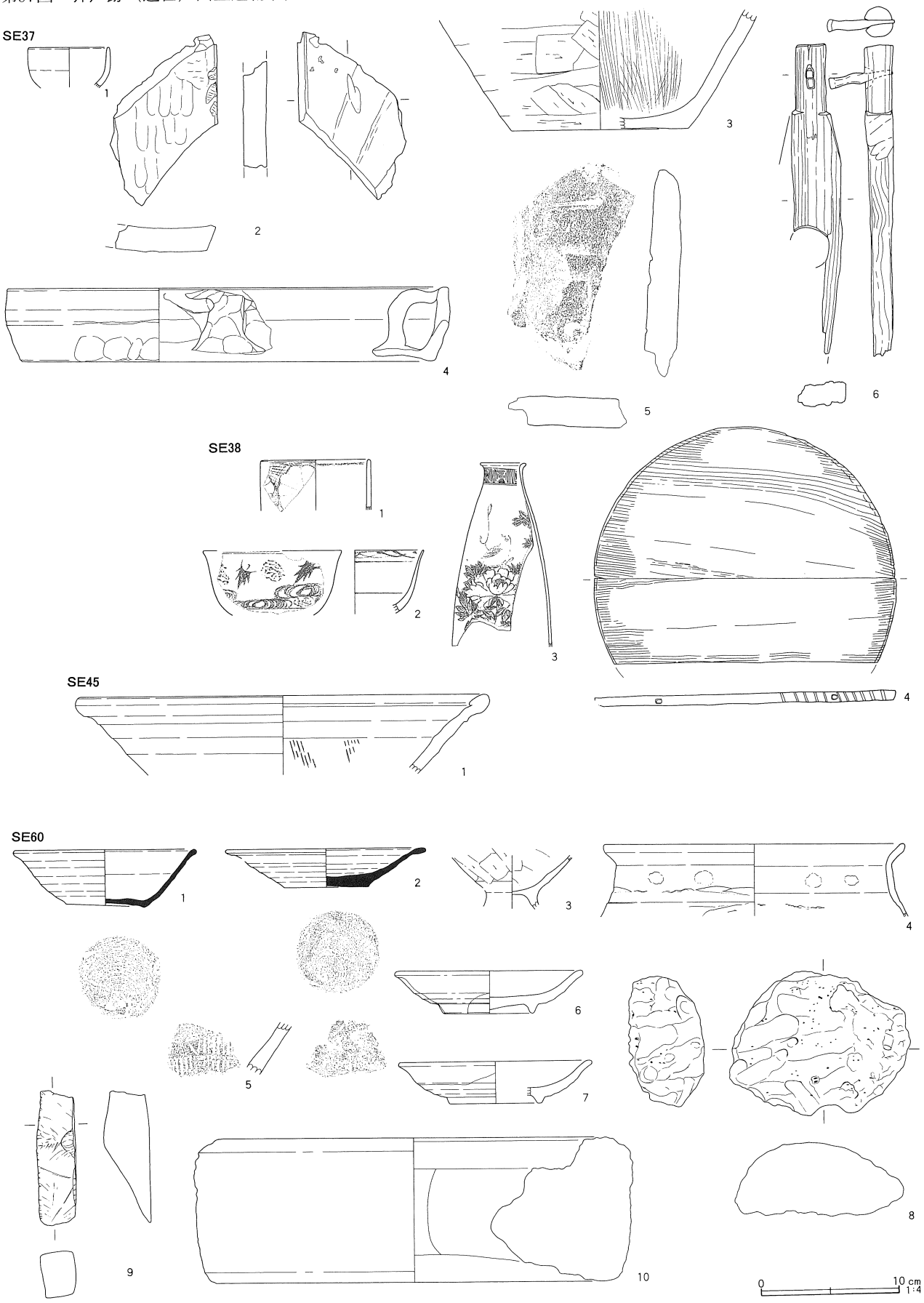
第95図　井戸跡（中世後期）出土遺物(4)



第96図　井戸跡（近世）出土遺物(1)



第97図　井戸跡（近世）出土遺物(2)



井戸出土遺物観察表（第89～97図））

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SE16	1	土師器高坏	(16.0)	(2.7)	－	ＣＥＨ	Ⅰ	5YR6/3	7	五領式、外面赤彩
SE40	1	須恵器甕	－	(7.1)	－	ＢＥＦ	Ⅰ	5PB4/1	－	南比企産、波状文、内面転用か？
SE41	1	須恵器埦	(17.0)	(4.8)		ＦＨ	Ⅰ	N5/0	10	南比企産
	2	須恵器坏	－	(3.1)	(7.0)	ＣＦ	Ⅲ	2.5Y7/1	20	南比企産、体部下位、底部周辺ヘラ削
	3	須恵器甕	(26.0)	(6.7)	－	ＢＥＦ	Ⅰ	5GY4/1	15	南比企産
	4	板材	長14.1	幅3.4	厚0.3					
	5	板材	長8.4	幅3.0	厚0.2					
SE42	1	須恵器坏	－	(2.3)	(7.5)	ＥＦＪ	Ⅰ	10Y5/1	15	南比企産、周辺ヘラ削り
	2	須恵器甕	－	(4.4)	－	ＣＦＨ	Ⅰ	10Y5/1	－	南比企産、平行叩き、青海波紋
	3	板材	長10.0	幅1.4	厚0.6					
	4	竹製品	長13.8	幅1.2	厚0.3					
SE 6	1	かわらけ	(16.0)	2.7	10.8	ＡＧＨ	Ⅰ	10YR7/4	20	ロクロ成形
SE22	1左	竹箸	長25.8	幅0.7	厚0.6					
	1右	竹箸	長25.5	幅0.7	厚0.4					
	2	折敷	長22.0	幅2.7	厚0.5					
SE23	1	青磁碗	(15.0)	(2.6)	－	Ｈ	Ⅰ	7.5Y7/1	7	中国製、鎬蓮弁文、釉色５Ｙ５／２
	2	かわらけ	－	(2.0)	7.2	Ａ	Ⅱ	10YR8/1	90	ロクロ成形
SE26	1	須恵器甕	－	(6.3)	－	ＣＦ	Ⅰ	7.5Y4/1	－	南比企産
	2	甕	－	(6.3)	－	－	Ⅰ	N6/	7	常滑焼
	3	片口鉢	(27.0)	(4.3)	－	Ｂ	Ⅰ	N5/･N3/	10	常滑焼
	4	砥石	長16.0	幅5.1	厚3.9					チャート製
	5	曲物底板	18.2	－	1.7					
SE50	1	片口鉢	(21.0)	(3.9)	－	ＢＥＧ	Ⅰ	7.5Y7/1	12	在地産瓦質
	2	片口鉢	－	(5.2)	(10.0)	ＢＧ	Ⅰ	10Y5/1	20	常滑焼
	3	大甕	－	－	－	ＣＥＨ	Ⅰ	N5/0	－	
	4	鞴羽口	残高5.6	短径3.4		ＢＥＧ	Ⅲ	2.5Y6/2	80	
SE57	1	片口鉢	(30.8)	(9.5)		ＢＧ	Ⅰ		25	須恵質・山茶碗系
	2	片口鉢	(31.6)	(9.1)		ＢＧＪＬ	Ⅰ	10YR5/1	12	常滑焼
	･3	砥石	長6.0	幅4.5	厚2.0	Ｋ	Ⅱ	2.5Y8/2	－	鋳型転用
SE62	1	須恵器坏	－	(1.3)	(5.8)	ＣＦＪ	Ⅰ	N5/0	35	南比企産
	2	青磁碗	－	－	－	Ｇ	Ⅰ	5Y8/2	－	外面鎬蓮弁文、釉色うすい鶯色
	3	捏鉢	(19.8)	(4.4)	－	ＢＧ	Ⅰ	5YR5/3	15	土師質
	4	堅杵	長75.4	杵径7.0	握17.1	径4.2				
	5	折敷未製品	長18.4	幅1.6	厚0.3					
	6	折敷	長35.1	幅4.0	厚0.2					
SE 7	1	須恵器坏	－	(2.9)	(8.2)	ＢＦ	Ⅱ	N6/0	20	南比企産、周辺ヘラケズリ
	2	片口鉢	(17.2)	6.4	(10.0)	ＢＣ	Ⅰ	N6/	25	山茶碗系
	3	小皿	(11.0)	(1.8)	－	Ｂ	Ⅰ	5Y8/1	－	志野焼、白色長石釉
	4	擂鉢	－	(3.1)	(10.0)	－	Ⅰ	2.5Y8/2	30	瀬戸美濃系
	5	擂鉢	－	(6.9)	(11.8)	ＢＥＧ	Ⅱ	7.5YR4/2	20	在地産土師質
	6	板碑	長33.9	幅27.0	厚2.4					緑泥片岩
	7	板碑	長15.8	幅6.8	厚1.9					緑泥片岩、重量300g
	8	蘇民将来符２	長3.9	上径1.7	下径2.1					
	9	蘇民将来符１	長4.1	上径1.6	下径2.1					
	10	漆器椀	14.6	7.7	8.0				100	外黒漆、内朱漆塗り
	11	漆器椀	－	(3.0)	7.4					広面絵あり
	12	刎板	長11.8	幅4.1	厚0.8					
SE 9	1	かわらけ	－	(1.7)	5.8	Ｇ	Ⅰ	7.5YR6/4	90	ロクロ成形
	2	かわらけ	－	(1.3)	5.8	ＡＧＨ	Ⅱ	10YR6/3	50	ロクロ成形
	3	板碑	長18.0	幅5.7	厚6.0					緑泥片岩、重量110g
	4	板碑	長37.5	幅27.8						緑泥片岩、重量4.1kg
SE11	1	かわらけ	(12.0)	(2.3)	－	ＥＧＨ	Ⅰ	10YR6/2	15	ロクロ成形
	2	土錘	長2.7	径0.9		Ｅ	Ⅱ	2.5Y7/2		
	3	漆器椀	13.0	(6.0)	－				50	文様あり、内面朱塗り
	4	漆器椀	－	(3.7)	7.6				90	高台部のみ
	5	漆器椀	(14.0)	(5.5)	－				25	
	6	板碑	長14.5	幅9.5	厚1.8					絹雲母片岩、重量440g
SE12	1	鉄釉香炉	(15.2)	(4.5)	－	Ｋ	Ⅰ	5Y8/1	15	瀬戸美濃系、釉色５YR３／６
	2	青磁皿	－	(3.2)	(7.2)	Ｇ	Ⅰ	N7/	25	蓮弁文施文、釉色106Ｙ７／１
	3	端反り碗	12.2	7.4	4.6	Ｅ	Ⅰ	５Ｙ８／１	70	瀬戸美濃系、天目釉

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
	4	天目茶碗	(12.4)	(6.2)	—	EH	I	5Y8/1	20	瀬戸美濃系、釉色黒地に銹色
SE19	1	須恵器蓋	—	(1.7)	—	AEF	Ⅲ	7.5YR6/4	95	南比企産、つまみ径2.5
	2	板碑	長12.6	幅7.8	厚2.0					絹雲片岩、重量260g
SE27	1	鉄釉碗	(10.0)	4.4	—	H	I	7.5Y8/1	10	瀬戸美濃系、銹釉
SE30	1	かわらけ	—	(2.4)	6.0	FGH	I	7.5YR7/4	80	ロクロ成形
	2	かわらけ	7.4	2.3	3.8	BFGH	I	10YR6/3	70	比企産、ロクロ成形
	3	土釜	(14.0)	(8.2)	—	BDEG	I	10Y5/1	25	瓦質
	4	漆器椀	15.0	8.4	6.4					47・49
	5	石棒	長9.6	幅2.9	厚2.6					縄文時代、片麻岩製
	6	丸杭	長18.4	直径2.6						
	7	丸杭	長18.7	直径2.6						
SE29	1	かわらけ	—	(2.5)	6.5	EG	I	10YR4/2	50	ロクロ成形
SE31	1	板碑	長24.6	幅19.0	厚2.0					点紋緑泥片岩、重量1.3kg
	2	板碑	長8.2	幅6.3	厚5.0					絹雲母片岩、重量40g
	3	砥石	長14.0	幅7.0	厚2.2					青緑色点文緑泥片岩製、板碑転用、重量235g
	4	砥石	長16.5	幅5.0	厚4.5					緑灰色凝灰岩製、重量447g
SE32	1	板碑	長40.2	幅15.3	厚2.2					緑泥片岩、重量2.5kg
SE33	1	かわらけ	10.8	2.7	6.0	AGHK	I	10YR6/3	100	ロクロ成形
	2	かわらけ	8.4	2.3	3.0	EFG	I	10YR6/3	100	ロクロ成形、漆付着
	3	曲物底板	直径17.5	厚0.8						俎板に転用している
SE35	1	板碑	長14.9	幅13.0	厚1.9					絹雲母片岩、重量625g
	2	板碑	長14.5	幅13.0	厚2.5					緑泥片岩、重量720g
	3	砥石	長5.0	幅4.0	厚0.6					粘板岩製、硯転用、墨付着
SE36	1	板碑	長7.1	幅3.0	厚0.8					絹雲母片岩、重量30g
	2	竹筒	長8.1	直径3.0	厚0.2					
	3	曲物底板	直径(21.0)	厚1.0						
SE43	1	砥石	長9.7	幅12.5	厚0.9		I	7.5Y8/1		瀬戸産、擂鉢転用、鉄釉
	2	砥石	長5.4	幅7.5	厚0.8		I	7.5Y8/1		瀬戸産、擂鉢転用
	3	焙烙	(33.0)	5.4	(29.0)	EG	I	10Y7/1	20	内耳は2個1対
	4	漆器皿	—	(1.4)	6.4					
SE44	1	焙烙	(33.5)	5.3	(32.0)	ADEGH	I	5YR6/3	20	
	2	古銭	外径2.51	内径2.08	厚0.13					天禧元寶(1017年)、重量3.8g
	3	砧石	長15.3	幅7.8	厚4.5				100	2.5GY5／1の硬砂岩製、重量1310g
SE46	1	須恵器長頸瓶	—	(7.4)	—	BCEF	I	5YR6/1	60	南比企産
	2	砧石	長15.0	幅4.3	厚2.3				100	灰黒色粘板岩製
	3	曲物底板	直径20.4	厚0.8					100	
SE48	1	古銭	外径2.72	内径不明	厚0.17					竜一銭銅貨、重量5.8g
	2	板碑	長33.2	幅14.8	厚2.2					緑泥片岩、重量1.9kg
	3	板碑	長28.9	幅11.6	厚2.0					緑泥片岩、重量1.2kg
SE61	1	砥石	長17.7	幅14.0	厚1.8					青緑色緑泥片岩製、板碑転用、重量860g
SE13	1	鉄釉香炉	12.9	(7.1)	—	G	I	2.5Y1/2	10	瀬戸美濃系、釉色2.5Y5／6
	2	染付碗	11.0	(5.0)		H	I	N8/0	20	肥前系
	3	擂鉢	25.2	(8.6)		AG	I	7.5Y8/1	12	瀬戸美濃系、暗褐色鉄釉
	4	大鉢		(3.1)	11.6	—	I	2.5YR5/2	10	渥美焼
	5	丸瓦	厚2.6			EG	I	N4/	—	
	6	板碑	長17.5	幅9.6	厚2.5					重量675g
	7	砥石	長10.2	幅2.9	厚3.3					凝灰岩製
SE18	1	陶器碗	9.9	(3.2)	—	H	I	5Y8/1	25	志野焼、長石釉施釉
	2	矢筈	長3.3	直径1.2						
SE20	1	青磁染付碗	8.0	(4.8)		CE	I	7.5Y6/	20	肥前系、青磁釉、釉色2.5Y6／1
	2	擂鉢	—	(7.2)	14.4	H	I	10R4/4	25	江戸系、赤褐色鉄釉
	3	井戸筒	長11.1	幅7.0	厚0.8					(欅刳り抜き)
	4	井戸筒	長19.8	幅12.0	厚1.1					(欅刳り抜き)
	5	四つ割杭	長44.0	幅6.5	厚4.5					
SE28	1	漆器椀	12.4	5.6	8.0					
SE34	1	軒桟瓦	29.0	4.0	2.0	H	I	7.5YR4/1	70	
	2	桑刈り鎌	長10.0	幅11.0	厚0.3					
SE37	1	灰釉小坏	(6.0)	—	—	H	I	2.5Y8/2	10	瀬戸美濃系
	2	平瓦	長12.0	幅8.0	厚1.5	EJ	I	5Y5/1	—	
	3	擂鉢	—	(8.5)	12.8	BH	I	2.5YR4/4	15	堺産か

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SE37	4	焙烙	32.4	5.3	30.0	E G	I	5Y7/1	—	
	5	板碑	長14.8	幅9.0	厚2.2					緑泥片岩、重量430g
	6	自在鍵	長22.5	幅3.4	厚2.0					木部扇形、先端部に釘残存
SE38	1	染付半筒茶碗	—	—	—	B	I	10Y7/1	15	肥前系、外面菊花散文
	2	染付碗	(10.0)	3.6	—	B	I	10Y7/1	30	肥前系
	3	染付爛徳利	3.2	(13.2)	—	B	I	10Y7/1	80	肥前系
	4	桶の底板	直径22.1	厚0.8						
SE45	1	擂鉢	27.0	(6.7)	—	—	I	7.5YR7/6	12	瀬戸美濃系、内外面鉄釉
SE60	1	須恵器坏	13.1	4.1	5.6	A E F	Ⅲ	2.5Y8/2	80	南比企産
	2	須恵器皿	(14.2)	2.8	6.1	B C E F	Ⅲ	2.5Y8/1	65	南比企産
	3	土師器台付甕	—	(3.9)	—	A B D E	Ⅱ	7.5YR5/4	35	
	4	土師器甕	(21.4)	(5.2)	—	A B D E	Ⅱ	5YR5/6	20	
	5	大甕	—	—	—	B	I	10YR3/1	—	渥美焼
	6	灰釉皿	13.6	3.1	6.4	H	I	5Y8/1	50	瀬戸美濃系、口縁部7.5Y 6 ／ 2 施釉
	7	灰釉皿	14.0	3.1	6.6	H	I	2.5Y8/2	10	
	8	椀形滓	長12.7	幅10.4	厚5.3					重量923g
	9	砥石	長9.1	幅2.7	厚3.3					暗緑灰色の凝灰岩製、重量115.4g
	10	石臼	31.0	(10.4)	30.0				12	上臼、暗紫灰色の溶結凝灰岩製

5　土壙

（1）古代の土壙

第23号土壙（第99図）

本土壙はF－14グリッド（A1区南部）に位置する。第13号溝に切られている。平面形は円形を呈する。規模は0.8m×0.75mで、深さ0.38mである。出土遺物に赤焼の須恵器坏底部があり、糸切離しされている。時期は9世紀後半ころまで下降すると考えられる。

第47号土壙（第101図）

本土壙はF－15グリッド（A 1区東部）に位置する。平面形は隅円長方形を呈する。規模は1.65m×0.55mで、深さ0.04mである。主軸方向はN－40°－Eを示す。1は南比企窯跡群産の須恵器坏である。時期は9世紀代と考えられる。

第48号土壙（第101図）

本土壙はF－15グリッド（A1区東部）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.8m×0.65mで、深さ0.1 m である。覆土には焼土ブロックと土師器片を多量に含んでいた。1は南比企窯跡群産の須恵器坏で、底部は回転糸切離し。口縁部内側の一個所に油煙が付着している。2は南比企窯跡群産の須恵器坏底部で、回転糸切離し。3は土師器甕の上半部で、口縁部がコ字形に屈曲する。体部は外面を削り込んで薄く仕上ている。口縁部内側に漆らしきものが付着している。4は土師器甕下半部で、外面は縦方向に削られている。時期は9世紀代と考えられる。

第53号土壙（第101図）

本土壙はF－14グリッド（A 1区中央部）に位置する。平面形は不整長方形を呈する。規模は0.95m×0.5 m で、深さ0.33 m である。主軸方向はN－40°－Eを示す。出土遺物は少ないが、須恵器坏片9.9 g と土師器甕片14.7 g があり、遺構の時期は古代と見て良いだろう。

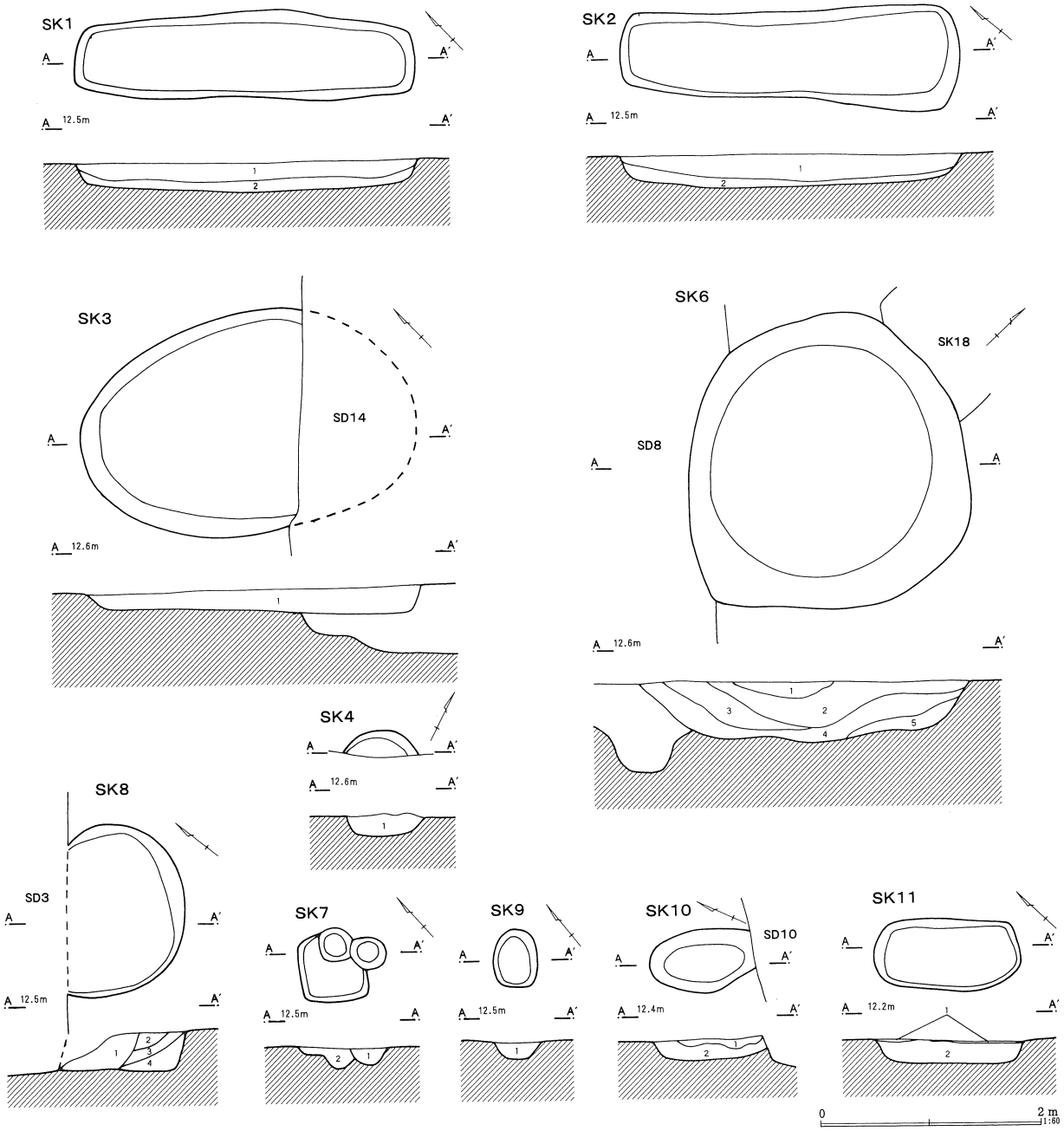
第54号土壙（第101図）

本土壙はF－14グリッド（A 1区南部）に位置する。第55号土壙に切られている。平面形は隅円長方形を呈する。規模は1.35 m×0.35 m で、深さ0.15 m である。主軸方向はN－25°－E を示す。覆土には焼土小ブロックと炭化物を多量に含んでいた。1は南比企窯跡群産の須恵器坏で、底部は回転糸切離し。内外面に漆が付着している。他に土師器甕片13 g が出土している。時期は9世紀代と考えられる。

第55号土壙（第101図）

本土壙はF－14グリッド（A 1区南部）に位置する。第54号土壙を切っている。平面形は卵形を呈する。規模は0.6m×0.3mで、深さ0.1mである。主軸方向はN－25°－E を示す。出土遺物に須恵器坏片1点11.6

第98図　土壙(1)



第1号土壙
1　黄灰色シルト　鉄分多量、白色粒子少量。
2　暗灰色シルト　鉄分多量、白色粒子少量。

第2号土壙
1　黄灰色シルト　鉄分多量、白色粒子少量。
2　暗灰色シルト　鉄分多量、白色粒子少量。

第3号土壙
1　暗オリーブ色土　砂粒少量、鉄分粒多量、粘性弱。

第4号土壙
1　暗オリーブ褐色粘土　黄褐色ブロック・暗灰黄ブロック多量、粘性強。

第6号土壙
1　暗灰黄色シルト　炭化物若干、粘性強、しまり強。
2　暗灰黄色シルト　ロームブロック・炭化物若干、粘性強、しまり強。
3　オリーブ褐色砂質シルト　炭化物極少量、粘性強、しまり強。
4　暗灰黄色シルト　焼土ブロック少量・ロームブロック若干、粘性強、しまり強。
5　オリーブ褐色シルト　焼土ブロック・炭化物若干、粘性強、しまり強。

第7号土壙
1　黒褐色シルト　鉄分・炭化粒子少量。
2　黄灰色シルト　鉄分多量。

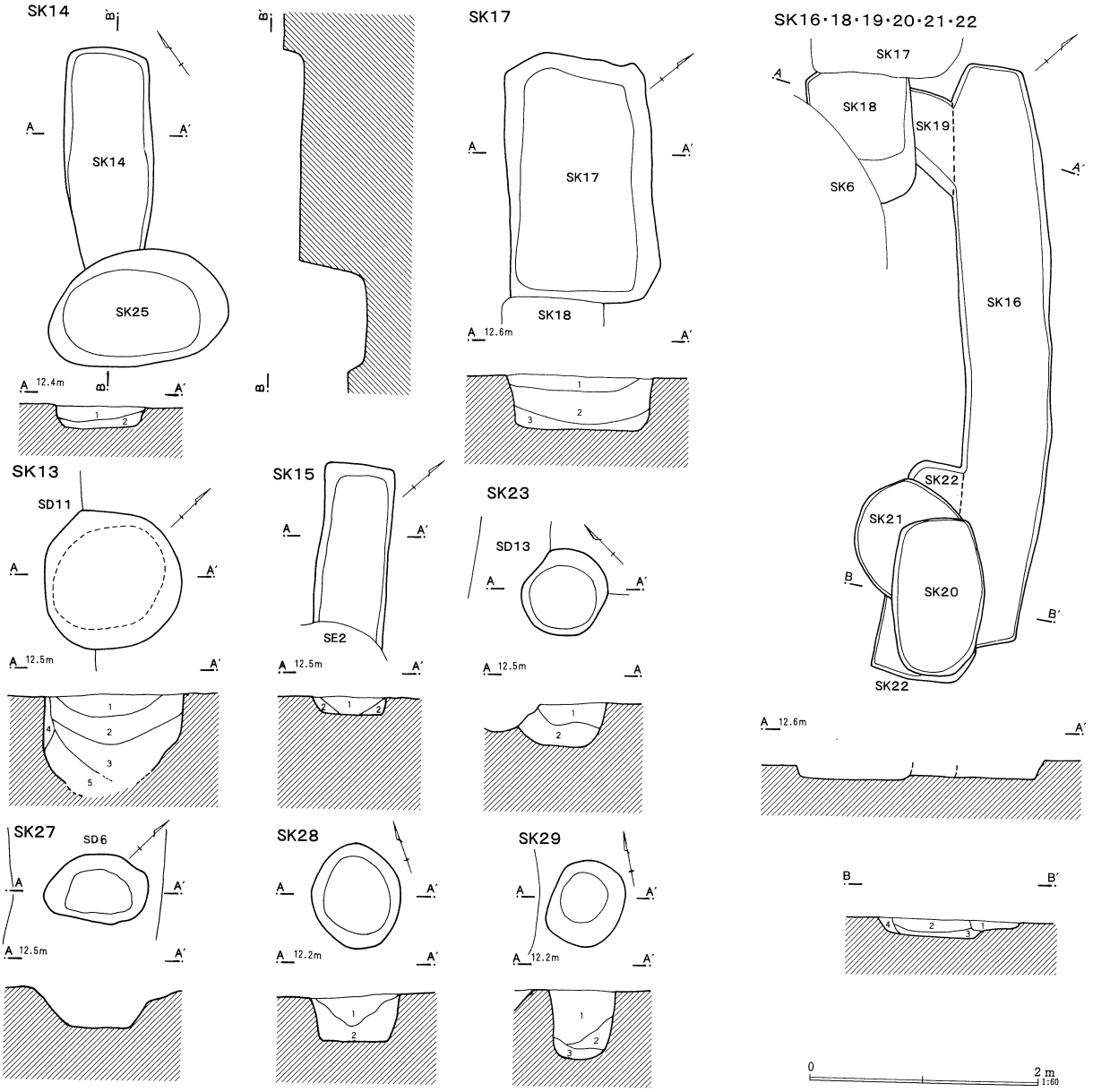
第8号土壙
1　褐灰色シルト　鉄分多量、炭化粒子・焼土粒子少量。
2　灰色シルト　鉄分多量、炭化粒子少量。
3　黄灰色シルト　鉄分多量、炭化粒子・焼土粒子少量。
4　黄灰色シルト　鉄分多量、焼土粒子少量、粘性極強。

第9号土壙
1　灰色シルト　鉄分多量。

第10号土壙
1　黄灰色土　焼土粒子・炭化粒子少量。
2　オリーブ褐色土　黄灰粒子少量。

第11号土壙
1　黄灰色シルト　炭化物微量・粘性強、しまり強。
2　灰色砂質シルト　炭化物少量・粘性強、しまり強。

第99図　土壙(2)



第 13 号土壙
1　オリーブ褐色シルト　焼土・炭化物極少量、粘性強、しまり強。
2　オリーブ褐色シルト　焼土ブロック少量・炭化物少量、粘性強、しまり強。
3　オリーブ褐色シルト　焼土ブロック少量・炭化物少量、粘性強、しまり強。
4　褐灰色シルト　ロームブロック多量・炭化物少量、粘性強、しまり強。
5　褐灰色シルト　ロームブロックやや多量・焼土ブロック若干、粘性強、しまり強。

第 14 号土壙
1　褐灰色シルト　鉄分多量・炭化粒子少量。
2　明黄褐色シルト　黄褐色ブロック・鉄分多量(地山崩落土)。

第 15 号土壙
1　灰黄褐色シルト　炭化粒子少量。
2　黒褐色シルト　炭化粒子・焼土粒子少量。

第 17 号土壙
1　褐灰色シルト　鉄分・炭化粒子多量。
2　灰黄褐色シルト　鉄分・黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量。
3　灰色砂質シルト　鉄分多量・細砂・炭化粒子少量。

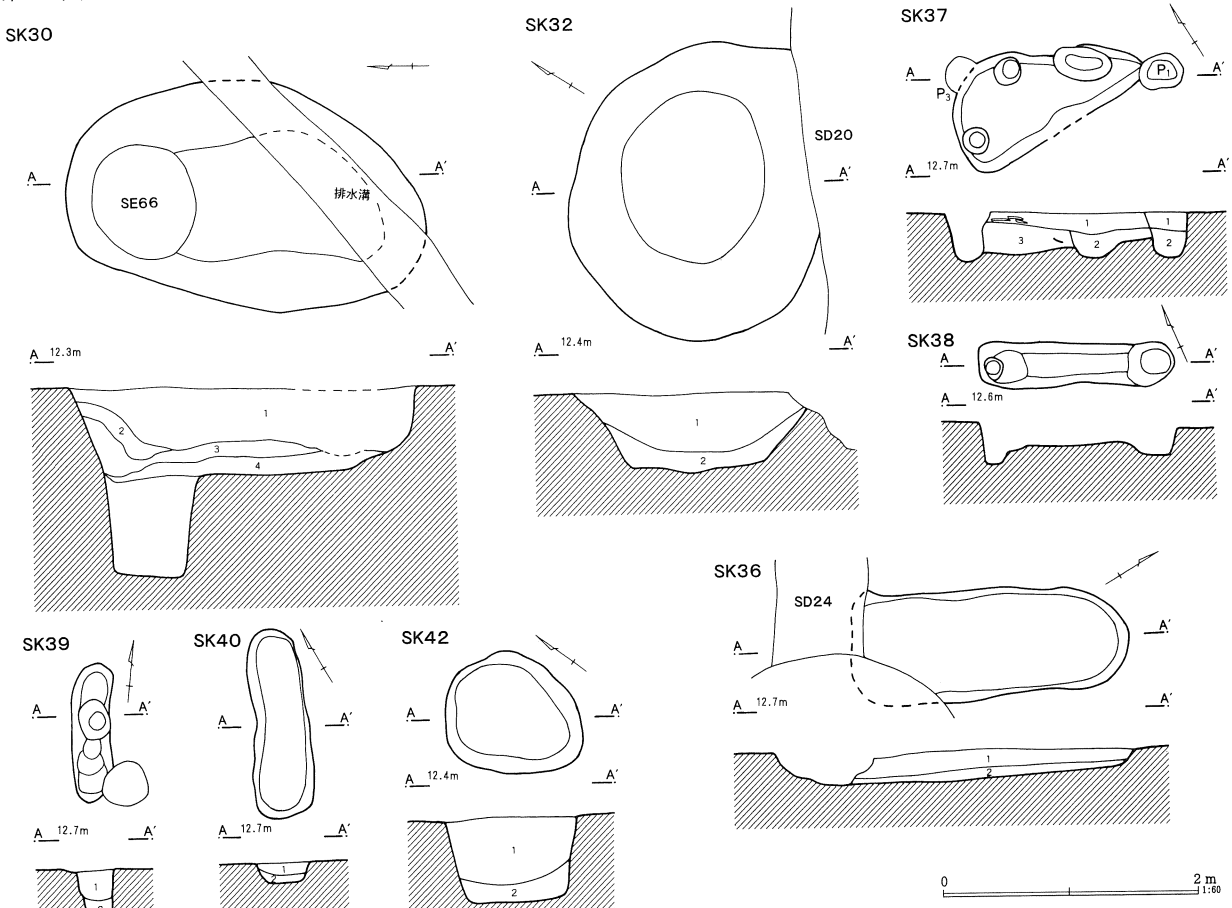
第 16・20・21・22 号土壙
1　黄灰色シルト　鉄分多量、炭化粒子少量。
2　褐灰色シルト　鉄分多量、炭化粒子、焼土粒子少量。
3　灰色シルト　鉄分多量、炭化粒子多量。
4　灰黄褐色シルト　鉄分多量、炭化粒子少量。

第 23 号土壙
1　黄灰色粘土　シルト質、粘性強、しまり強。
2　黒色粘土　シルト質、ロームブロック微量、焼土ブロック少量、粘性強、しまり強。

第 28 号土壙
1　灰褐色粘土　褐色粒子・炭化物粒子、灰黄褐色土小ブロック混入、粘性強、しまり強。
2　灰褐色粘土　褐色粒子・炭化物粒子、灰黄褐色土小ブロック多量混入、粘性強、しまり強。

第 29 号土壙
1　灰褐色粘土　褐色粒子・少量の炭化物粒子、灰黄褐色土多量混入、粘性強、しまり強。
2　灰黄褐色粘土　褐色粒子、灰黄褐色土粒子多量混入、粘性強、しまり強。
3　灰褐色粘土　褐色粒子・炭化物粒子、灰黄褐色土粒子混入、粘性強、しまり強。

第100図　土壙(3)



第30号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子・褐色粒子多量、明るい灰黄褐色土・褐灰色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまり強。
2　にぶい黄褐色粘性土　褐色粒子、褐灰色土・灰黄褐色土粒子・ブロック混入、粘性やや強、しまり強。
3　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、褐灰色土・にぶい黄褐色粒子少量混入、粘性やや強、しまり強。
4　暗緑灰色粘土　炭化物少量、緑灰色土ブロック混入、粘性強、しまり強。

第32号土壙
1　灰褐色粘土　褐色粒子・炭化物粒子少量・焼土粒子、灰黄褐色土粒子・ブロック・大ブロック多量混入、粘性強、しまり強。
2　褐灰色土　褐色粒子多量、焼土粒子少量。

第36号土壙
1　灰黄褐色粘土　粘性強、しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘土　粘性強、しまりやや強。

第37号土壙
1　オリーブ灰色粘性土　灰オリーブシルトブロック・大粒焼土粒子・炭化物やや多量、粘性・しまりやや強。
2　オリーブ灰色粘性土　大粒焼土粒子やや多量、粘性やや強、しまり中。
3　明オリーブ灰色シルト　大粒焼土粒子・炭化物やや多量、遺物強、粘性弱、しまりやや強。

P1
1　黄褐色粘性土　焼土粒子少量、粘性やや強、しまり中。
2　黄灰色粘土　淡黄色粘土小ブロック多量、粘性強、しまりやや強。

第39号土壙
1　にぶい黄色粘土　粒土ブロック多量、暗灰黄色土少量、粘性・しまり強。
2　黒褐色粘土　にぶい黄色粘土ブロック多量、粘性・しまり強。

第40号土壙
1　暗灰黄色粘土　粘性やや強、しまり強。
2　黄灰色粘土　粘性・しまりやや強。

第42号土壙
1　褐灰色粘性土　褐色粒子・炭化物粒子、灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　褐色粒子・炭化物粒子、植物性の繊維、灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。

g と土師器甕片 9.5 g がある。遺構の時期は第54号土壙に近接する時期と考えられる。

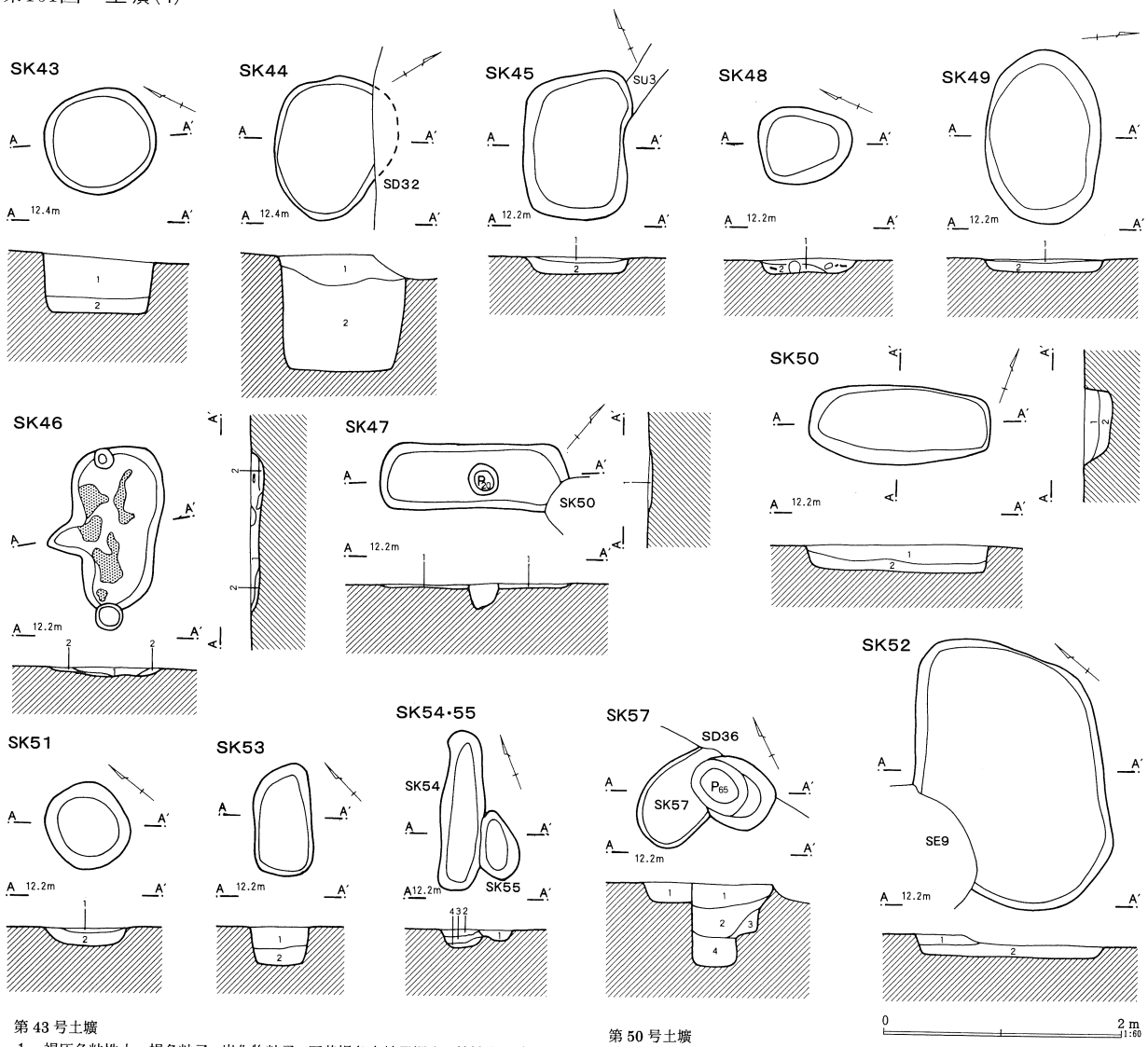
第57号土壙（第101図）

本土壙は G－13グリッド（A 2区東部）に位置する。第65号柱穴に切られている。平面形は楕円形を呈する。規模は0.95m×0.55mで、深さ0.19mである。1は南比企窯跡群産の須恵器坏で、底部は回転糸切離し後、周辺部を回転ヘラケズリしている。遺構の時期は8世紀後半代と考えられる。

第71号土壙（第102図）

本土壙は E－10グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.9m×0.85mで、深さ1.22mであ

第101図　土壙(4)



第 43 号土壙
1　褐灰色粘性土　褐色粒子・炭化物粒子、灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　褐色粒子・炭化物粒子、植物性の繊維、灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。

第 44 号土壙・32 号溝
1　褐灰色粘性土　褐色粒子・炭化物粒子含む、灰黄褐色土粒子を混入、粘性やや強、しまり強。
2　黄灰色粘性土　褐色粒子・炭化物粒子含む、灰黄褐色土・灰黄褐色土粒子を混入、粘性やや強、しまり強。

第 45 号土壙
1　暗オリーブ灰色粘性土　焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　オリーブ灰色粘性土　焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。

第 46 号土壙
1　灰色粘土　焼土ブロック・炭化物少量、土師器・須恵器少量含む、粘性・しまり強
2　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。

第 47 号土壙
1　灰オリーブ色粘性土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。

第 48 号土壙
1　灰色粘性土　焼土ブロック・炭化物・土師器片多量、粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子少量、土師器片多量、粘性・しまりやや強。

第 49 号土壙
1　灰色粘性土　焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。

第 50 号土壙
1　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　焼土粒子、粘性やや強、しまり中。

第 51 号土壙
1　灰色粘性土　焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土粒子微量、粘性やや強、しまり強。

第 52 号土壙
1　オリーブ黒色粘性土　粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性・しまりやや強。

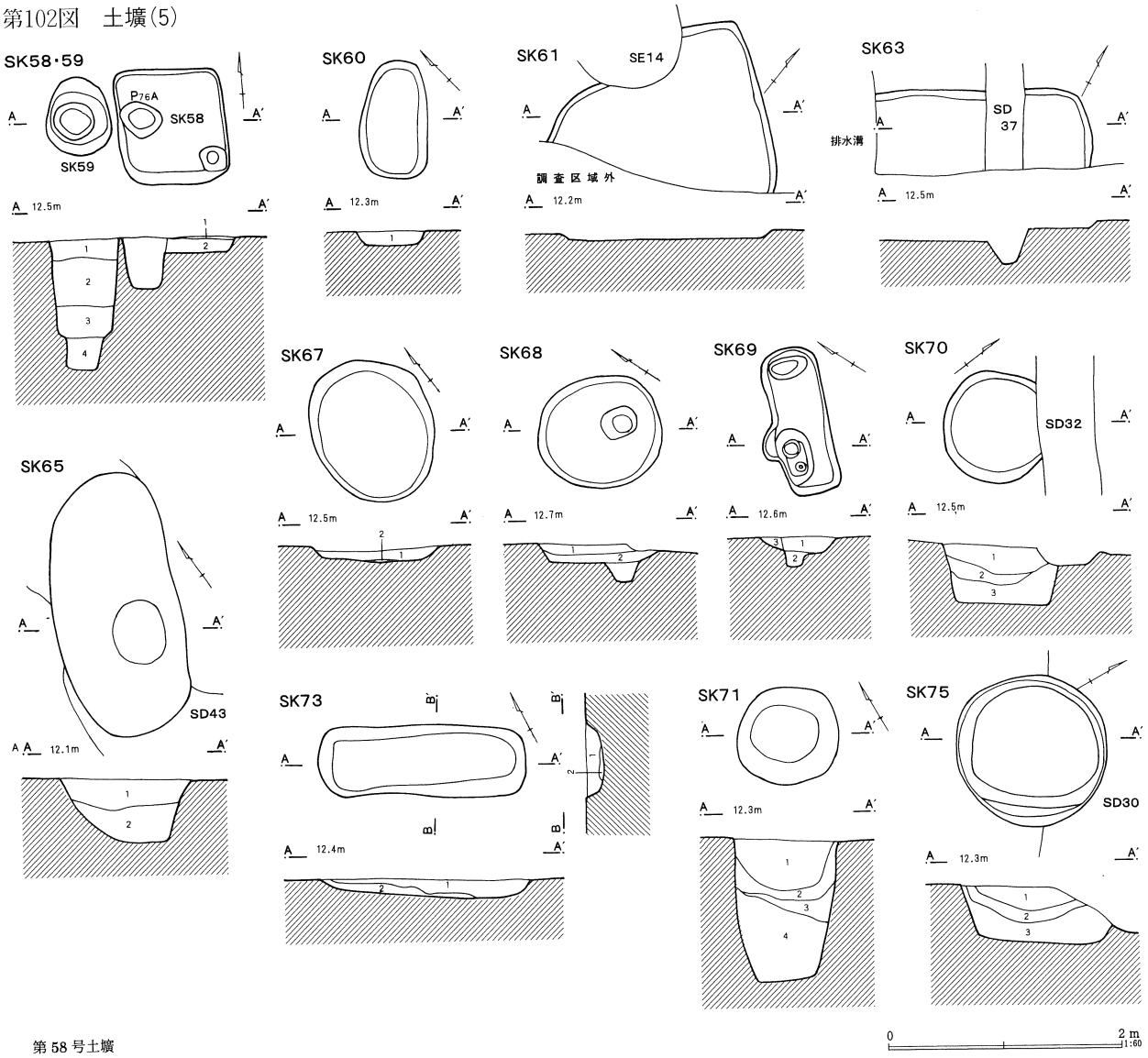
第 53 号土壙
1　灰オリーブ色粘性土　焼土ブロック少量、粘性・しまりやや強。
2　灰色粘土　鉄斑少量、粘性強、しまり弱。

第 54・55 号土壙
1　灰色粘性土　焼土少ブロック・炭化物やや多量、粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土少ブロック・炭化物やや多量、粘性やや強、しまり強。
3　オリーブ黒色粘性土　焼土粒子少量、炭化物多量、粘性やや強、しまり中。
4　灰オリーブ色粘土　炭化物少量、粘性強、しまり中。

第 57 号土壙
1　灰色粘性土　シルト多量、焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。

P_{65}
1　灰色粘性土　焼土小ブロック少量、粘性・しまりやや強。
2　オリーブ黒色粘性土　焼土・炭化粒子少量、粘性やや強、しまり中。
3　灰色粘性土　粘性やや強、しまり中。
4　黒色粘土　粘性強、しまり中。

第102図　土壙(5)



第 58 号土壙
1　緑黒色粘土　粘性強、しまり弱。
2　暗青灰色粘土　粘性強、しまり弱、砂粒子少量。

第 59 号土壙
1　オリーブ黒色粘性土　灰オリーブ色粘性土少ブロック強、焼土少ブロック少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性・しまりやや強
3　灰色粘性土　焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
4　灰オリーブ色粘性土　焼土少ブロック炭化物少量、粘性やや強、しまり強。

第 60 号土壙
1　灰オリーブ色シルト　炭化物粒子少量、粘性弱、しまりやや強。

第 65 号土壙
1　灰オリーブ色粘土　木など有機物と陶磁器類あり、粘性強、しまり中。
2　暗オリーブ灰色粘土　有機物多量、粘性強、しまり欠。

第 67 号土壙
1　灰色粘性土　浅黄色シルトブロック少量、粘性やや強、しまり中。
2　暗オリーブ灰色粘土　鉄分粒少量、粘性強、しまりやや強。

第 68 号土壙
1　灰色粘土　浅黄色シルト多量、粘性・しまり強。
2　灰色シルト　浅黄色シルトブロック少量、粘性中・しまり強。

第 69 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　褐色粒子・暗褐色粒子多量、黄褐色土粒子ブロック少量混入、粘性やや強、しまりやや強。
2　灰黄褐色粘性土　褐色粒子・暗褐色粒子多量、の焼土粒子少量、微量の黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまりやや強。
3　灰黄褐色粘性土　褐色粒子・暗褐色粒子、黄褐色ブロック多量混入、粘性やや強、しまりやや強。

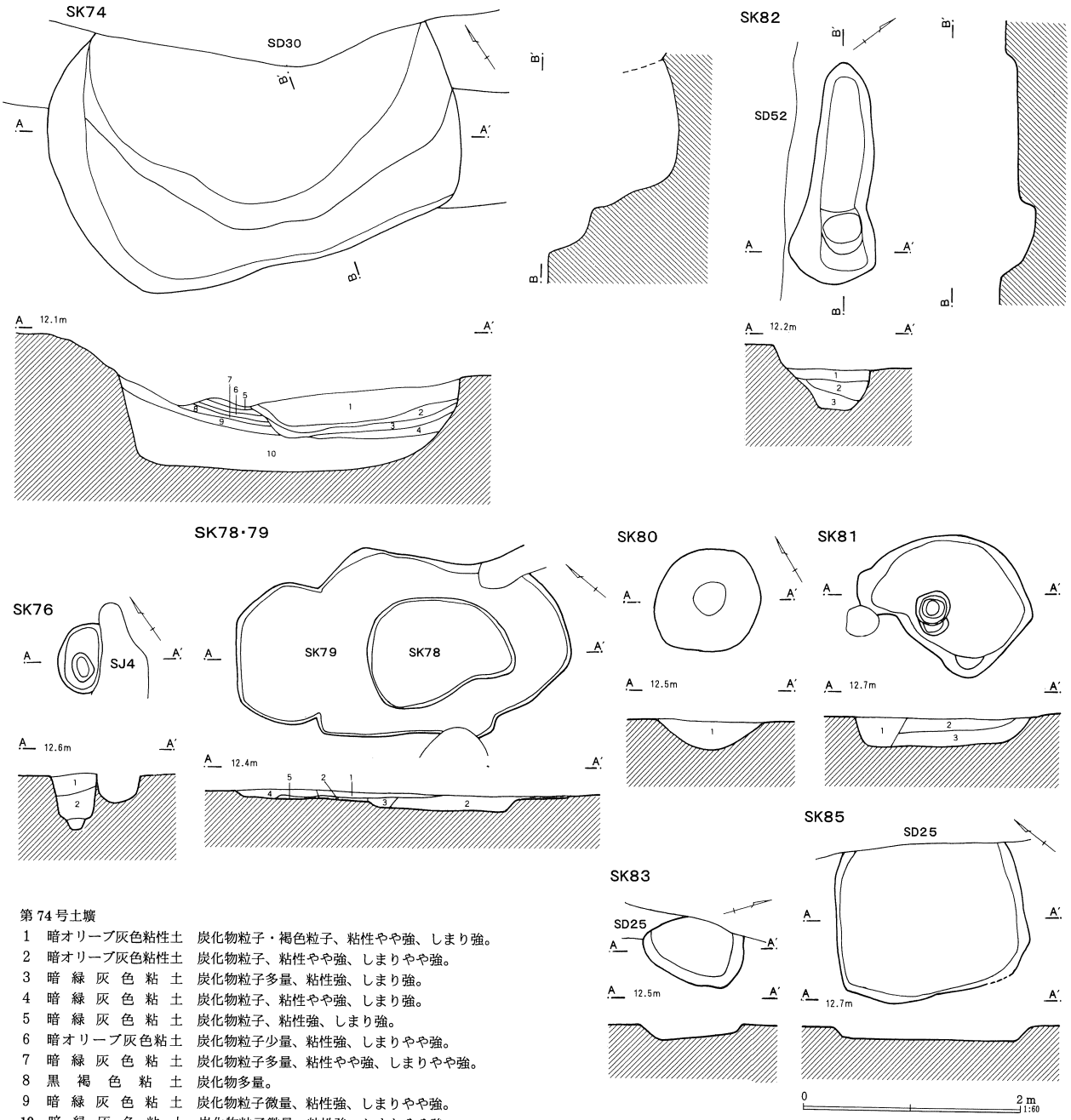
第 70 号土壙
1　灰黄褐色粘土　焼土粒子・炭化物粒子少量、褐色粒子多量、暗灰黄色土粒子混入、粘性強、しまりやや強。
2　暗灰黄色粘性土　褐色粒子多量、粘性やや強、しまりやや強。
3　灰黄褐色粘性土　褐色粒子多量・暗褐色粒子多量、やや強、しまりやや強。

第 71 号土壙
1　灰黄色粘土　褐色粒子、灰色土粒子少量混入、粘性強、しまりやや強。
2　灰黄褐色粘土　炭化物少量、褐色多量、黒褐色粘質土多量混入、粘性強、しまりやや強。
3　灰色粘土　炭化物粒少量、褐色粒少量、灰黄褐色土少量混入、粘性強、しまりやや強。
4　灰色粘土　炭化物粒少量、黒褐色粘質土少量混入、粘性強、しまりやや強。

第 73 号土壙
1　暗灰黄色シルト　炭化物・焼土粒子少量、粘性中、しまり強。
2　灰オリーブ色シルト　部分的に炭化物集中、粘性中、しまり強。

第 75 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒・炭化物粒少量、褐色粒多黄灰色土少量混入、粘性やや強、しまりやや強。
2　灰黄褐色粘性土　炭化物粒少量、褐色多量、黄灰色土少量混入、粘性やや強、しまりやや強。
3　暗黄灰色粘性土　炭化物少量、褐色多量、黄灰色土少量混入、粘性やや強、しまりやや強。

第103図　土壙(6)



第74号土壙
1　暗オリーブ灰色粘性土　炭化物粒子・褐色粒子、粘性やや強、しまり強。
2　暗オリーブ灰色粘性土　炭化物粒子、粘性やや強、しまりやや強。
3　暗緑灰色粘土　炭化物粒子多量、粘性強、しまり強。
4　暗緑灰色粘土　炭化物粒子、粘性やや強、しまり強。
5　暗緑灰色粘土　炭化物粒子、粘性強、しまり強。
6　暗オリーブ灰色粘土　炭化物粒子少量、粘性強、しまりやや強。
7　暗緑灰色粘土　炭化物粒子多量、粘性やや強、しまりやや強。
8　黒褐色粘土　炭化物多量。
9　暗緑灰色粘土　炭化物粒子微量、粘性強、しまりやや強。
10　暗緑灰色粘土　炭化物粒子微量、粘性強、しまりやや強。

第76号土壙
1　黒褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子・灰褐色土小ブロック少量、褐色粒子多量、粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子少量、黄褐色土小ブロック・灰色土小ブロック多量、褐色粒子多量、粘性やや強、しまり強。

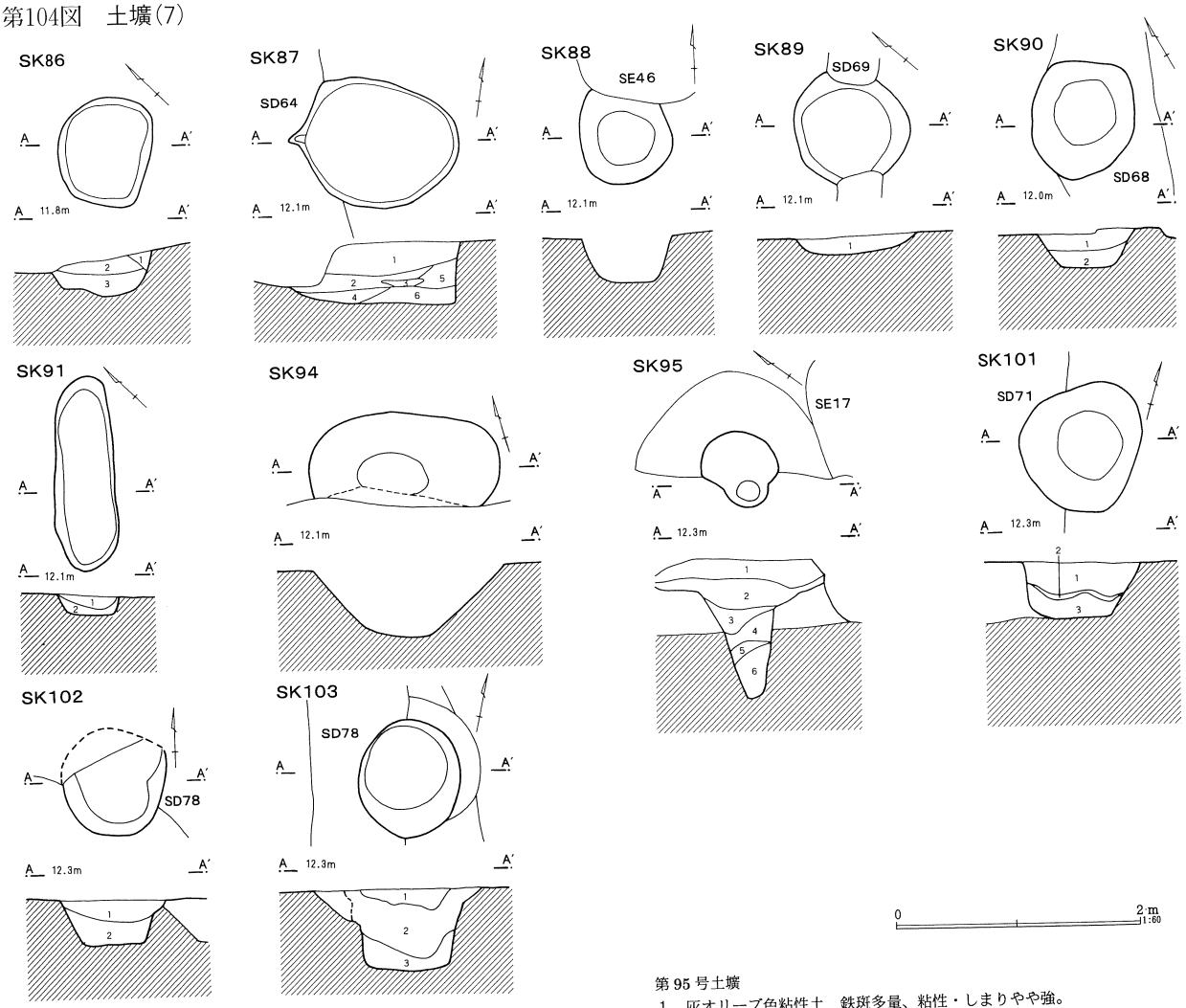
第78・79号土壙
1　オリーブ灰色粘性土　粘性やや強、しまり中。
2　灰色粘性土　上部に縞状の浅く黄色シルト強、粘性強、しまりやや強。
3　灰色粘性土　粘性やや強、しまりやや弱。
4　オリーブ灰色粘性土　鉄分粒子多量、焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
5　灰色粘性土　粘性強、しまり弱。

第80号土壙
1　灰色粘性土　鉄斑少量、粘性やや強、しまり強。

第81号土壙
1　黄灰色土　浅黄色シルト小ブロック多量、焼土粒子少量、粘性中、しまりやや強。
2　灰色粘性土　焼土粒子少量、粘性・しまりやや強。
3　灰色粘性土　浅黄色シルト小ブロック多量、焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。

第82号土壙
1　灰色粘土　鉄斑少量、粘性強、しまり弱。
2　暗青灰色粘土　鉄斑少量、粘性強、しまり欠。
3　暗青灰色砂　粘性・しまり欠。

第104図　土壙(7)



第86号土壙
1　青黒色粘土　粘性強、しまりやや強。
2　灰色粘性土　銭形の鉄斑を全体に含む、粘性やや強、しまり弱。
3　灰オリーブ色粘土　鉄斑と青黒色粘土ブロックを部分的に含む、粘性強、しまり中。

第87号土壙
1　灰色粘土　茶褐色の斑点多量、粘性強、しまりやや強。
2　灰色粘土　鉄斑少量、粘性強、しまり欠。
3　灰色粘土　粘性強、しまり欠。
4　暗青灰色粘土　粘性強、しまり欠。
5　緑灰色砂　粘性弱、しまり中。
6　灰オリーブ色砂　縞状に鉄斑、粘性弱、しまり中。

第88号土壙
1　灰オリーブ色粘性土　茶色の少斑点（マンガン粒か）を全体に多量に含む粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘性土　粘性、しまり共やや強。
3　暗青灰色砂　粘土ブロック少量、粘性、しまり共弱。

第89号土壙
1　灰色粘土　鉄斑、炭化物少量、粘性・しまり強。

第90号土壙
1　灰色粘性土　灰オリーブ色粘土ブロック多量、炭化物・焼土ブロック少量、粘性やや強、しまり中。
2　灰色粘土　灰オリーブ色粘土ブロック少量、炭化物微量、粘性強、しまり弱。

第91号土壙
1　灰オリーブ色シルト　鉄斑、粘性弱、しまり強。
2　灰色粘性土　鉄斑少量、粘性・しまりやや強。

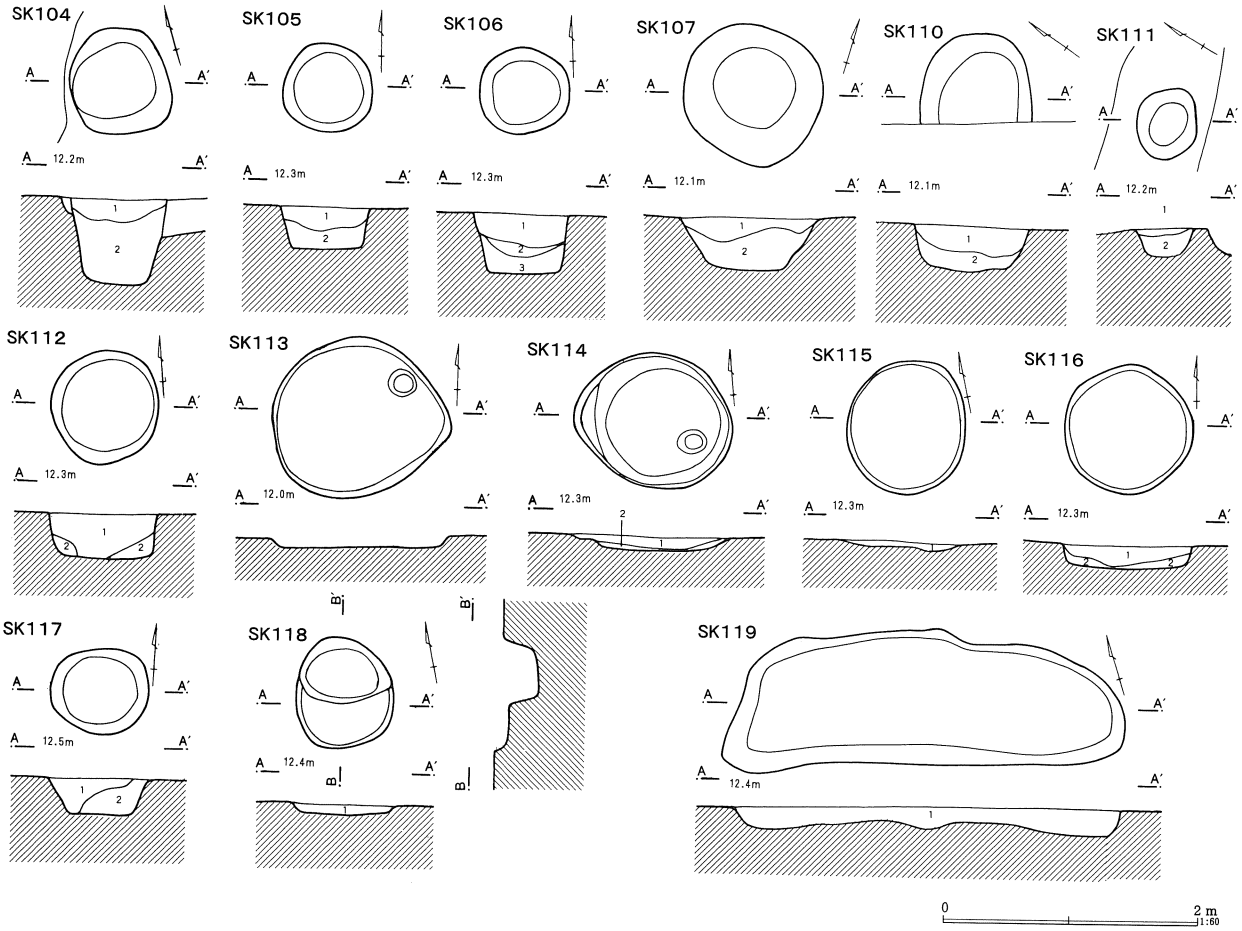
第95号土壙
1　灰オリーブ色粘性土　鉄斑多量、粘性・しまりやや強。
2　灰色粘性土　鉄斑強、灰オリーブ色砂多量、粘性やや強、しまり中。
3　灰色粘土　砂粒少量、粘性強、しまり弱。
4　灰色粘土　砂粒少量、粘性強、しまり欠。
5　暗オリーブ灰色粘土　粘性強、しまり欠。
6　オリーブ褐色砂　灰色粘土少量、粘性弱、しまりやや強。

第101号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子・黄灰色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまり強。
2　にぶい黄褐色粘性土　炭化物粒子少量、褐色粒子多量、灰黄褐色土小ブロック・粒子混入、粘性やや強、しまりやや強。
3　灰黄褐色粘性土　5層よりやや暗い、炭化物粒子・褐色粒子多量、にぶい黄褐色土粒子・小ブロックを少量混入、粘性やや強、しまり強。

第102号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子少量・褐色粒子多量、にぶい黄褐色土粒子少量混入、粘性やや強、しまり強。
2　にぶい黄褐色粘性土　焼土粒子少量、褐色粒子多量、灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。

第103号土壙
1　灰黄褐色土　焼土粒子少量、褐色粒子、黄灰色土粒子・ブロックを多量混入、粘性欠、しまり欠。
2　黒色シルト　植物質と思われる炭化物を多量に含む、灰黄褐色土ブロック多量混入、粘性欠、しまり欠。
3　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、明るい灰黄褐色土を混入、やや強、しまりやや強。

第105図　土壙(8)



第 104 号土壙
1　にぶい黄褐色粘性土　褐色粒子多量、暗緑灰色土・小ブロック少量混入、粘性やや強、しまり強。
2　暗オリーブ灰色粘土　植物遺体を多く含む、粘性強、しまり欠。

第 105 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　炭化物粒子・褐色粒子、明るい褐灰色粒子・ブロック・灰黄褐色土粒子・ブロック混入、粘性やや強、しまり強。
2　褐灰色粘性土　炭化物粒子・褐色粒子、明るい褐灰色粒子、小ブロック少量混入、粘性やや強、しまり強。

第 106 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子、褐色粒子多量、明黄褐色土粒子・ブロック混入、粘性やや強、しまり強。
2　黒褐色シルト　炭化物多量、灰黄褐色土粒子、ブロック少量混入、粘性やや強、しまり強。
3　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、炭化物粒子・褐色粒子、明るい黄褐色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまり強。

第 107 号土壙
1　にぶい黄褐色粘性土　炭化物粒子少量、焼土粒子褐色粒子多量、褐灰色土・明灰黄褐色土粒子、小ブロック少量混入、粘性やや強、しまり強。
2　褐灰色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子、褐色粒子多量、にぶい黄褐色土・明灰黄褐色土粒子・ブロック多量混入、粘性やや強、しまり強。

第 110 号土壙
1　褐灰色粘性土　炭化物粒子・褐色粒子、黒色ブロック少量混入、粘性やや強、しまり強。
2　黒色シルト　炭化物（植物繊維）多量、明るい褐灰色土ブロックを混入、粘性欠、しまり欠。

第 111 号土壙
1　にぶい黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子少量、褐色粒子多量、明るい灰黄褐色土粒子・小ブロックを混入、粘性やや強、しまりやや強。
2　灰黄褐色粘性土　炭化物粒子・焼土粒子・褐色粒子、明灰色粒子（灰）ブロック多量混入、粘性やや強、しまりやや強。

第 112 号土壙
1　黒褐色シルト質土　炭化物多量、灰混入、粘性やや強、しまりやや強。
2　灰黄褐色粘性土　炭化物粒子少量、褐色粒子多量、明るい灰黄褐色土粒子・褐灰色土粒子混入、粘性やや強、しまりやや強。

第 114 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子、褐色粒子多量、明るい灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　1層よりやや明るい、微量の褐色粒子・褐色粒子、明るい灰黄褐色土粒子少量混入、粘性やや強、しまり強。

第 115 号土壙
1　灰黄褐色粘土　焼土粒子、褐色土粒子多量、明るい灰黄褐色土粒子を少量、粘性強、しまり強。

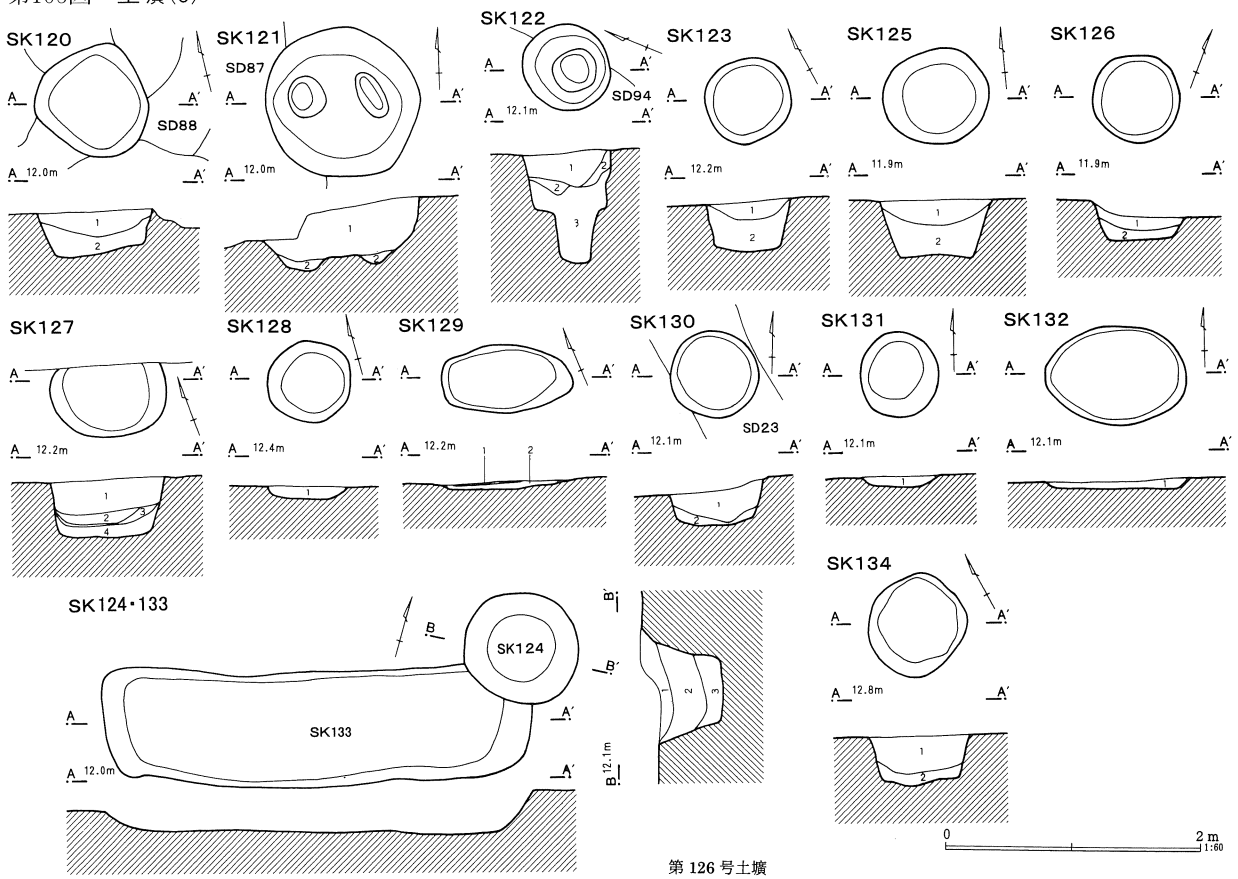
第 116 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　炭化物粒子少量、褐色粒子多量、暗褐色粒子、明るい灰黄褐色土混入、粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、明るい灰黄褐色土粒子少量混入、粘性やや強、しまり強。

第 117 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子、褐色粒子多量、明るい灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　炭化物粒子、褐色粒子多量、明るい灰黄褐色土粒子混入、

第 118 号土壙
1　にぶい黄褐色粘性土　焼土粒子微量、褐色粒子多量、灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。

第 119 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　炭化物粒子・褐色粒子、明るい灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。

第106図　土壙(9)



第 120 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　炭化物粒子少量、褐色粒子多量、褐灰色土を混入、粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　炭化物粒子少量、褐色粒子多量、褐灰色土多量混入、粘性やや強、しまり強。

第 121 号土壙
1　暗緑灰色粘土　炭化物粒子、褐色粒子少量、灰黄褐色土微量混入、粘性強、しまりやや強。
2　オリーブ灰色粘性土　灰黄褐色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまりやや強。

第 122 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子・褐色粒子、褐灰色粒子・明るい灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　褐色粒子、暗い灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。
3　褐灰色粘性土　炭化物、褐色粒子多量、灰黄褐色土粒子・ブロック混入、粘性やや強、しまりやや強。

第 123 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、炭化物粒子、明るい灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　1層よりやや暗い、焼土粒子少量、炭化物粒子、褐色粒子多量、明るい灰黄褐色土粒子少量混入、粘性やや強、しまり強。

第 124 号土壙
1　黒褐色シルト　焼土粒子少量、炭化物（植物質）多量、明るい灰色土粒子混入、粘性欠、しまりやや強。
2　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、炭化物粒子、褐色粒子多量、明るい褐灰色粒子混入、粘性やや強、しまり強。
3　灰黄褐色粘性土　2層より暗い、炭化物粒子少量、明るい灰黄褐色土粒子混入、粘性やや強、しまりやや強。

第 125 号土壙
1　褐灰色粘性土　炭化物粒子少量、焼土粒子、褐色粒子多量、明るい褐灰色粒子・灰黄褐色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまり強。
2　褐灰色粘土　色粒子多量、灰黄褐色土粒子・ブロック・緑灰色ブロック混入、粘性強、しまり強。

第 126 号土壙
1　褐灰色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子、褐色粒子多量、灰黄褐色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまり強。
2　にぶい黄褐色粘性土　焼土粒子少量、炭化物粒子、褐色粒子多量、灰黄褐色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまり強。

第 127 号土壙
1　灰黄褐色粘性土　焼土粒子少量、炭化物粒子、褐色粒子多量、明るい灰褐色土・褐灰色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまり強。
2　暗緑灰色粘土　炭化物粒子少量、黒色土ブロック混入、粘性強、しまりやや強。
3　黒色土シルト　炭化物（植物繊維）多量、暗緑灰色土少量混入、粘性欠、しまり欠。
4　暗緑灰色粘土　炭化物粒子少量、灰褐色土少量混入、粘性強、しまりやや強。

第 128 号土壙
1　灰褐色粘性土　焼土粒子少量、炭化物粒子・褐色粒子、明るい灰黄褐色土・褐灰色土粒子・小ブロック混入、粘性やや強、しまり強。

第 129 号土壙
1　にぶい黄褐色粘性土　炭化物粒子少量、褐色粒子、粘性やや強、しまり強。
2　暗褐色粘性土　炭化物粒子・焼土粒子ブロック多量、褐色粒子、粘性やや強、しまり強。

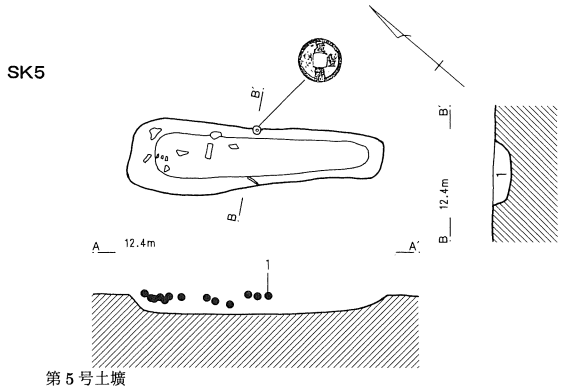
第 130 号土壙
1　褐灰色粘性土　焼土粒子・炭化物粒子・褐色粒子、灰黄褐色土微量混入、粘性やや強、しまり強。
2　灰黄褐色粘性土　焼土粒子、褐色粒子多量、褐灰色土混入、粘性やや強、しまり強。

第 131 号土壙
1　灰黄褐色土粘性土　単層、焼土粒子ブロック、褐灰色土混入、粘性やや強、しまり強。

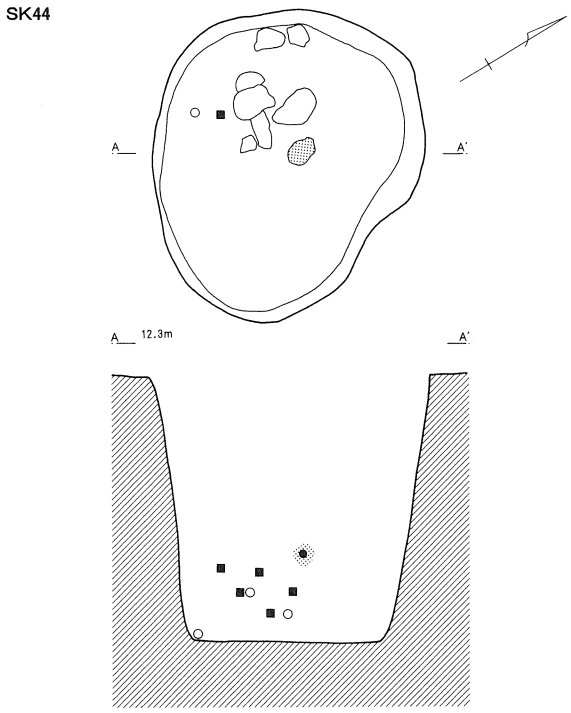
第 132 号土壙
1　灰黄褐色土粘性土　単層、焼土粒子少量、褐灰色混入、粘性やや強、しまり強。

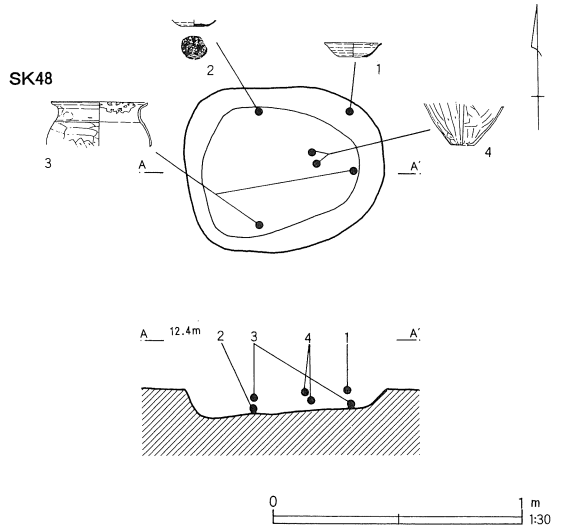
第 134 号土壙
1　灰オリーブ色粘性土　灰白色シルト縞状、粘性やや強、しまり強。
2　灰色粘土　粘性強、しまり中。

第107図　第５・44・48号土壙遺物分布図



第５号土壙
１　黒 褐 色 シ ル ト　炭化物・焼土ブロック多量・骨片。





る。１は南比企窯跡群産の須恵器椀で、口縁部は外反する。遺構の時期は９世紀後半代と考えられる。

第78号土壙（第103図）

本土壙はＦ－８グリッドに位置する。第79号土壙に切られている。平面形は半円形を呈する。規模は1.35m×0.75mで、深さ0.15mである。主軸方向はN－40°－W を示す。

１は南比企窯跡群産の須恵器甕口縁部で、外面にはカキメが巡る。遺構の時期は９世紀代と考えられる。

（２）中世前期の土壙

第30号土壙（第100図）

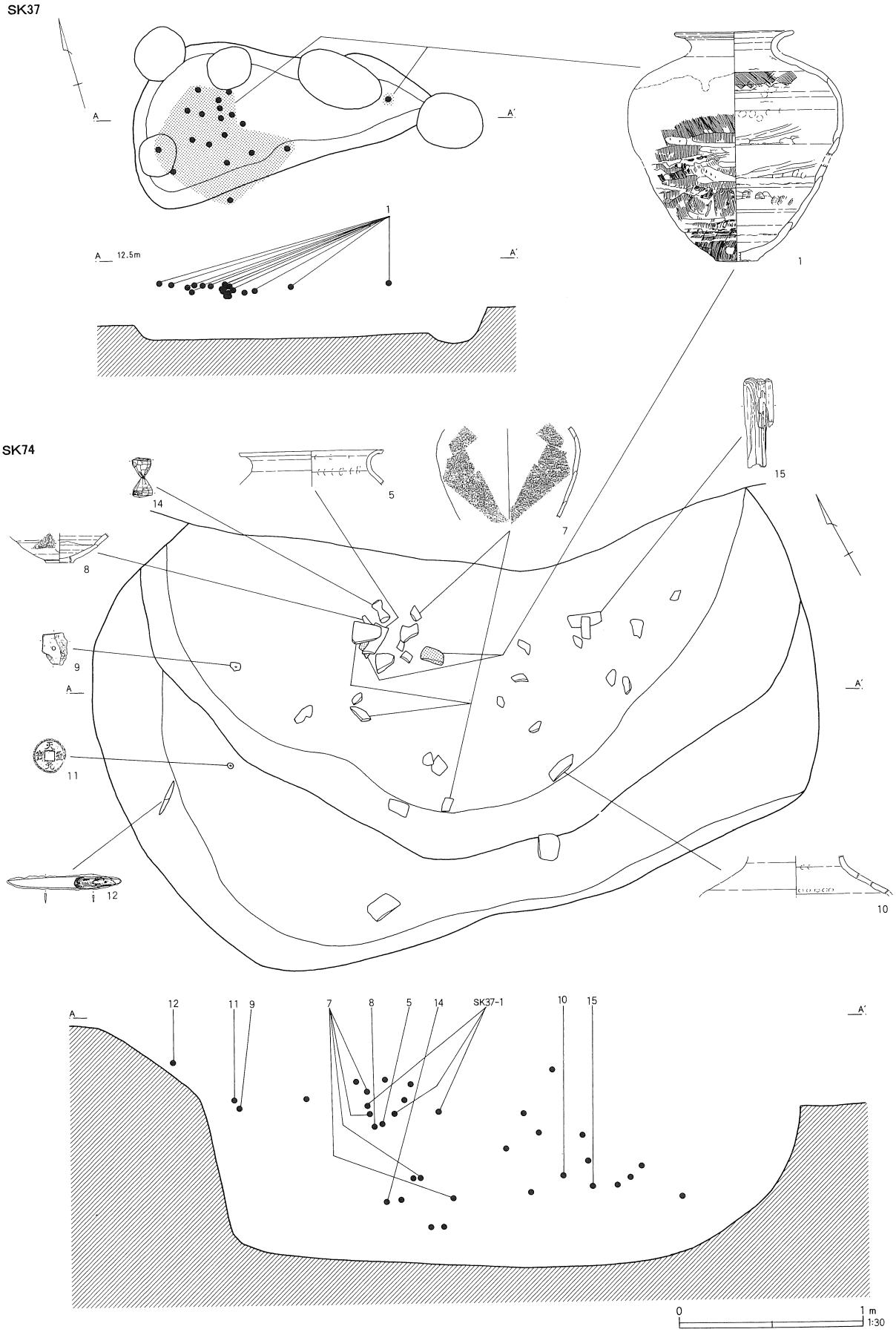
本土壙はＫ－４グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は2.7m×1.7mで、深さ0.68mである。主軸方向はＮ－５°－Ｅを示す。１は常滑焼の片口鉢で、胎土に多量の石英などの小礫・粗砂を混入している。色調は灰黄色で少し赤味を帯びる。立上り部外面の下端を回転ヘラケズリし、断面逆三角形の高台を付けている。中野晴久氏の編年では片口鉢Ⅰ類に相当し、第２型式（12世紀第３四半期）に類例がある。他の遺物は片岩１点80gのみであった。遺構の年代は12世紀後半代と考えることができる。

第34号土壙（第７図）

本土壙はＥ－８・９グリッド（Ａ３区中央）に位置する。胴張方形のやや深い竪穴とこれより浅い方形竪穴が結合した形態を取るが、切り合い関係はない。床面がややしまっており、第３号掘立柱建物跡に伴う土間となる可能性がある。規模は2.85m×2.55mで、深さ0.33mである。主軸方向はN－15°－Eを示す。覆土には焼土粒子と炭化物が少量含まれている。床面から石鍋の破片と砥石が出土している。

１は滑石製石鍋の口縁部破片である。口縁部直下に鍔を削り出すかたちのものであるが、鍔は削り落とされている。二次的に温石などに転用しようとした可能性がある。内外面ともに煤の付着は認められない。重量は49.82ｇある。推定される口径は約21㎝である。２は硬砂岩の自然礫を用いた砥石で、両側を除く４面

第108図　第37・74号土壙遺物分布図



が使用されている。全面に炭化物が付着し、上面には特に厚く貼り付いている。これを工具でこそぎ取った痕があり、墨または漆器下地用の炭粉作りに用いた可能性がある。図示できなかった他の遺物に、鉄滓２点8.7g、捏鉢片１点44.7g、手捏ねかわらけ片44.7g、片岩995gなどがある。遺構の時期は12世紀末から13世紀前半と考えられる。

第35号土壙（第７図）

本土壙はＥ－・グリッド（Ａ３区西端）に位置する。平面形は隅円方形を呈し、浅い皿状の掘り込みである。規模は2.5ｍ×(1.0)ｍで、深さ0.2ｍである。主軸方向はＮ－25°－Ｅを示す。第34号土壙と同様に掘立柱建物に伴う土間の可能性が考えられ、周囲の柱穴がその一部を構成すると推測されるが、調査区の端にあるため全貌を明らかにしえない。プラン内にある第２号柱穴内から古銭が１点出土した。祥符元寳であり、北宋の真宗統治下、大中鄧符元(1009)年の鋳造である。外径2.20㎝、内径1.95㎝、厚さ0.13㎝、重量は2.0ｇである。図化できなかった他の遺物に、手捏ねかわらけ片47.4g、磨石59.7gがある。遺構の時期は12世紀末から13世紀前半と考えられる。

第37号土壙（第100図）

本土壙はＥ－９グリッド（Ａ３区中央やや東）に位置する。新旧関係は第４号住居跡を切っている。平面形は不定形を呈する。規模は1.9m×0.75mで、深さ0.35mである。主軸方向はＮ－55°－Ｗを示す。覆土には大粒の焼土粒子・炭化物を多く含み、陶器類などの遺物を包含していた。

１は渥美焼の甕である。復元口径27.4㎝、器高52.4㎝を測る。無花果形の体部を持ち、肩部に最大径がある。口縁部はやや小さく、強く外反しながら開く。口縁端部は尖り、上面には浅い凹線が巡る。底部から５回の乾燥単位を置いて成形する。外面は木口状工具による縦位の調整、内面も同工具による横位の調整後、横ナデを加える。体部下半の接合部分には３段の押印文（平行叩き）を施す。胎土は精選されており、焼成は硬緻である。黒色に近い暗灰色を呈し、肩部には白色の光沢を帯びた自然降灰がある。中野晴久氏が12世紀第３四半期に編年する資料に器形と押印文が類似する。周辺遺構出土の破片との接合があったため、接合関係を検討したところ、第35号溝、第41号土壙、第72号土壙、第338号柱穴の出土破片と接合関係を持ち、同一個体片は第74号土壙を最多とし、第１号溝、第10号溝、第20号溝、第58号溝、第81号溝、第35号土壙、第44号土壙からも少数づつ出土している。

２は灰白色の凝灰岩製砥石である。良く使い込まれた四面砥で、刃先調整痕から見て鎌以外の刃物に用いた物である。３は素焼きの土製鋳型で、胎土に細砂粒と雲母、酸化鉄粒子を含む。焼成は普通で、橙色を呈する。他の鋳型に比べて比重の重い点が注視された。鋳込み面とその周囲が青黒色に変色している。製品を特定できないが、仏具のような小型鋳銅品であろう。４は素焼きの土製鋳型で、胎土は水簸され、雲母と酸化鉄粒子のみを含む。焼成は甘く軟質で、灰白色を呈する。小型容器の外型である。鋳込み面は剥離している。鋳型の厚さを４㎝とした場合、製品の復元径は12㎝となる。取上げ番号20番も鋳型片であるが、生きた面を持たないので実測を割愛した。図化できなかった他の遺物では赤く焼けた片岩3100gが注目された。本遺構は鋳造遺構（鋳込み場）の可能性があり、用途完了後に甕が廃棄されており、時期は12世紀後葉から13世紀初頭と考えられる。

第38号土壙（第100図）

本土壙はＥ－８グリッド（Ａ３区西端）に位置する。布掘りの柱穴であり、溝の両端部にピットが掘り込まれている。規模は1.55m×0.35mで、深さ0.34mである。柱の掘方は直径36㎝、柱の当りは12㎝である。主軸方向はＮ－65°－Ｗを示す。第35号土壙を土間とする掘立柱建物の柱穴となる可能性が高い。遺物は図示できなかったが、棒状の鉄製品１点2.4ｇ、焼土塊5.0g、かわらけ片14.3g、渥美焼甕底部片143.9gがある。時期は12世紀後半から13世紀初頭と推定できる。

第44号土壙（第101図）

本土壙はD・E－10グリッド（A3区東部）に位置する。新旧関係は第32号溝に切られている。平面形は楕円形を呈する。規模は1.2m×(1.05)mで、深さ0.97mである。覆土には炭化物粒子を含んでいた。

1は南比企窯跡群産の須恵器坏で、流れ込み品である。2も南比企窯跡群産で、単孔式の須恵器甑である。3は外面に鎬蓮弁文のある中国製青磁碗で、山本信夫氏編年の龍泉窯系Ⅰ－5b類に相当し、E期（1200年前後から13世紀前半）の年代を与えられている。4は常滑焼大甕片で、2段に押印文を施文している。オリーブ灰色の降灰がある。5は素焼きの土製鋳型である。胎土に雲母と酸化鉄粒子を含み、焼成はやや軟質である。にぶい橙色を呈する。曲面をなす側面部に還元面があり、復元直径は20㎝である。小型の鍋の外型かと思われる。図示できなかった他の遺物に手捏ねを含むかわらけ片51.5g、渥美甕片3点320gがある。遺構の時期は12世紀末から13世紀前半代と考えられる。ただし、遺物の接合関係を重視し、第74号土壙との共時性を考慮すると12世紀末に限定されることになる。

第50号土壙（第101図）

本土壙はF－15グリッド（A1区東部）に位置する。平面形は隅円長方形を呈する。規模は1.55m×0.65mで、深さ0.24mである。主軸方向はN－20°－Eを示す。出土遺物は図示できなかったが、古代の土師器と須恵器片のほかに渥美焼甕片1点43.9gがある。遺構の時期は12世紀後半から13世紀前半と考えられる。

第58号土壙（第102図）

本土壙はF－12・13グリッド（A2区東南部）に位置する。平面形は方形を呈する。規模は1.0m×0.95mで、深さ0.14mである。1は外面に鎬蓮弁文のある中国製青磁碗で、山本信夫氏編年の龍泉窯系Ⅰ－5b類に相当し、E期（13世紀前半）の年代を与えられている。他にかわらけの破片も出土している。遺構の時期は13世紀前半か、いま少し降るものと考えられる。

第74号土壙（第103図）

本土壙はD－10グリッド（A3区北東端）に位置する。新旧関係は第30号溝に切られている。平面形は隅円長方形を呈する。規模は3.7m×1.6mで、深さ1.19mである。主軸方向はN－60°－Wを示す。覆土は暗緑灰色を基調とする粘土層で、炭化物粒子を含んでいた。規模を縮小しての掘り直しが1回行われている。

1は南比企窯跡群産の須恵器蓋のつまみで、流れ込み品である。2は手捏ねの小型かわらけで底部と立上り部の境界に段を持つ。口縁端部は丸く収める。胎土は水簸され、砂を含まず、雲母が目立つ。色調は暗灰色を呈する。鎌倉市横大路遺跡溝2上層出土品（ⅠB2類）に類似する。3は手捏ねの大型かわらけで、底部は指頭押圧による凹凸が著しい。口縁部は直線的に開き端部を丸く収めるが、体部との境界に明瞭な段を持つ。胎土は水簸され、砂を含まず、雲母が目立つ。色調は橙を呈し、粉っぽい。伊野近富氏のいう京都系土師器皿Jaタイプ（12世紀後葉）の2次模倣品であり、鎌倉市横大路遺跡溝2上層出土品（ⅠA4類）にも類似している。宗台秀明氏によれば、溝2は12世紀第4四半期とすることが可能で、かわらけ外面の段の出現は後代の東国かわらけの特徴の端緒とすることができるという。4は瓦質の擂鉢で、卸目が部分的に付けられている。胎土には石英の小礫を混入している。浅野晴樹氏によれば、条線を持つ物は少なくとも15世紀中葉には出現するというが、本資料もそのような時期の所産であれば、撹乱混入品か掘り直し土壙に伴うものということになろう。5は常滑焼大甕の口縁部で、頚部が一度立った後に、強く外反して開く。口唇部は上方へつまみ上げている。暗赤褐色を呈し、肩部に白色の降灰が付く。中野晴久氏の編年では3型式（1176～1190年）に相当し、その末期に比定できよう。6は5の同一個体と見られる底部である。7と8は渥美焼の甕体部と底部で同一個体である。外面は木口状工具による縦位調整、接合部には押印文を施す。内面は同工具による横位調整である。灰色を呈し、肩部には光沢を帯びた黒色の自然釉、底部内面には白色の降灰が付着している。第44号土壙出土破片と接合関係がある。10は5よりも大型の常滑焼大甕の上半部であり、器肉

も厚い。暗赤褐色を呈し、オリーブ色の自然釉が付着する。推定最大径は80㎝くらいになる。

9は温石である。緑灰色のスレートがかった頁岩製で、台形状をなし、中心部に直径1.0㎝の円孔が開けられている。表面と側面小口は火を受けており、煤が付着するが、剥離している裏面にはそれが認められない。したがって、温石を火で暖めている過程で割れるという事故が発生し、廃棄するに至ったと推定できる。11は天聖元寶の真書銭である。北宋の天聖元(1023)年に真書と篆書を対で鋳造した。輪の小さい大字銭で、字体が整っている。外形2.40㎝、内径2.11㎝、厚さ0.13㎝、重量は1.8gである。背笵がずれている。12は短刀である。全長23.8㎝、刃渡りは15.8㎝ある。刃部の断面形は三角形で、X線写真からの観察では鎬と棟はないようである。茎の関よりの位置に目釘孔がある。柄木が残存しており、鎺元に跨り、端部が半円形を呈しているので、呑口式の外装であったことが分かる。切先はふくら、背は下反りである。

13から17は木器類である。13は折敷の縁か足である。断面台形状をなし、底面に細かい木釘孔がある。14は組紐用の錘である。鉈削りによって独楽形に成形した2個の部品を心棒継ぎとし、鼓形にしている。大鎧の縅糸の製作に用いたものと推定している。15は厚手の建築材で、上端が斜めにそがれているので、倒立して矢板として用いた可能性がある。16は折敷である。部材が7点あり、寸法の小さい物(A・B)と大きい物(C・D・E)、縁(F)とがある。本体部の部材の厚さは僅か0.1～0.15㎝とうすい桧板製で、倍木折敷にあたるものであろう。端部には縁を留めるための木釘孔が開けられている。縁は平向きで取り付けられた物とみられる。なお、Cには墨が付着するが、文字ではない。17は竹矢来である。半截した竹の一方を鉈で山形に尖らせ、他方を薄くそいで焼き焦がしている。焼いた側を地中に刺して使用し、防御施設とした物であろう。AとBに接点はなく、全長は不明である。

第74号土壙の時期は12世紀第4四半期と考えられ、意識の連絡のない掘り直しが行われて(別の土壙が重複したと言った方が良いかもしれない。)、2度目の廃棄行為が行われたのは15世紀中葉前後であったと見られよう。

第106号土壙(第105図)

本土壙はJ－4グリッド(B区中央やや南)に位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.7m×0.7mで、深さ0.49mである。

図示できなかったが、出土遺物に手捏ねのかわらけ小皿(直径8㎝前後)破片22.4gがある。遺構の時期は12世紀末から13世紀前半と考えられる。

第107号土壙(第105図)

本土壙はJ－5グリッド(B区東南部)に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.1m×0.69mで、深さ0.42mである。図示できなかったが、出土遺物に渥美焼甕片1点24.4gと片岩39.2gがある。

第110号土壙(第105図)

本土壙はK－3グリッド(B区南部)に位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.9m×(0.7)mで、深さ0.35mである。1は中国製青磁碗がある。無文だが、口縁部に波状の丸彫りがある。釉色は灰色である。山本信夫氏龍泉窯系青磁I－1類(D期:12世紀中葉～後半)に含まれる物であろう。図示できなかった他の遺物に、復元径12㎝ほどの手捏ねかわらけ片36.1gがある。遺構の時期は12世紀末から13世紀前半と考えられる。

第112号土壙(第105図)

本土壙はI－グリッド(B区中央)に位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.85m×0.8mで、深さ0.3mである。図示できなかったが、出土遺物にかわらけ片3点10.2gがある。

第113号土壙(第105図)

本土壙はI－2グリッド(B区中央やや西)に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.3m×0.9mで、深さ0.88mである。1は大型の手捏ねかわらけである。口径は14.8㎝ある。胎土は砂柳を少量含み、焼成が良く、にぶい橙色を呈する。口縁部は1段ナデで、端部に面取り技法を伴う。伊野近富氏の京都系土師器皿Jb

－2タイプに酷似しており、田中信氏の御教示では1次模倣型であるという。時期は12世紀後葉から末と考えられる。

第121号土壙（第106図）

本土壙はJ－2グリッド（B区南西端）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.2m×1.2mで、深さ0.48mである。木器類がまとまって出土した。1と2は桶の竹箍で、竹を四つ割した物の割れ口を面取りしており、強い撚りがあるので、2本を撚り合わせて使用した物である。多数出土した内の一部である。3と8は桶板（側板）である。8は横断面の曲率から直径32cmに復元できる。4から7は建築材である。4は厚手の板材で、下端部は水平に切断されており、鋸が使用されているらしい。裏面には手斧削り痕がある。5は左下半部を斜めに削り取っており、屋根の破風板に似る。6は恐らく未使用の材で、裏面に手斧の削りかけ痕がある。7は先端に両肩を持っており、切組用の臍である。表面に鑿跡と鋸を当てた痕がある。土器類はわずかにかわらけ片1点3.4gが出土したのみである。桶は一般に時代が下がると言われるが、中世前期にはすでに出現しているので、あえて下げる必要はない。時期は周囲の遺構と同じ12世紀末から13世紀代を考えておきたい。

第128号土壙（第106図）

本土壙はH－5グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.65m×0.65mで、深さ0.1mである。1は手捏ねかわらけで、復元口径は11.0cmである。水簸した胎土で、砂を含まないが、酸化鉄粒子が目立つ。焼成は甘く、粉っぽい。底部と体部下端との境界が明瞭で、口縁部は2段ナデされて内湾する。口唇部は面取りを施し直立する。伊野近富氏の言う京都系土師器皿Ab－2タイプ新相（12世紀前葉～中葉間の後半期）の2次模倣型に相当しよう。遺構の時期は若干の時間差を考慮して12世紀後葉と考えておきたい。

（3）中世後期の土壙

第5号土壙（第107図）

本土壙はA－13グリッド（A4区北端）に位置する。平面形は不整方形を呈する。規模は1.0m×0.26mで、深さ0.08mである。主軸方向はN－40°－Eを示す。覆土中に焼土と炭化物を含み、火葬骨が3ブロックに分かれて検出されており、火葬墓である。出土遺物は古銭1枚のみであった。元豊通寶の篆書銭であり、北宋の神宗の統治下である元豊元（1078）年の鋳造である。外径2.30cm、内径1.90cm、厚さ0.10cm、重量は3.0gある。遺構の時期は第14号溝で囲まれた墓地内にあることから、15世紀後葉以降とみられ、輸入銭が使用された16世紀末までの期間内と把握しておきたい。

第6号土壙（第98図）

本土壙はC－11グリッド（A4区中央部）に位置する。新旧関係は第8号溝を切っている。平面形は円形を呈する。規模は2.7m×2.05mで、深さ0.55mである。覆土に焼土ブロックと炭化物を含むが、累層堆積であり、墓ではない。板碑片が6片合計1350g出土した。1は□（明）徳元（1390）年月日の紀年銘のある基部片である。2は四年□月と読めるが、元号を欠いている。3は緑灰色の凝灰岩製四面砥石である。直線的な刃先調整痕が残り、鎌以外の刃物用であろう。遺構の時期は第8・14号溝が埋められた16世紀中葉より新しく、同溝への板碑廃棄に引続く、墓地の整理行為と関係する廃棄土壙とみられよう。

第14号土壙（第99図）

本土壙はC－12グリッド（A4区中央部）に位置する。平面形は長方形を呈する。規模は(1.85)m×0.8mで、深さ0.15mである。主軸方向はN－35°－Eを示す。出土遺物にかわらけ片4.2gがある。形態と方位から見て土壙墓の可能性が高い。時期は墓の管理されていた期間から推して15世紀後葉から16世紀中葉と考えられる。

第15号土壙（第99図）

本土壙はC－11・12グリッド（A4区中央部）に位置する。平面形は長方形を呈する。規模は（1.45）m×0.6mで、深さ0.15mである。主軸方向はN－45°

－Wを示す。出土遺物にかわらけ片がある。形態と方位から見て土壙墓の可能性が高い。時期は墓の管理されていた期間から推して15世紀後葉から16世紀中葉と考えられる。

第36号土壙（第100図）

本土壙はD－9グリッド（A4区北部）に位置する。新旧関係は第24号溝に切られている。平面形は小判形を呈する。規模は2.2m×0.85mで、深さ0.23mである。主軸方向はN－25°－Eを示す。図化できなかったが、出土遺物にかわらけ片13.7gと土鍋片2点71.3gがあり、遺構の時期は中世後期と考えられる。

第52号土壙（第101図）

本土壙はF－16グリッド（A1区東端）に位置する。平面形は隅円長方形を呈する。規模は2.2m×1.6mで、深さ0.16mである。主軸方向はN－40°－Eを示す。第9号井戸に伴う洗い場と考えられる。1は土師器台付甕の台部で、体部外面はヘラケズリされている。周辺からの流れ込み品である。図化しなかった他の遺物に、かわらけ片1点2.5gがある。遺構の時期は第9号井戸と同じ15世紀末から16世紀前半である。

第63号土壙（第102図）

本土壙はH－12グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は1.85m×(0.7)mで、深さ0.15である。小型の竪穴状遺構の一部と考えられる。図示図示できなかった、瀬戸美濃系の鬼板を掛けた擂鉢片33.2gが出土している。口縁部の形状から大窯編年の擂鉢Ⅰ類に相当し、第1段階後半（16世紀初頭）に比定できる物である。遺構の時期は16世紀初頭と考えられる。

第70号土壙（第102図）

本土壙はD－9グリッド（A3区北部）に位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.95m×(0.8)mで、深さ0.5mである。図示できなかったが、出土遺物に外面を黒色処理したロクロかわらけ片43.3g、常滑焼甕片266g、土鍋片33.4gがある。遺構の時期は中世後期と考えられる。

第82号土壙（第103図）

本土壙はC－10グリッド（A4区西北端）に位置する。平面形は小判形を呈する。規模は2.05m×0.8mで、深さ0.36mである。主軸方向はN－55°－Wを示す。第53号溝の底部に掘り込まれており、湧水点の砂層に達しているので、空堀を水堀化するための施設と推定している。1は瓦質の土鍋で、胎土に川砂様の粗砂と角閃石などを多量に含み、表面は炭素吸着仕上としている。器壁がやや厚めであること。口縁部が短く、体部が直線的な器形的特徴から浅野晴樹氏編年のⅡ期（15世紀中頃）に比定できよう。2は渥美焼壷の体部片で、2段の押印文が施文されている。オリーブ灰色の自然釉が厚く付き、窯壁が溶着している。周辺遺構からの流れ込み品である。遺構の時期は土鍋から15世紀中葉と考えられる。

（4）近世の土壙

第3号土壙（第98図）

本土壙はB－12グリッド（A4区東部）に位置する。第14号溝を切っている。平面形は楕円形を呈する。規模は(3.1)m×2.0mで、深さ0.2mである。主軸方向はN－57°－Wを示す。出土遺物は鉄滓201.8g、瀬戸美濃系灰釉皿片、焙烙片がある。時期は17世紀後半代と考えられる。

第8号土壙（第98図）

本土壙はB－11グリッド（A4区）に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.55m×1.1mで、深さ0.35mである。出土遺物は染付半筒茶碗で、口縁部内側に八卦文が巡る物がある。時期は18世紀と考えられる。

第13号土壙（第99図）

本土壙はC－11グリッド（A4区）に位置する。第11号溝を切っている。平面形は円形を呈する。規模は1.2m×1.2mで、深さは0.8mまで調査した。出土遺物は焙烙片、石臼2個体4450gがある。時期は近世と考えられる。

第65号土壙（第102図）

本土壙はG－11・12グリッド（A2区）に位置する。

第43号溝を切っている。平面形は楕円形を呈する。規模は2.25m×1.1mで、深さ0.53mである。主軸方向はN－35°－Eを示す。覆土上層は木などの有機物と陶磁器類を含む灰オリーブ色粘土、下層は有機物を多量含む暗灰オリーブ灰色粘土であった。

1は須恵器蓋で流れ込み遺物である。2～13は肥前系の陶磁器群である。このうち、2～5と7～8は唐津焼の京焼風丸碗と呼ばれる物である。体部の丸みが強く、口すぼまりで、高台が小さいことを共通の特徴としている。薄手の上手である。色調は灰釉によって灰白色を基調とし、黄色味が勝つものと、灰色味が勝つものとがある。それぞれ外面に鉄釉を用いて菖蒲などの植物文を一気に描いている。7は弱い端反りがあり、現存部に鉄絵はない。8は腰折形で少し手の混んだ鉄絵を描く。いずれも最後に透明釉を施釉し、細かな貫入がある。一括して九州編年Ⅰ－2期(1594～1610年代）に比定できよう。6・9～11は染付碗である。6は口縁部が直線的に開く丸碗で、割筆によって、外面には網目文、内面には蓮花文を描く。高台内には渦福の落款がある。九州編年Ⅳ期(1700～1750年代)。9は外面に植物文を描く丸碗で、九州編年Ⅲ期（1650～1690年代）。10も9と同期。11は丈が低く口縁部が直線的に開く丸碗で、外面に梅樹文を描く。見込には蛇の目釉剥ぎを施す。九州編年Ⅳ期（1690～1780年代）の前半。12は肥前系の染付徳利で、梅枝文を描く。九州編年Ⅱ－1期（1610～1630年代）に同工品がある。13は肥前系の染付皿で、見込にコンニャク印判の五弁花文がある。九州編年Ⅳ期（1690～1780年代）の前半期に類例がある。14と15は極めて硬質の焼締め擂鉢で、櫛で付けた細かい卸目が付く。堺の産であろう。16～18は焙烙で、大型の内耳が底部に跨る形で器壁に取り付く。19は板塀瓦で、桟の形から角桟切落板塀瓦と呼ばれるものである。塀の屋根のほか、住宅の霧除庇、土蔵の窓庇などにも用いられる。本例は二条城本丸御殿の塀のものと同形品である。20も板塀瓦の一部で、桟とは反対側の縁に水返しのあることが分かる。共に二次的な火を受けている。21は板碑の基部片を転用した砥石である。上部に枠線が残る。敲打痕、線条痕、刃先調整痕があり、作業台的に用いられた物であろう。重量は1720 gある。22は粉引き臼の下臼である。黄灰色の含礫砂岩製で、上面にはふくみがあり、粗い摺目が切ってある。23は軽石である。楕円形の偏平体で、下端は刃部をなす。細かい線条痕が無数に認められる。24は小型桶の底板である。酒樽であろうか。

遺構の年代は、17世紀前半からごみ捨て場としての廃棄が始まり、最終的に埋没したのは18世紀初頭かと思われる。しかし、それほど深い穴ではないので、長く使用されてきた什器類が18世紀初頭の段階で一括廃棄された可能性も捨て切れない。

第72号土壙（第7図）

本土壙はF－8グリッド（A3区南西部）に位置する。第28号井戸に切られている。平面形は隅円方形を呈する。規模は0.95 m×(0.8)m で、深さ0.5 mである。出土遺物は阿弥陀種字の板碑のみであり、中世まで溯る積極的な根拠がないので近世とした。

第87号土壙（第104図）

本土壙はG－11グリッド（A2区中央部）に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.4 m×1.05 mで、深さ0.5mである。1は在地産の土師質擂鉢で中世後期に属する物である。流れ込み品である。図示できなかった他の資料に焙烙2個体の破片、染付片、瀬戸美濃系鉄釉陶器片などがあり、焙烙の一方は浅いので、18世紀代まで下降するものと考えられる。

第104号土壙（第105図）

本土壙はG－3グリッド（B区北端）に位置する。第79号溝覆土を切っている。平面形は円形を呈する。規模は0.85 m×0.85 m で、深さ0.66 m である。出土遺物に焙烙片104.3 g、白磁小坏片4.1 gがあり、近世と考えられる。

（5）時期不明の土壙

第1号土壙（第98図）

本土壙はA・B－12グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は3.15m×0.77mで、深さ0.25

m である。主軸方向は N－47°－W を示す。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第2号土壙（第98図）

本土壙は B－12 グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は 3.15m× 0.77mで、深さ 0.25mである。主軸方向は N－41°－W を示す。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第4号土壙（第98図）

本土壙は G－14 グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は 0.7 m×(0.25)m で、深さ 0.18 m である。遺物は皆無であった。

第7号土壙（第98図）

本土壙は B－12 グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は 0.8m× 0.65mで、深さ 0.2mである。遺物は皆無であった。

第9号土壙（第98図）

本土壙は B－11 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は 0.55m× 0.4mで、深さ 0.15mである。遺物は皆無であった。

第10号土壙（第98図）

本土壙は F・G－14 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は 1.0m× 0.6mで、深さ 0.2m である。主軸方向は N－25°－W を示す。年代決定に使用できる出土遺物は瓦1点であった。

第11号土壙（第99図）

本土壙は F－14 グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は 1.4m× 0.65mで、深さ 0.23mである。主軸方向は N－45°－W を示す。出土遺物はかわらけ片 4.2 g で、中世後期となる可能性はあるが、時期決定は困難である。

第16号土壙（第99図）

本土壙は B－11 、C－11 ・ 12 グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は 5.1m× 0.8mで、深さ 0.14 m である。主軸方向は N－50°－W を示す。遺物は皆無であった。

第17号土壙（第99図）

本土壙は B・C－11 グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は 2.1m× 1.3mで、深さ 0.48mである。主軸方向は N－50°－W を示す。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第18号土壙（第99図）

本土壙は C－11 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は(1.15)m× 0.9mで、深さ 0.14 m である。遺物は皆無であった。

第19号土壙（第99図）

本土壙は C－11 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は(0.35)m× 0.75mで、深さ 0.12 m である。遺物は皆無であった。

第20号土壙（第99図）

本土壙は C－12 グリッドに位置する。第21号土壙を切っている。平面形は楕円形を呈する。規模は 1.4 m ×0.8mで、深さ0.18mである。出土遺物に建築材（第117図）がある。手斧痕2個所が残る。共伴土器がなく、時期決定は困難である。

第21号土壙（第99図）

本土壙は C－12 グリッドに位置する。第20号土壙に切られている。平面形は楕円形を呈する。規模は（1.0）m× 1.05 m で、深さ 0.13 m である。遺物は皆無であった。

第22号土壙（第99図）

本土壙は C－12 グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は（1.9）m×（0.5）mである。遺物は皆無であった。

第25号土壙（第8図）

本土壙は C－12 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.6m×1.0mで、深さ0.2mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第27号土壙（第99図）

本土壙は B－12 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は 0.95 m× 0.6 m で、深さ 0.33 m である。遺物は皆無であった。

第28号土壙（第99図）

本土壙は K－3 グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は 0.95m× 0.8mで、深さ 0.4mである。

出土遺物に丸太杭と建築材が（第117図）がある。杭は丸太を蜜柑割にし、先端を鉈で斜めに切り落とした物である。材は断面長方形で、表面に鋸の引きかけ痕と手斧削り痕がある。共伴土器がなく、時期決定は困難である。

第29号土壙（第99図）

本土壙はK－3グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.75m×0.65mで、深さ0.62mである。遺物は皆無であった。

第32号土壙（第100図）

本土壙はJ・K－4グリッドに位置する。第20号溝に切られている。平面形は円形を呈する。規模は2.3m×(1.9) mで、深さ0.62mである。遺物は皆無であった。ただし切り合い関係から、中世以前となる可能性が高い。

第39号土壙（第100図）

本土壙はE－8　グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.1 m×0.35 m で、深さ0.43 mである。主軸方向はN－5°－Wを示す。遺物は皆無であった。

第40号土壙（第100図）

本土壙はE－8グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.5m×0.45mで、深さ0.15mである。主軸方向はN－30°－Eを示す。遺物は皆無であった。

第42号土壙（第100図）

本土壙はE－10グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.1m×0.95mで、深さ0.69mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第43号土壙（第101図）

本土壙はE－10グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.95m×0.9mで、深さ0.48mである。遺物は皆無であった。

第45号土壙（第101図）

本土壙はF－15グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.25m×0.95mで、深さ0.14mである。主軸方向はN－20°－Eを示す。第3号畝を伴う。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第46号土壙（第101図）

本土壙はF－15グリッドに位置する。平面形は長円形の北側に突起が付く形を呈する。規模は1.4 m×0.95 mで、深さ0.12 mである。主軸方向はN－20°－Wを示す。形態から茶毘跡の可能性を考えて調査したが、焼土ブロックと炭化物は存在したが、骨粉はなく、土師器甕片91.3 g、須恵器坏片42 g、須恵器高台坏椀片42.3 g、渥美甕片42.3 gが出土した。年代決定は困難である。

第49号土壙（第101図）

本土壙はE・F－15グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.5m×1.0mで、深さ0.13 mである。主軸方向はN－5°－Wを示す。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第51号土壙（第101図）

本土壙はF－15グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.75m×0.75mで、深さ0.15mである。ごく僅かで、時期決定は困難である。

第59号土壙（第102図）

本土壙はH－12グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.65m×0.6mで、深さ1.12mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第60号土壙（第102図）

本土壙はG－13グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.05m×0.6mで、深さ0.12mである。主軸方向はN－50°－Eを示す。遺物は皆無であった。

第61号土壙（第102図）

本土壙はF・G－14グリッドに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は1.8m×1.4mで、深さ0.07 mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第67号土壙（第102図）

本土壙はE－8グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.2m×1.1mで、深さ0.09mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第68号土壙（第102図）

本土壙はE－8グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.1m×0.95mで、深さ0.15mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第69号土壙（第102図）

本土壙はD－9グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.3m×0.5mで、深さ0.28mである。主軸方向はN－50°－Wを示す。墓壙の可能性がある。出土遺物は骨粉微量、鉄滓6.1g、かわらけ片17.8g、鋳型片29.4gなどである。中世の可能性はあるが、時期決定には至らない。

第73号土壙（第102図）

本土壙はF－8グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は1.8m×0.65mで、深さ0.16mである。主軸方向はN－30°－Eを示す。遺物は皆無であった。

第75号土壙（第102図）

本土壙はD－10グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.3m×1.3mで、深さ0.14mである。出土遺物に土師器甕片45.5g、須恵器甕片45.5g、鉄滓7.5g、常滑甕片27.3g、かわらけ片7.8g、片岩20.5gがある。中世の可能性が高いが、時期決定には至らない。

第76号土壙（第103図）

本土壙はD－9グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は0.65m×0.4mで、深さ0.53mである。主軸方向はN－30°－Eを示す。出土遺物は常滑甕片3点245g、片岩85.9g、その他があり、中世の可能性があるが、年代決定には至らない。

第79号土壙（第103図）

本土壙はF－8グリッドに位置する。第78号土壙を切っている。平面形は不定形を呈する。規模は3.15m×1.75mで、深さ0.08mである。主軸方向はN－40°－Wを示す。
遺物は皆無であった。

第80号土壙（第103図）

本土壙はF－8グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.9m×0.9mで、深さ0.26mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第81号土壙（第103図）

本土壙はE－9グリッドに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は1.6m×1.3mで、深さ0.28mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第83号土壙（第103図）

本土壙はE－9グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は0.9m×(0.6)mで、深さ0.15mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第85号土壙（第103図）

本土壙はE－9グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は1.8m×1.4mで、深さ0.13mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第86号土壙（第104図）

本土壙はG－11グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は0.8m×0.75mで、深さ0.28mである。遺物は皆無であった。

第88号土壙（第104図）

本土壙はH－10グリッドに位置する。第46号井戸を切っている。平面形は円形を呈する。規模は0.75m×(0.7)mで、深さ0.35mである。出土遺物に丸木弓かと思われる木器（第117図）がある。丸木の皮をはぎ、小枝をはらう調整を施し、僅かな反りがある。儀礼又は遊戯用の物であろうか。共伴土器がないので、時期決定は困難である。

第89号土壙（第104図）

本土壙はH－9グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.95m×0.75mで、深さ0.14mである。遺物は皆無であった。

第90号土壙（第104図）

本土壙はI－9グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.95m×0.85mで、深さ0.28mである。出土遺物は砥石1点290gであった。

第91号土壙（第104図）

本土壙はD－11グリッドに位置する。平面形は楕円

形を呈する。規模は1.6m×0.5mで、深さ0.15mである。主軸方向はN－45°－Wを示す。遺物は皆無であった。

第94号土壙（第104図）

本土壙はI－9グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.55m×(0.65)mで、深さ0.56mである。遺物は皆無であった。

第95号土壙（第104図）

本土壙はG－12グリッドに位置する。平面形は不定形を呈する。規模は(1.6)m×(1.1)mで、深さ1.13mである。遺物は皆無であった。

第101号土壙（第104図）

本土壙はH－3グリッドに位置する。第71号溝を切っている。平面形は円形を呈する。
規模は1.05m×1.0mで、深さ0.45mである。出土遺物は須恵器片1点であった。

第102号土壙（第104図）

本土壙はH・I－3グリッドに位置する。第78号溝を切っている。平面形は円形を呈する。規模は0.85m×(0.65)mで、深さ0.37mである。遺物は皆無であった。

第103号土壙（第104図）

本土壙はI－3グリッドに位置する。第78号溝を切っている。平面形は円形を呈する。
規模は1.15m×1.0mで、深さ0.69mである。遺物は皆無であった。

第105号土壙（第105図）

本土壙はJ－5グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.7m×0.7mで、深さ0.34mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第111号土壙（第105図）

本土壙はK－4グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.55m×0.5mで、深さ0.23mである。遺物は皆無であった。

第114号土壙（第105図）

本土壙はH－5グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.05m×1.3mで、深さ0.1mである。遺物は皆無であった。

第115号土壙（第105図）

本土壙はH－4・5グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.05m×0.95mで、深さ0.08mである。出土遺物は須恵器片1点41gである。

第116号土壙（第105図）

本土壙はH－5グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.05m×1.0mで、深さ0.18mである。出土遺物はかわらけ片1点8.3gである。

第117号土壙（第105図）

本土壙はH－4・5グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.8m×0.67mで、深さ0.29mである。出土遺物は渥美甕片1点である。

第118号土壙（第105図）

本土壙はH－5グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.9m×0.8mで、深さ0.1mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第119号土壙（第105図）

本土壙はG－5グリッドに位置する。平面形は不整長方形を呈する。規模は3.1m×1.05mで、深さ0.16mである。主軸方向はN－20°－Eを示す。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第120号土壙（第106図）

本土壙はJ－3グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.9m×0.9mで、深さ0.34mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

第122号土壙（第106図）

本土壙はJ－3グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.7m×0.7mで、深さ0.85mである。遺物は皆無であった。

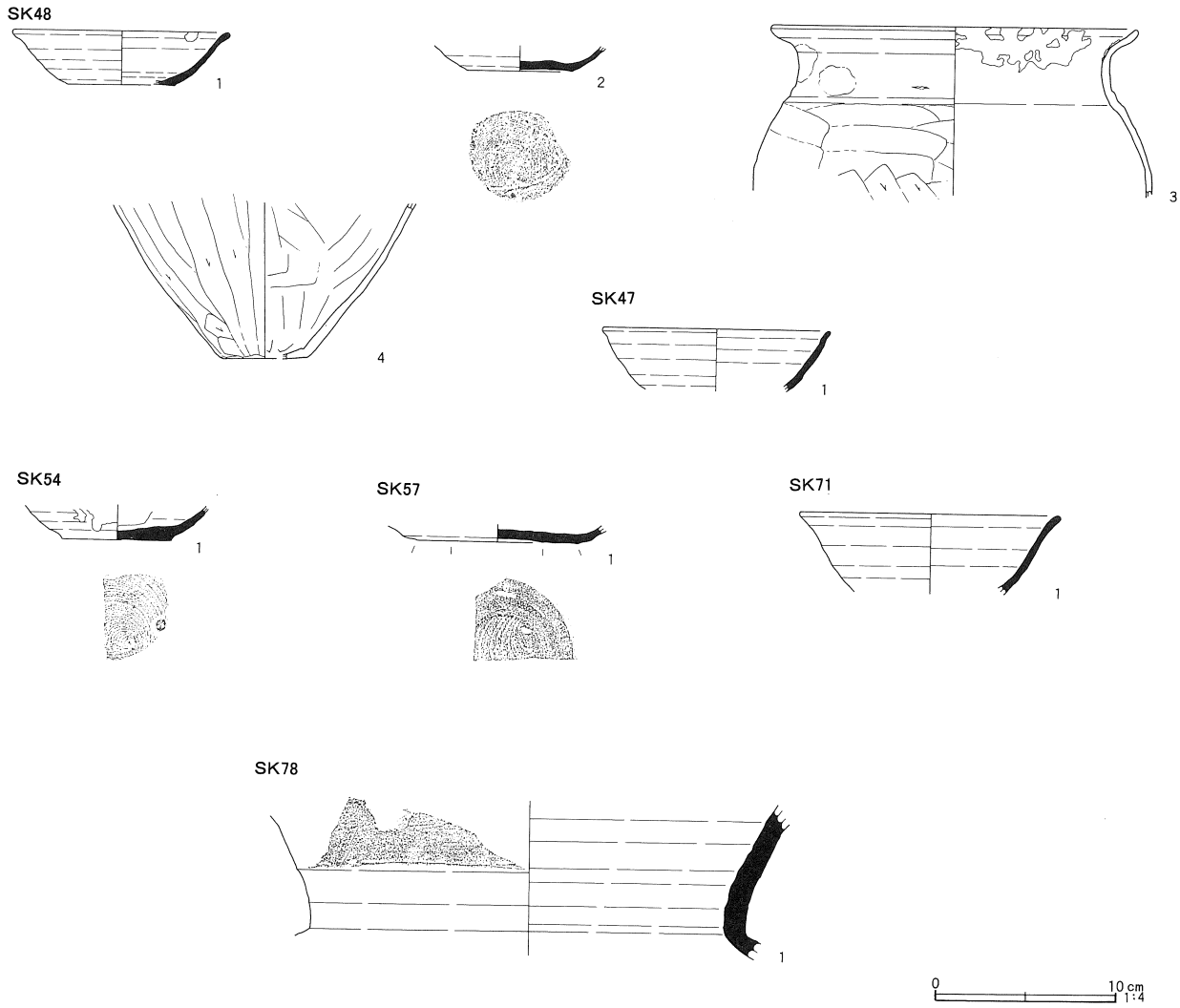
第123号土壙（第106図）

本土壙はI－3グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.7m×0.7mで、深さ0.38mである。遺物は皆無であった。

第124号土壙（第106図）

本土壙はI－3グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.9m×0.85mで、深さ0.63mである。

第109図　土壙（古代）出土遺物



出土遺物は須恵器蓋片20.3ｇ、かわらけ片3.4ｇ、青磁碗片13.0g、磨石81.2gがあり、中世前期となる可能性があるが、不十分である。

第125号土壙（第106図）

本土壙はＩ－３グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.85m×0.75mで、深さ0.43mである。遺物は皆無であった。

第126号土壙（第106図）

本土壙はＨ－３グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.7m×0.7mで、深さ0.18mである。遺物は皆無であった。

第127号土壙（第106図）

本土壙はＧ－４グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.95ｍ×(0.55)ｍで、深さ0.44ｍである。遺物は皆無であった。

第129号土壙（第106図）

本土壙はＩ－６グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.05m×0.55mで、深さ0.08mである。主軸方向はＮ－20°－Ｅを示す。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

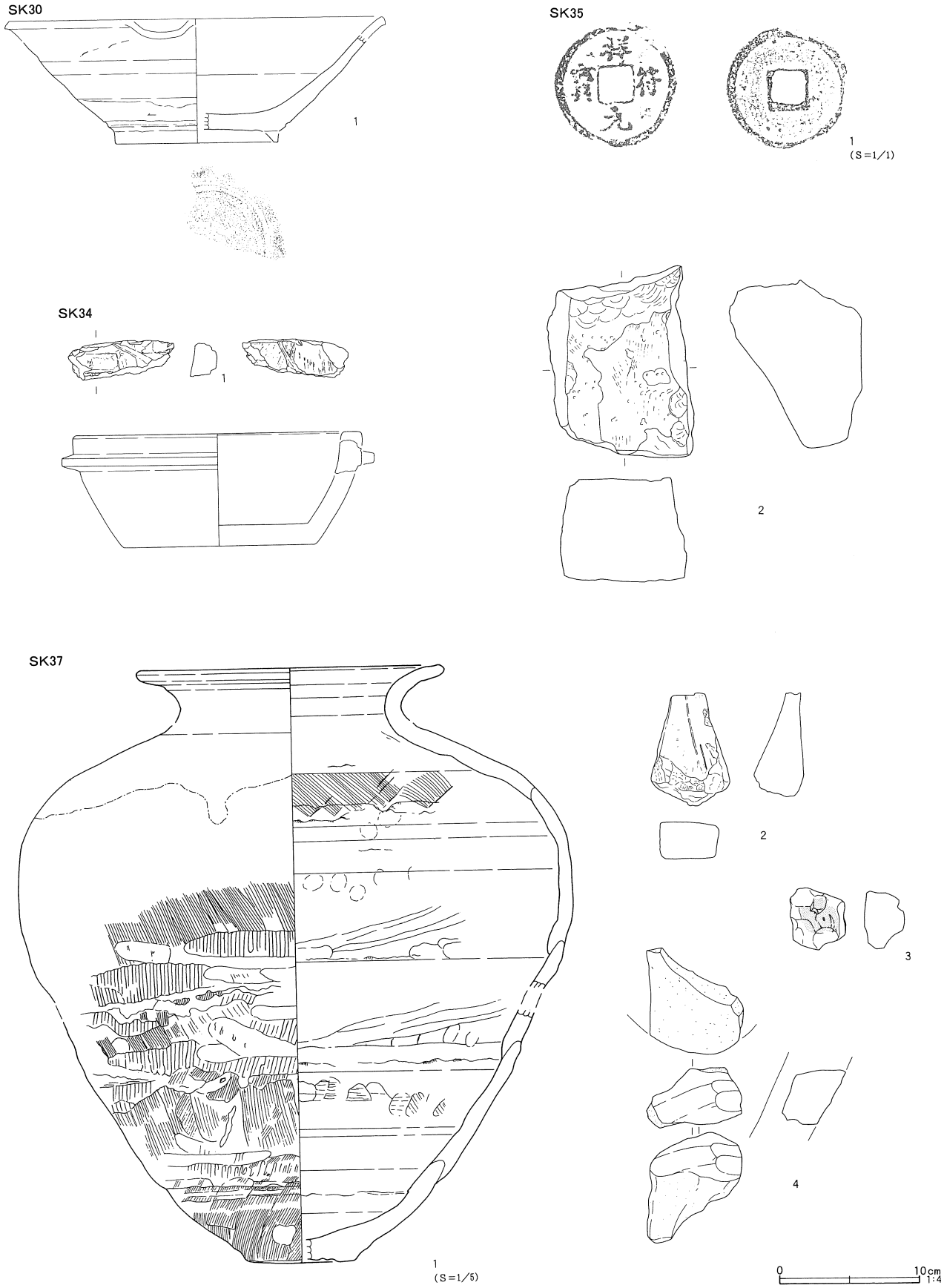
第130号土壙（第106図）

本土壙はＨ－３グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.7m×0.7mで、深さ0.27mである。遺物は皆無であった。

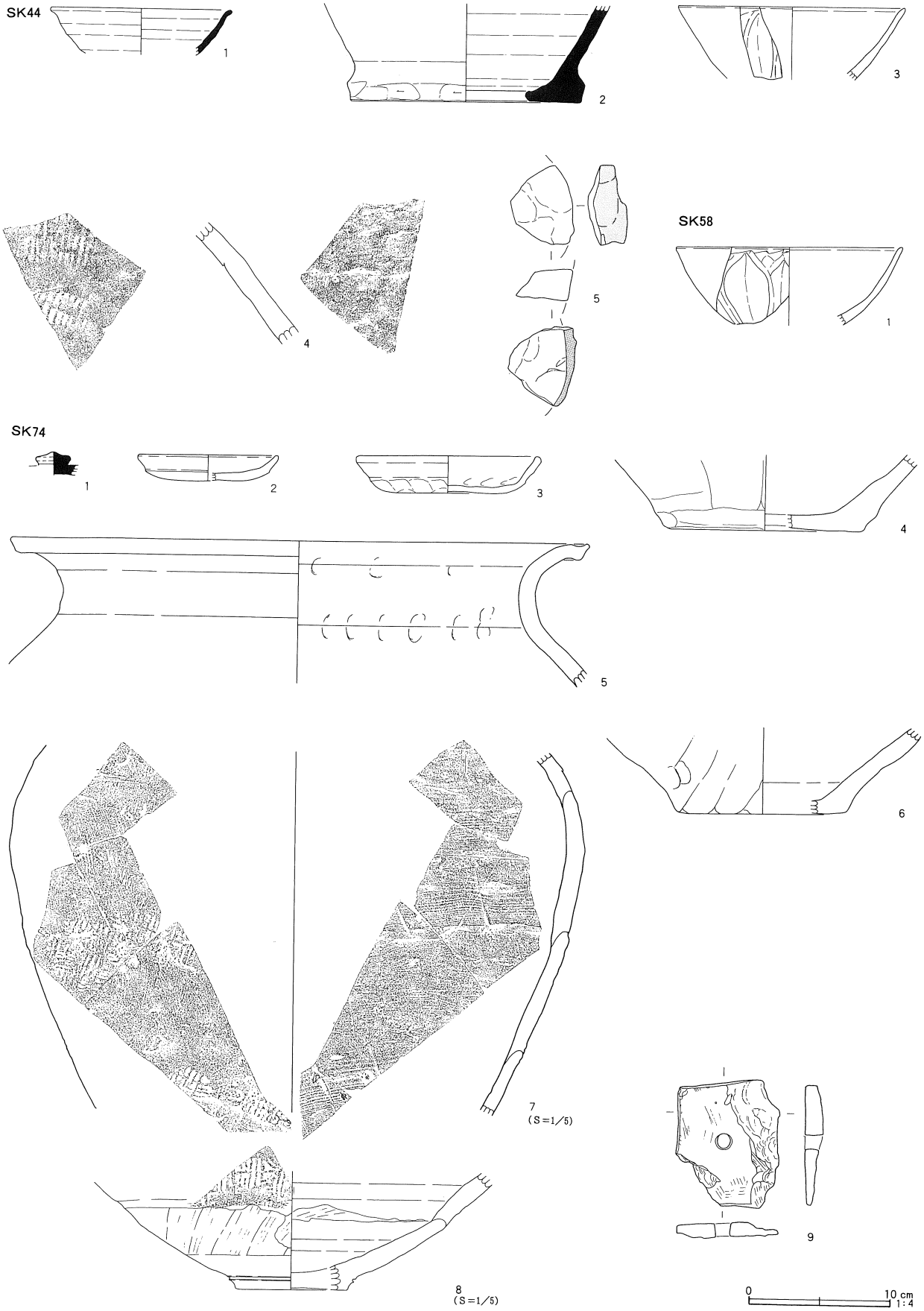
第131号土壙（第106図）

本土壙はＪ－５グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.65m×0.65mで、深さ0.07mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

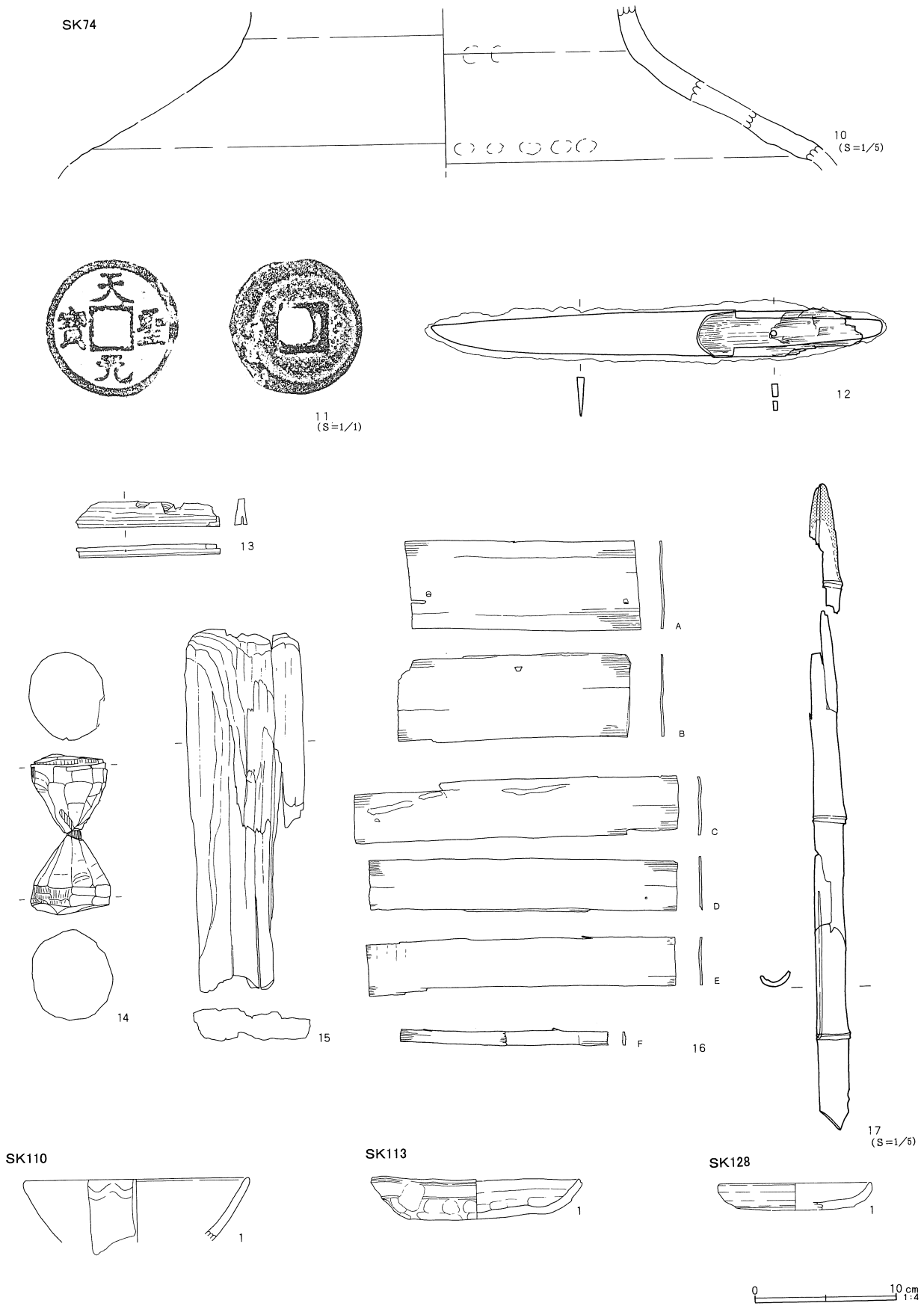
第110図　土壙（中世前期）出土遺物(1)



第111図　土壙（中世前期）出土遺物(2)



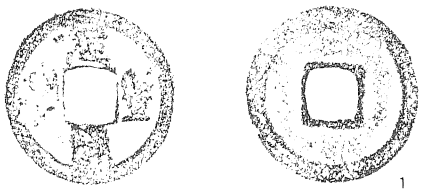
第112図　土壙（中世前期）出土遺物(3)



第113図　土壙（中世前期）出土遺物(4)

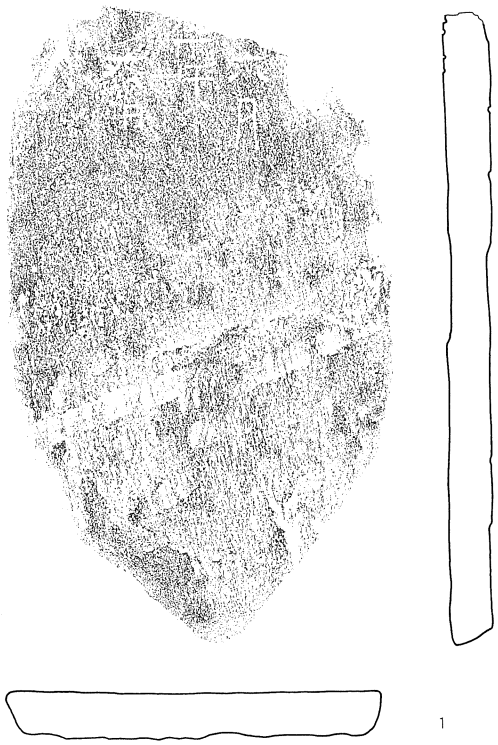
第114図　土壙（中世後期）出土遺物

SK5

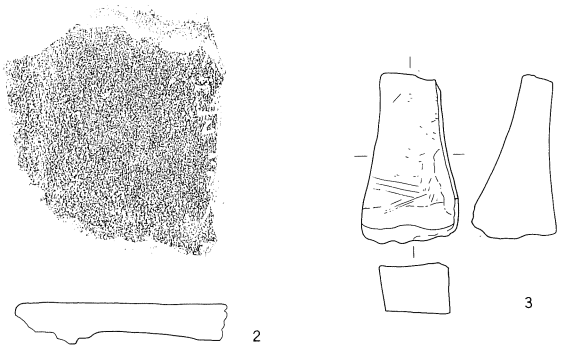


1
（S＝1/1）

SK6



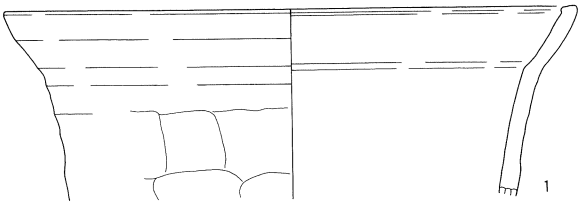
1



2

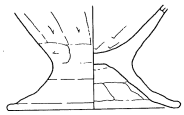
3

SK82

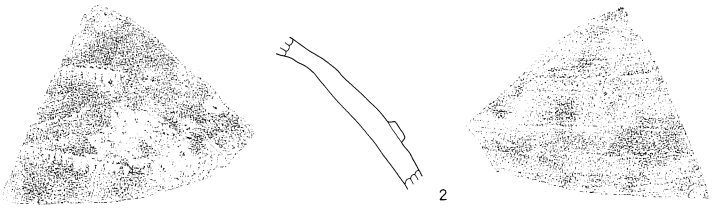


1

SK52



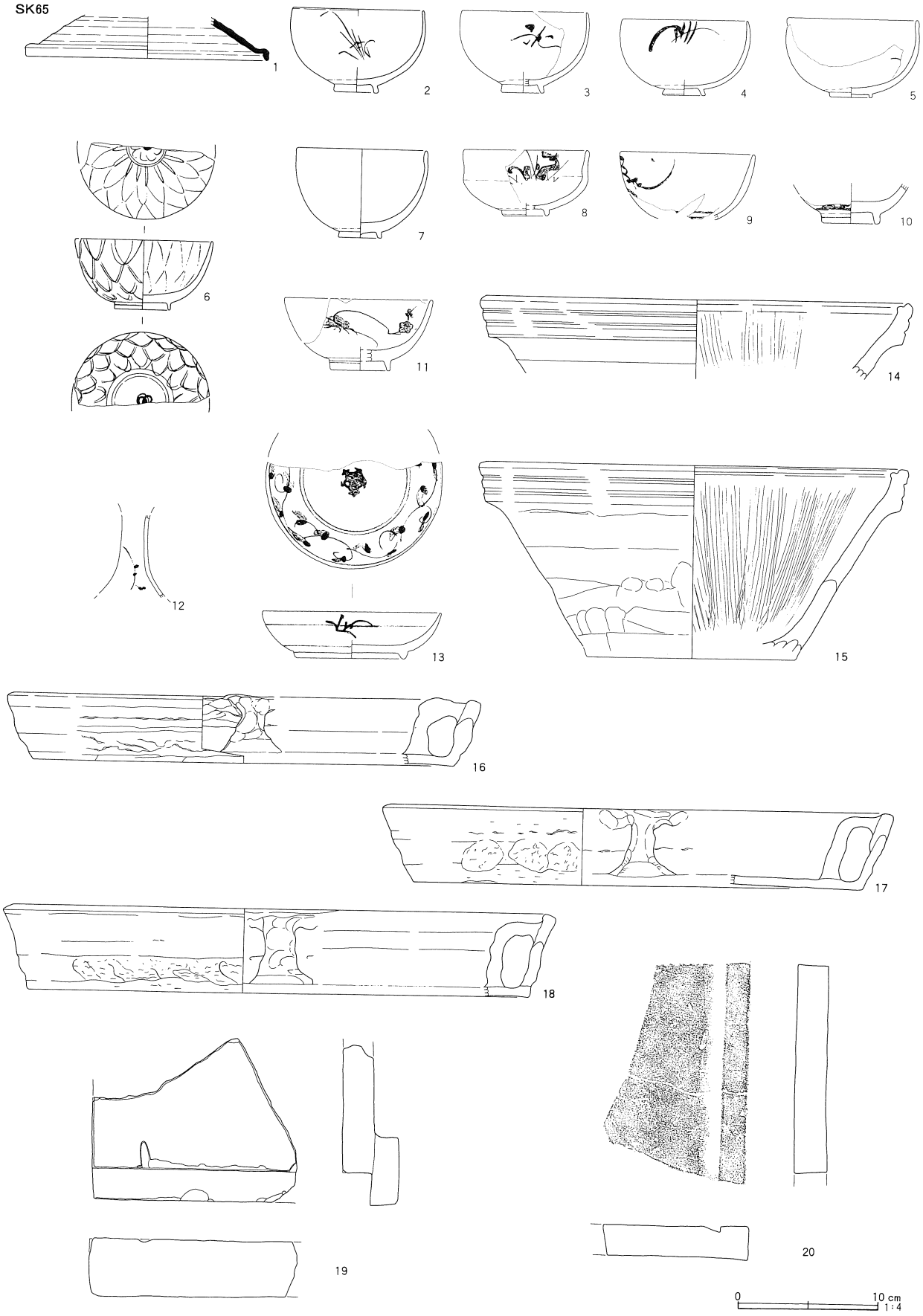
1



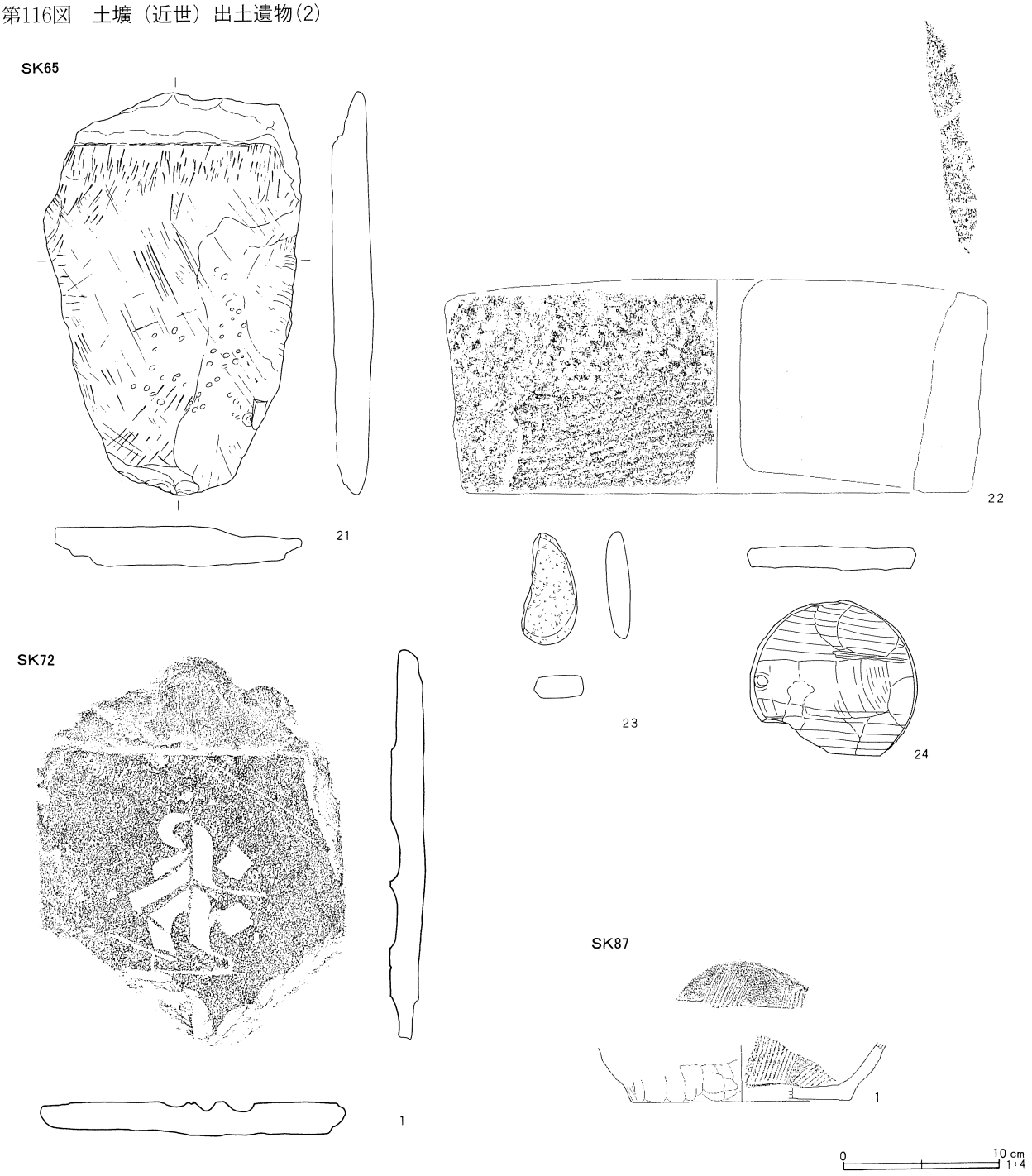
2

0　10 cm
1：4

第115図　土壙（近世）出土遺物(1)



第116図　土壙（近世）出土遺物(2)



第132号土壙（第106図）

本土壙はJ－5グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.15m×0.8mで、深さ0.08mである。出土遺物はごく僅かで、時期決定は困難である。

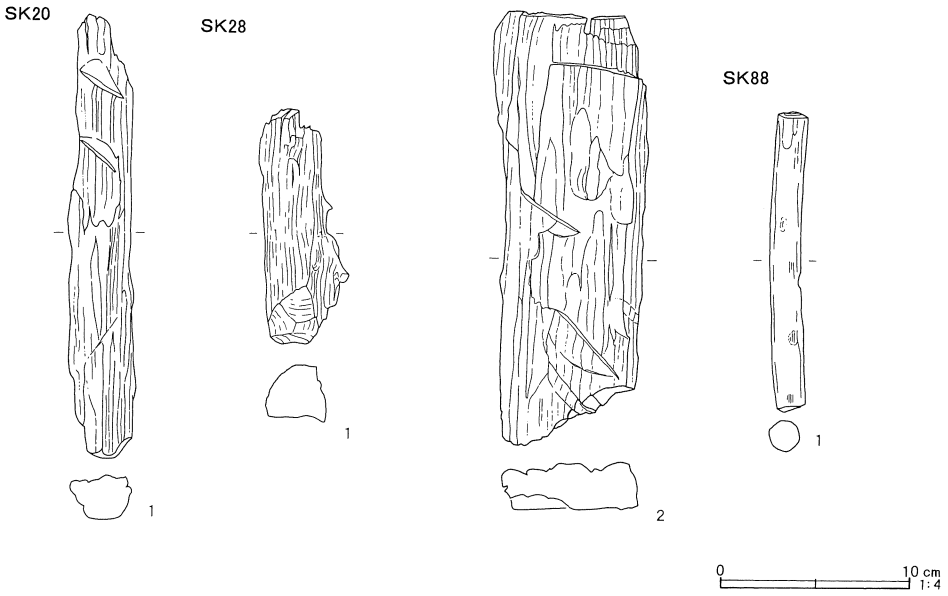
第133号土壙（第106図）

本土壙はI－3グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は3.4m×0.9mで、深さ0.3mである。主軸方向はN－80°－Eを示す。遺物は皆無であった。

第134号土壙（第106図）

本土壙はE－9グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は0.8m×0.8mで、深さ0.4mである。遺物は皆無であった。

第117図　土壙出土遺物



土壙出土遺物観察表（第　図）

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK47	1	須恵器坏	(12.4)	(3.4)	－	ＢＥＦ	Ⅰ	N5/0	15	南比企産、No.2
SK48	1	須恵器坏	(11.8)	2.9	(6.0)	ＦＪ	Ⅱ	N5/0	25	南比企産、No.17
	2	須恵器坏	－	(1.4)	5.8	ＢＦ	Ⅰ	10Y5/1	50	南比企産、No.12
	3	土師器甕	(20.0)	(9.2)	－	ＡＢＨ	Ⅱ	7.5YR6/4	20	No.3・22
	4	土師器甕	－	(8.5)	(4.5)	ＡＢＥ	Ⅱ	7.5YR6/4	25	No.15・29
SK54	1	須恵器坏	－	(2.0)	6.0	ＡＣＦ	Ⅲ	2.5Y6/1	25	南比企産、内外面漆付着、No.12
SK57	1	須恵器坏	－	(1.0)	8.4	ＥＦ	Ⅰ	N6/0	30	南比企産、周辺ヘラ削り
SK71	1	須恵器埦	(14.2)	(4.4)	－	ＥＦＨ	Ⅱ	10Y6/1	20	南比企産、No.1
SK78	1	須恵器甕	－	(8.5)	－	ＢＥＦ	Ⅰ	N5/0	15	南比企産、No.1、口縁部横のかき目
SK30	1	片口鉢	－	7.4	11.6	Ｂ	Ⅰ	2.5Y6/1	30	常滑焼
SK34	1	石鍋	内径19.2					2.5Y8/1	－	滑石製、重量49.82g
	2	砥石	長13.5	幅9.5	厚9.3				－	硬砂岩の自然礫製、重量1552g
SK35	1	古銭	外径2.2	内径1.95	厚0.13					祥符元寶(1009年)、重量2.0g
SK37	1	大甕	27.4	52.4	9.4	Ｇ	Ⅰ	N6/	40	渥美焼
	2	砥石	長7.8	幅5.6	厚3.5				－	凝灰岩製、No.19
	3	鋳型	幅3.9	高4.5	厚2.9	ＡＧＨ	Ⅱ	7.5YR6/6	－	
	4	鋳型	幅6.5	高3.8	厚4.3	ＡＧ	Ⅲ	10YR8/2	－	No.22
SK44	1	須恵器坏	(12.6)	(3.2)	－	ＢＦ	Ⅰ	7.5Y6/1	10	南比企産
	2	須恵器甑	－	6.9	16.2	ＢＥＦ	Ⅰ	N5/0	45	南比企産
	3	青磁碗	16.0	(5.1)	－	Ｈ	Ⅰ	5Y7/1	10	中国製、鎬蓮弁文
	4	大甕	－	－	－	Ｈ	Ⅰ	N7/	－	常滑焼、10Y４／２自然釉
	5	鋳型	長5.5	幅4.3	厚2.2	ＡＧ	Ⅲ	7.5YR7/3	5	
SK58	1	青磁碗	16.0	(5.4)	－	Ｈ	Ⅰ	N6/	12	鍋蓮弁文、釉色明緑色
SK74	1	須恵器蓋	－	(1.6)	－	ＢＥＦ	Ⅰ	10Y5/1	90	南比企産、つまみ径2.5
	2	かわらけ	10.0	(1.8)	(2.6)	ＥＧ	Ⅱ	2.5Y5/1	12	手捏ね
	3	かわらけ	13.2	2.6	7.4	ＥＧ	Ⅱ	7.5YR6/6	40	手捏ね
	4	擂鉢		(5.4)	(14.0)	ＢＥＧ	Ⅱ	N5/0	35	在地産瓦質
	5	大甕	(42.0)			ＢＧ	Ⅰ	10YR6/1	20	常滑焼、No.6
	6	大甕			(12.0)	ＢＧ	Ⅰ	10YR6/1	30	常滑焼、５と同一個体
	7	壺	－	(31.9)	－	ＤＥ	Ⅰ	N6/0	10	渥美焼
	8	壺		(10.4)	(10.0)	ＤＥ	Ⅰ	N6/0	20	渥美焼、No.8、７と同一個体
	9	温石	長9.1	幅(7.0)	厚(1.2)			5G6/1	－	滑石製、No.3、重量100.6g

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK74	10	甕	—	—	—	CE	I	5RP6/1	10	常滑焼、№34
	11	古銭	外径2.4	内径2.11	厚0.13					天聖元寶(1023年)、№2、重量1.8g
	12	短刀	長23.8	幅2.4	厚0.4					№1
	13	折敷	長10.1	幅1.9	厚0.9					
	14	組紐用錘	長11.3	直径0.9	大径5.6					
	15	建築材	長25.3	幅8.3	厚2.3					
	16	折敷A	長16.5	幅6.2	厚0.1					
	16	折敷B	長16.3	幅5.9	厚0.1					
	16	折敷C	長22.8	幅4.2	厚0.1					
	16	折敷D	長21.6	幅3.8	厚0.1					
	16	折敷E	長21.6	幅3.3	厚0.1					
	16	折敷F	長14.6	幅0.9	厚0.1					
	17	竹矢来	長a45.6	b10.4	幅2.6					
SK110	1	青磁碗	16.0	(4.5)		H	I	N6/	6	中国製、釉色7.5Y6／1
SK113	1	かわらけ	14.8	3.0		AEFH	I	5YR6/4	95	手捏ね、№1
SK128	1	かわらけ	11.0	1.9	8.4	A	II	7.5YR7/4	30	手捏ね
SK121	1	竹籠	長16.0	幅1.6	厚0.3					
	2	竹籠	長7.9	幅0.9	厚0.2					
	3	桶	長21.1	幅8.2	厚1.5					(側板)
	4	建築材	長26.7	幅11.5	厚2.9					
	5	建築材	長34.3	幅7.6	厚2.4					
	6	建築材	長34.5	幅6.4	厚2.6					屋根飾り
	7	建築材	長21.4	幅4.3	厚1.3					
	8	桶	長20.6	幅5.9	厚1.3					(側板)
SK 5	1	古銭	外径2.3	内径1.9	厚0.1					元豊通寶(1078年)、№1、重量3.0g
SK 6	1	板碑	長34.4	幅20.5	厚2.4					緑泥片岩、重量3.39kg
	2	板碑	長13.9	幅11.7	厚1.8					絹雲母片岩
	3	砥石	長8.9	幅4.0	厚2.8				—	凝灰岩製、№4
SK52	1	土師器台付甕		(5.3)	8.8	ABDE	I	5YR5/8	65	№3
SK82	1	土鍋	30.2	(10.0)		GH	I	7.5Y7/1	30	瓦質、№1
	2	壺				EH	I	N3/	—	渥美焼、外面自然釉、№2
SK65	1	須恵器蓋	(17.0)	3.0		EF	I	N5/0	15	南比企産
	2	陶器碗	9.0	5.9	3.2	H	I	5Y7/1	95	絵唐津
	3	陶器碗	9.0	5.8	(3.0)	H	I	5Y8/2	45	絵唐津
	4	陶器碗	9.0	5.4	3.0	H	I	10Y7/1	65	絵唐津
	5	陶器碗	9.4	5.6	3.0	—	I	5Y7/2	40	絵唐津
	6	染付碗	9.8	4.9	4.0	—	I	7.5Y8/1	45	肥前系
	7	陶器碗	9.2	6.3	3.0	—	I	5Y7/2	60	唐津焼
	8	陶器碗	9.0	4.7	(3.5)	—	I	5Y8/2	40	絵唐津
	9	染付碗	9.6	(4.7)	—	—	I	7.5Y8/1	40	肥前系
	10	染付碗	—	—	4.1	—	I	—	80	肥前系
	11	染付碗	11.0	5.1	4.2	—	I	10Y8/1	30	肥前系
	12	染付徳利	—	—	—	—	I	—	75	
	13	染付皿	12.8	3.3	7.8	—	I	N7/	60	肥前系
	14	擂鉢	30.5	(5.4)		BG	I	N4/	12	堺産か
	15	擂鉢	30.6	(13.2)		BG	I	5Y4/1	20	堺産か
	16	焙烙	33.6	4.7	(30.0)	DEG	I	5Y7/1	20	
	17	焙烙	36.4	5.5	(32.0)	DEG	I	10YR7/2	20	
	18	焙烙	39.4	6.0	(36.0)	EG	I	5Y7/1	25	外面煤付着
	19	板塀瓦	長14.5	幅11.5	厚4.0	H	I	7.5Y6/1	—	№5
	20	板塀瓦	長14.5	幅10.0	厚2.0	EH	I	7.5Y7/1	—	№6
	21	砥石	長25.6	幅16.5	厚2.5				—	緑泥片岩製、板碑転用、重量1723g
	22	石臼	(35.0)	12.7	(33.0)				20	礫岩製
	23	軽石	長7.1	幅(3.4)	厚1.5				70	溶結凝灰岩製、重量21.3g
	24	桶の底板	直径10.7	厚1.5					80	
SK72	1	板碑	長24.9	幅19.7	厚2.0					緑泥片岩、重量1.7kg
SK87	1	擂鉢		3.7	(14.2)	EG	I	5Y6/1	30	在地産土師質
SK20	1	建築材	長23.2	幅3.3	厚2.3					
SK28	1	丸太杭	長12.3	幅4.0	厚2.6					
	2	建築材	長22.8	幅7.4	厚2.3					
SK82	1	丸木弓	長15.3	径1.7						

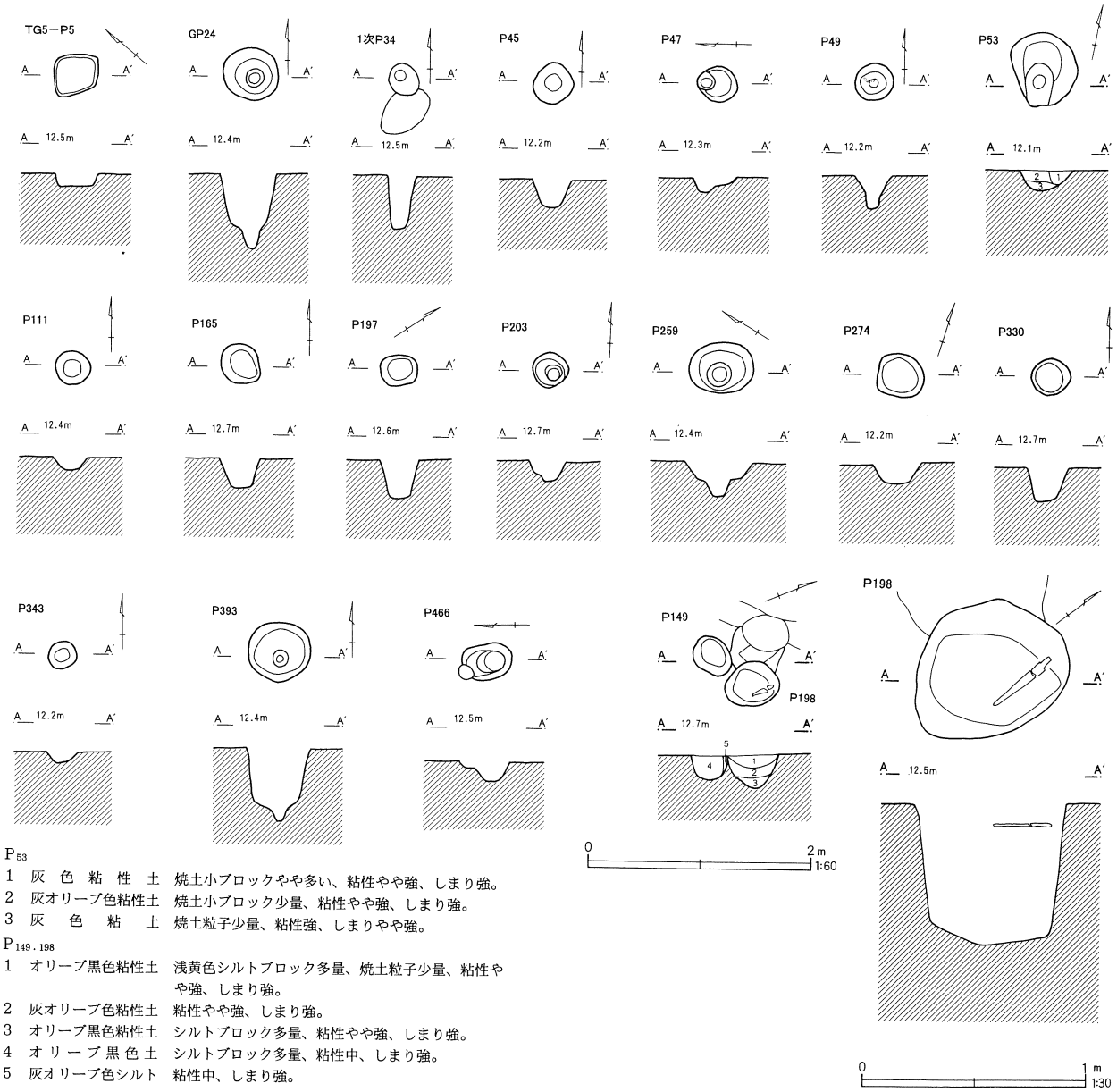
6　柱穴とその出土遺物

柱穴は第１次調査で、SP－１から発番した約70基、第２次調査でＰ－１から発番した約700とＢ区におけるグリッド単位で発番した約100基、そして住居跡や土壙内にあって、便宜的に遺構単位で発番した物を加えると約1000基となる。これらの中には掘立柱建物を構成したり、柵列や塀の柱穴として位置づけられた物もあるが、多くは性格不明にとどまった。これらのうち、覆土内から実測可能な遺物を出土した物について説明を行う。なお、第１次調査の物を区別し、遺構名の頭に付すが、第２次調査の物は省略する。

第１次34号ピット（第118図）

Ｂ－11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長辺0.28ｍ、短辺0.25ｍ、深さ0.45ｍである。13はロクロかわらけで、内底面にナデ技法を伴う。外底面は回転糸切離し後、ヘラケズリを加えている。胎土に雲母を含み、ミルクコーヒー色の焼き上がりである。田中信氏編年のＢ１類に相当し、Ⅴ期（15世紀前葉～後葉）に比定できよう。

第118図　ピット



P53
1　灰色粘性土　焼土小ブロックやや多い、粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　焼土小ブロック少量、粘性やや強、しまり強。
3　灰色粘土　焼土粒子少量、粘性強、しまりやや強。

P149・198
1　オリーブ黒色粘性土　浅黄色シルトブロック多量、焼土粒子少量、粘性やや強、しまり強。
2　灰オリーブ色粘性土　粘性やや強、しまり強。
3　オリーブ黒色粘性土　シルトブロック多量、粘性やや強、しまり強。
4　オリーブ黒色土　シルトブロック多量、粘性中、しまり強。
5　灰オリーブ色シルト　粘性中、しまり強。

第53号ピット（第118図）

F－15グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長辺0.66 m、短辺0.53 m、深さ0.18 m である。5は須恵器高台坏で、南比企産である。時期は8世紀後半であろう。6は土師器坏で、須恵器を模倣型の物であるが、体部は無調整、底部はヘラケズリが施されている。残存率は60％である。時期は9世紀第4四半期である。

第45号ピット（第118図）

F－14グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、長辺0.38 m、短辺0.35 m、深さ0.25 m である。2は底部回転糸切離し後周辺部を回転ヘラケズリする須恵器坏で、南比企窯跡群産である。遺物の年代は8世紀後半である。

第47号ピット（第118図）

F－14グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、長辺0.35 m、短辺0.30 m、深さ0.15 m である。3は還元されていない須恵器坏で、淡黄褐色を呈し、土師質である。遺物の年代は9世紀中葉である。

第49号ピット（第118図）

F－14グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径0.33 m、深さ0.30 m である。18は元豊通寶の行書銭である。北宋の神宗統治下、元豊元(1078)年初鋳、同3年にも500万貫が鋳造された。外径2.31㎝、内径1.80㎝、厚さ0.11㎝、重量は2.3 g ある。輪が広くやや小型である。意図的に銭を入れたのであれば、遺構の時期は中世ということになる。

第111号ピット（第118図）

E－8グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、長辺0.33 m、短辺0.30 m、深さ0.12 m である。10は土師器甕の底部である。縦位のヘラケズリによって薄く仕上られている。遺物の時期は9世紀代であろう。

第165号ピット（第118図）

E－9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長辺0.35 m、短辺0.30 m、深さ0.25 m である。4は回転糸切離し後、底部のほぼ全面を回転ヘラケズリする須恵器坏で、口径が大きい。南比企産である。遺物の年代は8世紀前半である。

第197号ピット（第118図）

E－9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長辺0.30 m、短辺0.28 m、深さ0.35 m である。14は常滑系の山茶碗である。底部糸切離し後、三角形の高台を付けている。灰白色を呈する。通常の物よりやや大きいが、中野晴久氏編年の第2型式（12世紀第3四半期）に比定できよう。

第198号ピット（第118図）

E－9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長辺0.72m、短辺0.53m、深さ0.63mである。16は短刀で、覆土上層から水平な状態で出土した。柱を立てる際に、地鎮具として掘方の中に搗き込んだものと推定している。刃渡り18.9㎝、目釘孔から先で茎尻を欠く。刃部の断面形は三角形で、鎬と棟はないようである。第74号土壙出土品と全体の形態は似るが、一回り大きく、重ねも厚い。木質を伴わないようなので、抜き身で地鎮に供されたものと考えられる。遺物の年代は、12世紀末から13世紀前半代であろう。

第203号ピット（第118図）

E－9グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径0.30 m、深さ0.15 m である。7は土師器坏で、丸みを帯びた体部はヘラケズリ、直立する口縁部はヨコナデされている。遺物の年代は8世紀前半代であろう。

第259号ピット（第118図）

E－9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長辺0.55m、短辺0.45m、深さ0.30mである。15は土製素焼きの鋳型である。胎土は水簸されているが、雲母と白色針状物質を含む。鍋の外型の上端部（実際に鋳造する時は伏せて行う）である。鋳込み面は剥離しているが、内側全体が還元している。外側には把手が付いている。鍋の口径は30㎝前後に復元できる。

第274号ピット（第118図）

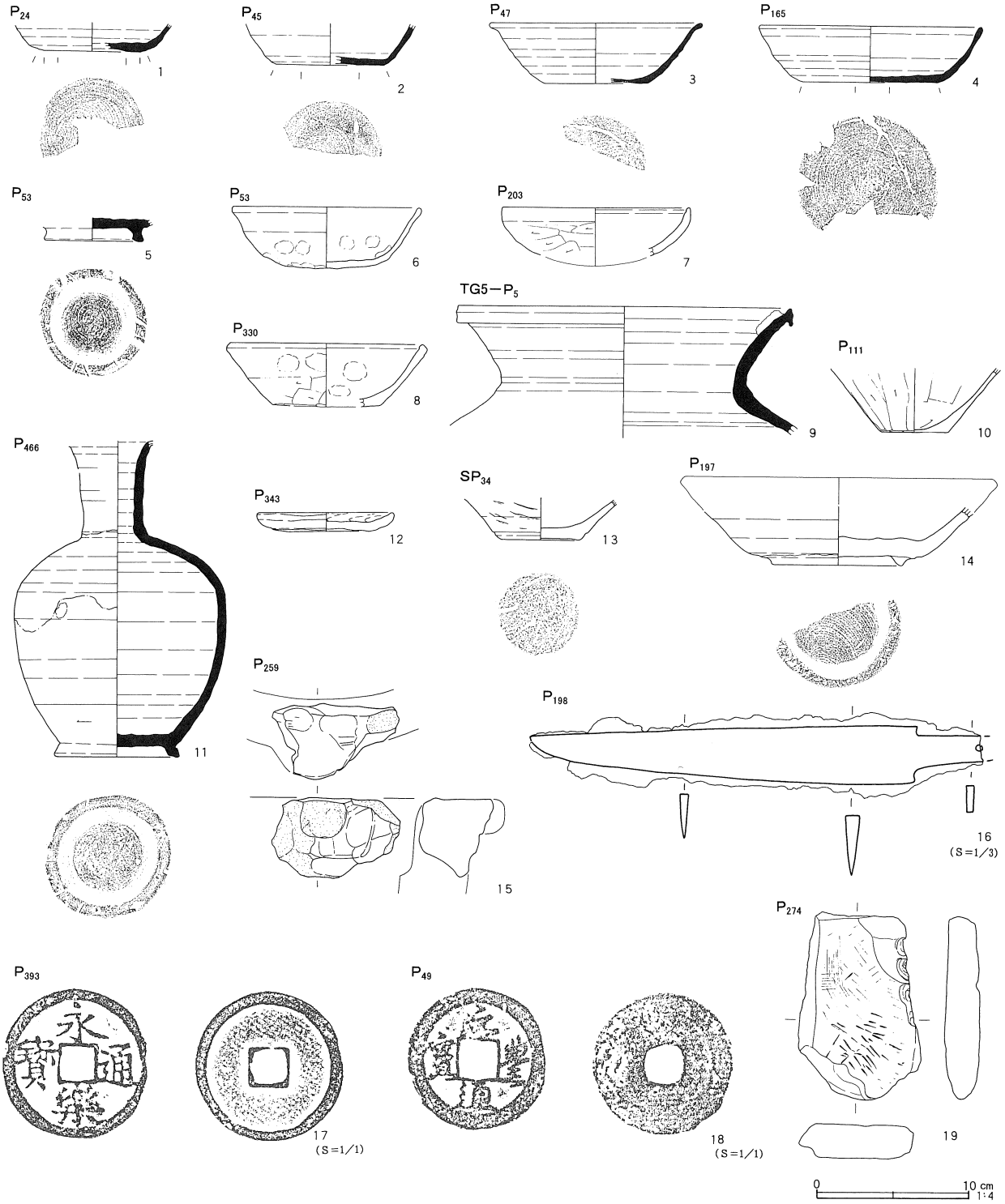
E－9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。

規模は、長辺0.40 m、短辺0.38 m、深さ0.16 mである。19は緑泥片岩製の板碑片を二次的に砥石とした物である。裏面には採取時の矢の痕が残る。表面は砥面で、平滑であり、刃先調整痕もある。右側面部も手持ち砥として使用されている。遺物の年代は中世後期の可能性が高かろう。

第330号ピット（第118図）

E－9グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長辺0.35 m、短辺0.30 m、深さ0.30 mである。8は土師器坏である。体部は直線的に開き、端部を内側に折り返している。指押え成形後、ヘラケズリを施す。須恵器を模倣したものと見れば、遺物の

第119図　ピット出土遺物



年代は9世紀前半代となろうか。

第343号ピット（第118図）

F－9グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径0.25 m、深さ0.10 m である。12は手捏ねの小型かわらけで、極めて浅い器種である。胎土には雲母粒子を含み、色調は褐色に近い。短い体部をきちんとナデているため、底部との境界は明瞭である。鎌倉市横小路遺跡の土壙1に類例があり、宗台秀明氏はⅠ B 2の型式名を与え、12世紀第4四半期の早い時期に当てている。

第393号ピット（第118図）

C－11グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径0.54 m、深さ0.63 m である。17は永楽通寶で、外径2.48 cm、内径2.05 cm、厚さ0.14 cm、重量は2.7 g ある。明の永楽六（ 1408 ）年の鋳造である。字形美しく、鮮明な鋳上りである。

第466号ピット（第118図）

C－10グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長辺0.43 m、短辺0.33 m、深さ0.15 m である。11の須恵器長頸瓶は口縁端部を僅かに欠くだけの完形品で、土壙内に横たわったまま割れずに出土した。暗灰色の焼き上がりであるが、肩部にはオリーブ色の降灰が付く。器形にやや歪みがある。9世紀代のものであろう。

B 区 H 4グリッド第24号ピット（第118図）

H－4グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径0.48 m、深さ0.65 m である。1は底部回転糸切離し後、周辺部を回転ヘラケズリする須恵器坏で、南比企産である。時期は8世紀後半である。

5号試掘壙第5号ピット（第118図）

E－9グリッドに位置する。平面形は不整方形である。規模は、長辺0.40 m、短辺0.35 m、深さ0.10 m である。9は須恵器甕の口頸部で、窯壁が付着している。南比企産で、時期は8から9世紀代である。

ピット出土遺物観察表（第　図）

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
P_{24}	1	須恵器坏	－	(1.9)	7.0	E F	Ⅱ	10 Y 6/1	50	南比企産
P_{45}	2	須恵器坏	－	(2.7)	(7.0)	B C F	Ⅰ	10 Y 6/1	30	南比企産
P_{47}	3	須恵器坏	(13.7)	3.9	(6.6)	A E H	Ⅲ	7.5 YR 8/3	25	産地不明
P_{165}	4	須恵器坏	14.5	3.7	8.8	E F H	Ⅱ	5 Y 8/1	50	南比企産
P_{53}	5	須恵器高台杯	－	(1.5)	6.3	B F	Ⅰ	N 5/0	100	南比企産
P_{53}	6	土師器坏	(12.2)	4.0	－	A B E	Ⅲ	7.5 YR 7/6	60	
P_{203}	7	土師器坏	(12.2)	(3.1)	－	A B E	Ⅰ	5 YR 6/6	20	
P_{330}	8	土師器坏	(12.6)	4.1	(7.0)	A E	Ⅰ	5 YR 6/6	10	
TG 5	9	須恵器甕	(21.6)	(8.2)	－	F J	Ⅰ	N 4/0	75	南比企産
P_{111}	10	土師器甕	－	(4.2)	(4.5)	A B E	Ⅰ	5 YR 6/6	30	
P_{466}	11	須恵器長頸瓶	－	(20.6)	7.8	C J	Ⅰ	N 6/0	95	東金子窯産か、肩部自然釉
P_{343}	12	かわらけ	9.0	1.2	5.0	A B G K	Ⅱ	7.5 YR 7/3	70	手捏ね
SP_{34}	13	かわらけ	－	(2.6)	5.0	G	Ⅰ	10 YR 7/3	90	ロクロ成形
P_{197}	14	山茶碗		(3.8)	8.6	－	Ⅰ	N 7/	50	常滑系
P_{259}	15	鋳型	幅8.4	高5.1	厚4.6	F G	Ⅰ	7.5 YR 7/3	－	
P_{198}	16	短刀	長22.0	幅2.9	厚0.7					
P_{393}	17	古銭	外径2.48	内径2.05	厚0.11					永楽通寶(1408年) 明、重量2.7g
P_{49}	18	古銭	外径2.31	内径1.8	厚0.11					元豊通寶(1078年)、重量2.3g
P_{274}	19	砥石	長12.0	幅7.9	厚2.3					青緑色緑泥片岩製、板碑転用、重量370g

7　グリッド・調査区出土の遺物

遺構に直接伴わない遺物について出土グリッド名または遺構名を付してあげておく。

（1）縄文から古墳時代の遺物

1は第18号溝から出土した縄文土器である。表面は橙褐色、器肉は黒色を呈する。外面に2本の沈線文があり、後期初頭の称名寺式である。2は第31号溝4区下層から出土した土師器高坏で、内外面ともヘラミガキの後赤彩を施している。五領期のものである。3は第31号溝3区下層から出土した土師器器台で、外面にヘラミガキを施す。やはり五領期のものである。

4は第41号溝から出土した厚手大型の高坏で、やや特殊であるが、五領期のものであろう。5は台付甕の台部で、外面はハケメを縦位のヘラナデで消しており、東海系S字甕の模倣品であろう。6も第31号溝6区からの出土で、球形胴の壷の底部である。外面は縦位のヘラナデ調整が施されている。7は第31号溝から出土した土師器壷で、粗いハケメの後に、ヘラミガキが加えられている。五領期のものである。8から10は円筒埴輪片である。いずれも乳白色を呈し、外面はタテハケ調整、内面は斜めハケ調整後ナデが加わる。10の外面は赤彩されている。8と9は第74号土壙から、10は第31号溝内D10グリッドからの出土である。これらは川西宏幸氏編年のV期の中でも古い特徴を有しており、5世紀末ないし6世紀初頭の時期が推定できる。

（2）奈良時代から平安時代の遺物

11はG8グリッド出土の須恵器高台付坏で、底部が突出しているため、出尻と俗称される物である。底部は回転糸切り後、全面回転ヘラケズリを施し、高台を貼り付けている。南比企産であり、7世紀末から8世紀初頭に位置づけられている石田窯の製品の可能性がある。底面は摩耗しており転用硯として使用されている。12はG13グリッド出土の底部を回転糸切り放しする須恵器坏で、南比企産である。13もG13グリッド出土の須恵器坏で、南比企産である。14はG11グリッド出土の須恵器坏で、底部を回転糸切離し後、周辺部を回転ヘラケズリしている。外面横向きに「幸」の字が墨痕鮮やかに大書されている。南比企産である。15は試掘第5トレンチ西側出土の須恵器蓋で、天井部は回転糸切離し後、周辺部を回転ヘラケズリしている。南比企産である。16は表面採集の須恵器円面硯で、口縁部直下に鍔状の凸帯が巡り、その下に長方形透かし孔が開けられている。南比企産である。17はF7グリッド出土の須恵器捏鉢である。南比企産である。18は表面採集の須恵器甕片で、南比企産である。

（3）中世前期の遺物

19はG10グリッド出土の中国製白磁碗で、薄手の端反り碗である。内面に細かい筋彫り文様がある。山本信夫氏編年のⅥ－1b類に相当し、C期（11世紀後半～12世紀前半）の時期が与えられている。20はH11グリッド出土の中国製白磁皿で、底部は露胎である。山本信夫氏編年のⅤ－1類に相当し、C期（11世紀後半～12世紀前半）の時期が与えられている。21はE9グリッド出土の中国製青磁碗で、内面に劃花文がある。山本信夫氏編年の龍泉窯系Ⅰ－2b類に相当し、D期（12世紀中頃～後半）の時期が与えられている。22はH2グリッド出土の中国製青磁碗で、見込を含む内面に劃花文がある。山本信夫氏編年の龍泉窯系Ⅰ－2a類に相当し、D期（12世紀中頃～後半）の時期が与えられている。23はB区表面採集の中国製青磁碗で、外面に細い蓮弁文があり、釉が厚く施釉されている。山本信夫氏編年の龍泉窯系Ⅲ－2類の大碗に相当し、F期（13世紀中頃～1300年前後）の時期が与えられている。25はH2グリッド出土の手捏ねの小型かわらけで、薄手の作りで、焼成が良く、橙色を呈する。口縁部は2段ナデで端正な作りである。鎌倉市横小路遺跡の溝2下層出土品に類例があり、宗台秀明氏の編年ではⅠB1類に相当し、12世紀世紀末から13世紀初頭の年代が導き出されている。28はF8グリッド出土の常滑系片口鉢で、高い高台が付く。体部の丸い形状から、中野晴久氏編年のⅠa型式（1100年～1130年）に比定できよう。27はC・D3～4グリッド出土のロクロかわらけで、水簸した滑らかな肌の特徴的な胎土で、かなり白っぽい。外底面を回転糸切離し後にヘラケズリする技法を伴う。26はG12グリッド採集品で、残存率90％のロクロかわらけである。内底面のナデ技法と外底面のスノコ状圧痕が明瞭に認められる。田中信氏編年の山茶碗模倣型A2類に相当し、Ⅲc期（13世紀後半～14世紀初頭の間の第3期）に比定できよう。29は常滑系の片口鉢で、胎土に石英等の細礫を混入する。外面は木口状工具による縦方向の調整で、内面には指頭圧痕が深く残る。

中野晴久氏編年の片口鉢Ⅱ類に相当し、6 a 型式に最も近く、13 世紀第3四半期に比定できよう。

（4）中世後期の遺物

24 は小型の手捏ねかわらけで、見込が大きく窪む。特殊な物だが、16 世紀前葉とされる鎌倉出土品や上総金谷城跡出土品に全体の形状は近似している。30 は1次調査 A 区表面採集品の瀬戸美濃系の擂鉢で、錆釉が施釉されている。底部の特徴から大窯期のもので、16 世紀代に比定できよう。31 と 32 は内耳土鍋である。前者は瓦質、後者は土師質で口縁部の形状に共通性がある。口縁部が長く、耳もやや縦長になっていることから、浅野晴樹氏編年のⅢ期（15 世紀後半）に比定できよう。31 は底部が丸くなる気配があり、児玉町古井戸遺跡出土例と類似するものとなろう。31 は E 7 グリッド、32 は E 8 グリッドの出土である。33 と 34 はともに G 7 グリッド出土の焙烙で、34 には内耳が残存している。体部内側に取り付く小振りの物で古い特徴を持っている。16 世紀後半代に比定できよう。35 は D 9 グリッド出土の古瀬戸灰釉折縁皿で、藤沢良祐氏編年の後Ⅳ期新段階（15 世紀後葉）に比定できよう。36 は D 9 グリッド表面採集の瀬戸美濃系の鉄釉丸碗で、大窯第3段階後半の特徴を有していて、16 世紀後葉に比定できよう。37 は中国製染付（青花）碗で、小野正敏氏編年の F 群に相当し、見込の文様も例示されたものと共通している。16 世紀末に編年されている。漳洲窯産であろう。

38 は G 13 グリッド出土の中国製白磁皿で、陶器質の胎土に乳白色の釉が施されるが、底部は露胎である。森田勉氏編年の D 群に相当し、15 世紀代の年代が与えられている。39 は瀬戸美濃系の天目茶碗で、大窯第2段階前半に相当し、16 世紀前葉に比定できよう。40 はグリッド出土の天目茶碗底部である。81 は G 9 グリッド低地部暗青灰色粘土層出土の漆器椀で、総黒色仕上げである。時期は限定できないが、中世後期であろう。内面のロクロ目が明瞭である。

（5）近世の遺物

41から50は近世陶磁器である。41は1次調査A区表面採集の染付急須で、薄手の作りが良い物である。42はG13グリッド出土の肥前系佛飯器で、青磁釉を施釉している。九州編年Ⅳ期（1690～1780年代）に類例がある。43はB区表面採集の肥前系染付丸碗で、丸に蔦文様を描き、裏銘に崩れた「渦福」がある。九州編年Ⅴ－2期（1750から1770年代）の波佐見焼に類例がある。44は1次調査E・F－1・2グリッド出土の灯明皿の下皿である。内面にだけ透明釉が施釉されている。45はF 8 グリッド出土の瀬戸美濃系陶器皿で、透明釉が施釉されている。登窯Ⅱ期（1635～1645年）に相当しよう。46は1次調査B 6 グリッド出土の瀬戸美濃系の皿か鉢で、外面と一段下がりの見込に長石釉が施釉されていて、重ね焼きの目が付いている。47は肥前系の染付小丸碗で、内外とも菊花文散らしで埋め尽くしている。九州編年Ⅳ期の1710年代から1750年代に類例がある。48はA 9 グリッド出土の肥前系丸皿で、内面に二重圏線と数単位の斜格子文を描き、見込は蛇の目釉剥ぎとする。九州編年Ⅴ－2～3期（1750～1810年代）の波佐見焼と見られる。大量生産品の最たる下手であるという。49 は B 区表面採集の肥前系染付鉢で、広東形である。外面は市女笠、雲などの散らし文、内面は見込に荒磯文、口縁部に勾雷文を描く。九州編年Ⅴ期（1780～1860年代）に比定できる。50 は1次調査 A 区出土の擂鉢で、赤紫色の錆釉が施釉され、備前焼と推定される。51 は D 8 グリッド出土の火鉢で、素焼きの土器である。52 は F 9 グリッド出土の瓦質火鉢で、体部には勾雷文が印刻され、台部はミガキ調整の上に赤い塗りが僅かに残る。53 は K 5 グリッド出土の七厘で、素焼き土器である。内部に別作りの風炉と五徳を兼ねた物を組み込んでいる。54 は B 区表面採集の瓦質植木鉢で、桶形を呈し、底部に円孔がある。1800 年以降の在地産であろう。55 は2次調査表土出土の土錘で、土製素焼き。棒に粘土を巻き付けて製作している。大型品であり、必ずしも漁労用とは限らないだろう。重量は 131.6 g ある。雲母と粗砂を含む胎土はかわらけと共通している。

56 から 64 は板碑片である。56 は C・D－3・4

グリッド出土で、紀年銘の「日」字が残る。57はA・B－5・6グリッド出土で、浅い二条線と枠線に囲まれて月輪付のキリークがある。58は1次調査表面採集の頭部破片で、二条線と月輪がある。59は2次調査表土出土の頭部で、二条線がある。60は2次調査表土出土の体部片で、異体キリークと蓮座の一部が残る。61は1次調査F6グリッド出土で、「□（五ヵ）年」の紀年銘の一部が残る。62はA・B－5・6グリッド出土で、キリークは深い薬研彫り。上面に刃物傷、右側面研磨と2次的に砥石として利用され、表面は火を受けている。63は1次町調査G7グリッド出土で、蓮座とキリークの一部が残る。64は1次調査表面採集の蓮座部分の剥離破片である。

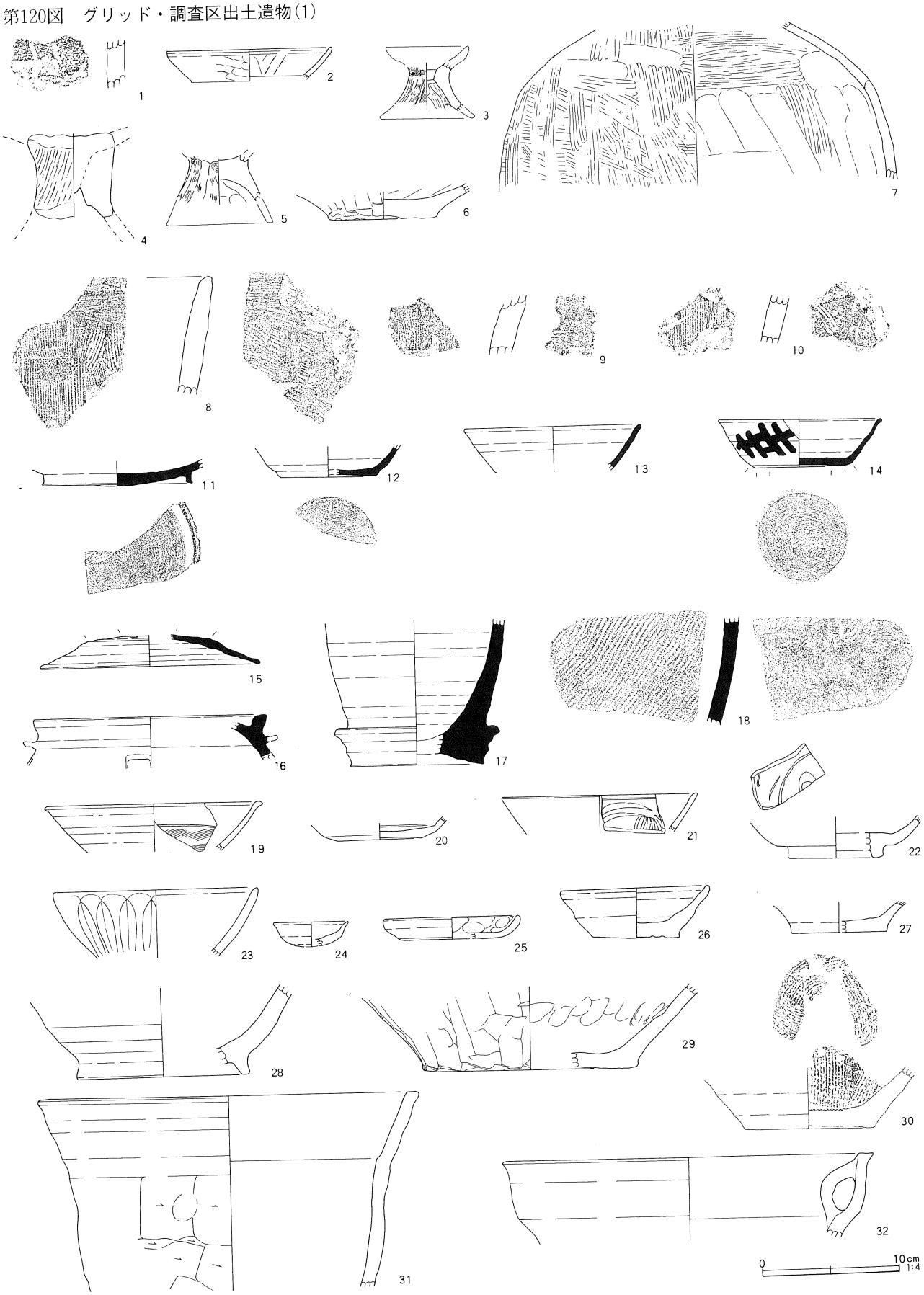
65から68は石製品である。65はB区出土の石硯で、暗灰色の緻密な泥岩製である。両面を使用し、最後に砥石として再利用している。中世に属する可能性があろう。66は1次調査B4グリッド出土の緑泥片岩自然礫製の砧と推定される物である。両端が敲打によって欠損している。線条痕からすりこぎのような用法も考えられる。67はG10グリッド出土の緑灰色を帯びる凝灰岩製の砥石で、薄く剥離している。裏面は未使用である。68はH3グリッド出土の四面砥で、灰白色の凝灰岩製。上下両端が欠損している。

69から72は鉄製品である。69はB区出土の鉄塊で、製品ではない。70はB区出土の鉄製品で、台形の鉄板の上部が細い帯状となり、反りが認められる。用途は不明である。71は1次調査D・E－7・8グリッド出土の鉄製品で、3個の小孔が開けられている。下端の欠損部は直線的に延びるのではなく、広がりを持っている。表面には薄い鉄板片が付着する。72はB区出土の鉄製品で、外見は鍋蔓に似ているが、X線写真調査の結果、径2mmほどの鉄線を三つ編みにしたものと判明した。用途は不明である。82はF9グリッド出土の長方形の木札で、木口は調整されているが、墨書などはなく、用途不明である。保存状態の良さから近世の可能性が高い。

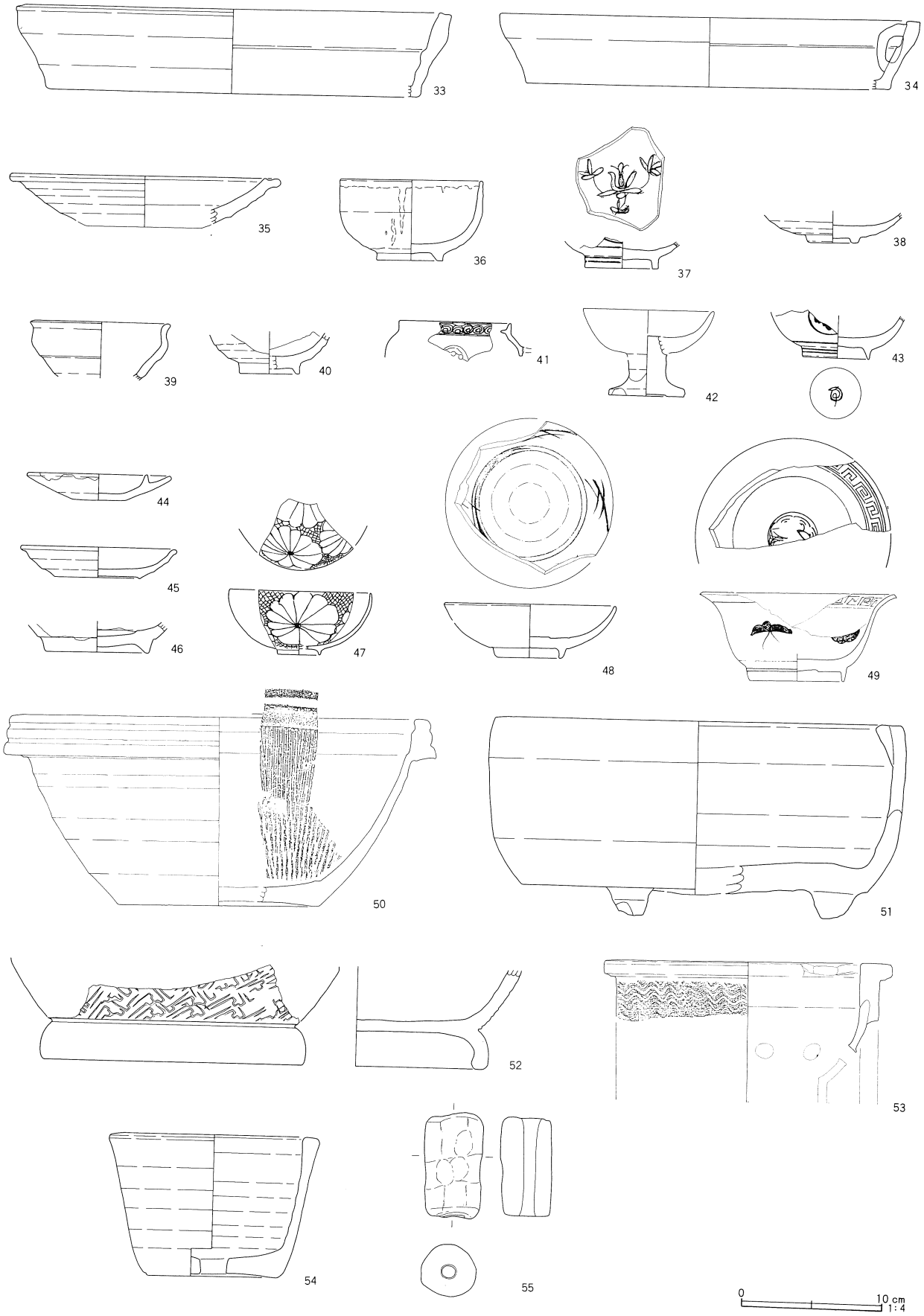
（6）古銭

73から80は古銭である。73は第1号住居跡出土の治平元寶の真書銭で、北宋の英宗即位元年である治平元（1064）年の鋳造。外径2.38㎝、内径1.99㎝、厚さ0.12㎝、重量は2.7ｇある。74は1次調査F8グリッド出土の熙寧元寶の篆書銭で、北宋熙寧元（1068）年の鋳造である。外径2.30㎝、内径1.90㎝、厚さ0.09㎝、重量は2.0ｇある。75は1次調査A区出土の天聖元寶真書銭である。北宋の仁宗即位元年の天聖元（1023）年鋳造である。外径2.40㎝、内径2.08㎝、厚さ0.13㎝、重量は2.1ｇある。76は表面採集の大観通寶で、北宋の大観元（1107）年の鋳造である。77から80はA区出土の永楽通寶で、4枚が錆付いて出土した。明の永楽六（1408）年鋳造である。外径2.47～2.49㎝、内径2.04～2.10㎝、厚さ0.13～0.17㎝、重量は2.8～3.8ｇある。

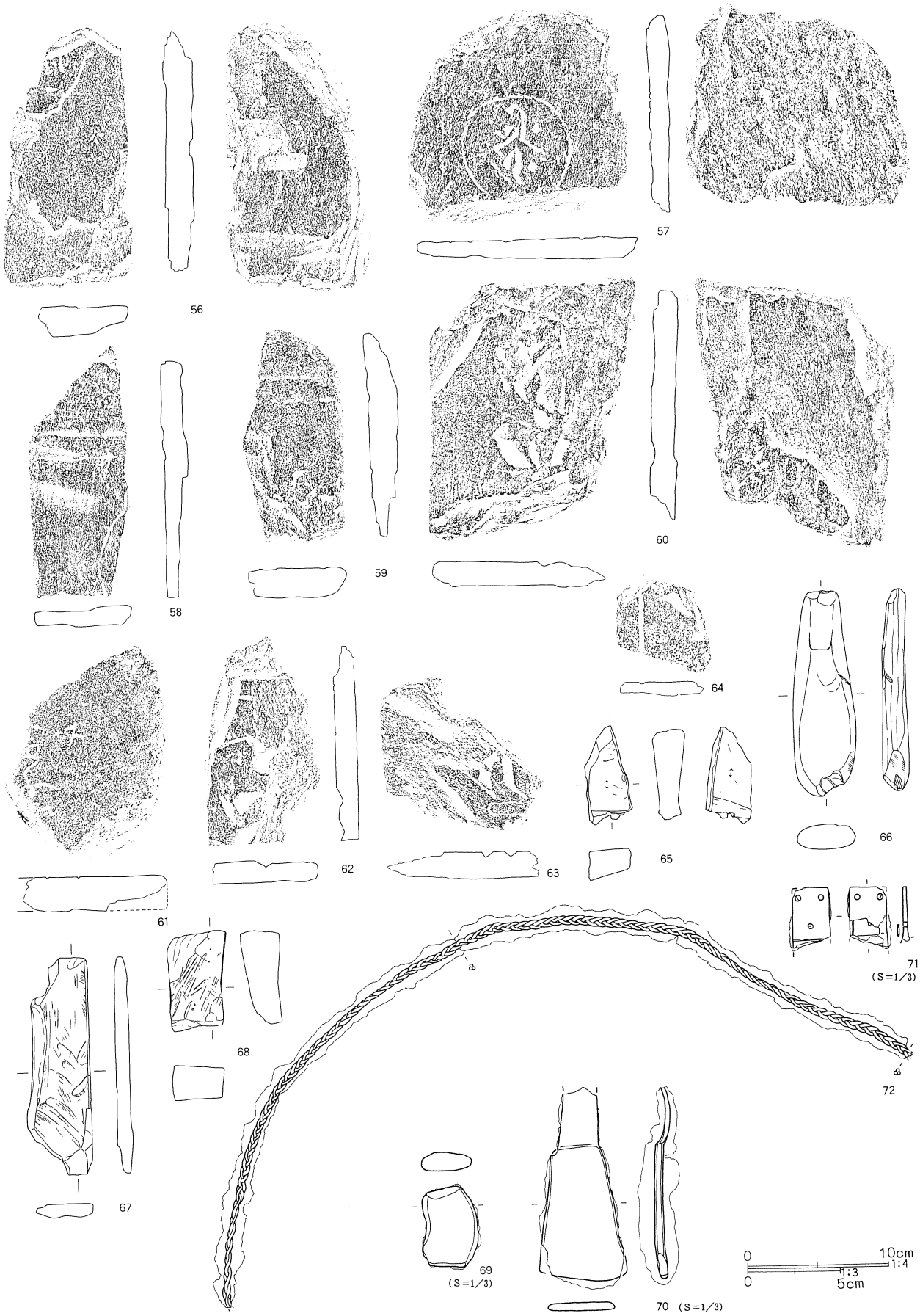
第120図　グリッド・調査区出土遺物(1)



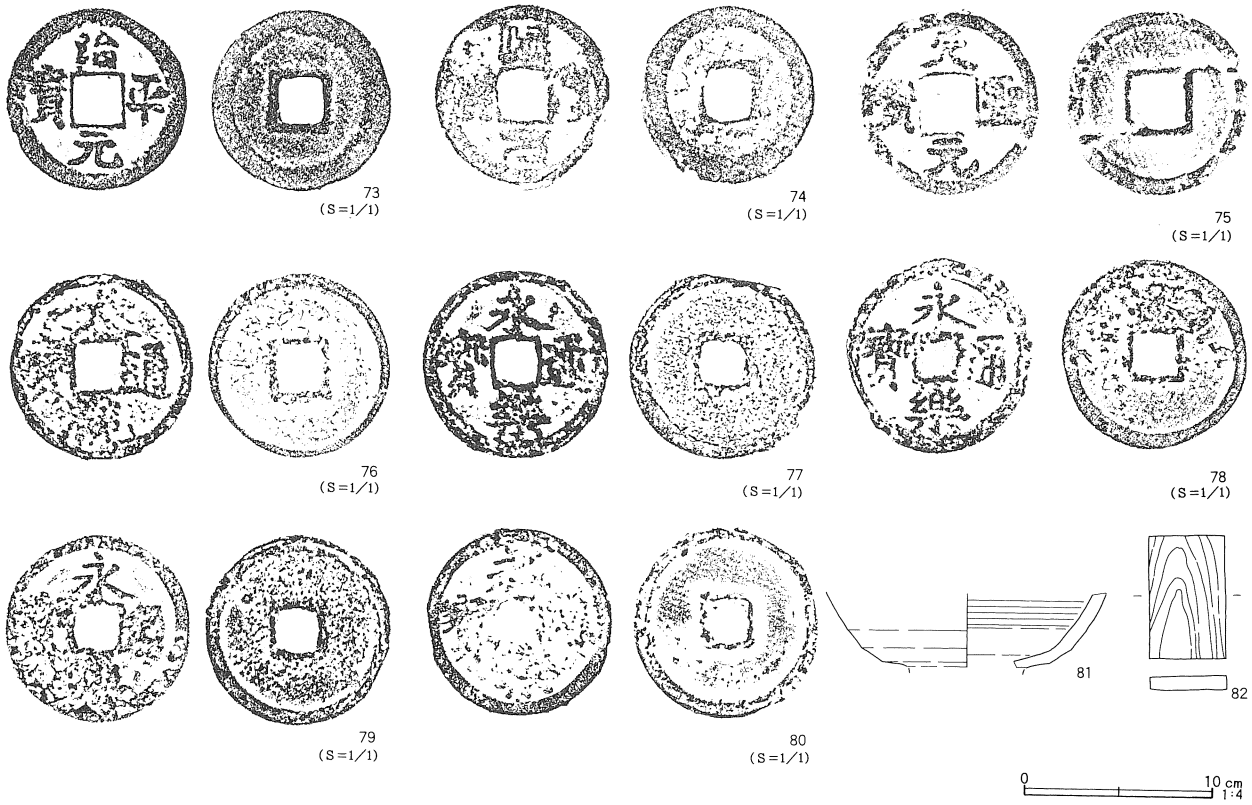
第121図　グリッド・調査区出土遺物(2)



第122図　グリッド・調査区出土遺物(3)



第123図　グリッド・調査区出土遺物(4)



グリッド出土遺物観察表（第　図）

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
グリッド	1	縄文土器	－	－	－	ＡＢＪＬ	Ⅲ	7.5YR５／４	－	称名寺式
グリッド	2	土師器高坏	(12.0)	(2.3)	－	ＢＥＬ	Ⅰ	10YR６／３	10	五領式
グリッド	3	土師器器台	－	(3.4)	－	ＢＣＦＧ	Ⅰ	５YR６／６	90	五領式
グリッド	4	土師器高坏	－	(6.0)	－	ＢＪＬ	Ⅱ	５YR６／６	100	五領～和泉式、脚柱部、№５
グリッド	5	土師器台付甕	－	(3.6)	－	ＡＢＦＧ	Ⅱ	５YR６／４	80	五領式
グリッド	6	土師器壺	－	(2.5)	7.8	ＡＢＧＬ	Ⅰ	10YR６／３	60	五領式
グリッド	7	土師器壺	－	(11.6)	－	ＡＢＥＧＨＬ	Ⅰ	2.5YR５／６	30	五領式、胴径(29.0)
グリッド	8	円筒埴輪	(28.0)	－	－	ＡＢＧＫ	Ⅰ	2.5Y８／２	10	№74
グリッド	9	円筒埴輪	－	－	－	ＡＢＧＪＬ	Ⅰ	10YR８／２	－	
グリッド	10	円筒埴輪	－	－	－	ＡＢＧ	Ⅰ	2.5Y７／２	10	赤彩、内面煤付着
グリッド	11	須恵器高台坏	－	(1.8)	(10.8)	ＥＦ	Ⅰ	10Y６／１	30	南比企産　砥石として転用
グリッド	12	須恵器坏	－	(2.3)	(7.0)	ＥＦ	Ⅰ	10Y６／１	25	南比企産
グリッド	13	須恵器坏	(12.8)	(3.3)	－	ＢＦ	Ⅱ	10Y７／１	10	南比企産
グリッド	14	須恵器坏	11.8	3.5	6.4	ＣＥＦ	Ⅰ	N５／０	95	南比企産　墨書土器「幸」
トレンチ	15	須恵器蓋	(15.8)	(2.2)	－	ＥＦＨ	Ⅱ	５Y６／１	20	南比企産
表採	16	須恵器円面硯	(16.0)	(3.2)	－	ＢＣＦ	Ⅰ	N５／０	10	南比企産　透かし孔有
グリッド	17	須恵器捏鉢	－	(10.5)	(9.7)	ＢＣＦ	Ⅱ	５Y６／１	35	南比企産
表採	18	須恵器甕	－	－	－	ＢＥＦ	Ⅰ	7.5Y６／１	－	南比企産　平行叩き、青海波紋
グリッド	19	白磁碗	(16.0)	(3.5)	－	－	Ⅰ	N８／０	12	中国製
グリッド	20	白磁皿	－	(1.5)	6.0	－	Ⅰ	2.5Y８／２	30	中国製、釉色茶色味のある灰白色
グリッド	21	青磁碗	(14.2)	(2.7)	－	－	Ⅰ	7.5Y６／１	10	中国製、内面草花文
グリッド	22	青磁碗	－	(3.0)	(6.8)	－	Ⅰ	N７／	15	中国製、釉色明るいグリーン
表採	23	青磁碗	(15.0)	(5.0)	－	－	Ⅰ	10Y８／１	15	中国製、釉色ヒスイ色、鎬蓮弁文
表採	24	かわらけ	5.6	(1.8)	－	ＡＢＤＥＨＬ	Ⅱ	５YR５／６	40	手捏ね
グリッド	25	かわらけ	(10.0)	(1.6)	(6.6)	ＡＥＧＨ	Ⅰ	５YR６／６	30	手捏ね
表採	26	かわらけ	10.8	3.6	6.3	ＡＦＨ	Ⅰ	５YR７／６	90	ロクロ成形
グリッド	27	かわらけ	－	(2.2)	(6.9)	Ａ	Ⅰ	10YR７／２	40	ロクロ成形、白かわらけ仿
グリッド	28	片口鉢	－	(6.4)	(12.6)	ＢＧ	Ⅰ	10Y７／１	20	常滑系
グリッド	29	片口鉢	－	(6.0)	(15.6)	ＢＧ	Ⅰ	10YR６／３	30	常滑系

遺構名	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
表採	30	擂鉢	—	(4.4)	9.2	BC	Ⅰ	5P2／1	90	瀬戸鬼板、内外面紫黒色釉
グリッド	31	内耳土鍋	(28.0)	(14.1)	—	BGI	Ⅱ	2.5Y7／2	20	瓦質
グリッド	32	内耳土鍋	(27.0)	(6.0)	—	AEH	Ⅰ	5Y7／1	10	土師質
グリッド	33	焙烙	(31.0)	6.0	(26.6)	ABG	Ⅰ	2.5Y7／1	10	瓦質
グリッド	34	焙烙	(30.0)	5.0	(26.0)	ABDFG	Ⅰ	7.5YR7／6	10	
グリッド	35	折縁皿	(19.2)	(3.3)	—	G	Ⅰ	5Y7／2	12	古瀬戸、内外面灰釉
グリッド	36	鉄釉碗	10.2	5.7	4.7	C	Ⅰ	2.5Y7／2	60	瀬戸美濃系、内外面鉄釉
グリッド	37	青花碗	—	(1.9)	5.2	—	Ⅰ	5Y8／1	70	中国製
グリッド	38	白磁皿		(2.3)	3.6	—	Ⅰ	5Y8／1	80	中国製
表採	39	天目茶碗	(10.0)	(4.0)	—	—	Ⅰ	5Y8／1	20	瀬戸美濃系、鉄釉
グリッド	40	天目茶碗	—	(3.0)	4.2	—	Ⅰ	5Y8／1	35	鉄釉
表採	41	染付急須	(8.0)	(2.3)	—	—	Ⅰ	5Y8／1	20	呉須、濃藍色
グリッド	42	青磁仏飯器	—	(4.4)	5.4	—	Ⅰ	10Y8／1		肥前系
表採	43	染付碗	—	(3.1)	4.8	—	Ⅰ	5Y8／1	40	波佐美焼
グリッド	44	灯明皿	10.2	1.9	3.8	C	Ⅰ	7.5Y6／1	100	貫入、内面2.5Y6／1釉
表採	45	陶器皿	11.0	2.2	6.0	—	Ⅰ	7.5Y8／1	70	瀬戸美濃系、透明釉
グリッド	46	陶器鉢	—	(2.2)	7.4	—	Ⅰ	5Y8／1	100	瀬戸美濃系、長石釉
表採	47	染付碗	(10.0)	4.5	(3.0)	—	Ⅰ	—	40	肥前系
グリッド	48	染付皿	12.3	3.8	4.4	—	Ⅰ	N7.5／	80	波佐美焼
表採	49	染付鉢	13.8	6.3	(6.8)	—	Ⅰ	N8／	40	肥前系
表採	50	擂鉢	(29.6)	13.3	(14.4)	BE	Ⅰ	10R5／6	20	備前焼、5YR4／2の薄い釉
グリッド	51	火鉢	29.2	13.8	24.6	ABGH	Ⅰ	5YR5／6	50	土器
グリッド	52	火鉢	—	(7.0)	18.5	—	Ⅰ	5Y6／1	70	瓦質
グリッド	53	七里	20.6	(6.3)		GH	Ⅰ	5YR6／4	20	土器
表採	54	植木鉢	15.0	10.1	8.0	AEH	Ⅱ	10YR7／3	60	瓦質
表採	55	土錘	長7.5	外径3.7	孔径0.8		Ⅰ	7.5YR6／4	100	土師質、重量131.6g
グリッド	56	板碑	長18.5	幅9.3	厚2.2					緑泥片岩
グリッド	57	板碑	長15.4	幅16.1	厚1.6					緑泥片岩
表採	58	板碑	長17.8	幅20.8	厚1.6					緑泥片岩
表採	59	板碑	長14.5	幅7.0	厚2.1					緑泥片岩
表採	60	板碑	長17.0	幅14.0	厚1.8					緑泥片岩
グリッド	61	板碑	長15.5	幅11.0	厚2.5					緑泥片岩
グリッド	62	板碑	長14.5	幅7.7	厚1.5					緑泥片岩
グリッド	63	板碑	長10.7	幅10.8	厚1.9					点紋緑泥片岩
表採	64	板碑	長6.5	幅6.5	厚1.0					絹雲母片岩
表採	65	石硯	長7.0	幅2.9	厚2.3					暗灰色の泥岩製
グリッド	66	砧石	長14.6	幅4.4	厚1.9					緑泥片岩
グリッド	67	砥石	長15.4	幅4.1	厚1.0					緑灰色の凝灰岩製、重量107.7g
グリッド	68	砥石	長6.6	幅3.8	厚2.5					灰白色の凝灰岩製、重量117.1g
表採	69	鉄塊	長4.9	幅3.1	厚1.0					製品ではない
表採	70	鉄製品	長10.2	幅4.3	厚0.4					用途不明品
グリッド	71	鉄製品	長3.2	幅2.0	厚0.4					用途不明
グリッド	72	鉄製品	長68.0	幅0.6	厚0.4					用途不明品
グリッド	73	古銭	外径2.38	内径1.99	厚0.12					治平元寶(1064年)、重量2.7g
グリッド	74	古銭	外径2.3	内径1.9	厚0.09					熙寧元寶(1068年)、重量2.0g
表採	75	古銭	外径2.4	内径2.08	厚0.13					天聖元寶(1023年)、重量2.1g
表採	76	古銭	外径2.43	内径2.2	厚0.15					大観通寶(1107年)、重量3.8g
表採	77	古銭	外径2.47	内径2.1	厚0.14					永楽通寶(1408年) 明銭、重量3.6g
表採	78	古銭	外径2.49	内径2.1	厚0.17					永楽通寶(1408年) 明銭、重量3.8g
表採	79	古銭	外径2.48	内径2.09	厚0.15					永楽通寶(1408年) 明銭、重量3.4g
表採	80	古銭	外径2.47	内径2.04	厚0.13					永楽通寶(1408年) 明銭、重量2.8g
グリッド	81	漆器椀	(15.0)	(4.0)	高台推定高(0.0)				25	
グリッド	82	木札	長6.5	幅4.0	厚0.7					

Ⅴ　まとめ

1　堂地遺跡の変遷

（1）縄文から古墳時代

今回の堂地遺跡の発掘調査で明らかになった過去の人間の営為の跡は縄文時代後期初頭の称名寺式期まで溯る。しかし、僅かの遺物が別々の地点から単発的に出土しただけで、住居跡の発見には至らず、定住生活を明らかにすることはできなかった。弥生時代の遺物は皆無であり、この地域での水稲耕作の開始は少し遅れた模様である。続く古墳時代前期には第16号井戸が掘削されており、定住生活が始まったと見なすことができる。住居跡はＡ１区の南側隣接地に展開している可能性が高いであろう。古墳時代後期では、第30・31号溝に流れ込んだ状態で円筒埴輪片が出土している。その調整技法等の特徴から、時期は５世紀後葉から６世紀初頭とみられた。今のところ川島町内では最古の埴輪となろう。付近に墳丘の残る古墳は現存しないが、隣接地に削平された古墳跡がある可能性を考えて良いであろう。

（2）古代

A・B両区を合せて律令時代の竪穴住居跡が11軒検出されており、本格的定住生活が確認できる。出土遺物によって３期に分期が可能である。

第Ⅰ期（８世紀中葉から後半）

Ａ４区の第３号住居跡とB区の第９号住居跡の２軒が当該期に属す。両者の距離は74ｍあり、その散在ぶりがわかる。竪穴の床面積は３期のなかで最も大きい。カマドの方位は北東とほぼ真北であり、統一されていない。Ａ２区に８世紀中葉から後葉にかけて連続的に掘り直しの行われた３基の井戸があり、集落の中心部が南側に展開することを示唆している。遺物の特徴は文字関連資料の集中であり、「幸」の墨書須恵器、円面硯、須恵器高台坏の転用硯、風字硯、出尻と通称される須恵器高台坏の転用硯が出土している。出尻の出土から集落の開始期は７世紀末ないし８世紀初頭まで溯る可能性が高かろう。官人かそれに準じる人物の存在を示すが、掘立柱建物は検出されておらず、隣接地での検証を経ないと遺跡の性格付けは困難である。

第Ⅱ期（８世紀末から９世紀初頭）

Ａ３区の第５号住居跡、Ａ１区の第２・10・11号住居跡の４軒が該期に属する。南北に分かれて分布し、遺構空白部にはすでに浅い谷が存在していたことが分かる。通常の規模の竪穴住居と極めて小規模な竪穴住居とが共存しているが、後者は地上式の住居に土間が付く型式とも考えられる。カマドの方位は不統一である。第29・54・84の溝が掘削され、排水への配慮がなされると共に区画の意識が生じている。

第Ⅲ期（９世紀前半から中葉）

Ａ１区の第６号住居跡、Ａ２区の第１号住居跡、Ａ３区の第４号住居跡、Ａ４区の第７号住居跡、B区の第８号住居跡の５軒が該期に属す。一定の間隔をおいて広く分布する傾向が窺われる。カマドの方位は北北東から北北西のものでほぼ統一される。第23号溝のような規模の大きな溝が集落全体の排水と区画を兼ねる形で掘削される点は第Ⅱ期からの発展的な現象といえよう。

また、平面プラン円形もしくは長円形の土壙が７基検出されており、土壙墓の可能性も考えられる。瓦塔の出土は集落への仏教の浸透を示すものであろう。前代に引続き南比企窯跡群産の須恵器が食器類の主体をなしているが、灰釉平瓶・灰釉長頸瓶・灰釉壷・灰釉三足盤、緑釉陶器も出土しており、集落の豊かさと先進性の指標となろう。

なお、古代の竪穴住居は例外なく覆土と地山が同質で、有機質土の発達を見ない。このことは、再三の洪水での被害状況を示すものであろう。９世紀後葉を最後に集落は廃村となる。

（3）中世前期

堂地遺跡に再び住人が登場したのは12世紀後半代のことであった。彼らの営為の跡を4期に分けて概述する。

第Ⅳ期（12世紀後半）

自然流路であった浅い谷を幅6mの規模で掘削したのが第1号溝であり、周辺の開発と洪水防止を目的としたものであろう。第1号掘立柱建物は、三間三間の側柱建物の三方に廂が付く。面積は9坪半弱である。B区南端には第6号井戸があり、調査区外に建物が存在する可能性が高い。このほか、結線ができたわけではないが、A4区とB区北東部にも主軸方向の一致する掘立柱建物の存在を推定しうる。このことから建物の散在と防御施設の不在を指摘しうる。

該期後半の第Ⅳb期（12世紀末）には、中心的な建物の改築が行われた。第3号掘立柱建物は五間五間の中抜け総柱建物で、建築技法の進展を看取しうる。土間部分に掘り込み（第34号土壙）を伴っていたと推測される。床面積は26坪半ある。該期の消費生活を物語るのが第37・44・74号土壙出土品で、渥美焼甕、常滑焼大甕、龍泉窯系青磁碗、手捏ねかわらけ、短刀、同木製柄、折敷、組紐用の錘、北宋銭、鋳型、温石、砥石の多岐にわたる。高価な内外の焼物類、非日常的なかわらけ、武器よりなる遺物組成から鎌倉幕府御家人級武士の存在が推測される。また、第37号土壙では鉄製の鍋や仏具などが鋳造されていた。

第Ⅴ期（13世紀前葉）

中心建物の整備と大規模な長方形区画溝の新設によって、居館の体裁が整えられる。建物は分棟化され、3棟以上からなる。第2号掘立柱建物は二間三間の総柱建物で、面積は9坪半弱である。公的な建物と推測する。第4号掘立柱建物は一間三間の細長い建物で、面積は6坪である。倉庫か家人の住居と推測する。第3棟は調査区外に延びており全容をつかめないが、土間に掘り込み（第35号土壙）を伴うことから、厨房のある生活空間と推測され、3棟の中では最大規模となろう。これらの建物を取り囲んで、北側に柵列、東と南側には塀が設置される。南側の門は、櫓門の可能性も考えられる。囲みの規模は南北約15m、東西は推定で23.4m、総面積106坪強の決して広くはない閉鎖的な空間である。

区画溝は部分的な検出であり、B区の第71・79号溝とA2区の第68号溝が一体をなすとの前提に立っている。当初の規模は幅3.0m、深さ1.0m、ほどあって、内側に掘り上げ土を盛った簡単な土塁が存在したであろう。平面形は隅円長方形、規模は東西54.7m、南北109m以上となる。半町×1町に近似する数値である。南西隅の外側にある第86号溝は薯堀に相当するので、木戸はこの付近にあったと推測される。ところで、区画溝の設置は第1号溝の埋没が前提となるが、その上流を活かし、水堀としていた可能性も考えられる。

なお、区画溝外のA1区にも第1号井戸と第50号土壙が設けられており、館の主に従属する郎党が簡単な住居を構えていたものとみられよう。

第Ⅵ期（13世紀中葉）

洪水に見舞われ、居館は壊滅的な被害を受けた。このため、水はけ口のなかった区画溝の最低部に排水路第78号溝が設けられると共に、旧第1号溝に添うように第35号溝が掘削された。この第35号溝は上流で区画溝と連絡しているようである。中心建物は潰滅し、調査区外の北西方面に規模を縮小して建て直しが行われたものと推測される。なお、第35号溝底部に供えられたかわらけと笊は、水鎮めの祭祀儀礼に用いられたと考えたい。

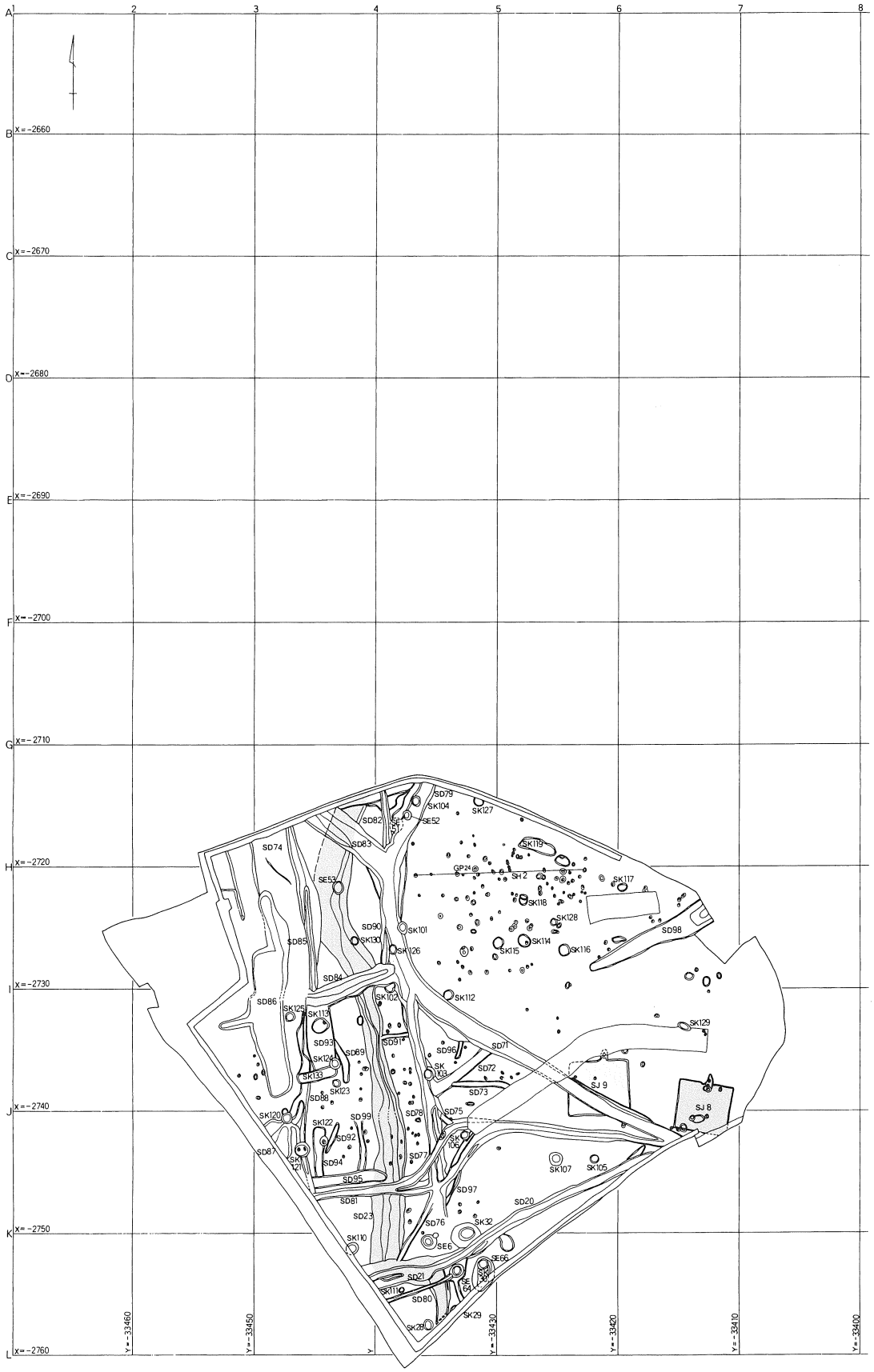
第Ⅶ期（13世紀後半から14世紀初頭）

再び治水が安定し、低地部への進出が認められるが、分散居住形態が存続する。B区の第76・77号溝は該期の溝で、後者が屈曲するのは北側にやや大きな建物が存在したためであろう。A区では第62号井戸が掘削され、中心建物が存続していよう。第35号溝南側の第50号井戸と第64号溝は郎党の居住を示すものであろう。

（4）中世後期

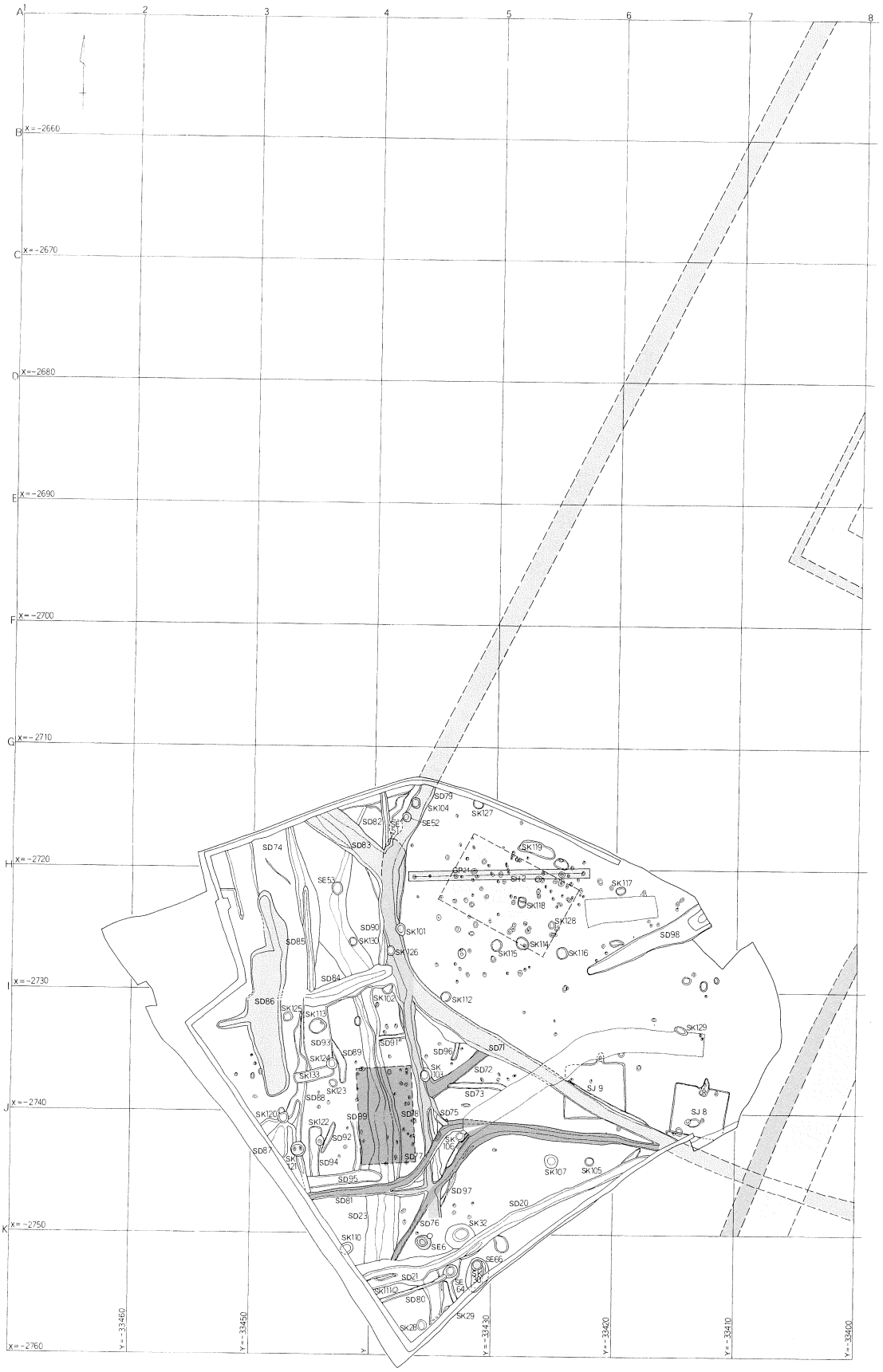
13世紀代の繁栄の後、続く14世紀の様相は定かで

第124図　堂地遺跡の時期別変遷図　古代



第Ⅰ期　8世紀中葉～後半
第Ⅱ期　8世紀末～9世紀初頭
第Ⅲ期　9世紀前半～後半
0
20m
1:500

第125図　堂地遺跡の時期別変遷図　中世前期



第Ⅳ期a　12 世紀後半
第Ⅳ期b　12 世紀末
第Ⅴ期　13 世紀前葉
第Ⅵ期　13 世紀中葉
第Ⅶ期　13 世紀後半～14 世紀初頭
0
20 m
1:500

はない。15世紀初頭以降を3期にわけて概述する。

第Ⅷ期（15世紀初頭から後葉）

第17・39溝は一体をなしており、屋敷跡1の最初の区画溝と見なしうる。柱穴群の結線は困難であったが、掘立柱建物が存在したことは確かであろう。G 13グリッドからは白磁皿D類が出土しており、付近に建物の存在が推定できよう。

第Ⅷb期（15世紀後葉）には道路が整備され、A区中央部に辻が出現する。辻の北側には区画溝を持つ墓域が設けられる。また、屋敷跡1の区画溝（第13 b・37号溝）は道路に並行させて掘り直される。

道路跡1は第32・52号溝を両側溝としており、幅は8mある。これに直交する道路跡2は南側の側溝が土層断面で確認されているに過ぎないが、直線的に延びていた可能性が高い。

屋敷はその一角だけで東西43mを超える大規模なもので、地主層ないし名主（みょうしゅ）の住居かと思われる。いっぽう、墓地には北宋銭を副葬する火葬墓のほか、土壙墓数基が主軸方向をそろえて並ぶ。

第Ⅸ期（15世紀末から16世紀前半）

墓域区画溝が辻に面する位置まで拡大される。ただし、墓壙はなく、寺地と見なした方が良いであろう。第5号掘立柱建物は僧房の可能性がある。区画溝からは古瀬戸尊形花瓶が出土し、宗教施設との関連が推測でき、その遡源は15世紀初頭となろう。

屋敷跡1内には2基の井戸が掘削され、その付近には掘立柱建物のあった可能性が高い。また、A 2区の2基の井戸も共に屋敷に所属したものであろう。

第Ⅹ期（16世紀後半）

辻の北側では、墓地の整理が行われ、土壙（第6号）への板碑の集中廃棄が認められる。第3号溝は新たな寺地の区画溝の可能性が考えられる。屋敷跡1は北西側に拡大し、区画溝に折れを持たせる。該期の井戸が屋敷内に5基、隣接地に4基新設され、通常の飲用洗濯用以外の必要が生じたことを示唆する。農業以外の生産活動と関係するものかもしれない。G13グリッドからは中国製染付碗が出土しており、付近に建物があったであろう。辻の西方にも2基の井戸があり、小規模な屋敷（屋敷跡2）が存在したと考えられる。

（5）近世

中世後期からの屋敷の連続的な変遷が追える。2期に分けて概述する。

ⅩⅠ期（17世紀初頭から後葉）

17世紀前葉には道路跡1が掘削され、幅4m前後、深さ1mの直線溝として貫通する。このため屋敷跡1は立ち退きを余儀なくされる。おそらく移転先は西側隣接地であり、第43号溝を東の限りとする屋敷跡3であろう。井戸が3基掘られて、西側低地に続く長い排水路を伴っている。礎石建物であったために表土を重機で剥ぐ調査法では検出できなかったと考えている。坪数は現存する一角だけで170坪ある。A 3区の屋敷跡2は17世紀初頭に井戸を掘削し、さらに17世紀中頃には隅円長方形の区画溝（第25号溝）を設ける。推定規模は東西30m、南北14.1m、115坪であり、小農クラスの住居であろう。

第30・31号溝の新設はおそらく公権力によるもので、新田開発と関係する可能性が考えられる。しかし、屋敷跡1・2と寺院から様々な物が廃棄され、早くも18世紀前半代の内に埋没する。出土遺物には伊万里焼染付碗や唐津焼丸碗などの奢侈品が多く、やはり名主（なぬし）相当の豪農の住居と目される。

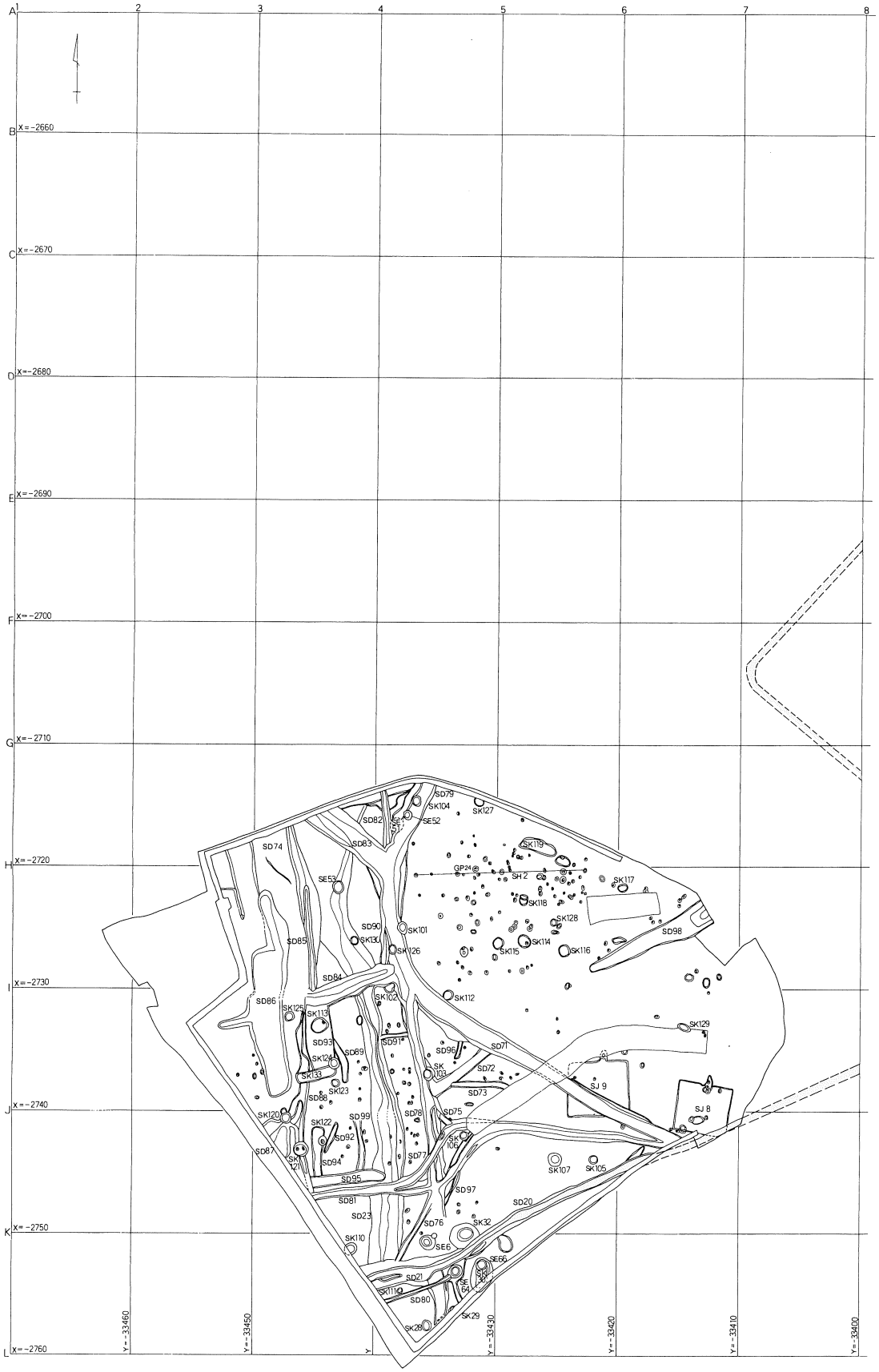
ⅩⅡ期（18世紀前半から後半）

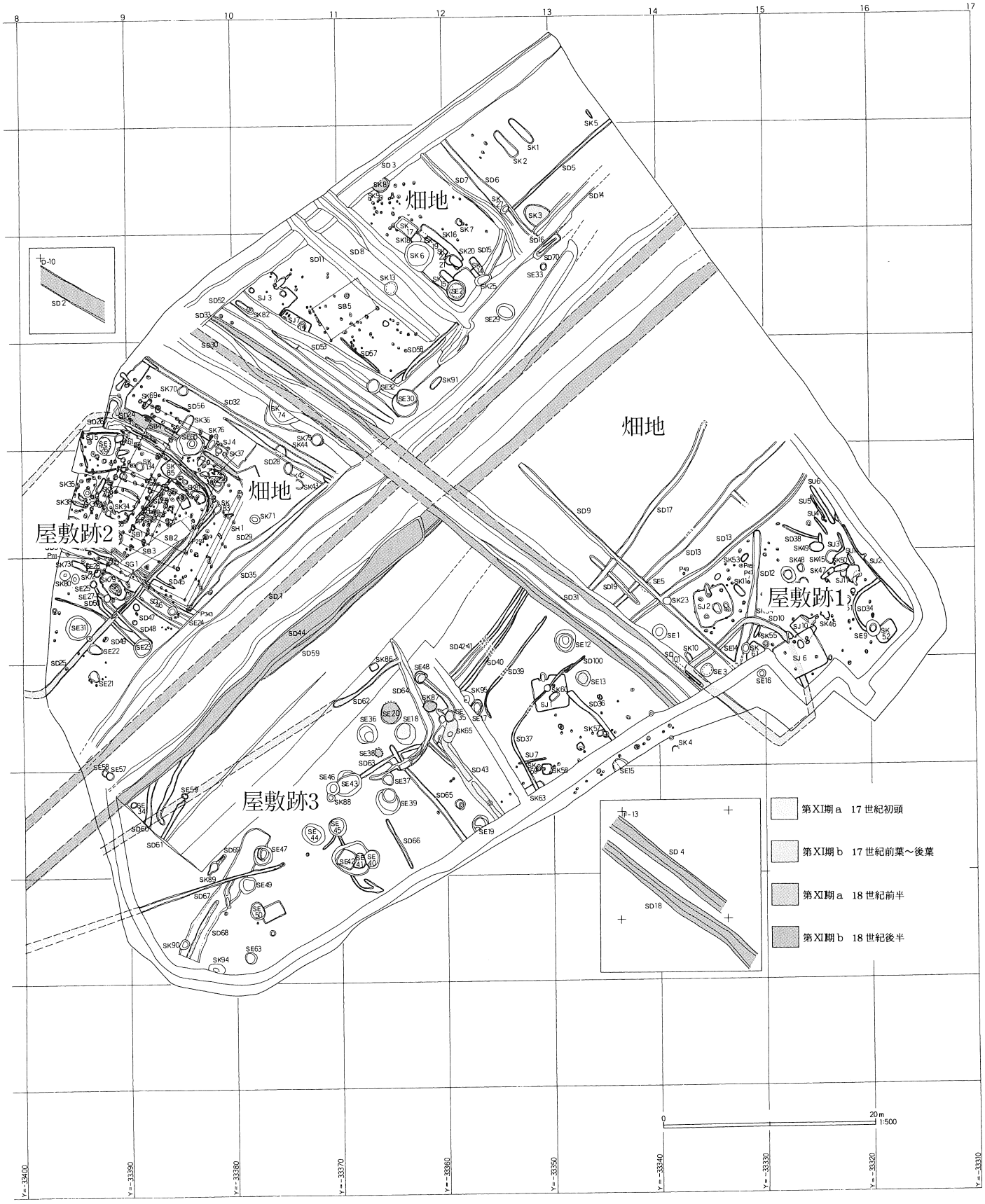
18世紀前半には完全に埋没した第30・31号溝の敷地の長辺両端に側溝が設けられ、道路跡1が復活する。また、直交する道路跡2の南側には第44号溝が設けられる。おそらく道路跡2はⅧ b期以来存続しつづけたのであろう。

屋敷跡3に伴う第65号土壙には唐津の京焼風碗と17世紀代の伊万里焼が集中廃棄されており、その生活の豪奢ぶりが窺われる。18世紀後半代には、3基の井戸が増設されており、存続が明らかである。屋敷跡2についても上総掘りの井戸が新設されるので、19世紀前半までの存続が確認できる。寺院の動向が知られないのは寺域が北西方向に移動したためと推測される。

第126図　堂地遺跡の時期別変遷図　中世後期

第127図　堂地遺跡の時期別変遷図　近世




畑地
畑地
畑地
屋敷跡1
屋敷跡2
屋敷跡3
第XI期a 17世紀初頭
第XI期b 17世紀前葉～後葉
第XI期a 18世紀前半
第XI期b 18世紀後半
20m
1:500

2　堂地遺跡出土遺物の検討

（1）瓦塔について

堂地遺跡の調査では、中世の溝（SD 35）から平安時代に位置づけられる瓦塔の破片が出土している。この溝からは13世紀前半を中心とするかわらけや緑釉盤が出土しており、瓦塔は周囲からの流れ込みと考えられる。このような出土状況から瓦塔本来の設置場所やどのような宗教的役割を果していたのか、その性格を解明することは難しい。しかしながら、周辺地域における瓦塔出土遺跡との比較検討を通じ、在地社会における仏教文化受容のあり方や寺院建立の様相を復原するための示唆に富む内容を内包しているものと考えられる。

ここでは平安時代における堂地遺跡の様相を明らかにすることを目的として瓦塔の形態的特徴と時期的位置づけを中心に若干の検討をおこないたい。

1. 瓦塔の観察

堂地遺跡から出土した瓦塔は、隅棟を中心とする屋蓋部の破片１点だけで、他に軸部や相輪部の破片はまったく検出されていない。出土した屋蓋部の特徴について列記すると、次のようになる。

・屋根瓦表現が半截竹管状工具による押し引きナデ調整技法によって丸瓦のみが表現されている。

・瓦の継目は、軒先端から2.0 cmのところに１つ施し、隅棟に接する丸瓦は階段状に施す。

・屋蓋部の大きさを復原すると一辺約27 cmを測る。この大きさは美里町東山遺跡瓦塔（今泉1993）と比較した場合、初層の大きさに相当している。

・隅棟や地覆などの突帯部分は丁寧にナデ調整が施されている。

・軒裏は、全体に粗いヘラ削り痕が目立ち、地垂木のみを表現した一軒構成である。

・軒裏垂木表現は、横幅設定のためのヘラ状工具沈線設定後、垂木と垂木の間を深めにヘラ削りすることによって表現している。

・垂木は幅が狭く、垂木の間隔をやや広くとっている。

・軒先部の一部に二次焼成により赤褐色に変色した部分がみとめられる。

・胎土は非常に精選され良好で、わずかに赤色粒子・白色微粒子・石英・角閃石を混入する。

・焼成は酸化焔焼成で、淡橙色の土師質である。

堂地遺跡出土の瓦塔屋蓋部の特徴について簡単にまとめると、土師質焼成で、瓦部分は半截竹管状工具の押し引きナデ調整によって丸瓦のみを表現し、瓦継目は軒先付近に１つのみを施している。軒裏垂木は一軒で、ヘラ状工具によって削り出されている点などが挙げられる。

2. 瓦塔の時期的位置づけ

瓦塔は、須恵質または土師質に焼造された塔形の土製品で、塔身軸部・屋根部を数段分と、九輪・水煙などの部品を組み合わせて作られている。形態により層塔・多角塔・宝塔に分けられ、三重・五重・七重などの層塔が主流を占める。また、塔形態のものだけでなく、金堂を模した瓦堂もあり、両者が対となり小伽藍的空間が生み出されていたと想定される。造立の時期については、少なくとも奈良時代初期に出現し、平安時代初期を中心に隆盛する。その分布は東日本に集中し、とりわけ関東・信州・東海・北陸地方に数多く分布していることが指摘されている（上村1991）。

さて、瓦塔に関する編年的研究は全国的な視野に立って主に斗栱部表現の変化を指標とした編年が松本修自（松本1983）、高崎光司（高崎1989）によって提示されたのを契機に、近年、近畿地方の石井清司（石井1996）・石田成年（石田1997）、北陸地方の善端直（善端1994）、信州地方の林　和男（林1985）、出河祐典（出河1995・1998）、関東地方の池田敏宏（池田1994～1999）、飯塚武司（飯塚1997）らが、各地域の様相についてそれぞれの視点で分析し、検討を加えている。

埼玉県内では石村喜英（石村1973 a・b）の精力

的な研究を嚆矢として、駒宮史朗・栗岡眞理子（駒宮・栗岡1994）による集成作業、横川好富（横川1980）、鈴木徳雄（鈴木1987）、車崎正彦（車崎1990）、今泉泰之（今泉1993）、宮瀧交二（宮瀧1995）、植木智子（植木1997）らの研究があり、瓦塔の性格や編年・製作技法・瓦塔造立の歴史的背景などについて、さまざまな角度からの研究が深化されている。

先述したように池田氏は関東地方における瓦塔屋蓋部の瓦表現と垂木表現の分類をおこない、編年を試みている。ここでは北武蔵地域の資料を中心に取り上げ、類型化を試みた池田氏の分類をもとに、堂地遺跡出土瓦塔の時期的な位置づけについて考えてみたい。

堂地遺跡瓦塔は、屋根瓦表現が有節沈線による単節の瓦継目をもつことから、池田分類の幅狭工具押し引きA手法、軒裏垂木表現は一軒構成で、垂木幅、垂木間隔を狭くとるヘラ削り出しC2手法を採用している（池田1995・1996）。これらの特徴は上西原類型瓦塔に該当し、共伴遺物の検討から9世紀中葉を中心とした時期に位置づけられている。しかし、上西原類型瓦塔に該当する千葉県木更津市小谷遺跡1号瓦塔は共伴遺物の検討から8世紀末葉を中心とする時期に比定されていることから（甲斐1998）、年代観に関して検討の余地を残している。確かに堂地遺跡瓦塔を仔細に検討すると、垂木間隔がやや幅広くとられていることに気づく。その特徴は、上西原類型瓦塔に先行する東山類型瓦塔にみられるヘラ削り出しC1手法に近く、ヘラ削り出しC1手法からヘラ削り出しC2手法への過渡的な様相を示すものとも考えられる。堂地遺跡瓦塔の時期的位置づけについては、共伴遺物がないことから時期を特定することは難しいが、やや幅をもたせ8世紀末葉～9世紀中葉に比定しておきたい。

今回の調査成果から、堂地遺跡における古代集落の形成は8世紀中葉頃から始まり、9世紀前葉から中葉にかけて多くの竪穴住居跡が営まれ、最盛期をむかえたと想定されている。出土遺物には墨書土器「幸」や風字硯など、当遺跡の性格を示唆する遺物がみられるが、瓦塔に直接結びつくような遺構の存在や仏教的色彩の強い遺物などはまったく検出されていない。しかし、瓦塔の製作年代と集落規模の拡大する時期が、おおむね符合することから、瓦塔をまつり、それを信仰した集団（個別経営）の性格や自立性の問題などもあわせて、集落内における仏教信仰の浸透を考える上で注意を要するであろう（宮瀧1995）。

現状では遺跡周辺に寺院や瓦塔を安置する堂宇（仏堂施設）の存在を推定する積極的な証拠は見出し難い。今後の調査の進展に期待したい。

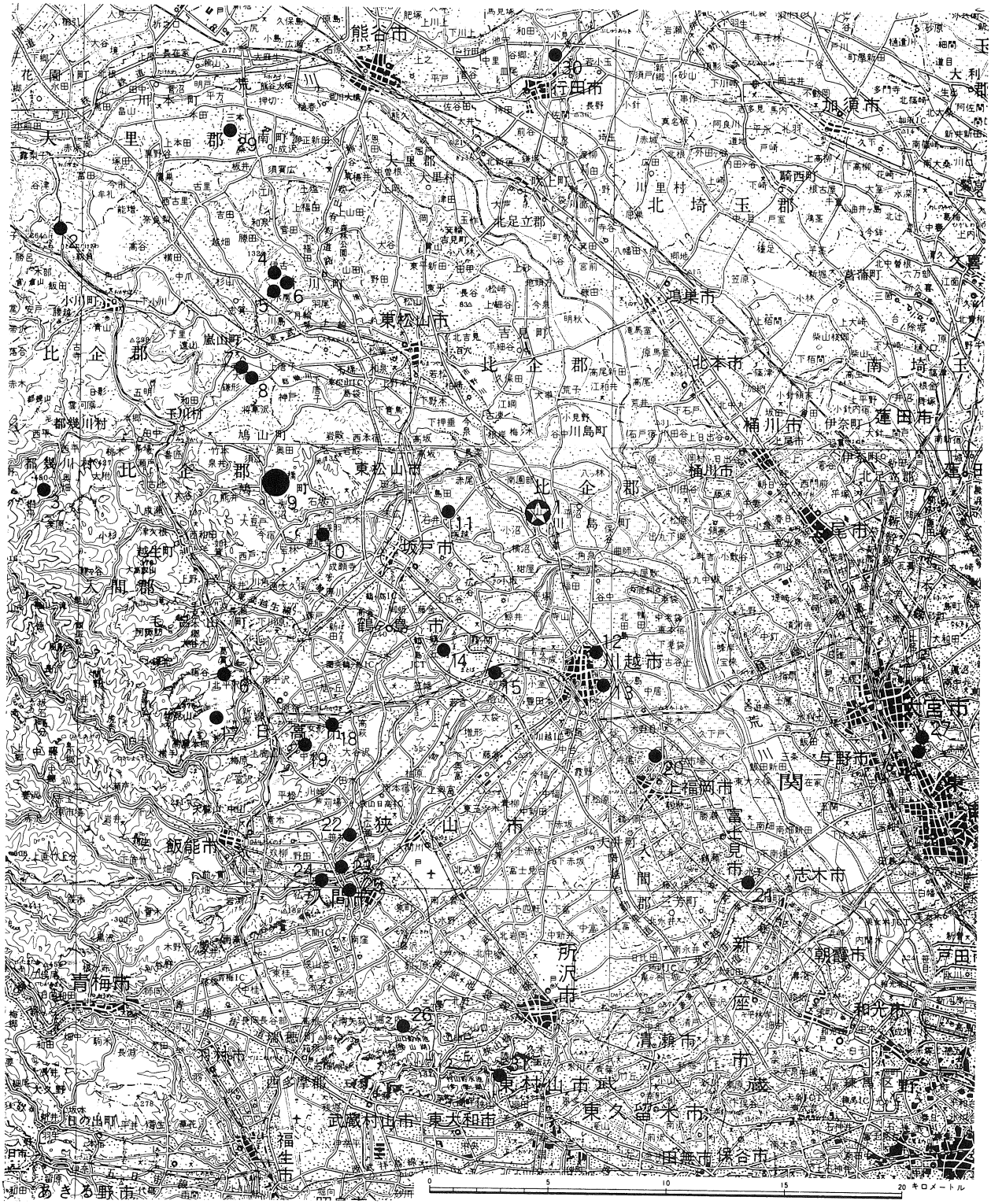
3. 北武蔵南部の瓦塔出土遺跡

堂地遺跡の所在する比企郡川島町は、荒川をはじめとする越辺川、都幾川、市野川などの中小河川によって形成された肥沃な沖積地が広がり、旧流路に沿って複雑に自然堤防が発達している。遺跡はこうした自然堤防上に立地しており、川島低地における瓦塔出土例としては初出である。北西約4 kmには県内最古の瓦塔を出土する坂戸市勝呂廃寺が所在しているのをはじめ、周辺の台地部や丘陵部には瓦塔出土遺跡が数多く分布している。

ところで埼玉県内における瓦塔出土遺跡数は、伝承例や中・近世のものを含め1999年の時点で65遺跡の多くを数えたが、その後の出土例の増加や補遺例などを加え、現在69遺跡の所在が確認されている（註1）。ここでは荒川以南の北武蔵南部（中武蔵）を中心に瓦塔出土遺跡の様相について瞥見したい。

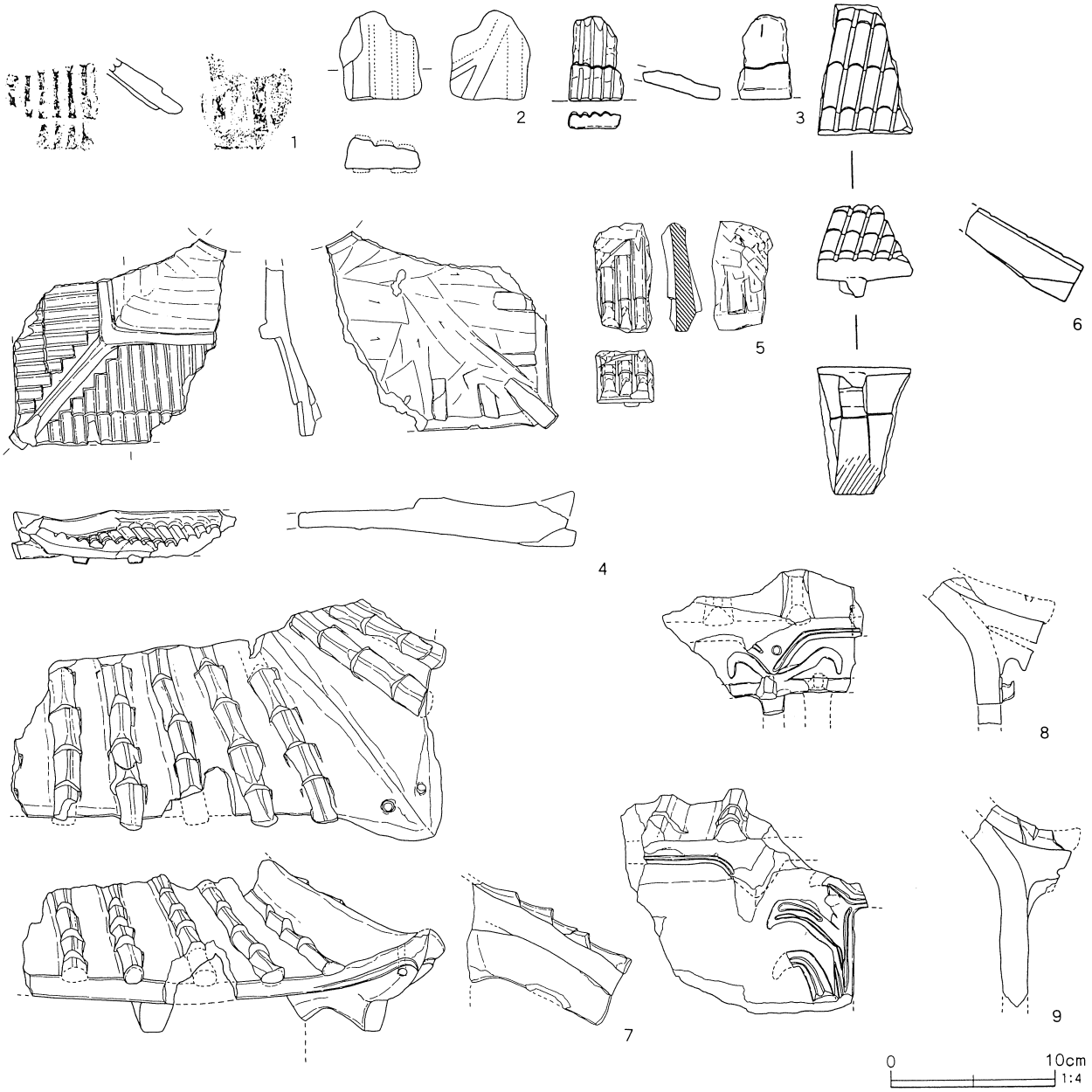
堂地遺跡の所在する比企郡市内における奈良・平安時代の瓦塔出土遺跡の分布は、小川町1例、嵐山町2例、滑川町3例、川島町1例、鳩山町9例、都幾川村1例の合計17例を数える。出土遺跡を性格別にみると寺院跡1例、集落跡8例、塚1例、窯跡7例となる。地域的な特徴として鳩山町を中心に広がる北武蔵最大の須恵器生産地、南比企窯跡群からの出土例が目立つ。特に、鳩山窯跡群柳原A地区で検出された瓦塔焼成土坑は、須恵器窯以外の焼成遺構として9世紀前半に

第128図　北武蔵南部の瓦塔出土遺跡分布図



1堂地遺跡（川島町）　2慈光平廃寺（小川町）　3多武峯遺跡（都幾川村）　4中尾遺跡（滑川町）　5用土庵B遺跡（滑川町）　6天裏遺跡（滑川町）　7行司免遺跡（嵐山町）　8宮の裏遺跡（嵐山町）　9南比企窯跡群（鳩山町）　10稲荷前遺跡（坂戸市）　11勝呂廃寺（坂戸市）　12川越城本丸跡（川越市）　13弁天西遺跡（川越市）　14鶴ヶ丘遺跡／鯨井新田出土（川越市）　15東下川原遺跡（川越市）　16大寺廃寺（日高市）　17高岡廃寺（日高市）　18若宮遺跡（日高市）　19姥田窯跡（日高市）　20川崎遺跡（上福岡市）　21東台遺跡（富士見市）　22宮地遺跡（狭山市）　23東八木窯跡（狭山市）　24下谷ヶ戸遺跡（入間市）　25森坂遺跡（所沢市）　26お伊勢山遺跡（所沢市）　27上木崎遺跡（浦和市）　28上木崎三丁目遺跡（浦和市）　29寺内廃寺（江南町）　30馬場裏遺跡（行田市）　31多摩湖町出土（東京都東村山市）

第129図　北武蔵南部の瓦塔



1 上木崎三丁目遺跡（浦和市）　2 慈光平廃寺（小川町）　3 東台遺跡（富士見市）　4 堂地遺跡（川島町）　5 川崎遺跡（上福岡市）
6 鶴ヶ丘遺跡／鯨井新田出土（川越市）　7～9 姥田窯跡（日高市）：高崎光司氏原図

おける瓦塔の量産化の問題を考える上で重要な問題を提起している（出河 1996）。最近の調査では、滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群の中尾遺跡と用土庵 B 遺跡から瓦塔片がまとまって出土している（植木 1997）。瓦塔の出土状況は中尾遺跡では丘陵頂部平坦面を中心に、用土庵 B 遺跡では丘陵肩部から南斜面にかけて、他の遺物に混在した状態で出土しており、瓦塔と結びつくような遺構は検出されていない。このように造塔のあり方については不明な点を残すが、隣接する柳沢 A 遺跡から四面廂をもつ2×3間の掘立柱建物跡が検出されており、仏堂的な性格をもつ建物として瓦塔との関連性が指摘されている。

次に、入間郡市内では川越市4例、所沢市1例、狭山市2例、入間市2例、上福岡市1例、坂戸市4例、日高市5例の合計19例が知られている。出土遺跡の性格は寺院跡4例、集落跡8例、窯跡4例、不明3例

となる。寺院跡では坂戸市勝呂廃寺、日高市高岡廃寺・大寺廃寺・若宮遺跡（女影廃寺）などから多数出土している。このうち高岡廃寺跡では瓦塔の塔心礎と想定される方形ピット遺構の周辺からまとまって出土しており、本格的な木造塔の代用品としての機能をもっていたものと想定されている。県内の古代寺院跡の多くから瓦塔が出土していることを勘案すれば、伽藍寺院では木造高層塔創建まで、あるいは木造塔倒壊後にそれの代用として造塔されるような場合が多かったことが想起される。

生産跡からの出土例は、日高市姥田窯跡・台出土、狭山市東八木窯跡、入間市下谷ケ戸遺跡の4遺跡が知られる。姥田窯跡については実態が不明であるが、丸瓦と平瓦を表現した須恵質の瓦塔が出土している。屋蓋部から連続して軸部が作られ、壁面に草葉文が描かれた特徴的なもので、勝呂廃寺瓦塔と並び古相を呈している。このほか東金子窯跡群の外縁部に位置する入間市森坂遺跡では粘土採掘坑から土師質の請花が単独で出土しており、東金子窯跡群でも瓦塔が定量生産されていたことを物語っている。

最後に、堂地遺跡出土瓦塔について類例との比較検討を試み、まとめにかえることにしたい。

前述したように堂地遺跡瓦塔は池田分類の上西原類型瓦塔に該当し、8世紀末から9世紀中葉に位置づけられる。北武蔵南部における上西原類型瓦塔の分布は上福岡市川崎遺跡、富士見市東台遺跡、浦和市上木崎三丁目遺跡・上木崎遺跡などの集落跡や日高市高岡廃寺・大寺廃寺・若宮遺跡等の寺院跡などが知られている。池田氏の研究によれば、上西原類型瓦塔は北武蔵では最も出土例が多く、丸瓦のみの表現でかつ土師質の製品としては普遍的な類型として位置づけられている。8世紀後半から9世紀にかけて集落を中心に瓦塔の出土例が激増し、この時期に瓦塔の製作技法や表現方法に簡略化が進み、焼成も須恵質から土師質へと大きく変化し、量産化が図られたと指摘されている（高崎1989）。さらに、この時期に造塔意識の上でも大きな変革期をむかえたことが予想されることから（註2）、堂地遺跡瓦塔についても民間仏教の活発化と言った歴史的背景の中に具体的に位置づけていく作業が今後必要であろう。

以上、堂地遺跡出土の瓦塔をめぐる問題点について論じてきたが、資料的な制約もあり瓦塔の時期的な位置づけを中心とした検討に終始してしまった。今後の課題として瓦塔の性格や用途の問題、集落内における仏教信仰のあり方、他の仏教関連遺物との関連性などについてさらに検討していきたいと思う。

謝辞　日高市教育委員会の中平　薫氏には姥田窯跡出土瓦塔の実見について御配慮をいただきました。そして日頃から御指導をいただいている高崎光司氏には姥田窯跡瓦塔の実測図の使用を御快諾いただきました。記して感謝申し上げます。

註

(1)　1999年作成の「埼玉県内瓦塔地名表」（大谷1999）に記載漏れの瓦塔出土遺跡は、下記の通りである。

①川越市弁天西遺跡（埼玉県教育委員会1998）

②富士見市東台遺跡（加藤・隈本1996）

③川島町堂地遺跡（本報告書）

④妻沼町飯塚北遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団1999）

(2)須田　勉氏は、上野・下野・北武蔵に瓦塔が集中する現象について上野緑野寺・下野大慈寺を拠点とした道忠教団の活動範囲を示すものであるとして、塔信仰に支えられた仏教信仰が地域的に展開した状況を想定している（須田1999）。

引用・参考文献

飯塚武司　1997　「上野忍岡遺跡出土の瓦塔をめぐって」『研究論集』ⅩⅣ　東京都埋蔵文化財センター　pp.59－87

池田敏宏　1995　「瓦塔屋蓋部表現手法の検討―埼玉県児玉町堂平遺跡採集瓦塔をめぐって―」『土曜考古』第19号　土曜考古学研究会　pp.83－104

池田敏宏　1996　「瓦塔屋蓋部編年試論―北武蔵６～８類瓦塔，類似資料を中心として―」『土曜考古』第20号　土曜考古学研究会　pp.247－258

池田敏宏　1998　「瓦塔屋蓋部編年試論―北武蔵１～５類瓦塔，類似資料を中心として―」『土曜考古』第22号　土曜考古学研究会　pp.31－51

池田敏宏　1999　「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討―関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心に―」『研究紀要』第７号　(財）栃木県文化振興事業団・埋蔵文化財センター　pp.57－104

石井清司　1996　「瀬後谷瓦窯出土の土製塔」『京都府埋蔵文化財論集』第３集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　pp.391－402

石田成年　1997　「摂河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』　柏原市古文化研究会編　pp.263－276

石村喜英　1973a　「埼玉県内における瓦塔（上)」『埼玉文化史研究』第４号　埼玉文化史研究会　pp.2－6

石村喜英　1973b　「埼玉県内における瓦塔（下)」『埼玉文化史研究』第５号　埼玉文化史研究会　pp.10－16

出河裕典　1995　「信濃の瓦塔再考―近年の出土例を中心にして―」『信濃』第47巻第４号　信濃史学会　pp.78－97

出河裕典　1996　「瓦塔の生産―塩尻市菖蒲沢窯跡の資料の検討を通して―」『長野県の考古学』(財）長野県埋蔵文化財センター　pp.260－284

出河裕典　1998　『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書４―長野市内その１―篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡』(財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書33

今泉泰之　1993　『埼玉県児玉郡美里町東山遺跡出土瓦塔・瓦堂解体修復報告書』　埼玉県教育委員会・埼玉県立歴史資料館

植木智子　1997　『滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群』　滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会

上村和直　1991　「瓦製塔の性格」『季刊　考古学』第34号　雄山閣　pp.52－55

大谷　徹　1999　『馬場裏遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第230集

岡田賢治　1995　『川越学事始め～郷土史の系譜を追う～』　川越市立博物館

甲斐博幸　1998　『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅲ―小谷遺跡―』　木更津市教育委員会

加藤秀之・隈本健介　1996　『富士見市内遺跡Ⅳ』富士見市文化財報告第47集　富士見市教育委員会

車崎正彦　1990　『お伊勢原遺跡の調査　第４部　弥生時代から平安時代』　早稲田大学・所沢校地文化財調査室

駒宮史朗・栗岡眞理子　1994　『埼玉の瓦塔』資料館ガイドブック№12　埼玉県立歴史資料館

埼玉県教育委員会　1998　『埼玉県埋蔵文化財調査年報　平成９年度』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1999　『年報19　平成10年度』

鈴木徳雄　1987　『秋山東遺跡』　児玉町遺跡調査会報告書第２集　秋山東遺跡調査会

須田　勉　1999　「東国における古代民間仏教の展開」『仏堂のある風景―古代のムラと仏教信仰―』　栃木県立しもつけ風土記の丘資料館　pp.40－49

善端　直　1994　「北陸の古代瓦塔」『文化財学論集』　奈良大学文学部考古学研究室　pp.423－434

高崎光司　1989　「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻第３号　日本考古学会　pp.1－38

高崎光司　1990　「瓦塔瞥見」『研究紀要』第７号　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　pp.209－216

林　和男　1985　「信濃の瓦塔」『信濃』第37巻第４号　信濃史学会　pp.184－197

松本修自　1983　「小さな建築」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所30周年記念論文集　pp.643－657

宮瀧交二　1995　「「山野路辺」における「百姓」の「造塔」について―『続日本紀』天平十九年十二月十四日条の一考察―」『古代史研究』第13号　古代史研究会　pp.85－88

横川好富　1980　「埼玉県美里村出土の瓦塔」『考古学雑誌』第66巻第２号　日本考古学会　pp.70－83

（2）滑石製石鍋について

堂地遺跡からは、小さな破片ではあるが滑石製石鍋が出土している。ここでは、この石鍋の出土が意味するものついて若干の検討を加えたい。

滑石製石鍋は、そのほとんどが長崎県西彼杵半島で製作されたものである。製作地としてはホゲット遺跡（大瀬戸町）や下茅場遺跡（西彼町）が知られている（正林1980、荒木1998）。主な消費地は九州地方であるが、瀬戸内海沿岸、畿内、鎌倉などの遠隔地にも多く分布している。これらの地域には海路を通じて搬入されたと考えられている（木戸1993・1995）。

限られた地域でしか製作されていないというこの製品の性格上、各地で出土する石鍋はほぼ共通する形態を有している。石鍋の編年案は九州出土例を中心に森田勉氏が、九州及び草戸千軒町遺跡出土品を中心に木戸雅寿氏が提示している（森田1983、木戸1993・1995）。これによれば、形態的には円筒形の経筒をルーツとし、次第に逆台形の側面観をもつものに変形していく。また、初期のものを除き、口縁部直下に鍔を巡らすのが大きな特徴であるが、これは時期的に新しくなるに従って退行していく。年代的には10世紀末には九州で出現し、遠隔地への供給が始まったのが12世紀末、全国的な流通を経て16世紀には消滅したと考えられている。

この石鍋は如何にして使用されたのか。一部の文献に「石の鍋」に関する記述はあるものの、これがここで問題にしている滑石製石鍋かは定かではない（下川1995）。出土する石鍋には煤が付着していることが多く、火にかけて使用した煮炊具であることは間違いない。しかし、明確な使用方法については考古学的には明らかになっていない。

東国では前述したように、鎌倉で特に多く出土している。多くは破片の状態で出土し、遺構に伴うものはほとんどない。鎌倉出土品の年代観に関しては菊川英政氏、馬渕和雄氏の研究がある（菊川1982、馬渕1987）。これによると、鎌倉で石鍋が流通したのは13世紀から15世紀中頃であるが、量的なピークは13世紀後半から14世紀前半頃にあったようである。出土傾向としては、鎌倉市内では至るところから出土しているが、幕府の御所や武家屋敷が所在していた若宮大路周辺に特に集中している。市域を離れたところでも、長勝寺遺跡や光明寺裏遺跡など、特定の寺院跡や館跡からもまとまって出土することがある（大橋他1978、斉木他1980）。この状況は、石鍋は上層階級の人々が主に使用した高級品であったことを示している。このことは古文書史料からも裏付けられており、石鍋はかなりの高値をよんだものであったという（森田1983）。

一方、鎌倉を離れた地域では石鍋の出土数は激減する。埼玉県では現在、今回報告分を含め9遺跡11例を確認している。注目されるのは、これらの出土地はいずれも中世館跡ないしその付近の遺跡ということである。更に、出土数が少ないこと及び石鍋が高価なものであったことを考慮すれば、埼玉県では、石鍋は「武蔵武士」又はそれに準ずる在地有力者のみが持ち得たものであったことが考えられる。換言するならば、滑石製石鍋の出土は、その遺跡にそれ相応の武士団が存在していたことを示唆させるものといえる（高田2000）。

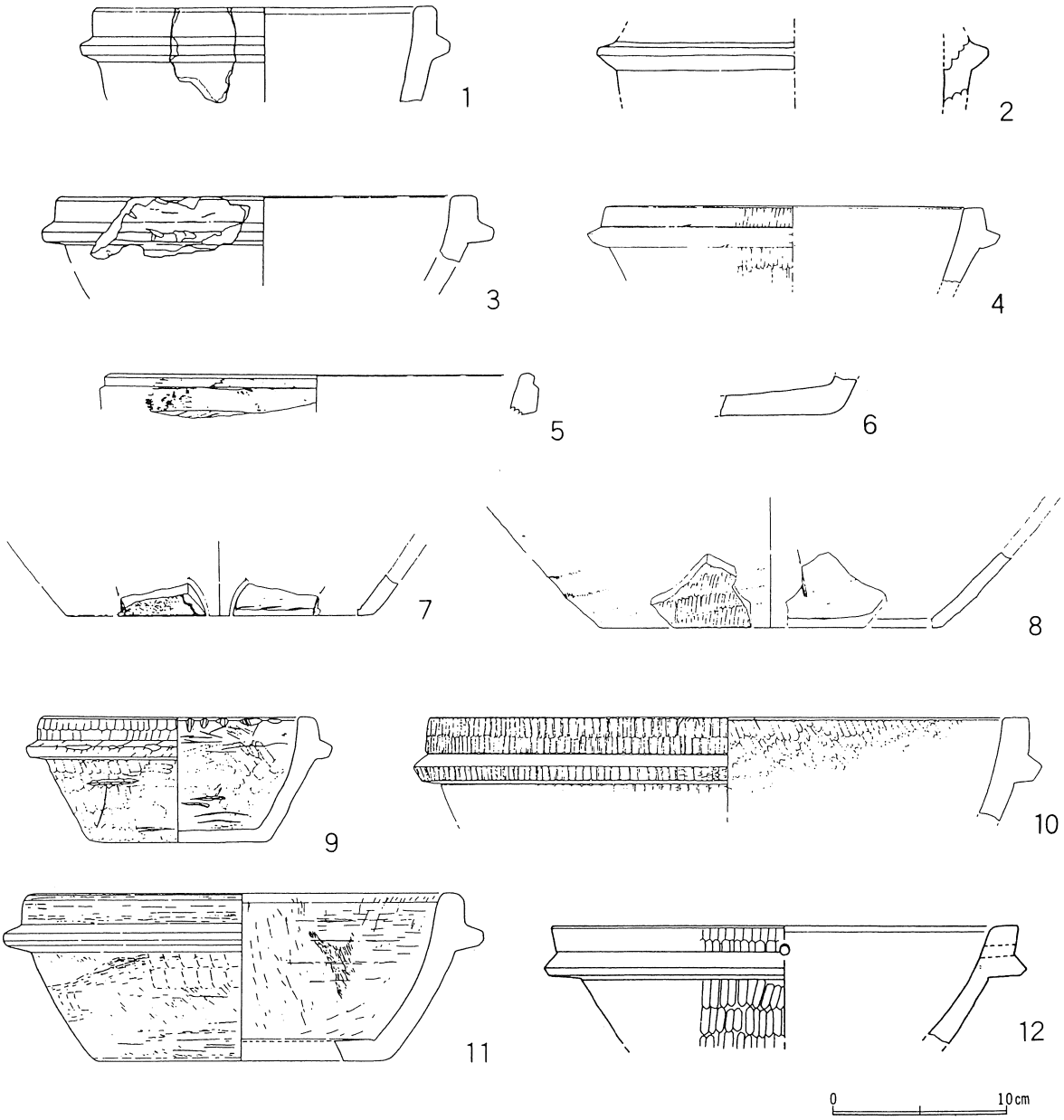
堂地遺跡は比企郡中山に程近いが、かつてこの地を本領とした有力御家人がいる。他ならぬ比企一族である。比企氏は鎌倉幕府の黎明期においては将軍家との関係も深く、北条一族と肩を並べるほどの権勢を誇ったことは周知の通りである。建仁三年（1205年）、比企一族は比企氏の乱において史上から姿を消してしまうが、今回出土した石鍋は彼らとの関連を十二分に感じさせるものである。

引用・参考文献

荒木伸也（1998）『下茅場遺跡』　西彼町教育委員会
大橋康二他（1978）『長勝寺遺跡』　かまくら春秋社
菊川英政（1982）「滑石製鍋」『千葉地遺跡』　千葉地遺跡発掘調査団
斉木秀雄他（1980）『光明寺裏遺跡』　北区鎌倉学

園内遺跡発掘調査団・東京都北区教育委員会
下川達彌(1995)「石鍋」　日本中世土器研究会『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社
正林護(1980)『大瀬戸町石鍋製作所遺跡』　大瀬戸町教育委員会
高田大輔(2000)「滑石製石鍋について」『宮前本田遺跡（第3次調査）』　鴻巣市教育委員会
馬渕和雄(1987)「中世都市鎌倉の煮炊様態」『青山考古』第5号　青山考古学会
森田勉(1983)「滑石製容器－特に石鍋を中心として」『仏教芸術』第148号　毎日新聞社

第130図　石鍋集成図



1　畠山館跡（川本町）2　樋ノ上遺跡（熊谷市）3　宮前本田遺跡（鴻巣市）4　安保氏館跡（神川町）
5　行司免遺跡（嵐山町）6　大久保領家遺跡（浦和市）7・8　天王遺跡（川越市）
9・10　今小路西遺跡（鎌倉市）11　甘縄神社遺跡（鎌倉市）12　千葉地遺跡（鎌倉市）

（3）中世土器について

堂地遺跡からは内外の中世陶磁器などと共に多量のかわらけが出土している。しかも約4世紀にわたる時間的な連続性を持っているとみられるので、遺跡の時間軸を設定する上で極めて有用であろう。また、かわらけには京都系のものなどを模倣した例と在地的な独自性とが共存しているので、その系統を把握することも重要な課題となる。さらにいえば、かわらけには極めて政治的かつ儀礼的な側面が指摘されているので、その用法に着目する必要もある。これらの課題を果たす上で、幸運なことに隣接する川越市域での田中信氏の詳細な研究成果があり、堂地遺跡出土資料との共通性が多々認められるので、比較検討の基準にさせていただきたい。編年作業の方法は遺構単位で資料を提示し、田中編年および京都、鎌倉、平泉などの研究成果に照らして連続性のある配列を行い、伴出資料のうち有効なものを用いて実年代を知る手がかりとしたい。

なお、かわらけの型式は大分類（A 手捏ね・B ロクロ）中分類（1小型・2大型・3中型・4高足高台，擬高台にはダッシュを付す。）小分類（アルファベット）の3桁の記号で表記することにしたい。

Ⅰ期（12世紀中葉から後葉）

第1号溝出土資料を基準資料とする。1は体部が丸く底部が上げ底気味の手捏ねの小皿（**A1a**）で、口縁部が直立して尖る。伊野近富氏の京都系土師器皿Abタイプを祖型とするものであり、口縁端部の強いヨコナデを特徴とするが、口縁部が直立するのは12世紀中葉の段階であるという。4は足高高台付のロクロかわらけ（**B4a**）で、脚高高台坏の流れを汲むものだが、類例は少ない。2は体部の丸い手捏ねの大皿（**A2a**）で、強いヨコナデ（二段ナデ）によって口縁部が尖って直立する特徴が1と共通しており、Abタイプの1次模倣品と見られよう。3は平底の手捏ね大皿（**A2b**）である。体部は指頭痕を残し未調整。口縁部は直線的に開き、端部が面取りされている。12世紀後葉に出現する京都系土師器皿Jb－2タイプの1次模倣品である。なお、第1号溝からは常滑2型式併行の渥美焼甕（第132図1）が出土しており、12世紀第3四半期とされる。

Ⅱ期（12世紀末から13世紀初頭）

第74号土壙出土資料を基準資料とする。5は口縁部が直線的に開く手捏ねの小皿（**A1b**）で、端部が丸く、面取りが認められないのでJbタイプの2次模倣品と位置づけられる。12世紀第4四半期とされる鎌倉市横小路遺跡溝1出土品に類例がある。6は平底直口の手捏ね大皿（**A2c**）で、端部が丸く収められている。やはりJbタイプの2次模倣品とみられよう。7は手捏ねの小皿（**A1c**）で、極めて浅い。類例は京都市内膳町遺跡SE176と平泉町柳之御所遺跡31次SE7出土例があり、後者は12世紀第4四半期でも1189年を溯るものである。8は高台を持つロクロ小皿（**B1'a**）である。今まで当地では知られていなかったタイプで、第35号溝から出土したような木器小皿（第132図12）の模倣と考えて良いだろう。類例に鎌倉市横小路遺跡溝1出土品（Ⅱ B4類）があり、12世紀第4四半期に位置づけられている。

なお、第74号土壙からは中野編年3型式（1176～1190年）の特徴を備えた常滑焼大甕（第132図2）が出土している。

Ⅲ期（13世紀前葉から後葉）

第78号溝出土資料を基準資料とする。当溝には多数のかわらけが廃棄されていたが、実測を行ったのは31個体で、手捏ねかわらけが25個体、ロクロかわらけが6個体であり、おおよその比率を示していよう。9から16は手捏ねの小皿である。法量的には9だけが口径5.9cmと超小型であるが、他は8から10cmの幅に収まる。細かく見ると体部が丸く口縁部が内湾するもの（**A1d**）、体部が丸く口縁部が直立するもの（**A1e**）、平底で口縁部が直線的に開くもの（**A1f**）、そしてやや深くて口縁端部が内屈するもの（**A1g**）に分かれる。京都系土師器皿Jbタイプの2次模倣品とした**A1b**タイプと比較すると、器形の低平化と器肉の薄手化とが看取される。17から19は手捏ねの大皿

である。前代と比較すると、低平化が進んだ17（Ａ２d）と底部脇に丸みを持つ新手の18・19（Ａ２e）が出現し、口唇部が薄く作られる点も合せて、在地化の進行が見て取れる。20から23はロクロの小皿で、底部が疑似高台をなすもの（Ｂ１’ｂ）と部厚い丸底状のもの（Ｂ１ｂ）とがある。この差異は糸切り離しのとき、粘土柱に糸がかかるかどうかによっている。これらは前代のB1'aタイプと比較した場合、大量生産を原因とする退化形態と理解できよう。第35号溝からも手捏ねとロクロのかわらけが一緒に出土しているが、ロクロの比率が高い。29から32はロクロの小皿（Ｂ１ｃ）である。これらは第78号溝のものとは全く異なり、口縁部が丸く収められ、底部も肥厚せず、高台を持たない。同時期の手捏ね小皿Ａ１ｄタイプを模倣したものであろう。33から35はロクロの大皿（Ｂ２ｂ）で埦形を呈する。いずれも精製の土器である。このうち33は内面に櫛状工具によるカキメを有する。隣接する川越市古屋敷遺跡２次調査７号堀出土品が共通の特徴を持つ。器形的に近似するものが柳之御所遺跡のかわらけ廃棄土壙とされる28次調査４号井戸状遺構から出土している。比較すると、堂地遺跡例は底部が厚く、口縁部内側に稜を有する点が異なっている。祖型は第35号溝から出土したような漆器椀（第132図13）にあろうが、内側の稜の発生理由はわからない。28は第６号井戸出土のロクロ大皿（Ｂ２ａ）で、同時期の手捏ね大皿を模倣した器種と考える。

第78号溝からは伊勢型土鍋、龍泉窯系青磁碗、鎧の三目小札などが伴出（第132図４～10）しているが、外面に蓮弁文を持つE期（1200年前後～13世紀前半）の青磁を含んでいる。また、第35号溝から13世紀に出現する中国華南産の緑釉盤（第132図11）が出土している。

遺構の切り合い関係から、第78号溝は第79号溝より新しい。また第78号溝と第35号溝の資料群は共に手捏ねかわらけを含んでおり、手捏ねかわらけは当地では13世紀後半には存続しない。しかし、両者のロクロかわらけの系統は異なっており、手捏ねかわらけの全体に占める割合が第35号溝では低下している。これらの点を考慮すると、第79号を13世紀前葉、第78号溝を13世紀中葉の早い時期、第35号溝を13世紀中葉の中頃とするのがよいであろう。今回の調査範囲内では続く13世紀後半代の資料がほとんど出ておらず、編年での空白期となるので便宜的にこれをⅢｂ期とし、それ以前をⅢａ期としたい。

第Ⅳ期（13世紀末から15世紀初頭）

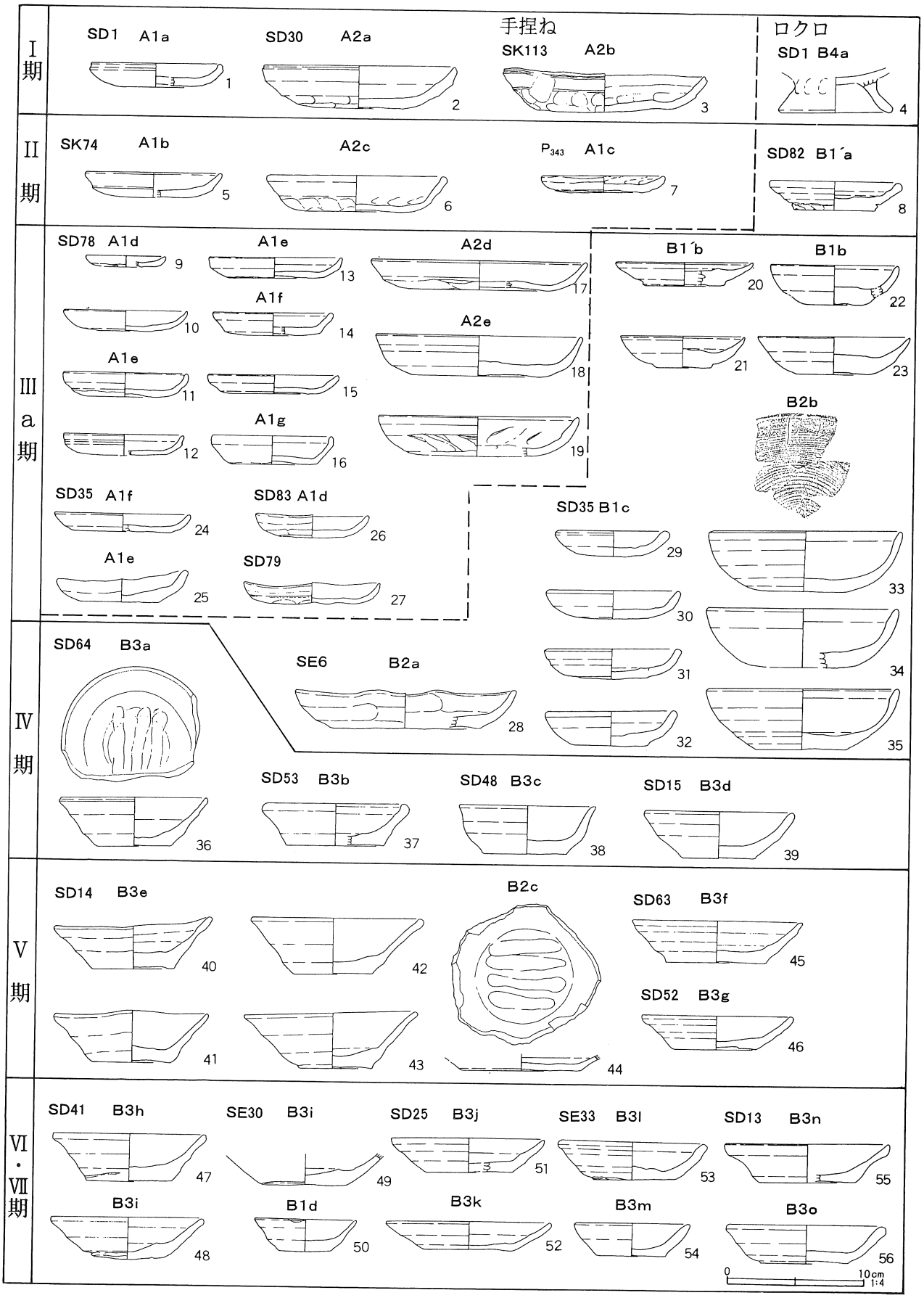
36は山茶碗模倣型ロクロかわらけの初期のもの（Ｂ３ａ）である。口縁端部の面取り技法、内底面の静止指ナデ技法、外底面の板目圧痕が認められる。胎土は水簸されており雲母粒子が目立つ。田中編年Ⅲｃ期（13世後半～14世紀初頭を三分した第３期）Ｂ３類の川越市古屋敷遺跡出土例に近似する。37も同遺跡出土で同類同時期とされる器高の低いタイプに近似している（Ｂ３ｂ）。かなり白っぽく、系統的には白かわらけ模倣型に属すと見て良いであろう。ただし小型化と厚手化が看取され、相対的に下降するであろう。38は口縁部が端反りする特徴的なかわらけ（Ｂ３ｃ）で、田中編年Ⅳa期（14世紀前葉～15世紀初頭を三分した第１期）のＢ２類会下遺跡出土品と近似している。39は小底径で椀形を呈し、田中編年Ⅳc期に出現するＤ２類（天王第６遺跡出土品）と近似する（Ｂ３ｄ）。堂地のものには白色針状物質を含み、厚手化が認められるので、在地における２次模倣品であろう。

第53号溝には溝より古い37のかわらけと共に瓦質捏鉢、瓦質土鍋、古瀬戸花瓶（第132図15～17）などが一緒に流れ込んでおり、14世紀後葉から15世紀初頭の遺物群と考えられよう。

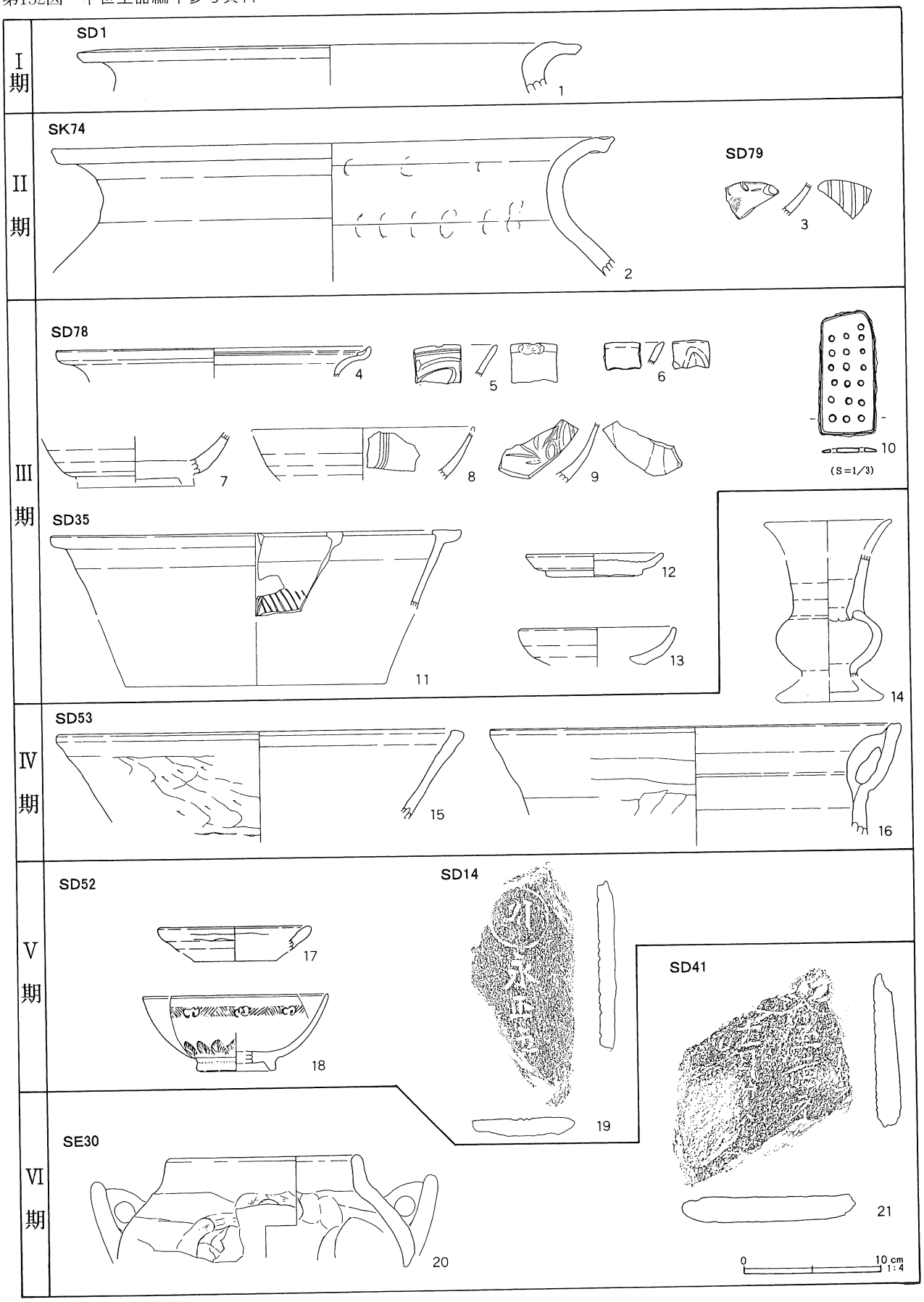
Ⅴ期（15世紀前葉から後葉）

第14号溝出土品を基準資料とする。40から43は山茶碗模倣型の中皿（Ｂ３ｅ）で、42と43には白色針状物質が認められた。内底面には「の」字状の撫で上げが認められ、外底面は糸切り離しのままのものと部分的な削りまたは全面的なナデを加えるものとがある。胎土は異なるが、Ⅳ期のＢ３ａの系統上にあるとみて良いだろう。田中編年Ａ３類Ⅵa期の川越市天王

第131図　中世土器編年図



第132図　中世土器編年参考資料



遺跡出土品より先行すると見られるので、15世紀後葉を当てておきたい。44は伴出の大皿（Ｂ２ｃ）で、外底面に左回転ロクロの糸切り離し痕、内底面には静止指ナデ調整技法が認められる。第14号溝の覆土最上層から永正五（1508）年銘の板碑が出土しているが、かわらけは溝底からの出土であり先行するものである。45は僅かに内湾する器形（Ｂ３ｆ）から山茶碗模倣でなく、田中氏の在地土着型ロクロ土師器Ｂ１類の流れを汲むものであろう。内底面の指ナデ調整を欠いているので、15世紀後葉まで下降する可能性があろう。46は口縁部がほぼ直線的に開く浅い中皿（Ｂ３ｇ）で、取瓶として使用されていた。内底面に静止指ナデ調整技法、外底面に板目圧痕を残す。田中編年Ａ３類（山茶碗模倣型）の川越市天王遺跡出土例より器高が低く、相対的に年代は下降するであろう。

第52号溝からは古瀬戸後Ⅳ期の縁釉小皿と中国製染付碗C群Ⅰ類に属する蓮子碗（第132図17・18）が伴出している。前者は15世紀中葉から後葉に比定され、後者は15世紀後半に出現する。

Ⅵ・Ⅶ期（15世紀末から16世紀末・17世紀以降）

全体的に低器高化が進み、体部は直線的に開くか、外反するものとなる。47と48は胎土に砂礫を含み、にぶい橙色を呈し、器形も外反気味で共通するが、内底面の仕上げ方が異なっている。47は木口状工具の先端の痕が残るほかは通常と異ならない（Ｂ３ｈ）が、48は内底面が陥没したように半球形に窪められている（Ｂ３ｉ）。油煙の付着が認められ、灯明皿であった可能性が高い。49も48と共通の特徴を備えているが、内底面静止指ナデ調整技法と外底面の板目圧痕を伴う。田中編年Ⅵa期とされるＡ２類の霞ヶ関遺跡出土品は内底面のナデ技法が消失しているから、本例の方が相対的に古いであろう。一緒に出土した50は坏型の小型品で、端反する特異な例（Ｂ１ｄ）である。51（Ｂ３ｊ）と52（Ｂ３ｋ）は器肉の厚さと口縁端部の仕上げ方に若干の差があるが、共に浅い直口皿で器形が共通している。川越市天王遺跡７次１号堀１号特殊土壙からは両者と酷似するものが一緒に出土しており、田中氏は胎土から県北部ないし群馬県南西部産と見て、Ｅ１類を立てている。Ⅵa期（15世紀末～16世紀初頭）に編年され、山内上杉氏の上戸の陣所と関係する遺物と考えられるという。56も胎土に角閃石と粗砂を含む。黒斑がある厚手のかわらけで、左回転ロクロを使用し、用途が灯明皿であることから、近世（第Ⅶ期）のもの（Ｂ３ｏ）と考える。溝の年代と同じ17世紀後半代を当てて良いであろう。上武国境地帯産の広域流通品の可能性がある。53から55は田中氏の編年図に類例が見当たらない。このうち53はロクロ目が強く、見込中央に渦巻き状の盛り上がりがある（Ｂ３ｌ）ので、出べそのあるＡ３類のかわらけが低平化したものかもしれない。また、55は田中氏がＥ１タイプの影響で出現したと考えるＡ４タイプと器形は似るが、胎土が水簸されており、異なる工房の製品（Ｂ３ｎ）である。54は漆のパレットに転用されていた（Ｂ３ｍ）。

なお、第30号井戸より15世紀末から16世紀初頭とされる川越市天王遺跡出土品と類似する瓦質釜（第132図20）が伴出している。

かわらけの用法

Ⅰ期からⅢａ期まで存続した手捏ねかわらけは京都の伝統的なかわらけを模倣したもので、大小の器種分化がなされ、折敷や箸とのセット関係も確認できた。これらの中には内側に食べかすらしき炭化物が付着するものがあるので、１回の利用に供し、再利用しなかったと見て良いだろう。したがって、日常の食事用でなく、祭事や儀礼的な宴席などで用いられた可能性が高い。いっぽう、第35号溝には入れ子状態で置かれたロクロかわらけがあり、水の祭祀に用いられた可能性が考えられた。これはかわらけのより根源的な使用法を示すものであろう。

しかし、Ⅴ期の資料中に鋳物用の取瓶に、Ⅵ期の資料中に漆のパレットに転用されたものがあったことはその性格の変化を示すものである。Ⅵ期には見込に窪みを持った灯明皿専用かわらけが出現し、かわらけは大きくその用途を変えながら近世へと余命を存続させたのである。

（4）板碑について

堂地遺跡からは板碑片が大量に出土したが、原位置を留めるものは無く、A4区にあった墓地が整理された際に廃棄または転用されたものと推測される。石材の多くは緑泥片岩で、秩父郡長瀞町野上下郷付近または比企郡小川町下里付近から運ばれた可能性が高い。

線刻のある破片全86点を実測したが、個体認識の可能な43個体について第133図に集成した。1から16は紀年銘のある編年基準資料であり、最古の延慶二(1309)年から最新の永正六(1509)年までの200年間にわたりほぼ隙間無く存在している。ただし、1326年と1369年の間と1414年と1454年の間に小さな二つの空白期が認められ、何らかの事情があったことも考えうる。なお、24は年号が天（文）となる可能性が高く、1532年から1555年の間となろう。

まだ隣接地に板碑が残されている可能性があるので、あくまでも試算ということになるが、約250年間に43基の板碑が立てられており、5.8年に1基、空白期を除外すれば、3.9年に1基のハイピッチな造立となる。

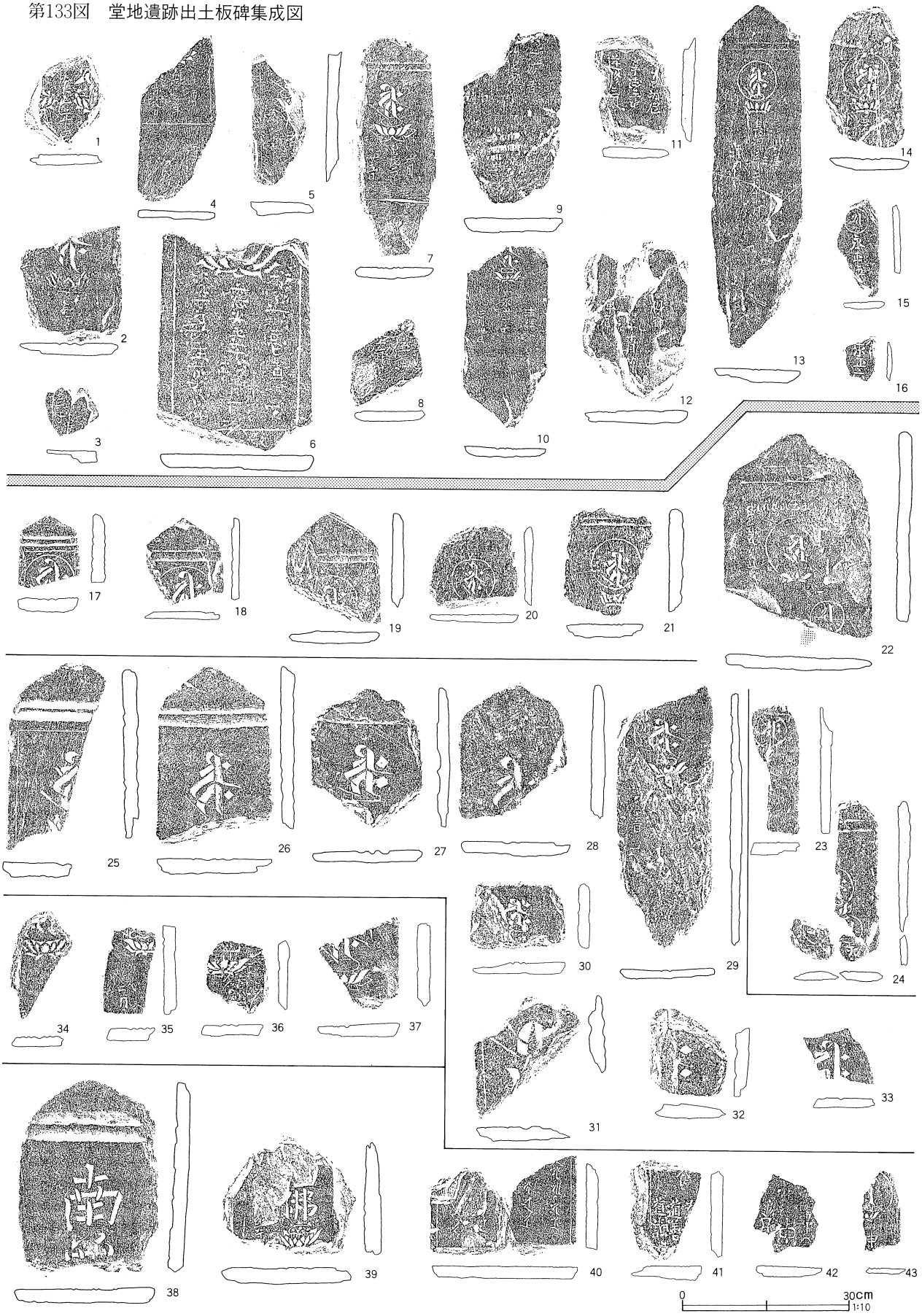
法量的には幅約9寸のもの(6・22・40）を最大とし、最小は7の幅5寸、高さ1尺7寸である。種字は最古の1が阿弥陀三尊種字であるが、その後阿弥陀一尊種字に統一され、末期の16世紀代に至ってふたたび阿弥陀三尊種字(22・24・43)が登場する。キリークは基本的に異体が踏襲されるが、例外的に17・18・33にア点を表現する謹直な荘厳体が刻まれており、山形が端正で、二条線がくっきりと刻まれ、枠線を伴うことから、南北朝時代頃の小型板碑に月輪と共にこの字体が採用され、これを外部から受け入れたことを想定しうる。反対に、紀年銘を持つ比較的大型の資料の場合、月輪は10の応永廿一(1414)年段階では伴っておらず、13の長禄三(1459)年銘板碑に至って初めて確認される。このことは、大型ないし中型品の伝統性か在地製品の保守性に起因するものであろう。蓮座の表現様式に注目すると陰刻で蓮弁間を三角形に彫って中房を表現する34が最古様式であり、河越館内の常楽寺にある弘安十(1286)年銘板碑に近似する。続くのが延慶二(1309)年銘の1で、三角形の陰刻は消滅している。正和四(1315)年銘の2は線刻で蓮弁の輪郭を彫って浮き出させる手法を用いており、やはり河越館跡井戸出土の元和元(1313)年銘板碑と酷似している。このことは堂地遺跡と河越館の板碑が同一の工人ないし工房によって製作されたことを示していよう。両遺跡から片岩屑が相当量出ていることからすれば、工人が製作のために往来していた可能性が高い。5の応安二年(1369)銘板碑では反花が線刻表現に変わり、8の至徳元年(1384)銘板碑まで共通様式が存続する。この様式も同時期の河越館出土資料に認められる。10の応永廿一(1414)年銘板碑では再び陰刻表現に戻り、蓮実の長円形化が認められるが、次第に蓮弁が直線的な表現(13・14)に変化していく。そして最終的には蓮とも似つかない表現(22)まで退化する。河越館で確認される15世紀末までの表現様式の変化はこれと全く軌を一にしている。

なお、名号板碑が2点出土しているが、紀年銘を欠いている。39については蓮座の表現に雲形の蓮実と環状の蓮子、それにおしべを表現する中房の表現が揃っている。近似する表現様式が常楽寺の応永十一(1404)年銘板碑に認められ、おおよその年代を知りうる。35もほぼ同時期と見て良いだろう。

その他の点では、南北朝時代までの板碑には偈(6)や光明真言(40)を刻むものがあり、室町期以降の板碑には被供養者の法名を刻むもの(9～13)が出現する。そして15世紀中葉には禅門と禅尼が同時に登場し、逆修塔(11)も加わる。いっぽう、41のように3名以上の法名を連記する交名板碑、43のような申待ち板碑も存在している。また42のように三具足を伴う板碑は月待ち板碑である場合が多い。

当初は武士階級の阿弥陀信仰と禅への帰依に裏付けられ、供養塔や墓標としての性格が強かった板碑が次第に地縁的な結集を図るための念仏講や庚申講、月待ち講などの宗教儀礼の記念碑的存在に転化していく過程が窺え、村落の変貌を垣間みることができる。

第133図　堂地遺跡出土板碑集成図



板碑観察表

資料番号	西暦年
種別	
釈文	
高さ×幅×厚さ（cm）	
現存部	
図　番	
備考	

※　読めないものは□で示し推定は右側の（　）内に示した。
不確実なものについては「カ」を付した。

1	1309	2	1315	3	1323
阿弥陀三尊種子		阿弥陀一尊種子			
サク（蓮座）（酉）□ 慶二年 □四 □ □（延） サ（蓮座） 己		キリーク（蓮座） 正和四年□		□享三年（元） 癸	
14.9×13×1.9		10.7×10.8×1.9		9.8×9.7×2.3	
破片		体部		破片	
94図ＳＥ35－１		77図ＳＤ44－13		65図ＳＤ41－１	

4	1326	5	1369	6	1372
		阿弥陀一尊種子			
（蓮座） 嘉元年 丙寅 五月八日		キリーク（蓮座） 広安二□（年）		願以此功徳普及一切 （蓮座） 應安五年 壬子 □□ 五月一日 我等與衆生皆共成仏道	
24.5×14.1×２		28.9×11.6×２		13.9×7.1×９	
基部		体部		体部	
65図ＳＤ41－９		95図ＳＥ48－３		93図ＳＥ９－４	
		南朝元号		南朝元号	

7	1382	8	1384	9	1390	10	1414	11	1454
阿弥陀一尊種子						阿弥陀一尊種子			
キリーク （蓮座） 永 廿徳六 五二月 日年		（蓮座） 十至 一徳 月元□ 十□□ □　□		□（明） 徳　妙 月元　音 日年		キリーク （蓮座） 正広 月永 廿法 卅一経 日年		逆享□ 修徳□ 三禅 三年尼 月	
40.2×15.3×2.2		10.9×12.8×17		26.5×16×2.5		33.2×14.8×2.2		18.9×12.5×2	
完形		破片		基部		体部		破片	
94図ＳＥ32－１		65図ＳＤ41－５		58図ＳＤ１－20		116図ＳＫ66－２		61図ＳＤ35－14	
南朝元号		南朝元号				文字部に金箔			

12	1455	13	1459	14	1489～1492	15	1508	16	1509
		阿弥陀一尊種子		阿弥陀一尊種子		阿弥陀三尊種子			
□（康） □（正） 禅　元　妙 尼亥年乙香 十 月 廿□		キリーク （月輪） （蓮座） 禅　長　妙 門　禄　善 三 卯　己 二 月 十（七カ） □日		キリーク （月輪） （蓮座） 延 徳 □		サ （月輪） 永 正 五 □		永 正 六 □	
2.84×18.8×2.3		6.25×17×2.5		25.3×12.8×1.8		17.2×7.5×1.2		6.9×5.2×0.8	
体部		完形		頭部		破片		破片	
59図ＳＤ１－27		58図ＳＤ１－18		94図ＳＥ31－１		64図ＳＤ14－９		59図ＳＤ１－36	

17	18	19	20	21
阿弥陀種子	阿弥陀種子	阿弥陀種子	阿弥陀種子	阿弥陀種子
キリーク （月輪）	キリーク （月輪）	キリーク （月輪）	キリーク （月輪）	キリーク （月輪） （蓮座）
13.5×11×2.2	15.8×13.7×13	17×16.8×2	15.4×16.1×1.6	18.4×13.7×2.7
頭部	頭部	頭部	頭部	頭部
64図ＳＤ14－８	64図ＳＤ14－７	70図ＳＤ30－15	122図グリッド57	59図ＳＤ１－25

22	23	24	25	26
阿弥陀三尊種子	阿弥陀三尊種子	阿弥陀三尊種子	阿弥陀種子	阿弥陀種子
（天蓋） キリーク （月輪） （蓮座） サ （月輪）	（蓮座） サク （月輪）	キリーク （月輪） （蓮座） サク （月輪） サ （月輪） 天 □文 カ	キリーク （蓮座）	キリーク （蓮座）
33.9×27×2.4	23.5×９×２	36.8×9.2×2.5	34.2×15×2.8	29×20.3×2.7
頭部	破片	頭部	頭部	頭部
92図ＳＥ７－６	69図ＳＤ25－16	59図ＳＤ１－26	58図ＳＤ１－23	70図ＳＤ30－14
天蓋は光明真言				

27	28	29	30	31
阿弥陀種子	阿弥陀種子	阿弥陀種子	阿弥陀種子	阿弥陀種子
キリーク（蓮座）	キリーク	キリーク（蓮座） □月十三日	キリーク（蓮座）	キリーク（蓮座）
24.9×19.7×2	25×20×2.5	48.2×16.8×2	11.6×16.9×2	14.8×15.4×2.5
頭部	頭部	頭部欠損	破片	破片
116図ＳＫ72－１	59図ＳＤ１－24	58図ＳＤ１－19	67図ＳＤ４－１	59図ＳＤ１－28

32	33	34	35	36
阿弥陀種子	阿弥陀種子			
キリーク	キリーク	サかサク（蓮座）	（蓮座） 二月	（蓮座）
14.5×13×2.5	11.3×11×1.6	19.5×9.5×1.8	15.7×８×2.1	12.5×12×2.2
破片	破片	破片	破片	破片
94図ＳＥ35－２	65図ＳＤ17－２	59図ＳＤ１－32	73図ＳＤ31－49	73図ＳＤ31－47
		阿三の脇侍種子カ		

37	38	39	40	41
阿弥陀種子	名号	名号		
キリーク （連座）	南 無 □	□ 佛 （蓮座） 二年二	（光明真言）	養 道道□ 讃善□
14.8×14.7×2.3	34.9×25.6×2.6	22×24×2.5	14.7×24.5×2.1	16.8×12.3×2.2
破片	頭部	体部	体部	破片
67図ＳＤ４－２	58図ＳＤ１－22	77図ＳＤ44－12	73図ＳＤ31－50	69図ＳＤ20－８
				交名板碑

42	43	44	45	46
月侍	申侍		阿弥陀種子	名号
（三具足）	アン （月輪） （蓮座） 申		キリーク	南 無 □
13.3×12.1×1.8	13.9×7.1×９	26.5×16×2.5	16.5×10.2×2.8	15.9×7.2×２
破片	破片	基部	頭部	破片
59図ＳＤ１－30	67図ＳＤ９－３	58図ＳＤ１－21	59図ＳＤ１－29	59図ＳＤ１－31

47	48	49	50	51
		阿弥陀三尊種子		
（光明真言カ）□年（元カ）	□年二月日	サ（蓮座）	□□三年道	
7.6×9.5×0.7	13×10.5×1.8	7.7×5.9×0.7	12.3×8.8×2.9	15.2×18.7×2.2
破片	破片	破片	破片	頭部
59図ＳＤ１－33	59図ＳＤ１－34	59図ＳＤ１－35	67図ＳＤ４－３	69図ＳＤ25－15
				弱い二条線

52	53	54	55	56
		卅日□年	（光明真言）□五日	□□
5.3×4.8×1.8	17.1×10.7×3.1	24×11.3×2.1	30.9×19×3.9	52×4.9×５
頭部	破片	基部	基部	破片
70図ＳＤ30－13	70図ＳＤ30－16	70図ＳＤ30－17	71図ＳＤ30－18	73図ＳＤ31－44
羽根刻み				

57	58	59	60	61
阿弥陀種子				
キリーク （蓮座）	□元年□（十カ）	（蓮座）	サ □六年	（種子） （月輪）
8.5×7.3×1.9	8.3×8.9×1.9	15.5×7.7×1.7		13.8×5×2.2
破片	破片	破片	破片	破片
73図SD31−45	73図SD31−46	73図SD31−51	73図SD31−53	73図SD31−48

62	63	64	65	66
阿弥陀種子				
キリーク	（種子） （月輪）	（蓮座）	□月廿日 （二又は三）□年	（種子） （月輪）
10.1×8.7×1.7	7.1×5×1.7	7×7×1	12.4×11.5×2.2	12×10.3×2.3
破片	破片	破片	破片	頭部
73図SD31−52	65図SD41−6	65図SD41−3	65図SD41−7	65図SD41−8

67	68	69	70	71
		阿弥陀種子	阿弥陀三尊種子	
年	（光明真言）	キリーク （蓮座）	サク （蓮座）	
7 ×7.6×1.6	10.5×7.3×1.1	15.8×6.8×1.9	18×6.8×1.9	14.5×9.5×2.5
破片	破片	破片	破片	頭部
76図ＳＤ43－５	76図ＳＤ43－６	92図ＳＥ７－７	93図ＳＥ９－３	92図ＳＥ11－６

72	73	74	75	76
阿弥陀種子				
キリーク		（種子）	キリーク	永
17.5×9.6×2.5	12.6×7.8×２	8.2×6.3×５	14.8×９×2.2	7.1×３×0.8
破片	頭部	破片	頭部	破片
96図ＳＥ13－６	93図ＳＥ19－２	94図ＳＥ31－２	97図ＳＥ37－５	94図ＳＥ36－１

77	78	79	80	81
			阿弥陀種子	阿弥陀種子
二□二 年 □ 月	二 七　六 年 日　月	□年(五カ□)	キリーク	キリーク （蓮座）
13.9×11.7×1.8	34.4×20.5×2.4	15.5×11×2.5	14.5×7.7×1.5	10.7×10.8×1.9
破片	基部	破片	破片	破片
114図ＳＫ６－２	114図ＳＫ６－１	122図グリッド61	122図グリッド62	122図グリッド63

82	83	84	85	86
□(日カ)	（蓮座）	（月輪）		キリーク （蓮座）
18.5×9.3×2.2	6.5×6.5×１	17.8×20.8×1.6	14.5×７×2.1	17×14×1.8
破片	破片	頭部	破片	体部
122図グリッド56	122図グリッド64	122図グリッド58	122図グリッド59	122図グリッド60
			二条線	

3　中世堂地遺跡とその景観

（1）居館出現の背景

川島町は耕地整理の時期が早く、明治40年から大正12年の間に実施された。このため現行の地図をみても近世以前の田畑の状況を伺うことができない。しかし、明治14年測量の陸軍陸地測量部迅速測図（第134図）をみると、田の畦が1辺100m強の正方形に図示されている部分が存在し連続性があるので、真北を基準とする条里制が施行されていた可能性が高い。そのように判断するのは集落が旧河川の形成した三日月形または弧状の自然堤防上に分立しているのに、畦がそれらに沿うことなく、正方眼で統一され、自然堤防上にも連続する部分を認めうるからである。幸いなことに、堂地遺跡の所在する自然堤防上は耕地整理を実施していないので、現行の精度の高い1万分の1地図（第135図）で検証することができる。

字堂地地区と西側に隣接する久保、富之貴（ふしき）両地区は道路の屈曲が目立ち、南北を基準とする方格地割りは全く認められない。念のために明治初期の字分け図や地籍図も一通り目を通したが同様であった。また、旧国道254号線の南側河川付きの地域についても古い地図を検討したが、同様の結果であった。そのいっぽうで、堂地の東側では大字上伊草の字中井から字堀ノ内に至る南北500m、東西1.000mの範囲に条里制の痕跡を認めることができた。具体的には主要地方道鴻巣・川島線とそこから南下する水路に沿う直線道路を基準として109m方格のグリッドを設定すると、軸方向が東西南北に完全に合致し、さらに2本の平行する東西道路もグリッドラインと一致を見たのである。この地域の北側に隣接する字名は五反田であり、条里制地名と考えてよいであろう。また、大字中山字中廓地区も同様の検討をしたところ、109m方格のグリッドと合致する道路をいくつか見いだすことができ、やはり条里制の痕跡と考えられた。北側隣接地の字名は一町田であり条里制地名であろう。これらの事実は一連の条里制施行地区の中間部が河川の氾濫によって川欠けになった可能性を示すものと推測された。そこで、越辺川の流路に目を転じると、郡境をなすかつての河川址は川欠け推定地の南側で大きく北側に屈曲し再び南側に屈曲していることが注目される。この屈曲部にはかつて中川河岸が置かれており、流れの緩やかなときには船を係留するのに便利であったことを知りうるが、洪水時には水流が直線的に字久保方向に向かう可能性が高い。付近の地名には窪んだ湿地を示す寿輪（すわ）、洪水の結果できた沼の名を採る釜沼、同様に窪地を表す久保、氾濫土砂の堆積したことを示す三島、石原、砂原、水が溜まりやすく排水を要する追出しと洪水にちなむ字名が集中している。このことからも堂地遺跡周辺が過去の洪水常習地であったことを読みとることができる。

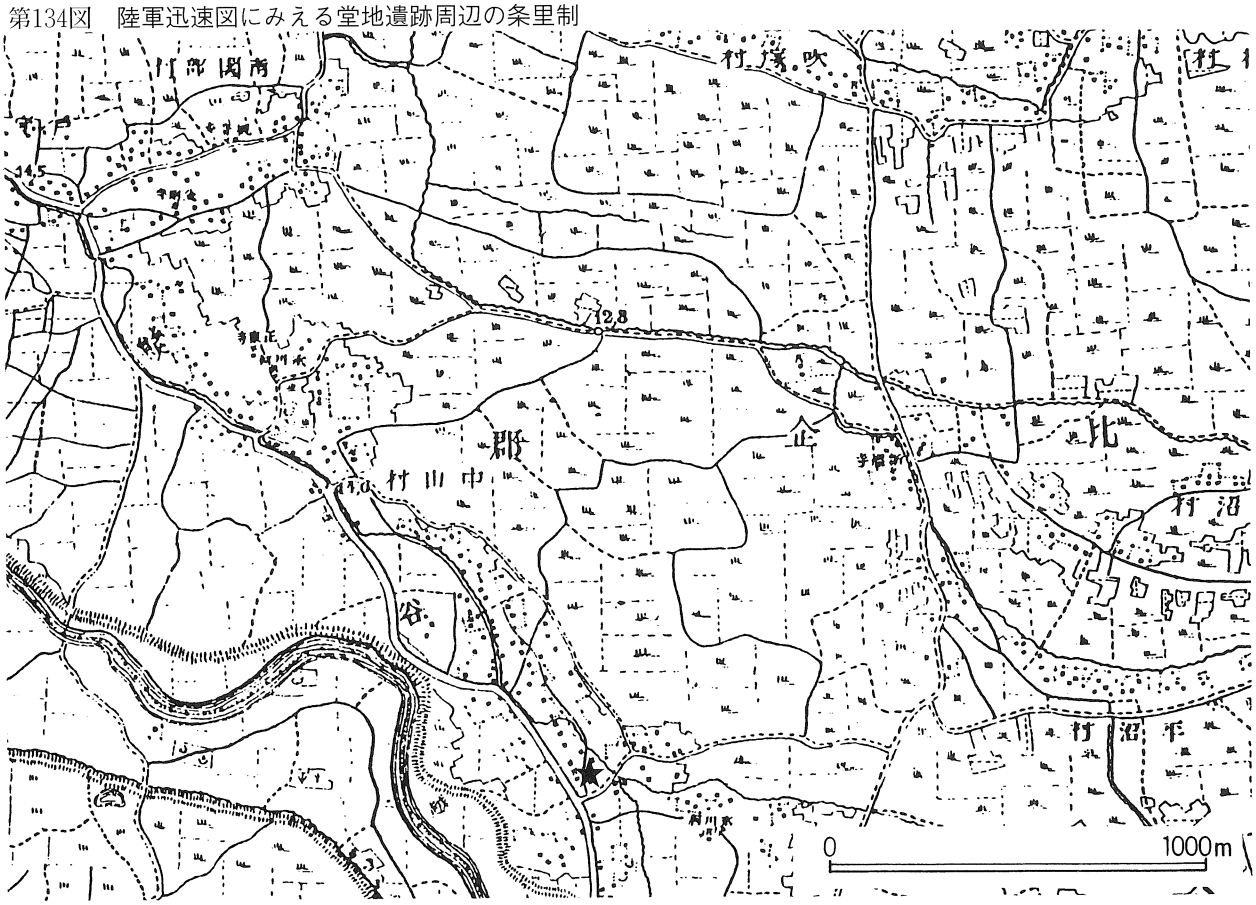
また、堂地遺跡の律令時代に属する竪穴住居の埋没状態は具体的に洪水を示すものであり、9世紀後葉を最後に集落が消滅した原因はおそらく大洪水の結果であろう。その後約300年間放置されていた荒廃地の開発に当たった者こそ堂地居館の主にほかならないであろう。その開発対象地は越辺川左岸沿いの幅700m、長さ2.000m余りの範囲で面積は約120町歩と推定できる。上伊草の東側大字伊草地区にもその半分程度の川欠け推定地があるが、『吾妻鏡』にみえる伊具（いぐさ）氏という別の開発領主に所属した可能性が高いであろう。

堂地居館主の荒廃地開発は、12世紀後半代にまず排水路（第1号溝）を設けることから着手され、ひき続いて築堤がなされたと推測される。

貞永元（1232）年に樗沼堤を修理させたことが『吾妻鏡』にみえ、これは越辺川の対岸にある横沼堤のこととされているが、築堤は両岸同時進行が絶対条件であり、当然川島側にも築堤がなされたと考えてよい。

建暦元（1211）年に鴨長明が入間河の洪水に遭遇した話が『発心集』にあり、加藤功氏によって河越氏館の洪水罹災を物語る史実との評価がなされている。そこには官首が入間河のほとりに大きなるつつみを築い

第134図　陸軍迅速図にみえる堂地遺跡周辺の条里制



第135図　都市計画図にみえる堂地遺跡付近の条里制と川欠け部分

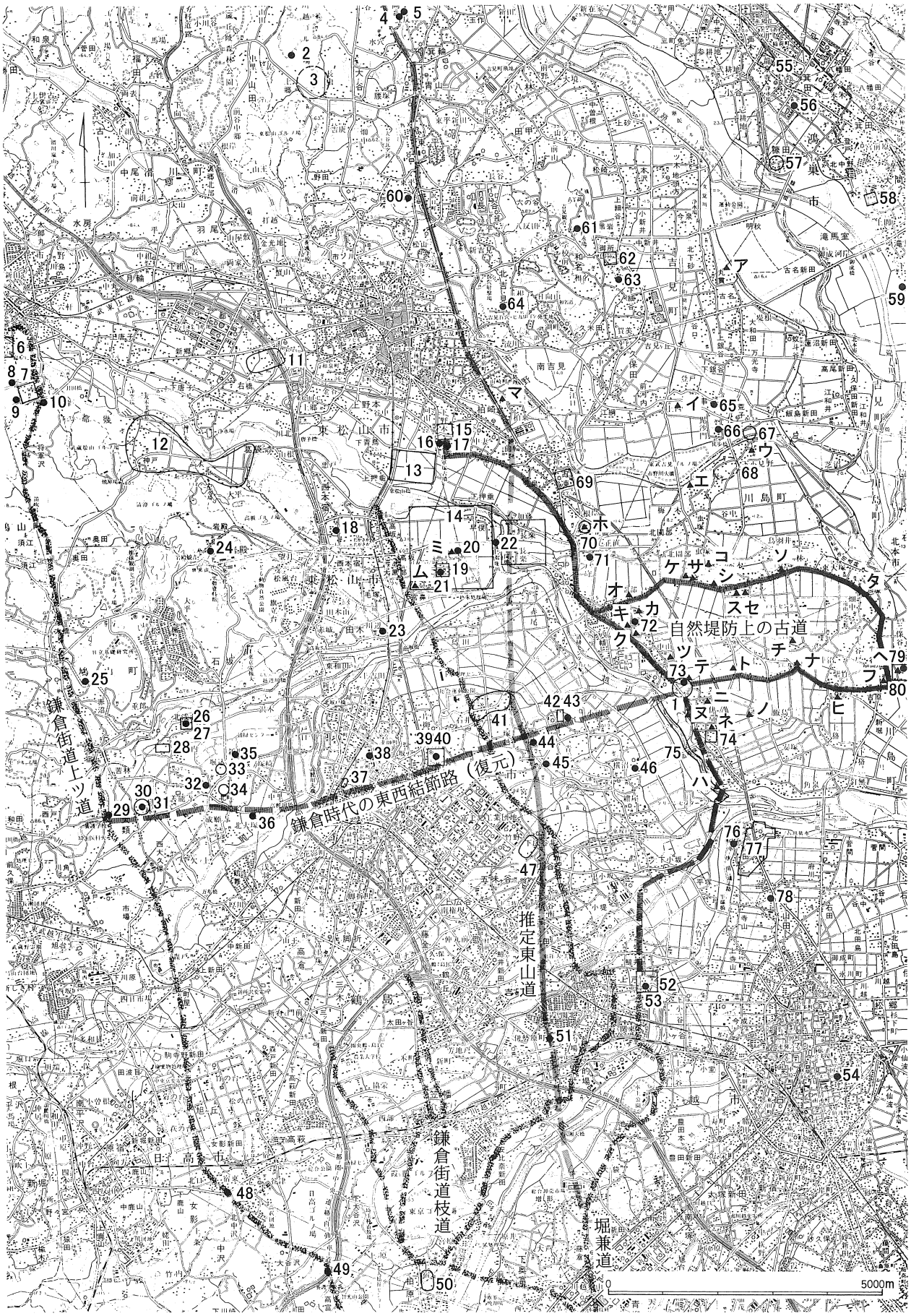
て水を防ぎそのうちに田畑をつくり、在家が多く群がっていたことと五月雨の時期になって水がひどく出ても未だこの堤の切れたことがなかったために慢心していたところ深夜に決壊して甚大な被害を受けたことが語られている。越辺川の堤防は入間川の堤防との連絡無しには考えられず、一体をなしていたはずである。建暦元年時点にはこれらの堤ができて一定の時間が経過していたことを根拠にすれば、その竣工時期は12世紀末から13世紀初頭のことであったろう。

文治元(1185)年11月に鎌倉殿源頼朝は諸国に守護・地頭を置き、諸国の治水および開発事業は下地管理権を専掌する地頭（在地御家人）の職務権限として実施したこと。『吾妻鏡』建久五(1194)年十一月二日条には武蔵国大田荘修固の記事があり、堤の修理を翌年３月までに竣功すべきことを命じていること。『吾妻鏡』正治元（1199）年四月二十七日条には東国の地頭に荒野の「新開水便」を命じたこと。などを前提とすると、入間川、越辺川の築堤も鎌倉幕府草創期の荒野開発事業の一環として強力に推進され、大田荘の場合と同様に、河川沿いの在地御家人が共同してこれに従事したものと考えられる。堂地居館の主は比企氏、野本氏、小代氏、伊具氏、河越氏などと協業したことが考えられ、市野川、和田吉野川筋の堤も同時に着工されたとすれば、さらに大串氏、小見野氏、美尾谷氏も加わっていた可能性を考えて良いだろう。

治水条件が整った後の本格的な開発では低地の窪地を埋め立てて開田のなされた可能性が高い。字三島と字石原はうめ田とも呼称された地で、堤防際は沼田と呼んでいたという。堂地居館は開発の成功を背景に13世紀前葉には半町規模の方形居館として整備される。

1堂地遺跡　2寿昌寺跡　3比企能員館　4元亨三年銘宝篋印塔　5光福寺　6菅谷館　7大蔵館　8行司免遺跡　9宮の裏遺跡　10帝刀先生義賢墓　11青鳥城　12神戸条里　13野本条里　14高坂条里　15野本氏館　16無量寿寺　17利仁神社経塚　18常案寺跡　19小代氏館　20世明寿寺　21御霊神社　22光明寺　23興仏寺跡　24正法寺　25竹之城遺跡　26北浅羽館　27萬福寺　28長岡氏館　29堂山下遺跡　30大類氏館　31大薬寺　32薬師堂跡　33掘込氏館　34大河原氏館　35金井遺跡　36広伝寺跡　37粟生田氏館　38薬師堂　39勝呂館　40大智寺　41勝呂廃寺　42別所屋敷　43東光寺　44宝珠寺　45宮町遺跡　46釈迦堂　47宮廻館跡　48若宮遺跡（女影廃寺）　49下向山遺跡　50義貞砦　51女堀Ⅱ遺跡　52河越氏館　53常楽寺　54中院　55箕田館　56宮前本田遺跡　57安達館　58源経基館　59馬室小学校校庭内遺跡　60覚性寺　61旧安楽寺　62源範頼館　63御所遺跡第５地点　64竜性院　65大串次郎重親墓　66金剛寺宝篋印塔　67大串次郎館　68（小見野氏館）法鈴寺　69比企郡衙推定地　70金剛寺　71超福寺　72金剛寺（比企氏館）　73蓮華院　74堀ノ内館　75榑沼堤推定地　76星行院　77福田条里　78浄国寺　79美尾谷十郎広徳館跡　80廣徳寺　ア文永弥陀彫大板碑　イ観音寺板碑　ウ大安寺　エ安楽寺　オ正福寺　カ西念坊　キおしゃびき様　ク東光寺　ケ華蔵院地蔵堂墓地　コ円泉寺　サ西見寺　シ小島家地内　ス極楽寺　セ十王堂　ソ関根家地内　タ吉祥寺　チ品川家地内　ツ淵泉寺　テ蓮華院　ト地蔵祠　ナ月待庵　ニ不動院墓地　ヌ金乗院　ネ西福寺　ノ太子堂共同墓地　ハ東福院　ヒ根本共同墓地　フ養竹院　ヘ広（廣）徳寺　ホ万松寺　マ青蓮寺　ミ香林寺　ム根岸共同墓地

第136図　堂地遺跡周辺の交通網



（2）中世の交通路と堂地居館

前項では堂地遺跡の居館が越辺川沿いの自然堤防上でもかつての洪水常習地であって、川欠けのため荒廃地となった場所に立地していたことを明らかにした。しかし、河川沿いの低地は特殊な例ではなく、川島町内の小見野氏館や美尾谷氏館、それに比企氏館（金剛寺）も近似した立地を示すし、近隣では野本氏館や大串氏館、河越氏館も同様であろう。こうした立地は館の主が律令時代以来の公領以外の未墾地または荒廃地を主な対象とした開発領主であった故であろう。

ところで、これらの居館は中世の交通上どのような位置を占めていたのであろうか。古代武蔵国では官道である東山道は国府から北上していたため、埼玉県内では県西部の主に台地上を縦貫していた。しかし、9世紀後半以降、道路の管理は貫徹せず、部分的に利用されていたにすぎないようである。続く中世の官道として重要なものに鎌倉街道があり、上ツ道は鎌倉から県西部の丘陵地帯を北上していた。そのルートは東山道の西側数キロメートルの位置をほぼ併走していたとはいえ、丘陵地帯の起伏に富んだものであって、東山道とは全く性格を異にしていた。やはり軍事道路としての性格が色濃く、行政拠点である郡衙を結ぶことはなく、街道沿いに竹之城遺跡(25)、大蔵館(7)、菅谷館(6)などの居館を構える鎌倉武士があったほか、堂山下遺跡のような宿駅と市をかねた交通集落も存在していた。この上ツ道には枝道も多く、所沢市内から分岐していた堀兼道は河越氏館と、その西側にほぼ併走する道は小代氏館(19)と結んでいたらしい。

それでは、川島町域に存在した諸館はどのような交通網を持って幹線とつながっていたのであろうか。この問いについては他の多くの地域よりも明瞭な回答が期待できよう。その理由は、低地においては自然堤防上に道路を設けるより方法がなく、条里に沿う畦道では用をなさなかったからである。

まず、堂地居館(1)は越辺川に沿う自然堤防上を通る旧国道254号線に接しているが、この道路は川越松山往還として中世末には既に整備されていて、岩付太田氏の保護を得て伊草宿が六斎市で栄えていたことが知られている。しかし、この道路の起源はさらに溯る。少なくとも鎌倉時代初期には越辺川の堤防が完成していたので、安全な道として広く利用されていたはずである。北側は比企郡衙を経由して野本氏館(15)方面へ、南側は河越氏館(52)を経て掘兼道へと繋がっていた可能性が高かろう。河越氏館へ向かう場合、越辺川を渡渉する必要があるが、これは外界へでる場合の最低条件と見なしうるであろう。いっぽう、川島郷内の交通網は現在も生きている古道によって結ばれていたことは疑いない。堂地居館から自然堤防づたいに東に延びる道は美尾谷氏館(79)へ至り、いったん北上してから西へ回り込み、前述の川越松山往還へ戻る環状の道をなしている。その起源の古さは沿道に多数の鎌倉期の板碑（オ～フ）と鎌倉仏を本尊とする寺院（サ）が分布することによって証明されよう。

また、堂地居館から西方へは鎌倉街道上ツ道へ結ぶ東西結節路の存在が推定できる。越辺川の対岸の坂戸市から入間郡毛呂山町一帯は中世遺跡の稠密な地域である。しかし、まんべんなく分布する訳ではなく、交通路に沿っての分布が想定できたので、県立歴史資料館編の『埼玉の中世城館跡』と『埼玉の中世寺院跡』に掲載されている中世城館跡と中世寺院の内、とくに平安時代末から鎌倉時代とされるものを無作為に抽出し、所在地をプロットした結果、期待を超えるほど見事な直線分布が判明したのである。まず、越辺川を越えると、鎌倉時代とされる館は別所屋敷(42)、勝呂館(39)、粟生田氏館(37)、大河原氏館(34)、大類氏館(30)とほぼ2 km間隔で一直線に並び、堂山下遺跡(29)付近で鎌倉街道上ツ道と繋がる。そして、さらには平安時代から鎌倉時代の創建とみられている東光寺(43)、宝珠寺(44)、大智寺(40)、広伝寺跡(36)大薬寺(31)がこの直線に沿うように分布する。これらのことからすれば、堂地居館はまさに東西と南北の主要交通路の辻に立地していたこととなる。

4　堂地遺跡出土動物遺体の観察所見

埼玉県立自然史博物館
坂本　治

堂地遺跡第23号井戸跡出土資料は、頬骨弓・鼻骨・左上顎骨および歯牙を欠くイヌ科イヌ属の頭蓋骨である。サイズは、頭蓋最大長162mm、基底全長156mmで、頬骨弓－頭頂間突起が明瞭で、矢状稜が発達している。すべての歯は欠落するが、歯槽部が保存され、犬歯と第4前臼歯が発達する。また、眼窩側頭骨稜の発達が鈍いなどのイヌ属（Canis）の形質を有し、ホンドギツネ（*Vulpes vulpes japonica Gary*）など他のイヌ科動物と異なることは明瞭である。

イヌ属としては、ニホンオオカミ（*Canis hodophilax Temminck*）日本古代犬（*Canis familiaris Linnaeus*）などが考えられ、亜種間との比較が必要である。

なお、今泉（1970）は、ニホンオオカミの識別形質をあげている。これにより若干の検討を行うと以下の点が上げられる。頭骨顔面のプロフィールは、*C. holdophilax* としての特徴である中凹部の程度が弱く、前頭甲の膨らみが少ないなど、中世以降の *C. familiaris* と異なる形質を有する。頭蓋骨サイズは、既知の *C. holdophilax* より小型で、口蓋正中部の湾入は認められない。今後、中世以降のイヌ属の各亜種との比較を要する。

第137図　イヌ頭骨計測模式図

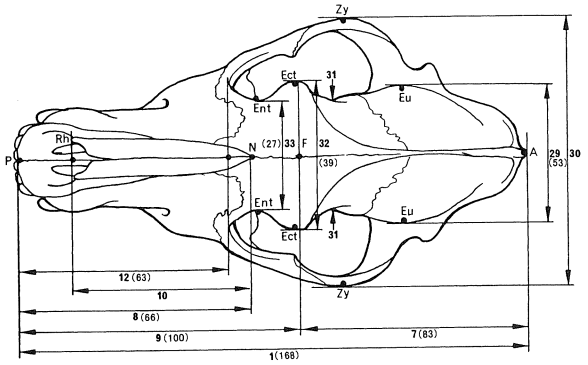


Figure 14a: Canis cranium, dorsal view.

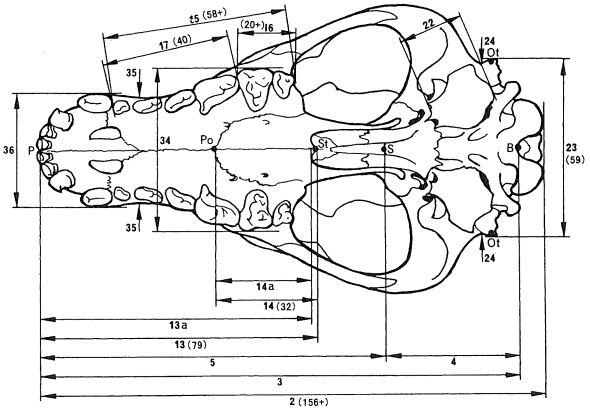


Figure 14c: Canis cranium, basal view.

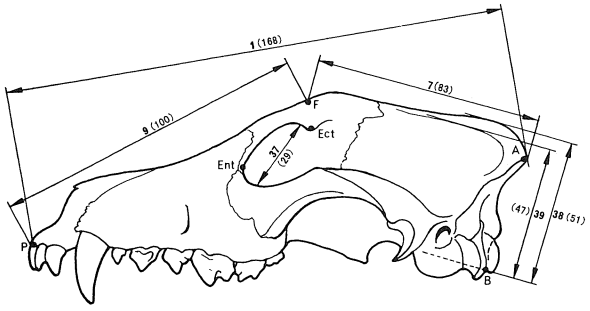


Figure 14b: Canis cranium, left side view.

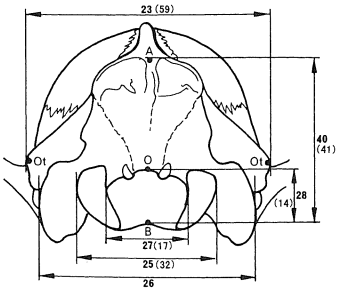


Figure 14d: Canis cranium, nuchal view.

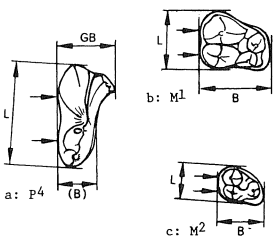


Figure 15a-c:
Canis maxillary teeth,
Length (L) and breadth (B)
M 18,18a,20,21

(Measurement)＝mm

A Guide to The Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites

Peabody Museum Bulletin 1　Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University　1976より

5　結語

堂地遺跡からは縄文時代後期より近世に至る各種の遺構が検出されたが、とりわけ律令時代の集落、中世前期の居館跡、継続的に営まれた中世墓地などが多くの考古学的情報を提供した。

律令時代の集落は11軒の竪穴住居跡が調査され、8世紀中葉から9世紀後半の存続が認められた。掘立柱建物は伴っていなかったが、地元鳩山窯跡群産の須恵器類のほかに緑釉陶器、灰釉陶器、硯などが出土しており、一般集落よりは上位に位置づけられる拠点集落かと思われた。しかし、条里制の施行を背景としたこの集落も洪水の結果9世紀末頃に廃村となる。

12世紀中頃、川欠けとなっていたこの地の復興に着手したのは開発領主で、鎌倉幕府主導の越辺川堤の工事に主導的役割を果たした人々であったろう。堤竣工の後、荒廃地の開発は軌道に乗り、領主は半町の規模を有し堀に囲まれた居館を築くに至った。大鎧の小札、雁又鏃、短刀などの武器類と中国製の青磁碗、緑釉盤、渥美焼、常滑焼などの高級陶磁器の保有から見て鎌倉幕府御家人級の武士であったと考えられる。堂地付近に置かれていた土袋荘の下地管理権を保有し、地頭に補任されていた可能性も十分考えうる。はたしてそれはどのような氏族であったのか。

地元には堂地遺跡付近に館の伝承は全く無く、忘れ去られた館跡となっていたわけであるが、そこが大字中山（旧中山村）に接していることを忘れてはなるまい。また、館主の開発領地と推定した地域の大部分は旧中山村に属している。『埼玉県史通史編２』では初期武蔵武士一覧として97氏を取上げて本貫地と現在地の比定を行っているが、中山氏は本姓を桓武平氏としながらも本貫地・現在地とも未詳としている。中世前期の開発領主たちは領地の占有を他に明示するために郡・郷・村などの地名を氏名としたのであり、名負いの地を有している。したがって、中山氏は武蔵国内の中山村の住人であったと見て良い。

『飯能市史』では丹党加治氏支族の中山氏が飯能市中山に住して中山を名乗ったとする。しかし、これには２つの疑念がある。１つは『寛政呈譜』に「十三代の孫家勝にいたり、同郷中山村にうつり住せしより、家号とす」とあり、加治氏が中山を名乗ったのは室町時代後期以降となること。もう１つは『吾妻鏡』に登場する中山氏はいずれも「重」を通り名としており、加治氏の通り名と異なることである。

『吾妻鏡』にみえる中山氏を挙げれば①中山次郎重実は治承四（1180）年、衣笠山城の攻撃軍に畠山重忠、河越重頼、江戸重長と名を連ねている。同族で編成された武士団とみられ、秩父一族と見て良いだろう。②中山五郎為重は比企能員の娘婿であり、建仁三（1203）年、比企の乱で討死する。溯って文治五（1189）年には頼朝に従って奥州征伐に加わり、建久元（1190）年の頼朝入洛時、中山四郎（重政）、江戸五郎（重通）と同じ三十五番組随兵となる。③中山四郎重政は文治五（1189）年、頼朝に従って奥州征伐に加わり、建保元（1213）年学問所番となるが、同年和田合戦で和田側に就く。④中山太郎行重は建保元（1213）年、重政と共に和田合戦に加わり、逃亡する。⑤中山次郎重継は承久三（1221）年承久の乱で幕府軍に属し、宇治川で先陣を争う。

ここに示した５人は同族と見て誤りないであろうが、その系譜関係がはっきりしない。秩父氏系図には重継（江戸四郎）、行重（重綱養子）、重政（小沢小次郎）の名が見えるが同一人として良いかは検証を要する。また、児玉党系図には行高（秩父平四郎）の４代の孫で大淵氏を名乗る重実（弥太郎）と為重（平五郎）の名が見える。

中山氏は比企の乱、和田合戦等で大打撃を蒙り早くに没落または断絶したため、系図が伝存せず、その復元が難問ではあるが、『吾妻鏡』に書かれたごとく鎌倉幕府初期に高家と呼ばれた秩父氏の一統として活躍し、かなりの地位を占めた武蔵武士であったことだけは疑いの無いところであろう。考古学の立場からは第１に12世紀中葉から13世紀前半という居館の存続期間と中山氏の盛衰が一致すること。第２にかわらけや板碑

の検討で明らかになったように河越館との関係が密接であることを指摘しうる。これらのことから、堂地居館を鎌倉幕府御家人中山氏の館跡に擬し、今後の文献史学方面からの検証を俟つことにしたい。

なお、『埼玉県史通史編２』に説かれるように、秩父氏の分出諸氏の多くは鎌倉街道の沿道か多摩川、入間川、荒川などの中流域か河口付近に分布しており、陸上及び水上交通の要地に所領を展開していたことが知られ、こうした交通路は国衙の支配下にあるので、その在庁職を保有する秩父氏一族に有利な面があったであろうとの指摘は極めて示唆に富むものである。堂地居館も入間川支流の越辺川に臨み、河越館と比企郡衙方面を結ぶ古道に沿った占地であり、さらに鎌倉街道と結ぶ東西結節路の存在も想定されたところである。このことは各種物資や農産物の流通に利便があったばかりではなく、開発に要する人員の集住にも適し、市が立って都市的な賑わいをもたらしたことであろう。居館内での鋳造事業もこうした生産活動の一環として評価できるものであろう。

つぎに、中世を通じた遺構として調査区北西部で検出された墓地跡がある。板碑と関連して把握すれば、そこに12世紀末ないし13世紀初頭に造墓の開始された中世の一大葬地が形成されていたことみて誤りないであろう。今回の調査では花瓶、香炉などの宗教遺物の一部が検出されただけではあったが、隣接地内に墓守堂的な性格を有する阿弥陀堂の如き宗教施設の存在が推定できよう。室町時代には念仏、月待ち、申待ちなどの結衆板碑が立てられているところから見れば、村人の地縁的結合を深めるための集会所としての堂の必要性が高まったはずである。戦国時代には墓地が整理され、板碑が廃棄されたが、慶長の頃まで蓮花坊として存続していた可能性がある。堂地の字名はこれに因むものであろう。

『新編武蔵風土記稿』には、江戸後期の名主であった小三次の先祖大膳が一寺とし、梅吟山長久寺と号したとみえる。この寺は享保八（1728）年以降、比企西国三十三ヶ所札所の十二番蓮華院として賑わった。その跡は堂地遺跡北東100ｍほどの位置に蓮華院墓地として残っている。前述の堂とこの寺が同一場所または同一境内にあったと見るのは困難であり、寺は場所をかえて建立されたのであろう。そこは中山・上伊草両村に跨る久保の地であり、寛政七（1795）年には両村が共同で高さ２ｍを超える大きな宝篋印塔を造立している。また、そこには近世の僧侶墓のほか、永禄十（1567）年の墓碑、永仁二（1294）年銘の板碑、幅２尺ほどの大型板碑が現存している。これらのうち中世のものは堂地中世墳墓群から移されたものであろう。

中世後期から近世に継続することが確認された屋敷跡は一寺を起こすほどの財力のあった大膳一族の営んだものであった可能性はきわめて高いと思われる。

引用・参考文献

浅野晴樹　1987　「関東地方における中世在地系土器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ　日本中世土器研究会

浅野晴樹　1991　「東国における中世在地系土器について－主に関東を中心にして－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集

浅野晴樹　1997　「中世在地土器の実態」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第８集

浅野晴樹・服部実喜　1995　「各地の土器様相－関東－」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

飯村　均　1997　「中世の製鉄・鋳造」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第８集

池上裕子　1988　「戦国期都市・流通論の再検討」『中世東国史の研究』中世東国史研究会編　東京大学出版会

伊野近富　1995　「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

伊野近富　1998　「中世前期の京都系土師器皿の伝播と受容」『中近世土器の基礎研究』ＸⅢ　京都系土師器皿の伝播と受容－平安後期を中心に－　日本中世土器研究会

宇野隆夫　1997　「中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号　中世食文化の基礎的研究

小川　貴ほか　2000　『下柳沢遺跡』早稲田大学文化財整理室編

岡本一雄　1985　『重要有形民俗文化財北武蔵の農具』埼玉県立さきたま資料館編

小野正敏　1982　「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』２号

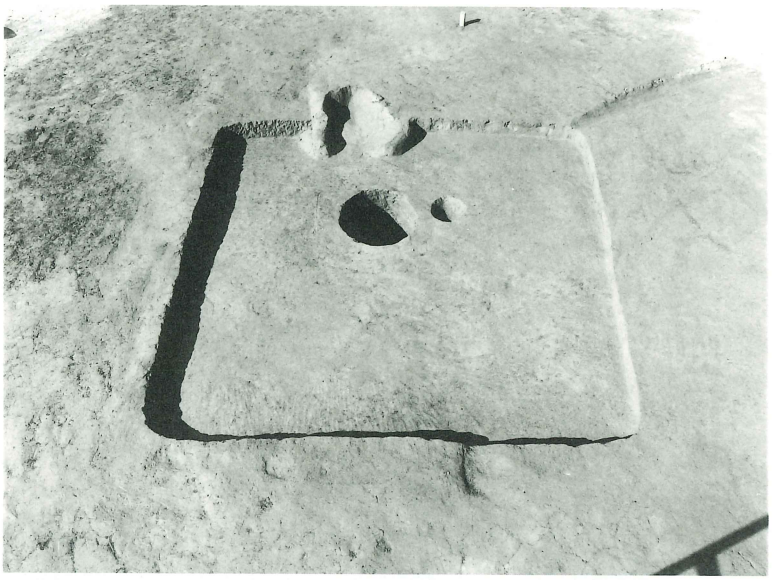
尾野善裕　1997　「中世食器の地域性－東海・濃飛」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号　中世食文化の基礎的研究

海津一朗　1988　「鎌倉時代における東国農民の西遷開拓入植」『中世東国史の研究』中世東国史研究会編　東京大学出版会

海津一朗　1990　「東国・九州の郷と村」『日本村落史講座』第２巻景観１原始・古代・中世　雄山閣出版株式会社
加藤　功　1987　「中世の治水と開発」『荒川』人文Ⅰ　荒川総合調査報告書２　埼玉県
鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所　1995　『鎌倉の発掘』８永福寺他編(2)
川越市教育委員会編　1992　『川越市　歴史の道調査報告書』文化財調査報告書第８集
川島町編　1998　『川島町の地名』川島町史調査資料　第５集
川島町編　1999　『川島町の板碑』川島町史調査資料　第６集
九州近世陶磁学会編　2000　『九州陶磁の編年』九州陶磁学会10周年記念
後藤守一　1937　『日本歴史考古学』四海書房
埼玉県編　1985　『新編埼玉県史』資料編７　中世３　記録Ⅰ
埼玉県編　1988　『新編埼玉県史』通史編２　中世
埼玉県立歴史資料館編　1988　『埼玉の中世城館跡』埼玉県教育委員会
埼玉県立歴史資料館編　1992　『埼玉の中世寺院跡』埼玉県教育委員会
坂詰秀一編　1991　『板碑の総合研究』総論　柏書房
笹生　衛　1997　「考古学から見た中世寺社」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第８集
佐藤和彦　1988　「下野足利荘の成立と展開－内乱と足利一族－」『中世東国史の研究』中世東国史研究会編　東京大学出版会
鈴木哲雄　1988　「中世東国の開発と検注」『中世東国史の研究』中世東国史研究会編　東京大学出版会
宗台秀明　1998　「中世都市鎌倉の初期かわらけ」『中近世土器の基礎研究』ＸⅢ　京都系土師器皿の伝播と受容－平安後期を中心に－　日本中世土器研究会
高橋　貴　1988　「「立野」・「立山」論」『中世東国史の研究』中世東国史研究会編　東京大学出版会
田代　脩　1987　「荒川流域の中世荘郷」『荒川』人文Ⅰ　荒川総合調査報告書２　埼玉県
田中　信　1989　「河越館跡の板石塔婆」『川越市埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』川越市教育委員会
田中　信　1996　「川越市内出土の中世土師器皿について」『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書』ＸⅠ　川越市教育委員会
続伸一郎　1995　「中世後期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
永井久美男編　1994　『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会
中野晴久　1994　赤羽・中野「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所
中野晴久　1995　「常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
野場喜子　1997　「大饗の食器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号　中世食文化の基礎的研究
橋口定志　1992　「中世方形館の形成」『季刊考古学』第39号　特集中世を考古学する　雄山閣出版株式会社
服部敬史　1997　「中世食器の地域性－関東・甲信－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号　中世食文化の基礎的研究
服部実喜　1999　「戦国都市小田原と北条領国の土師質土器」『中近世土器の基礎研究』ＸⅣ　日本中世土器研究会
原田信夫　1988　「利根川中流域における荘園の村落景観－太田荘・下河辺荘を中心に」『中世東国史の研究』中世東国史研究会編　東京大学出版会
原田信男　1997　「古代・中世における共食と身分」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号　中世食文化の基礎的研究
飯能市史編集委員会　1988　『飯能市史』通史編
福島正義　1985　「武蔵武士の活躍」『東松山市の歴史』上巻
福島正義　1990　『武蔵武士』さきたま出版会
藤澤良祐　1996　「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集　瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐　1993　『瀬戸市史』陶磁史篇四
保立道久　1988　「古代末期の東国と留住貴族」『中世東国史の研究』中世東国史研究会編　東京大学出版会
本沢慎輔　1994～2000　「考古資料に見る平泉－やきもの編　かわらけ－」『広報ひらいずみ』第447号～515号　平泉町
前川　要　1996　「中世の家族と住居」『考古学による日本歴史』15家族と住まい　雄山閣出版株式会社
松本建速　1998　「12世紀代東北地方におけるかわらけ存在の意味」『中近世土器の基礎研究』ＸⅢ　京都系土師器皿の伝播と受容－平安後期を中心に－　日本中世土器研究会
馬渕和夫　1997　「中世食器の地域性－鎌倉－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号　中世食文化の基礎的研究
馬渕和夫　1997　「食器からみた中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号　中世食文化の基礎的研究
宮瀧交二　1991　『堂山下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第99集
三輪茂雄　1978　『臼』ものと人間の文化史25　法政大学出版会
西秋良弘編　2000　『加賀殿再訪－東京大学本郷キャンパスの遺跡－』東京大学総合研究博物館
柳田敏司・杉山正司　1987　「荒川流域の中世城館」『荒川』人文Ⅰ　荒川総合調査報告書２　埼玉県
山下峰司　1995　「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
山本信夫　1995　「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
山本信夫　1998　「中世前期の貿易陶磁器－その分析視点と近年の研究動向」『第26回山陰考古学研究集会資料』
吉川國男　1987　「条里遺跡と荒川」『荒川』人文Ⅰ　荒川総合調査報告書２　埼玉県
四柳嘉章　1995　「漆器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
脇田晴子　1997　「文献からみた中世の土器と食事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号　中世食文化の基礎的研究

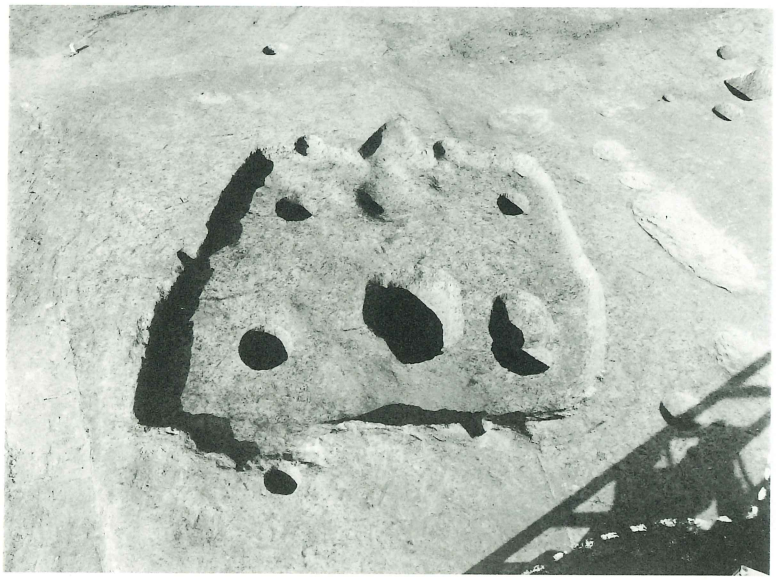
写 真 図 版

米軍撮影航空写真（昭和23年）



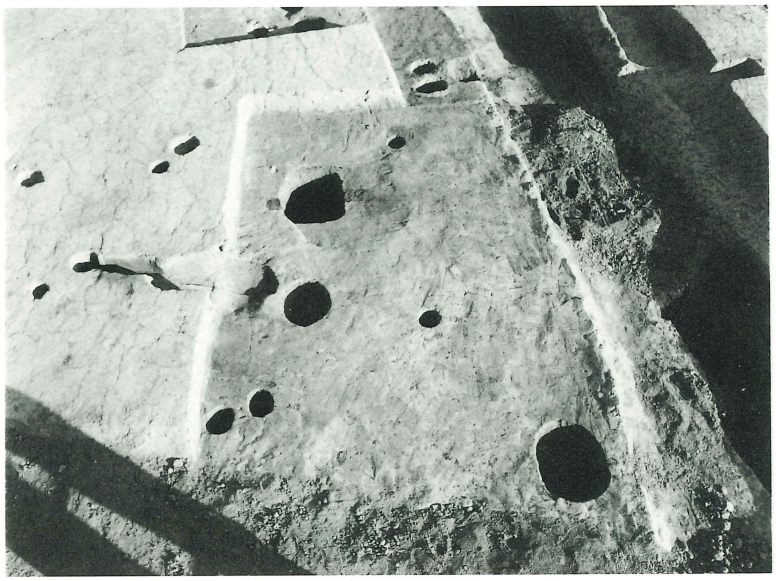
第１号住居跡

第１号住居跡カマド



第２号住居跡

第３号住居跡

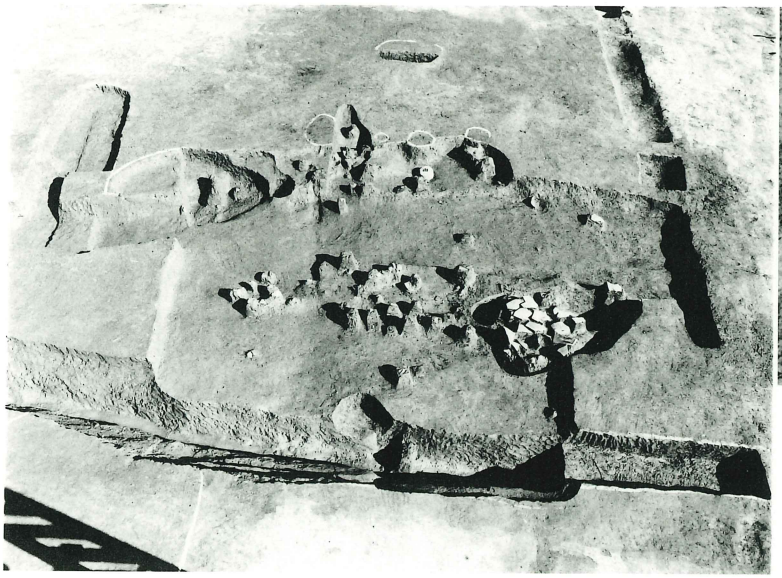


第３号住居跡床下土壙、カマド煙道

第３号住居跡カマド

第 4 号住居跡

第 4 号住居跡床下土壙

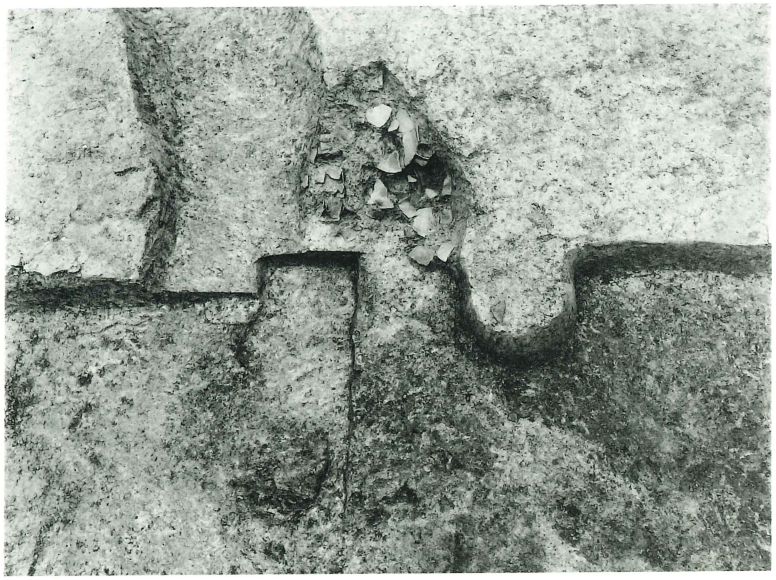


第 4 号住居跡長頸瓶出土状況

第 4 号住居跡遺物出土状況

第５号住居跡

第６号住居跡

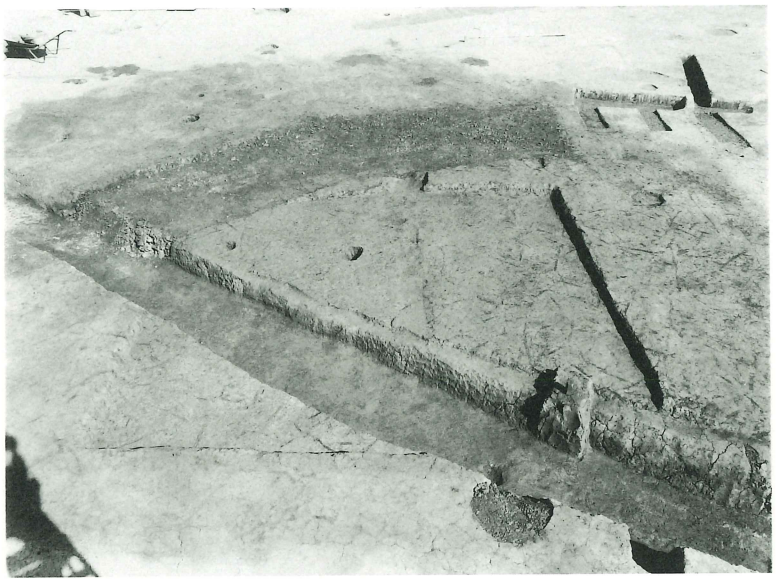


第６号住居跡カマド

第７号住居跡

第８号住居跡

第８号住居跡カマド



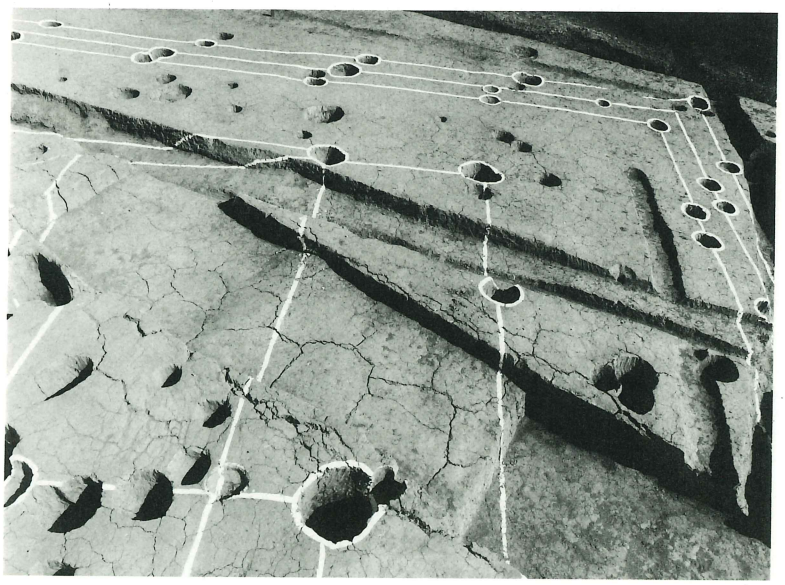
第９号住居跡

第10号住居跡

第11号住居跡

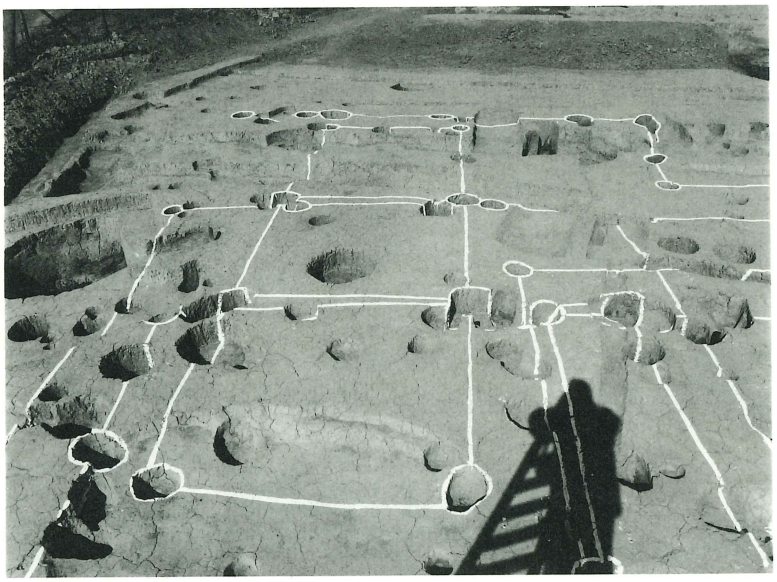
A 区全景

A 区掘立柱建物群

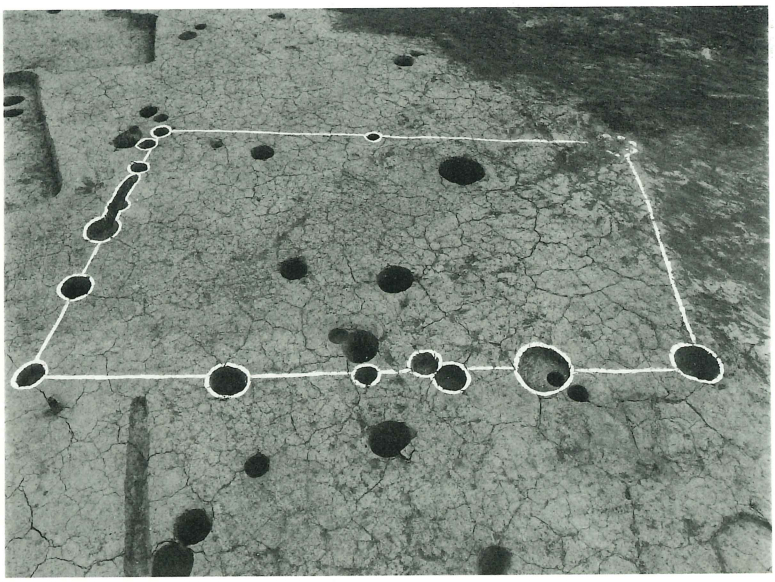


第 1 号柵列

第１号掘立柱建物跡



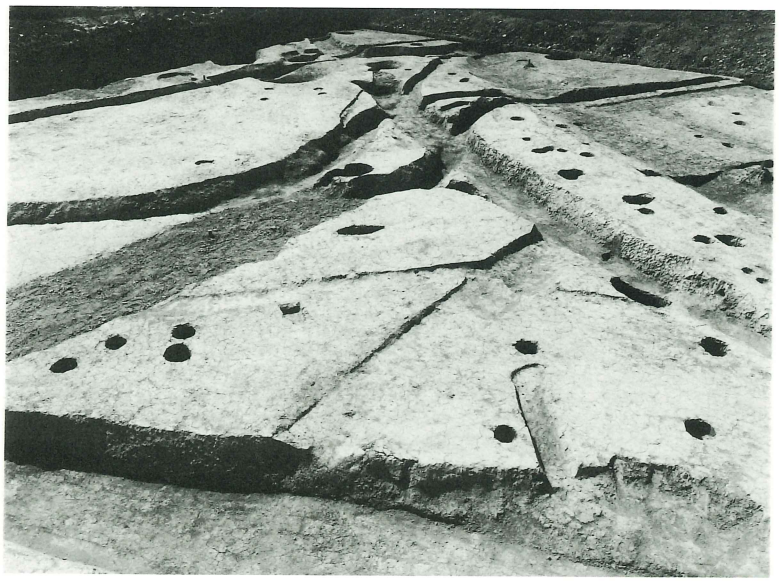
第４号掘立柱建物跡



第５号掘立柱建物跡

B 区全景(1)

B 区全景(2)



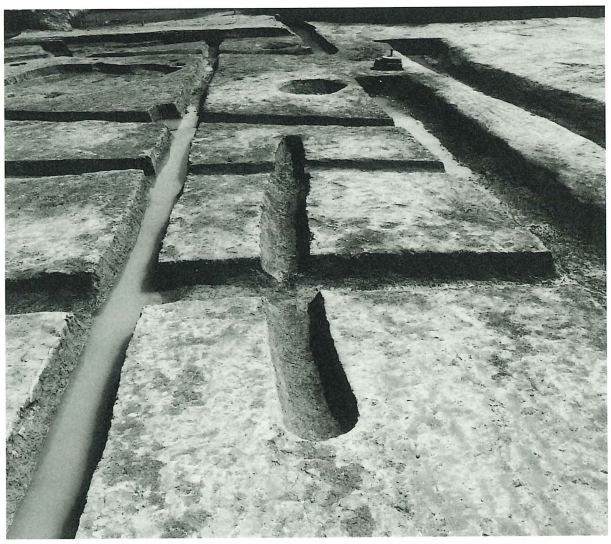
B 区全景(3)

第35・1・44号溝

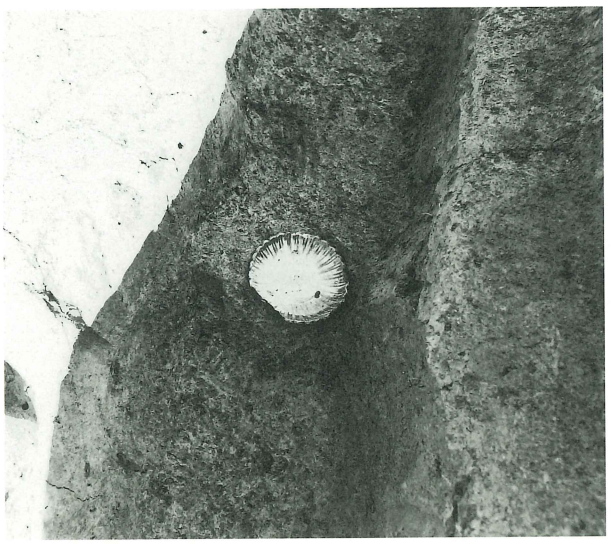
第4号溝

第10号溝

第12号溝



第4・9・13a・13b・17・19号溝



第25号溝遺物出土状況

第30・31号溝

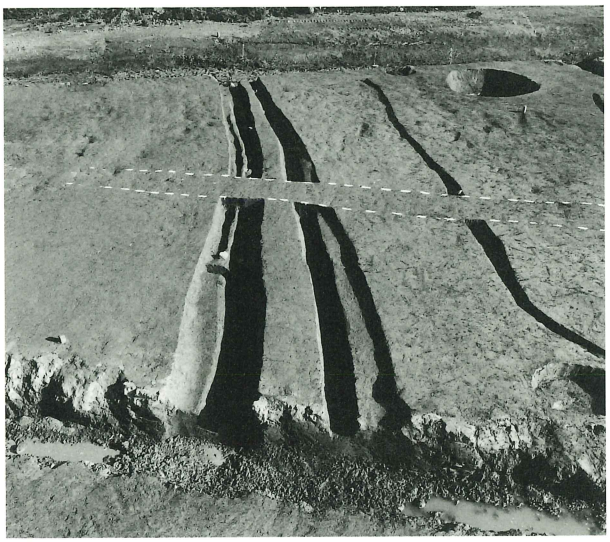
第30号溝板碑出土状況

第31号溝

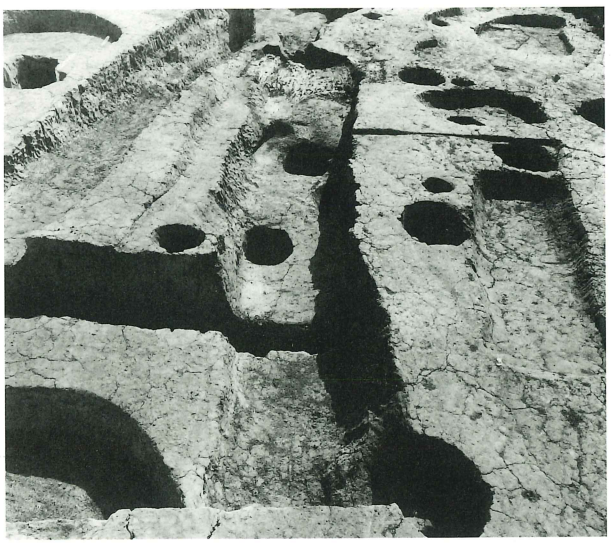
第31号溝石臼出土状況

第35号溝かわらけ出土状況

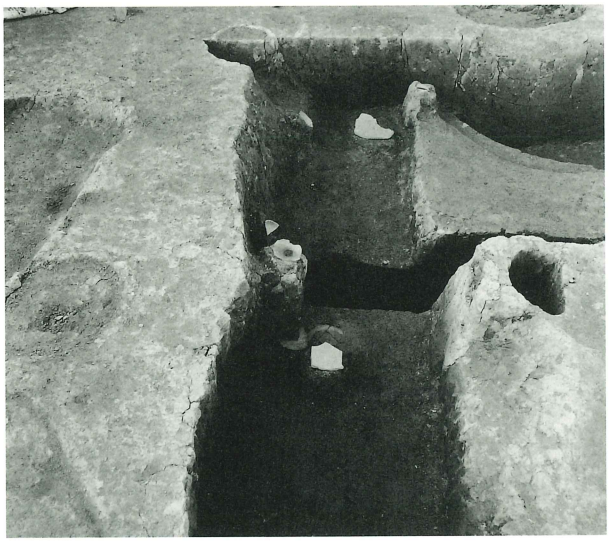
第35号溝笊出土状況



第40・41・42号溝



第46・54号溝



第54号溝遺物出土状況

第20・71・75号溝

第81号溝

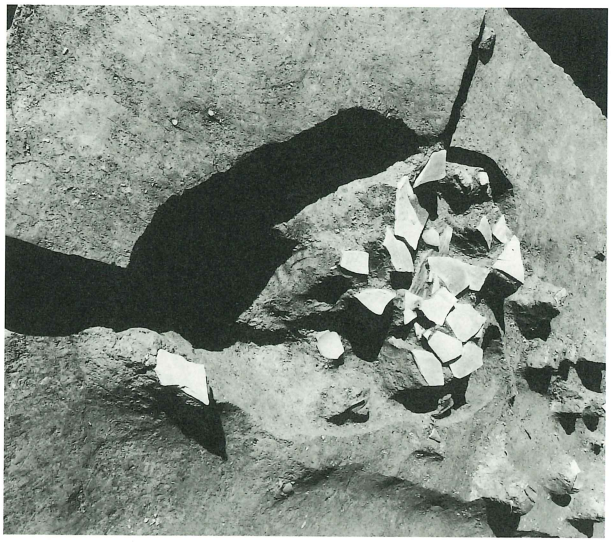
第79・82・83号溝

第１・２号土壙

第５号土壙

第６号土壙遺物出土状況

第34号土壙



第37号土壙

第46号土壙

第48号土壙

第71号土壙

第74号土壙

第74号土壙遺物出土状況

第74号土壙遺物出土状況

第74号土壙遺物出土状況